

平城宮発掘調査報告 XI

本文



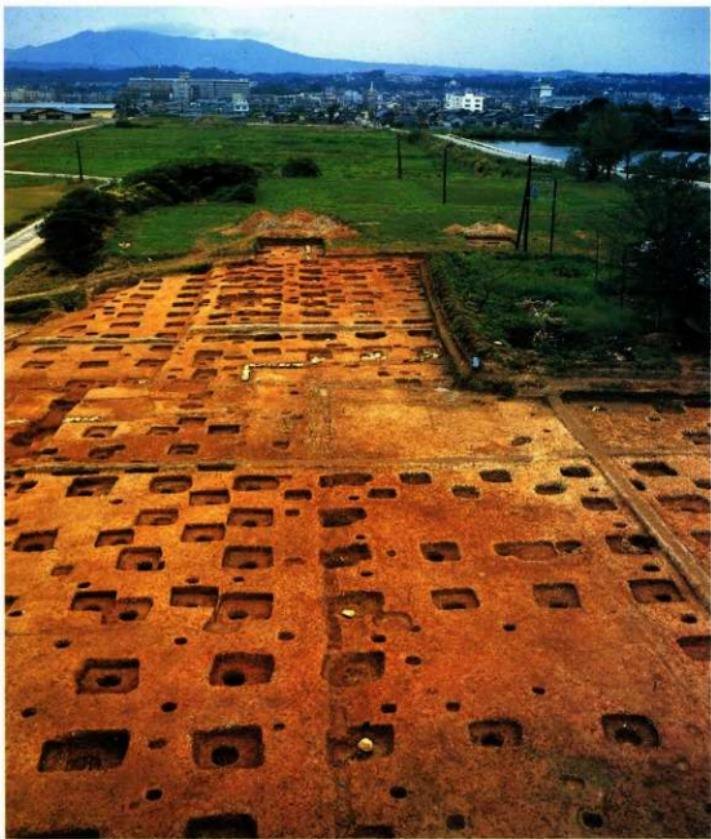
奈良国立文化財研究所

正 誤 表

〔本文〕

頁	行	誤	正
目次第IV章	2 瓦埠	E 殿舎地域の瓦	E 殿舎地区の瓦
博図目次	112	243	242
"	113	248	247
"	114	250	249
"	115	251	250
"	116	254・255	256・257
"	117	254・255	256・257
"	118	257	256
"	119	260	259
表目次	2	第1次大極殿地域東半部 推定工量	第1次大極殿地域東半部 推定土工量
"	43	245	244
"	44	249	248
"	45	254	253
"	46	256	255
"	47	256	255
"	48	260	259
"	49	262	261
3 P	12行	47 hr	47 ha
	15行	133 hr	133 ha
4 P	24行	本中真人	本中真
13 P	28行	斜道 SF 9237 A	斜道 SF 9232 A
33 P	Tab.2	第1次大極殿地域 東半部推定工量	第1次大極殿地域東半部 推定土工量
37 P	fig.15	SD 7813	SD 7805
		SD 7813 B	SD 7833 B
41 P	17行	SD 7813	SD 7813 A
44 P	12行	幅 500 m	幅 50 cm
44 P	fig.20	3 SC 5600 ハ四	3 SC 5500 ハ四
52 P	22行	S X 9218	S S 9218
54 P	29行	宮殿地区	殿舎地区
60 P	30行	える描衍行	描える桁行

66 P	10 行	四・五通	三・四通
66 P	20 行	改築につくられた	改築につくられた
74 P	14 行	SS 8828	SS 8228
74 P	29 行	西雨落溝 SD 9226	西南落溝 SD 8226
76 P	17 行	南門 SB 7800	南門 SB 7801
76 P	27 行	南門 SB 7800	南門 SB 7801
77 P	1 行	灰色質上	青灰色砂質土
85 P	15 行	(fig. 2-46)	(fig. 46-2)
94 P	24 行	(fig. 49)	(fig. 52)
98 P	25 行		末尾へ 6091
99 P	18 行	中衛府充	中衛府宛
99 P	19 行	木簡の充先	木簡の宛先
99 P	25 行		末尾へ 6091
101 P	5 行		木簡11(表)
101 P	6 行		(裏)
105 P	1 行	(PL. 99)	(PL. 98)
113 P	6 行	充先	宛先
114 P	10 行	『宮衛合集解』によれば、 の古記に	『宮衛合集解』の古記によれば の古記に
135 P	25 行	東(卯)の58番目	東(卯)の57番目
150 P	2 行	塙基性シュリーレ状	塙基性シュリーレン状
152 P	3 行	飛鳥地方に産したもの	飛鳥地方に産するもの
179 P		Tab. 28 SK8316出土上器の 構成	Tab. 27 SK8316出土上器の 構成
227 P	注4	「平城京大極殿の調査」	「平城宮大極殿の調査」
228 P	12 行	身捨梁間の寸法	身舎梁間の寸法
231 P	注1	『平城宮木簡概報16』	『平城宮発掘調査出土木簡概報15』
233 P	24 行	それとともに西宮	それとともに西宮
234+235 P	fig.109+110		赤刷は平城宮殿舎
235	5 行	棲鳳閣になつがる	棲鳳閣になつがる
249	fig.114	6663 - (KH06 B)	6663 - B (KH06)
262	12 行	(I-3期)	(第I-3期)
263	11 行	建築雛型	建築雛形



第1次大極殿 殿舎地区東から

奈良国立文化財研究所30周年記念学報(学報第40冊)

平城宮発掘調査報告 XI

第1次大極殿地域の調査

本文

奈良国立文化財研究所

1981

序

昭和27年4月、美術工芸・建造物・歴史の三研究室と庶務室とからなる定員15名で発足した奈良国立文化財研究所は、今年で三十周年を迎えた。その間に、建造物・歴史の二研究室、平城宮跡発掘調査部・飛鳥藤原宮跡発掘調査部と庶務部からなる三部二研究室、さらに埋蔵文化財センター、飛鳥資料館を付設する96名の定員を数える組織へと発展した。これはひとえに文化庁はじめ関係各位の御指導と温い御支援の賜物と深く感謝する次第である。

今回の学報は、朱雀門（学報第34冊）の北500mからはじまり、推定大膳職地域（学報第15・17冊）に至る南北約320m、面積約380アールの地域に関する発掘報告である。発掘は昭和40年の第27次調査にはじまり、昭和54年の第117次調査まで前後12回にわたった。この地は古墳時代に小規模な古墳も営まれ、佐紀盾列古墳群の南西端に位置している。歴史時代に入ると下ツ道が中央を南北に縦貫しており、平城京そのものも下ツ道を中心として設定されていることが明らかとなった。平城宮造営にあたっては、北部に壇積の大規模な施設がつくられ、中央に木階、左右に斜路を設けた例のない設計を行ない、その奥に大極殿を配する壮大な計画を示している。これに対応して南約220メートルに門を設け、後にこの地を莊厳する巨大な東西楼を増築する。このような宮殿配置は、我が国の古代宮殿に例をみないところである。その後、孝謙朝に壇積の壇を埋めて南北に軒をつらねた殿舎が営まれる。それは平安朝の内裏をしのばれるような殿舎で、個々の建物の独立性が強い東方の内裏地域（学

報第16冊)と大きく異っている。九世紀に入って平城上皇の時期にも再び中心的な宮殿の地に選ばれているが、規模は縮少し、明治以来この地域に残っていた土壘が実は最後の姿を示していることがわかった。

この地域の発掘は、平城宮の中心部の変遷を具体的に明示したのであるが、古い時期の遺構は痕跡的にしか残っておらず、結論も所内で議論を重ねての結果とはいえ、将来異なる解釈を生ずる余地を残している。事実を主とした資料を一日も早く提供することに主眼を置いたものと御理解いただければと考えている。

昭和39年に平城宮跡発掘調査部が発足して以来、この地域の調査が平城宮跡発掘調査の一つの柱となっていた。その調査報告書を、奈良国立文化財研究所設立三十周年事業の一環として出版できたことは大変喜ばしい。また、発掘にたずさわった多くの人々のうち、他に転出された方も数多い。それらの人々に対してもその労を感謝したい。

最後に、内容その他にわたって忌憚ない御批判と、御鞭撻を賜りますことを御願い申し上げる。

昭和57年1月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足

目 次

第Ⅰ章 序 言	1
1 最近における発掘の進展	1
2 保存と整備	3
3 報告書の作成	4
第Ⅱ章 調査概要	5
1 調査地域	5
2 調査経過	7
A 第27次調査	7
B 第41次調査	8
C 第69次調査	8
D 第72次調査	9
E 第75次調査	10
F 第77次調査	11
G 第81次調査	12
H 第87次調査	12
I 第117次調査	13
J 内裏検討会	14
3 調査日誌	15
A 第27次発掘調査	15
B 第41次発掘調査	17
C 第69次発掘調査	18
D 第72次北発掘調査	20
E 第72次南発掘調査	21
F 第75次発掘調査	21
G 第77次発掘調査	22
H 第81次東発掘調査	24
I 第81次西発掘調査	24
J 第81次中発掘調査	25
K 第87次北発掘調査	25
L 第87次南発掘調査	26
M 第117次発掘調査	27
第Ⅲ章 遺跡	29
1 遺跡の形成	29
A 発掘前の地形	30
B 古代の地形	31

2 遺 構 33

A 門・築地回廊地区.....	34	D 東外郭地区.....	84
B 賾舎地区.....	56	E 大膳職地域.....	92
C 広場地区.....	76		

第IV章 遺 物 97

1 木 簡 98

A SD3715出土の木簡.....	98	E SD3765出土の木簡.....	106
B SD5564出土の木簡.....	105	F SK3730出土の木簡.....	107
C SK5535出土の木簡.....	105	G SB7802出土の木簡.....	107
D SD5490出土の木簡.....	106	H まとめ	112

2 瓦 塙 115

A SD3765の瓦.....	117	E 賾舎地域の瓦	124
B SB7801とSB7802の瓦	117	F SD3715の瓦.....	125
C SC5500の瓦.....	120	G その他の瓦塙類	126
D SC3810とSB7750の瓦	123		

3 部 材 130

A 柱根と礎盤	130	C 建築雛形部材	144
B SE9210の井戸枠	140	D 石材ほか	149

4 土 器 153

A SB7802出土の土器	156	G SD8211など第Ⅱ期溝 出土の土器	167
B SA3777出土の土器	160	H SK8212出土の土器	168
C SA109出土の土器	162	I SE9210出土の土器	169
D SX6600出土の土器	165	J SB8224出土の土器	170
E SB7150出土の土器	166	K SD6631・SD6633・SD7175 出土の土器	171
F SB6633など第Ⅱ期建物 出土の土器	166		

L SD3765出土の土器	172	P SK8316・SK8317・	
M SD5505出土の土器	172	SK8233出土の土器	178
N SD3715出土の土器	172	Q SK3730出土の土器	180
O SK3784出土の土器	176	R 特殊土器類	181
		S SX7800出土の埴輪ほか	186
5 木 製 品			188
A SB7802出土の木製品	188	C その他の木製品	201
B SD3715出土の木製品	195	D 木製品の樹種	205
6 金 属 製 品・石 製 品			207
7 錢 貨			209
第V章 考 察			213
1 第1次大極殿地域の変遷			213
A 平城宮造営以前および 造営時の遺構	213	C 第Ⅱ期の遺構	220
B 第Ⅰ期の遺構	214	D 第Ⅲ期の遺構	223
2 第1次大極殿地域の性格			225
A 諸説の検討	225	D 平城上皇の宮殿	231
B 第Ⅰ期遺構の年代	226	E 西宮の再検討	233
C 第Ⅱ期遺構の宮殿比定	230	F 唐長安大明宮の 含元殿と麟德殿	234
3 建築遺構の復原			236
A 第Ⅰ期建物の復原	236	C 第Ⅲ期建物の復原	240
B 第Ⅱ期建物の復原	238		
4 屋 瓦			242
A 軒瓦縁年の改訂	242	B 軒瓦の組合せ関係	243

C 軒瓦の同范関係	247
5 土 器	251
A 平城宮土器IV・Vの再検討	251
B 食膳形態土器の構成	258
6 結 語	262
別 表	265
英 文 要 旨	281

卷首図版

第1次大極殿地区 東から

別 表

1 主要建物一覧表	266	4 平城宮土師器器種表	276
2 軒丸瓦分類表	268	5 平城宮須恵器器種表	278
3 軒半瓦分類表	272		

挿 図

1 調査地域	6
2 第27次調査地の主要遺構	15
3 第41次調査地の主要遺構	17
4 第69・72次調査地の主要遺構	19
5 第75次調査地の主要遺構	22
6 第77次調査地の主要遺構	23
7 第81次東調査地の主要遺構	24
8 第81次中・西調査地の主要遺構	24
9 第87次調査地の主要遺構	25
10 第117次調査地の主要遺構	27
11 現状地形とボーリング調査	29
12 第1次大極殿地域の地形変遷(1)	30
13 第1次大極殿地域の地形変遷(2)	31
14 SB7801基壇の断面	35
15 SB7801北面階段付近の礎敷	37
16 SC5600礎石据付痕跡と盲暗渠	38
17 SC5600基壇の断面	39
18 SB7802とSC5600の重複	42

19	SB7802の柱掘形	43
20	SC5500とSC5600の礎石据付痕跡	44
21	SC5500の基壇断面	45
22	SA3777の柱根	46
23	SD5560とSD5561の結合	47
24	SD5588に結ぶSD5562とSD5563	48
25	SD3790とSD3770	49
26	SD3775とSB3746	49
27	SB7750AとSC3810A・SA3810B基壇断面	51
28	SC8360礎石据付痕跡とSB8230の柱掘形	52
29	SC6670礎石据付痕跡	53
30	SD3815実測図	54
31	SA3800の地覆石	55
32	SD8227実測図	55
33	SX8332実測図	55
34	SX6600とSX9230の重複	57
35	SX6600とSX6601の埋立状況	59
36	SD7165の断面	60
37	SB6611とSB6620・SB6630の柱掘形の重複	62
38	SB7151A・B柱掘形の重複	63
39	SB6655柱掘形の重複	66
40	SB6622とSB6660柱掘形の重複	71
41	SB8218A・B柱掘形の重複	74
42	SD5590付近の土層堆積	77
43	SE7145の断面	78
44	SE9210実測図	80
45	SX7800濠の断面	83
46	東外郭横断面図	86
47	小規模建物の柱掘形	88
48	SX3720実測図	89
49	SD5530に設けた小橋SX5543	91

50	大膳職地域の遺構変遷改訂案	93
51	『平城宮報告IV』遺構変遷図	93
52	SA109土層断面	95
53	SD8077実測図	96
54	SD3715出土未使用木簡	104
55	SB7802出土未使用木簡	112
56	第1次大極殿地域出土軒瓦の比率	115
57	第1次大極殿地域の軌瓦分布	116
58	南門地区出土軒瓦の比率	118
59	東棲地区出土軒瓦の比率	119
60	東面築地回廊地区出土軒瓦の比率	122
61	第Ⅱ期南面築地回廊地区出土軒瓦の比率	123
62	殿舎地区出土軒瓦の比率	124
63	SD3715出土軒瓦の比率	125
64	第1次大極殿地域出土の鬼瓦	126
65	文字瓦	128
66	薬師寺出土隅木蓋瓦	128
67	埴状飾板	129
68	SA3777柱根の木口切断面	132
69	木彫材から想定される掘立柱脚	137
70	平城宮出土の柱根直径	139
71	SE9210井戸枠実測図	140・141
72	SE9210井戸枠の組上げ法	141
73	枝木の復原	142
74	礎盤実測図	143
75	東大寺法華堂経庫	143
76	建築雄形三手先復原図	147
77	SD109南溝出土礎石	150
78	石材顕微鏡写真	150・151
79	土師器杯皿の口縁部形態	154
80	須恵器の口縁部形態	154

81	SA3777出土の土器	160
82	SD109南側溝出土の土器	163
83	SD109北側溝出土の土器	164
84	SX6600出土の土器	165
85	SE9210出土の土器	169
86	SD5505・SD3765・SK8316・SK8317・SK8233出土の上器	173
87	SK3784出土の土器	177
88	SK3730出土の土器	180
89	施釉陶器実測図	182
90	陶硬実測図	185
91	古墳時代須恵器	187
92	SB7802出土の曲物底板	191
93	SB7802出土の棒状木製品	194
94	SD3715出土の曲物・折敷	198
95	SD3715出土の木製品	198
96	造営前の遺構	213
97	第I-1期の主要遺構	214
98	第I-2期の主要遺構	215
99	第I-3期の主要遺構	216
100	第I-4期の主要遺構	217
101	平城宮内における第1次大極殿の地割り	219
102	第I期建物の配置計画	219
103	第II期の主要遺構	221
104	第II期建物の配置計画	222
105	第III期の主要遺構	223
106	第III期建物の配置計画	223
107	平安宮古図にみえる内裏東北隅	232
108	第1次大極殿地域の変遷	233
109	大明宮含元殿とSB7200の比較	234・235
110	大明宮麟德殿と第II期中火建物の比較	234・235
111	SB7200の寄棟造復原	237

112 第2次大極殿・朝堂院の軒瓦	243
113 6284Fの同范	248
114 平城宮と恭仁宮の同范軒瓦	250
115 6320Aの二種	251
116 平城宮上器表面・断面拡大写真	254・255
117 平城宮土器の偏光顕微鏡写真	254・255
118 土器の螢光X線分析	257
119 SB7802の食器組合せ	260

表

1 調査期間と発掘面積	5
2 第1次大極殿地域東半部推定工量	33
3 SD3715未使用木筒の寸法	104
4 SD7802未使用木筒の寸法	112
5 紀年銘木筒表	113
6 柱根・礎盤の寸法と樹種	131
7 木樋の寸法	134
8 木樋暗渠蓋の寸法	136
9 大地域を画する掘立柱跡	138
10 柱根の樹齢測定	140
11 枝木断面寸法の比較	143
12 奈良県下の寺院礎石の石材種	151
13 平城宮土器の大別	153
14 平城宮土器IV・Vの法量	155
15 SB7802出土土器の構成	157
16 SA3777出土土器の構成	161
17 SA109南側溝出土土器の構成	162
18 SA109北側溝出土土器の構成	165
19 SB7150出土土器の構成	166
20 SB6633・SB6666・SB7151・SB7152出土土器の構成	167

21	SD8211・SD8214・SD8216・SD8246出土土器の構成	167
22	SK8212出土土器の構成	168
23	SB8224出土土器の構成	170
24	SD6631・SD6633・SD7175出土土器の構成	171
25	SD3715出土土器の構成	174
26	SK3784出土土器の構成	178
27	SK8316出土土器の構成	179
28	SK8317出土土器の構成	179
29	SK8233出土土器の構成	180
30	SK3730出土土器の構成	181
31	施釉陶器の出土地点	182
32	墨書・墨画・籠書・刻線文・刻印土器一覧	183
33	陶硯の出土地点	185
34	SB7802出土杓子形木製品の寸法	190
35	SB7802出土曲物底板の寸法	192
36	SB7802出土棒状木製品の寸法	195
37	SD3715出土曲物底板の寸法	197
38	SD3715出土棒状木製品の寸法	201
39	SD9210出土曲物底板の寸法	204
40	第1次大極殿地域出土木製品の樹種	206
41	銭貨の計測値(1)	210
42	銭貨の計測値(2)	211
43	第1次大極殿地域の軒瓦組合せ	245
44	恭仁宮軒瓦の分類	249
45	土師器杯A・皿Aの調整手法	254
46	分析資料一覧	256
47	胎土分析資料の時期	256
48	SB7802の食器構成	260
49	SA3777の食器構成	262

平城宮発掘調査報告XI

第1次大極殿地域の調査

本文

1981

第Ⅰ章 序 言

この報告は、奈良市佐紀町に所在する特別史跡「平城宮跡」の中心部にあたる第1次大極殿地域における1965(昭和40)年度の第27次調査から、1979(昭和54)年度の第117次調査まで、9次12回にわたる調査の結果をまとめたものである。この地域は第27次調査と1967(昭和42)年度の第41次調査によって、大極殿を取りかこむ東面築地回廊などの状況が判明し、1970(昭和45)年度の第69次調査以降の発掘調査によって北部の建物群地域の状況があきらかになった。そして、1979(昭和54)年度の第117次調査をもってこの地域東半部の調査は完了した。

今回報告する地域に接する南部部の地域は、水田の畦畔や南北に細長い土堤によって第1次朝堂院があったものと推察されてきた。1976(昭和51)年度の第97次調査から1979(昭和54)年度の第119次調査までの間、4次にわたり南面中央部および東方部の調査を行なって、当初は木構のうちに築地を縦いて、東西215m(720尺)、南北285m(960尺)の区域をかこみ、正面に南門を開き、内面両脇に2棟ずつの長い南北棟建物がたっていたことが判明した。それは平城宮第2次朝堂院や藤原宮朝堂院などのように十二堂が並ぶものではなく、特殊な構成を呈しており、その検討は今後の課題である。

1 最近における発掘の進展

第1次朝堂院地域とともに近年とくに重点をおいていた東院地域では、1976(昭和51)年度の第99次調査¹⁾で東南隅の園池のほぼ全容をあきらかにした。ついで、1978(昭和53)年度の第110次調査²⁾で園池の北側、1979(昭和54)年度の第120次調査³⁾で園池の西側を調査し、園池の改修状況とこの区域の区画割りおよび建物の変遷状況をあきらかにした。東院西方部の第2次朝堂院東外郭に接する区域では、1977(昭和52)年度の第104次調査⁴⁾でもと東一坊大路道路敷とかんがえてきたところが、奈良時代とくにその後半に多数の建物が規則的に配置され、しかも再三にわたって建替えていることがわかった。この区域の東側で行なった1980(昭和55)年度の第128次調査⁵⁾でも同様の状況がみられ、とくにこの調査では線跡塗や墨書き土器に注目すべきものがあった。今後、東院の調査は中心部に向って進展することになるが、それらの調査によって、東院地域の性格が一層明確になるはずである。

水上池堤下の宮城北端部で行なった1981(昭和56)年度の第129次調査では、内裏東外郭の南北大溝北限の状況とともに、皇后宮職に関する墨書き土器・木簡が発見され、この地域の性格の

- 1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』
II 宮衙地域の調査(学報第15冊) 1962, p. 97
以下『平城宮報告』IIと略し、同報告書の直以降についても同じ。
- 2) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1971』p. 22, 以下年報については『年報1977』p. 22, 以下年報については『年報1978』p. 19, 『年報1979』p. 23, 『年報1980』p. 25
- 3) 『年報1977』p. 24
- 4) 『年報1979』p. 21
- 5) 『年報1980』p. 27
- 6) 『年報1978』p. 23
- 7) 『年報1981』p. 17

解明に重要な手掛りをあたえている。

大正年間に植えられた第2次大極殿土壇上の松がかれたことと、基壇の整備計画をたてるため、1978(昭和53)年度の第113次調査で、第2次大極殿の調査を行なった。基壇と建物の規模を確認し、さらに下層に掘立柱の大規模な建物のあることが判明した。1981年度もひきつづき大極殿後殿と回廊の調査を行ない(第132次調査)，その規模と構成をあきらかにした。

平城宮南辺部の整備は平城遺跡博物館基本構想のなかにも重点的にとりあげられており、特別史跡追加指定と奈良県が先行取得したの機会に、発掘調査を行なった。1980(昭和55)年度の第122次調査で南面東門(壬生門)と両脇の大垣および二条大路の調査を行ない、本年度の第130次調査で朱雀門東方大垣、第133次調査で南面西門(若人養門)、第136次調査で第1次朝堂院東南隅の調査を進めている。

宮城の北辺部については、ながらく大規模な調査がなかったが、宮城北方にある土壘状の高まりが奈良県立橿原考古学研究所によって調査された。その結果、奈良時代の築地痕跡であることが確認され、「松林宮、松林苑」を区画するものという説が提示されている。さらに、平城宮北面大垣と推定松林宮南面大垣との中间が大蔵省の占地にあたるのではないかという見解がだされ、近年この地域がとくに注目されている。

平城天皇樹木陵の前身である市庭古墳の西北で住宅開発計画があり、その地区の調査を1980年度に第126次調査として行なった。倉庫群などにあたる建物遺構は存在しなかったが、市庭古墳後円部の周濠が二重であり、内濠は奈良時代に填丘を削って埋め立てられ、外濠が頃池として再利用されていることがあきらかになった。同時に行なった第123—12次調査では、推定松林宮大垣南西隅につづく基底幅2.7mの築地とその北方に幅約5.3m、深さ約3mの大溝を確認し、平城宮北辺部が宮に直接接する公的な地域であることが強く裏づけられた。しかし、この地域の住宅開発は急速に進展しており、この地域の解明が当面の緊急かつ重要な課題のひとつになっている。

平城京内の開発工事はますます増加し、発掘調査の機会も増加した。当調査部は1965(昭和40)年度の第25—2次(簡易保険奈良保養センター)調査以降、各所で調査を行ない、条坊の割付けや坪内の状況をあきらかにしてきた。1975(昭和50)年度の第96次調査とこれを補足した1977年度の第109次調査、1979年度の第121次調査では、左京三条二坊六坪の園池を中心とする類例まれな遺跡が発見され、平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園遺跡として特別史跡に指定された。1979(昭和54)年度の第116次調査では、左京三条四坊七坪において京内ではじめて和同開室の鉄造工房を発見した。県道廻り線の計画とともに1980(昭和55)年度の第125次調査と今年度の補足調査を行ない、九条大路北辺部の状況もあきらかになった。開発計画は西市推定地にもおよび、1980年度と今年度に右京八条二坊十二坪内の緊急調査を行なった。

1) 「年報1979」p.1

六坪発掘調査概報」1976

2) 「年報1981」p.14

6) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊

3) 河上邦彦「松林苑の確認と調査」『奈良県観光』277号 1979

六坪発掘調査概報』奈良市教育委員会 1980

4) 奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981

7) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条四坊

5) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊

七坪発掘調査概報』1980

8) 奈良国立文化財研究所『平城京九条大路一県道廻り線予定地発掘調査概報 I』1981

2 保存と整備

京北方の奈良山丘陵では、住宅・都市整備公団の平城ニュータウン造成計画にともない、1971(昭和46)年度から1973年度にかけて、大規模な調査を行なってきた。その調査の一環として、1978(昭和53)年度には、奈良市山陵町の石のカラト古墳、京都府柏原郡猪籠川町の音加ケ谷瓦窯の調査を行なった。それらの遺跡は保存を前提とするものであって、近い将来圃地のなかに保存整備され、文化環境を高める役割りをはたすことが期待される。

発掘調査の進展にともない、遺構・遺物の保存に対する研究開発が重要な課題であることはいうまでもない。保存処理に関する新しい方法として大極殿をはじめとする仮設の土層などの断面をそのまま転写することに成功した。これで実測図や写真とともに発掘記録の有力な手段が一つ増加したことになった。一方、発掘で出現した遺構をウレタン樹脂を用いて切り取る方法も簡便化し各種の遺構でその利用を試みている。

2 保存と整備

平城宮跡は1922(大正11)年に第1次・第2次大極殿朝堂院、内裏地域を中心に47haが史蹟に指定され、その後通称一条通り北方部が追加され、1952(昭和27)年特別史跡指定後も西方地域、東院地域が追加され、されに1979(昭和54)年に南辺部が追加指定されて、現在の特別史跡指定面積は約133haになっている。

国費による公有化は、奈良県教育委員会が事務を担当して、1963(昭和38)年度から開始され、東院地域と佐紀池では從来からの方式による国費直接買上げとともに、1973~74(昭和48~49)年度に奈良県が先行取得を行ない、南辺部の大部分も、1979(昭和54)年度に奈良県が先行取得をして、現在逐次奈良県から再取得を進めている。

宮跡の保存整備は1963(昭和38)年度に奈良県教育委員会により始められたが、1970(昭和45)年度から当研究所が引き継いでいる。それは主として第2次内裏・大極殿・朝堂院地域を中心にして行ない、歴史的な景観をそこなうことなくいろいろな方法で活用されている。平城宮跡の保存整備に関する基本的な方針は1968(昭和43)年以来、文化庁の「平城宮跡保存整備準備委員会」、引き続き「平城宮跡保存整備委員会」において検討が続けられ、文化庁の依頼により当研究所がまとめた「平城遺跡博物館基本構想案」にもとづいて、1978(昭和53)年に文化庁から『平城遺跡博物館基本構想資料』が公表され、今後の保存整備はこの構想案にそって進められることになる。

とくに1980(昭和55)年度には発掘調査の成果にもとづいて、第2次大極殿の基壇整備を行なった。遺構の保存はいうまでもなく、南方の朝堂院や北方の内裏地域との調和をはかり、全体を旧地表面から60cm上げ、埴正積基壇の上半部と石階を復原し、上に礎石を並べ、基壇下方を土壤芝張りをしている。

1981年度からは南面大垣の復原事業に着手し、宮跡の保存整備も一段と推進され、平城宮の景観も変化することになる。

1) 奈良国立文化財研究所「奈良山丘陵・平城ニュータウン予定地内遺跡調査概報」京都府教育委員会・奈良県教育委員会 1979

2) 文化庁『平城遺跡博物館基本構想資料』1977

3 報告書の作成

長期間にわたる発掘調査にたずさわった関係者は随分と多く、ここではさきに調査責任者(所長・部長)と発掘調査担当者をかけ、その他の関係者については一括して列記する。

次 数	発掘年度	所 長	部 長	発掘調査担当者
第27次	(1965年)	小林 刚	杉山 信三	佐原 真
第41次	(1967年)	"	"	阿部 義平
第69次	(1970年)	松下 隆章	坪井 清足	宮本長二郎
第72次	(1971年)	"	"	半斐 忠彦
第75次	(1972年)	内山 正	"	吉田 恵二
第77次	(1973年)	"	"	田辺 征夫
第81次東(")	"	"	"	藤村 泉
第81次西(1974年)	"	"	"	黒崎 直
第81次中(")	"	小川 修三	鈴木 寛吉	金子 裕之
第87次北(1975年)	"	"	"	川越 俊一
第87次南(1976年)	"	"	"	中村 雅治
第117次	(1979年)	坪井 清足	狩野久・岡田英男	立木 修

横山浩一、岡田滋弘、宮沢智上、猪熊兼馬、小笠原好彦、高島忠平、工藤幸次、牛川寿治、木村泰平、三輪泰介、石井則季、横田義常、村上利一、沢村仁、河原純之、松下正司、玉井力、藤原武二、伊東太作、八賀晋、工業普通、森郁夫、西谷正、細見啓三、栗原和彦、田中琢、町田寛、佐藤興治、山沢義貴、八幡扶桑、仰軒道、田中裕、横田拓実、鬼頭清明、加藤優、木下正史、石松好雄、安達厚三、田中哲雄、皆原正明、西村旗、山中敏史、沢田正昭、西弘治、岡本東三、天田起雄、東野治之、鶴田孝司、山本忠尚、西口寿生、千田伸也、岩木圭輔、大庭謙、松沢延生、上野邦一、高瀬要一、今泉隆雄、綿村宏、岩本正二、須藤隆、山崎信二、土肥洋、安田竜太郎、松本修自、光谷拓実、毛利光俊雄、小林謙一、井上和人、清水真一、中村友博、巽洋一郎、加藤亮彦、安原啓司、亀井伸雄、木中真人、佐藤信、清田善樹、内田昭人

報告書の作成は1979年から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物関係については考古第一調査室・考古第二調査室・考古第三調査室・史料調査室が分担した。また全体の構想については、1974年から開始した「内裏検討会」の成果に立脚している。なお、執筆分担はつぎのとおりである。

第Ⅰ章岡田英男、第Ⅱ章町田章、第Ⅲ章1田中哲雄、2宮本長二郎・中村雅治・亀井伸雄・清水真一、第Ⅳ章1鬼頭清明、2岡本東三、3皆原正明・光谷拓実・秋山隆保・清水真一・岡田英男、4田辺征夫・安田竜太郎・巽淳一郎、5・6・7井上和人、第V章1田中哲雄・町田章、2狩野久・鬼頭清明、3岡田英男・宮木長二郎・亀井伸雄・清水真一・山岸常人、4岡本東三、5安田竜太郎・巽淳一郎・沢田正昭、6町田章。英文要訳は、ケンブリッヂ大学講師ジーナ・リー・バーンズ氏をわざらわし、山本忠尚が協力した。

写真撮影は併幹雄・八幡扶桑が行ない、渡辺衆芳・藤村礼子・池田千賀枝が助効した。また、図面書では平井俊行氏の協力をえた。編集は、坪井清足・岡田英男・狩野久の指導のもとにすすめ、町田章が担当した。

第Ⅱ章 調査概要

1 調査地域

今回報告する調査地域は、平城宮朱雀門内の北方約500mから展開する「第1次大極殿地域」である。この地域は水田やその畦畔の地割りによって、東西約180m、南北約300mの宮殿区画の存在が推測されていた。小字名には「大宮」・「東大宮」の地名がある。こうした地名と踏査によって、関野貞は「内裏（中宮）」に比定し、その南方に「南苑」を想定したのである。¹⁾関野貞らの考証によって、大正年間に史跡として指定されたのは、壬生門の南から北へならぶ朝堂院、大極殿、内裏を中心とする南北約820m、東西約620mの範囲であった。1955年に当研究所が本格的な発掘調査を開始し、遺構の配置状況が次第にあきらかになる。1962年段階においては、朱雀門内にも壬生門内とはほぼ同規模の宮殿区画の存在が推測された。この結果、朱雀門内の遺構を和銅創建時の第1次朝堂院・第1次大極殿・第1次内裏にあり、壬生門内の遺構を翌武朝の平城遷都以後の第2次朝堂院・第2次大極殿・第2次内裏に比定したのである。²⁾

ところが、第1次大極殿地域の発掘調査が進行する過程で、この地域には東方の第2次大極殿・第2次内裏地域とは様相がことなることが次第にあきらかになり、和銅創建時には「内裏」がこの地に存在しないとかんがえられる状況がでてきた。以下の章で詳述するように、この報告では和銅創建時の大極殿をこの地に想定し、「第1次大極殿地域」の呼称を用いる。

地形的には北方の約1/3が奈良山丘陵の末端の台地（標高73m）に位置し、のこりの2/3は沖積地形

（調査次数）	（調査区・地区名）	（調査期間）	（発掘面積）
27次	6ABD-D, 6ABQ-B, 6ABE-K, 6ABR-P	1965, 7, 2~66, 1, 17	66.9a
41次	6ABE-M-P, 6ABR-Q, 6ABS-E	1967, 7, 1~67, 11, 23	42.0
69次	6ABP-A-B-D	1970, 8, 3~70, 11, 21	34.2
72次	6ABP-F-G, 6ABQ-C	1971, 4, 13~71, 8, 11	39.2
75次	6ABQ-C-D, 6ABR-G	1972, 4, 1~72, 6, 20	40.3
77次	6ABR-II-G-J	1973, 1, 13~73, 4, 23	41.2
81次（東）	6ABO-E	1973, 4, 12~73, 7, 18	9.9
81次（西）	6ABO-P	1974, 1, 7~74, 2, 16	8.5
81次（中）	6ABO-L	1974, 6, 12~74, 7, 23	6.8
87次（北）	6ABP-A, 6ABC-U	1975, 7, 2~75, 10, 2	34.0
87次（南）	6ABP-B, 6ABC-V	1976, 1, 6~76, 3, 25	28.3
117次	6ABD-C, 6ABQ-A	1979, 9, 19~80, 1, 12	32.0 (383.3)

Tab. 1 調査期間と発掘面積

1) 関野貞「平城京及大内裏考」
(東京帝國大学紀要工科3) 1907

2) 「平城宮報告II」p. 111

第II章 調査概要

地の平野部(南限で標高68.5m)にある。第1次大極殿地域の発掘調査は、1958年に一条通り南側の2個所において、行なったことがある。しかし、それは小規模な発掘にとどまり、本格的

調査面積な発掘調査は1965年からはじまった。その後1979年まで断続的に12回の調査を進め、383.3aの範囲にわたって土砂を除き、この地域の東半部の遺構をほぼすべて検出しえた。未調査地として、北限の一条通り道路敷と南限の一部がのこる。前者については重要な地域であるが、ここ当分の間は発掘の予測がたたない。後者の約1,600m²の区域については周囲の遺構状況から類推することが可能である。今回の調査地域を当研究所の遺構標示記号によってあらわすと、

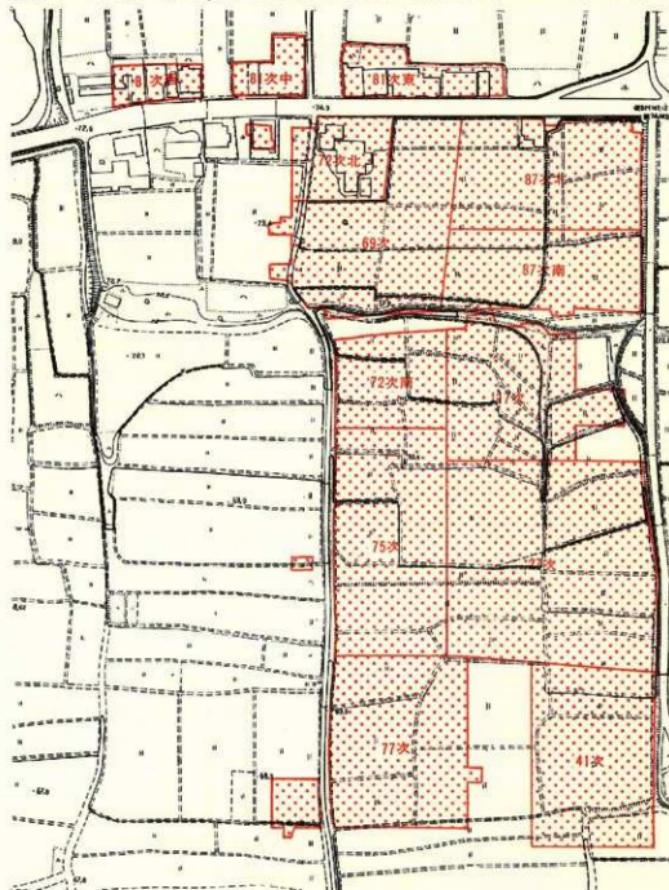


Fig. 1 調査地域

1) 『平城宮報告Ⅱ』 p. 36

6ABE区K・M・P地区、6ABS区E地区、6ABR区G・H・J・P・Q地区、6ABD区C・D地区、6ABQ区A・B・C・D地区、6ABC区U・V地区、6ABP区A・B・D・F・G地区、6ABO区E・L・P地区におよぶ (Tab. 1, fig. 1)。

2 調査経過

15年の間に12回にわけて行なった発掘調査の成果は、発掘面積を拡大するたびに次第に詳しさをましていった。初期には、遺構がますにしたがって遺構の解釈にも変化を生じた。しかし後半になってからは大まかな変遷の構図を立てられるようになった。ここでは調査後もなく作成した調査終了報告や調査概報にしたがって、その間の事情をのべることにする。したがって遺構の名称などについては、つとめて発掘直後のものを用いた。

A 第27次調査

この調査の目的は、第1次内裏の存在を遺構のうえで確認することにあった。調査地として、最初の調査土壌状の高まりをもつ跡跡が北から南下し、西へ鉤の手に曲る遺構の保存が良好とおもわれる地域を選らんだ。検出した遺構はA・B・B'・C期の4期に分類された (fig. 2)。

A期 発掘区中央を南北に貫通する築地 SA3800 があり、築地の西側には 14m の間隔を置いて、東西にのびる 2 条の堀 SA3805・SA3818 がある (ともにち足場に変更された)。およそ SA3805 の位置で築地の西から東へ流れる東西溝 SD3775 もこの時期にぞくし、発掘区東限の大きな南北溝 SD3715 に注ぐ。また SD3775 の北側に平行する東西溝 SA3780 も A 期にあてた。

B期 発掘区中央に南北廊 SC3777 があるこの廊は基壇 (幅 6m) の築成に一部旧築地を利用 南北廊して東へ拡張したもので、中心に柱間 4.6m の南北柱列をおき、屋根と塗壁とをそなえたものに想定した (SC 3777 は南北廊に変更)。塗壁が強調されたのは、SC 3777 の東側から多くの埴土 (のち築地取築上に推定) の断片が検出されたからである。そして西側にある石敷南北溝 SD3790 (下層) と東側の南北溝 SD3765 もこの時期にぞくするものとした。

B'期 B 期の部分的改修とかんがえ、石敷南北溝 SD3790 (上層) から発して東方の南北溝 SD3715 (上層) に注ぐ木樋暗渠 SD3770 が主な遺構であり、南北廊 SC3777 の東側で南北にのびる 5 条の堀 SA3795 を複数 (仮設建物) の柱列とかんがえた。B 期とつぎの C 期との間に介在する遺構として、東西溝 SA3818 の南側に掘り込まれた土槽 SK3784、発掘区の東半分全域をおおう礎敷、あるいは微 SX3785 を想定するであった。

C期 南北廊 SC3777 にかえて、発掘区中央で鉤の手に曲る東面築地 SA3800・SA3810 がつく 東面築地られ、その東南方向を東西溝 SA3740 がとりかこむことになる。

時期については、A 期=第1次内裏の時期 (和銅創建)、B 期=第2次内裏の時期 (聖武朝以降)、C 期=平城上皇の年代にあてた。遺構の認識と時期区分は、後に少からず訂正をうける。だが東面と南面の築地に想定してきた土壌状の地物 SA3800・SA3810 が新しく、それよりも古い築地回廊が第1次内裏と朝堂院の東面を画したことを確認したことは予期せぬ成果であった。

1) 石井則季・三輪嘉六「昭和40年度平城宮発掘調査概報」『年報1986』p. 34

B 第41次調査

第41次の調査地は第27次調査地の南側にあり、第1次大極殿回廊と第1次朝堂院兼地との接合点をふくむ地域に想定されてきた。この調査でも遺構はA・B・C期にわけられたが、その年代は第27次調査とはことなっている。すなわちA期=和銅創建時、B期=靈亀元年以後、C期=神護景雲3年以前である(図3)。

A期 東面築地回廊SC5500、南面築地回廊SC5600がある。SC5500の基壇幅は11.6mで、部分的にのこった礎石掘付痕跡によって桁行15尺、梁間24尺、梁間中央に築地を想定し、第27次調査地から南下する石敷南北溝SD3790を東西落溝にあてた。SD3790は暗渠SD5581で南北築地回廊SC5600を横断したのち、方向を東にとり東西暗渠SD5555となって、南北溝SD3765に注ぐ。SD3765は第27次調査ではB期としたが、今回の調査では和銅の紀年木簡が出土し、遺構の重複関係からも、和銅創建時に遡ることが判明した。また、東面築地回廊SC5500の基礎にある6条の南北溝SA3795は、櫛谷ではなく回廊構築用の足場としてこの時期においていた。

B期 東・南面の築地回廊はA期の状態で存続しており、山筋点に朝堂院の東面を画する標SA5551、SA5550がつけられていた。このさい、南北溝SD3765は東へ移動し、新たに南北溝SD3715を掘削している。回廊内からの排水路も北へ移動し、木樋SD5560と暗渠SD5558でSD3715に導く。SD3715の開削時に破壊された土塹から靈亀元年(716)の紀年木簡が出土したことによって、この地域における改作年代の1点が定った。なお、第27次調査では南北溝の中央柱とかんがえたSA3777は回廊修理に関する遺構としてB期に比定した。

C期 朝堂院の解SA5551、SA5550を築地に改修し、回廊内からの暗渠排水路も2回にわたってつけかえる(SD5562、SD5563、SD5564)。暗渠とSD3715との合流点付近を中心にして少なからぬ木簡を発見し、そのうちには神護景雲3年(767)の紀年木簡があった。その後、平安時代にはこの付近に顯著な遺構がなく、南北溝SD5530のみが細々とのこった。

このたびの調査によって、和銅創建時にはこの地域が築地回廊で囲まれていたことを確認し、構造の一端があきらかになった。一方、すでに調査が終っている一条通り北側、6ABO区を東西によこぎる複数の東西溝SD130が、第1次内裏の北面をとりかこむ築地回廊の南雨落溝にあたり、その東端付近にある建物としたSB269の柱穴が、改修時の南北溝SA3777の延長線上にあたることが再確認された。こうしたことから、和銅創建時の内裏と大極殿をかこむ築地回廊が東西180m(600尺)、南北317m(1060尺)であったことが確定した。

C 第69次調査

第41次調査後3年をへてから、いよいよ第1次内裏の中枢部にメスをいれることになった。一条通り沿いの民家移転が完了する時期にあったが、中心に位置する旧八木邸にはまだ廃材や樹木がのこり、発掘しうる状況でなかった。そのことから、旧八木邸を南東方からかこむ形で、台地上に発掘区を設定した。検出遺構はA~Dの4期に区分したが、ここでは第41次調査で有効な働きを示した紀年木簡などの出土品ではなく、A期=和銅創建時、B期=上限は天平

1) 阿部義平「平城宮跡発掘調査」(『年報1968』奈良國立文化財研究所要項) p. 37

2 調査経過

末年までさかのぼらず下限は奈良時代末期頃、C期=奈良時代末期から平安時代、D期=平安時代という當然とした年代軸をよぎなくされた(²⁾fig.4)。

A期 内裏・大極殿の築地回廊内を南北に3等分した最北の一郭(台地)の前面に化粧した塙 墓積擁壁 積擁壁 SX6600 がある。擁壁の高さは1.5~1.7mで、その前面は礎敷の広場となる。朱雀門 中船棟の延長線上に旗壁を登る掘立柱の階段 SX6601 がある。台上は削平され頗るな遺構はない、木階を登ったところに7間×2間の東西棟掘立柱建物 SB6605 があるにすぎない。しかし、これを正殿とするわけにいかない。

B期 墓積擁壁を南に拡張し、台上に10尺方眼で地割りした計画的な段合が軒をつらねる。すなわち正殿 SB6610 は中軸線上にあり、9間×9間の縦柱建物、かつて宮内では例をみない 縦柱建物 大規模な建物となる。その東方に7棟の東西棟掘立柱建物が整然とならぶ。一方、一条通りぞいに礎石据付痕跡を発見し、この時期の北面築地回廊の南側柱列 SC6670 に想定するとともに、それは東方の第2次内裏北面築地回廊とほぼそろっていることが判明した。

C期 中軸線上の9間×5間の四面に廟がつく東西棟掘立柱建物 SB6620 を正殿とし、その東南方に南北棟の脇殿 SD6622 をおき、東北方に東西棟の後方の脇殿 SB6621 をおく。それらの建物は共通して廟を広くとり、溝や界隈でかこまれている。

D期 正殿と脇殿が建替えられ、小規模な SB6642 と SB6614 がたてられたと想定した。

このたびの調査によって、中心部の状況があきらかになったのであるが、A期の墓積擁壁といい、B期の縦柱建物といい、まったく予期しなかった遺構が出現したのである。この地域が第1次内裏にあたるという先入観によって、A期の瓦出土量が少ないとから台上の建物が瓦葺ではなく内裏のように桧皮葺であったろうとか、B期の建物配置と第2次内裏後宮建物配置と類似しているのではないかなどとかんがえた。B期の北面築地回廊位置が第2次内裏のそれとはば同一線上にあり、A期の築地回廊が縮少した結果であるとしたことも新しい知見であった。一方、正殿と脇殿をコ字形に配置する第2次内裏的な建物配置は、C期においてのみ明確にみとめられた。

内裏の建物配置と原合

D 第72次調査

第72次調査は、第69次調査の掘残し部分ともいえる台上の6ABP-F・G地区と、台下の6ABQ-C地区で行なった。検出遺構の時期区分は、おおむね第69次調査と矛盾しない(²⁾fig.4)。

A期 発掘区中央北寄りに位置する特異な溝式遺構 SD7165、SD7167 がある。それは3箇所で溝を北へ屈曲させ、凸字状に北へ突出している。中央の突出部は中軸線上にあり、東西の突出部は中軸からそれぞれ15mはなれています。この溝は浅くて水を流した痕跡がなく、凝灰岩の破片が散在していることから、基壇および階段の地覆石の抜取痕跡にかんがえられた。のこりは悪いが同様の遺構が南29mの地点で東西にのびている(SD7167)ことから、徹底的に破壊された大型建物(SB7200)の存在を推定したが、異論もありただちに断定できないという保留がつくわえられた。

地覆石抜取痕跡

B期 第69次調査で検出した正殿 SB6610・SB6611 に北接して SB7150(9間×5間)があり、その後方に SB7150 と平行をそろえた2棟の建物 SB7151、SB7152 が20尺の間隔をおいてならぶ。

1) 横田拓実・石松好雄・田辺征夫「平城宮跡・飛鳥藤原宮跡発掘調査」『年報1971』p.28

2) 阿部義平・甲斐忠彦「平城宮跡飛鳥藤原宮跡の発掘調査」『年報1972』p.26

第II章 調査概要

これらの建物は第69次調査で検出した東方の殿舎群とも柱通りをそろえ、計画的に配置されている。また第69次調査で検出した北面築地回廊 SC6670 の南側柱列の遺構も発見された。

C期 第69次調査で検出した正殿 SB6620 の後方に中庭をおき、一まわり小さな後殿 SB7170 をおく。発掘時には中庭の東西が砾によって仕切られるものと判断したが、足場の検討によって身舎を礫石とする南北棟建物 SB7173・SB7172 であることがわかった。SB7170 には貯水設備のような遺構をそなえ、内裏的な居住空間の要素をとどめている。建物配置や柱間寸法を広狭多様に使いわけ、砾などによって敷地内を小さく区画するなどB期の遺構との間に大きな相違のあることが指摘された。

6ABQ-C地区の遺構は、台上の遺構にくらべて少ない。A期には南北に発掘区を貫通する素掘りの南北溝 SD7142 とその東方の井戸 SE7145 があるほかは、一面の礫敷広場である。B・C期も広場であることにかわりはないが、B期には中軸線に東西に長い桁行 6 間、梁間 1 間の掘立柱遺構 SX7141 がある。C期には台上から導く溝 SD7133 と発掘区中央で L 字状に曲る素掘溝 SD7131・SD7132 がある。それらのほか時期不明の遺構として建物 SB7134・SB7140・東西廻 SA7130 があった。一方、発掘区北限に凝灰岩片が散布するところがあり、構内道路を設けている付近に B・C期の擁壁があったのではないかとかんがえられた。

今回の調査によって、台上には殿舎が林立し、その前面が一面の礫敷広場になることが判明し、第1次内裏地域の具体的な姿を適確に把握できるようになった。とくにB期の中心建物の上部構造については、類例がなく苦慮するところとなる。ただし、唐長安大明宮の麟德殿の柱配置ときわめて類似していることが指摘され、百柱の間という愛称を与えた。検出遺構を史料にあらわれるどの宮殿に比定するかという点になると、以後多くのことなった意見が乱立することになるが、この殿舎ではその候補宮殿として中宮、中宮院、内裏があげられた。

E 第75次調査

このたびの調査地としては、第72次調査地から南方に展開して、第1次内裏南北築地 SA3810 をふくむ。第2次内裏との比較から、内裏正殿相当の遺構の存在を予想した。第75次調査では A期=和銅初年から天平勝宝 5 年まで、B期=天平勝宝末年から宝亀末年まで、C期=延暦年間から弘仁年間までとかんがえた(図5)。

A期 磨敷広場である。発掘区東辺に 2 棟の南北棟建物 SB7780・SB7790 が南北にならび、第72次調査地で検出した南北溝 SD7142 が発掘区を貫通する。他方第27次調査で検出した 2 条の廻 SA3805・SA3818 が発掘区を東西に横断する。発掘区の南西側に南北溝 SD7760 がある。

南門 **B期** 発掘区北半を土盛りし、東西にのびる築地 SA3810A を築き、その中軸線上に南門 SB7750A を開く。門の遺構としては凝灰岩地覆石の抜取痕跡が唯一のものであった。

C期 南門と築地を改修するが(SB7750B・SA3810B), このさい門を掘立柱建物(5 間×2 間)に変更している。また、発掘区南限には第27次調査地とつながる東西廻 SA3740 があった。

このたびの調査の副産物として、平城宮造営以前の遺構を検出している。発掘区北西隅に方墻 SX7800 があり、それを削平したのち、南北溝 SD7787 が通っている。この溝は朱雀門地区の

1) 吉田恵二・岡本東三「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1973』 p. 19

2 調査経過

発掘調査以来あきらかになっている下ツ道の東側溝にあたるもので、古墳の年代から下ツ道が下ツ道6世紀以降につけられていることが判明した。

この地域には当初予測した殿舎の存在はみとめられず、B期に築地で仕切られるほか、一面の広場であったことがあきらかになった。

F 第77次調査

第77次調査地は、第1次大極殿想定地と南面の築地回廊SD5600をふくむ地域である。平城宮造営以前の造構として下ツ道東側溝SD7788や小さな掘立柱建物があり、造営時の整地土の下からは木材の削屑などが多量に出土した(*fig. 6*)。

A期 奈良時代の時期区分は第75次と同じだが、A期が3小期に細分されることになった。A₁期には中軸線上に南門SB7801をつくり、その両翼に築地回廊SC5600・SC7820がとりつく。**南門**とともに丁寧な掘込地業を行ない、盲暗渠をともなう。SC5600には礎石掘付の根石が比較的よくのこっており、柱間寸法がわかった。A₂期は基本的にはA₁期の建物を踏襲するが、築地回廊SC5600に、櫓風建物SB7802を増築している。SB7802は5間×3間の総柱建物で、四隅を掘立柱とし、内部の柱には礎石を据えたことをしめた根石がある。掘立柱形は平城宮でももっとも大きいものの一つで、発掘当初は井戸の掘形に誤認されるほどであった。1穴の柱掘形に柱根がのこり、巨大な柱がたてられていることがわかるとともに、多くの柱抜取痕跡から木筋などの遺物が出土し、紀年木筋からこの建物の廃絶が天平勝宝5年(752)以降であることがわかった。築地回廊の北側には素掘りの東西溝SD5590が貫通する。それは東面築地回廊西側にそって南へ折れ、第41次調査でC期に比定した木樋暗渠SD5562・SD5563につながって、築地回廊外にぬける。A₃期には門基壇が少し縮少する程度の改作がなされ、基本的にはA₂期と同じ建物が存続する。基壇周辺の雨落溝や縫隙に改修がみとめられる。また、東西溝SD5590を拡張して、SB7801の階段脇から北上する南北溝SD7760がつけられた。これは北方の殿舎に至る参道の側溝とかんがえられる。

B期 南面築地回廊ではなく、この地域は一面の広場となり、建物などの造構はない。しかしながら、発掘区全域に疊敷がみとめられた。

C期 殿舎を礎石とし、側柱を掘立柱とする7間×4間の東西棟建物SB7803が中軸線上にたち、その後方に小さな柱穴の東西扉SA7815が発掘区を横断している。この地域の中心的な建物であるSB7803については東方の第2次大極殿とほぼ同位置にあり、大型であることから大極殿に比定された。基壇の存在を示す盛土や身合の柱位置を示す掘形や根石などの痕跡はなく、はたして完成していたか否かについては問題がある。

この調査の主旨であった「第1次大極殿」がA・B期ではなく、C期に出現していることについて、調査者達は從来の第1次内裏・第1次大極殿というイメージでこの地を想定するかんがえ方を根本的に改めなければならないことになった。一方、C期大極殿の存在を疑問視する意見強く、この地域をどのように理解するかについて混乱を増すばかりであった。

第69次調査ではバルーンを使い、第72次調査ではクレーン車をつかって造構の空中写真測量

1)『年報1973』p. 20

第Ⅱ章 調査概要

を実験的に行なってきたが、この調査ではヘリコプターでの空中写真測量を積極的にとりいれ、前後3回の撮影を行なった。

G 第81次調査

第81次調査はかつて民家があり、部分的に調査せざるをえなかった6ABO区の一条通りぞいについて、整備の事前措置として3回にわけて調査した¹⁾(fig.7・8)。この小規模調査は第1次内裏・大極殿地域の北限を再検討する絶好の機会であった。A期の北面築地回廊の南雨落溝SD130とその南側に礎痕がひろがること、B期に縮少したとかんがえられる北面築地回廊の北側柱列の足場痕跡を発見したこと、あるいは第81次中・西調査で、造営時の埋立整地状況を具体的に把握した。一方、大膳殿の南面築地SA109の下層敷地土から東大寺式軒瓦6732A, 6691A, 6272型式が出上し、その構築が天平末年から天平勝宝年間にかけての時期と推測され、かつて平城宮創建時に埋立てたとかんがえられた池SG149の埋立時期について疑惑がでた。

H 第87次調査

第87次調査地は、第1次内裏・大極殿地域の北辺にあり、第69次調査地に接する西側に展開する台地(6ABP-A・D地区)とそれよりも一段低い東側の低地(6ABC-U・V地区)とが発掘区の中央でわかれれる。調査はこの地区を南北にわけ、2回2年にわたりて行なった。検出した遺構の時期区分は、A期=奈良時代前半、B期=奈良時代後半、C期=奈良時代末から平安時代初期にわけられ、従来の見解ととくに変化していない。しかし、時期区分を突然といい、具体的な実年代をさけているのは、絶対年代をしめ有力な遺物が出土しなかったことにもよるが、1974年から開催している「内裏検討会」において時期区分の議論が百家争鳴の様相を呈し統一的な見解をえられなかつたからでもある(fig.9)。

A期 郷内では南面を画する堆積塙SX6600が、直線的にびず、発掘区西南隅で曲折して東南方にのびることがあきらかになった。東面築地回廊SC5500は第27・第41次調査とほぼおなじ状況で出現し、西雨落溝SD3790のほか2条の暗渠もあり、発掘区中央部には門がある。この築地回廊をはさむ東側は約1m低くなってしまい、築地本体の想定線あたりから東側の基壇が大きく削りとられ、東側の南北屏SA3777との前後関係についてはあきらかにしえなかつた。なおSA3777には柱穴を欠落しているところがあり、東面の門を想定した。外郭には1棟の小さな南北棟建物SB8330があり、それは同じくA期につけられた南北屏SD3715によって破壊されている。また、この時期における大小の土塹が多く、造営時の土取場が想定された。

B期 北面築地回廊SC6670と東面築地回廊SC8360を雨落溝をふくめて検出した。後者の側柱痕跡はよくのこり、第27・第41次調査とはことなる柱間寸法であることが判明し、B期に再建した別個の築地回廊が存在することがわかつた。またA期と同位置に門を開いている。郭

1) 田中英男・藤村泉・岩本生輔「平城宮跡とその周辺の発掘調査」『年報1974』p. 28
官本長二郎・川越俊一・高瀬要一「平城宮跡と

平城京跡の発掘調査」『年報1975』p. 15
2) 山本忠尚・岡本東三・鍛村宏・中村雅治「平城宮跡と平城京の発掘調査」『年報1976』p. 19

内では、北と東側を小さな素掘溝 SD8214・SD8216 でかこむ範囲内で、4棟の建物 SB8302・SB8245・SB8215・SB8210を新たに検出した。それらの建物は、東西棟建物を配する第69次調査地とはことなって、いずれも南北棟建物であり、柱間を10尺等間とするきわめて計画性のつよい配置をしめしている。SB8245はそれらのうちもっとも大きく、7間×3間の純粋建物である。外郭では南北溝 SD3715にそって2棟の南北棟建物 SB8320・SB8240がある。

C期 築地 SA3800A がその雨落溝とともに発掘区を南北に貫通し、南端部には掘立柱の門 SB8310を開いている。郭内東北隅には西と南を壁でかこみ、さらにそれを壁で南北に2分したそれぞれに東西棟建物 SB8218・SB8219があり、後になって規模を拡大して建替えている (SB8222, SR8224)。また、発掘区西南隅には2面崩の南北棟建物 SB8300があり、その北側に小さな東西棟建物がある。外郭には、郭内から南北溝 SD3715に導く排水路 SD8227・SD8607があり、SD3715の西岸に小建物 SB8325があった。

D期 道構は外郭にある。すなわち築地 SA3800B と南北溝 SD3715とのほぼ中央に、東西に溝 (SD8237, SD8239) をつけ、中心に南北溝 SA8238をおく施設があり、南端では柱間をひろげて門 (SB8335) としている。ここでいうD期とはC期の道構よりも新しいという意味で、C期のある時期に築地の外郭を囲む施設として新設した可能性もあるとかんがえた。

今回の調査によって、第1次内裏中枢部の構造があきらかになったわけだが、A期の築地回廊 SC5500と南北溝 SA3777との前後関係については、明確にしえなかつた。C期の郭内東北隅の建物配置については、平安宮占闇にあらわれる昭陽舎・淑景舎の配置との類似性が指摘され、この地域が内裏である可能性をつよめた。

南北棟建物

中心部調査
の完了

I 第117次調査

第117次調査は第1次内裏地区の高台とその南面の櫛敷広場とを結ぶ地域であり、この地区的南・西・北はすでに調査を終えている。報告書作成には、この地区的調査が不可欠のものとかんがえ、第87次調査後3年をへて調査した。このたびの時期区分は、A期→和銅~天平勝宝元年、B期→天平宝字年間~奈良時代末期、C期→奈良時代末期~平安時代初頭である (fig. 10)。

台地と広場
の接点

A期 東面築地回廊は、雨落溝・足場の状況から2時期にわかれることが提唱された。そして、その間に第87次調査で問題になった南北溝 SA3777がたてられるとかんがえた。埴積塗壁 SX6600は第87次調査で検出した入間部から鈴谷東南へ15mのび、そのち長さ・幅とも15mで斜南へのび平坦面となる。これが斜道 SF9237Aである。

B期 埴積塗壁 SX6600が南へ20mのび、石積塗壁 SX9230となる。斜道は傾斜をゆるめてなお存続する SF9232B。SF9232Bが広場に移行するあたりに建物 SB9220がある。この建物は5間×3間の東西棟建物で、壁体のない吹放ちであったことが想定できる。発掘区西端中央部に井戸 SE9210がある。掘形の1辺が約8mという大きなもので、校倉の校木を転用して井戸枠を組みあげている。この井戸は平安時代まで変形しながらのこる。この時期の築地回廊 SC8360の痕跡は今回の調査地では消失しているようであった。

C期 前後2小期に区分できる。C₁期には東面築地 SA3800Aが、雨落溝をともなってつく

1) 皆原正明・毛利光俊彦・鬼井祐雄「平城宮跡と平城京跡の測量」(『年報1980』) p. 23

第Ⅱ章 調査概要

られている。井戸SE9210の北にある東西塗SA7130がSA3800Aにとりつく。C₂期になると、築地が土塁 SA3800Bに改作される。第87次調査で検出した郭外で東西に溝を配する南北塗SA8238がつくられる。

この調査によって、ようやく第1次内裏・大極殿地域の東半分をほぼ完掘した。第117次調査 東半部調査 の遺構時期区分は、周辺の調査成果を加味しておこなったものであり、この調査地のみで、時期決定を行なったのではない。たとえば、A期のSA3777の位置づけは、南接する第27次調査の検討によったものである。さらにこの調査では、C期を2小期に分けたが、そのC₂期の時期を平城天皇の時期ないしは、平城天皇第三皇子高岳親王に平城旧宮を賜ったときに比定した。

J 内裏検討会

1974年段階で、平城宮の中軸線上に位置する第1次内裏と、東方に位置する第2次内裏の主要部の発掘がほぼ完了した。同じ内裏とよびながら、遺構の配置などにかなり差異がみられるところや、両地域の機能上の差異などを比較検討する必要を生じてきた。一方、上述の発掘経過からみてあきらかのように、検出遺構に対する認識が調査地点がわかるたびに変化してきた。調査部員相互の意思疎通をはかるため、部内の討議集会を開催することにした。1975年1月に第討議集会 2次内裏、1975年7月に第1次内裏、1976年1月に第2次内裏、1978年1月に第1次内裏と都合4回、日々の発掘成果や遺物の整理結果をつきあわせながら、討議をかさねた。

討議の結果、統一的な見解をえるというよりは、いくつかの異論が整理統合された。大勢としては、1奈良時代当初の大極殿はこの地域にありSB7200がそれに比定される、2奈良時代末期から平安時代初期には内裏であったという点については了解したのである。1978年の第4回検討会のときには恭仁宮大極殿=山背國分寺金堂の発掘結果があきらかになり、天平11年に恭仁宮へ移建した平城宮大極殿がSB7200なのか、または第2次の大極殿であったかについて論議がかわされた。翌年、平城宮第2次大極殿の発掘がなされ、その規模が小さく恭仁宮へ

第1次大極殿の確立 移建したのは第2次の大極殿でありえないことが確定的になった。

遺構の時期区分について異論が集中したのは、東面の区画施設についてであった。築地回廊基壇の遺構面が浅く、削平が著しいうえに礎石痕跡などの重複関係が少ないとみえたのは確定的にみえた。しかしながら、第81次調査において、SD130の下層に通じるとおもわれる整地土層から東大寺式瓦が出土するにおよんで、当初はもう少し南寄りにあったのが後に拡大したとかがえるべきとの説がだされた。他方、東西築地回廊の基壇を掘りこんで建てた南北塗SA3777の処遇については二転三転をくりかえすことになった。

宮殿名の比定についても一律でない。この地域を奈良時代初頭から中宮とかがえる説、中宮と中宮院は同じとする説、中宮と内裏と区別するかんがえ方などさまざまな意見がでた。

今回の報告にあたっては内裏検討会の成果に立脚し、かつて第1次内裏・大極殿とよんだ地域を第1次大極殿地域とよびかえ、第2次内裏は単に内裏といい、第2次大極殿・第1・第2次朝堂院の語は從来どおりのこすこととした。

3 調査日誌

A 第27次発掘調査

6ABE区K地区, 6ABD地区, 6ABQ区B地区, 6ABR区P地区
1965年7月24日～1966年1月17日(fig. 2)

- 7・24 表上の拂土開始。
- 8・21 K地区：発掘区東方から遺構検出開始。厚さ15～25cmの灰色礫混り土を除き、粘土面を出し遺構の検出を行なう。
- 8・23 K地区：南北溝SD3715を発見。この溝は発掘区を南北に貫通する様様。
- 8・24 K地区：SD3715の西岸ぞいに礫敷が南北にのび(幅約3m)、それから西は褐色土となる。部分的に土器溝の上部がひろがる。
- 8・27 K地区：褐色土を除いて遺構検出を行なうこととする。
- 8・28 K地区：東西木棺跡SD3770の埋土(暗灰色土)を発見。KM16でSD3765と交差する。重複関係ではSD3770のほうが新しい。15ラインで南北溝SA8238の柱穴を検出。
- 8・30 K地区：SA8238の柱穴を南北に追跡。重複関係からみてSA8238が木棺跡SD3770よりも新しいことがわかる。
- 8・31 K地区：17ラインから西では褐色土が薄くなり、その下層が黄色沙質整地土となり、この面で遺構検出を行なうこととした。
- 9・2 K地区：南北溝SD3765の西側約5mをへだてて漆喰片が南北に散布している。
- 9・3 K地区：漆喰の散布面で遺構検出。南北溝SA3777の柱穴が現われはじめた。その東に接して、SD3802が南北にはしる。
- 9・4 K地区：漆喰散布がとぎれ縦混りの黄色土にかわっていく。SD3777を東に向って追跡。
- 9・8 K地区：SA3777の西側にそってならぶ2列の小柱穴列(のち足場SS3795となる)を発見。P地区：SD3770の木組はPM23でおわる。22ラインで南北にのびる2列の小柱穴列(のちに足場SS3795となる)を検出。
- 9・13 B地区：東南隅で東西築地SA3810を貫通する凝灰岩切石積の暗渠SD3815を発見する。水田の畦畔として、基礎部分のみをとどめる。
- 9・16 P地区：K地区との境になる畦畔は南北築地SA3860の旅跡である。23ラインで長石を數きつめた南北溝SD3790がある。PM23でK地区にのびるSD3770と結んで東へ流れる。土壙SK3787を検出。K地区：SD3715を本格的に掘りはじめた。遺物が比較的多い。
- 9・20 K地区：KR09付近のSD3715の両岸には杭を打ちこんでおり、橋SX3720が架けられていたことがわかる。これをはさむ東西の検出面は固く、道路SP3742に想定する。P地区：南辺で東西溝SA3740を検出。さきにK地区で検出している南北溝SA8238につながるものとおもわれる。PQ23で東西築地SA3810の構築状況を探るためにトレンチをいれる。築地削面の遺構検出面である

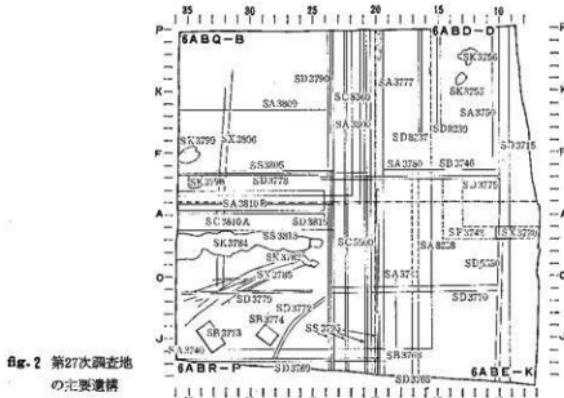


Fig. 2 第27次調査地
の主要遺構

第II章 調査概要

灰褐色砂礫層が、築地の下にもおよんでいることがわかる。

9・21 K地区：SD3715の発掘完了。P地区：18時から検出していた中央部の徹痕跡SX3785をほぼ掘りおえる。その痕跡の一帯はSD3784(のち土塙に変更)のうえにおよんでいることから、東西溝SD3784よりも新しいことがわかる。

9・22 P地区：西南隅で跡通りを北西・南東にとるSB3773を検出。これは平城宮造営以前のものとみられる。B地区：縦敷面で本格的な遺構検出を行なう。

9・24 P地区：北方で東西にのびるSD3784を掘りはじめる。南辺のSA3740にそって乱坑の痕跡あるが、跡群にそっているので水田に関係するようにおもわれる。B地区：32ラインに南北に走行する徹SX3806がある。

9・25 P地区：SD3784の北岸にそって東西群SA3818(のち足場に変更)があり、SD3784と重複するところでは溝のほうが古い。乱坑の痕跡は28ラインでとまる。SB3773と同じ方位をとるSB3774を検出する。B地区：32ラインにそって徹痕跡があり、これはP地区的SX3806と一連のものらしい。礎がつまっているので、造営時の遺構であろう。

9・30 P地区：PA20の凝灰岩暗渠SD3815の底石は瓦敷の上にすえている。この暗渠はSD3790とはつながらず、築地が2時期にわかれると可能性がある。

10・2 B地区：D地区との境に土壘状にのこる南北築地SA3800は築地回廊になるらしい。P地区：さきに検出した22ラインの足場と東で相対する南北足場を検出(SS3795)。

10・4 K地区：18ラインにそり黄色整地土の面から南北溝SA3741を検出。この溝は南側のSA3740と連結する可能性がある。

10・5 D地区：SA3777の北延長部の柱穴を検出しはじめる。

10・7 D地区：18~19ラインにかけて漆皮片が顯著に散布する面がひろがる。築地回廊の壁土であろうか。

10・10 B地区：P地区で検出したSA3800の西側足場SS3795を北に向って追跡。

10・12 K・P地区：写真撮影。

10・14 K・P地区：実測準備。

10・15 D地区：Hライン以南では縦層と暗褐色土をのぞき茶褐色土の面で遺構検出を行なう。

10・18 B地区：土塙SK3799から埴輪・須恵器など古墳時代の遺物が出土し古墳時代の遺構であることがわかる。

10・19 B地区：南寄りで東西溝SA3805を検出。これはSA3810をはさんでP地区的SA3818と対

応している（のち、この2条の溝は築地SA3810Bの前身である築地回廊SC3810Aの足場になることがわかる）。D地区：K地区から北へのびるSD3715を検出。その西岸に南北溝SA3750がある。K・P地区：実測開始。

10・22 D地区：発掘区南寄りにSD3715に注ぐ東西溝SD3775を発見。素掘の溝だが、DC13・DC14では側と底に安山岩を數いている。部分的に暗渠にしたのであろう。この北岸ぞいに東西溝SA3780を発見する。

10・23 D地区：黄褐色礎混り土で遺構検出をつづける。この地区的南半では黄褐色礎混り土層がなく、暗褐色泥土層になっている。

10・25 D地区：16ラインで南北溝SD3765を検出する。

10・29 B地区：遺構検出を再開。はじめに黄褐色土の面で東西溝SA3805を追跡する。

11・4 D地区：SA3777の西側で2列の足場SS3795を検出。

11・5 B・D地区：東西溝SD3775は上下2時期にわかれ、20ライン以西には暗渠の痕跡をとどめる。

11・8 B・D地区：写真撮影。

11・11 B・D地区：実測開始。

11・19 K・P地区：実測終了。補足調査開始。

11・24 K地区：SA3777の柱跡で根石跡路を3個所発見する。

11・27 K・P地区：写真撮影。

11・29 P地区：下層遺構の検出をはじめる。

11・30 K地区：SA3800を精査。犬走りをおおう赤褐色の整地土には少量の瓦片を含む。

12・1 K地区：18ラインと19ラインとの間で段がつき東に傾斜する。SA3777の基壇になるか。

12・2 K地区：南北溝SD3765を掘る。なかなか、木簡などとともに第2次内裏と同型式の瓦が多く出土した。

12・7 SD3815とSD3770の写真撮影。

12・8 B地区：SD3790は西方の縦敷面と同じ時期である。それに対して東西溝SA3805は縦敷面から掘りこんでいる。K地区：SK3730を発掘。

12・10 K地区：SD3770の木樋をとりあげる。建築部材を転用したもの。

12・22 D地区：SD3775の石窓部分を精査。

1・8 D地区：東西溝SA3780の柱穴はすべてまとまる。13ラインの柱間が広く門になるらしい。SD3715西岸の溝SA3750とは時期がことなるようである。

1・17 発掘調査完了。

B 第41次発掘調査

6ABE区M・P地区, 6ABR区Q地区, 6ABS区E地区

1967年7月1日～11月23日 (fig. 3)

- 7・1 表上の排水開始。
- 7・21 M・P地区：発掘区東辺から遺構検出をはじめる。床土下の茶褐色膠泥土(二番床土)を除き、黃褐色粘土の面まで下げる。
- 8・1 M・P地区：MM07～PE07の間で小柱穴が出現をはじめるが、まだまとまらず。
- 8・4 M地区：ML09以北で南北溝SD3715の輪廓があらわれる。
- 8・10 Q地区：QG22, QH22で根石を検出。南北に15尺はなれて存在し、回廊の側柱になる可能性がつよい。QH23・QL23に南北溝SD5588があり、ED22・QE22・QI22に東西溝がある模様。ED22の溝は木樁暗渠SD5560である。
- 8・11 M地区：ML20以北で南北柱列SA3777の柱穴が出現をはじめる。
- 8・12 M地区：20ラインにそろSA3777の柱穴が11分間、15尺等間で出現する。この柱穴は築地回廊SC5500の基礎に掘りこんだもので、柱根をとどめるものもある。Iラインの東西溝SD5563は上下2層に分かれ、下層に木樁暗渠が埋設されている。IIラインのSD5562も木樁の跡らしい、基礎葉成後にもうけている。
- 8・16 M地区：ML20付近で築地回廊SC5500の東限を探る試掘坑を設定。築地の崩壊土に想定される黄色膠泥土が、ML19～ML16で厚さ約10cm内外でひらがる。SD5563はML19で終り、黄色膠泥土から掘込込んだ開渠SD5564が東流する。
- 8・17 M・Q地区：ML19～QL21以北では、南北溝SA3777の西側に接して2穴で1組となる小柱穴列。東側にある南北溝SD5575、および溝に接した裏重複する小柱穴列を検出。MH16では東西暗渠SD5562がなお東方にのびる。
- 8・21 M地区：SD5563は柱の転用材らしい。
- 8・23 M地区：ML09～ML10以北で2条の南北溝SD3715, SD5530を発掘をはじめる。MS07付近では南北棟の小建物SB5520がまとまる。
- 8・28 M地区：MH08・MH09以北で南北棟の小建物SB5510を確認。東西溝SD5564のうえには南北溝SD5530が掘込まれており、SD3715に注ぐ。MG07・MG08では東方から東西溝SD5505がSD3715に注ぐ。
- 8・30 M・P地区：PS14～ME14に南北溝SD5559がある。その西側は盛土になっており、築地にともなり雨落溝の可能性がある。西方から流れてくる木樁暗渠SD5560はPC14で開渠SD5568となり、SD3715に注いでいる。
- 9・2 M地区：MM09以南のSB5510を検出。
- 9・11 E地区：SD5560の検出をはじめる。
- 9・13 E・Q地区：発掘区西辺を拡張する。
- 9・14 E・Q地区：扩張区において遺構検出を行なう。QI24以北で検出した南北溝SD5588は東西溝SD5566の上層につながって東へ流れれる。その東に接して流れれる南北溝SD5588は第27次調査以来、SC5500の西雨落溝に想定されている溝で、QH23でL字形の人間となる。ED23～QG23にあら南北溝SD5565は木樁暗渠で南北築地回廊SC5500を横断し、さらにBC23でSD5560と結合して東へ流れれる。この曲折部分に西から流れてくる東西溝SD5565が接している。SD5568は溝中に確が詰る、暗渠に想定しうる。ED24とQG24で、SC5500の側柱に比定できる根石がある。
- 9・18 Q地区：QR22以北で2穴で1対になる小柱穴列SS3795を検出。
- 9・19 Q地区：南北溝SD5588とSD5589は、北方から流れてくるのではなく、QM24付近で西方から流れてきたもの(SD5590・SD5591)。
- 9・22 Q地区：QR23・QR24以北で南北溝SD3790とSD5567を検出し、それとともに小柱穴列SS3795があらわれる。写真撮影準備。
- 9・23 写真撮影。
- 9・25 写真撮影終了。実測準備。
- 10・4 実測終了。
- 10・5 補足調査開始。
- 10・11 M地区：SD3715の西岸に小柱穴SX5540がならぶ。

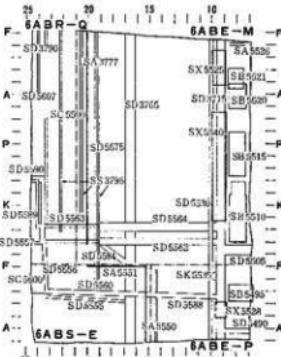


Fig. 3 第41次調査地の主要遺構

第II章 調査概要

- 10・21 M地区：16ラインで下層遺構にぞくする南北溝SD3765を発掘する。
- 10・31 Q・E地区：SC5600を横断するSD5561には前身の南北溝SD5556があり、それがSD5560の南にある東西盲溝SD5555に連結していることがわかる。
- 11・1 P地区：PS15～PE15、PE15～EE15に
- に曲って南方にのびる溝SA5550とSA5551があることがわかる。
- 11・8 写真撮影。
- 11・9 美測。
- 11・11 現地説明会。
- 11・13 再度の補足調査。
- 11・23 発掘調査終了。

C 第69次発掘調査

6ABP区A・B・D地区

1970年8月3日～11月21日(fig.4)

- 8・3 表上の耕土開始。
- 8・13 A地区の北辺とB・D地区の北辺とから遺構検出をはじめめる。A地区：厚さ約10cmの褐色混り土をのぞき遺構検出をする。この土層は整地土らしく瓦片などの遺物をふくむ。B地区：A地区と同じ様混り土をのぞく。D地区：礫混り土層がない。各地區ともすでに遺構出現。
- 8・14 A地区：北辺の一条通り沿いに根石をもつ深い柱穴が現われる。北面築地回廊SC8670の南側柱。AS27～AS31に3間分の柱列SA6635がある。B地区：柱穴が出はじめるが、いまのところまとまらず。
- 8・17 D・B地区：柱穴多く重複している。
- 8・19 B地区：BR29～BR34の北側で建物SB6655がまとまる。南北桿建物2桿か東西桿建物かは不明。Rラインの柱穴の上に東西溝SD6607があり、敷石をぬいた痕跡がある。D地区：東西に規則的にならぶ柱穴が多い。重複あり、建物規模など不明。A地区：床土の残土を除く。
- 8・20 B地区：BR28～BR34以北の柱穴は、2列にならんだ南北桿建物（のち1桿の東西桿建物SB6655となる）であり、その南面の柱穴は東西溝に重っている（東西溝に想定した柱列はのちにSB6660Bの孫廟となる）。D地区：Sラインの柱穴検出。2時期以上の重複があり、DS44～DS46では縁をぬいた根石状遺構を2箇分検出（のちにSB6611とSB6630となる）。DS40～DS40のSB6611の柱穴に重複する柱穴には径20～30cm大の石をつめている（SB6620の柱穴）。
- 8・22 B地区：Qラインで6間分の柱列を検出。さきにRラインで東西溝とした柱列は、SB6680Bの孫廟となる。
- 8・24 B地区：SB6665の柱穴はすべて出現。5間×3間の東西桿建物で、中央間に2列の柱穴を設けている。D地区：Rラインでも柱穴が重複し、新しいSB6620の柱穴では根固め石をとどめるものがある。A地区：床土耕土終る。

- 8・25 A地区：Cラインで7間分の東西柱列を発見（のちSB6663の南側柱となる）。BQ35～BR35に3条の東西溝（北からSD6607、SD6609、SD

6606）があり、いずれも敷石の一部と抜取痕跡をとどめている。

8・26 A地区：DラインでSB6663の身合南側柱を検出。北接する東西溝SA6624は、すでに検出している南北溝SA6623とAE33でT字形にまじわる。D地区：QラインでSB6610・6611（発掘時、南のSB6610と北のSB6611を同一建物にかんがえた）とSB6620の柱列がなお存続する。D Q48では新しい時期の礫石がのこり、その東4間分の柱位置では浅い礫石抜取痕跡がのこる（SB6630の身合南側柱）。

8・27 A地区：AB27～AB34のCライン以北の建物SB6663は、南北に窓がつく桁行7間の東西桿建物になる。AE31、AF31にはこの建物の東西に間仕切る柱穴がある。AE30から北へのびる南北溝SA6625を検出。B地区：QラインでSB6660の身合北側柱を検出。

8・29 A地区：AHラインで予測外の東西柱穴列があらわれる。SB6663の孫廟か別建物になるかは不明。D地区：Oラインで9間分の東西柱穴列を検出（SB6610の柱穴）。この付近から南は遺構検出面が一段低くなる。

8・31 A地区：SB6663は孫廟のある建物。Iラインまで足場がつく。AD35～AG35で西へのびる柱穴3間分をだす（SB6650）。B地区：BQ31～BQ36から南へのびる両廟付南北桿建物SB6622の存在を確認。D地区：今までに検出した建物は新旧2時期に大別できる。いずれも桁行9間の大建物。新しいSB6620はQラインが南廟となり、それ以南にのびない。北廟は発掘区外。古い建物SB6610・6611は棟間5間分検出しがまだ南へのびる模様。この建物は他に例をみない大規模な純柱建物になろう。

9・1 B・D地区：Oラインで地山と整地土との違いが東西に一直線に走る。つまり、Oライン以北は地山の上で、それ以南は整地土である。理由はいまのところ不明。

9・4 A地区：AM27～AM29に東方から北方へT字形に曲る素掘溝（SD6631・SD6632）がある。AM33～AM35には浅い素掘溝がある（のちに

3 調査日誌

東西棟建物SB6621の身舎筋の布臓地業となる。B地区：SB6622は桁行5間分を確認するが、南方は発掘区外になる。SI6640は3間×2間の東西棟建物となる。

9・7 A地区：AN27～AP27から西方に伸びるSB6669は、7間×2間の東西棟建物となり、SB6669とは20尺の間隔がある。D地区：37ライン上の南北石溝 SD6612は発掘区の南限までのびている。

9・8 A地区：南北軸SA6625はAP29で西方に折れ曲る(SA6626)。それとともにSA6625に平行するSD6632もAQ29で西方に折れ曲る(SD6633)。SA6626が重複する素掘溝SD6618を検出。この溝はSB6669の雨落溝であろう。B地区：SB6622は桁行6間以上となるがそれ以上は発掘区外となる。D地区：Lラインからは一段低く、頗著な遺構なし。このため、SB6610・6611は発掘区北限から8間分を検出したMラインでおわる。

9・9 A地区：一条通りの壁下で先に検出していたSC6670の板石の不足分を探す。B・D地区：Lラインのコンクリート水路の南側では遺構がなくなつて、瓦片をふくんだ浅い土壇が所々にあら。E・F地区：トレンチを設定する。

9・10 A地区：発掘区東限にある柱列(のちに南北軸SA6629になる)の北限は、発掘区外にのびる。F地区：柱穴が3穴出現するが、予想したSA6624の対象位置の辺ではないようである。E地区：柱頭によってSB6620が身舎7間×3間に15尺の四面崩をともなっていることがわかる。SD6610・6611は9間×9間分の柱穴を検出したが、さらに北方へのびる可能性もある。

9・11 本日で遺構検出を終え、写真撮影の準備にとりかかる。

9・17 写真撮影。

9・22 写真撮影。

9・26 現地説明会。

9・30 実測準備。

10・15 実測終了。補足調査開始。

10・19 B・D地区：○ラインで東西にのびる整地土の性格を探るためにDN42以西と発掘区東限にいたれたトレンチがほぼ掘りあがる。BN28～BO28では、約1.5m下降して北方の地山面との間に段(SX6600)を生じ、南面は礫敷面をなす。礫敷面に堆積が散らばる。DN43～DN46では開い黄色粘土の盛りあがりが出現した。DN44～DN45では礫敷となる。

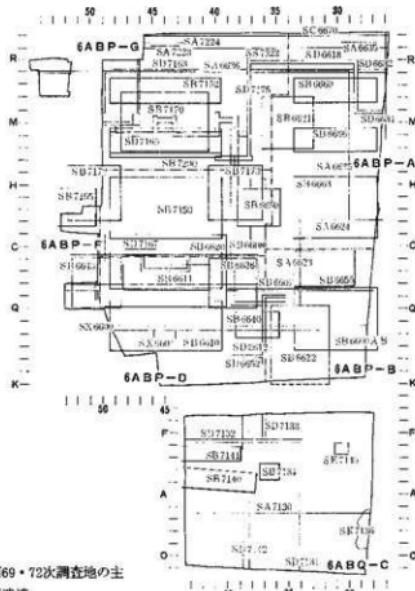


fig. 4 第69・72次調査地の主要遺構

第Ⅱ章 調査概要

10・20 B・D地区：SX6600の基部に埠をならべて積みあげた状況が明らかになる。本来は段の前面に撫拭風に積み上げたのであろう。DN43～DN46では階段の可能性を考え入念な精査を加えたが、黄色粘土の盛り上がりがバランスのうえにあり埠積も左右につながっているので除去することにした。SX6600を明らかにするためB地区にもトレーナーを派遣する。

10・24 B・D地区：下層遺構の実測。

D 第72次北発掘調査

6ABP区F・G地区

1971年4月16日 8月11日 (fig. 4)

4・13 表上の埠上開始。

5・17 F地区の南辺から遺構を検出をする。即八木部の残材の整理に手間どる。

5・21 F地区：南北玉石溝SD6608をFB39で検出し、Bラインで重複する古いSB6611と新しいSB6620の柱穴列が出現はじめめる。FC37・FC38で切石の凝灰岩が東西にならぶが、性格不明。

5・22 F地区：Cラインで新旧2時期の柱穴が重複している。新しい柱穴はSB6620の北廊。

5・25 F地区：Dラインで柱穴検出。SB6610・SB6611が北へ1間のび南北10間の建物になる。小柱穴の検出多し。

5・29 F地区：Gラインで柱穴列がならび(SB7150の身舎北側柱)、FE44・FP44に開口切柱の柱穴2つがある。SB6610・SB6611の南北柱間を8間とし、Cライン以北で目下検出している柱穴は、別個の建物に想定すべきことがわかる(のちSB7150となる)。SD6608はなお北上し、その東側は廻敷となる。FE39～FG39の柱穴は、SB6650の西側柱となり、第69次調査とあわせて3間×3間となり完結する。

6・1 F地区：HラインでSB7150の北側柱列ができる。また、それらにともなう小柱穴を多数発見する。SD6608はさらに北上し、FH39あたりから左右に浅い彫影をもつて来る。

6・2 F地区：Iラインで東西にならぶ小柱穴列を検出し、G地区：Jラインで9間分の柱穴を検出するが、東西両端の一間を除く柱穴には3時期の重複がある。中央の柱筋(のちSB7151Aの南側柱となる)が古く、北と南の柱筋(のちSB7170の南廊とSB7150Bの南側柱となる)が新しい。しかし、埋土の判別が困難で前後関係を認めた柱穴もある。

6・5 G地区：GJ38～GJ41に東西溝SD7177がある。この溝はSD6608よりも新しく、GJ38で北へ渡れてSD7175になる。

6・7 F地区：SB7150の足場である小柱穴を探し、第69次調査で発見しているSB6621が4間

11・5 B・D地区：埠積にそって礫を除くと、DO42以西で埠積にそう小溝SD6602がある。埠積の抜取痕跡か。DN44・DN45で2間×1間の獨立柱遺構SX6601を検出、階段か。中軸線は平城宮の中軸線にのるらしい。

11・8 D地区：SX6601の南に約30cm間隔でならぶ小柱穴列を検出。

11・15 奉摺終了。埋戻し開始。

×5間の東西建物であることがわかる。

6・9 G地区：Lラインで3時期の柱穴が重なっている。古い2時期の柱穴はSB7151A・Bの北側柱となる。新しい柱穴(のちSB7170の南側柱となる)は、さらに北へのびる複数Lラインの柱穴は溝状遺構SD7165を掘りこんだもの。この溝はGL40、GL44で北へ突出するが、いまのところ掘下げず。GL37で砾石埋戻痕跡を検出。第69次調査で発見したSB6621の西妻柱にあたる。

8・11 F地区：FD51～FD55にトレーナーを拡張する。

9・12 F地区：拡張トレーナーで、東方のSB6650と同規模に予定しうる建物SB7155の柱穴が出現。

6・17 G地区：40ライン以西に重複する2列の柱穴がある。新しい柱穴はSB7170の身舎北側柱であり、古い柱穴はSB7152の南側柱となる。

8・18 G地区：SB7170の北側の柱穴を検出。

6・19 G地区：GP40以西のSB7152の南側柱を検出。第69次調査地区から西へのびるSA6626の延長部を発見。またSA6626が重なる東西溝SD7163を検出する。F地区：FD49～FH49の拡張区でSB7150の西妻柱を発見し、この建物の桁行が9間であることがわかる。

6・21 F地区：FD50～FD53で東方のSB6650と対称位置に配置されている方形建物SB7155の存在を確認。G地区：SD7175はGQ37でL字形に東へ折れ、第69次調査で検出しているSD6623とつながる。この溝は上下2層にわかれ、上層は暗褐色土が埠積し、瓦片や土器片など庶民期の遺物を混じえる。下層は灰色礫泥土が埠積し、遺物をふくんでいない。

6・23 F・G地区：FG46以北を拡張して建物群の全体を露出することとし、表土耕土を開始する。G地区的Tラインで北面築地回廊の南側柱を検出する。

6・25 G地区：SA6626はGQ49までのび、さらに西へのびる可能性がある。GN49～GP49で南北溝SD7162を確認。GJ48～GO48でSB7170の西妻

3 調査日誌

柱列を確認。7間×4間の東西構造物になる。GJ49～GL49でSB7151、SB7226の西柱柱列を確認。GL48・GL49で東西溝SD7195がある。安山岩の石敷とおもわれるが、抜取痕跡しかのこっていない。

8・28 写真撮影。

7・5 写真撮影終了。実測準備。

7・15 G地区：古い溝状構造SD7165を検査。この溝は GL39・GL40、GL44・GL45、GL49の

3箇所で北へ方形に張り出しており、付根部に小柱穴がある。隣段かそれに類するものだろう。だとすれば、溝が2条にみえるのは…つが荒灰岩地層石の抜取痕跡で、他の南北溝の痕跡ともかんがえられる。

7・16 補足調査。

8・8 クレーン車で写真測量を行なう。

8・11 すべての調査を終了する。

E 第72次南発掘調査

6ABQ区C地区

1971年5月8日～8月11日 (fig.4)

5・8 発掘調査開始。赤褐色土の床土およびその下層の灰褐色土を出土。

5・12 灰褐色土の下にある黄褐色疊混り土の面まで出土しわかるが、2番未土らしくおもわれるのでもう一層下の灰色疊混り土まで下げることにする。

5・20 北辺から遺構検出を始める。疊混り砂質黄褐色土の面で遺構検出。石敷の南北溝SD7133を検出。安山岩の多くの抜きとられ、痕跡をとどめるにすぎない。CG32・CG35付近には風化した荒灰岩片が散布している。

5・22 東西溝SD7132はCE33で南へ折れ曲り、南北溝SD7131となって南下する。

5・26 碓敷面で全域の写真撮影。

5・28 碓を除き地山面で遺構検出を行なうことにする。

6・2 CC38・CD38以西で1間×2間以上の柱穴SB7141があらわれる。この柱穴は普通の柱穴ことなり、東西に長い長方形の彫形を掘り、南北12尺、東西20尺等間となる。CC35～CC37に2間分の小柱穴がある(のちSB7134となる)。類似の柱穴はCC42もある、そこでは瓦器片を混入しており、中世の遺構とおもわれる。

6・7 CA37・CB37以西で2間×7間以上の東西構造物SB7140がある。この建物は西北に振れている。Rラインで東西塀SA7130があり、発掘区を横断している。CR38で南北溝SA7130(のちSD7142となる)を発見する。

F 第75次発掘調査

6ABQ区C・D地区、6ABR区G地区

1972年4月1日～6月20日 (fig.5)

4・1 表土の出土。

4・12 発掘開始。茶褐色疊混り土を排除しながら、遺構検出にとりかかる。

4・14 G地区：南辺から遺構検出。Bラインで東西溝SD769がある。Gラインで東西塀SA3740が発掘区を横断する。GC38・GD38に南北溝SD

6・10 CR38で発見したSD7142は発掘区南限にまでびる。写真撮影。

6・12 写真撮影。

6・14 実測開始。

6・29 発掘区南限にトレンチをいれ、整地状況を調査。地山面は東方で浅く、西方で深い。

7・6 発掘区西限でもトレンチをいれ、整地状況をしらべる。北方では浅いところで黄色粘土の地山があらわれ、南下するにしたがって地山が深くなる。ただし、整地土には遺物が混入しておらず、時期をきめがたい。

7・10～8・3 発掘を休止する。

8・4 発掘西限から遺構検出を再開。整地土は2層にわかれ、上層が茶褐色疊混り土、下層が暗褐色粘土となる。上層には撒量の瓦片や埴輪片を混えるが、下層はまったく遺物を含んでいない。CE38でSD7142の北端を検出する。

8・5 補足調査開始。CQ28で大型の土塙SX7136を発掘する。中世の瓦器をふくみ、井戸の可能性が大きい。

8・6 写真撮影。

8・9 CD30で井戸SRT145を検出。井戸枠は抜かれているが、底部にはほぼ正方形の疊混り土がのこり、方形の井戸枠が組まれていたことが推測できる。なお、若干の遺物をふくむ埋土はきれいで、一気に埋めもどしたようである。

8・11 すべての発掘を終了。

7142がある。浅く辛うじて痕跡をとどめる。GB42以北に南北溝SD7760がのびる。

4・17 G地区：GF37～GF39に広がる土塙SK7762を検出。GG42・GG43付近でSD7760と重複する土塙SK7767がある。いまのところ両者の前後関係は不明。GC30～GG32に散在SX3785があ

第II章 調査概要

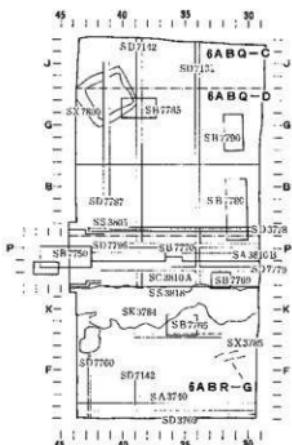


Fig. 5 第5次調査地の主要構造

る。赤褐色粘土に食い込み、暗灰色礫混り土が詰まっている。

4・19 G地区：G135・GJ34付近に掌大前後の玉石を敷いた石敷面がひらがる。Jライン以北、発掘区を東西に横切る大土壙SK3784がある。土壙の上部には凝灰岩片が混り、上面には礫敷が広がる。一応、下部の木炭層に達するまで掘り下げることにする。

4・21 G地区：SK3784の北岸沿いに小柱穴があり、それは第27次調査で検出した東西場SA3818の延長部にある（のち、両面墓地回廊SC3810Aの足場になる）。

4・24 G地区：SK3784の発掘が終わる。Nラインで発掘区を横断する東西場地SA3810の検出をはじめめる。GN34にSA3810にともなう南北場渠SD7799がある。暗渠は切石の凝灰岩製。GN29～

GN35に築地とともにもう1箇所がある。GM31、GM32で2箇所×2間の小建物SB7769を検出した。

4・28 G・D地区：GM41～GM43に屈曲する東西場渠SD7772がある。凝灰岩片が堆積しており、築地中央門SB7750の地盤石抜取痕跡と判明。5・1 C地区：中央門SB37750の柱穴を検出。DQ41～DQ43に北側の地盤石抜取痕跡SD7773がある。Pラインに築地SA3810の北側の雨落溝SD7776がある。この溝は玉石敷だったらしく、河原石の護岸をとどめる部分もある。

5・7 D地区Qラインに東西場渠SA3805があり、その北岸に接して東西場渠SA3805がある（のち、築地廻廊の足場になる）。DQ39、DQ40ではSD3778とこれに重複するSA7776がある。

5・10 D地区：暗渠SD7799から北方に向ってのびる南北場渠SD7131が出現しはじめる。

5・11 D地区：DB30・DB31以北の礫敷きを除くと、柱穴が出現する（のち南北場渠SB7780になる）。SB7750の規模を明らかにするため、G L43～DQ43の西側に鉛錠区を設ける。

5・15 D地区：G1ラインで南北場渠SD7787を、38ラインで南北場渠SD7142を検出する。

5・16 D地区：DD30・DD31以北の礫敷きを除いて柱穴を発見する。南北場渠SB7790。

5・17 D地区：DG40にSD7787よりも古い斜行溝がある。堆積土に須恵器・土師器、あるいは埴輪片をふくみ、小古墳のSX7800周囲に見られるらしい。

5・18 D地区：DG37～DH37以西に小建物SB7785がある。斜行溝を追跡すると、方形にめぐることがわかるSX7800。埋葬施設はない。

5・21 写真撮影の準備をはじめる。

5・24 写真撮影。

5・25 実測準備。

5・27 実測開始。

6・2 実測終了。

6・3 補足調査開始。

8・14 発掘調査終了。

G 第77次発掘調査

6ABR地区・G・J地区

1973年1月13日～4月23日 (fig. 6)

1・13 発掘開始。床土の残土を除く。

1・20 H地区：発掘区東限から遺構検出をはじめる。Cライン以北では暗褐色土（二番床土）を除き、礫敷面を出す。礫敷面の厚さは約10cm前後で北側へひらがる。H126・H127では東西方向にのびる凹みがあらわれる（のち東西場渠SD6590になる）。C～Hラインに瓦片の堆積が多い。T～Hラインでは、玉砂利を含む赤褐色の整地土がひろがり、一段低いSラインでは大粒の礫敷面になる。

1・22 G地区：GS～GAにかけて砾層下に黄色粘土が堆積する。このあたりでは砾層が薄く、黄色粘土上面まで下げて遺構検出。

1・24 II地区：G～Iラインにかけて依然として瓦片の堆積多し、瓦片を露出することにとつめる。Fラインでは黄色砂質土が東西にのびる。

1・25 H地区：HG38の礫敷面上に凝灰岩の切石片が散布、ただし旧位置にあらず。

1・27 H地区：D～Fラインの瓦堆積は、HD40

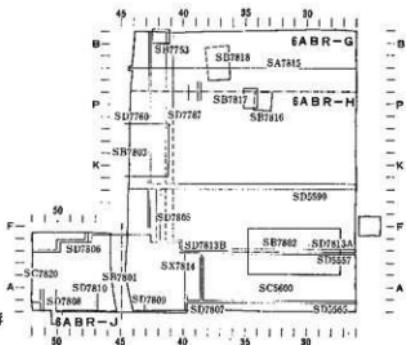


fig. 8 第77次調査地の主要造構

で北に折れ、また西方にのびる。門基壇 SB7801 の北東隅をしめすようである。

1・29 H地区：42ラインで南北溝 SD7760 を発見。HJ41～HN43で小柱穴を検出（のちSB7803の足場となる）。東西溝 SD6590の発掘をはじめる。あまり深くなく、辺縁に疊が下り、灰色粘質土が堆積する。HD43・HD44に門基壇 SB7801 の北張出し部があらわれる。階段になるか。北面の基壇地盤石抜取痕跡には青灰色粘土が堆積し、处处に大型の凝灰岩片が散布する。HC40から東にのびる築地回廊 SC5600の雨落溝は瓦敷の下にあるらしい。HE42には両側に玉石をたてる南北溝 SD7805があり、これは目下検出中の礎敷と同時期である。

1・31 G地区：GJ41・GJ42で先の第75次調査で検出した小建物 SB7753の南半部を検出。H地区：HJ41～HN41以西で発見した柱穴は、東西3間以上、南北4間の大型建物 SB7803となる。身舎の柱穴はなく、身舎には礎石を据えたことを想定しなければならない。

2・1 瓦片の散布状況を記録するため、写真測量の準備を行なう。

2・2 バルーンで写真測量。

2・3 航空写真測量の準備。

2・9 航空写真測量終了。

2・13 H地区：HP26・HP27で井戸らしい大型の土壠があらわれる（のち、東西建物 SB7802となる）。HC28～HC30に築地回廊の北側柱位置をしめす根石があり、方形掘形内に玉石の根石がのこる（のちに、SB7802にともなう根石であることがわかる）。HT26～HT32で小柱穴を検出。

2・14 H地区：大型土壠が掘立柱建物 SB7802 の構成であることがわかる。柱抜取痕跡には木簡などの遺物が混入している。HD28～HD23では、

Cラインの根石と柱筋を備える3間分の根石列がある。

2・15 H地区：HB27～HB35でも SB7802の南側柱を発見する。これによって、5間×3間の總柱建物になる。

2・23 H地区：SB7802の柱位置をすべて確認する。この建物の南側柱列は築地回廊 SC5600の心と一致しており、築地回廊の一郭を改修して増築したものようである。HC37で玉石敷の東西溝を検出。SC5600の北雨落溝にあるらしい。HT35付近で発見した東西溝は基壇地盤石の抜取痕跡であろう。

2・26 H地区：HC37で SC5600の北側柱の根石を発見。HC38・HC39に SC5600の北雨落溝 (SD7813) がのびている。

2・27 H地区：北雨落溝に南接して基壇の地盤石抜取痕跡がある。

2・28 H地区：南面中央門 SB7801を精査する。削平され、根石など柱位置を示す遺構はない。H S41で SB7801の南東入隅部を検出。地盤石抜取痕跡と基壇との違いがはっきりとあらわれる。

3・1 H地区：SB7802の北側と西側に大粒の礎敷面があらわれる。軒の出の想定位置と一致し、雨落溝をかねていているらしい。

3・5 G地区：3月2日以来、H地区的Jライン以北を地山面まで下げはじめたが、本日になってG地区41ラインで南北溝を発見する。下ソ道の側溝 SD7787の位置にある。J地区：SB7801の西半分を検出することにしJ地区を拡張する。

3・7 G地区：GR36・GR37以北に小建物 SB7816がある。いざれの柱穴にも礎が詰り、礎敷の後期にぞくすることがわかる。

3・9 J地区：JD46付近に凝灰岩片が散布。基壇の地盤石ないしは階段の残石か。

第II章 調査概要

- 3・16 ヘリコプターによる写真測量および地上からの写真撮影をはじめとする。
- 3・20 H地区：写真撮影に平行して遺構検出。SB7802建設以前のSC5600の北雨落溝SD7813が現われる。底部に掌大の礫をしき、基壇側にやや大きな礫を積む。北岸はなく、小課敷面に移行する。
- 3・23 H地区：SB7801の隣段東北隅で下層の礫敷面があることをしめる。HE43付近に幅約80cmの凝灰岩痕跡があり、その北方に礫敷面がひろがる。SB7802の柱抜取跡の調査をはじめとする。
- 4・11 実測完了。
- 4・14 補足調査開始。トレーナーをいれ、SC5600およびSB7801の基礎構造をしらべる。HT38でSC5600を横断する縁をつめた盲崎渠SD7807を発見。SB7801の掘込基壇の底には大型の礫を多く。
- 4・23 発掘調査終了。

H 第81次東発掘調査

6ABO区E地区
1973年4月12日～7月18日 (fig. 7)

- 4・12 表土拂土の開始。
- 5・21 遺構の検出開始。
- 6・18 EK83付近で凝灰岩切石暗渠SD8077を検出する。この暗渠は上層 SK8079 を掘立てたのちにつくられたもの。
- 6・20 第7次調査であきらかになっている東西棟跡物SB321の西支柱が出現する。
- 6・21 発掘北辺でSB321が重なっている東西石敷溝SD130が出土はじめる。
- 6・25 EK76以西で東西にのびる溝状の遺構があらわれる（のち、溝ではなく連続する土塗SK8077, SK8079, SK8080となる）。
- 6・28 Jラインに想定される東西築地SA8100があらわれはじめる。築地の部分が高まり、その南北が土塗状の凹みになる。EJ69には間に想定しうる1対の柱穴があるSB8101。

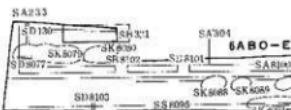


fig. 7 第81次東調査地の主要遺構

- 7・4 Iラインの疊層をはずすと東西に長い不整形の土塗となる。
- 7・7 写真撮影。
- 7・9 実測準備。
- 7・10 実測開始。
- 7・12 補足調査開始。
- 7・18 写真撮影。発掘終了。

I 第81次西発掘調査

6ABO区P地区
1974年1月7日～2月16日 (fig. 8)

- 1・7 遺構の検出開始。
- 1・11 発掘区東限の合母黃褐色土面で遺構検出。Jラインに東西築地SA109があり、その南北に倒溝がともう。
- 1・14 PL26で柱穴を検出するが、それはすでにあきらかになっている南北塙SA120の南端にあたり、東西築地SA109にとりつく。発掘区西限でもSA109とその南北倒溝がではじめる。
- 1・18 発掘区北限では、第2次調査で発見している東西棟跡物SB131の南側柱穴が出る。

- 1・28 すでに検出しているSB145の東南隅柱穴を再度掘りあげる。
- 1・30 築地北側溝の堆積は一様でなく、溝の堆積にいくつかの溜りを生じている。
- 2・1 写真撮影。
- 2・2 実測。
- 2・12 補足調査開始。
- 2・15 この調査地は全体が盛土地であるため、トレーナーをいれて敷地状況を調査する。
- 2・16 発掘調査終了。

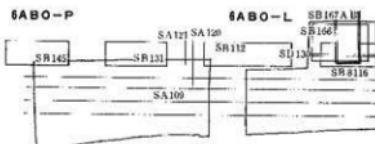


fig. 8 第81次中・西区発掘地の主要遺構

J 第81次中發掘調査

6ABO区I地区

1974年6月12日～7月23日 (fig. 8)

- 8・12 遣講俊山開始。

8・18 第2回調査であさらかになつてゐる東西棟建物SB166、およびそれが重複する南北棟建物SB167の柱穴を地山面で出す。

8・19 Nラインによる東西玉砕敷設SD130、およびその南方にひろがる礫敷が出現する。礫敷面を切込む新しい東西棟建物SB8116を掘りあげる。

8・24 Jラインの東西築地SA109とその南北の側溝を追索する。合壁茶褐色の整地土をはすすと土塙など遺構の輪郭があらわれる。

8・28 SA109の南北側溝は、溝というよりは不規形の土塙が連続した形をとる。南側溝からは溝に落しこんだ石碑2個がでる。

7・4 LG14以西では暗褐色の整地土が次第に厚く堆積しており、この土を除去しなければSA109とその側溝があらわれない。19ライン以西の観察では、さきに広い土壌状の落ちこみがあり、ある時点において黄褐色土で整地し、築地SA109と南北の側溝をつくったことがわかる。

7・12 写真撮影。

7・13 実測準備。

7・14 実測開始。

7・18 実測終了。

7・19 補足調査開始。SA109は倒溝だけでなく、築地本体も2時期にわかれると可能性が出てきた。

7・20 Mラインの礫敷面の下からSB166の南面柱穴が出現する（発掘終了後、SB166が礫敷面を掘込んでいるのではないかという意見がでた）。写真等の記録によってSB166のほうを新しくした。

7・23 案内調査終了。

K 第87次北發掘調查

6ABP区A地区、6ABC区U地区

1975年7月2日≈10月2日 (fig. 9)

- 7・2 発掘調査開始。

7・11 A地区：発掘区西邊で、すでに第69次調査で検出している、SB6663・SB6666・SA6624の柱穴を検出する。

7・12 A地区：第69次調査で検出しているSB6669、SA6629の柱穴を検出する。

7・22 A地区：西方から黄褐色疊理土の面で遺構検査を行ない、次のような遺構を検出した。
 27ライン上に南北堀塁SA6629を15間分、AM18～AM27で東西堀塁SA6617を9間分。

7・24 A地区：AM17～AM28に東西溝SD6631、AE18～AE28に東西溝SA6624がある。

7・28 A地区：AJ23～AJ25E以北に南北棟建物SB8210がある。AN23～AS23で東西棟建物SB8222の東西柱列を、AF4～AK24で東西棟建物SB8224の内裏柱列を検出する。

7・29 A地区：AP20～AR20以西で2棟の東西棟建物SB8218A・Bを重複している。ともに2間×5間の建物で、南北にずれており、同規模建物を検出されたものとおもわれる。SB8210の奥約5m

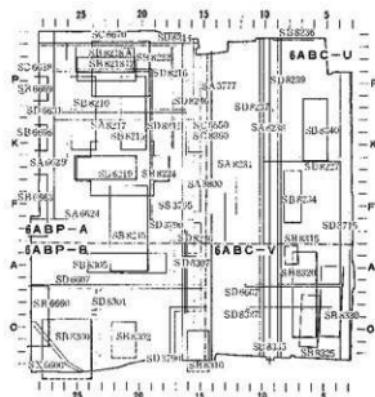


fig. 9 第87次調査地の
主要構造

第II章 調査概要

に、柱跡をそえる同規模の南北棟建物がある。

7・30 A地区：北辺の東西棟建物SB8222が、南北廊付きの4間×5間の建物であること、その南方の東西棟建物SB8224も同規模建物であることがわかる（ただし、のちにSB8224には妻側にそれぞれ2間の廊がつく）。AD19～AD22以北で南北3間以上、東西3間の純柱建物SB8245を検出する。

8・4 A地区：AH20～AJ20以西で東西棟建物SB8219が2間×5間でまとまり、同位層で重複しているSB8224よりも古いことがわかる。

8・8 A地区：15～16ラインで南北にのびる黄色砂礫土を東西棟地回廊SC5600の基礎上に想定する。

8・12 U地区：発掘区東辺で南北溝SD8215を見つかる。

8・13 U地区：UF05～UH05で土塁SK8235が出現しはじめる。この付近に遺物多し。UJ04・UJ05でSD8215に注ぐ東西溝SD8227を発見。

8・14 U地区：4ライン以西には土壠状の遺構がいくつもあり、凹凸が著しく、木炭や土器片が多く出土する。

8・19 U地区：10ラインに南北溝SD8237があり、さらに発掘区外にのびる。

8・25 U地区：14ラインに南北溝がある。灰色砂層と褐色漂泥土が互層になり、遺物を含んでいないが、ちょうど水田時の地窓にあたるので耕作用の水路跡ともいわれる。

8・26 U地区：14ラインで南北溝を8間分検出する。柱間は15尺で、第27・第41次調査で検出した南北溝SA3777の延長線上にある。

8・27 A地区：16ラインでSC8360の西側柱列を検出。約12尺間隔で根石をとどめるが、AE16・AF16の柱間は15尺と他より広く、その東側約12

尺の位置にある柱穴がSC8360の心になるらしい。SD631はAM16で南におれ、AJ16でさらに東に折れ、凝灰岩切石の暗渠でSC8500をくぐりぬけている。東西溝SA8217および東西溝SA6624が、それぞれ16ラインで終結していることがわかる。

8・28 U地区：UD13～UG13、UE12～UI12でそれぞれ南北溝SA8229・SA8231を検出する。

8・30 現地説明会。

9・1 写真撮影準備。

9・2 写真撮影。

9・3 写真測量準備。

9・4 写真測量。

9・5 徒足調査開始。SD8215を掘り下げる。各時期の遺物が混在する。

9・9 A地区：AT23～AT27で北面築地回廊SC8670の南側柱の根石を3間分検出。AT27ではSA6629と重複しており、側柱列のほうが古いことがわかる。U地区：9ラインで南北溝SD8239を発見する。

9・10 U地区：UD07・UD08以北で2間×6間の南北棟小建物SB8234がまとまる。

9・11 U地区：UI04～UI04以北で南北棟建物SB8240が出現しはじめる（のち2間×5間の規模が判明する）。

9・18 U地区：7～11の間、Lライン以北に大土塁を想定しうるが、掘り下げないことにする。

9・19 U地区：9ラインにそって発掘区を南北に貫通する南北溝SA8238は、都合17間分検出したことになる。

9・22 実測開始。

10・1 U地区：北辺で東西柱列SA8236を4間分検出する。

10・2 すべての発掘調査終わる。

L 第87次南発掘調査

6ABC区U・V地区、6ABP区A・B地区

1976年1月6日～3月25日 (fig. 9)

1・8 発掘調査開始。床土の挿入。

1・24 V地区：遺構検出開始。10ラインで南北溝SD8237を検出。

1・26 V地区：9ラインで南北溝SA8238が出現しはじめる。B地区：第69次調査で検出した東西棟建物SB8660の東妻柱を検出。

1・27 V地区：8ラインで南北溝SD8239を発見。B地区：発掘区西北隅で第69次調査で検出した東西棟建物SB8663の南東隅の柱穴を検出。また、Eラインにそう東西溝SA6624を再掘しはじめた。西方からの東西溝SD6607が出現しはじめる。

1・31 B地区：BM23～BM28以北で南北棟南北行建物SB8300の桁行3間分を検出する。南方は

水路によって破壊されている。東廊に接して南北溝SD8301がある。

2・2 B地区：第87次北調査で発見した南北棟純柱建物SB8245がSラインでおわり、7間×3間の規模となる。

2・6 B地区：BO20～BO22以南で南北棟建物SB8302が現われるが、桁行2間分を除く南の部分は破壊されている。

2・7 B地区：BB17以北に南北に帯状にひろがる疊敷面があり、部分的に瓦堆積をとどめる。築地回廊SC5500の雨落溝か。

2・9 B地区：BS18～BB18以西で東西棟建物SB8305がまとまる。2間×7間の規模だが柱穴

3 調査日誌

は小さい。

2・10 B地区：写真撮影。

2・19 V地区：14ラインで南北塗 SA3777を検出するが、VM14では他の柱穴が重複している。UC06以北で土塗SK8316を掘り下げる。この付近には不定形の土塗が多い。

2・20 V地区：SD8239とSD3715との間で、3棟の南北棟建物がまとまる。東側のSB8330がもっとも古く、有行の2間ごとに間仕切柱をおく。つぎのSB8320は2間×7間の比較的大きな建物で、北から3間目に間仕切柱をおく。

2・21 B地区：16ラインで南北塗を検出するが、これは南北塗地 SA3800の西雨落溝に比定し、その西側に接して築地回廊 SC8360の西側柱列の根石が山はじめる。V地区：VM14・VN14以西に東西2間、南北2間以上の柱穴があり、南北塗地 SA3800に開く門 SB8310に想定される。なお、柱穴の重複関係からすれば、築地回廊 SC5500、SC8360よりも新しい時期になる。

2・24 B地区：BM17以北で底に縫を敷いた南北溝 SD3790が出現する。BP17で東に曲り、築地

回廊SC5500の基壇を暗渠SX8311で通りぬける。SC8360の側柱が重複しており、SC5500のほうが古いことがわかる。東西溝 SD6607はBR16で東石積みを終わり、SA3800の基壇を暗渠SX8309でくぐりぬける。

2・26 写真測量の準備をはじめめる。

3・4 雨天のため延々となっていた写真測量が終わる。写真撮影開始。

3・8 先日の写真測量は欠陥したため、本日再度撮影する。午後、現地説明会。

3・9 补足調査開始。BO28から東にのびる下層の跡地溝 SX6600を発掘しはじめる。

3・11 BN25以北で東西棟建物 SB6660の東階段らしき柱穴があらわれる。堆積壁は東へ直進せず、BO28から東南方へ斜めにのびている。

3・22 堆積塗壁が完全に露出したので、クレーンによる写真測量を行なう。

3・24 写真撮影。

3・25 本日ですべての発掘を終り、埋戻しに着手する。

M 第117次発掘調査

6ABD区C地区、6ABQ区A地区

1979年9月17日～1980年1月12日 (fig.10)

9・17 表土の耕土開始。

10・20 A地区西辺から遺構検出開始。黄褐色疊に部分的に灰白色疊を覗える整地土の上面で遺構を検出することにする。西辺中央部で第72次調査で一部検出した土塗が出てはじめる。

10・23 AE25に東方にのびる2条の石列があり、溝とおもわれる (SD9236)。内には暗褐色粘質土が残る堆積。AK22に平瓦を敷いたところあり。

10・26 積敷面を東方に追う。16ラインの築地に近づくにつれて高くなる。

10・28 南北築地 SA3800の表土を除く。保存が

よく、高いところで遺構面から70～80cm突出している。

10・30 16ライン沿いに南北にのびる築地柱柱痕跡を検出しはじめる（のち東面築地回廊 SC5500の足場であることがわかる、SS3795）。AH17で南北溝を検出（のち、SC5500の西雨落溝 SD3790となることがわかる）。

11・1 築地北端部の西側に南北溝あり、両岸に瓦と石をならべるところがある (SD8226、のち築地SA3800の雨落溝と判明する)。AO17付近に南北に長い土塗 SK9226あり、内に凝灰岩の断片

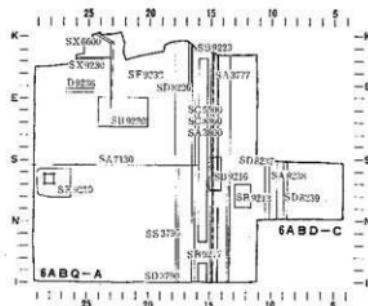


Fig.10 第117次調査地域の主要遺構

がある。

11・5 14ラインで南北溝 SA3777 の柱穴が山はじめる。その西側に築地回廊 SC5500 の足場 SS3795が2穴1組となって南北にのびる。

11・6 SA3777の柱穴出揃う。ただしAP17付近には柱穴がなく、門になる模様。

11・7 13ライン南部で南北溝 SD6575を検出。西岸は地川から掘りこむが、東岸は瓦片をふくむ整地土から掘りこんでいる。足場 SS3795の柱穴がSD6575に切りこんでいる。

11・10 C地区のN～S、5～10ラインの間を拡張することにした。

11・12 17ラインで、足場 SS3795の柱穴と南北石敷雨落溝 SD3790を追跡。SD3790のAB17以北は削平されて消失している。

11・14 SD3790以西の礎敷面を精査する。AA21に方形土枠SK9231があり塙がつまっている。AB20の北西に東西棟の独立柱建物あり、SB9220は梁間3間で北廊がつく。桁行は現在4間目を検出中。柱抜取痕跡はバラス面からみえ、柱脚形は地山まで下げねばみえない。

11・15 SB9220の桁行が5間で終るのを確認。AD23以北の23ラインに段差があり、試掘の結果その線上に埠積が存することがわかる。つまり第87次調査で検出した埠積痕跡 SX6600がこのあたりでは南北方向の鉄道となる。

11・16 SB9220の23ライン以西では礎敷の上下層の差異がよくわかる。下層の礎敷は粒搾いの疊で、その上に瓦片をふくむ土層と黄褐色粘質土が堆積し、その上に上層の疊がしかれている。

11・18 AH23～24を拡張することにした。

11・20 AP27の土塹（のち井戸SE9210になる）の輪郭をほぼ掘りあげる。AH22の拡張区では人頭大の石が東西にならぶ、第II期の石積礎壁 SX9230か。

11・2 AH22の拡張区をさらに北へのばすこととし、構内道路を除去はじめめる。C地区的拡張区では、9ライン以西で南北溝 SD8239、南北溝 SA8238、南北溝 SD8237を検出し、第87次調査で

検出した連構がこのあたりまで及んでいることがわかる。

11・22 AH22でSX6600が南へ折れ曲る部分を発見。地山を削りだしている。その南の整地土からさきに検出したSX9230までは連構がなく、石積を第II期の礎壁としてよいようである。C地区拡張区をさらに東へのばすこととした。

11・26 C地区拡張区では北東から南西にのびる2条の溝以外に遺構なし、この斜行溝からは新しい磧器が出土し、水田時のものとみられる。

11・29 写真撮影。

11・30 写真撮影。SX6600の南延長部分の端は抜きとられて、抜取痕跡のみ。

12・1 現地説明会。

12・3 土壌とみていたSE9210は、その外側に方形の掘形をともなっている。

12・7 空中写真測量。造方実測の準備。

12・10 実測開始。

12・14 実測終了。補足調査開始。

12・19 築地SA3719をN～Sまで、除去することにした。SE9210を下げる。

12・21 SE9210に木材の井戸枠のあることがわかる。SX9230の右列を西に追う。東側はSX6600につきあたることを確認。石敷雨落溝 SD3790は上・下2層にわかれる。下層溝に切りこむ土槽もある。

12・24 SE9210の井戸枠は、断面形が三角形の材を用い、内法東西2.3m、南北2.2mの蓮籠組にする。築地の一筋を掘り下げる過程で、寄柱跡らしいものがあらわれる。CR10にトレンチを入れ、第27次調査で検出した南北溝 SD3765がこの地域におよんでいないことを確かめる。

12・26 写真撮影。補足測量。

1・8 東西溝 SD9236が上層礎敷面から掘りこんでいることを確認。AK17でのSD3790は間層をはさんで2層にわかれ、瓦片をふくむ土槽の柱穴は下層礎敷面でおおわれている。

1・10 井戸実測。土層実測。

1・12 井戸枠の取上げ終了。発掘調査終了。

第Ⅲ章 遺 跡

1 遺跡の形成

平城宮朱雀門内の北方には、奈良時代の造構とかんがえられる建物跡の土壇や築地痕跡に比定できる土壘状の地物があり、それにしたがって水田の地割りにも規則性がみられた。朱雀門の北250mのところからはじまる東西210m、南北280mの地域、その北側に接する東西180m、南北100mの地域、またその北に接する方180mの3地域に大別することが可能であった。これらの地域が方約1,000mの平城宮の中軸線上の好地を占めていることから、当調査部では南から第1次朝堂院・第1次大極殿・第1次内裏に想定し、聖武朝の平城遷都以前の中心的な宮殿跡に推定してきた。今回報告する地域はそれらのうち、北方の大極殿・内裏想定地域に相当し、そのほぼ東半分とこれに接する東側の幅約40mの地域である。

発掘調査の結果、この地域は周囲を築地回廊でかこみ、全体の約2/3にあたる南方地域を建物のない広場とし、北辺の約1/3地域に建物が林立する状況があきらかになった。また、検出遺

調査前の推定

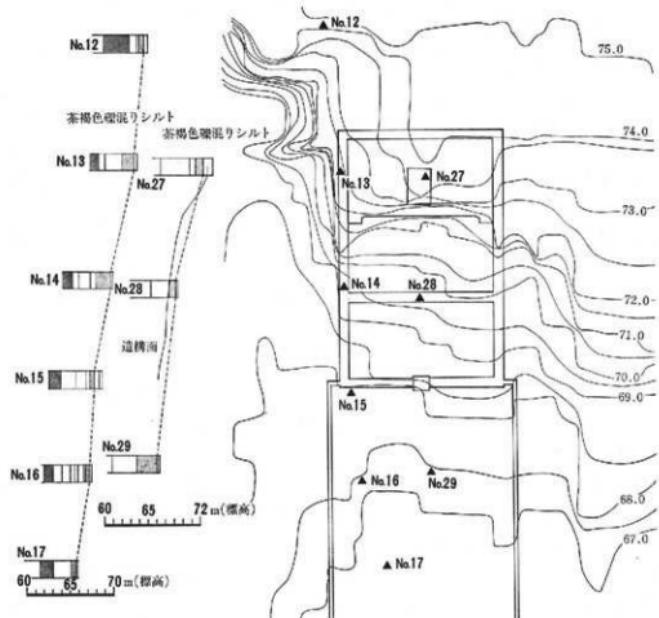
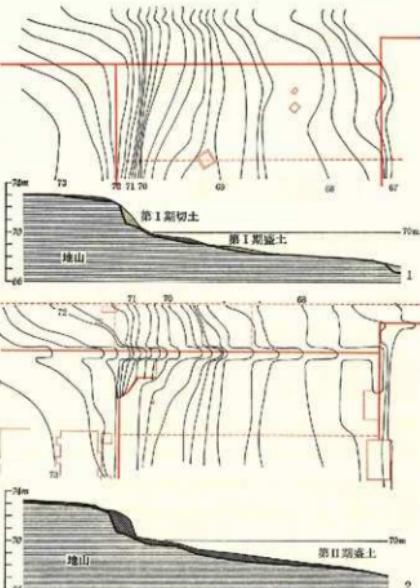


fig. 11 現状地形とボーリング調査

第三章 遺 跡

構は大きくわけて奈良時代前半の第Ⅰ期、後半の第Ⅱ期、平安時代の第Ⅲ期に大別でき、各時期ごとに個性豊かな建物配置をとっている。それらのはか、平城宮造営以前の遺構もあった。ここ

調査地の区分では1：門と回廊域、2：聚合地区（6ABPK）、3：広場地区（6ABQ、6ABRJK）、4：東外郭地区（6ABC、6ABD、6ABEJK）、5：大膳職地域（6ABOJK）にわけて、それぞれの造構を第Ⅰ～第Ⅲ期にわけてのべることにした。なお、地域の呼称については從来からよびわけている第1次朝堂院・第2次朝堂院、第1次大極殿・第2次大極殿はそのままのこし、第2次内裏は單に内裏とよぶことにした。



A 発掘前の地形 (PLAN 1:2 PL. 1)

調査地は平城・佐保丘陵などの東西に連なる小丘陵の南麓に位置し、北から張り出す標高68～74mの台地を呈している。西側は北西方の御前池・佐紀池につながる谷筋で画され、東側は内裏・第2次大極殿地域との間によこたわる浅い谷筋によって画されている。北部の1/3地域(殿舎地区)は、もっとも高く南方地域と2mほどの比高差があり、西側の低地より約4m高い状況を呈している。また微地形として、殿舎地区と広場地区が接する東西端の部分は南にのびる土堤状の高まりとなり從来から築地痕跡に比定されてきた。そして、土堤痕跡をはさんで内と外へ斜めに下がる地割りがみとめられた。広場と回廊の地域では、東南から西南方向に傾斜している。そして南の朝堂院地域との間に約50cm内外の落差がある。灌水用の水路は、殿舎地区の南辺を東西にぬけ、この地域の中軸線上を南下する水路と東外郭地区の東辺を南下する水路とに分流している。

調査地域の土質調査は、発掘調査時の所見と1961・1962年のボーリング調査結果によってあ
士 賀 きらかである。すなわち、砂礫・砂・シルト・粘土が厚く堆積している大阪層群相当の層が下
部にあり、丘陵部では上部を不整合な新期洪積層の礫層が覆い、丘陵の南麓からは沖積層が層
厚1~2mで南へいくほど厚く堆積している。遺跡は北部では洪積層の礫層上、南部では沖積
層上に形成されていることになる(Fig. 11)。

1) 「平城宮整備報告」1979, p. 3

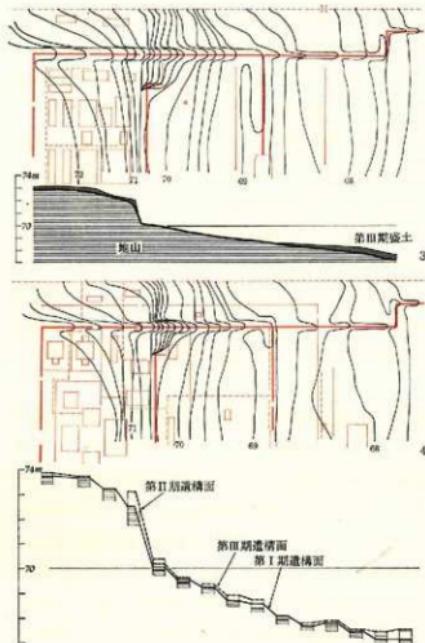


Fig. 13 第1次大規模地域の地形変遷(2)
3. 第Ⅲ期 4. 第Ⅱ期

平城宮造営以前 (fig. 12-1) 肇倉地区と広場地区との間 (ボーリング No. 13-No. 14, 27-28, fig. 11参照) で、遺構面および下部の土層が他の調査地点にくらべて急傾斜になっている。すなわち、造営以前にも、現況の地形に似た形で北から南びる台地の張出しがあり、肇倉地区的南辺付近に段差があったことが想定できる。造営前の地形図作成にあたっては、遺構面から旧地山面の標高を抽出し、造営時に埋め立てたであろう下ツ道東側溝 SD7787 の溝底の高さで修正して、標高点を等高線に置きかえた。その結果、地形全体としては現況地形と類似することになった。

造営以前の地質は、肇倉地区では赤褐色粘質土であり、広場地区北半では礫まじりの黄褐色粘土を主にする。広場地区的南半では、黒色粘土が堆積する浅い流れとともに小さな谷筋があり、そこに造営にともなう木材の削り屑などが堆積している。

第Ⅰ期 (fig. 12-2) 第Ⅰ期の遺構検出手は、肇倉地区においては赤褐色粘土・褐色礫面であり、広場地区北半 (6ABQ区) では整地層の黄褐色礫面、広場地区南半 (6ABR区) では暗灰色粘土・灰色礫層の整地層である。これら整地層の標高を抽出し、後の整地層削平状況を東面築地回溝の勾配

溝西雨落溝 (SD790) と中央南北参道東側溝 (SD7142, 勾配1/70) の溝底高によって修正し、等高線図をおこした。

造営前の地形では肇倉地区と南面築地回廊 (SC5800) との比高差 5.5m、勾配1/45であり、平城宮中央部南北地形の勾配1/80にくらべるとかなり急であった。この段差を利用して、肇倉地

B 古代の地形

以下で各時期の地形を復原するわけであるが、それはつぎのような手順で行なった。発掘地域の土層図によって、地山 (平城宮造営前の地形) と各時期における整地層の厚さを基礎資料とし、ボーリングによる土質調査を参考にした。各時期における旧地形の復原

整地層の厚さは fig. 12・13 の断面図でもわかるように後世の削平が著しいため、旧地形を把握しえない部分も多い。そこで現況の地形図を基本にして、各時期の溝底面の高さ (原則として北から南へ、西から東へと地形に準じて流れる。上部の遺構が削平されても、溝底勾配によって等高線間隔を調整できる) で修正を加えながら等高線を変更し、等高線間隔 25cm で各時期の地形図を作成した。

埠積塹壁 区の南縁に埠積塹壁 SX6600 を設けて上下二段の土地を造成している。據築の構築にあたっては、中央部で約100m幅の切土を行ない、東面築地回廊付近では旧地形をのこして斜道 SF9232A としている。埠積塹壁の高さについては、検出した據築高と東面築地回廊雨落溝 SD3790 の底差によって2.2m前後(標高72.8m)に復原できる。SD3790の溝底勾配をみると、殿舎地区での比高は1/60～1/70の勾配であり、斜道 SF9232 の部分(長29m)では1/30の急勾配となり、SF9232 の裾から約40m南までは1/35となる急勾配をとり、それ以南では1/60～1/70の勾配を呈して據築の高さ いる。こうした溝の勾配によれば、據築の高さ 2.2m は SF9232A で 1m の段差を、それ以南 40m で 1m の段差を処理していることがわかる。すなわち、広場は水平面をなすのではなく、北東方から南西方に向ってゆるやかに傾斜していたのである。

殿舎地区と広場地区との整地は、凹地表に合せて若干の盛土と切土を行ない、平坦に整えたのち一面に礫(厚さ20cm前後、下層礫敷面)を敷きつめている。広場地区の南半では浅い谷筋を黒色粘土を主にして厚さ0.15～1mで埋立てて平坦な土地を造成し、上記の礫をしきつめている(下層礫敷面)。

第II・第III期 (fig.13) 第II期の遺構は、殿舎地区では黄褐色礫敷面、広場地区では暗灰・黄褐色礫敷面(上層礫敷面)で検出した。第III期の遺構検査面も大体第II期と同じであるが、広場地区では茶褐色礫混りの整地面が覆うところがあった。つまり、第III期には大規模な地形変更是行われず、第II期の地形に準じているとみてよい。整地層の標高を、第II・第III期の溝底の比高で調整して地形図をつくった。第II期におけるもっとも大きな整地は埠積塹壁 SX6600 をやめて前方15mにわたって盛土し、石積塹壁 SX9230 を積みあげたことであり、それが第III期ままで存続する。新しい據築の高さは、残存する最下段の玉石と殿舎地区礫敷面(上層)との比高、および殿舎地区から下の広場に流れておちる第III期の3本の南北溝(SD8301, SD6659, SD6612)によってきめた。その結果、據築の高さは1.6m前後と第I期にくらべて若干低くなったようである。3本の南北溝はいずれも第I期のSX6600を過ぎる位置から1/30の急勾配となる。それは第I期の斜道 SF9232A の勾配と等しく、SX9230の構築に際して、SF9232A の勾配を基準にしたのではないかともわれる。この時期の斜道 SF9232B は段差が低くなったこともあり、SX9230 から50m南の間で西南へ向ってゆるやかに下り、1.6mの段差を解消したようである。

殿舎地区の整地は第I期に準じて礫を敷きつめる。しかし、第II期・第III期の区別はほとんどつかない。広場地区では第I期の礫敷面の上に平均30cmの厚さで第II期の礫を敷く。とくに南半の SC5500 の北側では厚く敷いている。広場地区では第III期の礫敷整地面を識別できるところがあり、やはり礫を敷きたしたようである。とくに広場南半の中心建物 SB7803 付近では礫敷が厚く、30cmの厚さをもつ。

整地と土量 第I次大極殿地域は、元来北から南へ張り出す台地の急勾配1/45の地形を中心とりいれている。この急勾配を利用して、敷地を二段にわけその境に第I期では埠積塹壁をつくったのである。つまり壇上に立てば下方を見下すことになり、壇下に立てば上方を仰視することになる。そして、旧地形は壇の上下をつなぐ斜道と東面築地回廊の基壇にのこされたことになる。第II・第III期では斜道の勾配で塹壁を前方に15m移動し、石積塹壁を新設した。その造成工事は台地上の建物基壇の削平などによって容易に行なわれたであろう。

また各時期を通じて、第I期の正殿(SB7200)、第II期の主殿(SB6610, SB6611)、門(SB7801,

2 遺構

SB7750), 主要建物 (SB7803) などの構築される部分は、基壇を積みあげて建築したものである。それらについては全体の南への緩傾斜のなかで、とくに平坦に整地が行なわれるよう留意して地形造成がなされていることが各期の断面図からわかる。

各時期に要した地形造成のための土工量は、地形図の中軸線・東西築地回廊・南北溝SD 土工量 3715南北方向平均断面によって求めた(Fig. 13)。これによると、全体の土工量はそれほど多くなく、大極殿地域の2/3が広場であることをかんがえると、旧地形を最大限に利用した造成であったことがうかがえる。第Ⅰ期では、擁壁をつくるために旧地形を切土する切土量が多く、第Ⅱ期・第Ⅲ期では擁壁を前へのばすため盛土量が多くなる。各時期の土工量をくらべると、第Ⅲ期が第Ⅰ期の約1.6倍の土量を要し、それに準じて人夫数も増加しており、第Ⅱ期の造成がきわめて大規模であったことがうかがえる。積算に用いた土工歩掛りは現行のものであり、使用工具が原始的であった奈良時代ではもう少し人員を要するものとおもわれる。また、積算した数値は第1次大極殿東半部分についてであるから、全域としては、第Ⅰ期: 10,000m³, 2,200人、第Ⅱ期: 15,000m³, 3,400人、第Ⅲ期: 7,600m³, 1,600人程度の土工量になる。

なお、第Ⅰ期の堆積擁壁については、10mあたり32個×29段=928個の塙(長さ29.3cm、幅塙7.5cm)を積むことになり、これに東西築地回廊間の距離170mを乗ずると15,776個の塙を使用したことになる。

	(盛土)(0.2人/m ³)	(切土)(0.3人/m ³)	計
第Ⅰ期	2,630m ³ (526人)	1,900m ³ (570人)	4,530m ³ (1,096人)
第Ⅱ期	7,110 (1,422)	270 (81)	7,380 (1,692)
第Ⅲ期	3,450 (690)	350 (150)	3,800 (795)
計	13,190 (2,638)	2,520 (756)	15,710 (3,394)

Tab. 2 第1次大極殿地域東半部推定土量

2 遺構

第1次大極殿地域で検出した主な遺構は、築地回廊6、築地6、擁壁2、建物89、足場19、溝83、井戸2、土壤18以上などである。遺構の大半は平城宮方位(内裏北面築地回廊SC00の北雨落溝の方位を基準としたもので、国土方眼方位に対してN0°07'47"W振れている)に近い方位をとる。以下の報告において、N.S.Wで示す数値は、第2次大極殿基壇上の基準点No.7(国土方眼座測量基準標第VI座標系、X=-145412.55, Y=-18322.19の値)を基点(0, 0)にした平城宮方位での値である。たとえば、N100とはNo.7から北へ100m、W200とはNo.7から西へ200mという意味である。建物でもっとも多いのは掘立柱式の建物であり、以下の記述ではとくにことわらないかぎり単に建物という。また柱穴・柱頭形などの用語については『平城宮報告V』にしたがうが、個々の柱穴の呼称については建築修理の方法にしたがい、桁行柱を漢数字とし梁間柱を片仮名であらわす。そして、東と南から數えはじめることとする。たとえば、東西棟5間×2間の建物のときにロ一柱穴といえば東妻柱をさし、ロ六柱穴といえば西妻柱をさすことになる。基壇の「掘込み地業」などの用語については、『平城宮報告IX』にしたがう。

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる細形 ○柱底跡をとどめる細形 ○掘立柱細形

■礎石 □礎石抜取痕跡 …推定 ▲は北をしめす

A 門・築地回廊地区

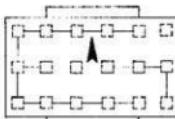
6ABR・6ABQ・6ABP・6ABO区にかけて、築地回廊が当初には南北に長い長方形に構築して第Ⅰ次大極殿地域をとりかこんでいるが、後には方形に縮小している。第Ⅰ～第Ⅲ期のあいだに幾度かの改変がある。

i 第Ⅰ期の遺構

SB7801 (PLAN 12, PL. 3~6, FIG. 14・15) 6ABR-H・J 地区

南 門 第Ⅰ次大極殿地域の南門であり、中軸線上(W266.6)に位置する。

基壇の立ち上り部は削平されて、柱位置をしめす礎石据付痕跡などはうしなわれている。また、基壇の南辺は後世の耕作のため深く削りとられ、残存する遺構は基壇の掘込み地業、基壇の北縁をめぐる礎敷の雨落溝と地覆石抜取痕跡、北面階段の痕跡などである。



南門付近では、地山(黒灰色粘質土、標高67.4m)のうえに黄褐色粘質土(厚さ20~30cm)をしきつ掘込み地業 めてまず整地し、後に基壇の掘込み地業を行なう。東西31.2m、南北17.45m、深さ50~60cm程度の長方形坑を掘り、四周と中軸線の東西へ5.7mおいてそれぞれ1条の盲暗渠(SD7809, SD7810, SD7812)をもうちける。東辺(SD7812)と内寄りの2条(SD7809, SD7810)は、幅50cm内外で少し掘下げ窪をつめて南へ排水するが、北辺と西辺ではとくに溝を掘込まず窪を帯状にあつめているにすぎない。掘込み地業の南北辺にあたる東西縁に径10cmの杭がある。東端では打込んだ状況で検出したが、西端では遊離してたおれていた。築地回廊および門の地割設定にかかる基準杭であろう(Fig. 14)。

版築ははじめ一層10~30cmの厚さで、約40cm位まで搾き固める。礎混り粘質土、砂混り粘質土などの色調をことにする土を2~3層にわけて搾く。それより上部は色調のことなる粘質土を厚さ2~5cmぐらいで、幾層にもわけて搾く。ただし、全面に一様ではなく場所によって層序がことなっているので、部分的に搾き固めていったことがうかがえる。長方形坑の上端まで版築すると、礎混り粘質土を厚さ10cmで積むが、この層は東西の築地回廊基壇の盛土と重りあっている。そして、さらに上へ積む暗褐色礎混り土は築地回廊に連続しており、門と築地回廊の地業が平行してなされたことがわかる。のこりのよいところでは深さ90cmの版築地業をとどめ、上面は平里に削平されて第Ⅱ・第Ⅲ期の礎敷面がおおっている。

基壇の北面では地覆石抜取痕跡、雨落溝、階段痕跡などがあり、それらは第Ⅰ期内での3回基壇縁にわたる改修が層位的にみとめられた。上層の遺構としては、東北と西北隅の基壇縁にそって、L字形(南へ2m、中軸線に向って6.7m)にめぐる幅60cm、深さ20cmの浅い溝SD7852Bがあり、それは基壇盛土を削りこむように掘り、隨所に凝灰岩の粉末をまじえる。基壇の地覆石抜取りの痕跡である。その外縁に60cmをへだてて、やはりL字形にめぐる小玉石列がある。それは玉石を一列に立てならべたもので、内側を密な礎敷とし外側を粗い礎敷とする。小玉石は一種の見切りであり、内側が雨落溝SD7833とかんがえられる。中央寄りの端は、同様に小玉石を両側にならべる南北溝SD7805, SD7806につながって北流し、東西溝SD5590に注いでいる。北面中央部に長さ14.2m、北へ1.2m張出す形で大型の凝灰岩片が堆積しており、そ

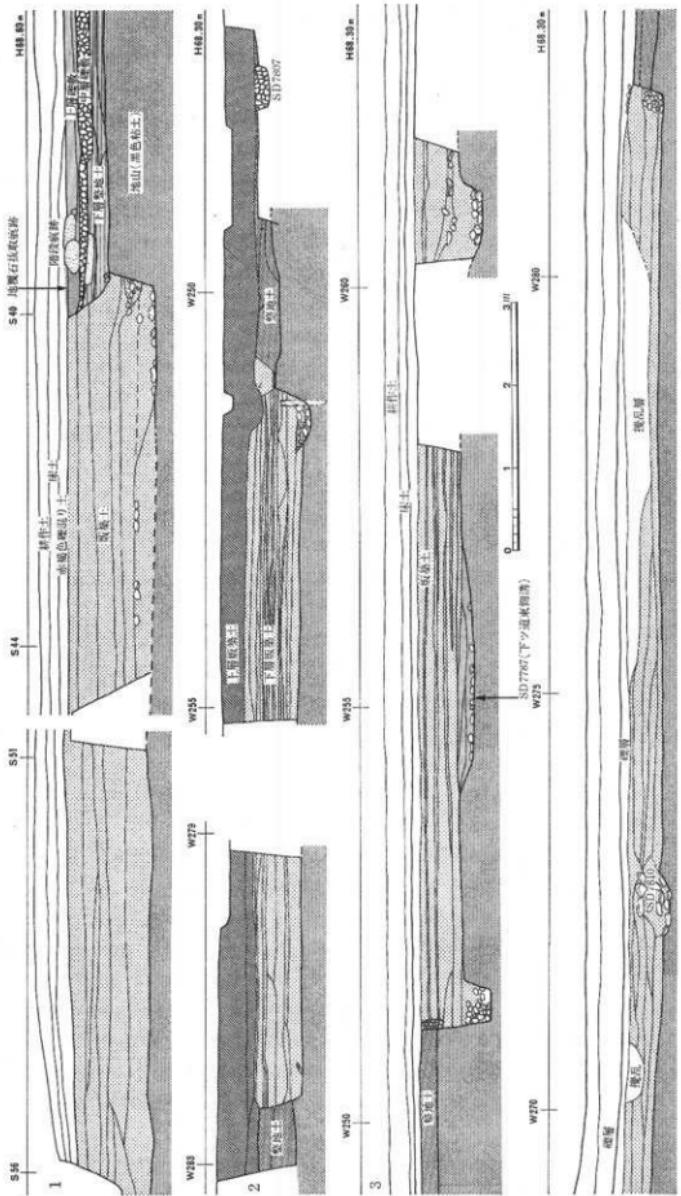


図-14 SB780基盤の断面 1. W25ライン南北断面 2. S45ライン東西断面 3. S57ライン東西断面

第三章 遺 跡

の外側は小粒の礫敷となる。北面階段の痕跡である。この凝灰岩の検出状況からは、裏込め用のものなのか、あるいは解体時の廃棄物なのか、いずれとも決めがたい(fig. 15)。

中層の遺構は部分的にしか検出していない。上層の階段と同じ位置に凝灰岩の堆積層があり、それは上層よりも70cmほど北へのびている。両側の地盤石抜取痕跡 SD7852Aも同位置にある。この時期にはとくに雨落溝はもうけず、大粒の礫敷が地盤石抜取痕跡の北側に展開する。下層の階段位置もほぼ中層と同じで、凝灰岩片をまじえる暗灰色砂質土として痕跡をとどめる。この階段部ではとくに青褐色砂混り土を敷く地業を行ない、その外方4mまでに灰白色粘質砂土をしきつめてから、礫敷を行なったようである。

上層の遺構をおおって、とくに北側では瓦片の堆積が著しく、第Ⅱ・第Ⅲ期の赤褐色礫混り土が基壇上面に堆積しており、第Ⅱ期には基壇が削りとられていたことをしめている。

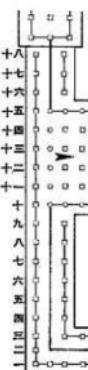
このような遺構から推定される基壇の規模は、上層で復原すると東西約28m(94尺)、南北約16.2m(55尺)、階段の幅15m(48~50尺)、周出1.8m(6尺)となる。柱間寸法は桁行5間(81尺・23.8m)、架間2間(40尺・11.8m)に想定すことができ、この場合の柱間寸法は桁行西端間が15尺、内の3間に17尺等間となる。

SCS600 (PLAN 2・5・11・12, PL. 3・7~10・14, fig. 16~18)
6ABR-H・Q, 6ABR-Q, 6ABS-E地区

第1次大極殿地域の南面を画する築地回廊東半分である。ただし、東寄りの南面築地回廊については未掘である。全域に基壇の掘込み地業を行なう。掘込み地業は整地土から幅11m内外、深さ40~30cmの布掘りであるが、自然地形の傾斜に基壇影響されたらしく、南側のほうが少し深い。W246ラインの基壇断面では、底に礫を混える厚目の土層を1~2層おき、そのうえに色調をことにする粘質土、砂質土を3層(各厚さ5~15cm)ほど版築し、深さ60cmの掘込み基壇をのこしている。基壇南側上部の版築は南に傾斜しており、南側では盛上げるような積み方を行なったことがわかる。東端に近いところでは下部の積土を南北と北半にわけて行なう部分もある。しかしながら、W246ライン以西では東方とことなり、上述の南門SB7801と同じ基壇の状況をしめしている(fig. 17)。

基壇の南北縁には幅30~40cm、深さ50cmの溝を掘り大形の礫をつめた盲暗渠 SD5565, SD5557が平行する。西端はともにSB7801Cとりつくようである。SD5557の東端はのちの木縄の南北暗渠SD5561によって破壊されているが、SD5561となって東面回廊との入隅で南下し、南側のSD5565と交わり同じく礫詰めの盲暗渠となって東へ20mのび、南北溝SD3765に注いでいる。この入隅部でSD5565が直進せず南に方向を変えていることや、基壇土の状況が東西でことなることから、SC5600の基壇土のほうがSC5500より以前に積まれたのではないかとおもわれる。なお、基壇土の積み方に変化のみられるSB7801の東約6m、W246ラインの西側には基壇を南北に横断する礫詰めの盲暗渠 SD7807(幅45cm、深さ15cm)があり、その両端は回廊の南面と北面につくる盲暗渠(SD5565, SD5557)につながっている(fig. 16)。

地 覆 石 基壇の北縁では盲暗渠の内側に幅70cm、深さ10cmの東西溝SD7855が平行しており、地盤石の抜取痕跡に比定できる。西端は上述のW246ラインあたりでとまるが、東端は削平をうけてお



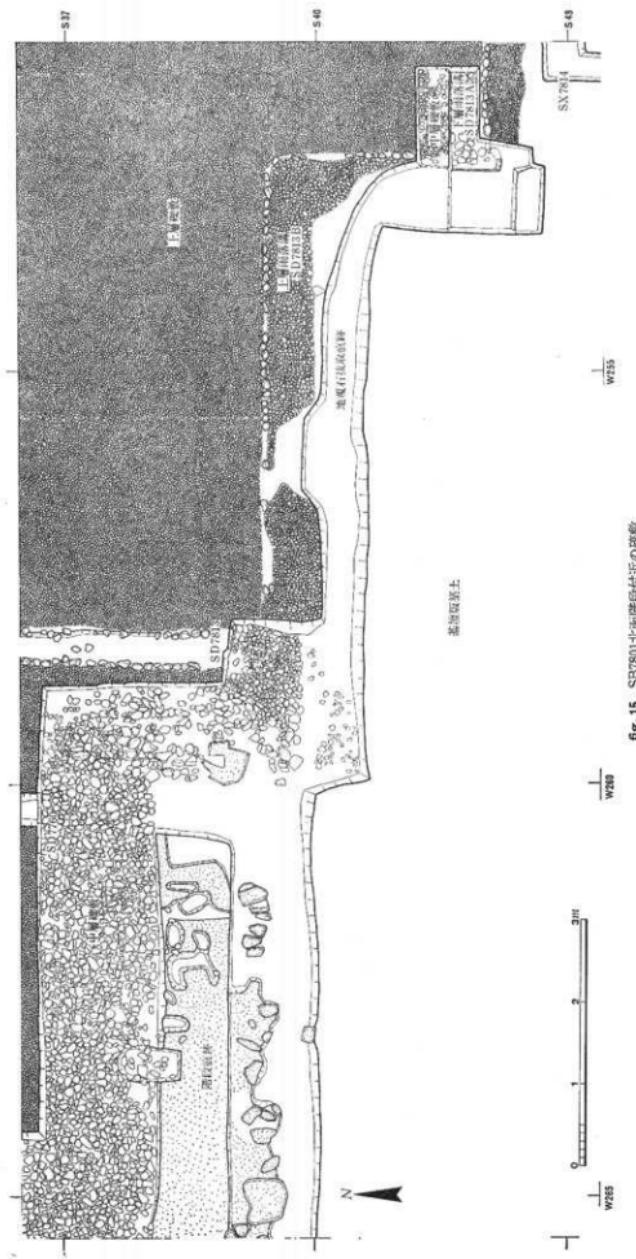


fig. 15 SB780北側露頭付近の構造

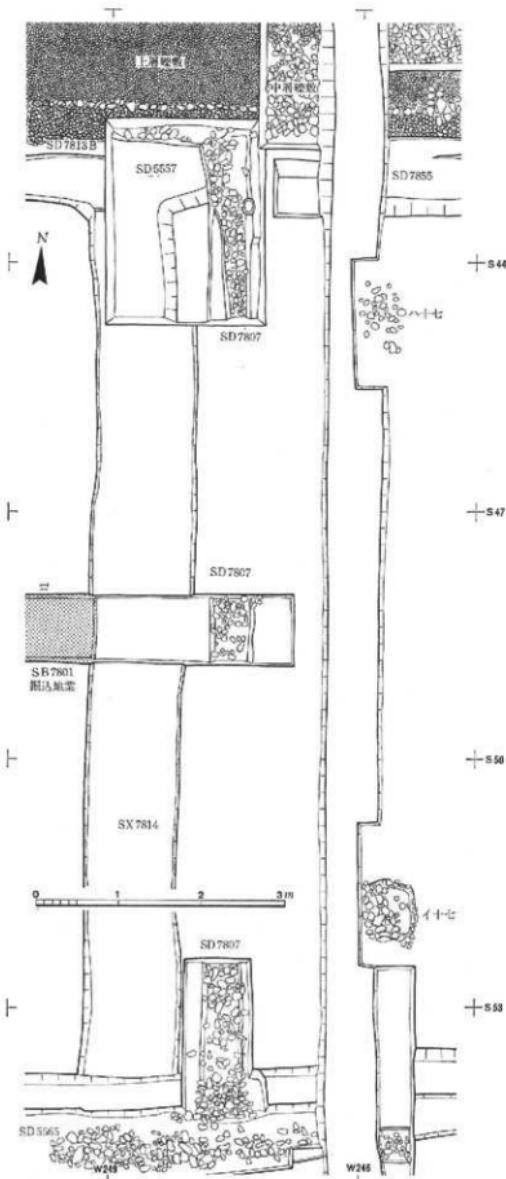


fig. 16 SC5600砾石
据付痕跡と
盲暗渠

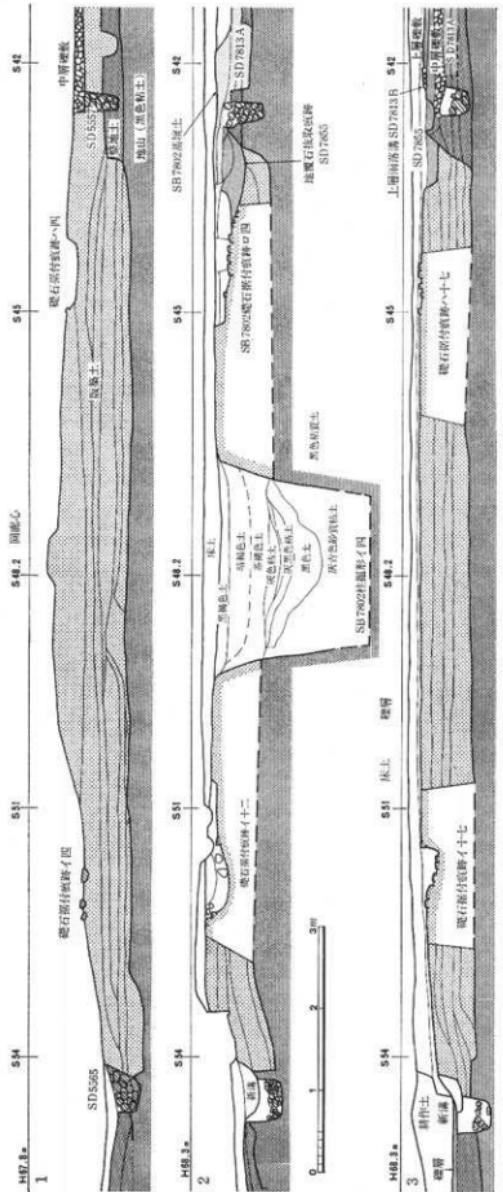


Fig. 17 SC5600基盤の断面 1. W186 ライン 2. W228 ライン 3. W246 ライン

第三章 遺跡

り不明である。この地覆石の抜取痕跡の心と回廊壁通り(S48.2)との距離は5.4mであり、基壇幅が10.8m(36尺)であったことがうかがわれる。回廊北面における雨落溝とそれにつづく砾敷確数はSB7801の場合と同じように3層にわかれれる。上層の雨落溝SD7813BはSB7801の雨落溝につながり、建物SB7802の軒先でとまる。基壇縁に幅50cmで小粒の礫を敷き、見切りとして掌大の玉石を1列にならべる。見切り石の外側は小粒の礫敷となり、雨落溝とのレベル差はほとんどない。中層では基壇縁に接して外側一面に大粒の礫を敷きつめ、とくに雨落溝をもうけない。この整地はSB7802の増築にかかるものであり、宮暗渠SD5557の上をおおっている。下層ではSD5557の外側15cmをへだてて幅65cmで大粒の礫をしいて雨落溝SD7813Aとし、その外側にやや小粒の礫敷がひろがる(fig. 18)。

基壇上には、礫石掘付痕跡がのこっていた。南側柱列では、東端の3個と未掘部分の5個を柱位置除いて9個の痕跡がある。北側柱列では、SB7802の増築でうしなわれた6個と未掘部分の5個を除く4個の痕跡がある。それらは径1m内外のほぼ円形に散布する掌大の玉石で、いずれも中心部が低く、なかには方1.7mの掘形をとどめるものもあった。礫石の安定をはかる根固め石である。この礫石掘付痕跡によって、回廊の心をS48.2に決定しうる。SB7802の間口の柱間形をのぞいて回廊の棟通りには柱痕跡がない。だが、梁間を1間にすると広くなりすぎの復原で、遺構としては痕跡を見出しえないが、棟通りに築地を想定せざるをえない。そうすることによって、回廊東半部の桁行18間(80.37m)、梁間2間(7.1m)の南面東半分の築地回廊が推定できる。柱間寸法は桁行で東端の2間が3.54m(12尺)であるほかは、4.58m(15.5尺)の等間となる。梁間は3.54m(12尺)等間である。南側の基壇上の崩れた部分、南側柱の外側1mで足場は、礫石掘付痕跡にそう形で8間(18m)分の小柱穴列SS7804(径30cm、深さ20cm)がある。柱間寸法は不揃いだがおよそ2.1mと2.4mを交互にくりかえし、礫石掘付痕跡をさけて割込んでいる。築地回廊南側の足場である。

以上のようなことから、SC5600はSB7801の基壇からはじまり、東西18間、中軸線と後述の東面築地回廊心との距離は88.3m、東西築地回廊の心々距離は176.6m(600尺)となり、その基準尺は29.43cmである。

SX7814 (PLAN 12, PL. 5, fig. 16) 6ABR-II地区

SC5600の西端とSB7801との間の基壇上に、長方形にめぐる溝状の遺構がある。南端の部分は後世の擾乱によって痕跡をのこさないが、西溝幅30cm、北溝幅50cm、東溝幅1mで、東西溝の幅は約3.4mである。北溝はSC5600の地覆石抜取痕跡とそろっており、南北の幅が回廊のそれとひとしかったことがうかがわれる。この溝状遺構は両側壁が垂直に立ち上り、埋土中に凝灰岩片を混入しているので、凝灰岩切石の抜取痕跡とみてよい。すでに述べたように、この部分の基壇土はSB7801と同時に盛られ、東溝の下部には宮暗渠SD7807があった。SB7801は礫石の痕跡をまったくのこさず、回廊には根固め石を良好にのこしていることからすると、回廊階段両者は高低差があり、SX7814はその中間で中壇を形成し、階段状につくられた回廊とりつき部分とみられる。

SX7802 (PLAN 11, PL. 3・7~11, fig. 17・18・19) 6ABR-H地区

南門SB7801の東にたつ5間(22.9m)×3間(11.52m)で総柱の東西棟建物である。柱間寸法は桁行で4.58m(15.5尺)等間であり、梁間は3.84m(13尺)等間である。総柱のうち側柱は

2 遺構

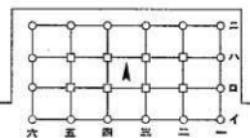
掘立柱であり、内部の柱を礎石建てとする。柱掘形は $3.5m \times 2.5m$ の長方形を呈し、深さは $2.75m$ という超大型である。ハ一柱穴をのぞくほかには、漏斗状の柱抜取痕跡がある。イ・ニの柱列は抜取痕跡が連続し、東側に抜きとっていることが推測でき、六通の抜取痕跡は西側にはみだし、西側に抜きとったことがわかる。掘形の埋土は地山の砂質土である。柱掘形が、抜取痕跡には瓦、土器、木器などの遺物が比較的多く堆積していた。イ三・ニ三・イ五・イ六・ニ六の抜取痕跡には柱根を支えた角材(17cm角)の断片が2本づつこっていた。また、ニ四柱抜取痕跡では、径75cmの柱根がたおれており、それには貫穴が2個所あって、1個所には支えの角材をなおとどめている(Fig. 19-1)。イ六柱掘形の南壁とそれに接する左右壁には底から約80cm上に龜風の彫込みを6個あけている。足掛け用の穴であろう(Fig. 19-3)。ハ二柱穴には抜取痕跡がなく、版築状に埋戻されていた(Fig. 19-2)。この柱穴には柱が立てられず、東側北2間を吹放ちにしたのであろうか。礎石掘付痕跡は、方形掘形(方2.7m、深さ15cm)の中心にあたる位置に、径1m程度に根固めの礎が散布する状態でのこっていた。なかに礎のまわりに小柱穴(径20~30cm)を配するものがある。足場ともみられるが、性格をきわめることはできなかった。

SB7802は、南面築地回廊の中層礎敷の改修時に増築されたもの。下層の雨落溝SD7813と礎敷面を埋めて東西約29m、南北約8mの基壇を北側につけたし、東・西側では2.5m、北側では2mをおいて中層礎敷として大粒の麻を敷きつめている(Fig. 17-2・18)。基壇はすでに削平されているが、このことによって軒の出がわかる。南半はSC5600と重複しており、築地回廊の一部を開いて増築されたものとみてよい。南北方向の柱筋は回廊南側柱と一致し、SC5600の南側柱とSB7802の南側柱の間隔は3.6m(12尺)であり、回廊南半を片流れの廊状に扱った建物であることはあきらかである。また、柱抜取痕跡から出土した木簡によって、この建物が天平勝宝5年(752)以後に廃絶したことがわかる。

SC5500 (PLAN 2・3・5~10・20~24, PL. 13~15・22~24・41・47・49・71・76・78・80・84, fig. 20・21) 6ABS-E, 6ABE-M・K, 6ABR-Q・P, 6ABD-C・D, 6ABQ-A・B, 6ABC-U・V, 6ABP-A・B, 6ABO-D・E地区

第1次大極殿地域の東面を画する築地回廊である。6ABR・6ABQ区では基壇の痕跡をのこしている。6ABP・6ABO区では基壇の痕跡はまったくないが、雨落溝や木樋暗渠が存在していることからその存在が確められる。低地部(6ABR, 6ABE区)の地山が軟い青色粘質土の地域と丘陵部(6ABQ, 6ABD区以北)の地山が硬い褐色粘質土・赤褐色粘質土の地域とは、基壇形成の状況がことなっている。

低地に属する6ABR-Q, 6ABE-M地区における基壇断面をみてみよう(Fig. 21-1・2)。ここでもSC5600と同じく、はじめに整地土(黄褐色粘質土)を広く敷いたのちに基壇の掘込み地業を行なっている。掘込み地業は、中心に約3m幅を掘りのこし、その左右に約3.5m幅の市振地業を行なう。掘りのこし部分は回廊の心にあたり、その幅は築地の幅をしめす可能性がある。掘込み地業の深さは30cmで下部に礎混り土を拂き固め(厚さ25cm), 上部に礎混り土・粘質土を3・4層に盛りあげる。この段階で掘りのこし部分と東西の積み土との高さが大体一致する



東面築地回廊

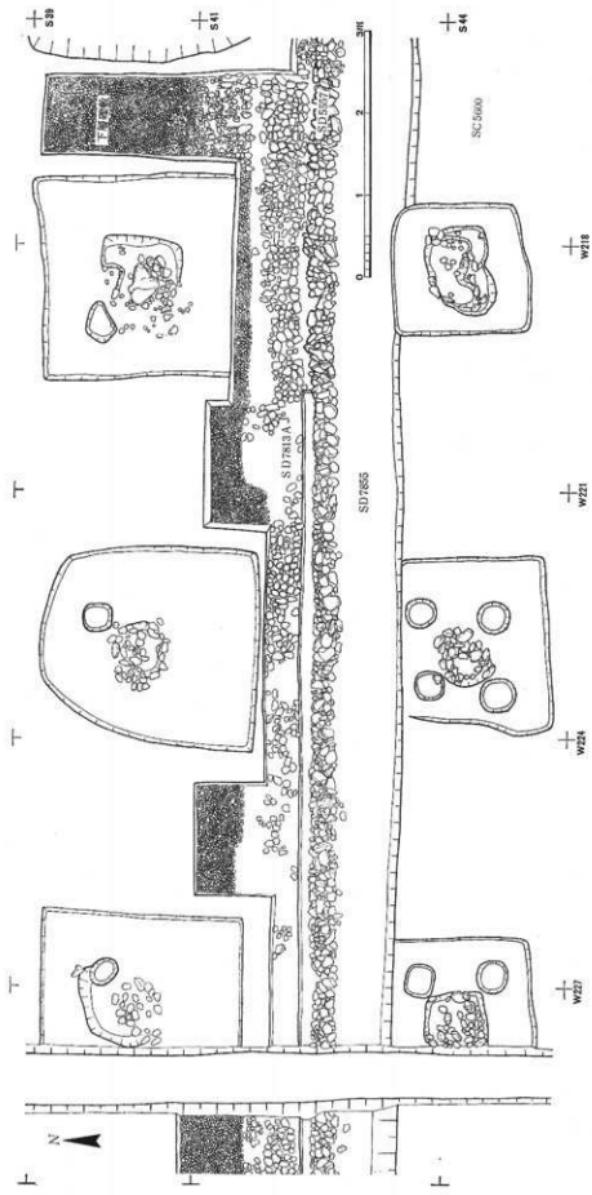


図.18 SBT785とSC5600の重複
fig.17の断面図を参照

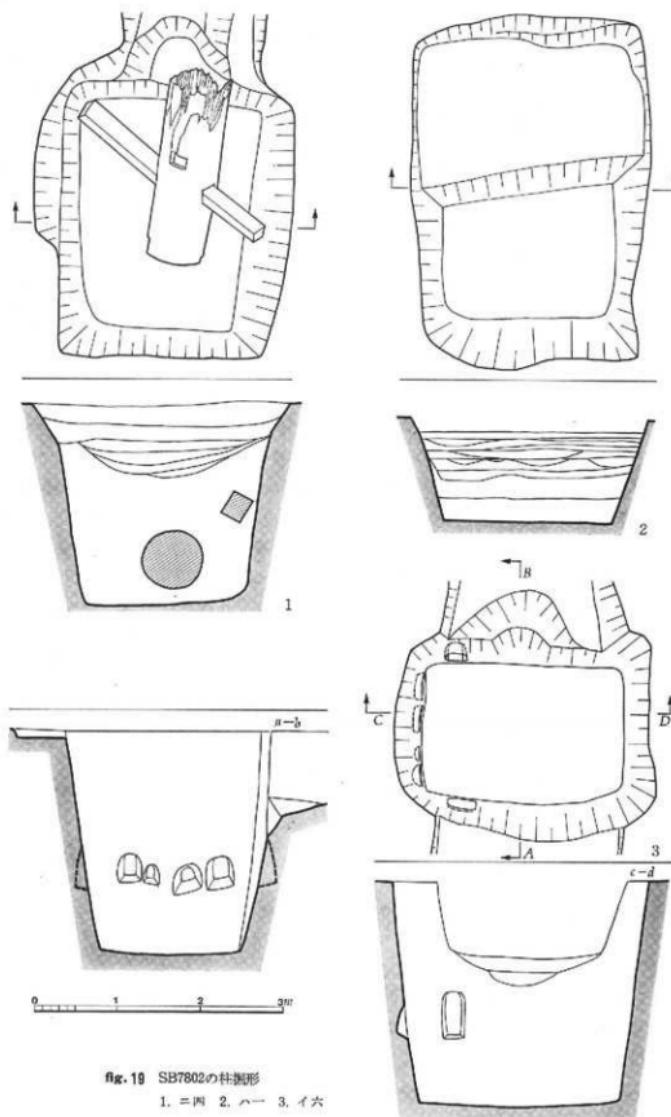


Fig. 19 SB7802の構造形
1. ニ四 2. ハ一 3. イ六

と、つぎには築地回廊の全面にわたって土を積み、結局掘込み地業の部分では深さ60cmの基壇積土をとどめることになる。基壇上面の削平は著しく、基壇の東西縁に想定される地覆石抜取痕跡を見出すことはできなかった。しかしながら、掘込み地業の外側1m内外のところに雨落溝(SD3790, SD5575, SD5588)があり、その間が回廊基壇となる。のことから、SC5600と基壇幅同様に基壇幅を10.8mとすることが可能となる。

6ABQ-A地区ではN120付近で地山に頸斜がつき、それ以南では掘込み地業を行ない、以北については赤褐色混泥りの整地土のうえに版築して基壇をつくる(Fig. 21-3)。さらにN140以北では版築を行なわず、地山を削りだして基壇を造成している(Fig. 21-4)。また、6ABQ-A地区では第Ⅲ期の築地SA3800が比較的良好にのこっており、その基底面が第Ⅰ・第Ⅱ期築地回廊の床面と大差ないとするならば、西側の雨落溝SD3790との比高は60cm内外となり、それが基壇高をしめすことになる。

SD3790は東面築地回廊の西南雨落溝である。幅90cm、深さ15cmの溝を掘り、幅500m内外に西雨落溝 積をしくのであるが、疊敷は上下2層にわかれる。上層の疊敷は大形の疊を見切りの石列として南北に1列にならべその内外にやや小粒の疊をしく。下層の疊敷はやや大粒の疊をしくにとどまり、見切りの石列をもうけていない。ともに6ABR-D地区の中央では、第Ⅱ・第Ⅲ期の東西築地SA3810の盛土でおおわれている。6ABP・6ABQ-A・6ABR区では部分的にしか痕跡をとどめないが、6ABE-M・K区では比較的保存状態がよい(PL. 24・48)。**SD5588**は広場地区を横断する東西溝SD5590との合流点から南下した部分の雨落溝である(PLAN. 5)。もっとも古い石踏の盲暗渠SD5555の後身として、築地回廊を横断し、東方へ排水する木橋暗渠SD東雨落溝 5561、SD5566につながっている。**SD5575**は東面築地回廊の東雨落溝であり、6ABE-M地区でしか痕跡をとどめていない(PLAN. 6)。幅65cm、深さ20cmの素掘溝で、若干の砂を混える黄褐色土が堆積しており、その下で後述の足場SS3795の柱穴を検出した。

この時期の基壇の削平は著しいが、西側柱列の礎石掘付痕跡4、東側柱列の礎石掘付痕跡6を確認し、回廊の棟通りが南端でW178.3であることがわかった(PLAN. 5, PL. 15, Fig. 20)。基壇に掘込まれた足場によって回廊の柱位置を想定することが可能である。**SS3795**は東面築地回廊に設けた足場であり、築地回廊の建設にともなう工事用足場柱の痕跡とみられる。その配列状況は、回廊の心から東西に2.3mをへだてた位置に各々2列ならんで南北にのび、さらに

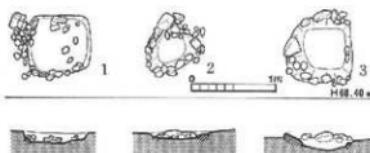


Fig. 20 SC5500とSC5600の礎石掘付痕跡

1. SC5600ハ西
2. SC5600ハ三
3. SC5600ハ西

1) 足場の柱穴と柱立柱建物・木脚・縁束・床束などを区別する条件としてつぎのようなものがある。1. 柱頭形は方形・円形をとわず小さき。2. SC5600でもそうだが、厩舎地区的状況からすれば、本建築の柱筋をさかけた柱間の中央に柱穴が規則的に配される。3. 規則的と

はいえ、方位や柱間寸法は本建築のように厳密でない。このような条件をそなえた遺構を建築の建設や解体などにともなう足場に比定した。逆に足場をたどることによって、すでに消失した礎石位置などを推測することが可能である。

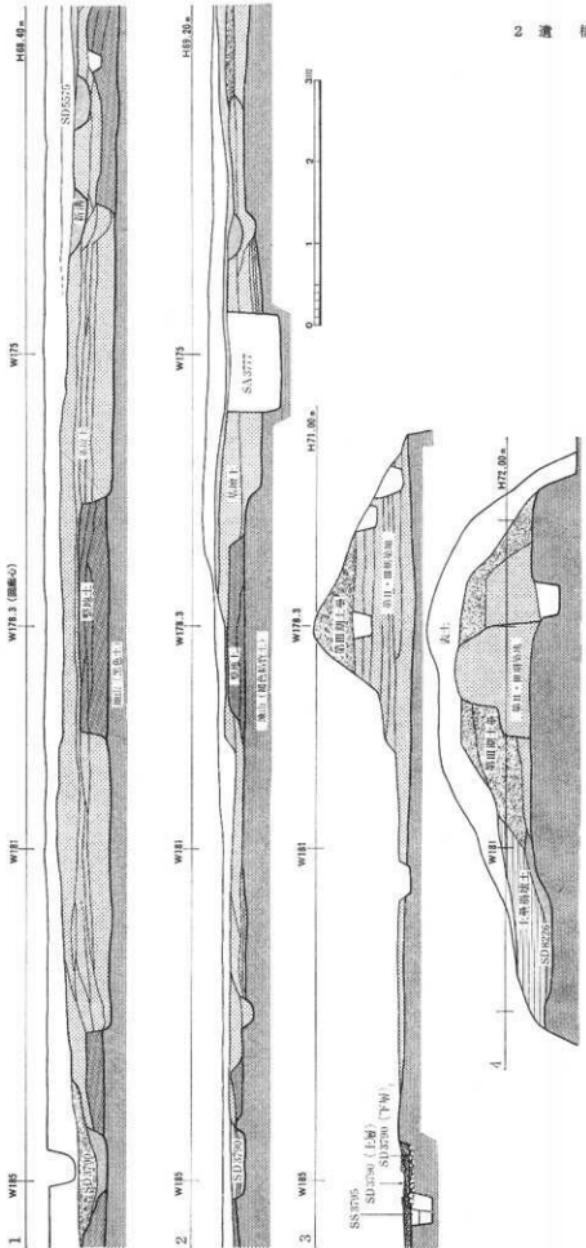


Fig. 21 SC5500の断面図 1. S30ライン 2. N26.5ライン 3. N100ライン 4. N141ライン

外方4.5mのところに東西雨落溝に重複して、西側では1列、東側では2列の小柱穴がある。都合7列の足場は掘形の径50cm、深さ20cmであり、柱間寸法は必ずしも一定しないが約2.4mと約2.1mとを交互に配し、梁間の柱筋をおおむね揃える。基壇上で近接している2列には部分的に重複するものもあり、前後2回の作業にかかるものであることがわかる。すなわち中心寄りの古い列を造當時のものとみなしてSS3795Aとし、外側の新しいほうをSS3795Bとして再建時の遺構に想定した。第I期の築地痕跡はないが、6ABP-A地区の棟通り推定線上に1間分(3m、10尺)の南北に相対する柱掘形(1.2×0.9m)があり、これを築地にあけた門の柱間に柱間寸法を想定することができるSB8233。こうした足場とSC5600で確認した側柱の柱間寸法(桁行4.58m・15.5尺、梁間3.54m・12尺)とは矛盾しない。残存する西側柱列を北へ延長し、6ABO-D地区的東西溝SD130を北面築地回廊SC8098の南雨落溝として想定すると、桁行総柱間は72間(南北端各2間の柱間は各3.54m、延324.79m)、梁間2間(7.1m)となり、南北の心々距離は317.7m(1,080尺)となる。この場合基準尺は29.41cmである。

SA3777 (PLAN, 2・3・5・6~10・20~24, PL. 14・15・22・23・47・76・84, fig. 22)
6ABE-M・K, 6ABD-A・D, 6ABC-U・V, 6ABO-D地区

東面築地回廊SC5500の東側柱筋に重なる南北扉である。未掘部分があるが、総柱間は65間(307.3m)であり、柱間寸法は4.58m(15.5尺)を基本とするが、6ABD-C地区の第35・36柱穴間と6ABC-U地区の第52・53柱穴間は2間分(9.16m)をあけ、門の役割をはたしている。なお、『平城宮報告IV』で建物SB269として報告した柱掘形は、SA3777の北延長線上にあって、木樋暗渠SD130が掘込んでいるなど、共通点が多いので、SA3777にあらめた。南北両端はそれぞれ南北築地回廊心と5.2mへだたったことになり、少し広いがこの状態で掘の両端は南北築地回廊の築地部にとりついたのである。柱の掘形は1.1~1.5mの方形または長方形を呈し、1.2m内外の深さである。径40~46cmの柱根をとどめる柱穴が7個あり、そのうち1本は方柱であった。この柱は抜きとられなかったものらしく、円形ないしは方形の柱痕跡を容易に判別した。掘形の埋戻しは丁寧で版築のように焼き固めている。SC5500の基壇を掘りこんで東西に横断する木樋暗渠が柱掘形の直上に掘り込んでおり、木樋暗渠よりもSA3777のほうが古い。

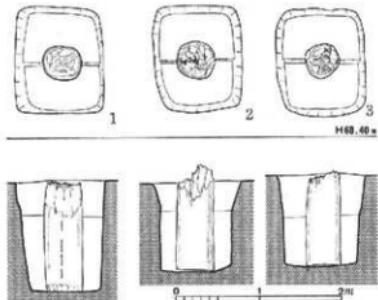


fig. 22 SA3777の柱根 1. 第3柱(南から), 2. 第4柱, 3. 第5柱

SD5555 (PLAN 5, PL. 16, fig. 23) 6ABS-E地区

築地回廊の東南入門を南に横断したのち基壇のやや南を東へ流れて、南北溝SD3765に注ぐ東西盲暗渠。全長18.8m、幅50cm、深さ80cmの溝を掘り、大粒の礫をつめている。SC5600を東西盲暗渠 横断する部分SD5556は、後の木樋暗渠SD5561によって破壊されている。礫詰めの上面は東端のほうが西端よりも65cm低い。

1) PLANでは推定柱位置を■で示している。

SD5560 (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABS-E地区

SD5555 の北約 1m を流れる東西木樋暗渠で、全長 24.7m。西端は SD5561 につながり、東端は開渠 SD5558 につながる。はじめに溝（幅 1.2m、深さ 60cm）を掘り、木樋をすえて埋戻したもの。木樋は角材に溝（幅 23cm、深さ 13cm）をくりぬいた樋（長さ 5m 内外、38×25cm 角）を 5 本つなないだもの。縫なぎの部分はソケット状に加工し、一端は蝶形に削り出し、他端を蝶形にくりぬいている。また蝶形の木口を水上にむけ、蝶形の木口を水下におく。樋の両側には 1.2m 内外の間隔をおいて樋をおとしむ切りこみ（幅 5cm、深さ 2.5cm）をいれ、1 本につき 3～5 本の樋（長さ 28cm、3.5cm 角）をわたし、そのうえに全部で 9 枚の板（長さ 2.8m 前後、幅 31cm、厚さ 5cm）で蓋している。なお、両端の木口部では北からの SD5561 につなぐために、北側を 45cmほど切りとっている。東端と西端の落差は 15cm。西端部が南北渠 SA5550 の柱穴にかさなっており、木樋のほうが新しいことがわかる。

SD5561 (PLAN 5, PL. 16・17, fig. 23) 6ABR-Q地区

築地回廊 SC5600 の東南入隅部で南下し、南端を SD5560 につなぐ木樋暗渠。構造は SD5560 と同じだが、この木樋は丸柱（長さ 6.05m × 6.30m、径 45cm）を転用したものである。樋は 1 本につき、7 本おくが、蓋は著しく腐蝕し原形をとどめていない。南北の落差は 12cm で、南のほうが低い。

SD5562 (PLAN 4・5, PL. 16・18, fig. 24) 6ABR-Q・6ABE-M地区

築地回廊東南入隅から東へのび、SC5500 を横断する木樋暗渠で SD5561 の北端と接している。全長は 41.67m で、7 本の木樋をつないで東方の南北渠 SD3715 に排水する。木樋の構造は SD5560 と同じだが、SC5500 の基盤部分では蝶形を狭くして（幅 85cm）、長さ 6.2m の丸柱転用材を 2 本おく。その東方には、蝶形を広くし（1.95m）、長さ 5.2m 内外の角材樋（内法幅 23cm、深さ 15cm）をおく。樋をわたして蓋をかけるのであるが、蓋は腐蝕が著しく原形をとどめない。西端では南面・東面回廊の雨落溝をうけるが、築地回廊の東側では東雨落溝の水をうけず、東雨落溝 SD5575 は木樋の上部を通りぬける。東西の落差は 29.1cm で、東端のほうが低い。SA3777 の柱穴を掘込んでおり、木樋のほうが新しいことになる。

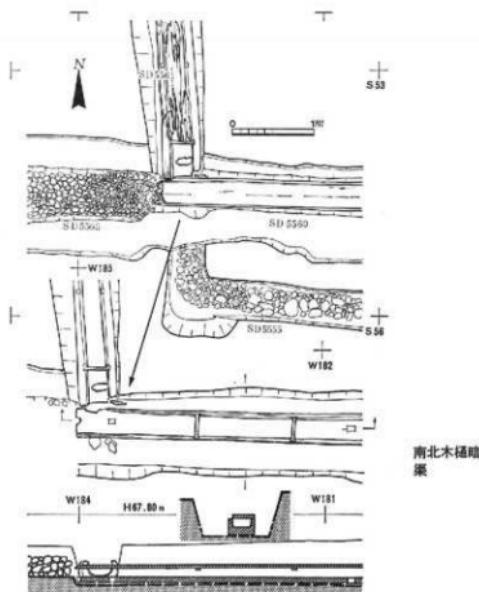


Fig. 23 SD5560 と SD5561 の結合

SD5563 (PLAN 5, PL. 18, fig. 24) 6ABE-M地区

SD5562の北3.5mにある木樋暗渠で、全長13.25m。西端ではSD5588, SD5589をうけ、東西木樋暗渠 端は東西溝SD5564につながる。丸柱転用の木樋2本をつないだもので、上口(幅15.6m)に様子をめぐす、長さ2.35m、幅20cm前後の板を3~4枚かさねて蓋する。西端では両側を約10cm低くし、木口を板で塞いで上から水を受けている。東端では木口下面に縫をすえ、両側に板を打ちこむ。東西の落差は13cmで東端のほうが低い。この木樋の上にも東雨落溝SD5575が通り、SA3777の柱穴を掘込んでいる。

SD3770 (PLAN 7, PL. 24~25, fig. 25) 6ABR-P・6ABE-K地区

SD5500を横断する木樋暗渠で、全長41.45m。西端は西雨落溝SD3790につながり、東端はSD3715に注ぐ。ただし、この暗渠と直接連続しないが西延長線上に東西溝SD3779があり、本来は連っていた可能性がある。蓋のほとんどは腐蝕し、縫も著しく腐蝕し底部をとどめるにすぎない。7本の木樋をつなぎ、基壇下の2本を丸柱転用材とし、それ以外は角材をくりぬいたものである。SD5562と同じ構造といえる。東西の落差は24cmで東のほうが低い。SA3777の柱穴を掘込んでいる。

以上、5条の木樋暗渠の丸柱には同一の仕口穴があり、同時期のものである。

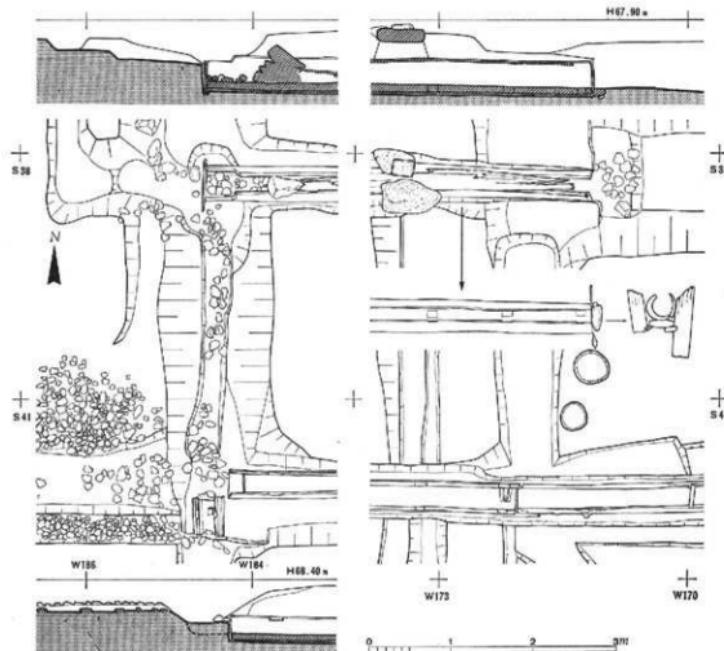


fig. 24 SD5588に接するSD5562(南)とSD5563(北)

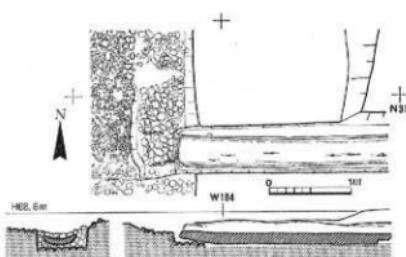


fig. 25 SD3790 と SD3770

SD3775 (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD-D地区

築地回廊 SC5500 を横断する東西溝。西は西雨落溝 SD3790 とつながり、東方の南北溝 SD 3715 につながる全長40.7mの素掘溝である。基壇部分は幅1.15m、深さ70cmの溝で部分的に凝灰岩の破片がのこっている。南方の状況からすれば、本来は木越暗渠であり、凝灰岩片はその掘えつけ石であった可能性がある。基壇の東方では素掘りの開渠（幅80cm、深さ40cm）となり、基壇の東約16mから、長さ5.2mの石積暗渠となる。暗渠には扁平な安山岩を用い、現在底石と側石をとどめる。側石は北側で一部2段目をのこすほかは、一段目の石しかのとしている。当初から溝の南北で地盤の高低差があったのかもしれない。両側石の内法幅は40~50cmで、その握形は両側の開渠部よりも広い（幅1.0m）。この暗渠は後述する門SB3746の柱位置と対応しており、通路の部分のみを暗渠にしたのである（p. 89参照）。

SD8311 (PLAN 3-20, PL. 78) 6ABC-V地区

西は築地回廊の西雨落溝 SD3790 からはじめり、築地回廊 SC5500 を横断し、中断部分があるが、東方のSD8327につながってSD3715に注ぐ東西溝である。基壇部分では幅1.0m、深さ30

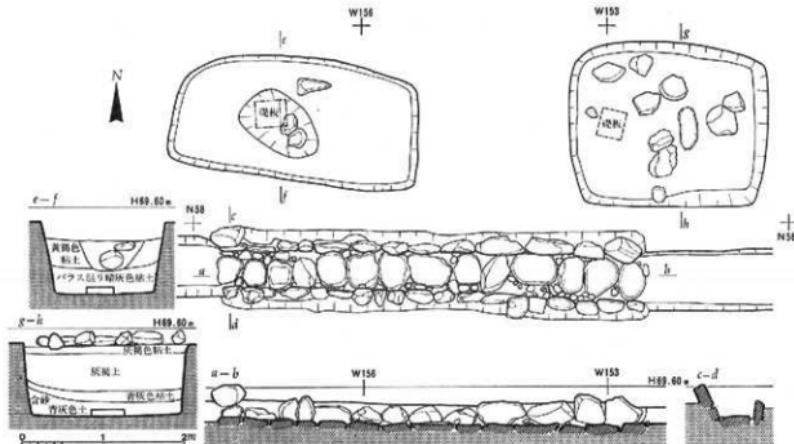


fig. 26 SD3775 と SB3746

第三章 遺跡

東西溝 cmとなり、中心の幅50cm部分と左右とは土層の堆積状況がことなっており、木礫部と裏込め部分にわかれられるようである。基壇上で第Ⅲ期の東西築地回廊SC8600の柱掘付痕が掘込まれている。また、東方のSD8327には第Ⅲ期の南北溝SD8237、SD8239および南北棟建物SB8325の柱穴が掘まれている。

SD8307 (PLAN 21, PL. 78) 6ABC-V地区

SD8311の北11mのところにある東西築暗渠。断面V字形の溝(幅80cm、深さ40cm)を掘り、盲暗渠 大粒の礫を詰めたもの。築地回廊の西南落溝SD3790の水を東側に排水する施設。

SC8098 (PLAN 2・24・33・34, PL. 93・94) 6AB3-A, 6ABO-D・F・G・J・L・N・O・R地区

すでに「平城宮報告Ⅱ・IV」で報告した東西石敷溝SD130によって北面築地回廊を推測することができる。SD130は断続的に残存するが全长185m、幅80cmの東西溝である。溝には礫を敷き南側に見切りとして大粒の礫をなべ、その南側に小粒の礫敷面がひろがる。東端には約12mにわたって木樋暗渠の痕跡があり、南北溝SA3777の柱穴を掘んでいる。西端は西面築地回廊推定位置の東約10mで消失している。このSD130はSC5500, 5600の石敷雨落溝ときわめてよく類似しており、やはり上下2層にわかれれる。北面築地回廊の南雨落溝であり、木樋暗渠の長さはSC5500の東西幅とみてよい。以上のようなことから、破壊の著しい北面築地回廊についても、南・東西回廊と同じく基壇幅10.8m、東西心々距離176.6m(600尺)、総柱間の推定間41間(内両端の各2間は東西築地回廊の梁間である)、柱間寸法は桁行4.58m(15.5尺)、梁間3.54m(12尺)と推定することができ、回廊の棟通りはN269.5となる。なお、後述するように中央部分にSD244によって軒廊が復原できるので、中軸線上の1間を北門にあてることができよう。

ii 第Ⅱ期の遺構

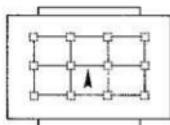
SB7750A (PLAN 14, PL. 33・34, fig. 27-3) 6ABR-G, 6ABQ-D地区

第Ⅱ期の南門である。礫石掘付痕跡や、基壇積土の痕跡はない。

南門 南面と北面に基壇地覆石抜取痕跡SD7772, SD7773がある。それは、幅70cm、深さ20cm内外の素掘りの東西溝で、部分的に凝灰岩片が散布する。東半分しか検出しなかったが、中軸線(W267.0)で折返すと東西長20.0m、南北幅12.7mとなる。ただし、中央部(長さ13.44m)は南・北面ともに1.05m外側に張りだしておらず、階段にあてることができる。第Ⅰ期整地土の上に基壇を盛りあげている。階段の東西幅を門の桁行とすれば、3間(13.44m)×2間(7.2m)の東西棟跡物が想定され、柱間寸法は桁行4.48m(15尺)、梁間3.6m(12尺)とかんがえられる。なお、この建物と後述する第Ⅲ期のSB7750Bによって中軸線がW267.0であり、門および南面築地回廊の心がN51.9であることがわかる。つまり、第Ⅰ期の南面築地回廊位置から北へ100.1m移動しているのである。

SC3810A (PLAN 2・8・14, PL. 26・27・32・34・35, fig. 27) 6ABR-G・6ABQ-D地区

第Ⅱ期の南面築地回廊である。6ABR-D地区的状況によると、基壇は第Ⅰ期礫敷面の上に直接積上げている。すなわち、はじめに幅約5m、厚さ20cmで粘土質の土を盛り、その上に同質の土を薄くつむ。さらに両側につぎたすようにして2・3層をつみ、結局礫敷面から50cmの高さに積上げて回廊の床面にあてたようである。部分的に築地の盛土をとどめるところ



もある。ただし、これは保存状況のよい部分のことであって大部分は削平されている。基壇幅は雨落溝と足場によってわかり、また雨落溝などによって、南面築地回廊が南門 SB7750 Aから発して東面築地回廊 SC8360 につながることが裏付けられる。

東西溝 SD3778 は SB7750A の北面階段の東端からはじまり、東端が SC8360 を横断する全長 84.4 m の素掘溝（幅 50cm、深さ 20cm）で、SB7750A の棟通りから北へ 6.9m へだたっており、南面築地回廊の北雨落溝に比定しうる。なお、東面築地回廊 SC8360 を横断する部分は暗渠でなければものとおもわれるが、顯著な遺構はない。この SD3778 に対応する南雨落溝は痕跡をとどめていない。

SD3778 に北接して東西にのびる足場 SS3805 は、19間 (68.9m) の小さな東西柱列（柱頭形の径 50cm、深さ 40cm）で、柱間寸法は 3.25 ~ 4.0m と不揃いだが、おおむね 3.9 m におさまるものが多い。北側の足場であろう。足場 SS3818 は、SB7750A の心から南へ 7m へだてて東西にのびる 19間 (68.9m) の小柱列で、柱穴およびその位置は SS3805 に対応している。また柱間寸法も SS3805 と同じ傾向をしめしており、南側の足場とみられる。後述する SC8360 と SB7750A の心々距離は 88.3m となり、南面築地回廊の全長（東西築地回廊の心々距離）は 176.6m (589 尺) となる。柱間寸法を後述の北面築地回廊 SC6670

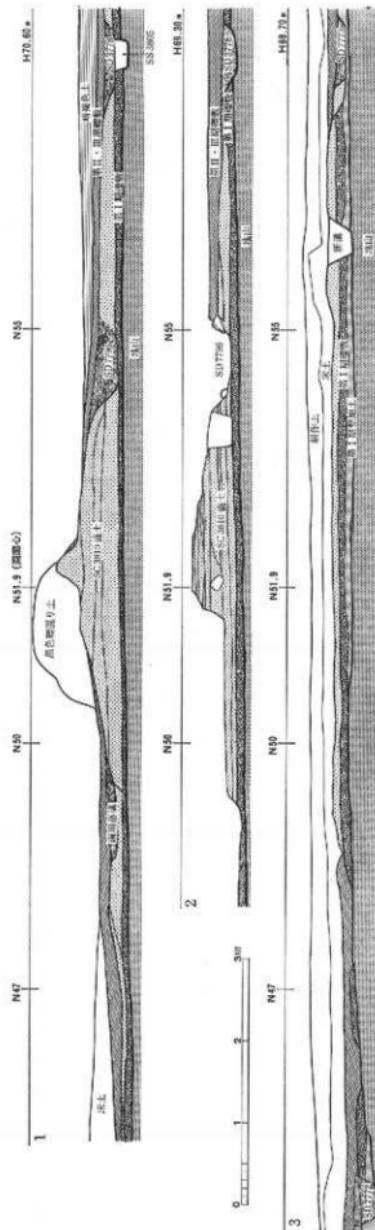


Fig. 27 SB7750A と SC8360A・SA3810B 基盤断面 1. W196 ライン 2. W227 ライン 3. W263 ライン (SB7750A)

第三章 遺跡

と同じく桁行3.9m(13尺), 梁間3.6m(12尺)とすれば、南面築地回廊の柱間数は中央に3間の南門をおいて、両脇に22間(内2間は東西築地回廊の梁間)配したことになる。

SC8360 (PLAN 2・3, 8~10・20~24, PL. 22・42・47~49・76~78・84・85, fig. 28)
6ABP-A・B, 6ABC-U・V, 6ABQ-A・B地区

第Ⅰ期の基壇を踏襲した第Ⅱ期の東面築地回廊である。南方では遺構面が削平され、北方の東西築地回廊

高地にしか構造をとどめない。6ABP-A・B地区では基壇積土の痕跡を欠くが、側柱列の礎石掘付痕跡と西南落溝を検出した。礎石掘付痕跡は径1m内外、深さ20cm内外の浅い掘形に安山岩の根石をすえたもので、東側柱位置に2個、西側柱位置に16個が残存した(fig. 28-1・2)。東側の2穴は第Ⅰ期のSA3777の柱掘形を掘込み、西側の1穴が第Ⅲ期の東面門SB8310の柱掘形に掘込まれているので、両者の中间の時期に位置づけることができる(PL. 77)。その柱間寸法は、B地区の北寄りの1間が4.49m(15尺)であるほかは、3.95~4.0m(13.2尺)の等間である。柱間寸法を広くとる柱筋の東3.56mのところで、1間分の柱穴(掘形1.1×1.4m)が南北にならぶ。

東面門 それは門の親柱であり築地にあけた門の存在をしめしているSB8230 (fig. 28-3)。6ABQ-A地区の北辺でも同様の掘立柱痕跡があり、この位置にも門 SB9223 が存在したことになる。それは南の親柱にあたり、対応する柱穴を検出していないが、北方の側柱列の柱間からすると、柱間6.6m(22尺)程の一間門となる。6ABC-V地区の南辺にある東側柱列相当の礎石掘付痕跡によって、さきの門の親柱位置を心にする梁間2間(7.2m)の回廊であったことがわかる。

6ABQ-A地区では第Ⅲ期の築地積土を除去して、築成時の遺構を検出した。回廊の心をはさんで幅1.5m程度の間隔をおく小柱列(柱間3m) SX9218 が断続的にみられ、しかも柱穴が重複するところもある。この時期ないしは第Ⅰ期の築地版築時の柱板支柱ともみられる。また、この小柱列と同位置に南北小溝 SD9219, SD9221 があり、柱板をすえた痕跡とみられる。SD雨落溝 8216 は SC8360 の西南落溝(幅45cm、深さ20cm)で、西側柱心から2.5mはなれて南北に流れる。東北の入窓部から26.4m残存するが、それ以南はのこっていない。この雨落溝によって基壇軸が12m程度であったことがうかがわれる。

SB9223 の南親柱位置はこの時期の部内を南北にわける石積擁壁SX9230の東延長線上にあり、東面中央門となる(PLAN10)。SB9223 と北方のSB8230との間には礎石掘付痕跡があり、この間は桁行10間(40m)となる。東面北門SB8230の北側にのこる礎石掘付痕跡からすれば北面築地回廊 SC6670 南側柱までの桁行は10間(40m)となる。SB9223 と南面築地回廊とのほぼ中間、回廊棟通り位置に4穴の小柱掘形があり、その長さ5.1mを東面南

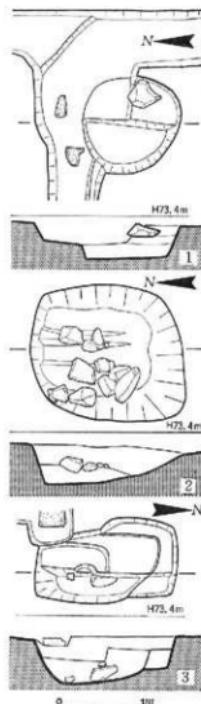


fig. 28 SC8360 磚石掘付痕跡と SB8230 の柱掘形
1・2. 磚石掘付痕跡 3. 柱掘形

門SB9217に比定することができる。SB9223とSB9217の間を11間に割りつけると柱間寸法は 東面南門 4.01m となる。さらに SB9217 から南面築地回廊北側柱位置までを10間に割りつけると、柱間寸法は 3.95m となる。このようにして東面築地回廊の総柱間数は48間（門3間、南北築地回廊の梁間4間分をふくむ）に復原しうる。この場合、南北築地回廊の心心距離は 186.08m (620尺) となり、単位尺は 29.9cm である。

SC6670 (PLAN 3・24・27・32, PL. 60・83・85, fig. 29) 6ABP-A・G地区

北面築地回廊である。中軸線から東半で礎石据付痕跡と雨落溝を検出した。築地及び北側柱列・北雨落溝は一条通りの道路敷にかかり、検出したのは南側柱列と南雨落溝である。基壇の痕跡はまったくなく、上記の遺構は地山面で発見した。礎石据付痕跡は15個が断続的に残存している。それらは SC8360 の場合と同じように方1m内外の浅い掘形をともない、うちにも2～4個の安山岩の根石をとどめているが、なかには根石の抜きとられているものもあった。

柱間寸法は中軸線上にある中央間とその東1間が4.48m (15尺) であるほかは、3.9m (13尺) 等間である。これによって北面中央の門 SB7217 が3間であったことがわかるとともに、北面回廊の東半の桁行柱間は22間（うち2間は東面回廊の梁間）となる。南雨落溝 SD8214 は側柱列から南へ 2.75m へだたる素掘溝（幅50cm、深さ10cm）である。G地区では痕跡をとどめないが、A地区での残存状況は比較的よい。東北入隅部分で東西溝 SD8216 とまじわり、SC8360を横断する。SD8214 の南岸位置で断続的にならぶ小柱穴列 SS7222 は約4mの柱間寸法をもち、SC 6670 の足場とみられる。6ABO-E 地区の南辺に同様の小柱穴列 SS8096 があり (PLAN 33), 北側柱の足場にあたる。

築地回廊の梁間については確認の手だけではなかったが、SC8360と同じく幅12m程度の基壇に梁間2間 (7.2m) を想定することは可能であり、棟通り心は N237.98 に推測できる。東西築地回廊の心々距離は南面築地回廊と同じく、176.6m (590尺) に復原できる。ちなみに単位尺は 29.9cm である。

iii 第Ⅲ期の遺構

SB7750B (PLAN 14, PL. 33・34) 6ABR-G, 6ABQ-D地区

第Ⅲ期の南門である。基壇の痕跡はないが、据立柱痕跡をとどめる。5間 (14.7m) × 1間 (5.4m) の東西棟建物。柱間寸法は桁行中央間 3.9m (13尺)、脇間 3m (10尺)、端間 2.4m (8尺) と推定される。柱の掘形は方1m内外、深さ50cmで、径50cmの柱痕跡をとどめるほか、腐蝕の進んだ柱根をとどめるものがある。南面築地 SA3810B の北雨落溝 SD3778 の西端がロ一柱の東1.8m (6尺) でとまる。

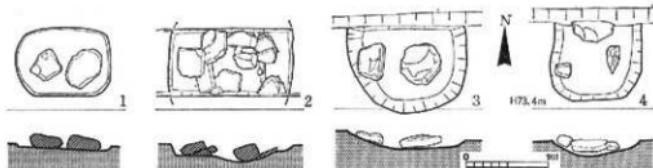


fig. 29 SC6670礎石据付痕跡

SA3810B (PLAN 2・8・14, PL. 26・27・34・35, fig. 27・30)
6ABR-G・P, 6ABQ-B・D地区

第II期のSC3810Aを踏襲した南面の築地盤である。現在、土壘状の高まりをとどめる部分
南面築地（黒色疊混土）は中近世に盛りたしたもので、築地幅をしる手掛りをとどめている。築地基
礎は第II期の回廊基礎を南北とも約4m縮め、幅5m程度の基礎に改修したようである。それ
は南北の雨落溝によって推測できる。北雨落溝SD7796は南門SB7750B棟通りの北側3mに位
置する幅1m、深さ25cmの素掘溝で、部分的に護岸の安山岩列をとどめている。中軸線の東
33mで南北溝SD7131とまじわる。南雨落溝SD7804はD地区で比較的良いにこっており、
やはり南門SB7750棟通りの南側3mに位置する同規模の素掘溝である。

SB7770 は中軸線の東27.1m(90尺)へてて、SA3810の心に設けた1間の門である。柱間
縫 門寸法は3.9m(13尺)。柱の掘形は方1m、深さ30cmで、径50cmの柱痕跡をとどめている。こ
の柱位置によって築地心がきまる。

築地の2個所に凝灰岩で組立てた南北暗渠を設けている。SD3815は東南の入構付近にある
暗渠である(f. 30)。第I期の礎敷面に達する幅1.7mの掘形をほり、内に凝灰岩の暗渠を組む。
すでに南北の出入口は破壊され、長さ1.55mの部分をとどめるにすぎない。凝灰岩は基礎石を転
用したもののように角に溝を刻むものをふくむ。底石(4枚)は方50cm、厚さ10cmの材である。
側石(西側5枚、東側4枚)には長さ50cm、幅30cm、厚さ10~20cmの柱状石を主に用いる。蓋
石(4枚)は長さ55cm、幅25cm、厚さ20cm程度のものを用いる。そして、内法で幅37cm、
高さ27cmの暗渠を組立てている。掘形内は石屑や土器・瓦片をふくむ土で埋めもどしている。こ
うした残存部分は築地の北側にあるが、本来は基礎の全幅を横断していたものとみられる。南
北溝SD7131の築地横断部分も暗渠SD7799がある。それはSD3815と同じく、築地
心から南の部分がのこる。基礎石の転用材をふくむ側石と底石を6枚とどめている。

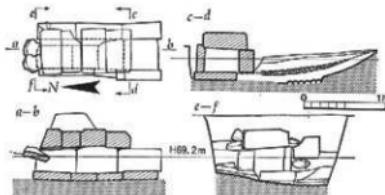


fig. 30 SD3815実測図

SB8310 (PLAN 10, PL. 76・77) 6ABP-B地区

東面中央門である。2間(6.3m)以上×2間(5.4m)の南北棟建物。桁行
門柱間寸法は中央間が3.9m(13尺)、北脇間が2.4m(8尺)で、梁間は2.7m(9
尺)等間である。柱の掘形は方1mでのこりのよいところで深さ75cmあり、径
35cmの柱痕跡がある。南脇間の柱穴は検出していないが、3間×2間の門とみてよい。3間の
門とするとその南北心N157は南面築地の心から北105.1m(350尺)、推定北面築地の心から南
80.98m(270尺)にあたり、宮殿地区の壇上に通ずることになる。なお、妻柱筋は東面築地SA
3800A・Bの中心にあたる。また、イニとハ三の柱掘形が第II期のSC8360の礎石摺付痕跡を掘
込んでいるので、SC8360よりも新しいことがわかる。



2 遺構

SA3800A・B (PLAN 2・3・8~10・20~23, PL. 22・47~49・76・84, fig. 21・31~32)
6ABQ-A・B, 6ABP-A・B地区

SA3800Aは第Ⅲ期当初の東面築地である。第Ⅱ期の東面築地回廊をひきつぎ、回廊部分を東面築地撤去したのであろう。6ABQ-A・B地区においては土墨状の地物として現代まで残存してきた。遺構としては築地のほかに雨落溝・暗渠がある。築地の積土は比較的固く茶褐色を呈する砂礫上で、版築をしめす縞状の層序はみとめられず、第Ⅱ期の築地を踏襲したのか第Ⅲ期に築きなおしたかについては判然としない。そしてまた、崩壊上と本体との識別も困難である。全体に東側からの蓄食が著しいが、のこりのよいところでは1~0.6mの高さをとどめる。

この時期の収容地区6ABP-B区を横断する東西玉石溝SD6607は、築地部で暗渠SD6309と築地の軸になって東方にながれるが、第Ⅱ期の築地東側柱筋で玉石溝がおわり、それ以東は暗渠にかえている。そして、SB8310の株通り筋の西70cmのところに人頭大の安山岩がならぶ(PLAN20)。これがおそらく築地の地覆石になるのであろう。SB8310の北側には地覆石想定線上に、寄柱据付痕跡とみられる鉤形が4間分(12m)のこっている。同様の例は東西源SA6624の築地取りつき部でみられ、ここでは東西源SA6624の柱掘形のうえに重複して地覆石がならび、第Ⅱ期と同じく築地基底幅が1.5m内外であったことがうかがわれる(fig.31)。

築地の西2.6mに、西南落溝SD8226が断続的にのこっている。大部分は幅60cm、深さ30cmの落溝であるが、安山岩の護岸をとどめるところもある。6ABP-A地区では雨落溝がL字状に折れて凝灰岩暗渠SD8227で築地をくぐりぬけている。それは幅1m、深さ40cm程の掘形に凝灰岩板石を組立てて暗渠にしたもので、現状では長さ1mにわたって底石3枚と側石6枚をとどめ、工法は南面築地の場合と同じである(fig.32)。

6ABP-B地区の犬走り上に、一種の暗渠施設SX8332がある。平瓦7枚を凹面向上にして南北方向にならべ、その上に丸瓦6枚をつないでふせたもので(長さ2.27m、幅30cm)、これによりつく溝などは検出していない。築地に設けた門にかかる施設であろうか(fig.33)。この時

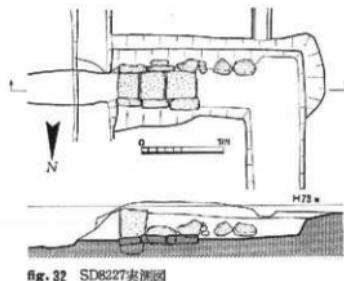


fig. 32 SD8227実測図

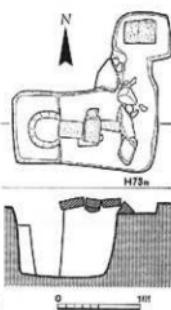


fig. 31 SA3800の地覆石

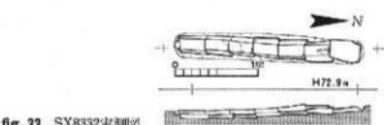


fig. 33 SX8332実測図

2 遺構

付属屋期に必ずしも限定できないが、築地に添つて建つ付属屋がある。6ABD-C地区にある南北棟建物SB9216は、4間(10.8m)×1間(3m)で柱穴の柱間寸法は2.7m(9尺)である。6ABP-B地区にあるSB8242は人頭大の安山岩を礎石にしたもので、7間(10.7m)×1間(1.5m)に復原でき、柱間寸法は不揃いだが1.5m内外となる。

以上のことから、東面築地SA3800Aは第Ⅱ期と同じく南北築地の心々距離が186.08mであり、中心に基底幅1.5m(5尺)の築地を築き、その左右に2.1m(7尺)の犬走りをつけて、雨落溝を設け、犬走りには小規模な付属屋が設けられていたことが想定できる。

SA3800Bは築地の崩壊後に上屋に改変したもので、6ABD-A・B地区において観察でき
土壁た。すなわち、築地本体および崩壊土の両側に土を積みたして、断面がカマボコ形を呈する基底幅4.5m、現状での高さ90cmの土壁に修築している(fig. 21-3)。

SA7223, SA7224, SA7225, SA6635 (PLAN 27・32, PL. 60) 6ABP-A・G地区

北面築地は未掘であり、第Ⅱ期の築地をうけつぐものと想定せざるをえないが、SA6670B
目隠塀の番号を与えておく。ただし、北面築地にともなう遺構は検出した。SA7223, SA7224, SA
7225はいずれも中軸線W267.0をまたぐ木縄で、柱穴が小さなことから仮説的なものとみられる。SA7223は2間(7m), SA7224は3間(9m), SA7225は2間(6.6m)であり、第Ⅲ期北門の日隠
塀とみられる。SA6635は北面築地の東半部中央にある3間(8.5m)の塀。北門の日隠
塀にくらべて柱穴は大きく、方50cmの掘形をもつ。第Ⅲ期北面東門の日隠塀であろう。

B 殿舎地区

第1次大極殿地域の北辺、東西約110m、南北約90mの範囲(6ABP区)を殿舎地区とよぶ。この地区は、調査前から南に接する広場地区よりも約1.5~1.8m高い壇状を呈しており、そのうえで多数の建物を検出した。壇は地山を削りだして造成した創建時のものと、後に南方へ拡張した新しい時期のものとが重複しており、現地形は拡張以後の地形にしたがっている。

壇の上面には黄褐色を呈する小礫を一面に敷きつめ、この整地面から建物等の遺構を検出している。ここでは創建時の遺構を第Ⅰ期にあて、拡張以後の遺構を第Ⅱ・Ⅲ期とした。第Ⅱ期と第Ⅲ期の区別は遺構の重複関係や計画性によって行なう。以下、検出した遺構を第Ⅰ~第Ⅲ期に大別し、それぞれの時期にぞくする遺構をまとめて説明することにする。

i 第Ⅰ期の遺構

SX6600 (PLAN 2・3・25・29, PL. 43・44・61・62・75, fig. 34・35)
6ABP-B・D, 6ABQ-A地区

赤褐色粘質土の地山、つまり舌状に南へのびる奈良山丘陵の一支脈の末端を東西一直線に切
堺積擁壁り崩し、上部を削平して広大な壇(約200a)をつくる。壇の前面は第1次大極殿地域の中軸線
W266.9から東へ49.2mのび、この地点から内角117度5分の角度で東南に折れ、10.9mのびた
ところでまた30度ほど北に折れ曲る。第2の折曲点から12.4mのびたところでまっすぐ南に折
れ曲り、16.2mのびてとまる。壇の前面は約70度前後の傾斜面をなし、外側に堺積みの擁壁を
築いている。

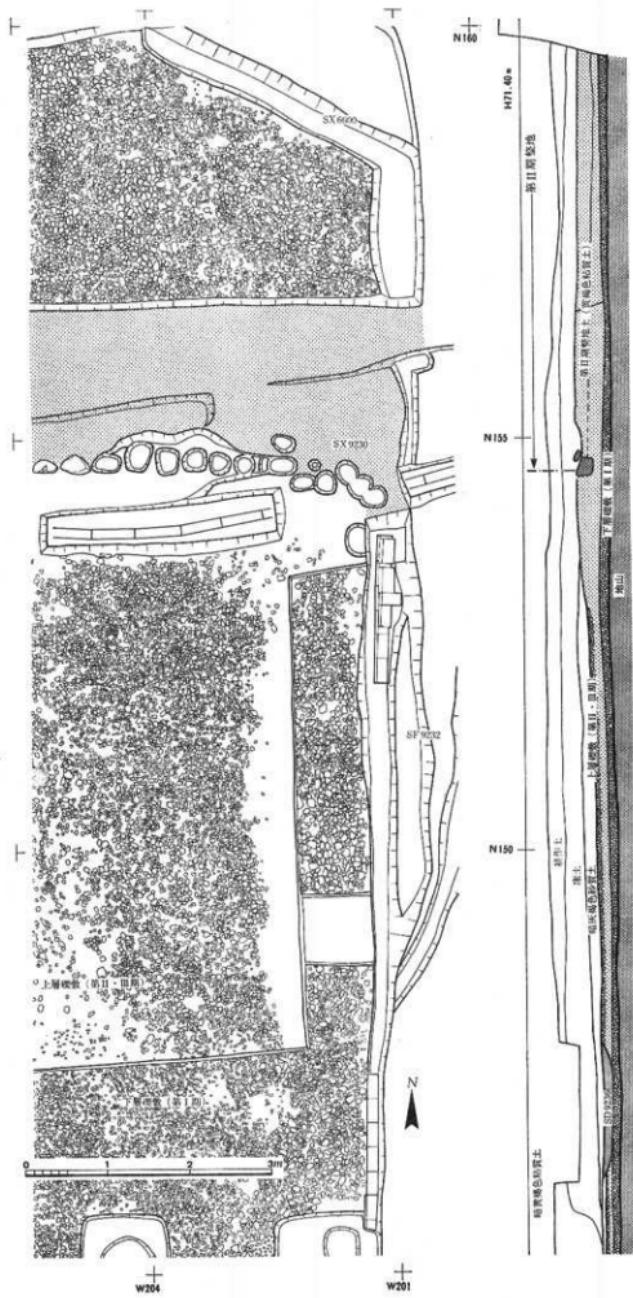


図34 SX6600とSX2240の重複

第三章 遺跡

堆積壁は第Ⅱ期の拡張時にとりはずされ、大半のところでは下部の1・2段をのこすか、抜取痕跡しかとどめていない。6ABP-D地区では、3mにわたって7段の堆積みをとどめていた。塙の積み方が、それがもっとものこりのよい部分であった。堆積みは長方形塙の長側面を外に向けて平積みにしたもので、工字形の目地を呈している。地山の整体にもたせかけるようにして積んでいるが、最下の平坦面と裏側に粘土を薄くつめるほか、塙と塙の間に粘土などをはさむことはない。折曲点における積み方は、塙が抜き取られているか一段しかのこっていないので、不明である。ただし、南進する6ABP-A地区では短側面を外に向ける塙が1個あった。長さをそろえるためであろうか。6ABP-D地区では、堆積みの前方に5cmの間隔をおいて幅8cm内外の溝SD6602があり、その長さは約21mに達している。これを塙の据付痕跡とするならば、據盤の基部に地覆状の堆積みをくわえたことが想定される。

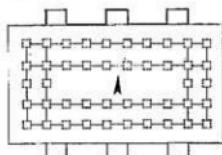
堆積壁の南側は厚さ5~10cmの礫面となり、その上面に崩れた塙片や若干の土器類、瓦片などが散布していた。塙の高さはのこりのよいところで1.85mをとどめるが、本来は2mをこえるものとおもわれる。6ABP-B地区における第3の折曲点以南は次第に低くなっている。塙下の広場に通じる。この東面する堆積壁と築地回廊の間が、一種の斜道SF9232Aとなる(fig.34)。その東限を仮りに東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790にあてるとするならば、幅員は16m程度であり、かりに塙の高さを標高72.4mとして、SF9232Aの南側礫敷の標高70.6mを差引くと、比高が1.8mとなるゆるやかな斜道を想定できる。

SX6601 (PLAN 29, PL. 63・64, fig. 35) 6ABP-D地区

堆積壁 SX6600 直下のバラス敷を除いて検出した東西2間(5.5m), 南北1間(1.69m)の掘立柱階段である。據盤に接する北側の柱穴は、方80cm内外の鉛形に徑約40cmの柱痕跡をとどめる。鉛形の北辺は堆積壁の下にあり、塙を積上げる前に柱が立ったことをうかがわせる。南の柱痕跡は長方形(0.6×1.6m)を呈し、その北辺に径26cm内外の柱痕跡をのこし、中央柱穴の左右におのの小柱穴をともなう。中央の柱位置は中軸線にのっており、階段の造構とみられる。ただし、堆積壁に木製階段がそぐわないことや、礫敷から柱痕跡がたどれなかったことからすると、建設時における仮設的な木製階段であった可能性もある。なお、発掘時においてこの部分の埋土が左右よりも開かったことからすると、木階の廃後には土を中心とする階段を設けたこともかんがえられる。しかし、それを積極的に証明するほどの遺構ではない。

SB7200 (PLAN 3・31・32, PL. 68, fig. 36) 6ABP-F・G地区

基礎石の抜取痕跡によって推定される大型の建物である。大型建物 北面の地覆石抜取痕跡 SD7165は、6ABP-G地区の南寄りにある幅1.1m、深さ10cm内外の深い東西溝で、中央とその左右の3個所で北に向てコ字形に突出している。溝の深さは場所によって若干となるが、底はおおむね平坦である。この溝の南寄り部分の堆積土が暗褐色粘土に微量の瓦片や小砾あるいは凝灰岩片を含んでいるのに対して、北半部は黄褐色粘土で雜物をふくまない。両者の違いは必ずしもはっきりしないが、後者が前者に掘込んでいることはあきらかである。このことから、後者が凝灰岩の基礎地盤石を据えつけたときの造構であり、前者が地覆石を抜取っ



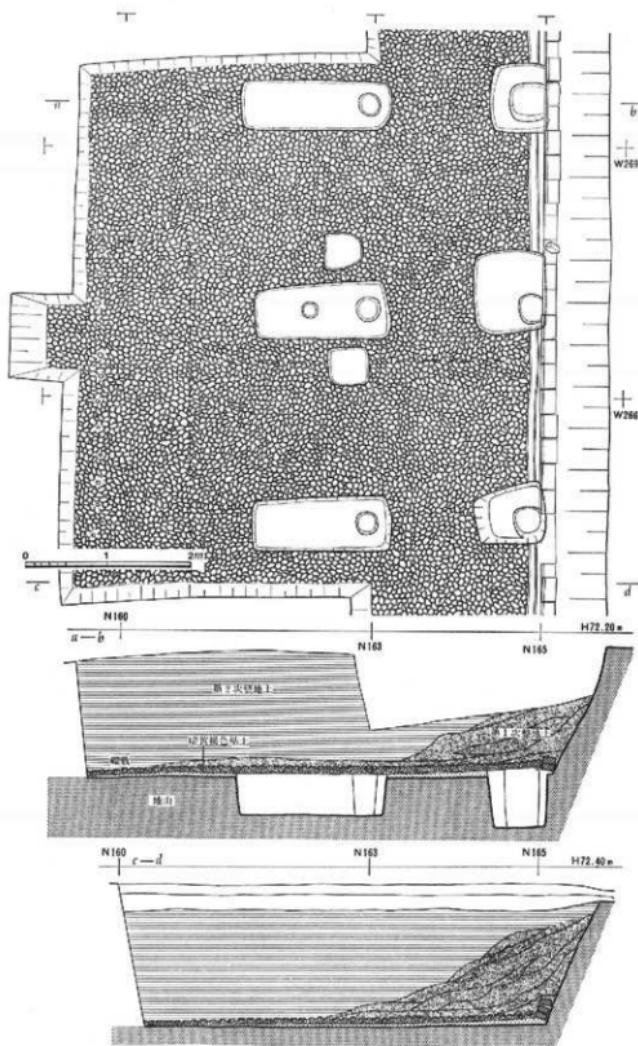


Fig. 35 SX6600 と SX6601 の埋立状況

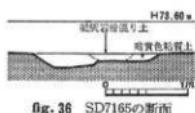


Fig. 36 SD7165の断面

たときの痕跡であることがわかる(Fig. 36)。突出部の幅約5m、出約3.5mで、中央と左右の心々距離は約15mとなり、突出部は階段の痕跡とみられる。なお、中央階段の心は中軸線(W267.0)と一致している。

北面の地覆石抜取痕跡から28.5mに南面地覆石の据付痕跡SD7167がある(6ABD-F地区)。幅1.2mの東西溝だが、のこりがわるく中央から西へ7m程度しか残存しない。北面のSD7165にくらべて浅く、かつ第II・III期の建物SB7151, SB7178の大型柱穴が掘込んでいるため詳細が不明である。この溝の南側にある幅11m、出3.5mのコ字形溝は、南面の階段痕跡であろう。

わずかにこった痕跡から、東西長35m以上、南北幅29.5mの基壇には、階段幅から類推される桁行柱間寸法5m(17尺)の建物がたっていたことになる。わずかにえられた数値は恭仁宮大殿とよく類似している。¹⁾後述するようにSB7200を恭仁宮へ移建した平城宮大極殿にあてるが、建物の平面プランは恭仁宮大極殿よりも一回り大きくなる。その場合、建物規模はつぎのように想定できる。桁行9間(45.1m)、梁間4間(20.7m)の四面廻付建物で、柱間寸法は身舎の桁行17尺(5.0m)梁間18尺(5.3m)とし、廊の出は17尺(5.0m)、基壇の大きさは53.1m(180尺)×29.5m(100尺)に復原できる。この場合の単位尺は29.5cmである。

SB8120 (PLAN 2・34, PL. 91) 6ABO-E・J地区

『平城宮報告II・IV』で報告したところであるが、6ABO-J

後殿地区には北面築地回廊南雨落溝SD130とL字形につながる石敷溝SD244とその下層の東西溝SD242がある。SD244は回廊の雨落溝の場合と同じく、大粒の礫を敷き見切りの石をならべ外方が小粒の礫敷面となる。石敷溝の西縁は中軸線の東2.2mでSD130の南縁から5m南へのびて、東へ折れる。SD244の西側の対象位置は土壙SK8118によって破壊されているが、同様の施設をかんがえることは可能である。このことからSD130にとりつくSD244とSD242は回廊北門に至る軒廊基壇(幅4.4m)の地覆石据付痕跡と雨落溝に推定できる。

東へ折れたSD244は約3mのびたところで土壙SK8079によって破壊されている。しかし、E地区の南辺、中軸線の東25mのところに南北石敷溝SD8103がある。SD8103は長さ1.4mしか検出していないが、SD244と同様の溝であり東側に礫敷面がひろがるので、SD244とSD8103を雨落溝とする建物基壇が想定できる。仮りにこの建物が前方のSB7200と桁行の柱間寸法をえる桁行9間(45.1m)とするならば、基壇の出は2.3m(8尺)ほどとなる。一方、梁間については手掛りを欠くが、SB7200と同じく4間(20.7m)とし、基壇の出を8尺(2.3m)に想定しておく。この場合、基壇の大きさは49.7m×25mとなる。

SB6680 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の南側にある9間(45.3m)×1間(6m)の東西棟建物。

仮設建物 桁行の柱間寸法は東から2・5・8間目を5.5m(18尺)とし、他を4.8m(16尺)とする。柱の掘形は方80cm内外で、第II期建物SD6611の柱掘形によって破

1) 中谷雅治ほか「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査
概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委

員会, 1978, p. 24

2 遺構

壊されている。中央間とその2間おいた両脇間の柱間寸法はSB7200の南北階段幅と同じであり、位置もそろい、ある時期のSB7200の南面には3道の階段があったことが類推できる。この建物は柱彫形が小さいので仮設的な建物であろう。

SB6605 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB6680と重複する7間(21m)×2間(6m)の東西棟建物で、東西に廊がつく。第Ⅱ期建物SB6611および第Ⅲ期建物SB6620の柱彫形によって著しく破壊されており、柱彫形の片鱗しかとどめない。柱間寸法は必ずしも正確でないが、桁行・梁間とも3m(10尺)等間である。柱の彫形は方1.2mでSB7200の南北階段位置に重複しているので、第Ⅰ期のなかでも新しい時期に位置づけられよう。



SB6636 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の東南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱造構。柱彫形は60×80cm内外と若干小さい。この場合、建物の上部構造については二通りのかんがえ方がある。その1はたとえば舞台のような仮設物を想定する。その2は足場とかんがえて3間(9m)×3間(9m), 10尺(3m)等間の基礎石建物を想定する。いまのところいずれともきめがたい。第Ⅱ期の建物SB6611と第Ⅲ期の建物SB6620の柱彫形が掘込まれている。



SB6643 (PLAN 29, PL. 52) 6ABP-D地区

SB7200の西南に位置する4間(11.8m)×4間(11.8m)の総柱造構。北西部は未調査区にのびる。柱穴の大きさはSB6636と同じであり、同様の3間(9m)×3間(9m)の総柱造構が想定できる。SB6636とは中軸線をはさんで対称位置にあり、両建物はSB7200の殿前に建つ舞台ないしは亭の類であろう。

SB7164 (PLAN 32, PL. 67) 6ABP-G地区

SB7200の西階段の北側にある小建物。2間(4.9m)×2間(5.9m)であり、柱間寸法は南北が2.95m等間であるのに対して、東西では3.4m+1.5mと不揃いである。柱穴も小さく、建設時の仮設建物であろうか。第Ⅱ期の建物SB7152の柱彫形が掘込まれている。



ii 第Ⅱ期の遺構

この時期の建物群は、中軸線W297の上に軸線をそろえる中央建物群、その東方にあって東西棟建物を主とする東第1建物群、さらに東方にあって南北建物を主とする東第2建物群の3列に大別することができる。

SX9230 (PLAN 17, PL. 43-44, fig. 34-35) 6ABQ-A地区

殿舎地区の壇を南へ拡張したときの石積擁壁である。この部分は近世の地下げが著しく、かく石積擁壁つ現在構内道路敷として利用しているので、約9mの範囲しか調査していない。

拡張部分は第Ⅰ期の縁敷面上に厚さ15cm内外の黄褐色粘質土をしき、第Ⅰ期の埠積擁壁から18.3m南(N144.5)のところに東西方向に人頭大の安山岩をすえつける(fig. 34)。安山岩は最下部1段のうち4個しか残存せず、他は安山岩の抜取痕跡によってその存在をしる。東端入

第三章 遺 跡

堆積擁壁の埋立 両部分はわずかに南に曲って第Ⅰ期の埠積擁壁にとりつく。6ABP-B・D地区における埠積擁壁 SX6600 施工後の埋立て状況をみると、壁面に近いところでは隣敷面の上に瓦塊や土器片を混入する暗褐色粘質土があり、小礫混りの土が瓦層になって南へ低く堆積する。まさに上方から土砂を崩しあとした状況である。この壇上が壇の上端ないしはそれに近いところに達すると、その上部に粘りのない黄褐色の埋土が一様にひろがる (fig. 35)。埋土には若干の疊をふくむだけで、遺物をふくまず、層状にわかれないと、一気に埋立てたのである。

6ABQ-C 地区の北辺に凝灰岩片がかたまって散布するところに SX7138 があり、擁壁に凝灰岩を用いた部分もあったとおもわれる。石積擁壁の高さは不明だが、後方の連構状況からすれば 1.8~2 m の高さを想定しなければならない。

南の広場から壇にのぼる斜道 SF9232B は第Ⅰ期の規模を継承するが、すでに路肩の埠はぬかれており、土坡のような状況であったろう。

SB6610 (PLAN 29, PL. 50~54・65) 6ABP-D地区

正殿 中央建物群の前面に位置する 9間 (26.85m) × 4間 (11.95m) で総柱の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに 10 尺だが、基準尺は桁行で 29.99 cm、梁間で 29.83 cm となる。方 1.5m 内外、深さ 1 m 内外の柱掘形を径 50 cm 程度の柱痕跡をとどめる。なお、南側柱列と石積擁壁 SX9230 との距離は 13.4m (45 尺) となる。

SB6611 (PLAN 29, PL. 50~54・65, fig. 37) 6ABP-D地区

中央建物群の南から 2 棟目にあける 9間 (26.85m) × 3間 (8.95m) で 3 面に庇がつく東西棟建物。南庇は 1 間だが、東西の庇は 2 間である。柱間寸法と柱穴の状況は SB6610 と同じで、柱筋も一致し、2 棟の建物は 2.98m (10 尺) しか離れていない。身合の中央柱筋に小柱穴 (細形 70 × 50cm、柱頭径 30cm) がならび、床のあったことがわかる。この建物の直上に第Ⅲ期の建物 SB6620 がかさなり、多くの柱穴が破壊されている (fig. 37)。

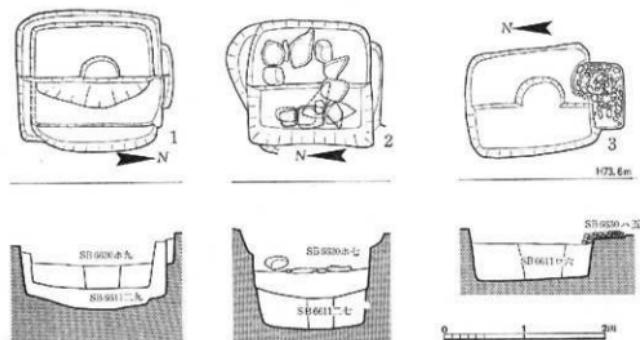
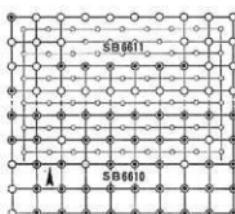


fig. 37 SB6611 と SB6620・SB6630 柱掘形の重複

2 滲 楊

SB6610とSB6611の柱間をねって8間(23.8m)×5間(15m)の總柱造構SS6642があり、足場に想定できる。柱間寸法はおむね3m(10尺)内外だが不揃いである。方55cm、深さ20cm内外の柱掘形に径25cm程度の柱直跡をとどめるものもある。SB6610の南3間分については著しく削平されており、柱穴が消失したものとみるならば、当然SB6610とSB6611は一連の建物として建設されたことになる。

SB7150 (PLAN 31, PL. 65 • 66) 6ABP-F地区

中央建物群の南から3棟目に位置する。9間(26.8m)×5間(15m)で、梁間3間の身舎の4面に廊がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m、梁間3.0m)の等間である。柱掘形や柱痕跡の状況はSB6610と同じ。身舎のハ五、ニ五に梁間を3間にわける柱穴がある。この2個の柱穴掘形は $1.5 \times 0.6\text{m}$ の長方形を呈し、柱底跡も径40cmなので身舎の間仕切柱であろう。また、身舎のニ通に7間分の小柱穴があるが、これは床東の東柱穴とおもわれる。ただしその対称位置の南妻柱筋には小柱穴を検出していない。北側柱の外側2.5mの位置に筋節をそろえる柱列がある。縦束ないしは階段の遺構であろう。

SS7185 は SB7150 の足場である。8間(24.7m) × 5間(16.05m) 分の縦柱造構で、方40cm 足内外の小柱穴からなる。南に接するSB6611とは29.6m(10尺) しか離れておらず、足場を別にするといふ。一連の建物であったことがうかがえる。この建物の南側柱列には第Ⅲ期の建物SB6620、東西の八側柱列にはSB7173とSB7172の柱頭形がそれぞれ掘込まれている。

SB7151A · B (PLAN 32, PL. 67 · 69, fig. 38) 6ABP-G地区

SB7151Aは中央建物群の南から4棟目の建物である。SB7150の北側5.92m(20尺)をへてて位置する9間(26.9m)×2間(5.9m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m, 梁間2.95m)等間である。柱頭形(方1.5m内外, 高さ1.2m)には、径50cm程度の柱抜き跡がある。南側柱列の柱穴に第Ⅲ期の

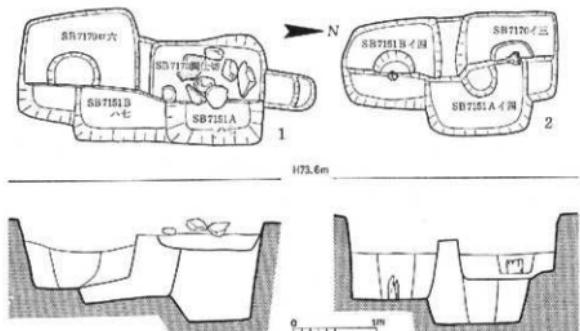


Fig. 38 SB7151A: BII 摂影の重複

第三章 遺 跡

古い足場 建物SB7170の柱穴が掘込まれている。SS7161はSB7151Aの足場で、身舎から南側柱列をはさんで6間(23.8m)×2間(5.8m)の小柱穴列(方40cm)を配する。

SB7151BはSB7151Aを約60cm両へ寄せて建替えたもの。9間(26.9m)×2間(5.9m)で、柱間寸法は桁行・梁間とも2.97m(10尺)等間。柱の掘形は方1.5mで、柱根をのこす柱穴が5個新しい足場あり、うちのこりのよい北側柱東端の柱根の径は30cmである。SS7120はSB7151Bの足場で、多少不揃いだが、身舎から南側柱列をはさんで6間(20.85m)×2間(5.9m)の小柱穴列(方30cm)を配している。SB7151A・Bの柱穴に第Ⅲ期の建物SB7170の柱穴が掘込まれている。

SB7152 (PLAN 32, PL. 66~69) 6ABP-G地区
後方建物 中央建物群の南から5棟目の建物である。SB7151Aの北側5.9m(20尺)をへだてて位置する9間(26.7m)×2間(5.94m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(2.97m)等間である。柱掘形は方1.4m、深さ1.1~1.3mを呈し、柱穴イ七に径44cmの柱根をのこす。桁行の四通の柱筋に小柱穴(方50cm)2個をもうけ、深闇を1.47m(5尺)、3m(10尺)、1.47m(5尺)に分割している。間仕切りの柱であろう。ただし、身舎の柱筋とそろっていないので、改修時のものかもしれない。SS7227はSB7152の南側2.5mのところにある足場。8間(23.9m)の小柱穴列(方35cm)である。

SD6608 (PLAN 25~27, PL. 54・65・68・69・70) 6ABP-D・F・G地区
中央建物群の東2.8mをへだてて流れる石敷の南北溝(全長66.5m)。北方のSB7152の東側で石敷溝は破壊されて痕跡をとどめないが、南端は東西溝SD6609につながって東へ流れる。幅1.1m程度の掘形に、幅45cm内外に敷詰めた安山岩の石敷が部分的にこるだけで、側石は撤去されている。石敷には30×20cm程度の扁平な安山岩を主に用い、部分的に凝灰岩や塊片を敷くところもある。底石の高さは北端(標高73.18m)にくらべて南端(標高72.65m)のはうが低く、北から南へ流れていったことがわかる。

G地区では第Ⅰ期の基壇地覆石据付痕跡SD7165を掘込んでおり、17.3mにわたって溝の幅が1.8mに広がっている。F地区では第Ⅱ期の建物SB6650の柱掘形を掘込んでおり、建物の建築後にこの溝が設けられたことがわかる。また、第Ⅲ期の足場が掘込まれており、第Ⅲ期には下らない。D地区では第Ⅰ期の足場SS6636がこの溝底から検出された。

SD7163・SD6618 (PLAN 27・23・32, PL. 58・69・83) 6ABP-A・G地区
SD7163はSB7152の北1.9mをへだてて流れる素掘りの東西溝。幅30~60cm、深さ4cm。東西素掘溝方は削平されて消失するが、約25m東で検出している東西溝SD6618につながるとみてよい。西端は発掘区外辺で南に折れ、南北溝SD7162につながる。SD6618の東端は同時の建物SB8215の北東で南に折れてSD8211につながる。なお、南北溝SD6608の北端がこの溝とT字形に交る可能性が大きい。直上に第Ⅲ期の東西溝SA6626の柱穴が掘込まれている。

SD7162 (PLAN 32, PL. 69) 6ABP-G地区
SB7152の西妻柱列の西1.8mをへだてて流れる素掘りの南北溝。幅50cm、深さ7cm、長さ南北素掘溝10.1m。この溝と東西溝SD7163とは中央建物群の北辺を囲する役割りをはたすとともに、SB7152の雨落溝をかねている。SD7163の西端よりもSD7162の南端のはうが18cm深く、かつSD7163は発掘区外の西方に流路をかかえるようであるから、西南方に排水したことがわかる。

SB6640 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×2間(6m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が3.6m(12尺)等間。梁間は3m(10尺)等間。柱の掘形は方1.2m、深さ1m内外。北側柱の2柱穴に柱根があり、のこりのよいもので径33cmである。南側柱列の柱穴は他よりも50cmほど深く、凝灰岩や磚などを壁板に用いている。このあたりは跡跡擁壁SX6600の埋立地で地盤が弱かったからだろう。

北側柱列中央柱間に溝状の掘形(幅92cm、深さ30cm内外)がある。左右の柱掘形よりもさきに掘られているが、柱筋に一致しているのでSB6610の付属施設に想定した。この建物は西側のSB6610の中央間2間および東のSB6660A・Bの身舎と柱筋をそろえており、さらに両建物とそれぞれ10尺しかへだたっていないことから、2棟の建物をつなぐ廊のような役割をはたすものとおもわれる。イニ柱掘形が第Ⅲ期の建物SB6622の西廻の柱掘形が掘込まれている。

SD6609 (PLAN 25, PL. 54) 6ABP-B・D地区

SB6640の北2.1mを流れる石敷の東西溝。西は南北溝SD6608につながり、交叉点から東2.5mまでは扁平な安山岩を敷いた底石をとどめるが、それ以後は敷石の抜取痕跡(幅70cm)によって、長さ13m程度の流路があったことがわかる。東端は漸次消失するが、SB6640とSB6660との間を南下するのだろう。

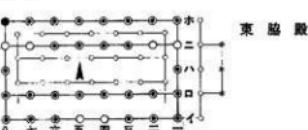
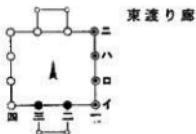
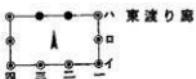
SB6650 (PLAN 26, PL. 57・65) 6ABP-A・F地区

中央建物群と東第1建物群との間に介在する3間(10.8m)×3間(9m)の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺)等間、梁間3m(10尺)等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ0.75~1.26mで、柱抜取痕跡があり、イニ柱穴には抜きえなかった径36cmの柱根がある。南北中央間の外側(南3.8m、北2.4m)に一対の小柱穴(70×50cm)があり、木の階段がつき床が張られていたことがわかる。さらに、南隣段柱の前1.1mのところに3個の凝灰岩切石(方30cm)がならび、基壇もしくは水路の存在を予想できる。第Ⅲ期の建物SB7173の柱掘形がニニの柱穴を掘込んでいる。この建物は梁間の柱筋がSB6640とあい、かつ西側のSB7150の身舎および東側のSB6663の身舎とそれぞれ10尺をへだてて柱筋をそろえており、左右の建物をつなぐ役割をもつものとおもわれる。

SB6660A・B (PLAN 25, PL. 55・56, fig. 40) 6ABP-B地区

SB6660A・Bは東第1建物群の南端に位置する7間(21m)×4間(12m)で、南北2面に窓がつく東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1.5~1.7m、深さ1.7~0.92mで、柱根あるいは磚盤に用いた凝灰岩や木材をとどめるものがあり、のこりのよい柱根は径30cmであった。

東妻柱列の東2.4m(8尺)をへだてて小柱穴列(方50cm)がある。妻柱筋と柱をそろえている縦東と隣設なので縦東の痕跡とみられる。縦東の東2.65mのところに身舎と柱筋をそろえた2間分の小柱穴(掘形1.15×0.6m)があり、木階段があったことがわかる。階段の柱掘形の深さは35cmだが、柱位置だけを15cmほどふかくしている。第Ⅲ期の建物SB6622の柱掘形がイ、ロ、ニニの柱掘形



第三章 遺 跡

足 場 を掘込んでいる。**SS6615A**はSB6660Aにともなう足場で、SB6660Aの身舎から北廊にかけて、6間(22.4m)×2間(6.2m)の小柱穴列(掘形は方35cm)がある。南側はすでに削平されたものとみられる。

増 築 方1m、深さ70cm。へ四・へ五・へ六柱穴の北1.5mのところに2間分の小柱穴(掘形は方30cm)があり、縁東の柱穴にかんがえられる。**SS6615B**はSB6660Bの孫廊にともなう足場で、5間(15m)分の小柱穴(掘形は方35cm)が廊の北寄りにならぶ。

SB6655 (PLAN 28, PL. 55・56, fig. 39) 6ABP-B地区

東第1建物群の南から2棟目の建物。5間(15.0m)×3間(9.0m)の東西棟建物で、四・五通の梁間をそれぞれ3間にわけている。柱間寸

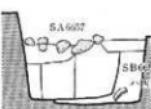


fig. 39 SB6655柱掘形の重複 柱穴が掘込んでいる。

SA8304 (PLAN 28, PL. 56) 6ABP-B地区

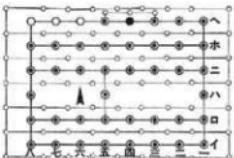
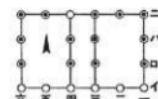
SB6655の東妻柱列の東2.7mに位置する3間(8m)の小柱穴。柱間は2.4~2.7m(8~9尺)と一定せず、SB6655にともなう一時的な遮蔽物である。

SA6657 (PLAN 28, PL. 56, fig. 39) 6ABP-B地区

SB6655の四通の柱掘形に掘込む2間(4m)の南北廊。柱の掘形は方90cm、深さ75cm、掘目隔 壁 形の埋土に凝灰岩や瓦片を多くふくむ。SB6655の廃絶後、南のSB6660Bと北のSB6663との間につくった目隠壁である。

SB6663 (PLAN 26, PL. 57) 6ABP-A地区

東第1建物群の南から3棟目の建物である。7間(20.9m)×5間(15.3m)で、南北2面に廊がつく東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.99m、梁間3.06m)等間である。柱の掘形は方1.6m、深さ1m内外、径40cmの柱根をのこすものもある。この建物は一見すると身舎7間×2間の北側に廊・孫廊をついたように見える。しかし、この場合の柱列にあたる柱掘形は他にくらべて小さく、かつ浅く(方1.2m、深さ70cm)、また後述の身舎梁間の足場痕跡が10尺方眼になることからすれば、7間×3間の身舎を南北に画する間仕切りの柱列にかんがえたほうがよい。また、五通の梁間中央にも間仕切の柱穴が



2 道 構

ある。へ三・へ四・へ五の柱穴の外側2.1mに小柱穴(60×40cm)があり、ここに階段がもうけられたことがうかがわれる。なおこの小柱穴には3回の掘りかえがみとめられる。

SB6661はSB6663にともなう足場で、8間(27.3m)×6間(20.8m)の小柱穴(方50cm、深さ120cm)の縦柱造構である。柱間寸法はかならずしも厳密でないが、桁行では両端の2間を4.5m(15尺)とし、そのほかを3m(10尺)にしている。梁間では側柱列から身舎の心にむかって3.9m(13尺)、3.6m(12尺)、3m(10尺)と次第に柱間をせまくしている。

SB6666 (PLAN 26・27, PL. 58) 6ABP-A地区

東第1建物群の南から4棟目の建物で、南のSB6663とは5.85m(20尺)の間隔をおいて柱筋をそろえ、西方のSB7151Aとも17.8m(60尺)をおいて柱筋をそろえている。7間(20.8m)×2間(5.9m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.97m、梁間2.95m)等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1m内外で、径30cmの柱根をとどめるものもある。柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をつめるところがある。四通の梁間に2小柱穴(方70cm)を配し、梁間を1.5m(5尺)、3m(10尺)、1.5m(5尺)に仕切る。棟通りに柱間寸法が不ぞろいの小柱穴があり、床東とおもわれる。南側柱筋一~三通の外側2mのところに2間分の小柱穴がある。様ないしは階段の痕跡である。

SB6669 (PLAN 27, PL. 60) 6ABP-A地区

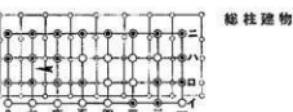
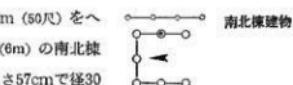
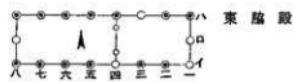
東第1建物群の南から5棟目の建物で、南のSB6666とは6m(20尺)をへだてて柱筋をそろえ、西方のSB7152とも柱筋があう7間(20.8m)×2間(6.0m)の東西棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.97m、梁間3.0m)等間である。柱の掘形は方1.4m、深さ1.1mで、柱抜取痕跡には人頭大の安山岩をいたるものがある。四通の梁間に2小柱穴(方75cm)を配し、梁間を1.5m(5尺)、3.1m(10尺)、1.5m(5尺)に仕切る。

SB8302 (PLAN 17, PL. 72) 6ABP-B地区

東第2建物群の南端に位置する建物で、西のSB6660とは15.2m(50尺)をへだてて柱筋をそろえている。南北2間(6m)以上×東西2間(6m)の南北棟建物。柱間寸法は10尺(3m)等間である。柱の掘形は方1m、深さ57cmで径30cm程度の柱痕跡がある。この建物の南方は著しく削平され柱掘形をのこしていないが、桁行を5間に想定すると石積擁壁SX9230との間隔(4.5m)が短く東面中央門SB9223の進路を塞ぐことになるので3間に復原するのが無難である。東側柱列の東2mのところに足場らしい柱掘形が3間分(9.6m)あるSS8312。重複関係はないが、西方のSB6660と北方のSB8245と柱筋をそろえているので第Ⅱ期とした。

SB8245 (PLAN 21, PL. 73・83) 6ABP-A・B地区

東第2建物群の南から2棟目の建物。南方のSB8302とは11.95m(40尺)の間隔をおく。7間(20.86m)×3間(9.0m)で、縦柱の南北棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m、梁間3m)等間である。柱の掘形は外側の柱列が概して大きく、一般には方1.2m、深さ0.57~1mである。柱痕跡はかならずしも明瞭ではないが、径38cmのものが



第三章 遺跡

ある。また厚さ8cmの凝灰岩製の礎盤を有するもの、あるいは、柱抜取痕跡に人頭大の安山岩をつめるものもある。SS8358はSB8245の足場である。8間(25m)×5間(13.7m)の小柱列(柱形は方40cm、深さ35cm)で、柱間寸法は一定しない。SB8245の東側柱列では外側2.4mのところに配し、西側柱列では内側約90cmのところにならべる。一方、内側の梁間2列分の柱列はほぼSB8245の柱筋にそろえている。

SB8210 (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

東第2建物群の南から3棟目の建物のうち西側に位置する建物。西のSB6669とは6m(20尺)、南のSB8245とは約9m(30尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。柱間寸法は10尺(桁行2.98m、梁間2.95m)等間である。柱の掘形は方1.2m、深さ70cm内外で、径40cm程度の柱痕跡をとどめるものもある。六通の梁間中央に柱掘形があり、間仕切りの柱ないしは北廻の北妻中央の柱掘形である。東のSB8215および西と南の第II期建物と柱筋をそろえているので、重複関係はないが第II期とした。

SB8215 (PLAN 23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

東第2建物群の南から3棟目の建物のうち東側に位置するもの。西のSB8210とは6m(20尺)の間隔をおく。6間(17.9m)×2間(5.9m)の南北棟建物。平面形、柱間寸法、柱穴の状況などはSB8210と同じである。北妻柱列のイ七・ロ七の柱穴に第III期の建物SB8218Aの柱掘形が掘込まれている。

SD8211 (PLAN 22・23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

東第1・2建物群の北側1.5m(5尺)に位置する素掘りの東西溝SD7163・SD6618がSB8215の北東部で南におれ、南北溝SD8211となる。SD8211はSB8215、SB8245の東1.5mを南北に流れる溝には疊混りの赤褐色土が堆積するのみで、遺物を少く。SB8245の四通の柱筋あたりで消失する。第III期建物SB8222、SB8224、掘SA8217が掘込んでいるSB8215の両落溝にもなろう。

SK8213 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP-A地区

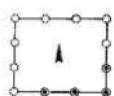
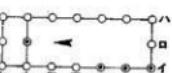
SB8210の北側にある土壠。長さ6.2m、幅1.2m、深さ20cmの浅い土壠で、人頭大の安山岩のはか瓦、土器片が比較的多く出土した。SA8223、SB8218など第III期の柱掘形が掘込まれており、出土の遺物が奈良時代前半にさかのばらないので、第II期にした。平城宮土器Vが出土しており、第II期の魔絶時期をしめしている。

SB7155 (PLAN 31, PL. 51) 6ABP-F地区

中央建物群と推定西第1建物群との間に介在するとおもわれる建物。SB7150と柱筋をそろえ西3.5mをへだてている。東西2間(7.2m)以上×南北1間(3m)以上の建物。柱間寸法は桁行3.6m(12尺)、梁間3m(10尺)で、柱の掘形は方1.3m内外、径40cm程度の柱痕跡をのこす。東方のSB6650と対称位置にあることから、それと同規模の3間×3間の建物が想定できる。

SD6645 (PLAN 29, PL. 51) 6ABP-D地区

中央建物群のSB6611の西側を流れる素掘りの南北溝。東方のSD6608の対称位置にあり、中央建物群の西面を面する溝とおもわれるが、F地区では検出していない。



iii 第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期にも石積擁壁SX9230および斜道SF9232Bが存続し、壇上に殿舎が群立する。建物の平面形と配置は第Ⅱ期とはまったく様相をことにし、中軸線上の正殿、後殿を中心にしてその東方に6棟の脇殿を配し、建物の間を廊や溝で区切っている。建物は原則として掘立柱であるが、礎石建物も混えている。

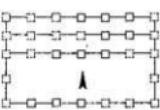
SB6620 (PLAN 30, PL. 50~53) 6ABP-D・F地区

中軸線(W267)上に位置する建物でこの時期の正殿とみられる。前面の石積擁壁SX9230の後方23.8m(80尺)をへだてて建つ。9間(29.2m)×5間(17.4m)で、4面に廊がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎で10尺(桁行2.98m、梁間3m)等間、廊で4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.6m、深さ70cmで、身舎の柱穴では柱痕跡(径55cm)を扁平な安山岩の根固め石がとりまく。ただし、イー・イ十・ハトの柱穴は方1m、深さ45cmと他の柱穴にくらべて小さくかつ浅いので、本来は隅欠きの建物であったろう。また、西廊の柱抜取跡には安山岩が投げこまれている。一通のハ・ニ柱穴にそろえて2間(3.8m, 13尺)の階段がとりついている(fig. 37)。

SS6675はSB6620の足場である。SB6620の南北廊の柱間と身舎の内側にかけて、6間(17.9尺m)以上×5間(16.6m)の小柱穴列(方60cm、深さ20cm)がある。柱間寸法は必ずしも一定しないが、およそ桁行を2.98m(10尺)等間とし、梁間では身舎の2間と南北間1間を2.98m(10尺)、廊間を3.87m(13尺)とする。

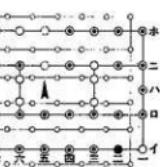
SB6630 (PLAN 30, PL. 50~53) 6ABP-D地区

第Ⅱ期建物SB6611の柱掘形にかさなって、径80cm内外の範囲に小砾をつめた遺構がある。それらは9個しか存在しないが、礎石添付跡とみなしうる。そのほかに掘付けの掘形もある。復原すれば7間(21m)×4間(10.2m)の東西棟建物で、北側に廊と孫廊がつく。本来は南北廊も存したであろうが、削除されて消失している。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、廊・孫廊は2.1m(7尺)である。SB6620の後身舎とおもわれるが、規模は格段に小さい。



SB7170 (PLAN 32, PL. 65~67) 6ABP-G地区

中軸線上に位置する建物でこの時期の後殿。SB6620とは20.45m(68尺)の間隔をおく。7間(20.98m)×4間(14.4m)で南北2面に廊がつく東西棟建物。柱間寸法は身舎の桁行・梁間ともに3m(10尺)等間であり、南北の廊は4.2m(14尺)である。柱の掘形は方1.3mだが、深さは身舎で80cm、廊で50cmである。径40cm内外の柱痕跡をとどめるものや、柱痕跡のまわりに安山岩の根固め石をめぐらすもの、柱抜取跡に安山岩の塊石を投げ入れるものがある。身舎の三通と六通の梁間に2個の小柱穴を掘り、梁間を1.5m(5尺)、3m(10尺)、1.5m



第Ⅲ章 遺 跡

(5尺)に仕切る。身舎の南側柱列の柱掘形が第Ⅰ期のSD7165を掘込み、南廊の柱掘形が第Ⅱ期のSB7151Aの柱掘形を掘込んでいる。

SS7214はSB7170の足場である。6間(18.2m)×5間(19.5m)の小柱穴列(方60cm, 深さ20cm)を配置する。柱間寸法は厳密でないが、桁行は3m(10尺)等間とする。梁間は南北の廊を4m(南北のはじまりはSB7170の廻列の外側2.5m)とし、内の3間を3.6m(12尺)とする。

SK7193, SD7188, SD7195 (PLAN 32, PL. 68・69) 6ABP-G地区

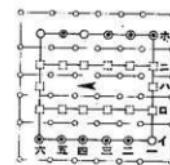
SK7193はSB7170の身舎西面仕切内にある土塗。長辺を南北にとる長方形(挿さ3m, 幅1.66m, 深さ47cm)を呈する。下部には粘質土と砂質土が堆積し、上部に若干の遺物をふくむ暗褐色土層が堆積している。

SD7188はSB7170の6通と7通間の身舎から北へのびる素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ20cm)。褐色土が堆積している。南端はSK7193に注ぎ、北は発掘区外にのびる。SD7189はSD7188に平行する素掘りの南北溝(幅55cm, 深さ10cm)。暗褐色土が堆積しSK7199につながる。SD7188の後身であろう。SD7195はSK7193の西南隅から西方にのびる玉石敷の東西溝。現状では側石の抜取痕跡しかとどめていない(幅60cm)。

SK7193は一種の貯水施設であり、SD7188ないしはSD7189は北からの導水路であり、SD7195は西方への排水路とおもわれる。SD7188には水が流れた痕跡がなく、本来は木樋暗渠であった可能性がある。そのうちSD7189が第Ⅱ期のSB7152の柱掘形を掘込むことから、第Ⅲ期となり、SB7170に矛盾なくおさまることから、浴室のようなSB7170の付属施設に想定した。

SB7173 (PLAN 28, PL. 65・66) 6ABP-F-G地区

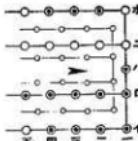
SB7170とSB6620との間は建物幅の中庭となり、その東西に脇殿を配する。SB7173は東側の脇殿で、5間(13.5m)×4間(13.2m)、東西2面に廊がつく南北棟建物である。現在、東西の廊柱列の柱掘形しか残していないが、後述する足場掘形の位置関係によって5間×2間の礎石付き身舎を想定することが可能である。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間であり、身舎の梁間を桁行と同じ2.7m(9尺)等間とすれば廊は3.9m(13尺)となる。北妻柱通りの東側柱の内側にある浅い土壌は、かろうじてのこった礎石掘付痕跡である。掘立柱の掘形は方1.2m、深さ1.5mで径40cmの柱痕跡をとどめるものもある。また、柱抜取痕跡に石を詰めるものもある。



SS7186はSB7173の足場で、6間(18.2m)×5間(17.9m)の小柱穴列(方60cm, 深さ25cm)

である。外周の柱穴はSS7186の柱穴の外側約2.4mに位置し、柱間寸法は厳密でないが、桁行では南北の両端を3.6m(12尺)、他を2.7m(9尺)とする。梁間は両端の間を4.2m(14尺)とし、内側の間を3.8m(11尺)とし、中央の間を2.7m(9尺)とする。

SB7173の西側柱列の柱掘形が第Ⅱ期の建物SB7150の柱掘形を掘込み、SB6620とSB7170の東妻柱筋に西廻柱列をそろえている。



SB6622 (PLAN 25, PL. 50・56, fig. 40) 6ABP-B地区

SB6620の南東に位置する。5間(13.3m)以上×4間(14.4m)で、東西2面に廊がつく南北棟建物。南妻柱列はすでに削平されている。柱間寸法は桁行2.66m(9尺)等間、梁間は身舎を3m(10尺)等間、

廟を4.2m(14尺)とする。身舎の柱掘形はやや大きく(方1.5m),廟は小さい(方1.2m)。径45cmの柱痕をとどめるものがある。桁行は5間ないしは7間と想定されるが、他の脇殿の規模と同じとすると5間ともおもわれる。

SS6614はSB6622の足場。4間(12.9m)以上×3間(10.3m)の小柱穴(方60cm, 深さ20cm)による柱跡遺構で、北側の柱穴列はSB6622の北妻柱列の北2.7mのところにある。

SB6622は第II期の建物SB6660A・Bの柱掘形を掘込み、SB6620の南側柱筋とSB6622の北妻柱筋をそろえている。

SD6612, SD6652, SD6606, SD6659

(PLAN 25, PL. 50・56) 6ABP-B地区

SD6612はSB6622の西1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石

敷の南北溝(幅1m)。現状では南半に底石の安山岩をとどめ、北半には据付痕跡をとどめる。雨落溝北端は東西溝SD6606につながり、南は石積擁壁SX9230下の南北溝SD7133につながるようである。ただし、SD7133との間に1.8m内外の落差を生じることになる。

SD6652はSD6612に西方から合流する東西溝(幅60cm, 長さ7m)。内に玉石がちらばり、本来は石敷であった可能性がある。西端は削平されて不明。

SD6606はSB6622の北2.1m(7尺)をへだてて流れる石敷の東西溝(幅70cm)。現状では玉石の抜取痕跡しかのこっていない。SD6659はSB6622の東1.65m(5.5尺)をへだてて流れる石敷の南北溝(幅65cm)の痕跡。玉石の底石を抜取った痕跡や移動した凝灰岩がある。SD6612・SD6606・SD6659はSB6622をとりまく雨落溝でもある。

SA6623 (PLAN 25・26・28, PL. 55・56) 6ABP-A・B地区

SB6622の北妻中央柱からはじまり、北方の東西桟SA6624につながる7間(20.55m)の南北溝。柱間寸法は原則として3m(10尺)だが、北第5・6間を2.85m(9.5尺)に縮めている。東部の仕切桟。柱の掘形は方1m、深さ40cmで、なかには柱抜取痕跡に凝灰岩をつめたものもある。

SB8300 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP-B地区

SB6622の東10.8m(36尺)にある3間(9m)以上×4間(12m)の南北棟2面廟建物。廟は東西につき、南妻柱列は削平されている。柱間寸法は桁行・梁間ともに3m(10尺)等間である。身舎の柱掘形は方1.5m、深さ1mで、径40cm内外の柱痕跡をとどめ、安山岩の礫盤をえるものもある。廟の柱掘形は方1m、深さ70cmで、径30cm程度の柱痕跡があり、柱根の残骸や柱抜取痕跡もある。桁行を5間に復原すれば第III期の東面築地の門SB8335と心がそろう。SB8300の東側柱列の東2.3mに方50cm程の柱穴の3間分(9.4m)の小柱穴列SS8313がある。その北端の小柱穴の西3mにも1個の小柱穴があり、それらはSB8300の足場とみられる。

SD8301 (PLAN 20, PL. 72) 6ABP-B地区

SB8300の東1.5m(5尺)にある素掘の南北溝(幅1.1m、深さ30cm)。底は南に向って傾斜し、北端で西にのびた痕跡がある。南は石積擁壁下へ流れ落ちるのであろうが、対応する溝を検出していない。擁壁の南7.5mのところで東西に流れる玉石溝SD9236が斜道SF9232Bの路肩

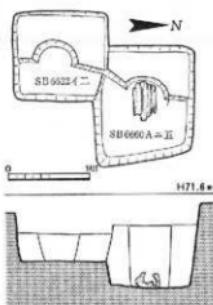


fig. 40 SB6622とSB6660柱掘形の重複

でL字状に曲り、SD8301の水をうけた可能性がある。

SD6607 (PLAN 20・25, PL. 55・73) 6ABP-B・D地区

SH8300の北7.8m(26尺)に位置し、殿舎地区の東半部を横断する石敷の東西溝である。西端はSB6620の東廻柱列の東約2mからはじまり、東は東面築地SA3719を暗渠SD6309で貫通し、主要な排水路
外郭に出る全長68m(227尺)の溝である。現状では溝を構築した安山岩とおもわれる石材の抜取痕跡のみをとどめ、石敷の原形をのこすところはない。西半部では抜取痕跡の残存状況がわるいが、東半部では良好な痕跡をとどめている。抜取痕跡による溝幅は1.1m、深さ45cmで、側石と底石の抜取痕跡を判別できる。すなわち、底石は両側よりも20cm程度深く掘下げて掘えつけ、本来の溝内法幅が30cm、深さが20cm以上であったことがわかる。また、さきに側石を抜きとり、のちに底石を抜きとったことが理上の堆積状況からうかがえる。東端の溝底(標高72.06m)にくらべて西端の溝底(標高72.50m)のほうが40cmあまり高く、郭内の雨水などを排水する主要水路であったことがわかる。第Ⅱ期の建物SB6655およびSB6660の柱掘形を掘込んでいる。

SB8305 (PLAN 20, PL. 73) 6ABP-A地区

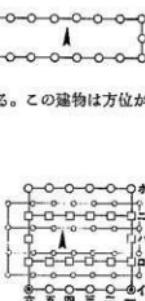
東西溝SD6607の北3.5mに位置する7間(18.94m)×2間(4.8m)

仮設建物の東西棟建物で、建物の方位が西で北へ少し振れている。柱間寸法は桁行2.7m(9尺)、梁間2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形は方50cm、深さ45cm内外である。第Ⅱ期の建物SB8245の柱掘形を掘込んでいる。この建物は方位が振れ、柱穴が小さなことから仮設的な建物とみられる。

SB6621 (PLAN 27, PL. 57・58) 6ABP-A地区

後殿SB7170の東13m、脇殿SB7173の北3.6mをへだてて位置する。

磯石混用の建物
5間(12.6m)×4間(12.45m)で、南北2面に廊がつく東西棟建物。身舎の柱は本来礎石をえたらしく、断続する布掘り風の礎石据付痕跡(幅1m、深さ20cm内外)がある。柱間寸法は、桁行2.52m(8.4尺)等間、梁間は身舎が2.8m(9尺)等間で、廊が3.42m(11尺)となる。廊の柱掘形は方1m、深さ40cmで、柱抜取痕跡に塊石を投入するものがある。



SS6665はSB6621の足場である。6間(15.3m)×3間(9.4m)の小柱穴(方60cm)による絶

足場
足場柱造構。柱間寸法は不揃いだが、桁行では東の端間を3m(10尺)とし、他を2.4m(8尺)とする。梁間は3.13m(10尺)の等間である。この足場はSB6621の本体から少し西にずれており、また西妻柱列の礎石据付痕跡が約1.5m西から掘られていることからすれば、誤って西寄りに足場を組んだのち東寄りに建物位置を修正したのであろう。

SB6621の柱穴は他時期の遺構と重複しないが、棟通りがSB7170とそろい、SB7173の東側柱筋とこの建物の西妻柱筋とがそろっているので第Ⅲ期におく。

SD7177 (PLAN 27・31, PL. 65) 6ABP-C地区

脇殿SB7173の北1.5m(5尺)を流れる素掘りの東西溝(長さ9.35m、幅1m、深さ15cm)。ところどころに壇や凝灰岩をならべた痕跡があり、本来は石敷ないしは壇敷の溝であった可能性がある。東端は南北溝SD7175につながって北流する。この溝の西3.4m延長線上に凝灰岩抜取り痕跡があるので、後殿SB7170の南面雨落溝の雨水をあつめたようである。第Ⅱ期の建物SB

7220の柱掘形と南北溝SD6608を掘込んでいる。

SD7175 (PLAN 27, PL. 67) 6ABP-G地区

SB6621の西3mに位置する素掘りの南北溝（長さ23.65m、幅70cm、深さ15cm）。南端の溝底 素掘溝にくらべて北端のほうが13cm深いので北流する溝であったことがわかる。南端はSD7177とつながり北端はSD6633につながる。溝には平城宮土器Ⅶの土器片が多数堆積し第Ⅲ期の年代をきめる手掛りになった。

SD6633, SD6632 (PLAN 27, PL. 58・60) 6ABP-A・G地区

SD6633は南北溝SD7175が東へ折れ曲った素掘りの東西溝（長さ26.5m、幅75cm、深さ25cm）。堆積土のなかに多くの平城宮土器Ⅶの土器片をふくむ。西端の溝底にくらべて東端のほうが約10cm低く、東へ流れたことがわかる。SD6632は東西溝SD6633が南へ流路をかえた南北溝（長さ12.7m、幅70cm、深さ20cm）。やはり平城宮土器Ⅶの土器片が堆積している。

SA6626 (PLAN 27・32, PL. 58・65) 6ABP-A・G地区

後殿SB7170の北5mに位置し、SB7170およびSB6621の北面を遮蔽する東西屏。2間分の未掘部分をふくめて25間（73.25m）を検出した。東端は南北溝 SD6631 の西側で南に折れて南北屏SA6625となり、西端は発掘区外へのびる。柱間寸法は2.93m（10尺）。柱の掘形は1.1m×0.9m、深さ60cmで、径40cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期の東西溝SD7163およびSD6618の直上に掘込んでいる。

SA6625 (PLAN 26・27, PL. 57・58) 6ABP-A地区

SB6621とSB7173の東方を囲む南北屏。全長12間で（36.25m），北端は東西屏SA6626につながり、南端は東西屏 SA6624につながる。柱間寸法は3.0m（10尺）等間。柱の掘形は北方ではSA6626と同じく長方形（1.1m×0.9m）を呈するが、南方の3間分は方形（方90cm、深さ55cm）をなす。ともに径30cmの柱痕跡をとどめるものがあり、また柱抜取痕跡に凝灰岩の破片をつめたものもある。北端の柱痕跡（SA6624の東端柱穴でもある）の位置にくらべて、南端の柱痕跡（東西屏SA6624の東第7柱穴）のほうが西へ20cmふれていている。

SA6624 (PLAN 21・26, PL. 57・73) 6ABP-A地区

殿舎地域東半部を南北に横する東西屏。西端を脇殿SB7173の東側柱列南端の柱穴につなぎ、東端を東面築地SA3800Aにむすんでいる。全長21間（62.3m）。柱間寸法は3.01m（10尺）で、柱の掘形は方90cm、深さ50cmである。なかに径40cmの柱痕跡をとどめるものや凝灰岩をつめた柱抜取痕跡がある。西から第3柱は南にのびて南北屏SA6623となり、西から第7柱および第10柱からは北へのびて南北屏SA6625、SA6629になる。柱穴の重複関係はないが、第Ⅲ期の建物との間に共通の計画性がみとめられるので第Ⅲ期においた。

SA6629 (PLAN 21~23, PL. 82・83) 6ABP-A地区

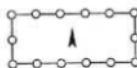
殿舎地域の北東部を東西に区画する南北屏。南端を東西屏 SA6624 の西から第10柱に結び、北端は北面築地にむすぶものとおもわれる。全長15間（45.4m）で、柱間寸法は北第8間と第12間を3.3m（11尺）にするほかは、3m（10尺）の等間である。柱穴の状況は東西屏SA6624と同じ。第Ⅱ期の東西溝SD6618と北面築地回廊南雨落溝SD8214を掘込んでいる。

SB8219 (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP-A地区

東西屏SA6624の北9.3m（31尺）、南北屏SA6629の東4.8m（16尺）をへだててたつ5間（15m）

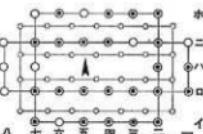
第Ⅲ章 遺跡

× 2間 (6m) の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに 3m (10尺) 等間である。柱の掘形は方 0.8~1.5m, 深さ 50cm, 柱痕跡は概して不明瞭だが、径 25cm の柱痕跡をとどめる柱穴もある。西妻柱列の柱穴に SB8224 の西廻柱掘形が掘込んでおり、それよりも古いことがわかる。



SB8224 (PLAN 22, PL. 81・82) 6ABP-A地区

SB8219 と同位置につつ。7間 (22.2m) × 4間 (13.2m) で、開欠きの建物 4面に庇がつく東西棟建物。ただし、庇の4隅の柱穴を欠いている。柱間寸法は身舎が 3m (10尺) 等間で、庇が 3.6m (12尺) である。柱の掘形は方 1m, 深さ 50cm 内外。径 40cm 程度の柱痕跡をとどめるものがある。身舎の東妻柱の柱穴には径 50cm の扁平な安山岩をすえているが、他の柱穴ではみられず、礫石建物に想定することはできない。柱の高さをそろえるためだろうか。SB8219 の西妻柱列の柱掘形に八通の柱掘形を掘込んでいる。



SS8828 は SB8224 の足場。6間 (15.8m) × 2間 (6.6m) の総柱造構。柱間寸法は厳密でないが、桁行では西 2間を 3.6m (12尺) とし他の 4間を 3m (10尺) とする。梁間では南側を 3.6m (12尺) とし、北側を 3m (10尺) とする。柱の掘形は方 50cm, 深さ 30cm 内外で、径 25cm 程度の柱痕跡がある。

SA8225 (PLAN 22, PL. 82) 6ABP-A地区

SB8224 と南北槻 SA6629 との間にあつ 2間 (4.5m) の南北槻。柱穴の状況は SB8224 と同目隠壁 じ。柱間寸法は 2.25m (7.5尺) である。この槻に面する SA6629 の柱間が西からの入口とすれば、一種の目隠壁である。

SA8217 (PLAN 22, PL. 83) 6ABP-A地区

SB8219 の北 8.8m (30尺) をへだててたつ東西槻。西は南北槻 SA6629 の南から第 8 柱からは南北仕切 じまり、東は東面築地 SA3800A にとりつく。全長 11間 (33m) で、柱間寸法は 3m (10尺) 等間である。1.0m × 1.3m, 深さ 50cm 内外の柱掘形に径 40cm 程度の柱痕跡がある。この東西槻は、殷合地域の東北部の一郭を南北に区画している。

SD6631 (PLAN 23・27, PL. 88・89) 6ABP-A地区

殷合地区の北東部を貫通する素振りの東西溝 (幅 70cm, 深さ 20cm 内外)。西端は SD6632 につながり、東端は東面築地西南落溝 SD9226 につながる。第Ⅱ期建物 SB8210 と SB8215 の柱穴を掘込んでいる。

SB8218A・B (PLAN 23, PL. 83, fig. 41) 6ABP-A地区

SB8218A は東西槻 SA8217 の北 9.3m (31尺), 南北槻 SA6629 の東 5.1m (17尺) をへだててたつ 5間 (14.1m) × 2間 (6m) の東西棟建物。桁行の柱間寸法は、東西面臨間を 3m (10尺) とし、内の 3間を 2.7m (9 尺) 等間にする。梁間は 3m (10 尺) 等間。柱掘形は方 1.2m, 深さ 50cm 内外だが、柱痕跡は明瞭でない。東西の妻柱列の

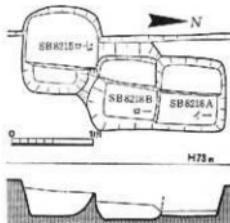


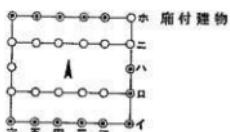
fig. 41 SB8218A・B 柱掘形の重複

柱掘形に後身のSB8218Bの柱掘形が掘込んでおり、南側柱列の柱掘形にやはり第Ⅲ期の建物SB8222の柱掘形が掘込んでいる（fig. 41）。

SB8218BはSB8218Aをほぼ同位置でたてかえたもの。5間（14.1m）×2間（6m）の東西棟建物。桁行の柱筋はSB8218Aと同じだが、梁間の柱筋を2.1m北へ移動している。柱間寸法や柱掘形の状況はSB8218Aと同じである。

SB8222 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP-A地区

SB8218Bのあとにたつ5間（14.1m）×4間（12.96m）で南北2面を廊とする東西棟建物。柱間寸法は桁行の両脇間を3m（10尺）とし、内間の3間を2.7m（9尺）とする。梁間は身合を3.02m（10尺）等間とし、北廊を3.32m（11尺）、南廊を3.62m（12尺）とする。身合の柱掘形が若干大きめ、方1m、深さ55cmである。柱抜取痕跡に礎石をつめるものがある。廊の柱掘形は、 $1.2 \times 0.7m$ 内外の長方形を呈し、径40cmの柱痕跡をとどめる。身合の側柱列の柱穴がSB8218A・Bの柱掘形を掘込んでおり、3棟のうちもっとも新しい建物であることがわかる。桁行の両脇間を広くとる身合の柱間寸法が、SB8218A・Bと同様である点が注目される。



SA8222 (PLAN 23, PL. 83) 6ABP-A地区

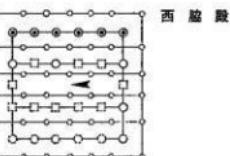
SB8222と南北接するSA6629の間にある2間（5m）の南北廊。柱穴の状況はSB8222と同じ。柱目廊間寸法は2.5m（8尺）である。この廊が面するSA6629の柱間が西からの入口とすれば、SB8222の日陰屏になる。

SD6644 (PLAN 30, PL. 51) 6ABP-D地区

正殿SB6620の西側にある石敷の東西溝。底に敷いた安山岩・凝灰岩が部分的にこなるが、石敷の多くは抜取痕跡をとどめるにすぎない。SB6620の南側柱列の西端からはじまり、8.5m西へ流れて南流するようである。石敷の幅は35cm内外であるが、両側石はまったく抜き取られている。

SB7172 (PLAN 31, PL. 52) 6ABP-F地区

正殿SB6620の西北方に位置する脇殿。5間（13.4m）×4間（13.2m）で、東西2面に廊がつく南北棟建物。柱間寸法は桁行で2.7m（9尺）等間。梁間は廊で3.9m（13尺）、身合で2.7m（9尺）等間。柱の掘形は $1.5 \times 1.3m$ で、深さは75cm、径45cm程度の柱痕跡がある。柱穴のうち身合の柱と2個の側柱穴をかいている。後述の足場を考慮すれば柱の存在は予想されるところであり、本来は柱があったとみなければならない。たとえば、当初に古材の柱を再用し、材の長さの都合で一部の柱は礎石立ち、他は掘立柱としたことがかんがえられる。中軸線をはさんで東方のSB7173と対称位置にある。東側柱列の柱穴が第Ⅲ期の建物SB7150の柱掘形を掘込んでいる。なお、この建物の西半分は発掘していない。



SS7228はSB7172の足場。桁行6間（18.4m）、梁間4間（13.5m）以上の総柱造構が想定で足場となる。柱掘形は方50cm、深さ30cmである。その外側の柱位置はSB7172の東2.0m、南2.5m、北2.4mに位置している。

第三章 遺跡

SB7209 (PLAN 32) 6ABP-G地区

後殿SB7170の西方に2間分(5.2m)の柱掘形がある。それは東方にあるSB6621の北側柱列西から3本の柱穴と中軸線をはさんで対称位置にある。このことから、西方にもSB6621と同規模のある5間(12.45m)×4間(12.45m)の建物があったことを推測できる。

iv 時期不明の遺構

時期ならびに性格をきめがたい遺構が少なからず存在している。その多くは各所に散在する小柱穴および小土塽である。それらの各々についてはふれない。SK7192・SK7191(6ABP-G地区, PLAN27)は第Ⅲ期の北辺を面する東西溝SA6626外にある浅い土塽。一種のごみ捨場ないしは土取り跡ともわれる。

C 広場地区

築地回廊の内部、殿舎地区の施設以南は、原則として建物のない広場であり、朝庭としているのであろう。第Ⅰ期では東西約167m, 南北約205mの縦長の長方形(34,235m²)を呈し、第Ⅱ・Ⅲ期では東西約167m, 南北約86mの横長の長方形(14,362m²)に縮小している。すでに述べたように、北方が高く南方が低い地勢を呈している。

i 第Ⅰ期の遺構

SH6603A (PNAN 2)

殿舎地区と南門SB7800の間に展開する小疊敷の広場。築地回廊の雨落溝ぎわから堆積壁下疊敷広場にまで展開する。6ABR-G・6ABQ-B地区以北では砂質質ないしは茶褐色粘質土の地山を平坦にして整備の疊を厚さ10cm内外に敷きつめる。6ABR-H地区における地山が黒色粘質土にかわる低湿地では、部分的に粘質砂土をいれて整地したのち疊をしいている(下層疊敷面)。6ABR-H地区の南寄りでは、下層の疊敷面の上に粘質土や砂質土を15cm前後の厚さで堆積し、そのうえに拳大の疊をしいている(中層疊敷面)。中層疊敷面のうえには5~10cmの厚さで灰色の細砂層が堆積し、そのうえに小粒の疊をしく(上層疊敷面)。しかしながら、地山が洪積世の台地かかる6ABR-G地区以北では中・上層の2層を区別することは困難である。中層のうえにみられる細砂の堆積は、広場南部が帶水した状況をしめしている。

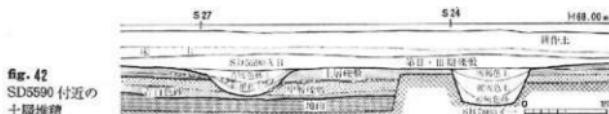
SD7760 (PLAN 12・14, PL. 12・32) 6ABR-G・H地区

南門SB7800の北階段東端の位置から発する素掘りの南北溝(幅40cm, 深さ10cm)。6ABR-G地区の南辺以北では削平されている。この溝は中軸線から東へ6mへだたっており、西側に同様の南北溝を想定するならば、幅員12m(40尺)の南北通路の東側溝となる。しかし、通路部分にとくに手をくわえた痕跡はない。同時期の東西溝SD5590および第Ⅲ期の東西溝SD3769と連物SB7803の柱掘形が掘込んでいる。

SD5590A・B (PLAN 5・13, PL. 11, fig. 42) 6ABR-H地区

南面築地回廊SC5600の心から北へ約22mへだたる素掘りの東西溝(幅1m前後, 深さ30cm)。中層疊敷面にともなうSD5590Aと、上層疊敷面にともなうSD5590Bにわかれる。SD5590Aには疊混り灰色砂土が約10cmの厚さで堆積し、東端は東面築地回廊SC5500の西雨落溝SD5588

2 遺構



につながる。SD5590Bは底にやや大粒の礫が堆積し、うえに厚さ20cmの灰色質土が堆積しており、SC5500の西雨落溝から西へ寄せた南北溝SD5589につながる。上下2層の堆積土からは多くの瓦片が出土した。

SD5588, SD5589 (PLAN 5, PL. 14) 6ABQ-Q地区

SD5588は本来はSC5500の西雨落溝SD3790の一部分であるが、東西溝SD5590Aとの合流点以南でひろがったもの。長さ15m、幅1.8mの素掘りの南北溝で、北端はSD5590とつながり、南部でSC5500を横断する木槌暗渠SD5561, SD5562, SD5563につながる。

SD5589はSD5588を西によせた溝である。長さ11.5m、幅35cmの素掘りの南北溝で、北端はSD5590Bにつながる。

SD5607 (PLAN 6・7) 6ABR-P・Q地区

SC5500の西雨落溝SD3790の西側に平行する素掘りの南北溝（残存長26m、幅35cm、深さ10cm）である。Q地区的西北隅からP地区的南寄りににこっており、南北両端はさだかでない。第Ⅲ期の東西溝SA3740がこの溝を掘込んでいる。なお、南北溝SD5589と同一線上にあり、ある時期、雨落溝とは別の排水溝を回廊にそってつけた可能性もある。

SD7805, SD7806 (PLAN 12・13, PL. 4) 6ABR-H・J地区

南門SB7801の北側の雨水をSD5590に導く石敷の南北溝。SD7805は（長さ12m、幅30cm、深さ10cm）。北部は素掘溝の状態でのこるが、南半では両岸に拳大的な礫をならべて護岸する。南端はSB7801の上層雨落溝につながり、北端はSD5590Bに注いでいる。

SD7806は中軸線の西側でSD7805と対称位置にある石敷の南北溝。南端の2mを検出したにすぎないが、つくり方や規模はSD7805と同じであり、SD5590に注ぐものとみてよい。

SD3779 (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区のはば中央にある素掘りの東西溝（長さ34m、幅40cm）。ほとんど削平され、東西両端は不明である。SC5500を横断する木槌暗渠SD3770と方位がそろっており、連続する可能性があるのでこの時期にいれる。

SB7765 (PLAN 14, PL. 36) 6ABR-G地区

G地区のはば中央に位置する4間（10.1m）×2間（5.1m）の東西棟建物で、東妻側に廟がつく。柱間寸法は平行の西端間が2.7m（9尺）であるほかは、2.4m（8尺）等間である。身舎の柱掘形は方70cm、深さ40cmで、幅35cmの柱痕跡がある。前の柱穴は径40cmの円形を呈する。西妻柱および北側柱の2柱が第Ⅱ期のSK3784によって破壊されている。



SD7142 (PLAN 14~16, PL. 37・38) 6ABQ-C・D地区

広場地区を南北に貫通する素掘りの南北溝（幅1.2m、深さ15cm）。北方のC・D地区ではよくのこるが、南方のG・H地区ではわずかに痕跡をとどめるにすぎない。北端は6ABP-D地区の堆積塀SX6600の前面にはおよんでおらず、発掘しなかった構内道路のあたりにあるも

のとおもわれる。南端は東西溝SD5590Aに注いだ可能性もなくてはないが、SC5600を横断する盲暗渠 SD7807 と方位がそろっているため、SD5590Aの設置以前においてSC5600の北雨落溝に連結した可能性がつよい。第Ⅱ期の南面築地回廊SC3810Aがかさなっている。この溝は中軸線の東 18.5m (62尺) に位置し、中軸線の西にも同様の溝を想定するならば、幅 37m (125尺) の通路があつたことになる。

SE7145 (PLAN 16, fig. 43) 6ABQ-C地区

C地区の東北隅にある井戸である。3.5m × 3.1m の開丸方形の掘形で、深さは 2.5m である。

- 井 戸 井戸枠は完全に抜きとられ、版塗状にていねいに埋戻されている。底部ではほぼ中央に方 1 m の範囲に木片をふくむ暗色砂質土塊があり、その上層の青灰色粘質土上面には桧皮が堆積していた。埋土から少量の瓦片と刀子が出土した。

ii 第Ⅱ期の遺構

SX3785 (PLAN 7・14・15, PL. 31) 6ABR-P, 6ABQ-B地区

第Ⅱ期造営時の轍である。幅 15~20cm, 深さ 5 cm の細い轍が、この時期の整地上にこさわだちれている。南北方向の痕跡と東北から西南方向にかけての痕跡があり、後者は 7~8 条交叉している。2 条が平行する南北方向の例(B地区)によると 1.5m の間隔があり、それが車幅をしめすことになる。第Ⅱ期の整地土にしるされ、この轍のうえに南面築地回廊がつくられていることから、第Ⅱ期の造営時の遺構になる。

SH6603B (PLAN 2)

この時期の広場は北方で石積擁壁 SX9230 を南へせりだし、南面築地回廊を北によせ面積をせばめる。SH6603Bでは第Ⅰ期の礫敷面のうえに黄褐色粘質土を主とする整地土(厚さ 10cm 前後)をもり、そのうえに再び礫をしきつめる。この状況は南面築地回廊 SC3810A 以北において明瞭に識別できるにもかかわらず、以南では第Ⅰ期礫敷面との区別が容易でなく、むしろ混りあっているようにもみえた。また、後の第Ⅲ期でもこの礫敷面は存続するが、第Ⅱ・Ⅲ期を層位的に分別できない。

SA7815 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-G地区

第Ⅱ期南面築地回廊の心から南へ 48.9m へだたったところで東西にのびる溝 (10間, 51m)。

- 平 底 跡 G地区を横断し、西へさらにのびようである。東は未掘区にかかるが、6ABR-Q 地区に柱筋のそろう柱穴があり、広場地区を横断した可能性がつよい。柱間寸法は 5.1m (17尺) 等間。柱掘形が径 40cm と小さいことからすれば、竿のような仮設物をたてたのだろう。上層礫敷面で検出。東面築地回廊上におよんでいないので第Ⅱ期にいれる。

SD7763 (PLAN 14, PL. 36) 6ABR-G地区

G地区中央にある素掘りの東西溝 (幅 40cm, 深さ 10cm)。長さ 22m をとどめるが、西端の接

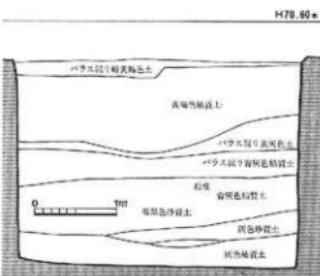


fig. 43 SE7145の断面

2 遺構

続状況は不明である。第Ⅰ期の東西棟建物SB7765の柱掘形に掘込んでいるので、この時期にいれておく。

SK3784 (PLAN 7・14, PL. 26・36) 6ABR-P・G地区

南面築地回廊SC3810Aの南で東西にのびる不整形の大土壙（最大幅5.3m、深さ20~30cm）。東端は第Ⅰ期東西築地回廊SC5500の西雨落溝SD3790の西縁でとまるが、西端はなお発掘区外にのびるようである。土壙の堆積は上下2層にわかれ、多數の瓦片が出土し、部分的に滲水した痕跡をとどめる。第Ⅰ期の建物SH7765の柱掘形を掘込み、南面築地回廊SC3810Aの南側基壇線にそっていることから、回廊基壇造成時の土取場の痕跡である可能性がつよい。東方では土壙SK3787、鐵SX3785がかさなり、第Ⅲ期建物SH7769の南側柱の掘形によって掘込まれている。

SA3809 (PLAN 8・15, PL. 32) 6ABQ-Q・BD地区

南面築地回廊SC3810Aの心から北21.8mに位置する東西壁。西端は発掘区外にのび、東端 平 痕跡は東西築地回廊西側でおわる。13間分検出し、柱間寸法は原則として6m(20尺)であるが、D地区では間隔がはいって柱間がやや不規則になる。柱掘形は小さな円形（径40cm、深さ30cm）を呈している。柱間が広いことからすると砾ではなく、竿のようなものをたてたのかもしれない。上述のSA7815と共に通すところがある。上層磚敷面で検出。

SE9210 (PLAN 16, PL. 46, fig. 44) 6ABQ-A地区

A地区西南にある井戸。井戸の掘形は矩形を呈し、上下2段にわかれれる。上段は南北7.3m、深さ1.7mであり、下段は上段掘形の西北寄りを深くしたもので、東西4.9m、南北4.5m、深 大型井戸さ1.9mであり、追跡検出面から底までの深さは3.6mとなる。下段掘形の底には4段の井戸枠をとどめるが、その上部はすでにぬきとられている。井戸枠抜取痕跡は底から約1mの厚さで埋戻され（青灰色粘土），それ以上は埋立てられることなく、放置されたようである。

井戸枠の内法は、方2.25mであり、西南と西北角には木材の轍盤をあてている。枠木の1段と3段には板をもちい、2段と4段には校倉の校木を転用している。井戸枠と掘形との間は木 枝木の転用屑を混えた灰褐色砂土で裏込めし、井戸底には拳大の玉石を敷く（厚さ10cm）。玉石敷の上部に堆積する暗灰色土には、10世紀代の土師器があり、ほかに瓦片や木器があった。第Ⅲ期およびそれ以降も使用されたことをしめす（枝木については p. 140参照）。

SK7186はSE9210の井戸枠抜取痕跡の後身であり、東西5m、南北8.5m、深さ90cmの土壙である。堆積土は3層にわかれ、11世紀頃の瓦器が出土している。一種の泉として長くもちいられたのである。

iii 第Ⅲ期の遺構

SB7803 (PLAN 13, PL. 12) 6ABR-H地区

H地区の西寄りにある3間(9.6m)以上×4間(13.2m)で四面に窓がつく東西棟建物。西半は発掘区外にあるが、中軸線で折り返すと桁行は7間(22.5m)となる。側柱の柱間寸法は桁行・梁間ともに隅の間を3.6m(12尺)とし、それ以外は3m(10尺)等間とする。柱の掘形は方1m、深さ30cmと浅く、柱痕跡をとどめていない。おそらく礎石をすえた掘形であろう。身合の柱位置を直接にしめす痕跡はないが、小柱列の足場SS7823の存在によって想定できる。それは2間



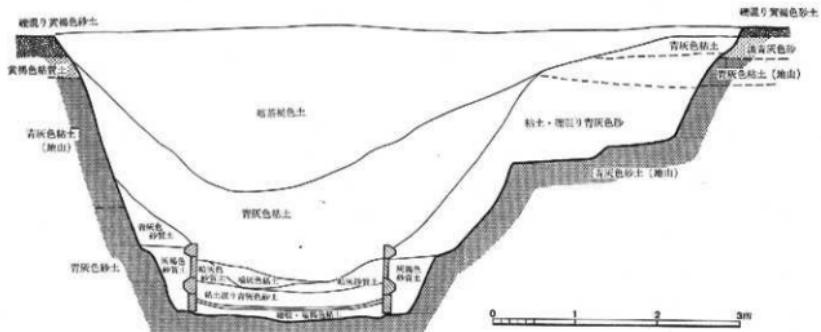
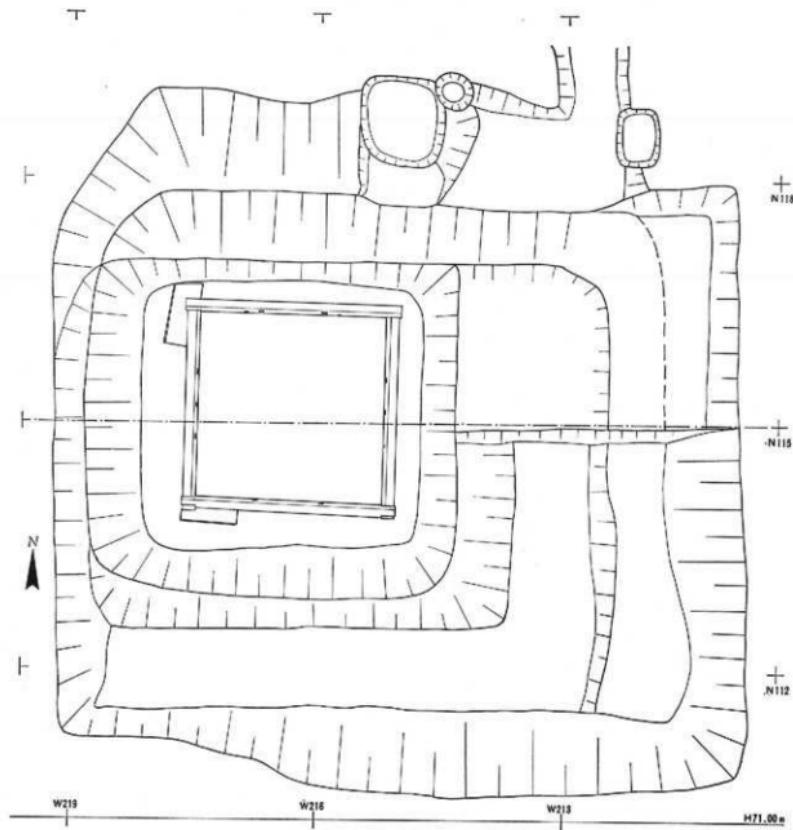


fig. 44 SE9210 A測図

2 竪 構

(6.5m) 以上×4間(8.2m) の縦柱造構であり、その間に身合柱を想定すると、5間(15m)×2間(6m) の身合となる。おそらく身合も礎石を据えていたのであろう。第Ⅰ期の南北溝SD7760に重複し、上層礎敷面で検出した。

SA3740, SB3768 (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE-K, 6ABR-P・G地区

SA3740はこの時期の南面築地SA3810Bの心から南35.6mをへだてて東西にのびる據。広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東はこの時期の東面築地SA3800Aの心から東18.7mの東外郭にのび、南北溝SA8238とむすぶ。検出した柱間数は34間で、柱間寸法は2.4m, 2.7mのところもあるが、おおむね3m(10尺)におさまる。柱の掘形は方70cm、深さ30cmである。なお、D地区ではSA3740にかさなって無数の杭が打ちこまれた痕跡(長さ20m、幅70cm)があるが、平城宮施設後のおもわれる。

SB3768はSA3740の東から3間目に開く1間の門である。柱間寸法は5.4m(18尺)で、柱門の掘形(方1m、深さ40cm)には柱抜取痕跡があり、西の柱掘形には角材の礎盤があった。ともに上層礎敷面で検出しており、南北溝SA8238とともに第Ⅲ期の外郭を形成しているとみられる。また、中軸線上にもSB3768に類する門の存在が予想される。

SD3769 (PLAN 7・13, PL. 30・36) 6ABE-K, 6ABR-P・G地区

SA3740の南2.5mをおいて東西にのびる素振りの東西溝である。幅1m、深さ10cmのこの溝は広場地区を横断し、西は発掘区外へのび、東は第Ⅰ期の東面築地回廊SC5500の基礎をとおりぬけている。溝底は東になるにしたがって深くなっている。東方に排水したことがわかる。第Ⅰ期南北溝SD7760を掘込んでおり、上層礎敷面で検出した。

SB7753 (PLAN 13, PL. 36) 6ABR-G地区

中軸線の東7mにあり、北側はSD3769に接してたつ2間(4m)×2間(3.5m)の東西棟造物。柱掘形は小さな円形(径40cm、深さ15cm)を呈している。SA3740に設けたであろう中央門にともなう番屋的な性格をもつ建物のようである。上層礎敷面で検出し、第Ⅰ期南北溝SD7760を掘んでいる。

SB7769 (PLAN 14, PL. 34) 6ABR-G地区

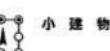
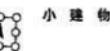
南面築地SA3810Bの南に接してたつ2間(4.5m)×2間(3.9m)の東西棟造物。ただし、西妻柱列は3間(中央間1.5m、両脇間1.2m)とする。柱の掘形は小さく(方50cm、深さ35cm)、北側柱の掘形には径25cmの柱痕跡がある。SB7753と同じく番屋的な建物とみられる。第Ⅱ期の土壇SK3784を掘んでいる。

SD7131, SD7132 (PLAN 14~16, PL. 32・34・38) 6ABQ-C・D, 6ABR-G地区

SD7131は中軸線の東33m(110尺)で南へ流れる素振りの南北溝(幅80cm、深さ10cm前後)。北端は東西溝SD7132につながり、南端は石積暗渠SD7799で南面築地SA3810を貫通する。SD7132はこの時期の石積擁壁SX9230の南8.5mにある素振りの東西溝(幅50cm、深さ10cm)で、東端はSD7131につながる。ともに上層礎敷面で検出するが、SD7131が同時期の東西溝(SA7130)にかさなっており、第Ⅲ期のなかでも新しい時期にぞくする遺構である。

SA7776 (PLAN 14, PL. 34) 6ABQ-D地区

この時期の南門SB7750の北面東寄りにある4間(5.9m)の東西擡。柱の掘形(方70cm)には径40cm内外の柱痕跡をとどめる。第Ⅱ期南面築地回廊SC3810Aの北雨落溝SD3778に重複している。



第三章 遺跡

SB7785 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

南面築地SA3810の北34mに位置する3間(8.1m)×2間(4.2m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行2.7m(9尺), 裁間2.1m(7尺)で、柱掘形は小さな円形(径30cm, 深さ25cm)を呈する。柱位置はやや不揃いで、棟方向は東で南へ約3度ふれている。上層礎敷面で検出。

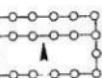


SA7130 (PLAN 9+16, PL. 40+41) 6ABQ-A-C地区

石積擁壁SX9230の南26mで広場地区を横断する東西解。27間分の柱穴を検出した。大半の南面の屈い柱間は3m(10尺)だが、東面築地SA3800Aには2.1m(7尺)の柱間寸法でとりつき、戸井SE9210に接する東から18間目の柱間(4.2m, 14尺)は広く柱掘形も大きいので、門にあてることができる。柱の掘形は大半が方70cm、深さ20cmで、径30cmの柱痕跡をのこすものもある。それに対して門の柱掘形は他よりも大きい(方1m)。上層礎敷面で検出し、同時期の南北溝SD7133が掘込んでいる。

SB9220 (PLAN 17, PL. 45) 6ABQ-A地区

斜道SF9232Bの登り口にたつ5間(12m)×3間(7.2m)の東西棟建物で、北に廟がつく。柱間寸法は桁行が2.4m(8尺)等間であり、裁間も廟とともに2.4m(8尺)の等間である。柱の掘形(方1m, 深さ70cm)には、柱抜取痕跡がある。第Ⅰ期の埴積擁壁SX6600を掘込み、上層礎敷面で検出した。第ⅡとⅢ期を区別する決め手はないが、SF9232Bに食い込み、中軸線上にあるSB7131と北端の柱筋をそろえているのでこの時期におく。



SB7141 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ-C地区

東西溝SD7132の南側にある2間(12m)以上×1間(3.6m)の東西棟造特異な遺構。柱の掘形は長方形(3m×1m, 深さ80cm)を呈し、径60cmの柱位置を30cm程度深く掘込んでいる。中軸線をはさんで対称的な柱間を想定すれば、桁行は6間(36m)となり中軸線上に桁行中央の柱がることになる。このような建物の類例は他になく、構造も決めがたく、複数風の遺構かもしれない。上層礎敷面で検出。第Ⅱ・Ⅲ期のいずれかを決め難いが、SD7131, SD7132で囲まれてことから一応第Ⅲ期にいたれた。



SB7140 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ-C地区

SB7141の南にある6間(16m)以上×2間(4.8m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行が2.7m(9尺)等間で、裁間が2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方70cmで、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物の棟方向は西で北へ約4度振れており、ゆがんだ建物になっている。上層礎敷面で検出。SB7141とは共存できず、方向も振れていますので第Ⅲ期のなかでも時期が下るものとおもわれる。



SB7134 (PLAN 16, PL. 39)

SB7141の東南にある3間(5.4m)×2間(4m)の東西絶柱建物。柱間寸法はとと仮設建物のっておらず、とくに東妻柱列がゆがんでいる。柱穴は小さな円形(径30cm)であり、仮設建物のようである。上層礎敷面で検出。



SD7133, SD9236 (PLAN 16, PL. 40+45) 6ABQ-A-C地区

SD7133はC地区南辺中央部にある石敷の南北溝(幅70cm, 深さ5cm)である。側石はすでに

なく、扁平な安山岩を用いた底石およびその痕跡がのこるにすぎない。南端は消失しているが北端は壇上の南北溝SD6612をうけたようである。

SD9236はSB9220の北西にある東西溝(幅80cm、深さ10cm)で、6mをとどめるにすぎない。西岸には人頭大の安山岩をならべている。ともに上層礫敷面で検出したが、著しく破壊されているので、本来の姿をうかがうことができない。しかし、SD9236はSD7132の前身として東西にのび、それにSD7133がつながり、石積擁壁の上からSB8300の東雨落溝の排水をうけた可能性もある。

SK7135 (PLAN 16, PL. 39) 6ABQ-C地区

SB7134の東側にある方形の土壙(方2m、深さ25cm)である。堆積土は上下2層にわかれ、上層からは瓦器片などが出土した。上層礫敷面で検出。

iv 奈良時代以前の遺構

SX7800 (PLAN 15, PL. 37, fig. 45) 6ABQ-D地区

D地区の西北隅にある方墳の痕跡である。墳丘はすでに削平され方形にめぐる周濠だけがのこる。墳丘部は9m×8.2mの方形を呈し、方位を東北—南西にとっている。周濠は南西辺でのこりがよく、幅2.5m、深さ30cmであり、のこりのわるい東北辺では幅1m、深さ10cmであった。これは東北が高く南西に低い旧地形の状況をしめしている。周濠内には古墳存続時の黒褐色土が回レンズ状に堆積し、そのうえに平城宮造営時の埋土がかなっている。こうした堆積土中から埴輪や須恵器の破片が出土し、5世紀後半の古墳であったことがわかる。

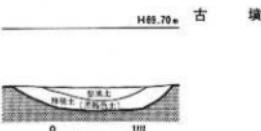


fig. 45 SX7800の断面

SD7787 (PLAN 13-15, PL. 12-37, fig. 14) 6ABR-G・H, 6ABQ-C・D地区

発掘区の西寄り、中軸線の東11mのところにある素掘りの南北溝(幅1.5m、深さ15cm)。下層の礫敷でおおわれておらず、平城宮造営以前の溝であるとともに、方墳SX7800の上をとおりており5世紀以後の遺構であることがわかる。また、第I期南門SB7801の下層でも確認できた(fig. 14)。さきに朱雀門地区で検出した下ッ道東側溝の延長線上にあり、下ッ道がこのあたりまでおよんでいたことがあきらかになった。

SB7816, SB7817, SB7818 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-GH地区

SB7816はH地区北辺中央部にある2間(4.5m)×1間(3.3m)の東西棟建物。柱掘形は小さく建物的な円形(径30cm、深さ15~25cm)で、棟方向は西で北へ約4度振れている。地山面で検出した遺構で、和銅の造営時ないしはそれ以前の建物となる。つぎのSB7817と重複関係にあるが、柱穴が直接重複していない。

SB7817はSB7816の西に重複して建つ3間(4.9m)×2間(3.3m)の南北棟建物。柱掘形の状況はSB7816と同じ。地山面で検出した。



SB7818はSB7817の西北にある3間(8.3m)×2間(5.2m)の南北棟建物。北妻柱列の柱間は若干広がっている。柱掘形の状況はSB7816と同じ。棟方向は北で西へ5度強振れている。地山面で検出した。

第三章 遺跡

SA7824 (PLAN 13, PL. 3) 6ABR-H地区

SB7818の西南にある南北溝。4間(長さ4m)で完結している。柱穴は径15cm、深さ15cm程度であり、杭を打ち込んだようである。地山面で検出した。

SD3772 (PLAN 7, PL. 31) 6ABR-P地区

P地区の東南隅にある素掘りの溝(幅80cm、深さ13cm)で、長さ19.5mを検出した。西南から北東方へゆるやかに彎曲している。地山面で検出。

SB3773, SB3774 (PLAN 7・14, PL. 31) 6ABR-P地区

SB3773はSD3772の西にある4間(6.6m)×3間(4.1m)の建物で、棟方向は北で西へ約35度32分振れている。柱の掘形は方50cm、深さ10~20cmである。地山面で検出。

SB3774はSB3773の東側にならぶ2間(4.2m)×2間(3.2m)の建物。棟方向は北で西に約48度振れている。柱掘形の状況はSB3773と同じ。地山面で検出。

SK3782, SK3787 (PLAN 7) 6ABR-P地区

SK3782はSD3772の北にある不整形の土壙(5m×1.4m、深さ50cm)。堆積土からは少量の古墳時代の土器小片が出土した。地山面で検出。

SK3787はSK3782の北にある梢円形の土壙(3m×1.9m、深さ15cm)。西壁には第II期の上塙SD3784が掘込んでいる。地山面で検出。

SK3798, SK3799 (PLAN 15) 6ABQ-B地区

SK3798はB地区的西南隅にある方形の土壙(方3m、深さ20cm)。第II期の南面築地回廊SC3801Aがかなっている。古墳時代の遺物が少量出土した。地山面で検出。

SK3799はSK3798の北にある不整形の土壙(5m×3.5m、深さ30cm)。堆積土中に占墳時代の土器があった。地山面で検出。

SB7780 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

D地区的東南隅に位置する5間(14.6m)×2間(4.8m)の南北棟建物。
大建物 柱間寸法は桁行2.92m(10尺)等間、梁間2.4m(8尺)等間である。柱の掘形は方1m、深さ25cmであり、径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。北で若干西へ振れている。第II期の南面築地回廊の北雨落溝SD3778と足場SS3805が重複する。地山面で検出。柱の掘形が比較的大きい。

SB7790 (PLAN 15, PL. 37) 6ABQ-D地区

SB7780の北7.2mをへだて、柱筋をそろえて建つ3間(8.7m)×2間(4.8m)の南北棟建物。
の南北棟建物。柱間寸法は桁行2.9m(10尺)等間、梁間は2.1m(7尺)と2.7m(9尺)にわかれれる。柱の掘形は方1m、深さ20cmで径35cmの柱痕跡をとどめるものもある。この建物とSB7780の棟方向は北で西へ約3度振れており、同時期の建物。地山面で検出。

D 東外郭地区

築地回廊で囲む第1次大極殿地域の東側は、壬生門内に展開する東方の内裏・第2次大極殿地域と隣接する地区である。調査の結果、発掘区の東限を南北に貫通する南北溝SD3715を境にして、その西側が第1次大極殿地域にぞくすることがあきらかになった。また、後の第91次調査によってSD3715の東側、6ABE-M地区以北は幅12mの南北に長い帯状の区画となって

第2次大極殿地域の外周をめぐっていることが明らかになっている。¹⁾ この地区的整地は一様ではないが、旧地形の低い南部(6ABE-P・M地区)では1mに達する盛土を行ない、北方に向うに従って盛土がうすくなり、6ABC区では地山を削平しているようである。木樁暗渠などによって築地回廊をぬけ、東外部地区を横断してSD3715に排水する施設が8条あるが、それについては回廊地区でふれたので、ここでは略する。この地区的時刻決定は必ずしも容易でないが、築地回廊内に準じて第I～III期の3期に区分した。なお、6ABE-P、6ABS-E地区は第1次朝堂院地域の遺構にぞくするが、便宜上この項にふくめる。

i 第I期の遺構

SD3765 (PLAN 5～7, PL. 19・30, fig. 46) 6ABS-E, 6ABE-M・K, 6ABD-D地区 初期の幹線水路

この地区的南北部を南北に流れる堀の南北溝(幅1.6m～2.6m、深さ60cm)である。南方で深く、北方で浅い。D地区で消失し、北限をすることができない。南方は、後の調査によつて、第1次朝堂院地域内を南下することが判明している。溝の堆積土が比較的厚いM地区から各種の遺物が出土しており、出土した木簡の年記によって和銅年間に存在したことがわかる。また、溝の使用期間は短く、M地区では粘土質の土によって西側から短期間のうちに埋立てている状況を顕著にとどめていた(fig. 2-46)。

ちなみに、中軸線の東102.6m(342尺)、東面築地回廊SC5500の東14.3m(48尺)に位置している。なお、平城宮造営以前の遺構とする見方もあるが、第1次大極殿地域の排水路である暗渠SD5555およびSD5584がこの溝に注いでおり、築地回廊建設時に存在し利用したことはあきらかである。木樁暗渠SD5560、SD5562、SD3770などがこの溝のうえを横断している。

SD5584 (PLAN 5) 6ABE-M地区

築地回廊の東南隅の北13mで、東雨落溝SD5575からはじまり、南東に流れてSD3765に注ぐ溝(長さ8.5m、幅1m、深さ40cm)。SD3765の廃止とともにこの溝も埋立てられており、SD5575からの取付部分には木樁暗渠SD5562が掘込まれている。

SA5550A・B, SA5551A・B (PLAN 5, PL. 16・19, fig. 46) 6ABS-E地区

SA5550AとSA5551AはSD3765を埋立てたのちにつくる解であり、第1次朝堂院地域をめぐる。SA5550Aは南北軸で6間分(17.7m)、SA5551Aは東西軸で4間分(11.8m)の柱穴を検出した。L字状に交わる東北隅の柱穴は後世の野井戸によって破壊されているが、連続するものとみてよい。柱間寸法は2.95m(10尺)等間である。柱の直径は方1.5m内外、深さ1.2m内外であり、地山に沈下した柱痕跡(径35cm)を下部にとどめるものがあり、上部には一まわり大きな柱抜取痕跡がのこる(fig. 46-1)。SA5551Aの西端はSC5500の西雨落溝の位置からはじまるので、回廊の東側柱に取付いたことになる。SA5550の南端は発掘区外にのびるが、後の調査によって第1次朝堂院地域をめぐることが判明している。

SA5550B・SA5551Bは朝堂院の木屏を築地に改めたものである。柱頭形のうえに厚さ25cmの砂疊をまじえる黄褐色土の盛土がのこる。ただし、破壊が著しくその幅をしきことができなかつた。

1)『年報1975』p. 16

第三章 遺 跡

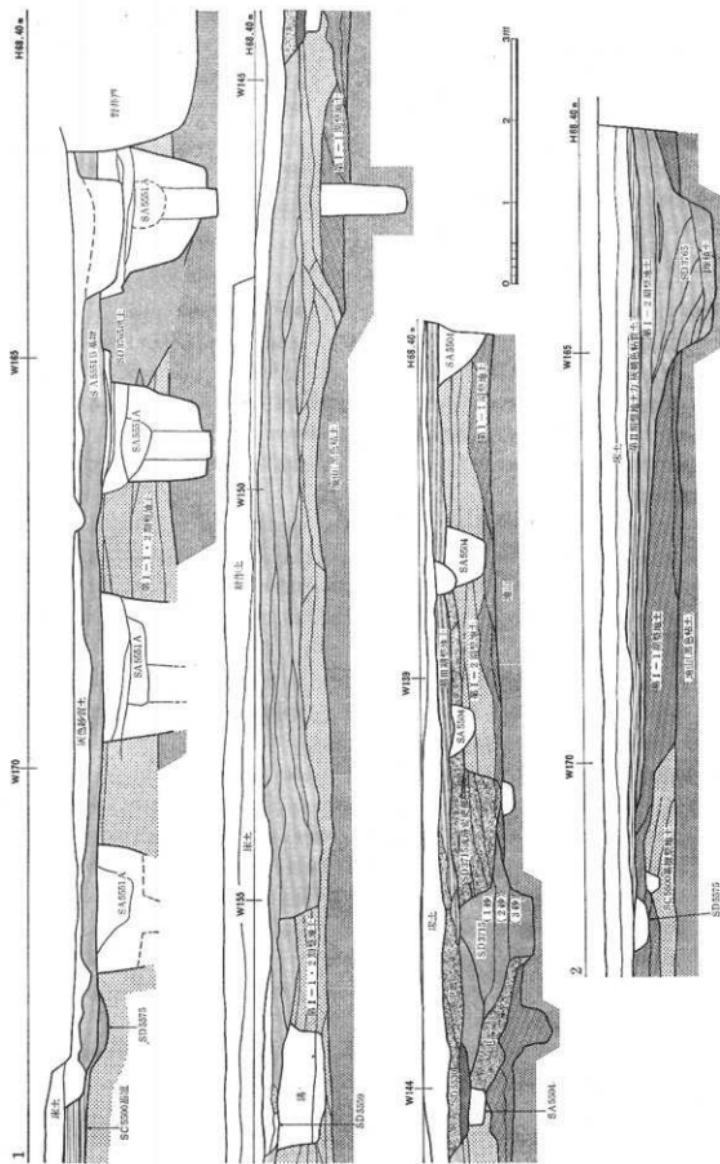


Fig. 46 案外郭根断面図

SD5559 (PLAN 4) 6ABE-P地区

SA5550の東2.1m(7尺)にある素掘りの南北溝(幅1.45m, 深さ60cm)。築地築造時にこの溝も埋立てられており、基壇土が西岸までおよび、堆積土には部分的に凝灰岩片がふくむところもあった。基壇の地覆石掘付痕跡ないしは雨落溝の痕跡とみられる。

SD3715 (PLAN 4・6~8, 18・19, PL. 20・29・79・86, fig. 46)
6ABE-P・M・K, 6ABD-D, 6ABC-U・V地区

東外郭地区の東限を西して南北に流れる素掘りの南北溝(幅2~3m, 深さ1m)。溝底は南に向幹線水路って傾斜しており、約300mの間で7.6m低くなっている。この溝は宮内を南北に流れる基幹排水路で、北は6ABO区から、南は6ABH区までの間約530mで存在を確認している。溝の堆積層は2・3層に区分したが、流水のために層位に混乱があるらしく、遺物の逆転がみられる。M地区南部では東方から1条、西方から3条の溝が合流しており、氾濫のあとをのこすのであるが、この付近からは木箇をふくむ奈良時代全般にわたる多量の遺物が出土した。P地区では藍龜元年の年記のある木筒が出土した上塙SK5535を掘込んでこの溝をついているので、上塙が715年を過らないことをしめす。下限は包含する遺物から奈良時代末期におくことができ、奈良時代を通じて存続したことになる。

SK5535 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区には不整形の土壤が多数あり、SK5535もその一つ。幅1.8m、深さ30cmの土塗であるが、東部をSD3715が破壊している。内から藍龜元年の年紀のある木筒が出土した。

SD5490 (PLAN 4) 6ABE-P地区

P地区的東南隅にある素掘りの東西溝(幅1m、深さ20cm)。東方からSD3715に流入する。後の第91次調査で、この溝がSD3715から東へ18mのびていることを確認している。
第2次大極殿東外郭の
遺構

SA5492 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD3715の東岸にある南北溝。全長4間(8.1m)であり、柱間寸法は2.03m(6.5尺)となる。柱の掘形は方50~80cmと不揃いで、南端の柱穴には径17cmの柱根がのこる。

SA5504 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

SD5490の北14mにある東西溝。4間分(11.5m)を検出した。内はSD3715の西岸からはじめ第2次大極殿地区の南面外郭溝であるSA8165にとりつくことになる。ただし、柱間寸法は不揃い。SD3715の東岸地帯を南北に区画している。

SD5505 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-M地区

M地区的南辺で東からSD3715に注ぐ素掘りの東西溝(幅2m、深さ50cm)。水流の激しさをしめすように合流点が著しく氾濫している。この溝は第2次大極殿地域外郭の解釈ないしは第2次大極殿地区に設けた石積東西暗渠をうけていることが第91次調査であきらかになっている。この溝の堆積土から平城宮土器Ⅲが出土した。

SB5595 (PLAN 4, PL. 20) 6ABE-P地区

P地区的東南隅にある3間(5.85m)×2間(3.9m)の東西棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.95m(6.5尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、柱痕跡をとどめるものもある。東妻柱列は第91次調査で検出した。

SB5510 (PLAN 4, PL. 20, fig. 47) 6ABE-M地区

SB5495の北10.5mにある南北棟建物である。6間(11.4m)×2間(4.2m)の身合北妻に、2間(3.4m)×2間(3.4m)の小室をとりついている。柱間寸法は身合の桁行・梁間ともに1.9m(6.5尺)を基準にするが多少の出入がある。小室は桁行・梁間とも1.7m(5.5尺)等間である。柱の掘形は不揃いだが、方60cm内外で、径17cmの柱根をとどめている。小室の身合への取付きとして、身合柱の内側に柱を建てた可能性がある。この建物の周辺には地山上に黄褐色粘質土の整地層があり、その上面で検出した。SB5495と柱筋を描えているのでこの時期におく。

SB5515 (PLAN 6, PL. 20) 6ABE-M地区

SB5510の北に近接する5間(10.7m)×2間(3.9m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.14m(7尺)等間で、梁間は1.95m(6.5尺)等間である。方位は北でやや西に歪れているが、SB5495, SB5510とはほぼ柱筋をそろえているので同時期とする。

SB5520 (PLAN 6, PL. 20, fig. 47) 6ABE-M地区

M地区東北隅、SD3715の東岸にある3間(6.24m)×2間(4.16m)の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。柱の掘形は不整形でおよそ方50cm、深さ60cmである。5個の柱穴には径14cmの柱根があり、北妻柱の柱穴には埠の礎盤がある。

SB5521 (PLAN 6, PL. 20) 6ABE-M地区

SB5515の北10.5mにある2間(5.1m)×2間(3.6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行が2.55m(8.5尺)等間、梁間が1.8m(6尺)等間である。柱穴は小さく不揃いである。

SX5528, SX5540, SX5527 (PLAN 4-6, PL. 20) 6ABE-P・M地区

溝に架けた溝(3m)であり、M地区的SX5540は12間(40.2m)×1間(3m)、SX5527は5間(8.5m)×1間(3m)である。柱間寸法は2.33m(8尺)を基準にするが多少の出入がある。しかし、必ず東西の柱穴が対になるという原則がある。SX5528の柱穴が方80cmと大きいのに対し、他は径40cm内外の小柱穴である。東岸の建物群のあるところに限ってこの施設をもうけているようであり、橋のように溝に蓋した施設とかんがえられる。西岸の柱列には第Ⅲ期の南北溝SD5530が掘込んでいる。

SA5525, SA5526 (PLAN 6) 6ABE-M地区

SA5525はSB5520の北側にある東西櫓。SD3715の東岸からはじまり東へのびるもののように、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は径40cmの円形である。SB5520と柱筋をそろえて

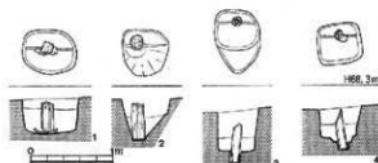


fig. 47 小規模建物の柱掘形
1. SB5510-イ二 2. SB5510-イ三
3. SB5520-ヒ二 4. SB5520-ヒ四

いるのでこの時期においた。

SA5526はSA5525の北に位置する東西塀で、2間分(4.3m)を検出した。柱の掘形は方60cmであり、SA5525よりも大きいが、両者は建替えの関係にあるものようである。2条の塀の北側には建物がなく、南方の建物群を画した解とみられる。

SK3730 (PLAN 7) 6ABE-K地区

K地区中央、木橋跡 SD3770の南にある土壇(方2.2m、深さ60cm)。埋上から土器片と多量の松皮が出上り、また2点の木簡もあった。

SX3720, SF3742 (PLAN 7, PL. 29, fig. 48) 6ABE-K地区

SX3720はSD3715に架けた橋で、溝の両岸に径10cmの杭を打込んだ橋脚がある。橋脚は近接する2本を一組として打込んだもので、東西両岸に各4個所ある。間隔は95cmで、全長2.85mを3等分している。この橋脚は護岸でもかねて裏側に板をいれている。

橋をはさむ東西の岸に黄褐色粗砂土の硬い地而が幅5mでのびており、道路敷SF3742に想定することが可能となる。時期を決めかたいが、橋の北15.3mに位置する東西塀SA3780に開く門との関係からこの時期においた。

SA3780, SB3746 (PLAN 8, PL. 28, fig. 26) 6ABD-D地区

東西溝SD3775の北1.8mにあって、東外郭地区を南北に2分する東西塀がSA3780である。
南北に仕切る塀と門
中央に1間(4.1m、14尺)の門SB3746をおいて、西に5間(14.8m)、東に3間(8.6m)の掘がつく。塀の柱間寸法は東端1間が2.7m(9尺)であるほかは、2.96m(10尺)等間である。柱の掘形はおおむね方80cm、深さ80cmだが必ずしも一定しない。門柱の掘形は横長の長方形(1.5m×3m、深さ80cm)で、塀の柱掘形よりも大きい。底には木材の礎條をしく。塀の両端はSC5500の東側柱位置とされており、直接回廊につながっていない。

**SA3750 (PLAN 8, PL. 29)
6ABD-D地区**

SD3715の西にある南北塀。SA3780の北3mから12間分(28.6m)を検出した。北は発掘区外にのびるようだが、C地区にはおよんでいない。柱間寸法は2.38m(8尺)等間で、掘形は方80cmである。第1次朝堂院東外郭ではこの柱筋にはば等しいところに和銅造営時に造る南北塀SA8410が下層遺構として発見されており¹⁾、それが6ABE-P地区におよぶことは確実である。同一の塀でなくともそれに関連するものであろう。SX3729はSD3715の東岸にある1間(2.7m)の柱穴で方2.1m、深さ30cmの柱掘形。SA3750の南端の1

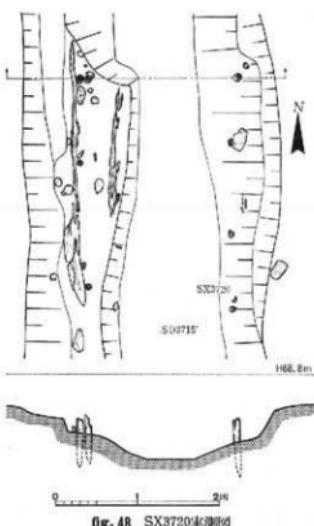


Fig. 48 SX3720実測図

第三章 遺 墓

間とほぼ柱筋をそろえているので、ここに構のような施設が想定できる。

SB8330 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC-V地区

建物 SB8315の西岸に接する6間(17.54m)×2間(5.26m)の南北棟建物である。棟通りの2間ごとに間仕切柱をおく。柱間寸法は桁行2.92m(10尺)等間、梁間2.63m(9尺)等間となる。東側柱列の柱掘形はSD8315によって浸食されている。柱の掘形は方60cm～1mで、径25cmの柱痕跡をのこす。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSB8325の柱穴が掘込まれている。SD8315が開削される以前の建物であろう。



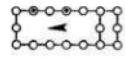
SB8315 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC-V地区

SB8330の西北にある3間(4.6m)×2間(3.1m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに1.5m(5尺)等間。柱の掘形は方40～80cmと不整形で、径22cmの柱痕跡をとどめるものもある。第Ⅱ期のSB8320と第Ⅲ期のSK8317が掘込んでおり、東側の柱穴が破壊されている。



SB8324 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC-U地区

SB8315の北6mにある6間(12.5m)×2間(4.16m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.08m(7尺)等間である。二通の梁間中央に仕切りの柱穴を配する。柱の掘形は方50～80cm前後で、径30cmの柱痕跡をとどめるものもある。SB8315と西側柱列がそろう。



SA8229 (PLAN 21, PL. 84) 6ABC-U地区

SC5500の東側柱列の東3mにある南北屏。全長は5間(11.66m)で、柱間寸法は2.33m(8尺)等間である。柱の掘形は方60cmで、径20cmの柱痕跡がある。方位を北で西へ少し振れているが、築地回廊に開く門SB8333の正面にあたることから、仮説的な日陰屏とかんがえる。

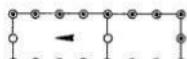
SA8231 (PLAN 18) 6ABC-U地区

SA8229の東にある南北屏。全長は4間で(11.24m)、柱間寸法は2.81m(9.5尺)等間である。柱穴は径40cmの円形を呈する。SA8229の間口の広いところに面していることから、日陰屏とかんがえる。

ii 第Ⅱ期の遺構

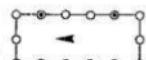
SB8320 (PLAN 18, PL. 79) 6ABC-V地区

建物 SD8315の西岸にある7間(20.85m)×2間(5.95)の南北棟建物で、北から四通の棟通りに間仕切の柱穴を設ける。柱間寸法は桁行・梁間ともに2.98m(10尺)等間で、柱の掘形は方1～1.2m、深さ40cmである。大きな柱抜取痕跡をともなうほか、径30cmの柱痕跡をとどめるものがある。抜取痕跡には土器・瓦片などが混入していた。第Ⅰ期のSB8330を掘込み、第Ⅲ期のSK8317, SK8318, SK8319, SB8325がかさなっている。



SB8320 (PLAN 19, PL. 87) 6ABC-U地区

SB8320の北22.5mにある5間(15m)×2間(6m)の南北棟建物。柱間寸法は桁行・梁間ともに3.0m(10尺)等間である。柱の掘形(方1.5m内外、深さ70cm)には径45cmの柱痕跡をとどめるものがある。柱抜取痕跡



から建物の外側に柱をたおした状況がわかる。この抜取痕跡からは、瓦や土器片が出土した。

第Ⅲ期の東西溝 SD8227が掘込んでいる。

SA8236 (PLAN 19) 6ABC-U地区

U地区の北辺で検出した4間(10.6m)の東西柱列。柱間寸法は2.65m(9尺)等間で、柱の北辺の掘形は方1m、深さ70cmである。東西にのびて外郭北辺を面するのであろうか。ただし、北側にのびて東西棟建物になる可能性もすこがたい。北面築地回廊SC6670基壇南縁の延長線上にあるので第Ⅱ期において。

iii 第Ⅲ期の遺構

SD5530 (PLAN 4・6~8, PL. 20・29) 6ABE-P・M・K地区

南北溝SD3715の西岸にあって、これと重複する素掘りの南北溝で、K地区以南でみられる。新しい水路上游では幅1m前後、深さ40cmであるが、P地区では幅3mに広がっている。SD3715の流路が埋って、この時期に改修したものであり、K地区以北ではSD3715をそのまま利用したものとみられる。小礫を含む砂が堆積し、瓦片などが混在した。

SX5543 (PLAN 6, fig. 49) 6ABE-M地区

SD5530に架けた橋。80cmの間隔をおく東西両岸に南北2間(1.35m)の杭(径6cm)を打ち橋こんでいる。杭と溝肩との間に自然木をわたして護岸している。

SA8238, SB8335 (PLAN 9・18・19, PL. 23・47・79・86) 6ABD-C, 6ABC-U・V地区

さきに述べたように、この時期の広場地区を横断する東西溝SA3740の東端の柱穴から北へ東面を画する木塀のびる南北溝SA8238と門SB8335である。

SA8238は東面築地SA3800の心から東17.8m(60尺)に位置する。V地区のSB8335以北では27間分(72.67m)を確認し、その柱間寸法は3.0m(10尺)、2.7m(9尺)、2.4m(8尺)などと不揃いだが、概して2.7m(9尺)が多い。柱の掘形は方50cm、深さ20cm内外であり、円形を呈するものも多い。SB8335の南のD地区では柱穴を検出していない部分もあるが、一連の解があったとみてよい。

V地区にあるSB8335は1間(5.4m, 18尺)の門である。北側の柱掘形は長方形(1.4×1.1m)を呈し、長軸を南北におき、2段に掘込む。掘形の北側のほうが深く(深さ70cm)、そこに径27cmの柱痕跡がある。また、掘形の北縁にはSA8238の柱穴がかさなっており、門を建てたのちに解をつくったことがわかる。この門柱と解の柱とは40cm程度離れていることになる。なお、南側の柱穴は半分しか検出していない。

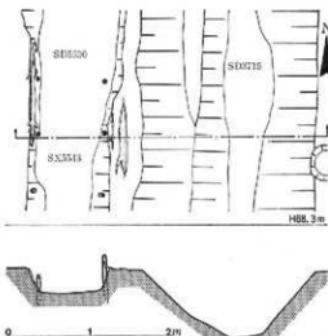


Fig. 49 SD5530 に設けた小橋 SX5543

第三章 造跡

SD6237, SD6239 (PLAN 8・9・18・19, PL. 23・47・79・86)
6ABD-C, D, 6ABC-U, V地区

心々距離4.4m(15尺)をおいて平行する2条の南北溝(幅1m内外、深さ30cm)。2条の溝は一条通りまで検出したが、さらに北へのびる可能性は強く、大膳職地域の東面を区画する南北築地SA350と同一線上にあることが注目される。6ACD-D地区では未検出だが、2条の溝の中心にSA8238がおさまり、塙の側溝とみられる。

SA3741 (PLAN 7) 6ABE-K地区

門SB3768内にある6間(17m)の南北塙である。柱間寸法は南端の間が2.4m(8尺)であるほかは2.96m(10尺)等間である。柱の掘形は径25cmの円形を呈し、径18cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の東西木棟構築SD3770を掘込んでいる。ある時期に門SB3768を崩してこの南北塙を設けたのであろうか。

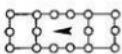
SB9213 (PLAN 9, PL. 48) 6ABD-C地区

SA3800とSA8238にはさまれた地帶にある3間(5.65m)×2間(3.96m)の南北塙
外郭内の建物。柱間寸法は桁行1.88m(6尺)等間、架間1.97m(6.5尺)等間である。柱の掘形は径50cm前後の円形。



SB8325 (PLAN 18, PL. 79) 6ABD-V地区

SD3715の西岸にある5間(12.64m)×2間(4.12m)の南北棟建物で、南北に廊がつく。柱間寸法は身舎の桁行・架間とも2.06m(7尺)等間で、南北の廊は3.23m(11尺)である。柱の掘形は方40~60cmと不整形で、径25~30cmの柱痕跡をとどめるものもある。第I期の建物SB8330、溝SD8327、第II期の建物SB8320に重複している。また方位が北で東に振れ、東門SB8335の東に想定しうる道路内にかかっているので、第III期のなかでも新しい時期にぞくするであろう。



E 大膳職地域

6ABO地区の大膳職地域については、すでに『平城宮報告II・IV』で報告した。その後に行なった6ABO地区的第81次調査や第1次大極殿地域の発掘成果によって、遺構の変遷について若干の補足と訂正を行なわざるをえなくなった。その大きな理由の一つは石敷東西溝SD130の解説である。『平城宮報告II・IV』では、SD130を大膳職地域の南面を区画する築地の南雨落溝に想定したのが、この溝は前述してきたように第I期第1次大極殿地域を区画する北面築地回廊SC8098の南雨落溝であることが判明した。そこで、改めて大膳職地域の変遷について検討を加えねばならぬところとなり、新たに検出した遺構に説明を加えるとともに変更部分についても述べることにした。『平城宮報告IV』で想定した各時期の建物配置について根本的にことなる点はない。しかし、時期区分については『平城宮報告II・IV』の第I期と第II期を本報告の第I期、第II期を第II期、第II期と第III期を第III期とするのであるが、後述のように絶対年代の比定については若干となるところがある(fig. 50, 51)。

i 第I期の遺構

『平城宮報告IV』第I期(以下報告IV第I期などという)のうち、北面築地回廊SC8098推定域に重複する遺構を平城宮造営前と第II期に分りわける。ただし、SB299, SB370, SB347について

平城宮造營前

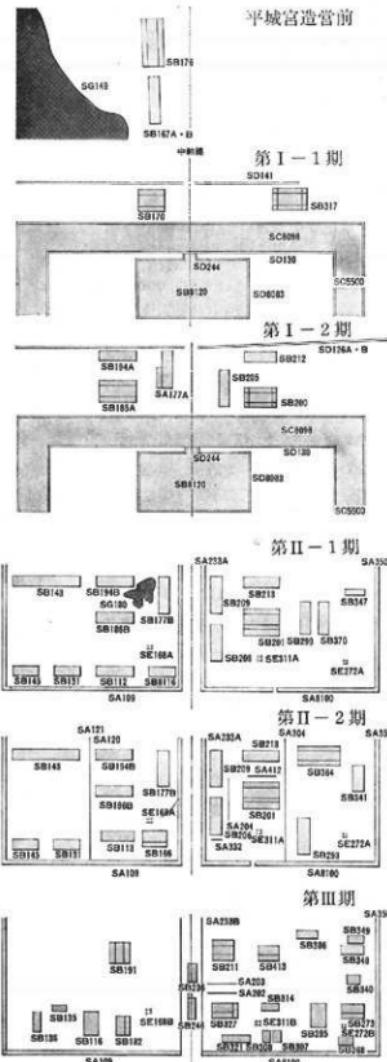


Fig. 50 大鰐町地域の濃霧変遷改訂案

Fig. 51 「浮城宮報告IV」遺憾空彈因

第Ⅲ章 遺跡

は重複しないが第Ⅱ期にいた。改定案の第Ⅰ期は2小期に細分できる。第Ⅰ-1期は中軸線をはさんで東方に建物SB317、西方にSB170があり、後方を東西溝SD141が画する。第Ⅰ-2では、後方を西する東西溝SD126A・Bが北方にしりぞき、中軸線をはさんで東西にそれぞれ3棟、東方SB200・SB205・SB212、西方SB185A・SB177A・SB194Aの建物を配する。

ii 第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期はSC8098を廻し、この地域に築地で貯んだ官衙を形成する時期である。主として報告Ⅳ第Ⅱ-2期の遺構が中心となる。すなわち、中軸線をはさんで、東西にそれぞれ築地をめぐらし、建物を配するのだが、ここでは東区、西区とよぶことにしよう。第Ⅱ期も2小期にわかれる。第Ⅱ-1期の東区ではSB201を中心にして7棟の建物(SB206・SB209・SB213・SB299・SB370・SB347)がならび、南側に2穴の井戸(SE311A・SE272A)をおく。西区では、ほぼ同規模の建物8棟(SB316・SB112・SB131・SB145・SB186B・SB177B・SB194B・SB143)を南側と北側によせて配置し、その中間東寄りに井戸SE168Aをおく。第Ⅱ-2期は建物配置を部分的に改変するとともに築地内を木標で2分する。東区の東側では第Ⅱ-1期の建物を廻し、あらたに3棟の建物SB364・SB341・SB293をおく。東区の西側では建物に変更がなく、3条の屏SA332・SA204・SA412をくわえる。西区の東側では南の2棟SB113・SB166をたてかえるが、西区の西側では建物のたてかえがない。

築地内を画する2条の南北溝SA304・SA121は、報告Ⅳでは第Ⅲ期につくられたことにしており、殿舎地域の状況からすると、区画内を木標で細分する傾向は第Ⅲ期において顕著であり、第Ⅲ期の可能性もつよい。しかし、今回第Ⅲ期においてSB116がSA121・SA120と重複すること、東区の東側にたてかえるSB364が小区画の中央建物とみられることから、第Ⅲ期に含めることにした。この際、西区の西側では井戸を欠くことになり、この区画が利用されなかつた可能性もある。また、東区の西側にある3条の屏は第Ⅱ-1期にさかのぼってもよい。第Ⅱ期の遺構には今回の調査で検出したものがあり、つぎにその主なものをかかげる。

SA109 (PLAN 34・35, PL. 92・94・95, fig. 49) 6ABO-L・P地区

6ABO-L地区以西では、粘土質の地山のうえに約70cmの第Ⅰ期整地(灰白色粘土・赤褐色混り粘土)がある。第Ⅱ期のSA109はこの整地に灰黄色粘土・黄灰色粘土を盛って築地基層とし、南北に側溝を掘込む。第Ⅲ期には再び整地土(黄褐色粘土など)を盛りあげ、築地の改修を行なっている。南北側溝幅が一定しないので、基壇幅をきめえないが、第Ⅱ・Ⅲ期とも幅4m内外であったものとおもわれる。寄柱や門の親柱の痕跡がなく、築地幅も不明である。第Ⅲ期築地基層上の下部から軒瓦6282-B, 6284が出土した。L地区の土居銀幕用の試掘坑では、第Ⅰ期の灰白色粘土の深さと同位置で、軒丸瓦6732A, 6691A, 6721を採集した。このことについて、試掘坑の東に第Ⅱ期以降の土壤が重複しているものと解釈した。

SB116, SB8116 (PLAN 34, PL. 92・93) 6ABO-L地区

SB116は「平城宮報告Ⅱ」で5間×2間の東西棟建物として報告したものだが、今回南北をもつ5間(13.37m)×3間(8.61m)の東西棟建物であることがわかった。柱間寸法は桁行2.67m(9尺)、梁間は身合で2.97m(10尺)、扉で2.67m(9尺)である。柱の掘形は方80cm、深さ30cmで、径40cmの柱

新に検出した遺構



2 遺構

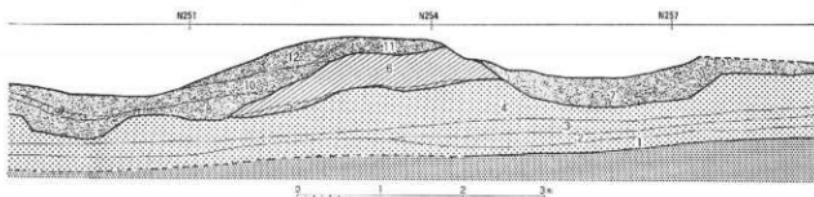


fig. 52 SA109上層断面

第Ⅰ期整地土 (1.暗灰色粘土, 2.灰白色粘土, 3.赤褐色混泥粘土, 4.黄色粘土), 第Ⅱ期整地土 (5.灰黄色粘土, 6.黄灰色粘土), 第Ⅲ期整地土 (7.黄褐色粘土, 8.灰色粘土, 9.木炭层, 10.黄褐色土, 11.灰茶褐色土, 12.茶褐色土)

痕跡がのこるものがある。なお、廻の西端柱の穴は検出できなかった。

SB8116はSB116と重複する5間(13.5m)×2間(6.0m)の東西棟建物。

SB112・SB131・SB145の東西棟建物と棟通りをそろえる。柱間寸法は桁行2.7m(9尺), 梁間3.0m(10尺)である。柱の掘形は方1m, 深さ80cmで, 径40cmの柱痕跡がのこる。



SK8079, SK8080 (PLAN 34・35, PL 89・90) 6ABO-E地区

E地区には不整形の大小土壇が多く存在する。時期を決めがたいものも少なくない。SK8079は第Ⅱ期当初の遺構である。SK8079は長方形(17.5m×4.8m, 深さ60cm内外)の土壇。土壇内の堆積土は数層に区別でき, その最上層に第Ⅱ期の築地SA8100とともに南北落溝SD267, 壁溝SD8077が重複している。SK8080も同様の土壇(24×5m, 深さ50cm内外)である。これらの土壇は, 第Ⅱ期第1次大極殿地域の北面築地回廊を造成したときの採土壇とかんがえられ, 築地回廊SC6670と築地SA8100の建設が同時に, 後者が若干遅れることをしめしている。

SA8100, SD267, SD8094, SD8095, SB8101A・B, SB8102

(PLAN 33・34, PL. 88~91) 6ABO-E地区

SA8100はSA109の東延長線上にあり, 大膳殿地域の東区の南辺を囲む築地。築地本体は 東区南面の
のこっていないが, 寄柱痕跡, 門, 南北の雨落溝によってその存在を知ることができる。寄柱 築地
痕跡は桁行6m(20尺), 梁間1.2m(4尺)を原則とする。柱の掘形は方50cm内外, 深さ10cm
内外である。ただし, 門の付近では桁行を縮めている。

SB8101A・Bは, SA8100の東部に位置する1間門である。SB8101Aは柱間寸法が3m(10尺), 親柱の柱掘形は方60cmで, その内寄りにそれぞれ寄柱痕跡をともなう。SB8101Bは柱間寸法が同じく3mで, 親柱の位置を50cm西へずらしてたてかえる。柱の掘形は方60cm。SB8101Aと同様, 寄柱痕跡をともなう。SB8101A・Bの東西それぞれ桁行1間目の寄柱痕跡も建替えがみられる。

SB8102はSB8101A・Bの西15mに位置する1間の門で, 柱間寸法は3m(10尺)である。親柱掘形は径1.3mの円形を呈する。

SD267はSA8100の北3mにある素振りの東西溝(幅1m)である。東に流れ東面築地SA350

第Ⅲ章 遺跡

を暗渠でぬけ、東の築地外に排水したようである。

SD8094・SD8095は、それぞれSA8100の南2m、2.9mをへだてた位置にある東西溝。前者は幅35cm、後者は幅65cmである。SD8094は基壇地覆石据付痕跡であり、SD8095は南雨落溝に想定できる。

SA8100の東西両端はあきらかでない。しかし、西端は後述する東西暗渠SD8077の検出によって、築地SA233と直交し、東はSA350とまじわり、大膳職地域の東区を形成してたことがわかる。

SA233A・B, SD8077 (PLAN 34, PL. 90・91) 6ABO-E地区

「平城宮報告IV」で第Ⅲ期の南北木廻とし
てきたものであるが、東西暗渠SD8077や部分
的に築地の雨落溝が残存することから、木廻
の前身として築地SA233Aが存在したことが
推定できる。第Ⅲ期の木廻はSA233Bによぶ
ことに対する。

SD8077は凝灰岩の板石を組合せた東西暗
渠（長さ2.5m、幅71cm、内法幅47cm、内法高22
cm）である。それは長方形（64cm×28cm、厚
さ11cmを標準とする）の凝灰岩板石を用いて側壁とし、天井をかけたものであり、底石を欠いて
いる。この暗渠の北にSA233Bの柱穴が重複する1間（3m）の柱穴があり、これを門の親柱に
想定することが可能である。

iii 第Ⅲ期の遺構

報告IVの第Ⅱ-3期と第Ⅲ期をあわした。さきの時期区分では、第Ⅲ期の築地内に建物がほ
とんどない状況となる。これががもっとも大きな変更理由である。東・西両区の南北廻を第Ⅱ
期にくりあげたほかは、今回第Ⅱ期にさかのぼらせた遺構はない。

iv 平城宮造営以前の遺構

さきに報告IVで第Ⅰ期に比定した西区のSB167が北面築地回廊と共に存しえなくなり、一時期
繋上げる必然性がでてきた。またその北側で柱筋をそろえて建つ南北棟建物SB176も同様に古
くなる。2棟の建物は他の建物にくらべて方位をとることにし、柱頭形の残存状況も良好といえな
い。とはいえる、SB167には同位置でのたてかがみとめられるので、仮設建物でもない。一方、南方から北上する下ッ道の延長線上西側にそっており、平城宮造営以前の施設とみなさざ
る見えなくなってしまった。

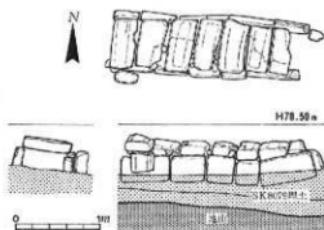


fig. 53 SD8077実測図

第IV章 遺物

第1次大極殿地域からは、相当量の遺物が出土しており、それらは、木簡・建築部材・瓦類・土器類・木製品・金属製品・石製品などにわけられる。出土遺物のうち瓦塙類の出土がもっとも多く、ついで土器類が多い。他方、金属製品や石製品は少量である。

遺物は土塹・溝・井戸・柱穴・整地土などから出土し、瓦や土器の大部分は整地土のなかに混在するものであり、遺構とともに発見されたものは多くない。それに対して遺物の性質上、木簡や木製品は滲水状態の遺構でしか出土していない。遺構とともに発見される遺物の多くは、主としてこの地域の辺縁地区に存在しており、広場・殿舎地区の中心部で発見したものは少なく、かつ保存もよくない。

南面築地回廊上に建設されている第I期の東棟 SB7802 の柱抜取痕跡からは、少くない遺物 東 標が出土した。遺物の種類も多岐にわたり、この地域の性格をさぐるうえで貴重である。すでに述べたように、SB7802 は第II期の宮殿建設に先立って撤去されたものであり、その柱抜取痕跡にある遺物はごく短期間のうちに捨てられたものとみられる。遺物のうち、木簡によれば天平勝宝5年以降にこの建物が撤去され、南門を警護した衛門府にかかる一連の遺物として理解することができる。

平城宮内を南北に貫通する幹線水路である SD3715 からも多くの遺物が出土した。遺物は奈 幹線水路良時代後半の比較的長期間にわたり、溝の堆積土層の上下関係と遺物の前後関係とは必ずしも対応していない。堆積した遺物が溝の東西いずれの地域からすてられたかという点が問題になる。軒瓦の文様からすれば、内裏地域や第2次大極殿地域に近似する傾向を示し、木簡からも兵衛府・中衛府に関する文書を含んでいることから東方地域との密接な関係が想定される。

建築遺構と軒瓦が密接な関係で検出されたのは、南面築地回廊である。そこでは建物の周辺に濃密に瓦片が散布しており、遺物に使用した瓦が周囲に堆積したものとみとめられた。そうしたことから、ここでは南面築地回廊の使用瓦の形式を明確に観察したのである。一方、殿舎区では建物の解体時に柱抜取痕跡に埋込んだ瓦によって時期ごとの瓦形式を決定した。

遺物の全体的な傾向については、紀年銘木簡および瓦・土器によって縦年を行なうことができる。軒瓦は8世紀前半の瓦（平城宮瓦I・II）がきわめて多く、これに後半の瓦（平城宮瓦II）がつぐ。土器では8世紀前半の土器（平城宮土器I～III）がきわめて少なく、8世紀後半から9世紀初期の土器（平城宮土器IV～VI）が多数をしめている。

今回の報告で注目すべきことは、木筋暗渠や井戸枠に転用された柱などの建築材が比較多い転用部材点である。すべての材をとり上げたわけではないが、東西築地回廊を横断する木筋は、同一建物の柱材などを利用しており、仕口痕跡の復原から木筋の柱であることがわかった。SE9210の井戸枠は校倉の校木を転用した珍らしい別である。柱根の保存状況のよいものがあり、切断して、用材の樹齧をたしかめた。

1 木簡

6ABE 区と 6ABR 区で総計 1,128 点の木簡が出土した。木簡が出土した遺構は、東外郭地区(6ABE区)の溝および土壌の 6 個所 (SD3715, SD5490, SD5564, SD3765, SK5535, SK3730) と回廊地区(6ABR区) 東棲 SB7802 の柱抜取痕跡である。これら木簡に共通する点は、削肩が多いことである。SD3715 では出土木簡の 90% 以上が削肩であり、SB7802 でも 48.8% の多くをしめている。記載内容では、中衛府・兵衛府・衛門府など衛府関係のものが多く、宮殿警備の重要な資料であるとともに宮殿の性格を決定するうえで重要な役割りをはたしている。

以下、遺構ごとに出土状況と記載内容の概略をのべ、釈文をかかげることにする。¹⁾ただし、ここでは出土木簡のすべてをとりあげることはせず、遺構の理解に必要なものあるいは記載内容の重複とおもわれるものにかぎって報告する。企譜については、おって出版されるであろう『平城宮木簡』に収録する。

A SD3715 出土の木簡 (PL. 96~101)

南北溝 SD3715 は平城宮の第 1 次大極殿地域と内裏・第 2 次大極殿地域の間を北から南へ流れる宮内幹線水路で、主として 6ABC・6ABE 区で検出した。木簡が発見されたのは下流にあたる堆積状況²⁾ 6ABE 区においてであり、769 点が出土している。溝の堆積土は上下 2 層に大別でき、上層からの出土量が多く、下層からは少ない。しかし、他の遺物と同じように層位によって遺物の年代や記事の相違を指摘することはできない。紀年のある木簡では神饌景雲 3 年と記したもののが 2 点、内容によって神饌景雲 3 年と判断しうるもののが 1 点あり、ほかに宝亀元年のものが 1 点ある。他の木簡の記載内容からみても、この溝から出土した木簡を 769 年(神饌景雲 3 年)～770 年(宝亀元年)頃のものとみて矛盾せず、伴出の土器年代とも齟齬しない。内容には中衛府・兵衛府に関する木簡が注目され、ほかに駆など海産物の食品についた整理用の物品付札が多い。

なお、SB3715 はさらに南下して、今回の報告地域外の 6ABF 区、6ABG 区、6ABH 区から多くの木簡が出土しているが、それらは時期的にみて神亀～天平初年の建設工事関係の木簡であり、今回報告する木簡とは性格をことにしていている。

木簡 1 □兵衛府移中衛□

兵衛府から中衛府に送った「移」の削肩。中衛府は神亀 5 年に設置され、大同 2 年に右近衛兵府に改められた(『続日本紀』神亀 5 年 8 月条、「頼家三代格」大同 2 年 4 月 22 日格)。(PL. 98)

1) 釈文の右の数字は、木簡の長さ・幅・厚さおよび木簡の形式番号をしめしている。法益にパーソンがついているのは木簡が欠損していることをしめす。型番号および釈文の表記方法は、『平城宮木簡三』(奈良国立文化財研究所史料第 17 冊)を参照されたい。なお、主な型式番号について簡単に記しておく。011 型式: 短筒型。019 型: 一端が方頭で、他端は折損などによつて原形不明のもの。021 型式: 小型の短筒型。

031 型式: 長方形の材の両端左右に切り込みをいたるもの。032 型式: 長方形材の一端に左右から切り込みをいたるもの。081 型式: 折損、磨耗などによって型式が決らないもの。091 型式: 削肩。なお型式番号の第 1 位の数字は時代をしめし、6 は奈良時代である。

2) 加藤謙「1976 年度発見の平城宮木簡」(『年報 1977』p. 38)

木簡 2 (表) □衛府移 中衛府 一番正八位下□□□□□
(裏) □□仍故移

(裏) □□仍故移 (192)×11×3 mm 6081

冒頭の一字は外とも考えられるが、木簡1からして「兵」に推定すべきであろう。兵衛府から中衛府へ中衛府に送った「移」である。内容は兵衛の編成を記して中衛府に連絡したものか。「延喜式」などでは後述の行夜(ヨマハリ)や宮内各所の警備について近衛と兵衛が共同して行動することが定められており、平城宮でも中衛府と兵衛府が警備の編成(番)について相互に連絡をとったことを示す。『宮衛令』開闢門条の古記に「持時行夜。謂一夜二分番上以番巡行也」とあり、夜警の輪番を一番、二番とよんだことがわかる。上下が折損している。(PL. 97)

木簡 3 (表) 請繩參拾了 右為付御馬并夜行馬所請

(裏) 如件 御瀧景衡三年四月十七日番長赤淨浜 323×25×4 mm 6011

番長である赤淨浜が御馬や夜行馬に装備する繩を請求した文書。御馬は年ごとに諸国の御牧から貢がられたもので、節会などの儀式、あるいは行幸に使用される馬である(『延喜式』左右馬寮式御馬条、五口式条)。夜行馬は行夜(ヨマハリ)のための馬で、『宮衛令』開闢門条では「持時行夜者、皆須執杖巡行」とあり、宮内の夜警のことをのべている。同じく『宮衛令』分街条では「衛府持時行夜」と京内の夜警をのべ、その『令集解』同条古記所引の今行事には「中衛左右兵衛共行夜、一夜巡行一夜停止、衛士不預也」のべているから、奈良時代の実情としては、行夜が兵衛と兵衛の戦掌であったことわかる。なお、行夜は平安時代でも近衛と兵衛によって行なわれた(『延喜式』近衛式行夜条、兵衛式分配条)。他の木簡に中衛府充の文書があることからすれば、この木簡の充先きも中衛府である可能性がつよく、そうであるとすれば赤淨浜は中衛府所属の番長であるともかんがえられる。しかし上引の『延喜式』左右馬寮式では「凡行幸御馬一疋馬子八人」に註して「右兵衛二人、馬部六人」とのべていること、同式衛府馬牛条に「左兵衛行夜二疋」とあって注に「鞍飼加鞍并衛士、毎夜充之」とあるので、御馬や夜行馬に兵衛が関係しており、番長の赤淨浜が兵衛府にぞくした可能性もある。左右兵衛府にはそれぞれ番長4人、中衛府には6人の番長がいた(『職員令』、『続日本紀』神龜5年8月条)。(PL. 96)

木簡 4 □兵衛等充行夜使如件

兵衛などに行夜の使いを命じた文書。発給者は兵衛府であろう。(PL. 98)

木簡 5 (表) 眞龍列 □部眞神 物部老

(裏) 阿奈石口 □ □口人 合四人 152×13×4 mm 6011

眞龍の列にぞくする4人の名前を記した木簡。藤原宮木簡に同類の例がある。¹⁾列は烈と同義で『軍防令集解』の古記逸文では、兵士5人で1列を構成する。列記の人物が兵衛府・中衛府のいづれであるかは不明だが、眞龍を加えた1列5人のすべての名前が記されている。もっとも、仕丁の列については正倉院文書に50人を1単位とした例もある(『大日本古文書』4-p. 366)。上端は調整、下端は切断しているが本来の面であろう。(PL. 97)

1) 『藤原宮出土木簡5』 p. 6

第IV章 遺物

木簡 6 (表) 

半大初位上着渤海□

(裏) □

□□

(135) × 23 × 3 mm 6081

某衛府の発行した文書の断片。上端は折損し、下端は二次的に切断している。右辺は割れている。(PL. 97)

木簡 7 少志

155 × 15 × 5 mm 6051

少志は衛門府・衛士府・兵衛府・中衛府の第4等官である。他の木簡の例からすれば、兵衛府もしくは中衛府の少志であろう。兵衛府には1人、そのほかはそれぞれ2人づつが配置されている。上端は腐蝕しているが、ほぼもとの削り面をとどめる。

木簡 8 (表) 式部大^(特大存益立) 伊賀守伊勢子老 遠江介藤井川守 出雲□□^(守 もか)
(裏) 内倉介安□草万呂 美野守石上息繼 周方守弓削秋万呂 勢□□

伊与守高円廣□ 下總員外□ 桑原王□^(か)

(裏) 下野介富□□ ^(麻 王)	守田部息万呂 ^(伊佐カ)	介弓削廣□ ^(主兵衛)
守石川人麻□	左馬司頭今□□王 ^(鷹)	右大倉人介□□□万呂 ^(文尾カ)
監登□ ^{(?) (附 藤)(?)}	員外介□□□	玄蕃□相模□□□ ^{(?) (伊 鷹)カ}

343 × 37 × 3 mm 6011

この木簡にみえる人名のうち右大倉人介某を除くほかは、すべて『続日本紀』神護景雲3年任官記録¹⁾6月乙巳条にみえる任官記事と一致する。木簡では人名や官名の記入のしかたが整っていないので、同日行われた任官に際しての書的な文書とおもわれる。たとえば、官名では内蔵助→内倉介、左馬頭→左馬司頭などと記している。記載順序は『続日本紀』では京官をさきにし外官をあとにするとともに、外官は七道の順にそろえて記す。それに対し、木簡では順序不同である。また『続日本紀』にあらわれる官人の上総員外介があらわれていない。右衛士督備泉では督と備の間に古字を省略している。²⁾現在、4片に分かれているが上下端に調整面をとどめ、左右辺も部分的に調整面をのこしており、完形品である。全体に腐蝕が著しい。(PL. 98)

木簡 9 (表) 仕丁合拾五人^署
(裏) □□□^(人カ)

(203) × (41) × 2 mm 6081

仕丁の仕事の割振りを指示した文書木簡。仕丁が薪取りにあてられたことは、正倉院文書仕丁 (『大日本古文書』6 p. 462など) にみえる。下端は折損している。上端は腐蝕しているが、調整面をわずかにとどめる。薪取の左の墨跡は削りとられている。

1) 文獻万呂なれば、同人は『続日本紀』の仲謙景雲元年三月己巳条に右大倉人介に任命されている。あるいは『続日本紀』の誤りか。

2) 早川庄八『任官關係文書と任官儀について』

『史学雑誌』90-6

3) 藤原本簡では「渤海前回」としたり「古編吉備」を「吉備眞徳」とする例があり、「徳」のみで「キビ」とよませたららしい。

木簡10 (表) 造花所□□□飯多斗隣升

(裏) 六月六日雀部石麻呂

(175) × 25 × 2 mm 6081

造花所から飯を請求した文書木簡。造花所という官司名は他の文献にあらわれていない。上端折損。下端は切りこんで切断する。(PL. 101)

木簡11 請飯□□□

(往來)

□□□□□□

四月□□□□

(97) × (26) × 3 mm 6081

飯が飯を請求した文書木簡の断片。上端に調整面をとどめ、下端は折損する。右辺は割れている。

木簡12 (表) 請食 石寸達万呂

昨日朝夕者

(裏) 四月廿四□□東万呂附

6081

食料請求の文書で、石寸達万呂は食料の支給をうける人。「昨日朝夕」とは昨日の朝夕料の意味であろうか。東万呂は請求した担当の官人。朝夕料は官人に支給される食料で、諸司常食ともいう。上端は折損するが、下端に調整面をとどめている。

木簡13 (表) 諸酒壹斗五升□□

(往來) (酒) (往來)

□□□□□□

(62) × 26 × 2 mm 6081

酒の請求文書。ここでいう将監は木簡1・2などによると中衛府の将監であろう。上端は切 将監賣司 斷され、下端は折損している。(PL. 101)

木簡14 野巾大成

海部稻□

(78) × 24 × 3 mm 6081

兵衛府ないしは中衛府の交名であろう。(PL. 97)

木簡15 三斗九升

6091

穀物の容量か。(PL. 97)

木簡16 主税大允船□

6091

主税大允は主税寮の第3等官。(PL. 97)

主税大允

木簡17 □田益足 九河内小成

6091

二人の人名を記す。(PL. 98)

木簡18 民金麻呂

6091

民金万呂は平城宮木簡96(『平城宮木簡』)にみえ、兵衛に推定されているが、この木簡の人物と同一人物か否かは不明。また木簡71にも金万呂がみえる。(PL. 98)

第IV章 遺 物

木簡19（表） □比 基木毛人 余□□□
（裏） □ 合四人 (152)×11×3 mm 6081

木簡5のように列の人員を列記したものか。(PL. 98)

木簡20 □少属從七上輕部造兄□□ 6091
少属とあることから某奈の四等官であることがわかる。

木簡21（表） □□ □□ □ □□□□□□□□□□□□□□
（裏） 景雲三年八月三日□□□□ (303)×50×5 mm 6081
景雲三年 8月3日付の文書木簡。表の割書きのところは人名を記したのである。上端は切
りこんで調整し、下端は折損している。左右の辺は削れている。

木簡22 □右京一条三坊□□内□ 6091
平城京内の条坊名を記した削屑。(PL. 98)

木簡23（表） 尾張国□
（裏） 調塩三□ (65)×20×3 mm 6081
尾張国から調塩を貢進した荷札。上端は調整しているが、下端は折損している。(PL. 97)

木簡24（表） 進上錢一百卅文
（裏） 丹比宅万呂 71×11×2 mm 6033
進 上 錢 錢140文を某官司に進上したときの付札。丹比万呂は錢を進上した官人の名前。(PL. 99)

木簡25（表） □□田部留人 大伴□
□伴小刀良 鳥□□
□□□ □
（裏） □
□人 合十□
□□足 (109)×39×2 mm 6081
毎日物品を出入した帳簿の断片。上下とも折損している。(PL. 100)

木簡26（表） 外衛府□
（裏） □□□□ (102)×(50)×3 mm 6081
外衛府は天平神護元年2月3日に大将・中将・少将・將監・將曹の官員がさだまり、宝龜3年2月16日に廃止され、舍人は近衛・中衛・左右兵衛に分配された。これよりさき、天平宝字8年10月9日に淳仁天皇の逮捕に向った武将のなかに外衛大将百濟王敬福がみえており、実際に成立したのは天平宝字8年以前とおもわれる。

1 木簡

木簡27（表） □鳳至郡

（裏） □美崎所生

(56)×16×3 mm 6081

荷札の断簡である。鳳至郡は『後名抄』では能登國に所属している。地名の後に「所生」と記し、つぎに物品名を表記する貢進物の荷札は、平城宮木簡402(『平城宮木簡一』)などにみえる。

上端は折損している。(PL. 98)

木簡28 飛驒国□□

(111)×(10)×2 mm 6081

木簡29 薩甲贏交作胞一堵

102×50×3 mm 6099

薩甲贏交作胞をつけた付札。薩甲贏(ウニ) 交作胞(コウサクノアワビ)とは、アワビをウニうにあえた食品。堵は算用の単位(土器の名称と推測される)で、平城宮木簡399(『平城宮木簡一』)に用例がある。(PL. 97)

木簡30 薄鰻川七斤五緞

170×26×5 mm 6031

薄鰻(ウスアワビ)につけた付札。五緞とは腹をまとめた単位をいう平城宮木簡2290(『平城宮 あわび木簡二』)にみえる。(PL. 99)

木簡31 蒸鮑壹籠[△]別卅口

148×24×3 mm 6051

蒸鮑(ムシアワビ)の籠につけた付札。籠別に30口をいれたのだろうか。(PL. 99)

木簡32 嫅臘三籠

160×24×3 mm 6059

嫗臘(カキノキタヒ)につけた付札。(PL. 99)

木簡33 雜魚楚割一籠

130×25×3 mm 6051

雜魚の楚割(スハヤリ)につけた付札。(PL. 99)

木簡34 雜魚腊

106×21×3 mm 6051

雜魚の腊(キタヒ)につけた付札。(PL. 99)

木簡35 押年魚上

61×14×3 mm 6031 あ ゆ

押年魚につけた付札。上は品質の上下をしめすか。(PL. 99)

木簡36 鹿穴

68×17×3 mm 6032

鹿の肉につけた付札。(PL. 99)

木簡37 伊知比古

57×20×3 mm 6032

伊知比古(イチゴ)につけた付札。(PL. 99)

第IV章 遺物

木簡38(表) 「乃止淨麻呂乃宮」(a)

徳足御徳徳鳳至 (b)

(裏) 諸浮縫縫繋人 (c)

「□□□□□」 (d)

(解釈)

119×30×13mm 6011

習書の木簡。bとcとは同筆のようである。aとdはb・cの後に記されている。鳳至は能習書 登國鳳至郡のことである。(PL.100)

木簡39(表) 飯飯飯飯

(底面)

飯飯飯飯□

(裏) 諸□四升四合

(底面)

飯飯□

「御曹司」中

飯 □□ □□飯三升

(底面)

口径262~255、高さ15mm 6061

木盤の裏面に墨書きしたもの。中央の「御曹司」はこの器の所属を記したのであろうか。平安宮には御曹司があるが、この御曹司と関係するか否か不明。他は別筆の習書。(PL.145)

木簡40~45

未使用木簡 文字を記していない木簡が6点ある。ただし、それらは木片の一端に切込みをいれたり、尖らしたりしたものであり、短冊型の6011型式や小片の6021型式のものあるいは一般的な木片は木簡になりうる可能性はあるものの、この項ではとりあげていない。多数の削屑を包括していることから、古い文字を割りとった白木の簡が存在してもよく、ここにあげる6点は付札として使用するためにあらかじめ用意した木簡とおもわれる。しかし、それらが新品の木簡なのか再生の木簡なのかという点については判別できていない。

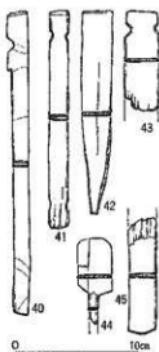


fig. 54 SD9715出土の未使用木簡

木簡40は半分に割れた6032型式。保存は良好。木簡41は両端に切り込みを入れた6031型式。表面の腐蝕が進んでいる。木簡42は一端を尖らせた6051型式。表面は腐蝕している。木簡43は一端を折損するが、一端に切込みのある6039型式。木簡44は一端を虫頭状につくる6019型式。木簡45は題籠(6065型式)の破片である。木簡40がスギの削板であるほかは、すべてヒノキの削板を用いている。(fig. 54, Tab. 3)

番号	型式	長さ	幅	厚さ
40	6032	254	(17)	4
41	6031	183	16	5
42	6051	171	30	3
43	6039	(84)	29	2
44	6019	(97)	23	4
45	6065	(121)	(9)	5

Tab. 3 SD9715出土未使用木簡の寸法

() は現存値、単位mm

B SD5564出土の木筒 (PL. 99)

SD5564は6ABE-M地区にある素掘りの東西溝で、木桶暗渠SD5563によって東面築地回廊SD5500をくぐりぬけ、広場地区の雨水を東の幹線水路SD3715に排水している。木筒はこの溝の東半部分から出土し、堆積土の状況からするとSD3715が逆流して流れこんだものようである。したがって、木筒の性格もSD3715と同様のものとしてあつかうことができよう。ただし、この溝は第Ⅱ期には廃絶するものと思定されているが、木筒の記載内容からすれば、第Ⅱ期になって木桶暗渠を除き開渠として使用された可能性がある。8点出土している。

木筒46 去勝宝九歳

奈良門口五

6065

題籠の断片。勝宝9歳の文書の巻子につけられていたものであろう。

勝宝九歳

木筒47 一升人給門口口又^{〔禁令〕}

6091

人給は『延喜式』に散見する人給料の意味であろう。平城宮木簡204・2492(『平城宮木簡一・二』)あるいは墨書き上器(SD4951出土)に「人給」の語がみられる。また平城宮木簡3535(『平城宮木簡二』)や墨書き上器(SD1250出土)には「人給所」という官署名を記したものがある。

木筒48 熱海鼠

127×17×2mm 6051

熱海鼠(イリヨ)につけた付け。(PL. 99)

C SK5535出土の木筒 (PL. 97)

SK5535は6ABE-9地区のSD3715の西岸にあり、径1.5m内外の不整形な小土塹である。出土した木筒は17点であるが、判読しうるものは少ない。ただし、なかに靈龜元年の記年を記するものがあって、SD3715の開削時期の上限を知る手掛りになっている。すなわち、SK5535が埋められたのち、その東辺を削込んでSD3715がつくられているので、SD3715の開削が靈龜元年(715)を過らないことになる。

木筒49 靈龜元年九月

(151)×(16)×4mm 6081

左右の辺には二次的な調整面を部分的にとどめる。上端は折損するが、下端は裏から切込み靈龜元年をいれて折っている。

木筒50 鼓

(30)×(15)×4mm 6081

木筒49と同筆で、木来は木筒49の断片であろうか。

D SD5490出土の木筒 (PL. 100・101)

SD5490は6ABE-P地区にある素掘りの東西溝で、東方の第2次大極殿地域からSD3715に流入している。73点出土しているが、判読できるものは少ない。

第IV章 遺 物

木簡51 拠保郡二斗九升 $206 \times 20 \times 4\text{mm}$ 6032

播磨國拠保郡からの貢進荷札。(PL. 101)

木簡52 (表) 英多郡

(裏) 奈^(内)羅□□□

□支部力一斗五升□□□□

$(98) \times 20 \times 4\text{mm}$ 6059

英多郡は美作國にぞくする。

木簡53 (表) 天山司解 進上飛炎卅九枝

(裏) 「勘了」

$(236) \times 38 \times 4\text{mm}$ 6081

天山司から建築部材である飛炎垂木を進めた文書。天山司は天山にある材木をつかさどる官天山司であろう。天山の地名は伊予國久米郡にあるが、関連するか否かは不明。裏面の「勘了」は別筆。材木の数量を記したときのものか。右下は小刀できりとっている。(PL. 100)

E SD3765出土の木簡 (PL. 98)

東面築地回廊 SC5500 の東側を流れる南北溝。朝堂院の據 SA5551 および SA5550 をつくる以前に掘立てられている。11点の木簡が出土したが、断片が多く駆逐できるものは少ない。

木簡54 和銅□□

6091

和 銅 木簡は腐蝕のはなはだしい小片で、年号を記したものである。(PL. 98)

木簡55 一之郡末滑海□

6039

伊勢國一之郡(笠志)から末滑海藻(カチメ)を貢進した荷札。下端は折れている。(PL. 98)

木簡56 □□以前等三物

6091

文書木簡の削屑である。

「更科郡」

木簡57 (表) □□忍麻呂前

(裏) 諸人口 「鍾□」

$140 \times 12 \times 4\text{mm}$ 6081

表は書状の断片か。別筆であとから記す更科郡は、信濃國に所属する。裏面は手写いか。上端は折れ、両側面と下端には二次的な調整と切断がほどこされている。

木簡58 □□□□魚八斤五両

$(117) \times 6 \times 4\text{mm}$ 6081

荷札の断片であろう。

F SK3730出土の木簡

SK3730 は 6ABE-K 地区にある方約 2 m, 深さ約 0.7 m の方形土壙である。ここから 4 点の木簡が出土した。

1 木簡

木簡59

角俣

(198) × 23 × 3mm 6031

角俣(ツノマタ-海藻)につけられた物品付札。

G SB7802出土の木簡 (PL. 102~105)

SB7802は、南面築地同席SC5600に増築した後である。その巨大な柱抜取痕跡のうち、11個から木簡が出土している。建物の施設とともに瓦・土器・木製品などとともに括して投棄されたものようである。一方、天平勝宝5年の紀年銘木簡が出土しており、この建物の施設が天平勝宝5年を過らないことを証明している。(出土柱穴の位置はp. 41参照)

木簡60(表) 慶修理正貯□□□

(裏) 右「肥後國山鹿郡□
妙法蓮華□」

(87) × 24 × 3mm 6081

文書木簡の断片である。正貯の修理に関するものらしい。裏の「肥後」以下は別筆であつて、落書きか。妙法蓮華の上は墨で抹消している。上下とも折損し、左右の辺も割れています。

柱掘形イ一出土。(PL. 104)

木簡61 答志郷奈々米三□^(行方)

(105) × 20 × 3mm 6019

貢進の荷札。答志郷は『倭名抄』で志摩國答志郷にぞくしている。奈々米は海藻の一種であろうか。下端が折損している。柱掘形イ一出土。(PL. 104)

木簡62(表) 岐守二升

□ 「之國庭 英田郡國□肥後國合志郡□□□御余□□□」^(行方)

(裏) □□□□□□□□「英田郷□ 大□□□□□留□」

(635) × (14) × 4mm 6081

「岐守二升」がこの木簡本来の文書。ほかはそれ以下を削りとて書いた落書きとおもわれる。裏面も英田郷以下は表の落書きと同筆である。岐守は木簡76の大岐守と同義か。肥後國合志郡鳥鵠郷は『倭名抄』にみえ、英田郷は英多郡にあたる。上端が折損している。柱掘形イ四出土。

木簡63 右家五

(64) × 10 × 3mm 6081

上端は調整面をとどめるが、下端は折損している。柱掘形イ五出土。(PL. 105)

木簡64 馬甘赤□

(56) × 15 × 5mm 6039

人名を記したものであろう。下端は折損している。柱掘形イ六出土。

木簡65 伊豆國田方郡棗安郷戸主春□□

(176) × 32 × 5mm 6039

貢進の荷札。下端が焦げている。柱掘形ロ一出土。

第IV章 遺物

木簡66 留散位石村角 215×13×8mm 6011
留散位とは留省の散位をいい、式部省に所属して個別の官司にまだ配属されていない散位である。柱彫形ロ六出土。(PL. 102)

木簡67 □□後所牒圖書京 6091
四書篆 某官司が図書京へ牒した文書木簡の断片。柱彫形ロ六出土。(PL. 102)

木簡68 (表) □御内人口御内口 口部□ 口 □ □
右四人口月□□日中時 口口部□□石万呂
(裏) 「 十八
□ □□ □ □ 229×78×4mm 6065

曲物の側板を転用したもの。上辺に円孔が3個あるのは曲物として縫りあわすためだろう。
御内丁か。表は御内人に関する文書。裏は別筆の落書きである。御内人は行幸などに際して天皇の御
輿に近侍するもので、『続日本紀』では奥丁(養老2年2月19日)、御内丁(天平勝宝8年12月21日),
駕内丁(弘亀11年3月16日)などがみられる。『延喜式』では行幸に際して、近衛と兵衛から「御
内長」が任命されている(左近衛府式行幸条、左兵衛府式行幸分配条)。この木簡は4人の御内人が南
門S37801を出入りしたときに使用された文書か。時刻を記した木簡は、平城宮東南隅付
近にある二条坊間大路南詰溝(6ALSX)から2点、第1次火極殿地域の西方を画する南北溝
(SD 3826)から1点出土している。だが、その意味はあきらかでない。ここでは門を出入りし
た時刻とするのが妥当であろう。柱彫形ニ一出土。

木簡69 山代東人 203×21×3mm 6032
人名を記した札付。山代東人の所持品につけたのであろう。『大口木古文書』25 p. 65に同
姓同名の人物がみえる。木簡81・83・84・85・92と同類。柱彫形ニ一出土。(PL. 105)

木簡70 (表) 裏□ (裏) □夜 93×32×11mm 6022
物品付札。上端に一孔をあける。柱彫形ニ一出土。

木簡71 牛養 金万呂 東□ (108)×17×3mm 6019
人名を列記した木簡。金万呂は木簡18にみえる。下端は折損する。

木簡72 □月廿七日付牛甘 (51)×20×3mm 6019
文書木簡の断簡。牛甘は木簡81と同一人物であろう。上端は損傷し、下端は調整している。
柱彫形ニ四出土。

木簡73 丹後國竹野郡木津郷紫守部与曾布五斗 250×30×8mm 6031

五斗があるので、米の貢進付札であろう。柱彫形ニ四出土。

木簡74 進上郷米六斗□□ (111)×(14)×6mm 6081

米を某所に進上した木簡であるが、文書なのか付札なのか不明。上下とも折損している。柱 郷 米
掘形ニ四出土。

木簡75 物部虫万呂 物部入万呂物物□ (272)×(22)×4mm 6081

人名の書簡である。下端が折損。右辺が割れている。物部虫万呂は『大日本古文書』16-p. 318
にみえ、同入万呂は天平19年から勝宝2年にかけて正倉院文書に散見する。柱彫形ニ四出土。

木簡76 (表) 天平勝宝□年□月二日合

丸子 丸子 豊毛丸子豊額丸子友注丸子友依

丸子□□ □□

(裏) 丸 □夫天文 丸子□□ □子刀千

丸子豊宅 宅

丸子廣宅丸子大田而宅宅宅宅老 □ (毫) 192×31×5mm 6011

□ □

丸子一族の姓名を記した落書。天平勝宝5年6月8日に丸子牛麻呂、丸子豊鳴ら24人に社鹿 天平勝宝
連姓を賜い、同年8月25日に同姓を賜った丸子鳴足らの一族かもしれない。もしそうだとすれば、この木簡は天平勝宝5年6月~8月以前の改姓前に記録されたことになる。左右の邊が割
れています。上下ともに折損。柱彫形ニ四出土。(PL. 103)

木簡77 (表) 大殿守四人 □□

(裏) 大殿守四人 右五人 (234)×21×9mm 6081

裏面の大殿守はうえから墨で沫消している。一度記したものをお書きなおしたものであろ 大 殿 守
うか。ここでいう大殿は木簡62の「殿守」とも関連し、殿舎地区の第I期の後殿 SB8120をさ
す可能性がつよい。上下ともに折損している。柱彫形ニ四出土。(PL. 102)

木簡78 日下部土麻呂 (88)×23×3mm 6039

人名を記した付札。日下部土麻呂の所持品につけた付札であろう。木簡69と同類。下端が折
損している。柱彫形ニ四出土。(PL. 105)

木簡79 (表) □□久米郡衛士養□□六百文 (153)×19×4mm 6081

伊予國もしくは美作國の久米郡から差発された衛士の養物錢 600文の貢進荷札。600文は衛 奉 物 錢
士、仕丁の國養物にあたる(『大日本古文書』15-p. 24)。平城宮木簡ではこのほかに2例の養物
錢木簡がある。上端が折損している。柱彫形ニ四出土。(PL. 102)

1) 『平城宮発掘調査出土木簡概報四』p. 20上段。平城宮木簡3076『平城宮木簡三』

第IV章 灰物

木簡80 (表) □□□ 虞道 人成 大口

(裏) □五人 常食□ □ 廿五日 (107)×13×4mm 6081

常食の請求文書であろう。25日とのみ記していることから毎日の請求伝票であることがわかる。
常食の請求 同類の平城宮木簡として西宮に上番した兵衛の請求伝票がある(『平城宮木簡一』91-118)。
この木簡では姓を記していないのが特色である。次の木簡81も同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 102)

木簡81 (表) 牛甘 真足 虞道 大倉

(裏) 合四人 177×(29)×4mm 6019

人名を列記した木簡。木簡80からみて食料請求の木簡であろう。柱掘形ニ五出土。(PL. 103)

木簡82 荒鶴 合二人

(183)×(15)×9mm 6081

人名を記した付札。上下端ともに折損し、左右も割れている。柱掘形ニ五出土。

木簡83 頸馬糸

(156)×16×7mm 6039

頸馬糸の所持品につけた付札。木簡69と同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木簡84 湯半連野守

276×37×4mm 6031

人名を記した付札。上端がわずかに欠損。木簡69と同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 105)

木簡85 (表) 春部氣万呂

(裏) □□□

□ □ (230)×22×5mm 6081

人名を記した付札。裏は天地逆で別筆。上下端とも折損している。木簡69と同類。柱掘形ニ五出土。(PL. 105)

木簡86 (表) □ 日下部久治良二

(裏) □計 □□□ □ (148)×23×2mm 6081

裏は別筆だが、削平されて墨跡をうしなう。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木簡87 (表) □□□解申□□□□□

□ □□□ □「□□□□」

(裏) 「矢称万呂所 欲處 珠女」

□ □ □ □ □□□□ (763)×(12)×2mm 6081

解文の上に「矢称万呂」以下の落書きを記す。上端は折損し、右辺は破損。左辺は二次的に削りこんでいる。柱掘形ニ五出土。

木簡88 衛門府

126×15×4mm 6032

衛門府 衛門府が保管する物品の付札。次の木簡89も同形で同筆。柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

1 木 筒

木筒89 衛門府
柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木筒90 □勝宝五年正月□
柱掘形ニ五出土。(PL. 104)

木筒91 授刀所 小竹七十
授刀所の管理する小竹につけた付札。小竹(シノ)は『延喜式』によれば祭祀の用具ないし 授刀所
は竹製品の素材としてあらわれ、箆竹と同義。SB7802出土の木筒が衛門府と密接に関連して
いることからすれば、授刀所は衛門府下の官司の可能性がある。柱掘形ニ六出土。(PL. 102)

木筒92 春日部國勝
木筒95と同じく人名を記した付札。柱掘形ニ六出土。(PL. 104)

木筒93 □万呂□
柱掘形ニ六出土。(PL. 105)

木筒94 日久米□□
墨線で抹消している。柱掘形ニ六出土。

木筒95 □丈部□
墨線で抹消している。柱掘形ニ六出土。(PL. 102)

木筒96 大
柱掘形ニ六出土。

木筒97 大足□
柱掘形ニ五出土。

木筒98 栗田木□
柱掘形ニ六出土。(PL. 105)

木筒99 □□
□ 合□
柱掘形ニ六出土。(PL. 102)

木筒100~112
SB7802からも文字を記していない木筒が出土している。それらは SD3715の場合と同じよう

第IV章 遺物

未使用木筒に付札類であり、短冊形のものは抽出していない。木筒83, 84などの人名を記した付札は、あらかじめ用意した木筒73のような貢進付札を再生したものとかんがえられなくもない。この点からすれば、貢進付札がこの地に存在しても、直ちにここで貢進物を解いたことにならない。他方一部は掲げたが、人名を墨線で抹消した削屑が多く出土しており、木筒がかなり頻繁に削りなおされていたことがうかがわれる。合計13点のうち、完形品は4点(100, 102, 105, 108)であり、各々の寸法および樹種については Tab. 4 に表示した。

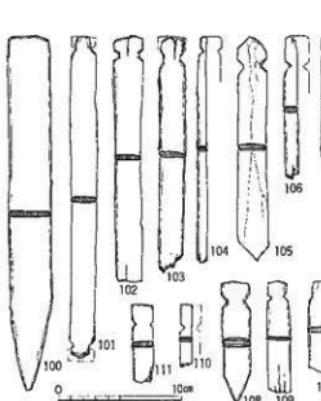


fig. 55 SB7802出土木札未使用木筒

番号	型式	長さ	幅	厚さ	材質
100	6051	290	33	5	ヒノキ
101	6031	263	20	4	"
102	6032	200	22	4	"
103	6039 (192)	20	5	スギ	
104	6039 (184)	(7)	4	ヒノキ	
105	6033	181	23	5	"
106	6039 (11.1)	(11)	5	"	
107	6039 (101)	18	4	"	
108	6033	99	22	8	"
109	6039 (92)	19	2	"	
110	6039 (51)	(10)	4	スギ	
111	6039 (64)	16	5	ヒノキ	
112	6039 (80)	27	5	"	

Tab. 4 SB7802 出土未使用木筒の寸法
() は現在値・単位mm

H まとめ

i SD3715出土の木筒について

SD3715から出土した木筒は、つぎの4種類に大別することができる。第1類は中衛府に関連するとおもわれる文書木筒(1~4, 6, 7, 13~15)である。第2類は飯を請求した文書木筒(10~12)である。第3類は人名を列記した木筒(5, 17, 19)である。第4類は食料品に付した付札(29~37)である。以上のうち、出土遺構との関連で注目されるのは、第1類の中衛府関係の木筒である。木筒1, 2, 4はいずれも兵衛府から中衛府へ充てた文書であるから、これらの木筒は中衛府に伝達されたのち、中衛府ないしはそれに直接関連する官衙で廻棄されたものとみてよい。

中衛府は神龜5年7月21日に設置され、その職務は「常に大内にありて、もって周衛に備う」とのべられるにとどまり、宮内のどの施設を守備したのかはつまびらかにしない。「延喜式」では中衛府の後身である右近衛府が閑門を守っているので、兵衛府とともに内裏の周辺を守衛したようである。平安宮古圖では内裏の西側にあたる陰明門の南掖に右大将の宿所が記されている。あるいは平城宮にあっても内裏西側に中衛が守衛する施設があったのであろうか。出土地点が内裏地域の西外郭外側にあたっていることは、このような推察を可能にするのであ

るが、確証はない。ところで、本簡出土地付近に中衛府の貯蔵的な施設を想定すると、第3類の人名を列記した木簡は、中衛の名前を記したものとかんがえられる。ただし、出土地点が溝なので、かならずしも中衛府の一括物が堆積しているわけではなく、なお慎重な検討を要する。たとえば本簡18にみえる民金万呂の名前は上述したように西宮兵衛にもあらわれており、両者が同一人ならば兵衛の名前もそこにふくまれていることになる。

第2類の食料請求文書では、造花所や厨など文書の先がことなっており、すべてが中衛府 食料請求文書に關係するものとはおもわれない。第4類の食料品付札は、宮内では内裏の周辺から出土する場合が多く、特異な性格のものである。平城宮内に搬入される食料品のなかでもとくに海産物の場合には調や贋の形態をとっている。調・贋などの品物が諸國から貢進してくるとき、貢進荷札がつけられており、荷札は荷物が解体されるまで付随していたものとおもわれる。第4類にまとめた付札は、おそらく貢進物の荷物が解体されたのち、小分けして宮内の各所で消費される前に再び整理するためにつけられたものであろう。付札の大きさが、一般的の貢進荷札にくらべておおむね小形であることからも推測されよう。このような付札が内裏地域の周辺から発見されることは、内裏などで行なわれた宴会用の食料品を保管しておくためにつけた付札かもしれない。

ii SB7802出土の木簡について

SB7802の柱抜取痕跡から出土した木簡が、短期間に投棄されたものであることについてはすでに述べた。しかし投棄の期日をもう少し限定しないであろうか。いま木簡のなかから日付のあるものをひろいあげると Tab. 5 のように6点ある。まず年については、天平勝宝5年 木簡投棄時の概定の可能性がつよい。それは木簡76の丸子一族の人名列記が天平勝宝5年6月～8月以前であることとも矛盾しない。つぎに正月が3例あり、20日以後の日付が4例あることからすれば、これらの木簡の中心が天平勝宝5年正月にあることが頗りできよう。こうしたことから、SB7802の廃絶が天平勝宝5年2月もしくはそれ以後、6月までの間にあったことが想定される。

木簡88・89によって、第1次大極殿地域の誓園が衛門府の管掌であったことがうかがわれる。その配下に授刀所があり(木簡91)、衛士を揃えている(木簡79)。進上御米(木簡74)も衛士のために郷里から輸送されたものかもしれません。木簡60・62の地名落書きは衛士の山身地を戲れに記したのかもしれない。人名を列記した木簡(62, 72, 80, 81, 82)も衛門府との関係で検討する必要があろう。木簡80に「常食」とありまた「廿五日」の日付があることからみると、官人に対する毎日の食料を請求した伝票であることがしられる。この種の木簡としてかつてSK820(平城宮木簡一)から西宮兵衛のものが出土している。

そこでは姓のみを列記し、名前を記していない。それに対して、SB7802木簡では名前しか記さないという特色がある。また、支給された食料は「常食」と称するのみで、火糸とか麻糸とか記されていないので、衛士に配給したものとはかんがえられない。したがって、この木簡を衛門府の機構内でかんがえると、衛門府にぞくする衛士・門部のうち後者の食料請求木簡にあて

	記 事
a	正月廿九(未收)
b	天平勝宝〇年〇月二日(木簡76)
c	月廿七付牛甘(木簡72)
d	常食…廿五日(木簡80)
e	正月廿八日(未收)
f	勝宝五年正月二日(木簡90)

Tab. 5 紀年銘木簡表

るのが妥当であろう。この種の木簡には抹消したものがあり、削肩にも同類のものが比較的多く出土している。

殿守（木簡62）、**大歎守**（木簡77）は門部・衛士らの職務をあらわす言葉である。木簡68は御奥掌 人の出入をSB7802付近で照合したことをしていている。

1人の姓名を1枚の札に記す木簡（69、78、83～85、92）は比較的多い。それらは列記する場合こととなり、姓名を明記する。他方、この種の木簡に貢進荷札を再生して用いたものがある可能性についてはすでにふれた。

以上のようにSB7802木簡は全体として衛門府に関連させて理解しうる。つまり、天平勝宝5年段階において、第1次大極殿地域の諸門は衛門府によって警固されていたのである。『宮衛令集解』によれば、古記に「外門、謂最外四面十二大門也、主當門司、謂門部也、其中門、謂衛門與衛士共防守也、門始署繕此門也、内門、謂兵衛主當門之也」とある。つまり、平城宮内の諸門のうち閻門（内門）とよばれる内裏や大極殿院の南門は兵衛府が守ることになっており、それに対して朝堂院門など宮門（中門）とよばれる諸門は衛門府が守ることになっている。この点からみると第1次大極殿地域の南門SB7801は宮門にあたるものとみてきつかえなかろう。天平勝宝5年の段階、この地域は内裏でも大極殿でもなかったのである。

2 瓦 塙

今回報告する発掘区からは、多量の瓦塙類が発見された。大半は丸・平瓦、軒瓦であり、なかには篆書きや刻印による文字瓦もふくまれている。ほかに鬼瓦、面戸瓦、熨斗瓦、隅木蓋瓦などの道具瓦と塙が出土した。とくに塙は第Ⅰ期の埴輪推定 SX6600 に使用しているため、その出土量は他の発掘区にくらべて多量であった。

軒瓦は4,591個体出土し、これまでに平城宮跡から出土した総点数 27,537個体(1978現在)の約 出土量 1/6にあたる莫大な量にのぼっている(別表2・3)。

軒瓦4,591個体の内訳は、軒丸瓦2403個体 37型式85種、軒平瓦2188個体 31型式67種である。それらの多くはすでに『平城宮報告 I~IX』で報告するとともに、『基準資料瓦編 I~VIII』において逐次報告した。ここでは主として、遺構との関連に重点をおいて記述する。

第1次大極殿地域は、南方の約2/3が建物のまったくない広場であり、瓦は遺構の密集する 分布 築地回廊や殿舎地区に分布する。fig. 57にかけた軒瓦の分布図をみれば、遺構との関係は一段とあきらかとなろう。分布図は、調査時に設定した小地区(3m方眼)にもとづき、その出土が i) 10個体以上、ii) 9~5個体、iii) 4個体以下の3段階にわけて示したものである。殿舎地区、東面築地回廊、第Ⅰ期南面築地回廊・南門・東壁地区、第Ⅱ期南面築地回廊・南門地区に分布し、広場地区ではほとんど分布していないことが理解できるであろう。こうした分布は建物や築地回廊にどのような種類の軒瓦が使用されていたかを示す手振りをあたえてくれる。

つぎにこの地域の軒瓦の型式別出土比率をみると(fig. 58)、軒丸瓦では i 6284 (14.4%)、

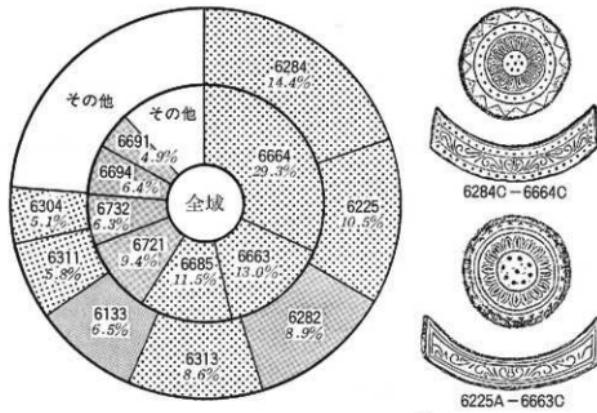


fig. 58 第1次大極殿地域出土軒瓦の比率

1) 泰良国立文化財研究所「泰良国立文化財研究所基準資料 I~VIII 編 I~VIII 1973~1980
2) 斧文の粗い表示は第Ⅰ期遺構による。

表示は第Ⅱ期遺構とともに軒瓦であることを示している。以下円グラフも同様である。

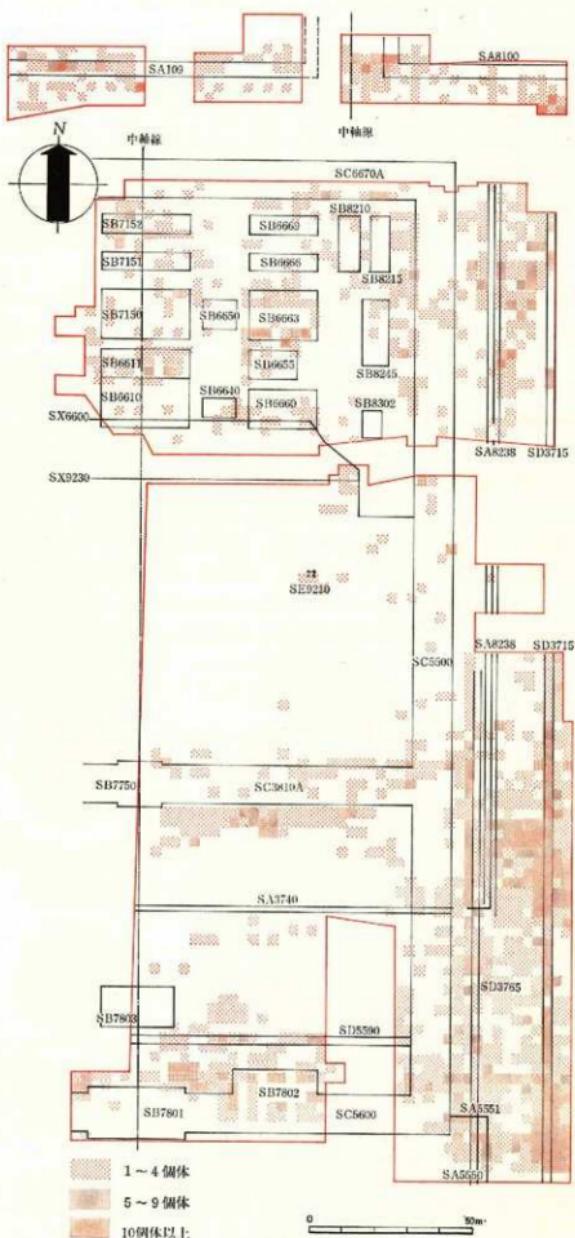


fig. 57 第1次大検査地域の軒瓦分布

ii 6225(10.5%), iii 6282 (8.9%), iv 6313 (8.6%), v 6133 (6.5%), 軒平瓦では i 6664 (29.3%)， ii 6663 (13.0%)， iii 6685 (11.5%)， iv 6721 (9.4%)， v 6732 (6.3%) の順である。この比率によって当地域で用いた軒瓦の組合せの大まかな変遷は、 6284-6664, 6313-6685→6225-6663, 6282-6721→6133-6732の組合せが基調になっているといえる。これは、 遺構変遷の第Ⅰ期から第Ⅱ期までに対応する。なお、 第Ⅲ期の平安時代初期の建物に平安時代の瓦がないことは、 前代の瓦を再利用したり、 また建物の多くが瓦葺きでなかったからだろう。以上のべたような概説をふまえ、 主要遺構と軒瓦の関係についてのべる。なお、 軒丸瓦の記述にあたって 間弁の分類は、 間弁が独立するものをA系統、 異線状にめぐらしものをB系統、 間弁のないものC系統とした。また、 瓦型式の特徴などについては初出のところでのべることにする。

A SD3765の瓦 (PL. 109, PL. 108, PL. 113)

遺物は全般的に少ないが、 軒丸瓦では藤原宮式6273A 1点、 6282A 1点、 6284A 1点、 6284C 8点、 軒平瓦では6664C 1点が出土した。ほかに面戸瓦が6点出土している。軒丸瓦6273Aは 藤原宮式珠文帶凸面鑄唐草文縁複弁8弁蓮華文瓦で、 藤原宮式を代表する一例である。面径が約19cmの大ぶりの瓦で、 中房に1+5+8の蓮子を配し、 蓮弁・珠文・鋸齒文を精密に割りついている。6282Aは弁をB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、 ほかの6282では中房の中心蓮子が大きいのにたいし、 このA種の中心蓮子は周囲の蓮子と同じ大きさである。6282Aは、 藤原宮式6281の文様構成をうけついだ瓦といえる。6281A・CはB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、 Aは弁区がやや盛り上るのにたいし、 Cは平坦につくる。軒平瓦6664Cは、 珠文縁3回反転均整唐草文瓦で他の6664よりやや小ぶりである。中心筋の花頭基部はやや閉き、 大宮大寺式6661の系統にぞくする。SD3765が平城宮創建時に削断され、 短期間のうちに埋立てられていることからすると、 藤原宮式6273Aと共に伴った軒瓦は、 平城宮創建時の瓦に比定できる。とくに6284Cと6664Cは第1次大創建瓦極限地域を代表する組合せであり、 この溝から出土した軒瓦はおそらく第Ⅰ期の築地回廊SC5500に使用したものであろう。

B SB7801とSB7802の瓦 (PL. 106~PL. 113)

南門地区からは、 軒丸瓦6282A・G, 6284A・C・E, 6304C, 軒平瓦6664B・C・K, 6665A, 6668Aが出土した。ほかに鬼瓦2点、 面戸瓦などがある。6282GはB系統の複弁蓮華文瓦 軒丸瓦で、 中房に配する1+6の中心蓮子が大きい。6284Eは今回新たに出土したのもの、 Cとよくており破片では区別しがたい。となる点は凸線鋸齒文の数で、 Cが16に対し、 Eが22となる。また、 Eのほうがやや面径が大きい。6304CはB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、 内区がやや盛り上がり、 中房が突出する。軒平瓦6664B・Kは珠文縁3回反転均整唐草文瓦である。B軒平瓦は新出のもので、 他の6664とはことなり、 両端の第3単位第2支葉がまきこまず、 臨区界線に接している。頭は笠で削り出したような浅い段頸となる。Kは中心筋の花頭先端がやや扁平となり、 店草文左第1葉が右第1葉より大きい。B・Kとともに花頭基部が開き、 Cとともに古い

1) Eの同範例は恭仁宮大施賀跡から発見されていて、 恭仁宮軒瓦型式番号KM04。京都府教育委員会「恭仁宮跡昭和52年度発掘調査概要」に埋

藏文化財発掘調査概要1978』1978, p. 1~72,
fig. 8, PL. 10

要素をもっている。6665Aは珠文縁3回反転均整唐草文で、第3単位の主葉が、脇区界線に接せず、まきこむことによって6664と区別できる。大ぶりの瓦で唐草文のびやかに反転する。6668Aは珠文縁3回反転均整唐草文瓦で、中心飾の花頭先端が扁平となる。第1次朝堂院南門（第119次調査）¹⁾では6284Cと組合いで、創建時の軒瓦の一つである。6685Bは珠文縁3回反転均整唐草文の小型軒平瓦である。

南門地区から軒瓦の出土は全体に少ないが、6284が77.7%、6664が67.9%をしめる。6284はEとCが主体で、6664はCが多く用いられている。南門SB7801では、このような創建当初につくられた瓦で葺かれていたことがわかる。また、南門の下限をしめす瓦として、6282Gがあり、その年代は天平17年～天平勝宝間に位置づけられている。

東棟地区からは、軒丸瓦6131A・B、6225A・C、6281A、6282B・G、6284A・B・C・E・F、6296A、6304C・L、6307A、6308A・B、6311A、6313A・C、6314A、軒平瓦6641A、6663A～C、6664B・C・K・H、6666A、6668A、6681、6685B・D、6691A、6721G・Hの各型式が出土した。うち、軒丸瓦6281Aと軒平瓦6641Aは藤原官式である。6131A・Bは珠文帯凸面軒丸瓦 細齒文縁単弁6131弁蓮華文瓦で、AはBより面径が大きく、またAは間弁をもつがBは間弁をもたない。6225A・Cはいずれも大きな中房に1+8の蓮子を配したA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区内縁に團線、外縁に凸面細齒文をめぐらす。6225A・Cは軒平瓦6663Cと組合いで、第2次大極殿・朝堂院の所用瓦であることがわかっている。6282Bは弁が短く、外区内縁と外縁を画する界線が太い。BにはBaとBbの彫直し関係がある。6296AはC系統の複弁蓮華文瓦で、外区は珠文帯凸線細齒文縁である。弁と弁が接しているため、一見単弁のようにみえる。

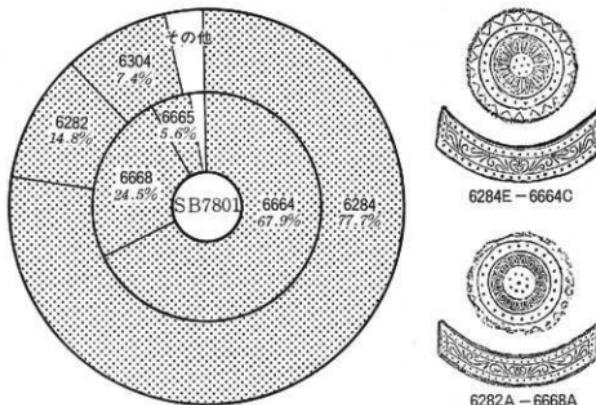


Fig. 50 南門地区出土軒瓦の比率

1)『午報1980』p. 25～27

2) 南門地区とした軒瓦は、6ABR-H。

地区的小区割 A～F・S・T, 39～52の範囲から出土したものである。

6284Fは5種の中でもっとも大きな面積である。6304Lは、復原径が約28cmの大型の瓦で、大棟や降り棟などに飾られる特殊な瓦である。6307Aは間弁をもたないC系統の複弁8弁蓮華文瓦で、弁区は盛りあがり、1+6の蓮子を配した中房が低い。6308Aは珠文帯凸線鉢巻文縁複弁8弁蓮華文瓦で、やや立体感にかけるが均整のとれた文様である。瓦当側面に「北」「井」の刻印をおす例があり、同じ刻印は、軒平瓦6663Aにもみられ、両者が組合うことが、宮北辺地域の調査(第126次調査)²⁾で確認されている。6311は弁が大きく反転するA系統の複弁蓮華文瓦で、Aの弁端は内外区を画する界線より高い。6313A・Cは、中房に大きな珠文を一つ配した複弁4弁蓮華文の小型軒丸瓦である。4種に分かれるがCがもっとも小さい。軒平瓦6685と組合う。6314Aも6313と同様複弁4弁蓮華文小型軒丸瓦であるが、中房に1+6の蓮子を配する。6314は5種に細分され、Aはそのうちもっとも大きく、外縁上端に凸線をめぐらす例もある。

軒平瓦6663A・B・Cは、外区を圓線縁にする3回反転均整唐草文瓦で、A・Cは曲線頭で軒平瓦あるがBには曲線頭と段頭がある。なお、さきにGとして報告したものは、Bと同範囲であることが判明したため消去した。A・Bは唐草文のがびやかに回転するにたいし、Cはやや形式化した唐草となる。A・Bは軒丸瓦6308と組合い、Cは6225A・Cと組合う。後者は、第2次大極殿・朝堂院式である。6664Hは、Kとており、15種に細分される6664型式のなかでも、古い要素をもつ。6666Aは6685同様の小型軒平瓦で、外区の珠文は小さい。段頭であり、軒丸瓦6314と組合う。6681は、6663と同じく圓線縁3回反転均整唐草文の軒平瓦で、6663とのちがいは中心飾に花頭が単線で表現されていることである。小片が1点出土しただけで、細分型式は不明。6685Dには段頭と曲線頭の2種がある。6691Aは中心飾が逆心葉形となる4回反転均整唐草文瓦である。平瓦部凹面に「私」の刻印をおす例がある。平城宮での組合せは不明だ

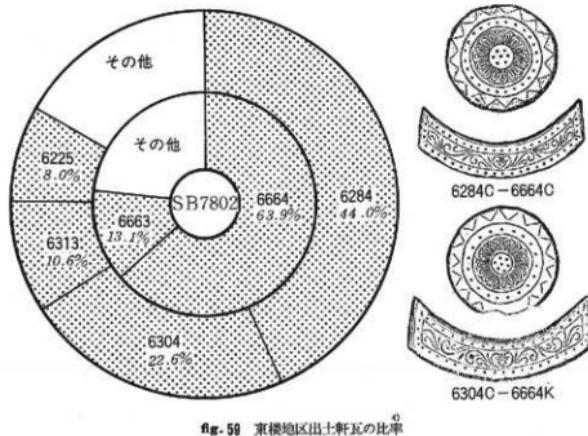


Fig. 59 東樓地区出土軒瓦の比率

1) Fの同範囲は遠く奈良市寺内出土している。
2) 行橋市教育委員会『行橋市史』1980, p.15
3) 奈良國立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981, p.15

3) 「基準資料V 瓦編5」1977
4) 東樓地区とした軒瓦は、6ABR・H地区の小地区割A~F・S・T, 26~38の範囲から出土したものである。

第IV章 遺物

が、恭仁宮では軒丸瓦6320Aaと組合い、法隆寺東院では6285Bと組合っている。頭は曲線頭。6721G・Hは中心筋の花頭が逆小字形を呈する5回反転均整唐草文瓦である。外区に細い珠文を密にめぐらしている。Gは内外区を画する界線が太い。Hは縫区に珠文を記さないa種と、珠文を記するb種に分類できるのが特徴である。いずれも曲線頭である。

以上のべてきた各型式の軒瓦は、SB7802の柱抜取痕跡から出土しており、この建物に詳しい新しい瓦たとみてさしつかえない。ここでは南門地域よりも多様な軒瓦が用いられ、6284C-6664Cの比率がやや低下し、軒平瓦6663, 6685、軒丸瓦6225, 6313の後出的な要素をもつ軒瓦の比率が高くなっている(fig.59)。こうした瓦の様相は、SB7802が、造営当初の築地回廊SC5600を改修して建設されたとする発掘所見を裏づけるものである。また、この建物の廃絶は柱抜取痕跡から出土した木箇によって天平勝宝5年(753)頃とみなされるが、軒瓦も瓦の編年でいう第Ⅲ期以降のものはふくんでおらず、遺構の変遷と矛盾しない。なお、6304Cはこの地域の出土比率からみて、6664Kと組合い、平城宮創建瓦にぞくするのであろう。

C SC5500の瓦 (PL. 107, PL. 109, PL. 110, PL. 111, PL. 114)

東面築地回廊地区からは、軒丸瓦6018C, 6130B, 6131A, 6133A・B・C・M・K, 6134A, 6135A・E, 6225A・C・L, 6227A, 6281A, 6282B・D・E・G・II・I, 6284A・B・C・E, 6285A・B, 6291A, 6296A・B, 6303B, 6304A・B・C, 6307A, 6308A・B・D, 6311A・B, 6313A・B・C, 6314A・B・C, 6316B・H, 6320A、軒平瓦6641C, 6642A, 6643A・B・C, 6646E, 6663A・B・C・F, 6664B・C・D・F・G・I・K, 6665, 6666, 6671C, 6681A・B・C, 6685A・B・C・D, 6688A, 6689A, 6691, 6694A, 6721A・C・G・H・E, 6732A・Cの各型式が出土した。

軒丸瓦6018Cは重闕文で、蓮華文軒丸瓦の文様帶を消去し、界線だけをのこした斬新な文様構成である。中房部はやや突出し第1界線が二重になる。6130Bはやや小ぶり(径約13cm)で、中房が突出して中央の蓮子が大きい。単弁16弁を配し、各弁に界線をめぐらす。外区は珠文帯凸線縦文縁である。6133M・Kは単弁16弁蓮華文瓦で、Kは外区内縁と外縁を画する界線を入れるが、Mはない。6134Aは単弁12弁蓮華文瓦で、中房に1+8、外区に珠文帯鉛歯文をめぐらす平坦な瓦である。この型式は殿舎地域で多く出土し、軒平瓦6732と組合う。6135A・EのうちEが新出のものである。Aは1+5の蓮子を配した小さな中房から長い単弁12弁を配し、外区に細かな珠文帯凸線縦文縁をめぐらす。繊細な文様をもつ△にくらべてEは単弁13弁を配し、各弁の大きさが均等でなく、委縮した蓮華文になっている。Aは軒平瓦6688と組合い、ともに丸瓦および平瓦部には、細かな格子目印きがある。6303BはB系統の複弁8弁蓮華文瓦で弁区がわずかに盛りあがり6284Fに類似する。6285はB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、中房に1+5の蓮子を配する。外区は珠文帯凸線縦文縁。Aは内区がもりあがり、中房はやや半球状になる。Bは新出のもので、Aにくらべて凸線縦文縁の数が少なく、中房も平坦になる。Aは法華寺や奈良市歌姫西瓦窟で6667Aと組合っている。¹¹Bは法隆寺東院で軒平瓦6691Aと組合うことが判明している。¹²6291Aはやや小ぶりのB系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区に珠文帯凸線縦文縁

11) 奈良県教育委員会『奈良山』1973, 第26図

12) 東京国立博物館『法隆寺東院に於ける発掘調査報告書』1918, 第188図

文を配し、外線上端には凸線をめぐらす。6296Bは『平城宮報告IV』で6133Gとしたものであるが、今回の資料で凸線鋸齒文をもつことが判明したため、6296に変更した。

6304A・Bはよりもやや大きい。AとBは非常によく似ているが、珠文數がことなり、Aの17にたいしてBが20となる。²⁾ 6316B・HはC系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区は珠文帶素文線となる。HはC新出であり、丸瓦部凸面には網印きのがこり、瓦当直上まで施されている。6316は軒平瓦6710と組合す。6320AはC系統の複弁12弁蓮華文瓦で、今回範の彫り直しのあることがわかりAa・Abに細分できる。さきにわかっていたものは、外区が凸面鋸齒文線になるAbであるが、凸線鋸齒文線になるAaが出土し、凸線を凸面鋸齒文に彫り直したことが確認された。Aaは恭仁宮の創建瓦で、軒平瓦6691Aと組合って大極殿に葺いている。なお、Abは恭仁宮から出土しないので、恭仁宮で使用した瓦を平城宮で彫り直して使用したことが想定できるのである。

軒平瓦6641C、6642A、6643A～C、6646Eはいずれも藤原宮式。6663Fは唐草文が上下の軒平瓦界線からでて、中世の軒平瓦のような短くかくつ深い段頭となる。6664D・Fは中心飾りの花頭が上界線にとりつき、6664のなかでも新しい。G・Iは唐草文ものびやかに展開し、中心飾り花頭基部が聞く古い要素がある。6671Cは興福寺式の一種で、中心飾りの中心葉が上から下へまきこむ。上外区脇区は杏葉珠文、下外区が鈴南文となる。興福寺で出土するAよりやや小ぶりである。6688Aは右第1単位の唐草が上外区からでているので、左右対称にはならない。曲線頭と段頭がある。軒丸瓦6135と組合す。6689Aは中心飾が燕尾状を呈する3回反転均整唐草文瓦である。6694Aは6689同じく中心飾が燕尾状になり、各単位の唐草が上下の界線からでている。他の軒平瓦よりも弧が深いためか、使用時に両側を打ちかいた例が多い。6721A・Eはよく似ているが、Eは新出である。

6732は東大寺式の軒瓦で、主葉の内側に4つの支葉のある唐草が反転する華麗な文様構成である。11種にわかれ、平城宮ではA～Dの4種が出土しているが、東大寺と共に出土するのはDにかぎられる。なお、先にBとしたものはCと同様であることが判明している。今回はA・Cの2種が出土し、いずれも曲線頭である。

東面築地回廊地区からは、多種の型式の軒瓦が出土し、時期的にもばらつきがある。これは、地区的範囲第Ⅰ期から第Ⅲ期までの長期間、同一位置での建替や修理が行なわれたことに起因するのである。そこで、東面築地回廊をつきのように南北3区に区分して、瓦の出土比率をみるとした(³⁾fig. 60)。第Ⅰ区は第Ⅱ期築地回廊東南隅以南にのびる部分。第Ⅱ区は第Ⅰ期の築地回廊SC5500と重複する第Ⅱ期の築地回廊SC8600の南半分。第Ⅲ区は第Ⅰ期の築地回廊SC5500と重複する第Ⅱ期築地回廊SC8600の北半分。第Ⅰ区では軒丸瓦6313-30.1%，6284-19.5%，6225-17.8%，軒平瓦6664-38.9%，6685 26.7%，6663-10.6%となり、第Ⅰ期の築地回廊が廃絶する天平勝宝年間以前の瓦が大半をしめている。それにくらべて第Ⅱ区では、軒丸瓦6133-

1) 6304型式は内裏東外軒で多量に出土しており
そこでは6664よりも後出的なD・Fと組合わされていて。

2) 『平城宮報告II』p. 62, PL. 43

3) fig. 60の東面築地回廊地区とした軒瓦は、6A
BE-P・M・K, 6ABS-E, 6ABR-Q, 6AB

D-D 地区の小地区割10~24, 6ABD-C, 6A
BC-V・U地区の小地区割4~16の範囲で出土
したものととりあげる。なお、それを3区に細
分するのであるが、第Ⅰ区は 6ABE-M 地区
以南、第Ⅱ区は 6ABE-K, 6ABD-C 地区、
第Ⅲ区は 6ABC-V・U 地区である。

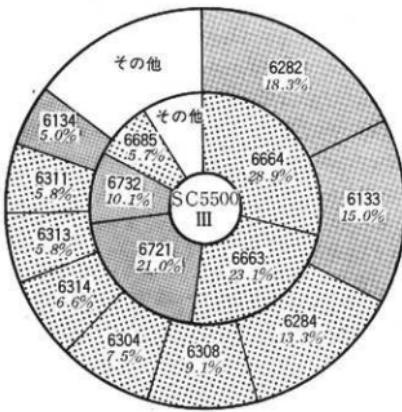
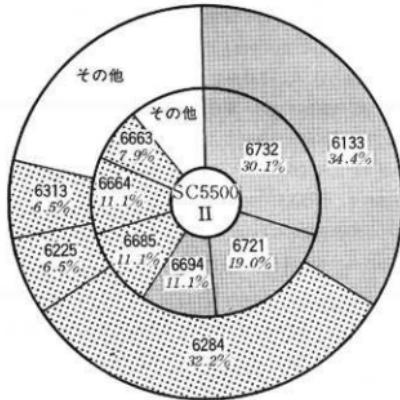
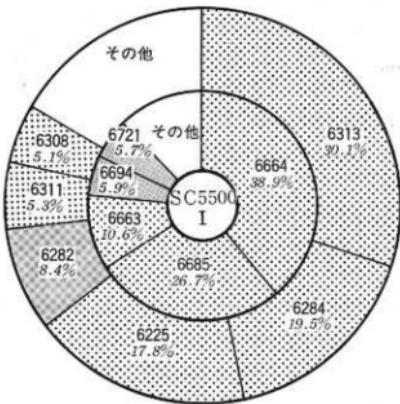


fig. 60 東面築地回廊地区出土軒瓦の比率

34.4%, 6284-32.2%, 6225-6.5%, 6313-6.5%, 軒平瓦6732-30.1%, 6721-19.0%, 6664-11.1%, 6685-11.1%, 6694-11.1%の比率をしめす。また殿舎地域に接する第Ⅲ区では、軒丸瓦6282-18.3%, 6133-15.0%, 6284-13.3%, 軒平瓦6664-28.9%, 6663-23.1%, 6721-21.0%とほぼ第Ⅱ区と同じような傾向をもつ。すなわち、SC8600の部分では第Ⅰ期の6284C-6664Cにかわり、天平17年以降の新しい組合せである6133-6732, 6282-6721が高い比率をしめし、これららの瓦で第Ⅱ期の築地回廊が葺かれたとみられる。なお、第Ⅰ区にも6133(3.0%), 6282(8.7%), 6721(5.7%)がふくまれることから、第Ⅱ期の築地回廊と第1次朝堂院の間は第Ⅰ期の東面築地回廊を踏襲して、築地で接続されていたとかんがえられる。

D SC3810 と SB7750 の瓦 (PL. 108)

第Ⅱ期南面築地回廊・南門地区からは、軒丸瓦6133A・B・C, 6134A, 6135A, 6225A・C・L, 6241A, 6273, 6275D, 6282B・D・E・F・G, 6291A, 6296A, 6307A, 6304C, 6308A・B, 6311A・B, 6313A・C, 6316B, 軒平瓦6641C, 6663A・B・C, 6665A, 6682A, 6685A・B, 6691A, 6694A, 6221C・F6732Aが出土した。軒丸瓦6241Aは、突出した中房に1+5の蓮子を配したB系統の復元8弁蓮華文瓦。外区は珠文帶素文縁、外縁の形態は幅広い直立縁で、それは中世の巴文瓦の外縁に似ている。瓦当に接合する丸瓦部先端凹凸面にカキ箋によって格子状の刻みをいれる。概して赤褐色を呈し焼成が甘い。

この地区的様相は、第Ⅱ期の東面築地回廊や後述する殿舎地域と同様、軒丸瓦6282-19.1%, 軒瓦の組合せ6133-14.8%, 6313-14.8%, 軒平瓦6663-29.8%, 6685-21.0%, 6721-17.5%となり、天平末年を中心とした軒瓦が用いられている(Fig. 61)。

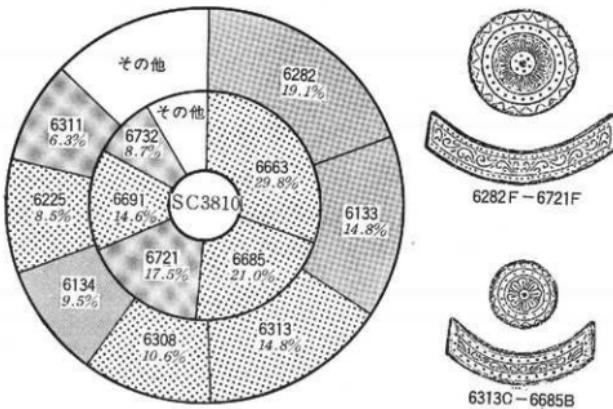


Fig. 61 第Ⅱ期南面築地回廊地区出土軒瓦の比率

1) 第Ⅱ期南面築地回廊・南門地区とは、6ABR-G・6ABQ-D 地区をいう。

E 殿舎地区の瓦 (PL. 106, PL. 111, PL. 114)

殿舎地区から出土した軒瓦は、軒丸瓦6012A, 6130B, 6131A, 6133A・B・C・D, 6134A, 6225A, 6241A, 6282D・B・E, 6284A・B・C・E, 6296B, 6301C, 6308A, 6311A・B・E, 6313A, 6314A, 6321A, 軒平瓦6641, 6663A・F, 6664C・D・G・H・I・P, 6681B, 6682B, 6689, 6694, 6710, 6718, 6721A・C・E・F, 6726E, 6727A, 6732A・C, 6739A, 6810Aの各型式ほか、新型式がある。¹⁾

軒丸瓦6301Cは興福寺式の一種である。間弁が独立するA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、3種軒丸瓦のうちで最も面径が小さい。6311EはA系統の複弁8弁蓮華文瓦で、外区は珠文帶凸線鋸齒文縁である。Eは今回新出のもので、鋸齒文が細い。またこの地区で出土した3型式はいずれも新型式である(6321A, PL. 111-33, PL. 111-37)。6321Aは複弁八弁蓮華文で、完形品は恭仁宮で出土している。33は小ぶりの瓦で、単弁蓮華文で外縁は珠文縁。37は6241Aと同じく外縁が直立し、かつその幅が広い。

6644Pは殿舎地域の第II期の南に拡張した塙の埋土、すなわち、第I期の堆積塙跡SX6600軒平瓦前面の疊敷面から出土した新出の資料で、創建期の軒瓦の一つである。6718Aは5回反転均整唐草文瓦。中心的花頭を欠き、中心葉のみで構成し、第2単位唐草以下では主葉と支葉の2葉で反転する。6726Eは6725と同系統の三回反転均整唐草文瓦で、唐草は上下外区から発している。6227Aは中心筋に十字形の花頭を付す三回反転均整唐草文瓦。6739Aは中心筋が逆V字形となり、各単位の唐草は複雑に反転する。6801Aは中心筋に「修」の字をいれ、中心に向って3単位の飛雲文を配する。修理司に関連する瓦である。

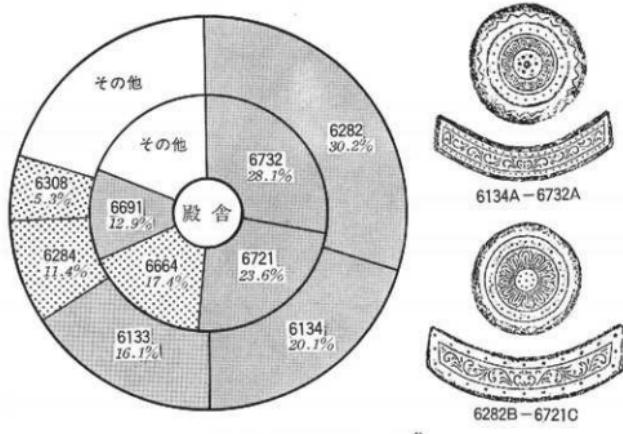


Fig. 62 殿舎地区出土軒瓦の比率

1) 破片が小さいのであえて型式番号を付していない。

2) 殿舎地区的軒瓦出土比率は、中心部の6ABP-D・F地区の出土瓦で代表させた。

この地域の瓦の様相は軒丸瓦6282-30.2%, 6134-20.1%, 6133-16.1%, 軒平瓦6732-28.1%, 6721-23.6%, 6664-17.1%であり、6282-6721, 6133・6134-6732の組合せが主体になっている(fig. 62)。これらの瓦は第Ⅱ期の最古を飾ったもので、第Ⅰ期の大極殿SB7200および後殿SB8120に使用したであろう6284C-6664Cは、5%前後の低い比率をしめしている。第Ⅰ期の瓦が少ない要因は、おそらく大極殿SB7200とともに恭仁宮に運ばれたためであろう。第Ⅱ期建物群のそれぞれの建物に用いた瓦を限定することはむずかしいが、SB6611, SB6610の柱穴抜取痕跡からは6134, 6133, 6732が出土している。

F SD3715の瓦 (PL. 112-1・3, PL. 114-24)

南北溝SD3715は、第1次大極殿・朝堂院と第2次大極殿・朝堂院地域を区画する幹線水路である。ここからは、軒丸瓦6131A, 6133A・B・D, 6134A, 6135A, 6225A・C・L, 6235B, 6241A, 6282B・D・E・F・G, 6284A・C・B・E, 6291A, 6296A, 6285A, 6304A・B・C・L, 6307, 6308B, 6311A・B, 6313A・B・C, 軒平瓦6641C・E, 6643B, 6663A・C, 6664B・C・D・F・K・H・I, 6665A, 6666A, 6669A, 6685A, 6681A, 6682A, 6689A, 6694A, 6704A, 6710A・C, 6721A・C・F・G・D・H, 6725B, 6732A・Cの各型式が出土した。

軒丸瓦6235Bは東大寺式の一種である。平城宮から出土するものはBのみで、これは東大寺 軒 丸 瓦 では発見されていない。内区に中房に1+5の蓮子を配する複弁8弁蓮華文瓦。

軒平瓦6669Aは縁軸軒平瓦であり、今回はじめて出土した。平城宮の縁軸軒平瓦としてはす 軒 平 瓦 でに6760Aがあるが、この例をくわえて2型式になる。6704Aは中心飾りが中字形を呈し、各単位の唐草は主葉と副葉とを区別せず、とびはねるよう回転する曲線彫の瓦である。6725Bは第3単位主葉の先端に副支葉をもつ3回回転均整唐草文瓦。文様的にみて長岡宮式につなが

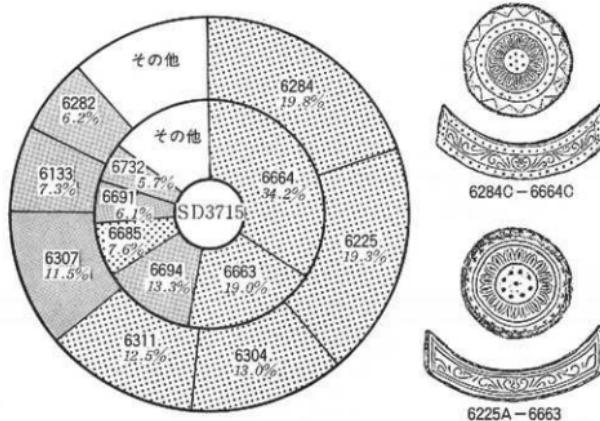


fig. 63 SD3715出土軒瓦の比率

1) 南北溝SD3715とした軒瓦は、6ABD, 6ABE出土のものを代表させた。

系統であり、8世紀末の瓦である。6710A・Cは中心飾が逆V字形を呈する3回反転均整唐草文瓦である。Aは外区の珠文間に×文をいれるが、Cにはない。

SD3715から出土した軒瓦の比率をみると、軒丸瓦6284-19.8%，6225-19.3%，6304-13.0%，軒平瓦6664-34.2%，6663-19.0%，6694-13.3%となり、6225-6664の組合せや、6311-6694(12.5%)などの比率がたかく、東方の内裏地域の出土傾向に類似している(fig. 63)。また、第Ⅱ期に使用される6721(4.7%) - 6282(6.2%)の組合せが低いことからも、第2次大極殿地域の使用瓦が混在しているようである。しかしながら下流のSD3715(B区)から出土した鬼瓦片とSB7802出土の鬼瓦とが接合した事実があり、第1次大極殿地域の瓦も相当ふくまれているとみなければならぬ。

溝の堆積層位は大まかに3層にわかれれるが、軒瓦の顕著な時期差は見い出しがたい。しいていえば第I期創建時に使用された6284C、6304A・C、6664Cが下層に多く、中層では6225-6311が、上層では6721-6282ほか8世紀後半に使用された瓦がみとめられる。

G その他の瓦塼類 (PL. 115・116・fig. 64~67)

鬼瓦 道具瓦(PL. 115・116) 鬼瓦3種と熨斗瓦・面戸瓦・隅木蓋瓦が出土した。平城宮から出土する鬼瓦は6型式に分類される¹⁾が、うち3種が出土した。1は三葉状の大きな鼻と耳をもつ平城宮IV式の鬼面文鬼瓦である。この文様の鬼瓦は大小2種(A・B)わかれており、小型(B)が東棟SB7802の柱抜取痕跡から出土したが、上述のようにSD3715から出土した向って右下縁の破片と接合し完形となる。眼瞼にそって朱塗彩で縁どりし、牙にも朱がのこっている(PL. 115)。裏面に「麻呂」・「堅子」・「真」などの習書のほか鳥が2羽描かれている。2・3・4は裸身の全身像をかたどる平城宮I式A鬼瓦の破片であり、5は鬼面をかたどる平城宮II式A2の頭髪部分の破片である(fig. 64)。

熨斗瓦と面戸瓦 熨斗瓦や面戸瓦は、大ぶりの蘿原宮式の丸・平瓦を半截したり、両端を打欠いて利用したものと、平城宮式の丸・平瓦を利用した2種がある。面戸瓦はいずれも瀝面戸であり、ともにすでに報告したものと同じである。²⁾

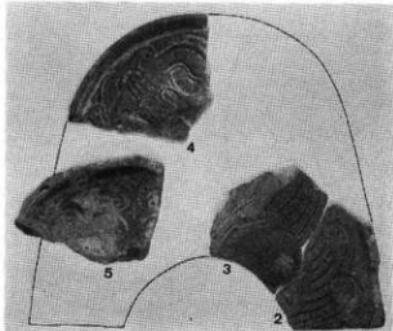


Fig. 64 第1次大極殿地域出土の鬼瓦

1) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊1980 p.29, 『平城宮報告VI』p. 72, いまのところ鬼

瓦の形式分類は毛利光論文にしたがっておく。

2) 『平城宮報告IX』p. 52

隅木蓋瓦(PL.116) 東棟 SB7802の柱抜取痕跡(6片4個体?)と北方のSA109付近から断片(1 隅木蓋瓦点)を発見した。全体の正確な寸法を決めたいが、復原すれば長さ46.5cm内外、幅40cm内外、厚さ6.5cm内外となる。上面からみた全形は、長方形の短辺を先端にあて、ほぼ中心から後方にかけて約80度角の削形をいれる。後部の燕尾状削形の頂点の左右に1.5cm角の釘穴一対をあける。先端木口面には中心飾をはさんで、左右に四反転する花雲文を主文とし、その上下に珠文縁がめぐる。上端では外縁がつくが、下端には外縁がなく、頭がついていない。両側縁は隅木にかぶせるために、内側よりも約2cm程度高くしている。全体は型づくりで、表面に箒切りや箒削りのち指でなでた痕跡をとどめ、上面に丹土が付着する破片もある。なお、類似の文様をほどこしたもののが薬師寺から出土しているが(fig.66)、文様線は本例よりも流麗であり、あきらかに範がとなる。また、薬師寺例では頭がつき、釘穴が1個である点もことなるところである (fig. 66)。

丸・平瓦(PL.116) 整理未完了であるが、出土例のうち特徴的なものについて記す。丸瓦のうち、第1次大極殿地域から多く出土したものに、凸線をめぐらす一群がある。軒丸瓦の丸瓦部の破片にもみられるが、軒瓦型式は不明。凸線は玉縁のほぼ中央に端部に平行してめぐらしておらず、水切りのためとかんがえられる。一方、平瓦のうち凸面縁叩きの下半部を消す一群がある。こうした例は、恭仁宮、東大寺法華堂などでみられる平瓦の調整と類似するが、同じ手法をもつ人名平瓦とは胎土やつくりがことなり粗雑である。

文字瓦(fig.65) 8種類出土した。「私」・「兵」・「理」・「修」・「日」・「田」など一字を記した刻印文字瓦と、人名を記した「真依」・「刑部」・「廣荷」・「日奉」・「宗我部」・「出雲」などの人名文字瓦である。他に「東」の字の筆書きした平瓦が出土している。「私」は軒平瓦 6691A の凹面に押捺している。梵書の「東」も6684Fの凹面に記しているが、同様のものが内裏北方官衙地域からも出土している。「廣荷」については「平城宮報告VII」で「廣□」としたものである。「真依」・「刑部」などの人名文字瓦は、東大寺法華堂および恭仁宮から出土し、瓦工名とかんがえられている。この種瓦は、胎土、技法とともにすぐれており、8世紀を代表する平瓦である。上原真人の見解によれば、印文の製目などからみて、平城宮出土のものがもっと遅く製作されたことになる。

塙(PL.116) 多量の塙が出土したが、その多くは長方塙であり、他に散発的に方塙が出土している。それらはSX6600除くほかは、造構から避難したり、磁盤に用いたものである。

長方塙は長さ約30cm、幅15~16cm、厚さ7~8cm、重さ5~6kgである。長さに対して 長 方 塙幅が1/2、幅に対して厚さが1/2となる。こうした規格は、積み方に多様性をもたせる寸法である。塙積擁壁 SX6600 の壁面には長方塙を積上げているが、第Ⅱ期の拡張時に破壊され、下部の数段がのこるにすぎない。その積み方は長軸の側面を平積にした一丁一順積みである。推定によれば、約16,000個が必要であったとかんがえられる (p. 33参照)。

- 奈良國立博物館監修『天平の地宮』1961 図版 277, p. 17。近年調査した薬師寺東偏房跡・南大門附近の発掘調査でも同様の隅木蓋瓦が出土している。
- 「平城宮報告VII」p. 24
- 奈良県教育委員会『国宝東大寺法華堂修理工

- 事報告書」1972
- 4) 京都府教育委員会「恭仁宮昭和51年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概要」1976
- 「恭仁宮昭和52年度発掘調査概要」「埋蔵文化財発掘調査概要」1977



Fig. 65 文字瓦 1:1

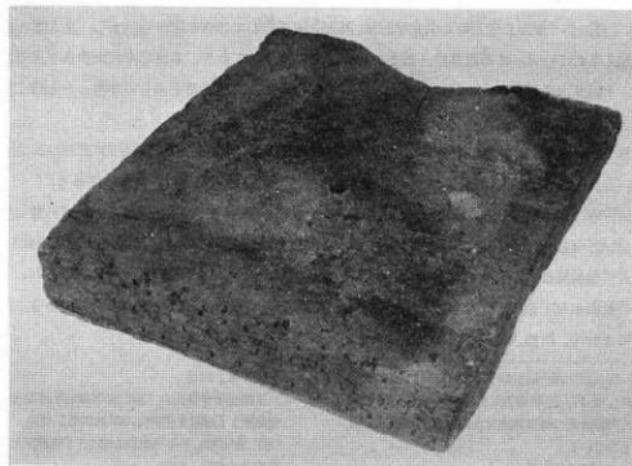


Fig. 66 菩提寺出土隅木蓋瓦 約 1:4

方塚は厳密にいえば長方形を呈しており、一辺が30~29cm、もう一辺が26~27cmと辺によつて寸法がことなっている。厚さは長方塚と同じで7~8cm、重さ10~11kg、長方塚・方塚とともに、各面を箆で調整している。一部に、上下面や側面に糸切りの痕跡をのこすものがある。また、塚の断面をみると粘土をブロック状にして成形するものと上下2層に板状に分かれるものがある。こうした状況は塚の製作法のちがいを反映しているものとみられる。つまり、木枠の中に粘土をつめ込む型抜き法と、塚の大きさにあわせてつくった角柱状の“タタラ”を一定の厚さで切りとる切断法の二通りの存在したことがうかがえる。

塚状飾板 第I期塚積拵壁SX6600の直下から、全形は不明であるが、厚さ約3cmの粘土板に径15cmほど円板を貼りつけ、さらに径8cmほどの腹頭のような半球状の突起をつけた板状の土製品が2点出土している(*fig. 67*)。1は中心の突出部が腹頭形を呈し、2は截頭円錐形をつくっている。ともに色調は褐色を呈し、胎土には石英粒を多量にふくむ。類似品が内裏の東外郭外を流れる東大溝SD2700から出土している。塚積基壇の上端に積んだ装饰塚の一種であろうとかんがえている。

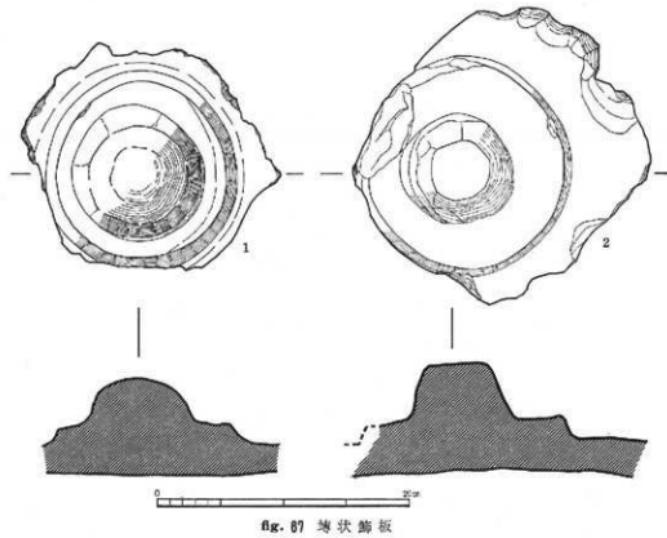


fig. 67 塚状飾板

3 部 材

第1次大極殿地域の調査では、掘立柱の柱根・木樋暗渠・井戸枠などの木材が出土している。なかには、2次的に転用されているものがあり、仕口痕跡を観察することによって本来の使用状況を復原しうるものもふくんでいる。東長SB7802の柱抜取痕跡からは珍らしい建築様形の部材が発見されており、それについては一般の木製品からはずして、この項でのべることにした。また、礎石など各種の石材が遺構にともなって発見されており、それらの説明もこの項にふくんでいる。

A 柱根と礎盤 (PL. 117~125)

i SB7802の柱根 (PL. 117)

最大の柱根 第I期の東棲SB7802のニ四柱掘形内に、斜傾してあたかも引抜く途中で中止した状態で、巨大な柱根(1-1)がのこっていた。ほかの柱はすべて完全に抜きされているが、この1本だけがわずかにのこっており、建物の規模をかんがえるうえで貴重なものである。なお、この柱根は今までに検出した平城宮出土柱根のうち、もっとも径が太いものである。心は空洞になっているが、推定樹齢500~600年のコウヤマキを用いたものである。

柱根の下底木口に溝(幅17.5cm、深さ14cm)をほり、その上方に上下2段の貫穴をあけている。下段の貫穴(23×24.5cm)は下底木口の上方100cmのところにあり、上段の貫穴(20.0×20.8cm)は170cmのところで下段貫穴と直交する方向に貫通させている。こうした貫穴に対して下底木口の溝は対角線上に位置することになる。下段貫穴には、両側から挿入した2本の角材(2.3)のがのこっていた。これらの角材は、掘形に柱を据えつけるための繩掛けに利用したのち、不同沈下を防止するための根据みとしてそのまま掘形内に埋め込んだものであろう。

他の柱掘形にも柱の貫穴に挿込んだとみられる角材片がのこっていたが、柱底の溝にかませた角材はどの柱掘形からも発見していない。こうしたことから、下底木口の溝は沈下防止のために掘形の底で角材をかませた溝としてはかんがえられない。この溝についてはつきのように想定すればどうだろうか。柱を据えつけるとき中央に突起を作り出した長く丈夫なレールになる盤状の材を地上に敷き、これに柱木口の溝をかませ、すべらせて柱穴に納めたのではあるまい。貫に縄をまいて吊上げ、所定の位置に柱を納めるための仕事であろう。

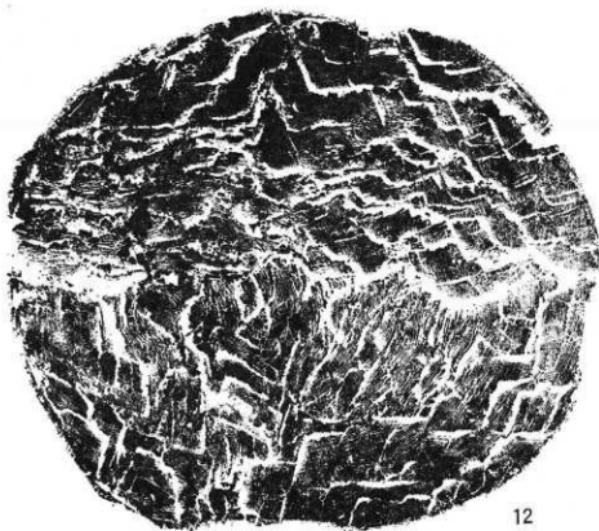
ii 小規模建物の柱根 (PL. 118)

雜舎の柱根 いずれも東外部SD8715の東岸で検出した第I期の小規模建物SB5510, SB5520, SB5490などで発見したものである(4~10)。直径15cm以下のモミ・サカキなどの心持丸太材で、表皮をとどめている。類似の柱根をとどめる小規模建物が、南方の6ABB¹²区でも検出されているので、第1次大極殿地域を建設したときの仮設的な小屋であろう。

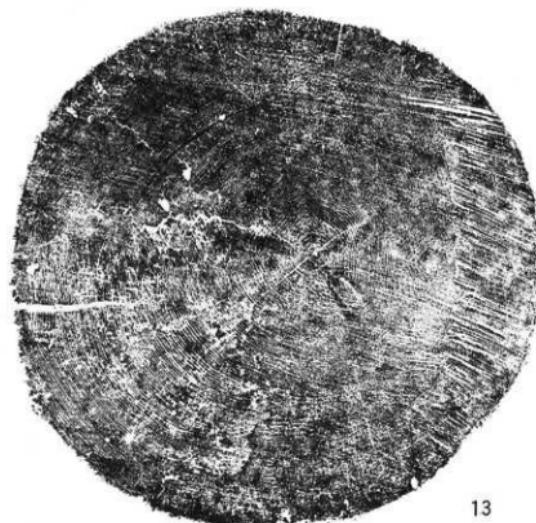
1) 第111次調査『年報1979』p. 23

(番号)	(種類)	(直構番号)	(柱位置)	(時期)	(地区)	(長さ)	(径)	(樹種)	(木取り)	(回版)
1-1	柱 枝	SB7802	ニ 四	第Ⅰ期	回廊	282.0	cm 72.5	コウヤマキ 丸 材	PL. 117	
1-2	根がらみ	"	" "	" "	"	146.2	(20.8) 20.0	" 心持角材	"	
1-3	"	"	" "	" "	"	104.0	(19.4) 19.5	"	"	
2	"	"	" "	" "	"	31.5	(20.0) 16.0	"	"	
4	柱 枝	SB5495	ハ 四	"	東外部	66.0	8.5	モミ	"	
5	"	SB5510	ハ 二	"	"	42.0	12.5	サカキ	心持丸材	
6	"	"	ロ 一	"	"	21.0	10.6	不明	"	
7	"	SB5620	イ 四	"	"	50.0	24.0	モミ	心持丸材	
8	"	"	イ 二	"	"	42.0	9.5	アカガシ	"	
9	"	SB5495	付近柱穴	"	"	72.0	15.5	モミ	"	PL. 118
10	"	"	" "	" "	"	69.0	14.0	ヒノキ	"	
11	礎盤	SB3745	イ 一	"	"	32.6	(30.0) 7.0	?	角材	PL. 119
12	柱 枝	SB3777	3	"	回廊	118.0	41.3	コウヤマキ	心持丸材	PL. 118
13	"	"	5	"	"	126.1	47.3	"	"	"
14	"	"	6	"	"	135.8	47.6	"	"	"
15	"	"	8	"	"	115.2	45.5	"	"	"
16	"	"	12	"	"	119.3	41.4	"	"	"
17	"	"	29	"	"	120.5	42.3	"	"	"
18	"	"	38	"	"	95.0	(42.3) 35.0	"	心持角材	
19	"	"	46	"	"	35.0	43.0	"	心持丸材	
20	"	"	47	"	"	40.0	25.0	"	"	
21	"	"	54	"	"	25.0	15.0	"	"	
22	"	SB6640	ハ 二	第Ⅱ期	殿舎	39.2	32.6	ヒノキ	"	PL. 118
23	"	"	ロ 一	"	"	24.0	24.5	"	"	
24	"	"	ハ 三	"	"	33.0	17.0	"	"	
25	"	SB6650	イ 二	"	"	87.5	36.2	"	"	PL. 118
26	"	"	ロ 一	"	"	24.0	(24.5)	"	"	
27	"	"	" "	"	"	33.0	(17.0)	"	"	
28	"	SB6660	ホ 一	"	"	45.0	33.0	"	"	PL. 118
29	"	"	ハ 五	"	"	38.6	29.5	"	丸材	
30	礎盤	"	ハ 二	"	"	55.9	(27.0) 9.0	コウヤマキ 角材	PL. 119	
31	"	"	ホ 三	"	"	64.5	(24.4) 22.8	"	"	
32	"	"	ハ 一	"	"	60.0	14.8 9.5	ヒノキ	"	PC. 119
33	"	"	" "	"	"	51.0	9.8 8.4	"	"	
34	柱 枝	SB6663	ハ 四	"	"	58.0	38.0	"	心持丸材	
35	"	SB6666	イ 三	"	"	59.0	33.0	コウヤマキ	"	PL. 118
36	"	SB7151A	ハ 十	"	"	69.0	38.8	ヒノキ	"	
37	"	B	イ 二	"	"	87.0	35.7	"	"	
38	"	SB7151B	イ 一	"	"	60.5	38.9	"	"	
39	"	SB7152	イ 七	"	"	111.7	40.7	"	"	
40	礎盤	SB3768	イ 二	第Ⅲ期	東外部	69.8	(19.0) 9.0	コウヤマキ 角材	PL. 119	

Tab. 6 柱枝・礎盤の寸法と樹種



12



13

Fig. 68 SA3777柱根の木口切断面 1:4.4

iii SA3777の柱根 (PL. 118~121)

第Ⅰ期東面築地回廊SC5500の東側柱列の柱筋にある南北桿SA3777からは、比較的保存のよい柱根が出土した。北方の高地(6ABC・6ABD区)では残存状況がわるく、痕跡程度の柱根しかのこっていないが、南方の低地(6ABE区)では非常にのこりがよい。いずれも径45cm内外のコウヤマキの心持材で、樹齢300年程度の木材である。18は角柱である。このほか柱根をとどめない柱痕跡にも方柱状を呈するものがあることから、SA3777には円柱と角柱とが混用されていたことがわかる。

下端木口の整形は手がハツリが一般的だが、13は鋸で切っている(fig. 68)。切断面の状況からみると大鋸で一気にひききったのではなく、比較的小さな鋸で根気よく挽いたことがうかがえる。16・19の下部には伐穴があり、前者には斜上方に「六」の陰刻があり、下端木口面に割墨付けの墨線がある。それは木材の芯をはさんで11.9cm間隔で平行線をいれ、その一方の側面寄に12.3cmの間隔をおいてもう1本の直線をいれる。さらに直交する3本の平行線をいれるが、中心寄りの2本は木材の芯をさけて3.5cmの間隔をおき、その1本の外側に15cmの間隔をおいてもう1線をいれている。14にも墨線がある。木口面のほぼ中央にひいた直線の左右に14.8cm、14.3cmの間隔をおいてそれぞれ1本の直線を配し、これに直交する2本の平行線を木口の一方に偏して12cmの間隔でいれて、2個の長方形区画をつくっている。17は木口面の片側に9.4cmの間隔で2本の直線をいれ、それに直交する2本の平行線を11cmの間隔でいれている。この直交する2線の外側線上3箇所に目盛がある。

このような割付けの墨付けは、柱の木作りとは無関係な位置であり、柱を円形ないしは多角形につくるための墨線ではない。おそらく材の芯を避けて、4寸×5寸の角材をとる予定で墨付けをしたもの丸柱として使用したとおもわれる。

iv 岩倉地区第Ⅱ期建物の柱根 (PL. 118)

岩倉地区第Ⅱ期建物群のうち、8棟から17丁の柱根ないしは礎盤を採取した(22~39)。この地区は、高燥の地であるため、柱根の残存状況はきわめて悪い。比較的旧状を保っている39の例からみると、径40cm前後の心持ち丸太材で統一されているようである。大半はヒノキだが、コウヤマキを2本ふくんでおり、ヒノキとコウヤマキが混用されていたことがうかがわれる。礎盤は角材・板材・丸太材など規格性がなく、いろいろな形状をとっている。樹種はいずれもコウヤマキである。

v 木橋暗渠 (PL. 122~125)

第Ⅰ期の東面築地回廊を横断して東方に排水する木橋暗渠のうち、SD5561, SD5562, SD5563, SD3770では木橋が比較的良好な状態で保存されていた(1~10)。それらのうち、築地回廊を横断する部分の木橋に同種の痕跡のある柱軸用材が用いられていることから、同時期の造構にあてたことはすでに述べた。それらの多くは採取せずにそのまま現地にのこしたので、採取した木橋を中心にのべ、必要に応じて、現地にのこしてきたものについても説明をくわえるこ

コウヤマキ
の柱

第IV章 遺物

と/orする。なお、すべての木構材の寸法をTab. 7に表示しておく。また、柱の転用材の説明に際しては、木橋として用いたときの仕口の説明は省略し、ここでは本来の柱に関するこについてのみのべる。(p. 47・48参照)

仕 16・17・23・24の4丁にはいずれも同種の仕口が残存するが、いずれも木橋として使用した仕 口 ときに埋木でふさいでいる。17は柱の全長をとどめているようである(長さ730.4cm、本径44.0cm、末径35cm)。下端に箆穴があり、上方約2/3位置の両面に間渡穴が7個所(下から1~7とよぶ)にわたってほされている。最下部の間渡穴下端から柱の下端まで261.2cm、柱の上端までは470.2cmである。間渡穴2は後にはられたらしく、これを除く他の間渡穴は、心倅で89cm(3尺)等間で5段に配されている。24も腐蝕が著しいがほぼ全長をのこしている。間渡穴の形状はせいり9~11cm、幅6~8cm、深さ6~9cmで、幅は穴の奥を広くして間渡材をやり返しに入れやすいようにしている。

番号	(道 構)	(長さ)	(直径)	(横)	(木取)(回版)
1	SD5560-1	520	35×20	5対	角材
2	2	465	"	3	"
3	3	505	37×24	4	"
4	4	507	35×24	4	"
5	5	513	36×25	4	"
6	SD5561-1	628	45.0	7	丸柱
7	2	606	45.0	7	"
8	SD5562-1	382	35×25	3	角材
9	2	520	37×25	5	"
10	3	509	35×25	4	"
11	4	535	32×25	4	"
12	5	515	35×25	4	"
13	6	530	37×25	4	"
14	7	620	45.0	8	丸柱
15	8	617	46.0	7	"
※16	SD5563-1	628	40.5	なし	PL. 122
※17	2	730.4	44.0	"	"
18	SD3770-1	437	29×?	?	角材
19	2	394	32×?	"	"
20	3	527	23×?	"	PL. 124
21	4	750	29×?	"	"
22	5	690	31×?	"	"
※23	6	598	44.0	丸柱	PL. 123
※24	7	715	45.0	"	"

Tab. 7 木橋の寸法

※印は採取したもの、他は現地で保存した。

道構ごとの番号は東から西に向って数える。

間渡穴 1 と 2 の心々寸法は 18cm で他の間隔よりもせまい。間渡穴 6 と 7 の間にこれと直交 柱材の軸用する大きな貫穴がある。これはせい 37cm、幅 10cm で縦に細長く、貫穴下端から柱の上端まで 91cm である。間渡穴 1 の直下から下方 50cm の間は著しく腐蝕している。これは柱の下部約 210~250cm が地下に埋っていたことを物語る腐蝕痕跡である。以上のことから、この木樋が屋根の付いた掘立柱構の柱材であったことがうかがえる。

16・23・24 にも同様の間渡穴が残存するが、貫穴のない 16・23 は他にくらべて短く、貫穴下端から先端が切断されたものとみられ、24 は貫穴の一部が残存している。また取上げなかった 6・7・14・15 の木樋も同様のものとかんがえることができる。

17 と 24 は柱天に暗渠の柄を造出しているが、ほぼ全長をのこす。柱長さは天平尺 25 尺、最下段の間渡穴下端から柱天まで同 16 尺、間渡穴の割付けは 3 尺であり、施木貫穴下端から柱天までも 3 尺にとるとかんがえられる。間渡穴には太い間渡をやり返しにいれて土壁の下地をつくったとかんがえられるが、最下段の間渡穴は他よりもやや小さい。各柱ともこのすぐ上に別の間渡穴がほらされているが、この 2 番目の穴は割付けからみて、後からほったものとかんがえられる。しかし土壁の足元が破損したためにはりかえたものか、工程の途中でほり直したものかはあきらかでない。掘立柱として再度使用していれば、他の間渡穴や貫穴にもほり直しやひろげの痕があるはずであるが、その形跡がみられないで、これらの柱は掘立柱としては 1 度しか使用されず、下方間渡穴のほり直しは立ったままの状態で行なわれたことになる。

上部の貫穴は間渡穴の面と直交し、貫穴の幅がせいにくらべてかなり小さく、繁栄尻の仕口ともかんがえられるが、全体をほり抜いたとみられ、この貫穴から柱天までの長さが短いので、やはり出荷を受ける腕木を通したものとかんがえるほうがよかろう。古代には頭貫のほかは仕口穴を抜通さないのが原則と考えられているが、この柱のような仕事も行われたことがわかる。

16・17 には窓穴の痕跡があり、ともにその上方に「八十」と刻まれている。山作所で刻んだ番 刻付とみるとべきであろうが、建設現場(足底)で刻んだものと考えることができる。

16 には間渡穴 4 と 5 の中に「卯五十七」という刻書がある。これは、建設時の位置を記した番付に想定することができ、東(卯)の 58 番目の柱ということになる。奈良時代の建物や井戸枠の番付けでは「東・西・南・北」によって方位を記すのが普通であり、十二文でしめす例としてははじめてである。

20 は腐蝕が著しく進行しているが、全長 527cm、幅 32cm、せい 18cm 以上の角材である。材 構のほぼ中央に枘穴(16×11cm) 1 個があり、それを中心にして両端方向にそれぞれ 2 個所にエツリ穴をあけている。エツリ穴は現状では木樋使用時の下端から二枚柄をほったようにもみえるが、仕口穴の側面は斜にはられていて、中央にあぜをのこした削抜き状のエツリ穴であったとみとめられる。この材が本米角材であり、枘穴には柱頭の角柄を差込んだものとすれば、建築物の桁・梁・棟木の類となる。上述の柱材との関連をかんがえると、エツリ穴を土壁の木舞あみ付けのなわぐくりと見られるので棟木に比定することができよう。

エツリ穴は古代の建造物では、頭貫や桁の下端、桁の上端、垂木の上端などにほられ、それぞれ壁の木舞のあみ付け、垂木のくくり付け、垂木上の木舞くくりつけなどに用いられた一般的な手法である。法隆寺東室の入側桁・大梁下端、同東院伝法堂前身建物の頭貫下端、唐招提寺講堂の頭貫・桁・繫虹梁下端、同経蔵に転用された桁下端、当麻寺本堂前身建物の頭貫下端、

銘

木

第IV章 進 物

同建物に転用された桁材の上下などにある。これらの諸例では柱間1間につき、2～3個所のエツリ穴 エツリ穴をほる場合が多い。20のエツリ穴は腐蝕のためひろがっているにせよ、現存する古代建造物の諸例にくらべてかなり大きい。厚い土壁の木舞をあみつけるのに太い繩を用いたために大きくなってしまったのである。この棟木の中央と両端に柱位罫を規定すれば、エツリ穴は柱間に2個所ずつほることになる。角納穴とそれに近接するエツリ穴の心々寸法は両側とも72cmだが、両側のエツリ穴同志の心々寸法はそれぞれ103cmと144cmで差がある。このことからすれば、現状では両端が旧状をとどめていないとはい、両端のエツリ穴から外に、上記の納穴からエツリ穴までの寸法72cmを加えると一方の柱間は2.47m、他方の柱間は2.88mとなる。エツリ穴の割付けは36cmが基準となっているようだ、柱心からエツリ穴心まではその2倍、エツリ穴心々は広い方は144cmでその4倍、狭い方は103cmでその3倍に近い。従って柱間寸法は36cmを単位としてその7支と8支となり、高麗尺で7尺と8尺の完数値となる。このエツリ穴の面を上端として36cm割りの垂木をくくり付けた桁材とみられないこともない。

また、取上げなかった木棟のうちに、別のエツリ穴をほった材がある。20がそれで、現存長3.96m、幅34.5cm、現存せい14cm、1方寄りに角納穴があり、片方に1個、他方に3個のエツリ穴がほられている。このエツリ穴は納穴を中心として66cmに整然と割付けられている。エツリ穴が3個のこの方の木口は先端のエツリ穴心から68cmであり、恐らくここが継手で次の角納穴すなわち柱心とかんがえられるので、この柱間寸法は66cmの4倍、2.64mにあたることになる。これは天平尺の9尺、高麗尺の7.5尺に当る。エツリ穴の整然とした配置からみてこのエツリ穴は、33cm割りの垂木を1本置きにくくり付けたものとおもわれる。棟木上では垂木は前後の尻を組んで込栓差とすれば必ずしも垂木を止める必要はないが、桁では少くとも1部の垂木を止めるのが奈良時代の簡単な構造の処物の手法である。したがって繋梁の渡り間の仕口がないが、桁材を見る方がよさそうである。そうすると、腕木で山桁を受ける掘立柱脚とは直接関連しないことになる。2丁の横架材は、柱の各部が天平尺で完数になるのはちがって、柱間寸法は高麗尺の方が完数になるようである。柱と直接組合っていたかどうかはあきらかでなく、別種の建物か脚の部材かもしれない。しかし掘立柱脚の上部構造を想定するうえに、重要な資料となることはいうまでもない。

以上のべたように16・17・23・24の柱材は同じ掘立柱脚の柱と認めてさしつかえなかろう。

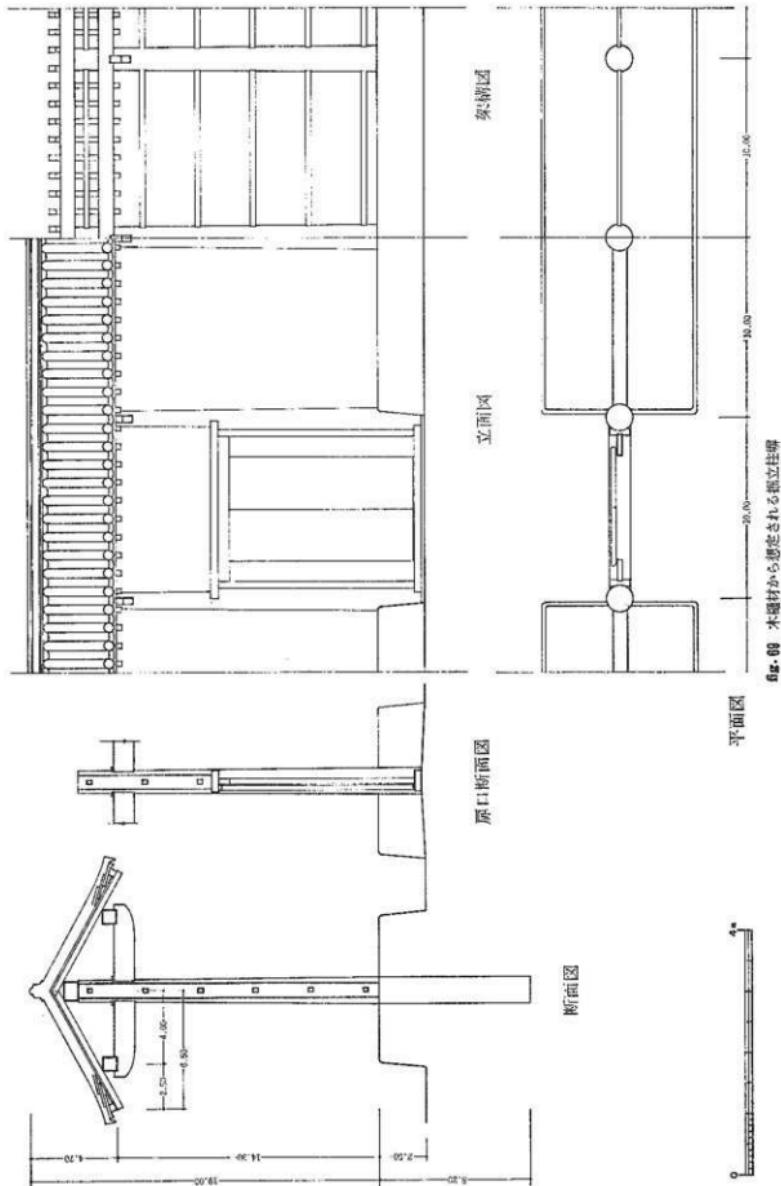
掘立柱脚 地下に約2mを埋めた棟高約5.5mの土壁つきの掘立柱脚を想定しうるのである。この柱列の上のる棟木は20のような材であろう。こうした材を用いた掘立柱脚としてfig. 69のような構造が想定できる。

この掘立柱が本来どこにたてられたかといふ点については、確定的なことはいえない。Tab. 9は飛鳥・藤原・平城で現在までに確認している大地域をかこつ掘立柱脚である。そのなかでかなり可能性の高いものとしては、

平城宮第1次朝堂院の東面掘立柱脚がある。

番号	(道 筋)	(長 さ)	(幅)	(厚 さ)
25	SD5560-1	(255.0)	(24.2)	(3.5)
26	" 2	278.5	28.0	4.9
27	" 3	283.0	29.0	4.7
28	" 4	282.8	30.0	5.0
29	" 5	282.7	28.0	4.8
30	" 6	280.1	28.0	4.5
31	" 7	279.7	27.5	4.0
32	" 8	260.2	26.8	3.6
33	" 9	265.2	28.0	5.0

Tab. 8 木棟略量の寸法



遺跡	(掘立柱塙)	(柱間m)	(柱 鉤形 (-辺m) (深さm))	(備 考)
伝板蓋宮	内郭東面SA6101	2.5~2.8	1.5	右壁傾落溝あり。幅5.16m。
	内郭北面SA5901	2.5~2.8	1.3	“ 壁5.41m、基壇あり。
	外郭東面SA7405	2.5	1×2	“ 幅7m、柱は抜取られる。
藤原宮	大垣東面SA175			
	大垣西面SA258			
	大垣南面SA2900	2.4~2.66	1.5~1.8	0.7~1.3 柱は抜取られている。
	大垣北面SA140			
平城宮	内裏東外郭SA865	2.95	1.5	柱は抜取らざ。
	大垣北面下層SA2330	3.0	2.1×2.4	1.1 同位置で築地に変える。 柱は抜取らず、同位置で築地に変える。
	第1次大極殿西面SA3777	4.6	1.2	1.4 柱は抜取られている。基壇あり。
	第1次朝堂院東面SA5550-A	3.0	2.0	1.2~1.45 同位置で築地に変える。
	第2次内裏東面SA6905	3.0	0.8×1.5	0.6 柱抜取痕跡あり。
	第2次内裏南面SA7592	3.0	0.8×1.5	柱抜取痕跡あり。
	第2次内裏北面SA486	2.95	2×1.5	0.4 柱は抜取られている。
	馬寮南面SA5950	2.6	0.9	1.1 一部は柱根残る。半数近く柱は抜取られる。
	馬寮西面SA3680	2.7	1.2	0.5 柱抜取痕跡なし。
平城宮	左京三条二坊十五坪SA871	2.1	1.0	
飛鳥寺	寺域北面SA500	2.66	1.2	0.6 柱痕跡あり。
大官寺	寺域北面SA600	1.84	0.8×1	0.4 柱痕跡あり。
久米寺	寺域南面SA110	1.5	1.0	0.8

Tab. 9 大地域を画す掘立柱塙

柱番付 その理由としては、「卯五・十七」を柱番付とみるならば、57は柱数をあらわすことになり、かりに柱間3mとすれば171m以上の範囲をかこむ地域を想定せねばならないからである。平城宮で柱間寸法3mの掘立柱塙を設ける遺構としては、第1次朝堂院東面のSA5550-Aと内裏創建時のSA6905・SA7592・SA486があるが、後者の一辺は171mに達せず、前者が合致するからである。後述するように木樋暗渠設置が第I—4期(平城宮遷都以後の天平末叶)におかれ、第1次朝堂院がそのころに掘立柱塙から築地に改修されている可能性がつよい。しかし、桟木・朽の転用材については問題がこる。

25~33はSD6560から採集した木樋暗渠の蓋板である。それらは年輪にそって割りとった板目材であり、両端に相欠き仕口がある。仕口の幅は3.8~5cmで、各板の東端では下面から、西端では上面から欠きとっている。ただし、31は両端とも上面から欠いている。各蓋板には釘づけした痕跡がある(Tab. 8)。

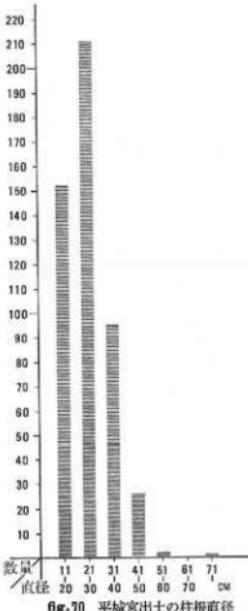
- 1) 奈良県教育委員会『飛鳥京跡一』1971 p. 185, 191, 同『飛鳥穴跡』(昭和49年度発掘調査概報) 1974 p. 10
- 2) 「年報1972」p. 41, 「年報1974」p. 34, 「年報1976」p. 42, 「年報1976」p. 29, 「年報1980」p. 36, 奈良国文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』1981 p. 4, 奈良県教育委員会『藤原宮遺跡 165号バイパスに伴う宮城調査』1969 p. 42
- 3) 「年報1971」p. 42, 「年報1972」p. 32, 「年報1977」p. 23, 「年報1978」p. 19, 「年報1979」p. 23, 「年報1980」p. 23, 「平城宮報告Ⅶ」p. 28, 「平城宮報告IX」p. 32
- 4) 奈良国立文化財研究所『平城宮左京三条二坊』1975 p. 13
- 5) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』1978 p. 52
- 6) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報11』1981 p. 37
- 7) 「年報1978」p. 51

vi 平城宮の柱根

平城宮跡ではこれまでに465本の柱根を確認している。今回の報告に因るとして、その傾向を観察してみよう。それらの多くは採集しているが、なかには現地にのこしてきたものもある。各種の柱根柱根をとどめた造構は建物・塔などが主である。

柱根の下径によって分類すると、径21~30cmのものが全体の43.3%をしめる。径51cm以上のものはわずか4点にすぎない。また径10~20cmのものは雑舎や仮設建物に想定されるものである。主要な官衙建物や宮殿の柱には径40cm内外のものが用いられている。たとえば、すでに述べた農舎地区第Ⅱ期の建物群がその例にあげられよう。ただし、それらは駕駆および雑舎の柱であり、中心のSB6610, SB6611, SB7150は柱痕跡からすれば、もう少し太かったかもしれない。一方第Ⅰ期の径45cm内外のSA3777の柱は太い部類にぞくしており、木橋暗渠転用柱もその類である。

奈良時代の柱は現存建物では最小径の例は法隆寺東大門の34.6cm、最大径は唐招提寺金堂の58cmであり、概して太いが、その大小は建物の規模に相関している。平城宮跡においても、礎石に柱座をとどめるものでは50cm内外のものがある。そうしたなかで、SB7802の柱はとくに太い部類にぞくし、これに類するものとしてはかつて法華寺下層遺構で検出した径60~70cmの柱根をあげることができる（fig. 70）。



vii 柱根の樹齧 (PL. 120・121)

平城宮出土の柱根に用いた樹齧については、かつて島地謙・伊東隆夫に依頼して調査したことある。¹⁾それによると調査した148点のうち、ヒノキが91点、コウヤマキが52点と2種類の樹齧が絶対多数をしめていることがわかった。しかしながら、これらの柱材としてどれくらいの樹齧の材が用いられているかはあきらかでなく、今回この点について調査した。

調査方法 SA3777 出土の柱根から2本のコウヤマキ柱根をえらび、これと比較する良好なヒノキ柱根がこの地域にないため、6AAF区(東院)出土の柱根2本を比較資料に用いた。樹齧の測定方法としては、柱根の最下部から保存の良好とおもわれる16~30cmのあたりで切断しその木口面を観察することにした。木口面を研磨し、4方向について年輪を読みとったのであるが、年輪幅の狭いところや偽年輪か否かの判定については実体顕微鏡を使用した。

調査結果 4本の柱根から読みとった4方向の年輪数は、Tab. 10のとおりである。それらの最多年輪数はヒノキ材 No. 1-275年、No. 2-210年、コウヤマキ No. 3-271年、No. 4-251年である。しかし、これらの年輪数は決して実際の樹齧をしめすことにならない。つまり A : 研

ヒノキと
コウヤマキ

1) 島地謙・伊東隆夫「古代における建造物柱材の使用樹齧」『木材研究資料』第14号 1979, p. 49~76

出土地	番号	(樹種)	(測線長 cm)				(年輪数)				(下底部からの切断位置) (想定樹齢)	
			1	2	3	4	1	2	3	4	cm 年	
6AAF	No. 1	ヒノキ	16.0	18.2	17.2	16.3	226	275	231	235	31.0	325～335
6AAF	No. 2	〃	17.3	18.3	16.6	18.0	130	136	121	210	18.0	260～270
6ABR	No. 3	コウヤマキ	23.5	18.8	17.8	24.6	201	157	271	136	15.0	321～331
6ABR	No. 4	〃	26.6	16.5	20.3	23.2	251	265	230	251	15.0	301～311

Tab. 10 柱根の樹齢測定

磨した木口面の中心年輪が出来るまでに要した年数、B：加工の際に削り落した部分(主として辺材)に含まれる年数。このA・Bを上記の年輪数に加算したものが正しい樹齢になる。しかしながら、資料としての柱根が地上からどの位の高さの位置で伐採したか決定しがたいので、Aについては不明である。Bについても原木の辺材をどのくらい削りとて柱材にするかとい樹齢の推定う点についての判断は困難である。ヒノキの辺材部樹齢の割出法については、矢沢亀吉の研究がある。¹⁾それによると、辺材幅が約3.5cmの場合に、それに含まれる年輪数は50～60年程度であるという。かりに、コウヤマキをもふくめて、3.5cmの辺材幅が削りとられているとみるならば、No. 1—325～335年、No. 2—260～270年、No. 3—321～331年、No. 4—301～311年となる。この場合、いずれも外周部が直に辺材となる場合であるが、実際には心材部も多少削りとられているとみなければならず、樹齢はさらに増加する。こうしたことから正確な樹齢を推算することはできないが、柱材がいずれも樹齢300年以上の木材であったことは確かである。

B SE9210の井戸枠 (PL. 126～128)

6ABQ-A地区で検出した井戸枠SE9210には、井戸枠の井戸枠が4段分(高さ約82cm)残存していた。一辺の長さは内法で約2.3mあり、平城宮跡内で発掘した井戸のうちでは最大級である。ヒノキ材で、最下段と三段目の枠板には厚板材を用い、二段目と四段目には三角形の角を面取りした断面不整六角形の材を用い、各段の内面をそろえて積み上げている(Fig. 71)。

不整六角形の井戸枠8丁は、形状や旧仕口から校倉の校木を転用したことがあきらかである。あせくらまた井戸枠の西南と西北の隅には板材を据えて高さを調節しているが、この2丁の板材も校倉からの転用材と推定され、校倉の貴重な資料となるものである。はじめに井戸枠の現状について述べ、次いで校倉部材の復原を考察する。

i 井戸枠の現状

構の仕口は3枚組とし、各段とも東西面の井戸枠を出納とする。仕口の長さは、第二段から第四段までは約15cmとし、部材全長は約2.6mほどである。最下段では約10cmほど短く、全長は約2.5mである。また最下段と三段目の板枠を比較すると、最下段は幅22cm、厚10cm、第三段目では幅24cm、厚7cmの材を用いている(Fig. 71)。

上下の井戸枠の接する面には、中央からほぼ振り分けに2個所に太納を立てている。左右太納穴中心間距離は、最下段と二段目の間のみを約1.0mとし、他は0.8m前後でそろっている。太納穴は長さ6cm、幅2cm、深さ4cmほどである。凹校木にはこのほかに使用されていない太納穴が第2段上面と第4段上面にある。校倉のときのもので、大きさは長さ4～5cmと小さい。

各井戸枠外面のほぼ中央部に墨書き番付がある。番付は各面の方位置と下からの段数を組合せ

1) 矢沢亀吉「樹幹の心材形成及び心材半についての一考察」『岐阜大学農学部研究報告』第1号 1951

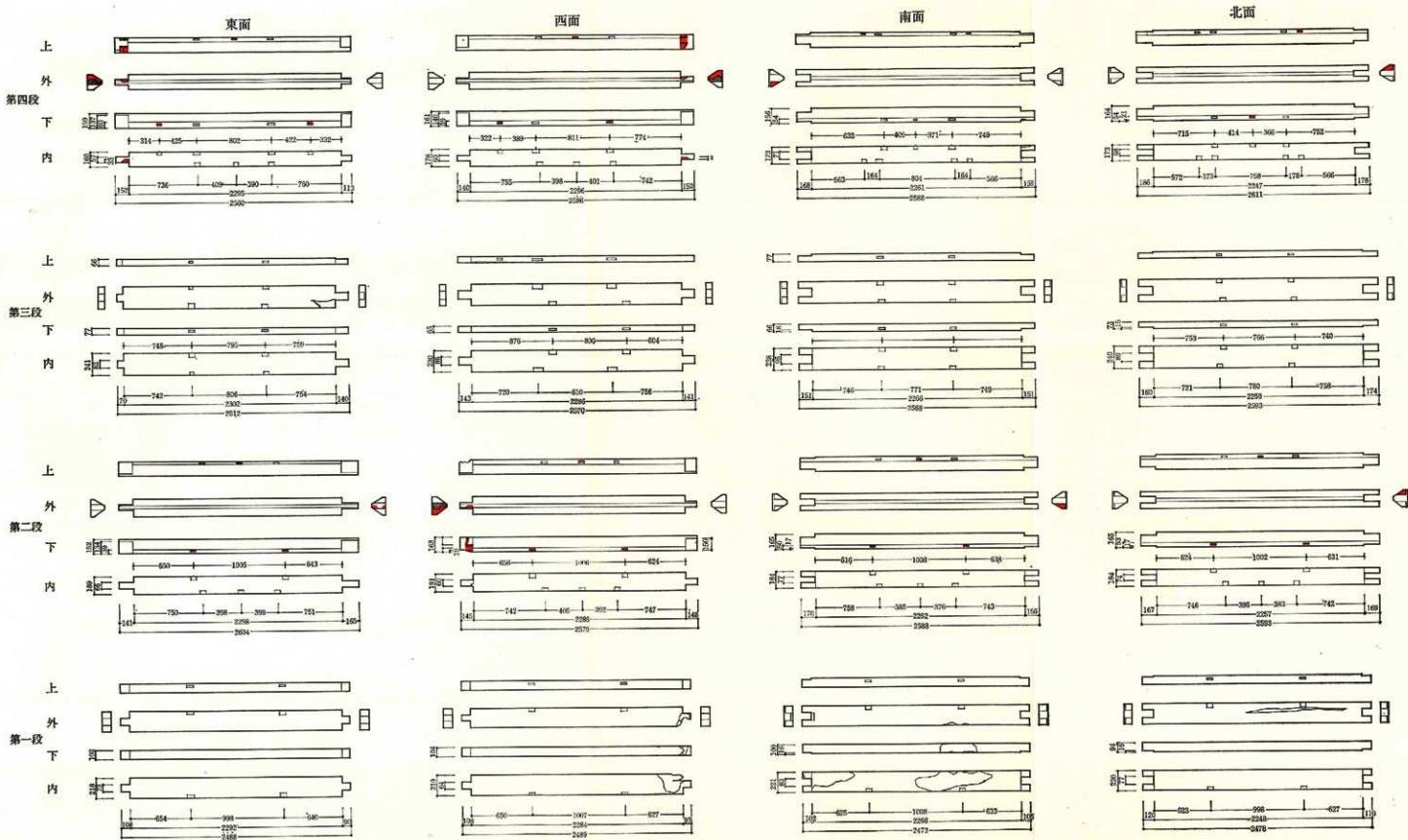


Fig. 11 SE9210井戸検査測図

■ : 木柱仕口・太納穴 單位mm

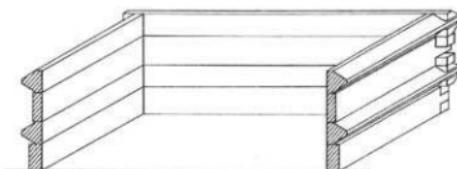


fig. 72 SE9210 井戸枠の組上げ法

たもので、例えば東面では下から順に「東下一」・「東一」・「東二」・「東三」と記している。板番付には全面にチョーナで削った加工痕が明瞭にのこるが、校木は外面が風蝕していたため、墨書きの部分だけを削りなおして墨書きしている。番付墨書きは各面井戸枠とも外側から向って右側を字頭として統一されており、仮組をしたときに記入したものとかんがえられる。

二段目の番付を「一」とし、最下段を「下一」としているので、最下段は計画を変更して追加されたものとかんがえられる。二段目以上と最下段では組手仕口の長さがことなり、また最下段と二段目の間にいった太納穴間隔が広いこともこれを裏づけている。二段目校木下面にはほかのような未使用の太納穴がないが、これは現在の二段目校木を最下段とする予定であったために井戸枠用の太納穴をほらなかつたものを、下方へ一段追加することになったときに、新しく太納穴をほらずに旧太納穴をやや彫り広げて使ったためとおもわれる。最下段が校木の転用では不安定であったのであろうか。下へ板材を追加するにあたり、三段目の板枠よりも厚手の材を使用ししているのも安定をはかるためであったとおもわれる (fig. 72)。

ii 校木の復原

校木の外面の一部に焼痕がのこっているので、火災に遭った校倉の部材のうち、焼損の少ない部材を転用したものとかんがえられる。以下の記述では、例えば東面下から二段目の井戸枠として用いていた校木を東2ということにする。

8丁の校木の断面はせい16~19cm、幅15~17cmとやや不揃いであるが、平均してせい18cm、幅16cmなどでやや縦長の断面を呈する。いずれも心去材で、西2を除く7本は木裏が外面になるように木取りをしている。木米は一本のヒノキ丸太を四ツ割にし、4本の校木をえたものとかんがえられる。

各校木とも一端に旧仕口痕跡がのこり、井戸枠として切断加工された仕口面とは明瞭な仕事の差が認められる。東4・西2・西4では井戸枠出納に当初の仕口の一部がのこる。仕口を復原すると、渡り型で上木のせいの半分を大入れに落込み、中央にすべり止めの目遣いをつくっており、唐招提寺經蔵の仕口に類似している。切断箇所は東4では向って左側の仕口外面で、西2・西4では向って右側の仕口外面で切り、旧仕口部分の中央3分の1をのこして転用時の出納につくっている。他の5本の校木は仕口の内面で切断し、その内方に井戸枠用の仕口をつくっており、材端の木口面に旧仕口の痕跡がみとめられる。東2は向って右の仕口内面で切断して出納を、南2も同じ位置で切断して出納をつくったことがわかる。旧仕口の痕跡から東2・西2・南2・南4は転用のさいに校木のときとは上下を逆につかっている。

第二段校木上面と第四段校木下面の旧太納穴の間隔は東4が1.65mと広く、他は0.80mか

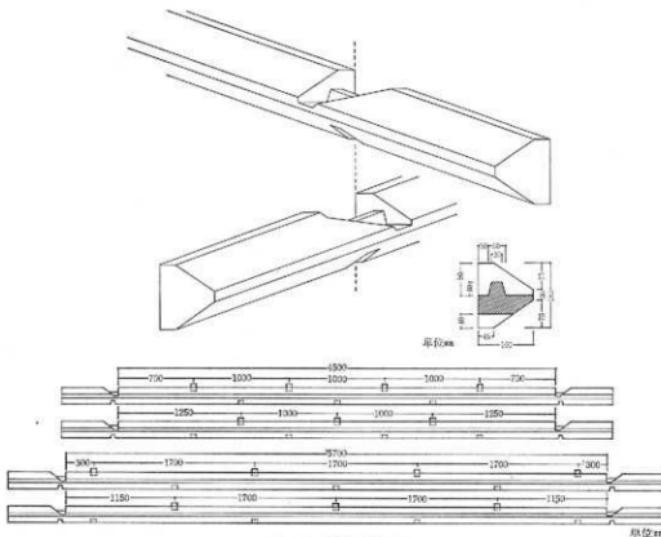


fig. 73 校木の復原図

桁行と梁間
ら 1.11m の間である。第 2 段校木下面の太納穴の間隔は後者に近く、すでに述べたように旧太納穴が再利用されたとかんがえられる。太納穴の間隔は厳密には不偏いであるが、間隔 1m 前後のものと 1.7m 前後のものにわけられる。これは校倉の桁行と梁行の長さの相違にもとづくものとかんがえられる。校木は成 6 寸ほどであり、現存する奈良時代の校倉と比較すると東大寺法華堂經庫(せい 5 尺 8 分)、唐招提寺經藏(せい 6 尺 5 分)にちかい。平面規模は東大寺法華堂經庫が桁行 6.05m、梁間 5.11m、唐招提寺經藏が桁行 5.57m、梁間 4.67m であり、建物規模もこれらと大差ないものとおもわれる。校木にのこる旧太納穴の間隔からみると、校木仕口の内法寸法は桁行 5.7m(19 尺)、梁間 4.5m(15 尺)程度に復原できる (fig. 73)。

iii 古輪の復原

井戸枠の下の礎盤は、西南隅は長さ63cm、幅29.3cm、厚11.0cm、西北隅は長さ75.3cm、幅33.8cm、厚10.2cmである(fig. 74)。木裏を上面にしてすえており、井戸枠の当りが压痕としてのこるが、井戸枠に関係のない压痕や風蝕差が認められ、転用古材であることがわかる。西南隅礎盤は一端に当初の木口を残し、著しい風蝕がみられる。他端は転用時に鋸で切断されているが、木表は当初の木口から長さ約60cm間の風蝕が甚しい。

西北隅礎盤は転用時に両端が鎌で切断されている。木表には一端に幅6cm程の圧痕がある。木表は長さ方向の片側幅20cm程の風蝕が大きい。2丁の礎盤はその断面形状からみて校舎の台輪(柱礎)と推定され、風蝕状況からみて西南隅礎盤は梁行の台輪先端の部分、西北隅礎盤は梁行台輪による桁行台輪で校木がのり、隅棟柱に近い部分とかんがえられる。

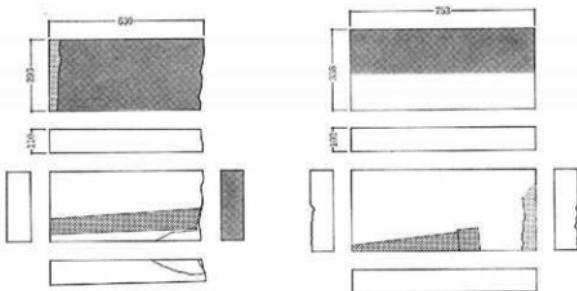


fig. 74 硬盤実測図

単位mm 井戸枠 柄当り底脚 基しい風跡

iv まとめ

井戸SE9210は造構の幅年からすれば第II期（天平勝宝5年～奈良時代末）とかんがえられるもので、校倉の建立時期はこれ以前となり、甚しい風蝕の状況からみると奈良時代の初期を降らないものとなる。

奈良時代の建立の校倉は7棟が現存しているが、校木断面はせいと幅がほぼ同一か、あるいは現存の校倉は幅がやや大きい。今回出土した校木はせい6寸、幅5寸3分ほどでやや継長断面となる。このような校木の断面は中世以降の手法と考えられていたが、今回の校木の発見によって古代にも継長の校木が使われていたことがあきらかとなった（Tab. 11, fig. 75）。

建物規模は桁行5.7m、梁間4.5mほどと推定され、唐招提寺経蔵とはほぼ同規模の小型の部類にぞくする。上下の校木の剥れ止めのためには太納を用いている。桁行・梁間ともに3～4箇所いたものと推定されるが唐招提寺経蔵では太納を用いず、東大寺法華堂経庫でも各校木の中央部に1箇所設けるにすぎないのとくらべると、この校倉の太納は丁寧な仕事といえよう。

	建 物	時 代	規 模 (現)	校木断面 (現)
(現)	唐招提寺宝庫	奈良	25.2×20.0	7.0×8.2
	「」新蔵	〃	18.5×15.5	6.5×7.2
	正倉院宝庫南北倉	〃	各34.2×30.8	9.8×9.0
造 情	東大寺本坊経庫	〃	29.4×19.5	7.3×7.3
	「」鋪造所経庫	〃	21.9×17.1	5.1×5.1
	「」法華堂経蔵	〃	20.0×16.9	5.8×7.4
	手向山神社宝庫	〃	29.2×19.5	7.3×7.3
(転用 材)	教王護国寺宝庫	平安	22.4×19.5	7.4×8.0
	法隆寺東宝	奈良	8.6×(8.3)	
	「」聖院	〃	—×8.0	
	平城宮SE9210	〃	6.0×5.3	

Tab. 11 校木断面寸法の比較



fig. 75 東大寺法華堂経蔵

C 建築雑形部材 (PL. 129)

i 部材の現状

第1期の東棲SB7802の掘立柱抜取痕跡から出土した木片のなかに、15点の建築雑形の部材がふくまれていた。雑形部材はいずれも無節の木目のこまかいヒノキ材を極目取りとしたものである。部材としては、枠肘木1丁、通肘木1丁、尾垂木受け通肘木2丁、方斗2個、入側束1丁、同断片1丁、天井組子と推定される断片1丁、飛擔垂木1丁、その他櫛木口らしいものなど用途のはっきりしないものが5丁ある。

枠肘木(1) 棚柱上の大斗にのる肘木で相欠き上木の仕口をもつ。一方の木口内方に長い豪ひじきぎをつくり出していて剛の肘木と確認される。現存長さ23.3cm、肘木部分の長さ14.7cm、せい3.0cm、幅2.5cm、上端に3個の巻斗をとめる丸太納穴がはられ、両端の丸太穴心々間12.6cm、太納穴径1~1.2cmである。豪ぎはせい1.3cm、幅1.2cmで、壁板をうけるとともに組物を固定するものとかんがえられ、化粧ではない。豪ぎの長さからみて構の間の柱間寸法は23.3cm以上である。

通肘木(2) 現存の長さ30.5cm、肘木部分の長さは相欠き仕口外面から11.7cm、せい3.1cm、とおしひじき幅2.8cmである。一方を肘木につくり、他方は長くのび、側通りの一段目通肘木と認められ、柱上の三斗でうける。相欠き仕口から内方は仕口底で割れているが、剛行肘木および他面の通肘木と組合って一番下木となる。仕口底に小木釘痕があり、方斗を通して下の枠肘木へとめている。先端に巻斗をうける丸太納穴があり、柱心からの出は12.0cmとなる。中間の一手先日の位置には巻斗の太納穴ではなく、心から内方17.5cmの間には仕口がないらしい。

尾垂木受け通肘木(3・4) 2丁あり、隅力肘木および他面の通肘木と組合、2丁とも下木で仕口底に木釘痕があるが、隅力肘木の仕口の方向は左右逆勝手である。先端は斜めに削って尾垂木をうけ、丸太納穴を垂直にほる。1丁には太納がのこる。木口の勾配は1丁は10分の5.2、1丁は10分の6でやや差があり、相欠き仕口外角から先端上端角までの出も8.0cmと8.4cmとなる。1丁は仕口の中間で折損するが、他方は下端の仕口底の部分が仕口心から内方に約18.0cm残存する。この部材はいずれも下段通肘木のうえに遡る構架材の構の部分で、他の奈良時代および平安時代初期の三手先ではこの部材の内方を肘木につくるのにたいし、これは通肘木となっている。

尾垂木上斗(5) 長さ4.1cm、幅4.0cm、現存せい(數面高)2.3cm、斗縁せい1.5cmで、上角のま耳を欠損し、中央に丸太納穴が抜き通る。下端は後に圧縮されて変形しているが、木目の状況から見てはじめから剛行方向に斜に削られていたものとおもわれる。そうすれば、隅尾垂木のような剛行の斜材の上におかれたことがかんがえられる。この斗は他の斗と同方向に鬼斗風に用いられているので、隅尾垂木とは平行にならず、斗尻角が尾垂木からはみ出すことになる。斗縁も一般の斗と同手法である。本来は尾垂木上端に波腮の仕口をつくり、斗尻の両脇は水平に納めるはずであるが、雑形のことであり、仕事を略したのかもしれない。太い丸太納を立てているので滑り出すおそれはない。巻斗もこれと同寸法とかんがえられる。

尾垂木上斗(6) 斗(5)より1まわり大きく長さ4.6cm、幅4.5cmで中央に丸太納が抜通り、

上端の一角にのみ耳がのこるが、この方斗で受けた材は丸材でなく円形断面の材とみられるので、丸桁の隅の組手をうけたものとかんがえられる。斗縁はごく1部しかのこらず、下端を欠取り、さらに耳の反対側の半分は下端を斜にそいでいる。本来、三手先の隅では両尾垂木上の三斗には方斗をおかず、二重尾垂木をいれて直接丸桁の組手をうけているが、この蝶形では二重尾垂木上に斗縁のほとんどつかない方斗をかいもののようにいっていたらしい。この斗も下の斗と同方向に鬼斗のようく用いられている。

入側束(7・8) 完存するもの1丁と前角にあたる断片1丁がある。現状では肘木・通肘木よつかりもやや細い野材で、下端は水平に、上端は斜に削っていずれも長い丸枘をつくりだす。上端勾配は尾垂木受け通肘木の木口勾配とあい、力肘木の柱筋内方に立って、直接尾垂木下端をうけたものと認められる。束の断片(8)は前角の全長をのこし、下端は水平、上端は斜に削り、長さは完存する束とよく一致している。

天井組子断片(9) ごく小さい断片で、一端に近く相欠き仕口底らしい痕跡がかすかにのこくみこる。小片のためとの用途は確定できないが、軒天井の組入天井組子とみてもよかろう。

飛檻垂木(10) 全長をのこし、尻の下端を斜に削り、上端もやや斜に削って地垂木にとめた丸釘嵌1個がある。長さ14.0cm、せい1.6cm、幅1.2cmの直材で、反り増しや幅の縮まりもない。先端は1方を幅の3分の1ほど欠取り、欠取りの端は内方へ向けて斜になり、別の材に当っていた可能性もあるが、飛檻垂木としてはかんがえにくいで後の傷とおもわれる。先端木口は破損していて茅負取付き痕跡は不明であり、止釘痕もない。木負の当り形も不明であるが、本負からの出は5~6cmと考えられる。形状や寸法からみて飛檻垂木と推定される。

用途不明の断片(11・12) 上記のほかに用途の判然としないもので、建築蝶形のものとおもわれる断片が5点ある。梨木口状のもの(11)は、幅3.3cm、せい4.0cmで現存長さ9.2cm、腐棄のときに切断されている。内面は割肌であるが、本来の木肌か腐棄の際に割られたのか判然としない。上下とも直で反りはないが、外面木口に垂木か尾垂木をうけたとかんがえられる大きい斜の欠込みがあり、木口先端上端も同じ勾配に削られているが、止釘痕などはない。欠込みの勾配は10分の6で、尾垂木勾配ともほぼあう。尾垂木尻をうけるような内部の梁材断片とおもわれるが、相欠き仕口、東梢穴、落掛り仕口などがないので詳細はわからない。欠込みを支外垂木のものとして入母屋造の妻梁(又首台)の先端部とみるとともできるかもしれない。両端に丸枘穴らしい痕跡をのこす盤状の部材(12)は、現存長さ14.5cm、幅3.6cmの野材で、両端は折損する。厚みは現存最大1.7cmであるが、1方で薄くなり、後に削られた可能性が大きい。これは幅広い面を極目とし、両端の丸枘穴は変形欠損しているが、心々12cm程である。台輪・柱盤のような用途もかんがえられるが野材であり、内部の束受け土居であったかもしれない。

先端木口部を残す断片(13) 現存長さ16.0cm、幅3.4cm、現存せい2cmで、木口から5.7cmに相欠き仕口があり、それより内方は仕口底から削れており、相欠仕口の深さからみると、もとのせいは2.5cm程あったとかんがえられる。用途はあきらかでないが、(12)の野材のようにこれも柱盤、土台、束受け土居などの用途がかんがえられる。

その他(14・15) このほか、小片のうちに、隅留と妻太を残す断片(14)がある。現存長さは6.6cmにすぎないが、一端に束か柱に長押か樅状に取付いたような仕口があり、留先の方向及び妻太内方の脚付きの傾きは45度よりも大きく、6角形の隅とした場合にあうようである。他

端も逆の斜に切られ、その傾きもほぼ同様であるが、後の切断とおもわれる。留先の見付は垂直でなく投げ勾配になっていて、前方へ傾斜して使われたものかもしれないが、組物の部材とは別種のものらしい。蝶形の中に収められた官殿風のものの断片と考えることも出来そうであるが、わずかに1小片のみであるため想定はむずかしい。端に開口らしい仕口をもつ他の断片(15)は、現存長6.0cmの小片であるため用途は不明。

ii 三手先の復原

建築雄形の部材のうち最も多いのは組物の部材である。そのなかに二手先に延びる通肘木と、尾垂木を受ける通肘木があるので、この部材が三手先の組物を構成することはあきらかである。大斗・尾垂木・丸桁などはこってないが、不明の箇所は天平2年(730)建立の薬師寺東塔、同末年頃とかんがえられる海龍王寺五重小塔などを参考にして、もとの構成をfig.76の五重小塔ように復原した。奈良時代の建築雄形には国宝海龍王寺五重小塔と、奈良時代後半の製作とかんがえられる西宮元興寺極楽坊五重小塔がある。いずれも実際の塔の10分の1を意図してつくられ、ともに三手先である。正倉院茶檜塔残欠はやや小型の五重小塔の部材とかんがえられており、尾垂木のない二手先に復原されている。

現在する奈良時代ないしは平安時代前期の建造物のうち、三手先のものとして小塔のほかに薬師寺東塔、唐招提寺金堂、当麻寺東塔、室生寺五重塔、当麻寺西塔、醍醐寺五重塔がある。薬師寺東塔が最も古式の組み方で、海龍王寺五重小塔がこれにつぐ。唐招提寺金堂以下は支輪桁を入れて軒支輪が設けられ、丸桁下に実肘木が用いられる。

この建築雄形部材のうち、二手先まで延びる通肘木には先端にのみ巻斗の太納穴があり、一
手先目には太納穴がない。薬師寺東塔も同じように隅行のほかは一手先日の通肘木上に巻斗を
入れていない。海龍王寺五重小塔では中間に巻斗をおき、したがって一手先の上下に巻斗が並
んでいる。

また、この雄形では尾垂木を受ける通肘木先端に肘木と組合う仕口がないので、二手先目の
通肘木と支輪桁ではなく、一体に軒天井を張っていたことになる。

奈良時代及び平安時代の三手先では、側通りの大斗の上に三斗を組み、通肘木を1丁通した
うえにさらにもう一段三斗をくむ。したがって、隅の尾垂木受けの材は内方が肘木の形につけ
られる。ここを通肘木とし、通肘木を柱通りに3段積み重ねる手法は、承安元年(1171)の一乘寺三重塔、同じ頃の淨瑠璃寺三重塔はじめでみられる手法で、天喜元年(1053)の平等院
鳳凰堂でも三斗を二段に重ねている。これらの古式の三手先にたいし、法隆寺金堂・五重塔・
中門、法起寺三重塔の巻斗豊肘木では柱通りに3段の通肘木を重ねていているが、この建築
雄形は、これらと同じ手法をとっている。三手先としては、同時代に類例がない(fig. 76)。

1) 伊丸忠太「南都海龍王寺に據る五層塔婆模型」『建築雑誌』132号 1897、「日本建築の研究」龍吟社 昭11、天沼俊一「海龍王寺五重

小塔に就て」『建築雑誌』258号 1908、岡田英男「五重小塔」『大和古寺大觀第5卷 蝶絵

寺法華寺海龍王寺不退寺』岩波書店 1978

2) 奈良県教育委員会「国宝元興寺極楽坊五重小

塔修理工事報告書』 1968、鈴木嘉吉「五重小塔」『大和古寺大觀第3卷 元興寺極楽坊元興寺大安寺般若寺十輪院』岩波書店 1977

3) 浅野清・木村良雄「正倉院茶檜塔の我故に就いて」『美術史』8 1953、浅野清「奈良時代建築の研究」中央公論美術出版社 1969

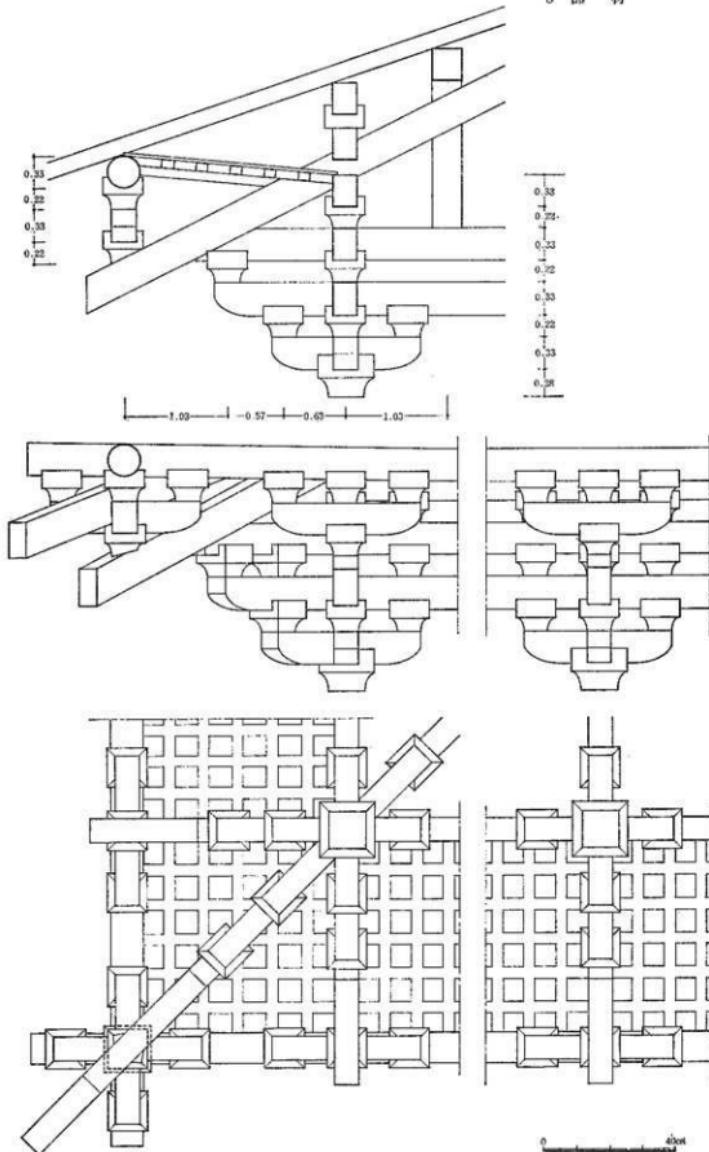


fig. 76 建築構形三手先復原図

隅の尾垂木上には一般的の斗と同じ寸法・形式の斗をおき、二重尾垂木上に丸桁の組手をうけるために他の斗よりも一まわり大きい方斗をかい込んでいたとかんがえられる。このような手法も他に例がない。二重尾垂木を出桁下肘木に深く切込んだために必要となったものであろうが、雛形であったからかもしれない。

iii まとめ

SB7802の掘立柱抜取痕跡から出土した建築雛形部材は、主として三手先の部材で、とくに隅の部材が多い。これから復原される三手先にはつぎのような特徴がある。

1. 支輪桁がなく、したがって軒支輪を設けず、一体の軒天井を張っている。 2. 二手先に延びる肘木の中間に巻斗をいれず、一手先目に巻斗が上下にならばない。 3. 古代の三手先では柱通りに三斗を上下2段に組むが、この雛形では上段を三斗とせずに通肘木とし、通肘木が3段重ねになる。 4. 隅尾垂木上の斗は普通の斗と同じものを他の斗と同じ方向に鬼斗風にいれ、丸桁の隅の組手下方に方斗をいれている。斗で直接丸桁をうけ、実肘木を用いない。 5. 肘木・通肘木などはせい3.3cm、幅2.5cmの材が多く、この寸法の部材が規格的なものとして各所に用いられた。

以上の特徴によると、薬師寺東塔、海龍王寺五重小塔と同系の古式の三手先であるが、隅尾垂木上の斗のあつかいは独特の手法をとり、柱通りの3段の通肘木も現存する古代遺構の三手先には類例がない。内部の入側東が野材となるので、内部は全体に天井を張ったか、あるいは化粧に仕上げなかつたらしい。

- 海龍王寺五重小塔の初重肘木は長さ13.2cm、せい2.5cm、幅2.3cmでやや小さいが、元興寺十分の一樓 極楽坊五重小塔の初重肘木は長さ14.2cm、巻斗太納穴心々11.8cm、せい3cm、幅2.3cmで雛形部材とほぼ一致する。巻斗は海龍王寺五重小塔では長さ4.2cm、斗尻長さ2.1cm、せい3.3cm、斗縁せい1.4cm、元興寺極楽坊五重小塔では長さ4.3cm、斗尻長さ2.4cm、せい3.1cm、斗縁せい1.2cmで雛形と大差なく、この雛形も実際の建物の10分の1を意図して製作されたことがわかる。

1) 玉虫財子の宮殿部も建築的手法で作られていて、記録に見えるものでは、大安寺の宮殿像(『資財帳』)、西大寺四王堂八角五重塔(『資財帳』)、四天王寺金光明の六重小塔(白側塗入り舍利安置、『古今日経抄』)、興福寺東院桧皮葺後堂の立塔(『興福寺流記』)、薬師寺金堂の金剛五重塔(本薬師寺塔舍利安置、塔は片岡天寺より移す)、「七大寺巡礼私記」、東大寺戒藏院の六重金剛塔(『私記』、菅原の「諸寺巡礼記」)などがあり、瓦製の小塔、小堂なども各地で発見されている。また、雛形は建築の試作(様)、『令義解』の營繕令では「タメシ」と傍訓)としても作られ、「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」にみえる「四ノノ工人并金堂ノ木様奉上」、思託の西大寺八角塔様(『延暦僧傳』)、忠実の小塔(古万葉)安置の様(『西大寺権別當忠実二十九介条事』)などがそれにあたり、長門國駿館の造替も定様によるとされている(『日本後

記』大同元年 806)。

中国における雛形的な木造小建築の実例としては遼・慶陵の東陵(聖宗、太平10年(1030)埋葬)中室西南室、西陵(道宗、乾統元年(1101)埋葬)墓室から発見された小建築部材があり(田村実造・小林行雄『慶陵』京都大学文庫部 1953)、最近では1973年出土の木亭模型(新疆ウイグル自治区博物館編『新疆出土文物』1975)、北齊鹿陝城洛基発見の屋字型木構(王克林「北齊鹿陝陝洛基」『考古学報』1973-3)がある。山西省大同県城内の下華嚴寺律伽教庫(達・重熙7年(1038))経閣上の仏龕も建築的手法でつくられており、『宮造法式』の仏道帳、軒輪経蔵、壁藏上部にのる天宮破壊にあたるものである(関野貞「大同大華嚴寺」「支那の建築と藝術」岩波書店1938、村田治郎「大同大華嚴寺」『和楽路屋書店1936、竹島卓一「宮造法式の研究二」中央公論美術出版社1971)。

三手先組物は組物のなかで最も複雑な構造であり、寺院であれば金堂・塔・二重門などの最も重要な建物に用いられ、平城宮では大極殿や朱雀門などに用いられたとかんがえられる。現存する奈良時代の小建築は塔に限定されており、この瘤形が塔であった可能性もある。しかし、梁木口の断片らしいものが同じ瘤形の妻梁とすると入母屋造であったことになり、殿堂や横風のものにもかんがえられるが、部材が少數であり、これで決定することはむずかしい。

この部材を発見したSB7802は第Ⅰ期の建立で、天平勝宝5年頃に解体撤去されたとかんがえられるので、この瘤形の瘤棟も同時期である。瘤棟にあたり、切断された痕跡をとどめるものもあり、破損材だけが捨てられたのかもしれない。このほかにも宮内では東院東南隅などで発見されているが、他には発見例はごく少なく、貴重な遺物である。この建築瘤形はおそらくSB7802の棟内に安置され、納入品を収めていたと察せられるが、そうすれば、その製作年代も同様に神龟頃を余り降らぬことになる。

D 石材ほか (Pl. 130)

遺構の各所から石材を検出している。滑・暗渠などでは原位置にとどまるものもあるが、多くは遺構から避難したり、2次的に再利用したものである。第1次大極殿地域で確認した石材にはつぎのようなものがある (fig. 78)。

両輝石安山岩 奈良地方で俗に「カナンボウ」とよぶ岩石。大半は風化のため岩石の表面が灰白色を呈する。新鮮な割れ口は黒色、緻密で硬い安山岩で亜貝状断面をしめす。岩石の表面には凹凸のくぼみが多数みられる。石基は玻璃質～微晶質、斑晶には主として斜長石・斜方輝石・單斜輝石で、まれに角閃石・石英がふくまれる。平城宮でもっとも多くつかわれている石材で、人頭大前後の野面石を溝の腰岸や敷石として用いる場合が多い。たとえば、第Ⅱ期殿舎地区の正殿東側を流れるSD6608や石積暗渠SX9230などはその好例である。遺構の報告でたんに安山岩とよぶのはこの種の石材である。

含松脂岩流紋岩質凝灰角礫岩 黄～灰白色を呈する。比較的軟らかく加工が容易であり、磨耗表面に美しい文様があらわれる凝灰岩である。玻璃質凝灰岩とか、たんに凝灰角礫岩とよぶこともある。火山岩屑が火山灰で固結したもので、構成礫種は黒色の松脂岩・灰色の流紋岩・白色のパミスなどで、花崗岩塵やガーネット(石榴石)がふくまれたり、流紋岩塵をふくまないこともあり、若干岩質に変化がみられる。風化に対して抵抗力がよわい。

平城宮では両輝石安山岩とならんで多用されている石材で、建物の基礎や溝などにつかわれており、礎石に用いる場合もある。風水に弱いため、粉末状に脆弱化した状態で発見される場合がしばしばある。板状や柱状に加工して利用するのがねで、今回の報告では第Ⅲ期の築地を横断する石積暗渠SD3815などをあげることができる。また施材を建物の礎盤などに転用する場合も少くない。遺構の報告ではたんに凝灰岩とよんでいる。

角閃石一黒雲母花崗閃綠岩～石英閃綠岩 中粒完晶質の中色岩、有色鉱物は花崗岩より多いのが特徴的である。主要な造岩鉱物は斜長石・アルカリ長石・石英・角閃石・黒雲母であり、弱片麻状構造をしめす。角閃石は6～7mm大におよび自形性の強い結晶が多数観察され、長

1) 平城宮東院東南隅の第99次調査で八角の建築
瘤形の斗1個、南面若火養門の第133次調査で

卷斗1個が発見されている。いずれも箱状に作った軸部に貼付けた片蓋式のものである。

第IV章 遺物

軸は一定方向に平行配列するものが多い。またレンズ状に引きのばされた暗黒～暗緑色の塩基性シュリーレ状の包有岩(数cm～30cm以上におよぶものがある)が特徴である。

礎石(PL. 130, fig. 77) 今回の調査地域では原位置にのこる礎石はなかった。第Ⅱ期大膳職地域の南面を画するSA109南側溝の裡立層に角閃石黒雲母花崗閃綠岩～石英閃綠岩を加工した2個の礎石があった。その1は $137.2 \times 93.1\text{cm}$, 高さ 60.3cm のほぼ長方形の1短辺が斜めに欠けた平面形をとる大型礎石である。上面と側面の1部を平滑に加工する。柱座などはつくり

第Ⅰ期造構にともなうか だしていないが上面の加工は丁寧である。付近での礎石を用いた建物をさがすと、第Ⅰ期燈舎地区の後段SB18120を候補にあげることができる。その2は $86.4 \times 61\text{cm}$, 高さ 33.8cm の隅丸長方形の1短辺が斜めに欠けた平面形の小型礎石である。側面と上面が加工されているが、上面の加工が丁寧で平滑面を呈している。1と同様に第Ⅰ期の北面築地回廊の礎石にあてることができるよう。同種の石材を用いた礎石は第1次朝堂院南門に使用されている。一方、第1次火焔殿を移築したものに想定されている恭仁宮大極殿に残存する礎石にもこの種の石材と流紋岩質凝灰岩がつかわれている。

石材産地の推定 石材の産地を推定するにあたって、岩体が露出して調査可能な地域をえらんだ。また、礎層中や河川の堆積物を探石した可能性もあるが、今回は推定産地から除外した。さらに同質の岩石が各地にある場合もあるが、ここでは石材使用地にもっとも近い距離に産出する類似・酷似する岩相を示す地域をえらんだ。

凝灰岩の産地 火山碎屑岩である凝灰岩は国内のいたるところで産出するが、奈良県下の遺跡で発見されるのは10種類にみたない。凝灰岩はその構成礫種、構成礫物、およびそれらの粒度、構造に特徴が多く、産地の推定は他の岩石にくらべて容易である。含松脂岩流紋岩質凝灰岩角礫岩の特色である松脂岩礫をふくむものは、奈良～大阪の府県境にある二上山のドンヅルボー・鹿谷寺付近の岩質に酷似し、産地にあてることができる。鹿谷寺跡付近に産出する凝灰岩は二上山南面・竹内街道からの登り口に分布する難青岩(松脂岩)の上層に産出するもので、灰色の流紋岩礫をふく

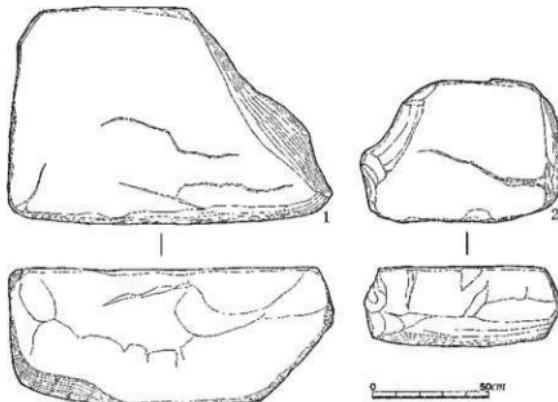


Fig. 77 SD109南溝出土礎石

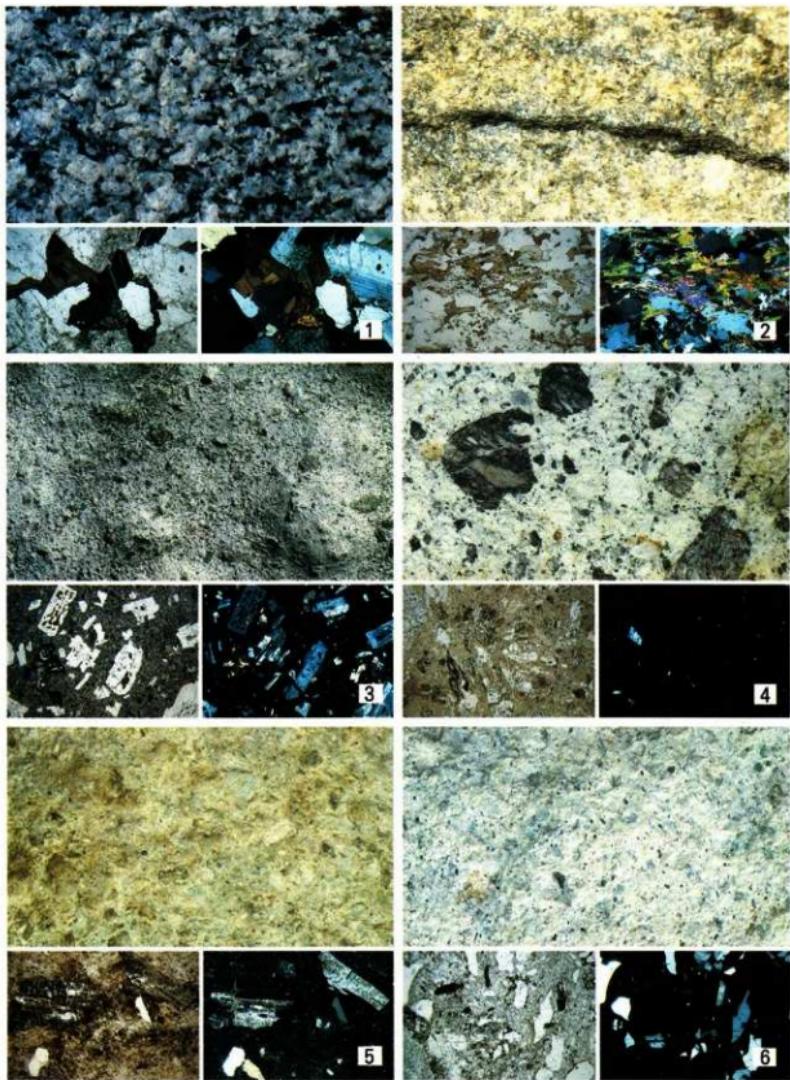


fig. 78 石材顕微鏡写真

1 角閃石風雲母花崗閃綠岩 2 花崗片麻岩 3 向輝石安山岩
 4 含鈦鐵石就紋岩質凝灰角巖岩 5 滲紋岩質凝灰岩 6 蘭結凝灰岩
 図中の上段は奐寸大、下左-ニコル、下右+ニコル 倍率25

くまない。流紋岩礁をふくむ凝灰岩（部分的にふくまないこともある）は、二上山北西面にそって分布し、ドンズルボーに至る。なお、恭仁宮大極殿にある流紋岩質凝灰岩は平城京羅城門の礎石にも使用されており、姫路酸性岩に酷似している。そのことから、兵庫県高砂市宝殿（龜山）付近に産地を求めることができよう。

奈良県下における安山岩の主な分布は、宝生火山区を除けば三笠山付近、二上山、生駒山地 安山岩の宝山寺と信貴山、耳成山、欲傍山、大淀町六田～比曾付近である。両輝石安山岩は三笠山付近および生駒山地に産する（岩脈状）が、平城宮から発見されるものは、肉眼でも鏡下の観察でも三笠山付近のものに酷似している。

奈良県下における「花崗岩類」の分布はつぎのようである。吉野郡竜門地方を中央構造線が 花崗岩東西に貫通し、北部には領家帯變成岩類または領家花崗岩類とよばれる岩石が分布している。それは〔花崗岩類〕、〔堆積岩源變成岩一片麻岩類〕、〔選入岩源變成岩一塙基性岩類〕に大別されており、花崗岩類は分布がもっとも広く大和高原のいたるところでみられる。片麻岩類は、花崗岩類にともなって産出することが多く、代表的な分布地は奈良市東方の高円山付近、柳生南部、榛原町南方、龜王山、神野山西南一帯などである。塙基性岩類は、三輪山、香久

	岩 石 名	平 山 川 本 楠 大 菊 来 唐 慶 仁	推 定 產 地
		城 田 原 麻 岩 開 大 师 寺	寺
火 山 破 壊 岩 類	流紋岩質凝灰岩	○ (○) ○	○ 兵庫県高砂市宝殿（龜山）附近
	含松脂岩流紋岩質凝灰角砾岩	(○) (○) (○) (○)	大阪～奈良府県境、二上山鹿谷寺～ドンズルボー
	流紋岩質凝結凝灰岩-A	(○)	奈良市 東部～東南部、地獄谷
	流紋岩質凝結凝灰岩-B	(○)	奈良県橿原町～宝生寺附近
火 山 岩 類	両輝石安山岩	○	奈良市 東部三笠山附近
	シソ輝石安山岩	○	大阪府～奈良県 二上山嶽岳東北面
半 岩 深 類 成	石英斑岩	○	
	黑雲母花崗岩	○	
領 家 带 变 成 岩 類	黑雲母角閃石花崗岩	○	
	含石榴石兩雲母花崗岩	○	
變 成 岩 類	斑状黑雲母角閃石花崗岩	○	奈良市 東南部～東北部一帯
	ペグマタイト質花崗岩	○	
變 成 岩 類	ペグマタイト質含石榴石花崗岩	○	
	黑雲母ペグマタイト	○	
變 成 岩 類	角閃石黑雲母花崗閃綠岩～石英閃綠岩	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ? ○	奈良盆地東南部～明日香地方一帯
	閃綠岩～斑れい岩	○ ○ ○ ○ ○ ○	
	黑雲母（青雲母）花崗片麻岩	○ ? ○	奈良市東南部、高円山
變 成 岩 類	結晶質石灰岩（純灰石を含む）	○	大津市石山寺境内
	結晶質石灰岩（方解石のみ）	(○)	

Tab. 12 奈良県下の寺院礎石の石材種 () は礎石以外の基盤石

山、神野山一帯、棟原～初瀬の南部などである。SD190南側溝から出土した角閃石黒雲母花崗閃綠岩～石英閃綠岩の礫石は、遷入岩源變成岩類の1種であり、奈良盆地の東南部一帯、飛鳥地方に産したものである。

以上が今回の調査地域および関連遺跡の石材に関する概要である。平城宮ではそれ以外の石材も少なくなく、現在までに調査した奈良県下の寺院をふくめて、岩種と推定产地を表示しておく。平城宮の石材が現在の奈良市およびその近隣から調達されているのは、当然のことである。兵庫県高砂市宝殿付近の流紋岩質凝灰岩が供給されていることについては、石棺の石材として5世紀以降畿内地方に移入されていることと共通しており、古くからの伝統にもとづくのであろう。飛鳥地方に産する岩石が平城宮の石材として用いられたことについては、二通りの解釈ができる。一つは平城宮造営のため、飛鳥地方で採石した石材を運んできた場合である。もう一つは、藤原宮の既存建物を解体して木材などとともに礫石も再利用した場合である。いまのところいずれとも判断しかねるが、第Ⅰ期の大極殿の平面が藤原宮とややことなっていることからすれば、前者の可能性がつよい。恭仁宮大極殿の礫石に飛鳥地方の石材が用いられている点については、この大極殿が平城宮から移建したことを具体的にしめす重要な証拠にならう。

築地版築土(PL. 130) 6ABE-K地区のSC5500の東方にひろがる整地土で採集したもの。平坦面をなす約30×20cm内外の粘土塊が多く検出され、発掘段階では突然と壁土としたものである。しかし、壁土であることをしめす木舞痕跡や表面の白壁痕ははこっていない。断面を検討すると、厚さ3.5cm内外で砂や小礫をふくむ軟質の灰褐色土を、厚さ1cm内外の硬い黄白色粘土層が両側からはさんでいる状況であることがわかった。こうしたことから、確信はもてないが粘土層が縞状にはいった築地の版築塊にあてておく。

- 1) 斎田尚・秋山隆保「寺院礫石の岩質とその产地推定」『古代学研究』84 1977, p. 28~32
- 2) 間壁忠彦・間壁茂子「石棺研究ノート(一)——石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』9 1974, p. 1~23,
間壁忠彦・間壁茂子「石棺研究ノート(二)——

- 岡山県丸山古城ほか長持形・古式家形石棺の石
材同定』『倉敷考古館研究集報』10 1974 p. 221
~231, 間壁忠彦・間壁茂子「石棺研究ノート
(三)——長持形石棺』『倉敷考古館研究集報』
11 1975, p. 1~41

4 土 器

発掘区の全域から多量の土器類が出土した。ここでは、建物の柱掘形・柱抜取痕跡・溝・井戸・土壤などの遺構にともなって検出した遺物を主としてとりあげる。保存状況は概して悪く、細片が多い。土師器・須恵器・黒色土器のほか、施釉陶器・墨書き土器・人面土器・刻印・梵文・刻線文土器・底部穿孔土器・陶器・土馬・土姫などがある。時期的には奈良時代後半から平安時代初頭が中心になり、奈良時代前半のものは少ない。以下、土器の説明は、築地回廊地区・厩舎地区、東外郭地区の順で遺構ごとに述べる。施釉陶器などの特殊な遺物については種類別にまとめた。器種名・時代区分 (Tab. 13)・調整方法などの記述については、さきに報告した『平城宮報告Ⅷ』に原則的にしたがっている。器種の分類については、別表で表示することとし、個々の説明では特徴的なもののはかはふれない (別表4・5)。

大別名称	略年代
平城宮土器 I	A.D. 710
平城宮土器 II	725
平城宮土器 III	750
平城宮土器 IV	765
平城宮土器 V	780
平城宮土器 VI	800
平城宮土器 VII	825

Tab. 13 平城宮土器の大別

土器の説明にさきだち、記述の煩雑をさけるため、若干の点についてあらかじめ概括しておくこととする。

1 土師器の杯・皿・碗などは、成形後に行なうよこなで・ヘラ削りの調整状況によって、
a・b・c・e・f の 5 種類の手法に区分している。a 手法は口縁部をよこなでするが、底部
外面は不調整。b 手法は底部外面をヘラ削りし、c 手法はヘラ削りが口縁部までおよぶ。a 手
法では底部外面に木ノ葉の圧痕をとどめるものが多く、b 手法でもヘラ削りのおよばない部分
に木ノ葉の圧痕がのるものがある。この 3 手法は相関するもので、奈良時代の土器の主要
な調整法である。長岡京時代から平安時代初期にかけては、c 手法が主となりこれに f 手法と
e 手法とがくわわる。この時期の c 手法には、これまでの手法をヘラ削りしたものと、後述の
e 手法でつくったものをヘラ削りするものとがあり、後者が次第に多数をしめるようになる。
f 手法は口縁部をよこなでし、底部外面は未調整である。この点では a 手法と類似している
が、底部外面に木ノ葉の圧痕がまったくなく、口縁部外面のよこなでは末端が口縁部にひきあ
げられていない。口縁部のよこなでは強く段をなし、ロクロ回転を利用したことにもかんがえら
れる。e 手法は口縁部上端だけをよこなでし、それ以下は不調整である。奈良時代前半から碗
c にみられるが、平安時代になると杯・皿・碗などにもこの手法が用いられている。強くよこ
なでするため、口縁部上端が外壁する。このため、e 手法のうちに削った c 手法では外壁した
部分までヘラ削りがおよんでいない。平安時代初頭には、e 手法を削った c 手法が多いが、9
世紀後半から10世紀にかけては e 手法が主流になっていく。

2 よこなで・ヘラ削りによる区分とはべつに、ヘラ磨きの有無によって 0 ~ 3 手法を区別 へら磨き
している。0 手法はヘラ磨きを行なわない。1 手法は口縁部外面、2 手法は底部外面、3 手法
は口縁部と底部外面にへら磨きする。この 3 手法とさきの a ~ f 手法とを組み合わせて調整手

1) 図版・測図の土器には、特殊土器類を除いて
通し番号をついている。1~200が土師器。

301~400が須恵器。500番代が黒色土器。600番
代が瓦器。

法をあらわし、 $a_1 \cdot a_2 \cdot a_3$ のように表現している。

3 土師器杯・皿類の口縁部形態にはA・Bの2種類がある (fig. 79)。A形態は口縁部の断面形をみると下半が内湾し、上半がわずかに外反する弧を描く。そして、口縁端部は内側に丸く肥厚する。B形態は全体が内灣する弧を描く。本文中ではA形態・B形態といってこの違いを表現している。

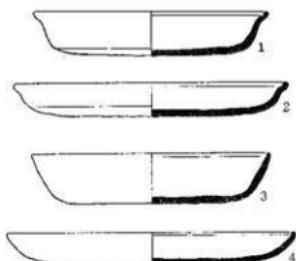


fig. 79 土師杯・皿の口縁部形態
1・2: A形態, 3・4: B形態

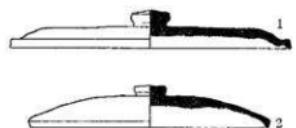


fig. 80 須恵器の口縁部形態
1: A形態, 2: B形態

6 須恵器については、食器類を I ~ IV群土器にわけている。量的には、I群土器が多数を占め、III・IV群の土器はきわめて少ない。群別の基本は調整手法により、これに色調・質・焼成・胎土などの要素を加味して区分した。今回報告する須恵器には、III・IV群土器がまったくなく、I群土器・II群土器とI~IV群のいずれにもぞくさない土器がある。

I群土器には、底部外面をロクロ削りするものと、ヘラ切り痕をのこすものとがあり、杯Aでは後者がほとんどをしめる。蓋はA形態が大部分である。青灰色で硬質のものがほとんどだが、焼成不良で灰白色を呈すものもある。火捺がある。胎土は砂粒が多く、黒色物質の小粒をふくむものが少數ある。

II群土器は、底部外面をロクロ削りし、杯ではロクロ削りが口縁部下半にまでおよぶ。蓋はB形態で、頂部外面は縁部近くまでロクロ削りである。背~淡灰色で、火捺をもつものが多いため。胎土には砂粒が少なく、黒色物質の粒子を含むものが大部分をしめる。削った部分では黒色物質の粒子が移動してくずれるため、墨でぼかしたような状況を呈する。

1) 『平城宮報告VI』p.39・『平城宮報告VII』p.146 ~147。I群土器は和泉陶邑古窯址群の陶器山地区・高麗地區、II群土器は同じく光明池地区の製品に類似している。

2) III群土器は杯Bの底部内面・蓋の頂部内面に同心円文の当板底をのこすものが多い。灰白色できわめて硬質である。IV群土器は底部外面をロクロ削りとし、杯Aでは器高が高く、口縁部

の外傾度は小さい。灰白色の軟質で、器の表面は石膏のようである。

3) ロクロ回転を利用したヘラ削り、なでを「ロクロ削り」・「ロクロなで」という。

4) ロクロ台からの切り離しの際、ヘラをさしこんで行なう技法を「ヘラ切り」といい、ヘラ切りによってのこる底部外面の痕跡を「ヘラ切痕」という。

土器器	平城富士器 IV		平城富士器 V	
	(口 径)	(高さ)	(口 径)	(高さ)
杯A I	19.5~18.6cm	4.8~4.9cm	18.8~18.0cm	4.8~3.8cm
	17.6~16.8	4.2~3.5	(17.3)	(4.0)
杯B I	21	5.5~5	24.8~22.4	8.8~6.8
	(18.2)	(4.9)	19.8~18.4	5.5~4.9
	(16.0)	(4.9)	13.2~12.0	3.8~3.4
皿A I	23.6~20.9	3.0~2.1	22.7~19.6	3.0~2.3
	17.9~16.5	3.4~2.6	18.0~16.0	3.4~2.6
			12.8~10.8	3.1
皿B I	(29.2)	(4.8)	20.4	3.8
			13.0	3.2
碗A I	16.3~15.3	5.1	13.1~12.4	4.4~3.8
	12.9~11.4	4.2	11.4~9.8	4.0~3.6
須恵器	平城富士器 IV		平城富士器 V	
	(口 径)	(高さ)	(口 径)	(高さ)
杯A I	19.4~18.0cm	5.5~3.5cm		
	17.1	5.0	16.8cm	3.8cm
	14.8~14	4.2~3.9	14.8~13.0	5.4~3.0
	12.0	4.7	10.2~10.0	3.4~2.9
	10.8	3.9		
杯B I	19.6~18.6	6.5~5.7	18.6~17.9	6.4~5.5
	17.8~17.4	5.2	16.8	5.8~5.2
	14.6	4.2~3.6	14.4~13.4	4.0
	11.5~9.8	4.0~3.6	11.4~10.0	3.7~3.2
皿A I	(20.3)	(2.0)		
	(17.6)	(3.1)		
	(15.4)	(3.2)		
皿B I	32.0~25.7	5.6~4.9	(26.2)	(5.0)
皿C I	(22.9)	(2.1)	22.0~18.0	2.4~1.8
			15.2	1.2
杯C I			19.8	3.2
			17.0~16.6	4.0~3.4

Tab. 14 平城富士器IV・Vの法量

各遺構での平均値をもとにした数値。空欄は出土量が少なく統計処理に耐えないもの、() は1遺構での数値

A SB7802 出土の土器

東棲SB7802の柱抜取痕跡からは、土師器234個体以上¹⁾、須恵器242個体以上におよぶ多量の土器が出土した。それらは平城宮土器Ⅳにぞくするが、若干の平城宮土器Ⅱ・Ⅲをもふくむ。土師器と須恵器のほか、墨書き器5点、刻印土器1点があり、特殊なものに14点の土縫があった。

i 土師器 (Pl. 131)

平城宮土器Ⅳにぞくする土師器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・碗A・碗B・甕A・甕B・甕C・甕D・甕E・甕F・把手大型蓋がある。これを食器・貯蔵器・煮炊具に大別すると、杯・皿・碗の食器が87.6%、甕類の貯蔵器は0.8%、甕類の煮炊具が10.7%となる。この土器構成は大體職の土棲SK219とはほぼ同じ傾向をしめし、他の宮衙地区よりも煮炊具の比率が大きい。また、食器では高杯や鉢類を欠く単純な様相である。

土師器は胎土・色調・焼成から2群にわかれれる。I群土器は胎土に砂粒が少なく、焼成がやや軟質で、灰白色・黄灰色・桃白色と全体に淡い色調を呈する。II群土器は胎土には砂粒が多く、焼成はI群土器よりかなり堅く焼きしまっており、色調は褐色・赤褐色・灰褐色を呈する。この2群は平城宮土器Ⅳ・Vを通じて存在している。

杯 杯A(1～6) I群土器には杯AⅠ(1～4)・AⅡ、II群土器には杯AⅠ(5・6)がある。II群土器の杯AⅠはI群土器よりも口径が0.8cm小さい。a₀・b₀・c₀・c₁ 手法がみとめられる。a手法が多く60.5%をしめ、b手法7.9%，c手法31.6%となる。平城宮土器ⅣのSK219のb手法が92.1%をしめているのとは著しくことなり、むしろ平城宮土器ⅢのSK820にちかい傾向をしめす。I群土器はa手法でA形態、II群土器はc・b手法でB形態がほとんどである。I群土器が約67%をしめている。ヘラ磨きを行なうもの2点、暗文を施すものは1点にとどまる。底部外面にハケメをいれるものが2点ある。

杯B(34) いずれも小片で観察にたえない。34は平城宮土器Ⅱの杯BⅢで、a手法でつくり螺旋・斜放射・連弧暗文がある。

杯B蓋(33) 杯BⅣ蓋で、内外面ともに、右まわりによこなでし、ヘラ磨きを行なっている。II群土器である。

皿 皿A(7～24) I群土器・II群土器とともに皿AⅠ(I群土器: 14～20, II群土器: 21～23)・皿AⅡ(I群土器: 7～11, II群土器: 12～24)がある。I群土器が約78%をしめる。皿AⅠにはa₀・a₁・b₀・c₀・c₁手法、皿AⅡにはa₀・b₀・c₀手法がある。皿AⅡは口縁部端面が内傾するものが41点ある。I群土器はa手法だけで、II群土器にはc・b手法のほかに、a手法のもの(21)もある。a手法の場合にはA形態、b・c手法の場合にはB形態となる。皿Aのうちa手

1) 器種がわかるものの数値。以下同じ。

2) 「平城宮報告Ⅶ」では、土器の時期区分を

「平城宮Ⅰ～Ⅳ」と表現したが、今回は遺物、

他の遺物の時期区分との混亂をさけるため「平城宮土器Ⅰ～Ⅳ」の表現を用いた。

3) 「平城宮報告Ⅱ」p. 63～68

4) 平城宮土器Ⅳ・Vの土師器・須恵器食器類の

法量による分類は Tab. 14にまとめ、本文では
数値の記述を略している。

5) 「平城宮報告Ⅶ」p. 77～86

6) 暗文の記述は底部・口縁部の順で表現する。

7) 平城宮土器Ⅲまでの皿CのII縁部形態をとどめるもの。「平城宮報告Ⅶ」p. 142～143

4 土 器

土 器		(個体数)	(比率%)	須 惠 器		(個体数)	(比率%)
(食)	杯 A I	27		杯 A II	5		
	II	11	81	III	3		
	不明	43		IV	5	20	83
	杯 B I (身蓋)	0 1	1.3	V	2		
	III (身蓋)	1 1	4	不明	5		
	不明 (身蓋)	2 0	2	杯 B II (身蓋)	9 23		
	椀 A I	1		III (身蓋)	4 16		
	II	1	206	IV (身蓋)	10 19 133	55.0	
	椀 C	23	23	不明 (身蓋)	27 53	208	86.0
	椀 D	1	1	杯 C	13 13	5.4	
皿	皿 A I	28		椀 A	1 1	0.4	
	II	31	93	皿 A I	2		
	不明	34		II	2	9	3.7
	皿 B I	1		皿 B III (身蓋)	1 4		
(貯蔵器)	不明	1	0.9	皿 C I	6 14	5.8	
	壺 A	1	0.4	不明	1 15	6.2	
	壺 B	1	0.4	鉢 A	1	0.4	
	壺 A	13	5.6	鉢 P	1	0.4	
(煮炊具)	壺 C	8	3.4	盤 A	1	0.4	
	壺 X	4	1.7	計	234	100%	
(その他の大型器)	大型箇	2	0.9				
	計	2	0.9				

杯B・皿Aは蓋と身からなっているので、累計にあたっては蓋と身の個体数を合計せずに、当上量の多い方の数をとった。

	土 器		須 惠 器		計
	(個体数)	(比率%)	(個体数)	(比率%)	
(食器)	206 (49.6%)	(88.4%)	208 (50.4%)	(86.0%)	413 (87.1%)
(貯蔵器)	2 (5.6)	(0.8)	34 (94.4)	(14.0)	36 (7.6)
(煮炊具)	25 (100)	(10.8)	0	(5.3)	25
計	233 (48.9)		242 (51.1)		474 (100%)
					計 242 100%

Tab. 15 SB7802出土土器の構成

第IV章 遺物

法が85.9%をしめており、杯Aと同じくSK219とことなった傾向をとる。皿A Iに暗文を施すもの3点、皿A IIに灯火器¹²に使用したもの5点をふくむ。13は平城宮土器IIIにぞくする。

皿B(35) 平城宮土器IIIにぞくする皿B Iで、b₁ 手法でつくり、螺旋・斜放射暗文がある。

椀A(26) 2点のみで、椀A I(26)・A IIがある。26はb₂ 手法。いずれもII群土器にぞくしている。

椀C(27~32) e 手法でつくる。灯火器が5点ある。I群・II群土器がともにある。

椀D(25) 1点のみである。C₉ 手法でII群土器。灯火器に使用している。

盃A・B ともに把手部の小破片である。

甕A (37・38) 口径が20cm以上のもの、17cm前後のものにわかる。口径20cm以上のものは、口縁部内外面と体部内面をよこなでし、体部外面には縦方向のハケメをいれる。体部内面に横方向ハケメをとどめるものが1点ある。I群土器に近似するもの1点をのぞくほかは、II群土器に近い胎土である。口径17cm前後のもの(37・39)は口縁部と体部の外面に縦方向のハケメをいれ、口縁部内面には横方向ハケメを行なう。体部の内面はよこなで。

甕C 口径27cm前後で口縁部の内外面によこなでするものが多い。口縁部外面に縦方向のハケメをのこすものが2点ある。体部外面は縦方向のハケメを行ない、体部内面をよこなでするものが一般的である。ただし、横方向ハケメを体部内面に行なうものが1点ある。口縁部の外面にハケメを行なうものが1点がI群土器に近い胎土であるほかは、II群土器の胎土にちかい。

甕X(36) 底部に高台をつけた丸い体部と、わずかに外反する短い口縁部とからなる。甕Aに似るが、ハケメを行なうことや底部外面に炭化物が付着していることから、煮炊き用の甕に比定した。体部外面に縦方向ハケメを行ない、口縁部の内外面をよこなでする。体部内面は口縁部近くまでよこなでにするが、以下は不調整。体部内面から底部内面にかけてハケメをのこすものが1点ある。底部外面ではハケメ・よこなで・ヘラ削りの手法が各1点づつある。胎土に砂粒を著しくふくむものと、比較的少ないものとがある。36は口径14.0cm、復原高20.4cm。

把手付大型甕 顶部外面は縦方向ハケメ、内面をよこなでする。口縁端部の外面は縦方向ハケメ、内面には横方向ハケメをとどめる。

ii 須恵器 (PL. 132)

須恵器の器種には、杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・椀A・鉢A・鉢F・盤A・壺A・壺A蓋・壺E・壺K・壺N・水瓶・平瓶・壺A・壺B・壺Cがある。これを食器と貯蔵器に大別すると、前者が86%、後者が14%となる。土師器とことなり器種構成は多彩だが、数量的にみれば、食器類のうち杯Bが64%しめるなど単純な組成である。食器類の須恵器はI・II群・その他の土器群と3グループに分れるが、I群土器が大部分をしめる。

杯A(301・303~306) 杯A II(306)・A III(305)・A IV(303・304)・A V(301)にわかる。底部外面にロクロ削りするものは5点にすぎない。ロクロ回転はほとんど右回転で、左回転は1点前後にとどまる。これは他の器種の場合も同じである。杯A IにII群土器が2点ある。

杯B(309~312) 杯B I(309)・B II(310)・B III(311)・B IV(312)にわかる。底部外面をロクロ削りするものとヘラ切りのままのものとの比は、3:4である。杯B IIにII群土器1点を

1) II群端部に煤が付着していることから、灯明皿に推定できる土器。

ふくむ。杯BⅢには灯火器に用いたものが3点ある。墨書き器が1点あるほかに、墨痕の付着するものが3点ある。

杯B蓋(315~321)　杯B I蓋(321)・B II蓋(319~320)・B III蓋(317・318)・B IV蓋(315・316)
にわかる。一方、A形態が全体の3/4をしめている。頂部外表面をロクロ削りするものは50%で、うちA形態では35%，B形態では80%となり、ロクロ削りを行なうものでは圧倒的多数がB形態の蓋となる。II群土器が3点、群別不明のものが5点ある。内面に墨が付着し、硯として使用したものが30点の多數をしめている。ほかに墨書き器1点、灯火器1点がある。

蓋

杯C(307~308)　底部外表面にロクロ削りを行なうものが4点ある。内外面に火祥をとどめるものが3点ある。

皿A(313・314)　皿A I・A II(314)・A III(313)にわかる。

皿

皿B(324)　底部外表面をロクロ削りする。皿B Iにぞくし、内外面に火祥をとどめる。

皿B蓋(322・323)　皿B I蓋(322・323)・B II蓋がある。A形態とB形態との比は3:2となる。頂部外表面はロクロ削りである。II群土器と群別不明のものが各1点ある。

皿C(325・326)　皿C Iのみである。底部外表面をロクロ削りするものは、1点にとどまる。灯火器に用いたものが1点みとめられる。

椀A(302)　底面部外表面はロクロ削りである。内面に漆が付着しており、漆をいれる容器として用いられている。口径12.2cm、高さ5.3cm。

椀

鉢A・鉢F・盤A・水瓶　いずれも小片であり、全形をうかがうことができない。

平瓶　肩部から底部にかけての破片。底部外表面にヘラ切り痕跡をとどめる。

盤A　肩部と底部の破片である。円板状の底部に粘土紐を巻き上げて体部をつくる。底部外表面から体部下半にかけてロクロ削りしている。

盤

壺A蓋　縁部が頂部から垂直に折れるもの(327)と、ややまろく折れ曲るものがある。前者の縁端部は内端を下方に突出させ、外側に段を生じている。後者の縁端部はまるくおわる。

壺E(330)　口縁部と体部の内外面をロクロなでするが、体部外表面下半には、ロクロなでの前に施したロクロ削りがみとめられる。底部外表面にヘラ切り痕跡をとどめている。内外面に火祥がみとめられる。口径10cm、高さ6.5cm。

壺K(311)　口縁部から体部下半にかけてロクロなでし、体部外表面の下半から底部外表面にかけてロクロ削りを行なっている。口径7.4cm、高さ22.8cm。

壺M　底部の小破片である。

壺N(332)　肩部と底部下半に一個ずつの把手をとどめるが、本来の数は不明。たぶん、肩部に1対、下部に1個の把手がつく梯形の器になるのであろう。底部外表面から体部外表面の下半にかけてはロクロ削りである。口径約8.8cm、高さ約22cm。

壺A・B　ともに口縁部の破片である。壺Bの1点には墨書きで「主」とかく(PL. 138)。

壺C(328・329)　329は口縁部の内外面をロクロなでし、体部と底部の内面は当て板の同心円文、体部外表面の上半は平行引き目をのこす。底部外表面から体部外表面下半にかけては、ロクロ削りである。口径36.5cm、高さ29.4cm。328は体部外表面の叩き目のうえをなでている。体部内面も同心円文のうえをなでている。底部外表面には強いなでを行ない、底部外表面の高台付近はロクロなどで調整している。口径33.3cm、高さ26.7cm。

壺

B SA3777出土の土器 (fig. 81)

第Ⅰ期の南北縫SA3777の柱痕跡からは、土師器63個体、須恵器82個体が確認され、須恵器が57.7%と多数をしめている。平城宮土器IVにぞくするものが多い。SA3777の柱掘形には柱抜取痕跡がなく、本來は上部に堆積した土器が、柱根の腐蝕によって生じた空洞に落下したものとかんがえられる。上述のSB7802の土器と共通した様相をもち、第Ⅱ期の東面築地回廊の改作に関連する遺物とみられよう。

土師器 杯A・皿A・皿B蓋・楕A・楕C(40)・高杯・変・把手付大型蓋がある。漆種構成は単純で、皿Aが食器類の67.3%をしめることになる。

杯 A(47)は磨耗が著しく調整手法が不明である。杯A IでI群土器にぞくする。皿A(41~46)には、皿A I(44・45)・A II(42・43)・A III(46)がある。a₀, b₀ 手法で調整し、暗文をつけ

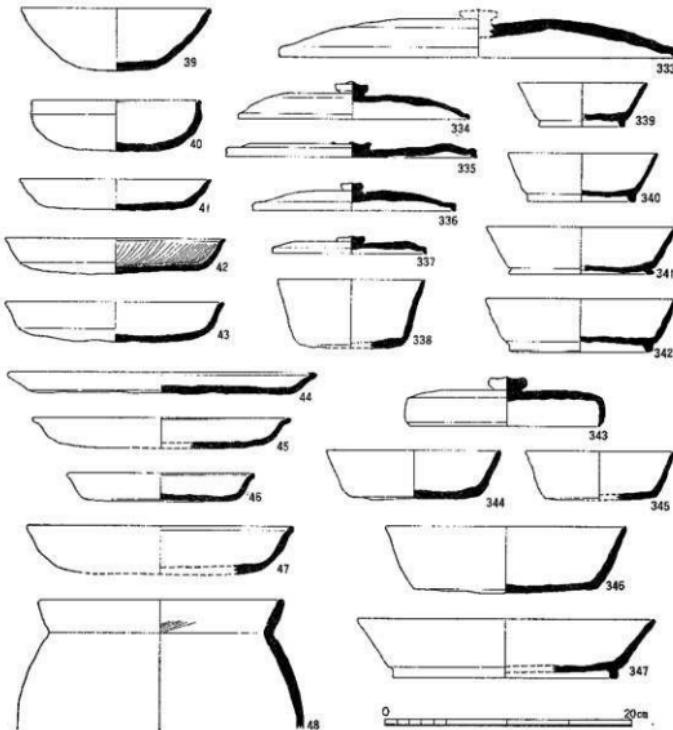


Fig. 81 SA3777出土土器

4 土器

るもののが3点ある。2点のII群土器はb₀, c₀手法で調整する。椀Aには椀A I(39)・A IIがある。a₀手法1点とc₀手法が2点確認できるが、そのほかは磨耗のため不明である。甌Aは、口径で31.8cmのもの、25cmのもの、20cmのもの(48)がある。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿B蓋・鉢F・盤A・甌A蓋・甌A・甌B・甌Cがある。杯A IVの1点は底部外面をロクロ削りしている。杯B(339~342)は、杯B I・B II(341・342)・B IV(339・340)にわかる。底部外面をロクロ削りするものは3点である。杯B蓋(334~337)は、杯B I蓋・B II蓋(334・335)・B III蓋(336)・B IV蓋(337)がある。B形態の蓋は1点にすぎない。頂部外面にロクロ削りするもの(334)は10点で、さらにロクロなどをくわえるものが5点ある。腹に用いたものが1点まとめられる。皿B(347)は皿B IIで、底部外面にロクロ削りを行なっている。皿B蓋(333)には、皿B I蓋(333)とB II蓋がある。A形態の

土器	(個体数)	(比率)	須恵器	(個体数)	(比率)
杯 A	1) 2) 1)	1	I III IV 不明	1 2 3 5)	1
食	I II III 不明	6 12 3 14)	身 蓋	2 4)	2
皿 A	II III 不明	12 3 14)	身 蓋	0 2)	3
皿 B	蓋	35	身 蓋	4 11)	11
皿 B	蓋	52	身 蓋	43 11)	11
82.6			身 蓋	31 8)	5
椀 A	I II 不明	3 1 5)	身 蓋	5 8)	61
椀 C		2)	身 蓋	7 18)	74.4
高杯		1)	身 蓋	18	
(蒸炊器)	甌	8	身 蓋	1 5)	
(その他)	大型蓋	3	身 蓋	5	
計		63	身 蓋	1	
		100%	鉢 F	1	
			盤 A	1	
			甌 A	2 21 19)	25.6
			甌		
			計	82	100%
土器	須恵器	計			
(食器)	52(46.0%) (36.7%)	61(54.0%) (42.9%)	113 (79.6%)		
(輪廻器)	0	21(100)	21 (14.8)		
(蒸炊器)	8(100) (5.6)	0(0)	8 (5.6)		
計	60(42.3)	82(57.7)	142(100)		

Tab. 16 SA3777出土土器の構成

蓋は1点、B形態が4点ある。B形態の蓋には群別不明のもの2点がふくまれる。椀A(338)は焼成が甘く、調整手法が不明である。蓋A蓋(343)は頂部をロクロ削りしている。口径15.4cm高さ4.0cm。その他の器種はいずれも口縁の小片で全形をしきがたい。

C SA109出土の土器

大膳郡地区のSA109の南北2条の側溝からは相当量の土器が出土した。土師器・須恵器・黒色土器のほか、縄輪陶器がある。量的には南側のほうが多数をしめている。

i 南側溝の土器 (fig. 82)

土師器 杯A・杯B(56)・杯B蓋(55)・皿A・皿B・皿B蓋・椀A・椀C(65)・高杯・甕A・甕B・甕Cがあるが、ともに保存状況はよくない。いずれも平城宮土器IV~Vにぞくしている。杯A(57~59)には杯A I・杯A IIがある。調整手法ではa₀・b₀手法がみとめられる。皿A(49~54・60~63)は皿A I(49~52)とA II(53・54・60~63)にわかれる。a₀・b₀・c₀手法がみとめられる。椀A(64・65~69)には椀A I・A II・A IIIがある。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯E・皿B・皿B蓋・皿D・椀A・鉢A・鉢B・蓋A・甕A
杯 B 蓋 がある。杯B蓋がきわめて多数をしめていることが注目される。杯A(360・363・364)には杯A II・A IIIがある。後者は高さが5cm前後のものと、3cm前後のものとにわかれる。底部外面はロクロ削り。杯B(355~358)には杯B I・B III・B IVがある。底部外面にロクロ削りを行なうものは約30%である。杯B IVには灯火器として用いたもの2点をふくむ。杯B蓋(348~354)は杯B I・B II・B III・B IV蓋にわかれ、完形品がもっとも多い器種である。頂部が半球状に彎曲しているものを少数ふくんでおり、この種のものでは頂部外面をロクロ削りしている。つまみの形状と調整手法などから極めて酷似しているものがあり、10数種類でそれぞれ4~5点の同形品を抽出することができた。なかには同一人の製作かと疑われるものがあり、群別とは別に注目される。杯E(361・362)は焼成がきわめて良好で淡い肌色を呈し、火燐がある。底部外面はヘラ切りのままである。口径16.8cm、高さ4.6cm。皿B蓋(370・371)は皿B蓋Iである。

土 師 器	個体数	須 恵 器	個体数
杯A	6	杯A	3
(食) 杯B (身) 蓋	1 1	(食) 杯B (身) 蓋	15 44
器 皿A	27	杯E	2
椀A	7	皿B蓋	2
計	41	皿D	3
		椀A	1
		总计	57

Tab. 17 SA109 南側溝出土土器の構成

1) SA109側溝出土土器のうち、第2次調査についてすでに報告している。主として北溝の

り、頂部外面はヘラ切りの後はロクロなでしている。371は内面カキメをとどめる。皿D(367~369)は、底部外面をいずれもロクロ削りし、口縁部の下半におよんでいる。369の高台は口縁部と底部の境からかなり内側につけられている。367・368はⅡ群土器である。口径24.6~21.6cm、高さ3.0~2.0cm。椀A(359)は底部外面から口縁部下半にかけてロクロ削りを行なっている。蓋蓋には、縁部が直角に折れまがり、端部が外傾するもの(365)と縁部が外反気味に折れまがり、端部がまるくおさまるもの(366)がある。

出土品である。『平城宮報告II』p. 72

4 土 器

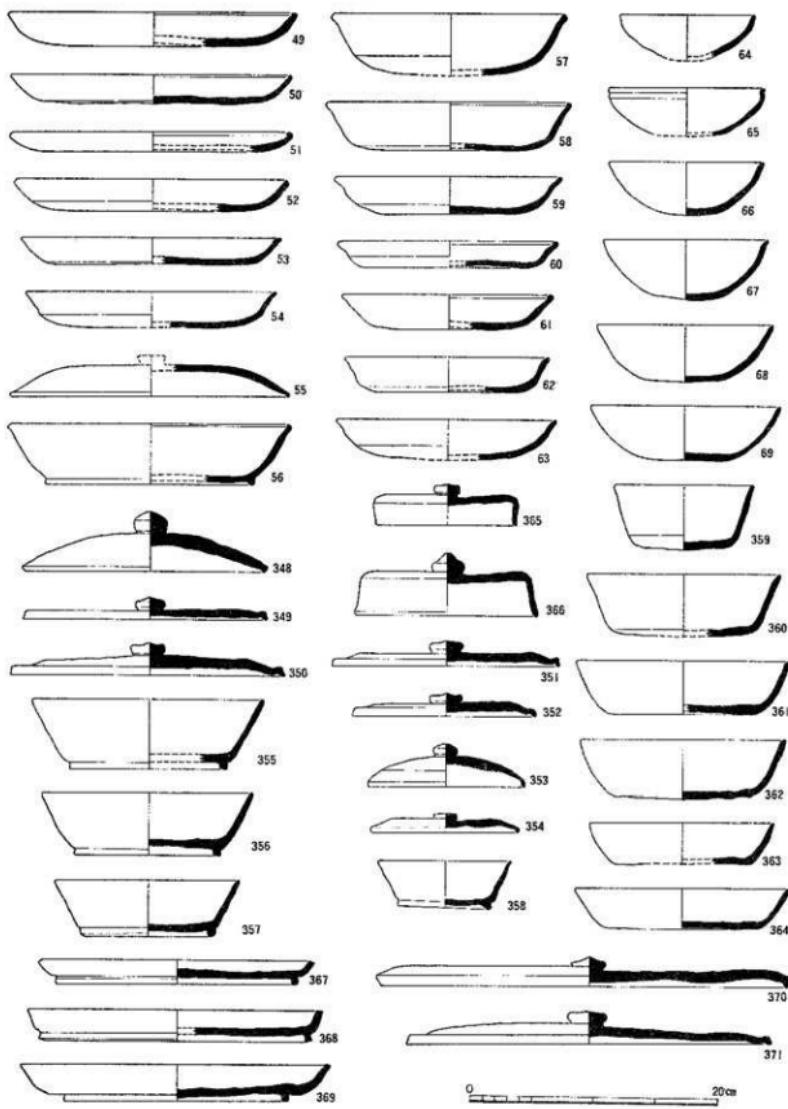


fig. 82 SD109南側出土の土器

第四章 遺物

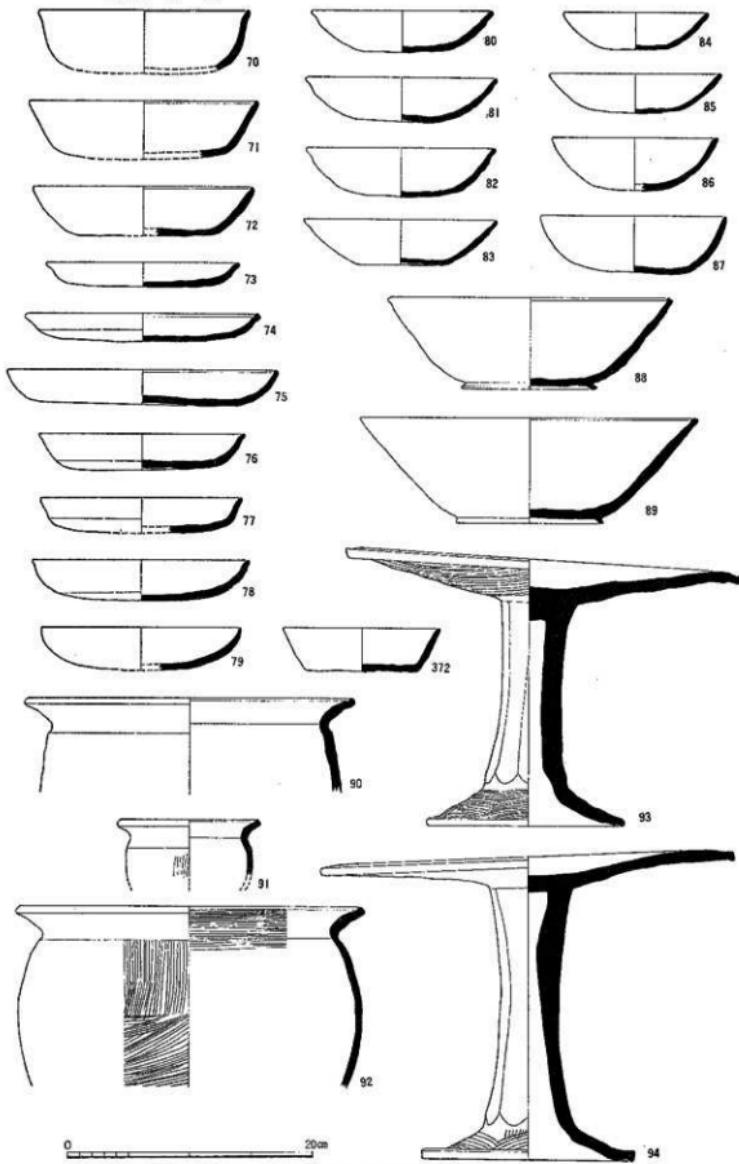


fig. 83 SD109北側溝出土の土器

ii 北側溝の土器 (fig. 83)

南側溝に比して量は少ない。時期は平城宮土器IV~VIIにわたっている。

土器には杯A・杯B・皿A・楕A・高杯・菱A・菱Cがある。杯A(70~72)はc₀手法で調査している。杯B(88~89)にはe手法のうちヘラ削りするc手法のものがある。89は口縁部外側にヘラ磨きがあり、平城宮土器VIIにぞくする。皿A(73~79)には皿A I・A II・A IIIがある。楕A(80~87)にはc手法のもの(80~85)とe手法のちへラ削りするc手法のもの(80~85)とがある。80~85は平城宮土器VIIにぞくする。高杯(93~94)は、脚部と杯部の接合にa・bの2手法がある。b手法(94)の杯部外側は4区のヘラ磨きを行なうが、a手法(93)にはヘラ磨きを欠く。ともに平城宮土器VIIにぞくする。菱類は菱A(91~92)が多く、少量の菱C(90)がある。菱Aには縁部内にハケメをいれるものといいものがある。

須恵器はごくわずかで、杯A(372)の他は蓋の小片である。

D SX6600出土の土器 (fig. 84)

殿舎地区の第I期遺構では、第I期の存続期間を反映する遺物の出土例がきわめて少ない。
殿舎地区の旧地表面が第II期の改作時にかなり深く削平されていることにもよろうが、この地
区が食器類を日常的に用いない使われ方をしていることに帰因するのであろう。そうしたなか

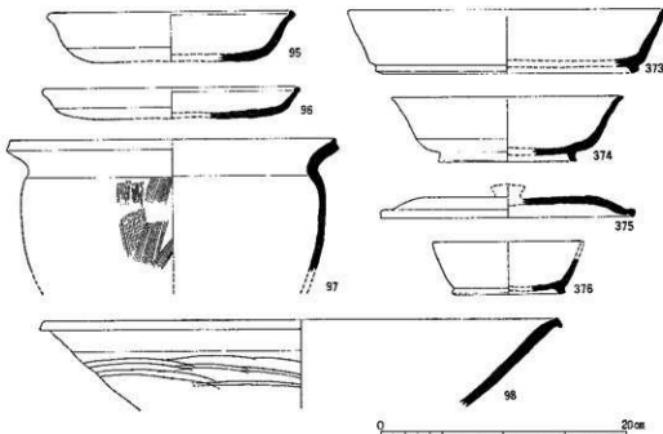


Fig. 84 SX6600出土の土器

1) 『平城宮報告 VI』 p. 26, 『平城宮報告 IV』 p. 56. a手法は円筒状品を杯部に接合するもので、接合時に凹凸をしづるため、縦方向のしわ

が内面にのこる。b手法は棒状品を粘土を円錐状にかぶせたものを芯とし、上部に粘土を厚く重ねて杯部と接合するもの。

第IV章 遺物

で、第II期に殿舎地区を南方へ拡張したときに埋立てられた第I期の埴輪焼壁 SX6600 の前面から若干の土器が出土した。SX6600の埋上から出土した土器は平城宮土器IVにぞくする土師器と須恵器であるが、いずれも少量で保存状態もよくない。

土師器には、杯A・皿A・碗A・盤・鍋・壺がある。杯A I (96)はa₆手法のもので、A形態にぞくするI群土器である。盤A (98)も杯Aと同様の胎土である。口縁部の外面上部をよこなでし、それ以下をヘラ削りしたち様方向の粗いヘラ磨きを行なっている。

須恵器には杯B・杯B I蓋 (375)・皿B I (373)・壺がある。杯Bは杯B I (374)・B III (376)がある。374は波紋模様を模した形態をとり、底部外面から口縁部下半をていねいにロクロ削りしている。

E SB7150出土の土器 (PL. 133)

殿舎地区における第II期の正殿にあたるSB7150の柱抜取痕跡から、平城宮土器Vにぞくする土器が出土している。第II期の殿舎の廃絶時期をしる有力な手掛かりとなっている。土師器と須恵器のうち、前者が73%をしめており、土師器が多い点が注目される。

土師器 杯A・杯B蓋・皿A・碗A・盤B・壺Aがある。杯A (99~101)は杯A Iで、a₆・b₉・c₆・c₂手法がある。a₆・b₉手法はI群土器 (101)、c手法はII群土器 (99~100)である。杯B II蓋 (106)は頂部外側ヘラ削りした後、つまみに向って頂部から縁部にかけて4区に分かたへラ磨きを施す。II群土器。皿Aは皿A I (105)・A II (102~104)がある。a₆・b₉・c₆手法があり、II群土器はc₆手法の1例のみで他はI群土器である。皿A IIの2例が火灯器として使用される (103)。碗A (107~108)は碗A Iで底面は平底に近い。c₆手法のもの (107)とc₁手法のもの (108)がある。II群土器が多く、I群土器は2例である。盤B (109)は大型品ではば完形である。口縁部上端が強く外反する。口縁部外面はヘラ削りである。II群土器で、外面に黒斑がある。口径38.0cm、高さ9.2cm。

須恵器 杯A III (380)、杯B、杯B III・B IV蓋 (377)、杯C、皿C I (379)、壺蓋 (378)がある。380は火灯器に使用される。皿Cは口縁部が外反するもの (379)と、まっすぐ外方に聞くものがあり、後者の端部は小さく内側に折り返される。底部外面はヘラ切りのままである。

F SB6633など第II期建物出土の土器 (PL. 133)

殿舎地区第II期の遺構にぞくする建物SB6633・SB6666・SB7151・SB7152は、正殿SB7150にたいして、脇的に配置されている。これら建物の柱痕跡からは、平城宮土器VIの土器が出土しており、SB7150よりも廃絶期が遅れることをしめす。ただし、これらの土器は同じ平城宮土器VIであっても、後述の第III期建物SB8224の柱掘形から出土した土器よりも古く、長岡京の土器(平城宮土器VI相当)よりも若干新しい様相を呈している。各建物からの出土量は少なく、時期差がみとめられないで、ここでは一括してあつかうことにする。土師器・須恵器・黑

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯 A	7	杯 A	2
食 杯B蓋	1	食 杯B 皿	3
皿 A	7	皿 C	1
碗 A	8	皿 C	3
盤 B	1		
壺 A	3	壺 蓋	1
計	27	計	10

Tab. 19 SB7150出土土器の構成

土器からなるが、土器が全体の77%と多数をしめている。

土器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・椀A・高杯・盤・壺E・壺Aがある。杯・皿・椀の食器類はすべてc₀手法で、e手法のものはない。この時期の土器は胎土・色調から、灰色～灰褐色で砂分の少ないもの(I'群上器)と、笠母・長石粒を多量に含み、茶褐色～赤褐色を呈するものの(II'群上器)とにわけられる。量的にはII'群土器が圧倒的に多い。II'群土器は平城宮土器IV・VのII群土器と類似する特徴をもつ。

杯A(110・111)は、口縁部B形態で平城宮土器VIに比べると外傾度が大きく、口縁端部の内側への巻き込みが小さくなっている。口径18.8cm、高さ4.1cm。皿A(112～114・118・119・121)

はB形態で、端部の巻き込みの大きいもの(114・121)、小さいもの(113・118)、巻き込みのないもの(119)がある。口径20.4cm～15.6cm。椀A(115～117・120)はいずれもc₀手法である。口径15.4～12.4cm。高杯は脚柱部の破片のみであるが、1例には7面の面取りが認められる。壺E(122)は小型品で、胴部上半にヘラ磨きを施している。口径5.1cm、高さ5.0cm。

須恵器には杯B・杯B蓋・皿B蓋・鉢D・盤・平瓶・壺・壺Cがあるが、いずれも小片である。盤の底部内面には当て板の同心円文がのこる。

黒色土器には、黒色土器A・Bの両種があり。前者には杯B蓋・壺A(501)がある。

G SD8211など第II期溝出土の土器 (PL. 134)

最古地区において第II期の遺物をめぐる溝SD8211・SD8216・SD8246から、若干の土器が出土している。土器・須恵器・黒色土器があり、平城宮土器Vにぞくする。

土器には杯A・杯B・皿A・椀A(146・147)・高杯・壺がある。杯・皿類ではI群土器はa₀・b₀手法、II群土器はc₀手法である。148・149は皿A IIである。

須恵器には杯A・杯B IV(403)・杯B蓋・皿A・皿B蓋・壺A蓋・壺E(404・405)・壺がある。杯B蓋(399～402)は杯B皿蓋(399・400)・B IV蓋(401・402)がある。B形態は2例だけである。皿B蓋にI～IV群にぞくさないものがある。

黒色土器には壺Aがあり、内外面とも黒色に処理されている。

1) 平城宮土器VのI'群・II'群は、それぞれ平城宮土器IV・VのI・II群に近い特徴をもつが、観察では同一产地と断定しない。ここでは「I」を付してそのちがいをしめた。理化学的な

土器	個体数	須恵器	個体数	土器
杯A	11	食	身	2
食	6	杯B	蓋	4
杯B	6	蓋		
皿A	23	盤		1
椀A	4	鉢	D	2
高杯	4	平瓶		1
盤	1	壺	A	3
壺	1	壺	B	1
壺	1	計		13
壺	1			
壺	1			
計	51			

Tab. 20 SB6633・SB6666・SB7151・SB7152

出土土器の構成

土器	個体数	須恵器	個体数
杯A	4	食	身
食	2	杯B	蓋
杯B	9	器	皿B蓋
皿A	5	壺	E
椀A	1	壺	蓋
高杯	1	計	18
壺	2		
壺	23		

Tab. 21 SD8211・SD8214・SD8216

・SD8246出土土器の構成

他に黒色土器壺A 1がある。

分析結果は p. 255～258を参照。

2) 『平城宮報告VII』 p. 59。内面だけを黒色にするものをA、内外とも黒色になるものをBとする。

H SK8212出土の土器 (Pl. 134)

土器 SK8212 は第Ⅱ期の北面築地回廊の南にあり、この土器のうえに第Ⅲ期創建物 SB8218がたてられており、この埋土から出土した土器は、第Ⅲ期造構の上限を決定する好資料といえよう。土器50個体以上、須恵器76個体以上が確認されており、須恵器が多い。ほかに土馬が2点伴出している。大半の土器は平城宮土器Vにぞくする。

土師器 杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・碗A・碗C・高杯・盤・壺があるが、保存状態は悪い。壺類の割合が32%と大きい。食器では皿Aが41.2%をしめる。I群上器、II群土器の割合はさきのSB7156の場合とかなりことなっている。

杯Aは $a_0 \cdot b_0$ 手法でⅠ群土器だけである。杯B II(142)は b_0 手法でⅠ群土器である。他に
A c_1 手法でⅡ群土器のものが1例ある。杯B蓋はⅡ群土器のものがある。皿A(143-145)は皿A
I・A II がある。I群土器は4点と少ない。I群土器は $a_0 \cdot b_0$ 手法でA形態である。143は
皿Iで螺旋・斜放射暗文があり平城宮土器Ⅲにぞくする。II群土器は c_0 手法でB形態である。
I群土器の皿A II はいずれも口縁端部が内傾し、II群土器の皿A IIは口縁端部が小さく肥厚す
る。椀AはすべてⅠ群土器であるが、椀CではI群土器は1例(141)である。椀Cはe手法で
つくる。高杯にはⅠ群土器の杯部片がある。蓋類はほとんど蓋Aで、I群土器にちかい胎土の
ものとⅡ群土器にちかい胎土のものとがあり、後者が圧倒的に多い。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・皿B・皿B蓋・皿C・鉢A・鉢F・盤A・平瓶・壺蓋・壺Aがある。杯B蓋が総数の65.1%をしめる。

杯A(392)は2例ともI~IV群土器にぞくさない。392は杯AⅢで、器高が低い。

杯B(389~391)には杯B II (390)・B III (391)・B IV (391)がある。底部外面はヘラ切りのうえ、Bをなでるものがある。杯B蓋(384~388)は杯B I・B II・B IV蓋がある。II群土器は3例にすぎない。I群土器は高さ2cm未満の扁平なものが多く、頂部外面はヘラ切り状態のものが5例にすぎずクロ削りの割合が高い。ロクロ削りのうえをさらにロクロなでするものが多い。皿B

	土 師 瓷 須 惠 器 (計)	土 師 器	(個体数) (比率)	須 惠 器	(個体数) (比率)
食 器	34 (32.1)% 72 (67.9)% 106 (27.0)% (37.1)% (84.1)%	杯 A	6	杯 A	2
貯藏器	0 4 (100) (3.2) 4 (3.2)	食杯 B 身2 盖1	2	食杯 B 身9 盖56	9 56
差 奏 具	16 (100) 0 16 (12.7) (12.7)	皿 A	14	皿 B 身1 盖5	1 5
計	50 (39.7) 76 (60.3) 126	皿 B 身2 盖34	68.0	皿 C	4
		碗 A	4	盤 A	2
		碗 C	4	盤 B 身1 盖2	1 2
		盤 A	1	鉢 A	1
		高杯	1	鉢 F	2
((盞 A	16 32.0	盞 盖	1
差 奏 具				野 葵 盖	1
				平 葵 盖	4 5.3
		計	50 100%	要 A	2
				計	26 100%

Tab. 22 SK8212出土土器の構成

I蓋(393～395)はI群土器であるが、頂部外面は縁部近くまでロクロ削りを施す。鉢F(398)は口縁端部近くまでロクロ削りし、体部内面はロクロなどで施す。底部外面はヘラ切りのままである。口径19.7cm、高さ16.2cm。盤A(396)はわずかに外反気味に開く口縁部で、口縁部端面は凹み、外傾する。底部外面から口縁部下半までロクロ削りを施す。口径38.5cm、高さ19.4cm。盤蓋(383)は頂部外面をロクロ削りする。口径8.7cm、高さ2.0cm。甌A(397)は肩部内外面は当て板痕跡・叩き目をロクロなどで調整する。接合しないが同一個体とおもわれる胴部片があり、叩き目を消去した後、ロクロ回転を利用しないカキメを施している。

I SE9210出土の土器 (fig. 85)

広場地区にある井戸SE9210および井戸枠を抜き取ったあと凹みとして長く残存したSK7316から少量の土器が出土している。SE9210は第Ⅱ期の遺構として位置づけられるが、井戸枠内の下層堆積から出土した土器は、さきに報告したSD650B並行の時期にぞくする¹⁾。このことは第Ⅱ期から何回なく井戸さらえが行なわれ、第Ⅲ期から10世紀初頭までの長期にわたって存続したことを物語っている。

井戸枠内から出土した少量の土器はいずれも土師器で、杯A1個体・杯B蓋1個体・甌2個・土師器体がある。杯A(166)はB形態で外傾度が大きく、口縁端部は小さく肥厚する。C手法でつくったものをヘラ削りするC手法である。杯B蓋(165)は頂部外面をヘラ削りしたのち、縁部は左まわりのヘラ削りを4回にわけて行なう。口径21.6cm。甌A(167)はほぼ完形である。外面の全面に煤が付着する。体部外面は、底部から頸部にかけて横方向あるいは斜方向の平行叩き目を施す。内面はなでの調整である。口縁部端面には1本の沈線をいれるが一周していない。

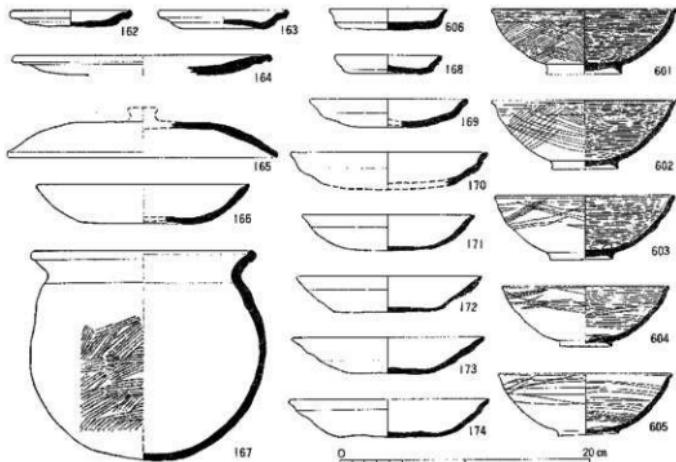


fig. 85 SE9210出土の土器

1) 「平城宮報告VI」 p. 64～74

SK7316 からは、奈良時代の須恵器とともに、SD650B よりも少し時期が下る土師器の杯・土師器皿、瓦器の椀・小皿、そのほか東播磨系の須恵器片や中国製の青磁碗が出土した。

SD650B よりも時期の下る土師器の杯類(171~174)はいずれも e 手法である。口縁部の形態には、内輪気味の口縁部が端部よりやや下位で外反するもの(171~174)、口縁下半が外輪気味で上半は内輪し口縁部の中程が肥厚するもの(172)、まっすぐ外方に大きく開くもの(173)がある。いずれも口縁端部を小さく内側に折りかえしている。前の 2 者にはよこなで 1 段あるが、後者では 2 段である。口径 15.8~13.6cm、高さ 3.1~2.9cm。

土師器の皿 A には、皿 A I (169~170: 口径 15.8~12.6cm、高さ 3.0~2.4cm)、皿 A II (162~163・168: 口径 10.6~8.6cm、高さ 1.5~1.3cm) がある。いずれも c 手法。皿 A I は口縁部上半が外反するもので、端部は丸くおさまる。皿 A II は口縁部が外反し、端部は内側に大きく巻きこむもの(162・163)と、まっすぐ外方に開くもの(168)とがある。土師器としてはこのほかに、口縁部を 2 段なする e 手法の高杯、または高台付皿らしきものが 1 点ある(164)。

瓦器 瓦器碗は 11 個出土した。口径 14.8cm~13.4cm、高さ 5.6~4.9cm で、口縁部は内輪し、いずれも口縁端部内面に沈線がある。高台は断面が逆三角形を呈するものがほとんどだが、低く平坦な例もある。口縁部内外面とも密にヘラ磨きを行なうもの(601~602)と、外面が粗で、内面が密なもの(603~604)、内外面とも比較的粗いもの(605)がある。底部内面の暗文は螺旋暗文とジグザグ暗文とがあり、後者は 3 例である。内外面のヘラ磨きが密なものにジグザグ暗文がみられる。瓦器小皿(606)は 2 例ある。口縁部は短く外反気味にひらく。口縁部はよこなで、底部外面は不調整で底部内面にジグザグ暗文を施す。

J SB8224 出土の土器 (PL. 133)

	土 师 器	個体数
杯 A		9
食杯 B (身)	5	5
食杯 B (蓋)	5	
皿 A		17
皿 B		1
椀 A		4
高杯		2
無 B		1
(蓋 E)		1
甕 A		1
計		41

殿舎地区における第Ⅲ期の建物 SB8224 の柱掘形から、比較的まとまりのある土器が出土している。平城上皇が平城宮に遷都した当時の土器として注目される。平城宮土器Ⅶにぞくしているが、先に報告した SE3 11B とは若干様相をここにし、長岡京の土器(平城宮土器Ⅵ)と SE311B との中間に位置するものとおもわれる。出土した土器の大半は土師器で、ほかに少量の須恵器や綠釉陶器皿がある。

土師器の器種には、杯 A・杯 B・杯 B 蓋・皿 A・皿 B・椀 A・高杯・皿 B・蓋 A がある。II'群土器が圧倒的に多く、杯・皿・椀はすべて c 手法である。I'群土器のものは f 手法である。e 手法でつくり、へう削りする c 手法のものはない。

杯 A(123~126)には f 手法のもの(126)が 1 点ある。口径 19.0~16.2cm、高さ 3.3cm~3.7cm。杯 B(137~139)は大型品で、c₁ 手法のもの(138)がある。ヘラ磨きは粗く、沈線状にくぼむ。杯 B 蓋(136)は磨滅が著しいが、頂部外面には、ヘラ磨きがみとめられる。皿 A(127~132)には II'群土器で f 手法のもの(132)がある。口径 23.0~18.2cm のもの、口径 16.6

Tab. 23 SB8224
出土土器
の構成
ほかに須恵器皿 B 2,
杯 A・杯 B 蓋・杯 F・
盤・蓋 M・蓋 A の小片

1) 明石市魚住古窯跡群の土器と同じ形態をとる。

4 土器

~14.5cmの大小2種があるようである。皿B(135)は口径10.5cm、高さ2.0cmの小型品である。碗A(133・134)は杯Aを小型にした形態で、口縁端部を小さく内側に折りかえしている。口径14.3cm、高さ3.1cm。壺E(140)は小型品で胴部には粗いヘラ磨きを施す。口径4.6cm、高さ5.2cm。

須恵器には、杯B(381・382)の他に、杯A・杯B蓋・鉢F・盤・壺M・甕Aの細片がある。

K SD6631・SD6633・SD7175出土の土器 (PL. 134)

殿舎地区における第Ⅲ期の排水溝は、流路系統から、北東部系統(SD6631・SD6632・SD6633・SD7175・SD7152)、北西部系統(SD7189・SD7197)、南部系統(SD6644・SD6667)の3系統にわかれている。南部と北西部系統からは少量の土器しか出土していないのにたいし、北東部系統の溝から比較的多くの土器が出土したので、ここでは3条の溝から出土した土器を一括してとりあつかうことにする。土師器134個体以上で、須恵器は極く少量の杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・甕の小片が認められるにすぎない。ほかに少量の黒色土器がある。それらは平城宮土器VIIにぞくし、平城上皇の平城宮が終る時期に想定される。

土師器 杯A・杯B蓋・皿A・碗A・高杯・盤・壺E・甕がある。食器類では杯Aが30.6%、土師器杯Bが14.1%をしめるなど、食器のなかでしめる割合がたかい。II群土器が殆んどで、c₉手法であるが、c手法でつくったものをヘラ削りしたc手法のものが、杯・碗では多くをしめている。e手法のものは杯Aに1点みられる。

杯A(151)は口径17.5~16.0cmのものが多く、18cm以上は少ない。高さの4.0cmをこえるも杯はない。杯B(157・160・161)には口径24.8~21.8cm、高さ8.7~7.8cmの大型品(160・161)と口径17.2cm、高さ4.1cmの小型品(157)がある。c₉、c₁手法がある。皿A(152~154・158・159)には口径21.4~18.2cmのものと口径16.6~14.4cmの大小2種がある。後者にはf手法が1例(152)ある。e手法を削ったc手法のものは口縁端部が小さく内側に巻き込むんでいる。

碗A(150・155・156)には口径15.9~13.6cmのもの(155・156)と口径10.1cmの小型のもの(156)とがある。高杯には脚部片と杯部片とがあり、脚柱部はb手法のつくりで杯部は外側に粗いヘラ磨きを施している。壺Eは先述のSB8224出土品と同様の小型品である。

黒色土器 杯B・碗A・托・高杯がある。いずれも内黒の黒色土器Aである。杯B(502)は縦釉陶器の椀の形態に酷似する。c₉手法。碗A(503)はc₉手法で、口縁部内面に横方向の密なヘラ磨きを施す。底部内面は一方のヘラ磨きである。托(504)は高台付の皿状の器に、まっすぐ立ち上る口縁部のつく形態で、内面及び受部上面が黒色で、横方向のヘラ磨きをほどこしている。高杯は形態・手法とも土師器と同じである。脚柱部はb手法のつくり方で、7面の面取りをする。杯部内面を黒色処理し、螺旋暗文を施す。

土器	(個体数)	(比率)
杯 A	37	
食 皿 B	17	
蓋	8	
皿 A	48	
皿 B	2	
器 鉢 A	9	
高 杯	7	
盤	1	
		黒色土器
甕 E	1	0.7
甕	12	9.0
甕	134	100%

Tab. 24 SD6631・SD6633・SD7175出土土器の構成

ほかに須恵器杯A・杯B・杯B蓋・鉢D・壺L・甕の小片、黒色土器杯B2・碗A1・托1・高杯1がある

L SD3765出土の土器 (fig. 86)

東外郭の東面築地回廊寄りで南北に流れるSD3765は平城宮造営当初(第I・II期)の基幹排水溝であり、ここから平城宮土器I・IIにぞくする土器のはか、埴輪片が出土している。

土師器には、杯C III 1個体・盤1個体の他、壺の小片がある。杯C III(175)は a₆ 手法で、螺旋・斜放射暗文がある。盤は外面にヘラ磨きを施している。

須恵器には杯A 1個体・杯B 2個体・杯B蓋 2個体・壺B 1個体の他、甕片がある。杯B(407)は低い高台が外方にふんばり、底部は厚い。底部外面はロクロ削りするものとヘラ切りのままのものがある。甕(408)は短い口縁部がほぼ垂直に立ち、肩が張る。蓋とともに焼成された痕跡をとどめる。口径8.4cm。

M SD5505出土の土器 (fig. 86)

東外郭にある基幹排水溝 SD3715 に、東方の第2次大極殿地域から注ぐ東西溝 SD5505 から少量ながら平城宮土器IIIにぞくする土器が発見された。

土師器には、杯A 1個体・杯C III 2個体・皿A I 1個体・甕A 1個体がある。杯Aは螺旋・斜放射・連弧暗文がある。杯C III(176)は a₆・a₁ 手法で、螺旋・斜放射暗文がある。皿A I (177)は a₆ 手法で、螺旋・斜放射暗文がある。

須恵器には、杯B 3個体・杯B蓋 1個体・鉢A 1個体の他、壺の小片がある。杯Bはいずれも底部外面ヘラ切りのままである。底部内面に墨の付着するものが1例ある。鉢A(409)は体部下半をロクロ削りする。口径19cm。甕には胴部片内面に墨の付着するものがある。

N SD3715出土の土器 (PL. 135・136)

第1次大極殿地域と内裏・第2次大極殿地域とを画する南北溝 SD3715 から出土した土器は、量的に多いが保存状態が悪い。完掘していない北方の6AB-B・6ABC区での出土量は少なく、ほとんどは南方の6ABE 区から出土したものである。平城宮土器II～Vまでを含むが、

平城宮土器 IV・V がそのほとんどをしめ、神護景雲2年、宝亀元年(768～770)の紀年木簡が出
出土していることと矛盾しない。¹⁾ 溝の層位は上下2層にわかれるが、その間に遺物の時期差をみ
とめがたい。水流によって層位が攪乱されているのであろう。土器の接合状況からすると、須
恵器壺Aや横板に約78m 離れて接合したものがあり、これら土器の使用地を近接地に必ずし
も比定できない。以下、土器の記述は器種ごとに時期をわけて述べるが、時期別の不確定な土
師器の一部と、須恵器については平城宮土器IV・Vを一括してあつかった。出土土器には土師
器・須恵器・黒色土器、ほかに二彩陶器1点、墨書き土器35点、人面土器1点、刻線文土器1
点、陶鏡7点がある。

土師器(PL.135) 杯A・杯B・杯B蓋・杯X・皿A・皿B・皿B蓋・椀A・椀C・椀X・高
杯・盤・壺A・壺E・壺C・甕がある。食器の杯A・皿A・椀Aが相互に近い割合をもってい
る。点炊具の割合も大きく、甕の存在も注目される。杯A・皿A・椀AではI群土器とII群土
器とはほぼ同量である。

1) SD3715出土の木簡 (p. 98) 参照

4 土 器

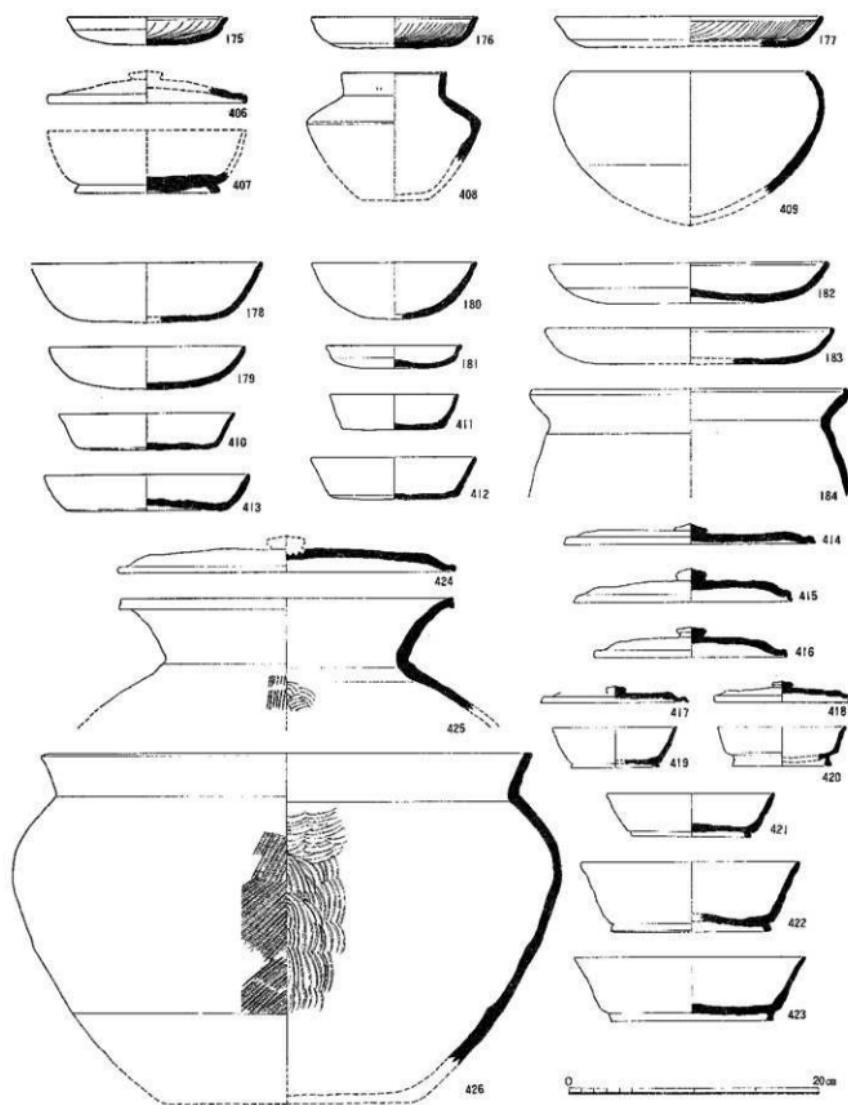


fig. 88 SD5505, SD3765, SK8316 - SK8317・SK8233出土の土器

第四章 造 物

Tab. 25 SD3715出土土器の構成

ほかに黑色土器がある

杯A(185~192) 平城宮土器Ⅲにぞくするものには杯AⅢ(191)がある。 a_6 手法で、螺旋・斜放射暗文がある。平城宮土器ⅣのI群土器には杯A I(185)・A II(190)があり、 a_9 手法のみである。II群土器の杯A I(187)・A II(188)はいずれも c_3 手法である。平城宮土器VのI群土器杯A I(186)は b_9 手法、II群土器杯A I・A II(189)はいずれも c_5 手法である。192は平城宮土器Ⅶにぞくする。 c_6 手法で調整するII群土器である。

杯B(200・201) 平城宮土器IVで、杯B II(200)・B III(201)がある。c₁ 手法で、II群土器。

杯B蓋(198・199) 杯B IV蓋で上面がわずかに凹む扁平なつまみがつく。頂部外面は4回、縁部は6~7回にわけてヘラ磨きを施す。198は内面とつまみ上面に螺旋旋文がある。

杯X(207) 口縁部は内聾気味で、上端がわずかに外反する。口縁端部の巻き込みは小さい。
口縁部上半をよこなでし、それ以下はへら削りし、へら磨きを施す。口径小口、口径21.0cm。

皿A(193~196・202~206) 平城宮土器IIにぞくするものには皿A I(202)がある。a₆手法で、斜放射暗文が残る。平城宮土器IVにぞくするI群土器には、皿A I(203)・A II(193・194)がある。a₆・b₆手法で、皿A IIは口縁部に内傾する面をもつ。II群土器には皿A I(204)がありc₅手法である。平城宮土器VのI群土器にも皿A I(206)・A II(196)があり、a₆・b₆・b₇手法がある。196は口縁端部がわずかに外反し、端部は巻き込まない。II群土器にも皿A I(205)・A II(195)がある。c₆手法で、皿A IIの口縁端部は巻きこまない。

皿B蓋(197) 皿B I蓋で、保存状態は悪いが、外面にヘラ磨きがのこる。

椀A(209~212) 平城宮土器Vで椀A I(209・210)・A II(211・212)がある。c₂手法がほとんどだがc₆手法もみられる。口縁部外側のヘラ磨きは4回わけに施す。灯火器使用(212)が3例ある。I群土器が多い。

椀C(213・214) すべてe手法でつくる。平城宮土器IIIにぞくするもの(214)は体部外側に粘土縫の痕跡をのこす。平城宮土器Vのもの(213)はI群土器である。

椀X(215) ややくぼむ大きい平底で、口縁端部が強く外反する。a₆手法でI群土器である。口径13.2cm、高さ3.6cm。

高杯(216・217) 杯部と脚柱部とがつながるものはない。杯部には螺旋・斜放射暗文を施す。ものと、暗文のないものとがある。後者は粘土縫の痕跡が残る。脚柱部には根部径15.6cm、高さ20.0cmの大型のもの(217)と、根部径11.1cm、高さ14.9cmの小型のもの(216)とがある。両者ともb手法のつくり方で、7~8面の面取りを施す。後者は根部外側に5~6回わけのヘラ磨きを施す。

盤(221) 口縁部外面上部をよこなでし、これ以下は縦方向のハケメを施す。口径34.8cm。他に高台がつく盤Bの破片もある。

壺E(208) 口縁部はよこなでし、体部外側は丁寧な横方向のヘラ磨きを施す。口径8.6cm。

壺C(218~220) 口縁部外側はハケメをよこなで消す。内面は横方向のハケメを施すものが多い。体部外側は縦方向のハケメを施すが、ハケメの後、上部をヘラで削るものもある。体部内面はよこなでするものと不調整のものとがある。外面に漆の付着しているものがある。口径29.0~26.0cm。

竈 小片が4点ある。

須恵器(PL. 136) 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・皿C・椀A・椀B・高杯・鉢A・鉢D・鉢F・壺A蓋・壺B・壺B蓋・壺E・壺G・壺K・壺L・壺N・平瓶・横瓶・壺A・壺B・壺Cがある。構成器種は多様であり、特に壺類の種類が多い。食器では杯Bのほかは量的に少ない。

杯A(427~429) 杯A I・A III・A IVがある。428は底部外側クロ削りで、I~IV群土器にぞくしていない。

杯B(437~440) 杯B I・B II・B III・B IVがある。口径8.9cmの小型のもの(440)もあり、灯火器として使用している。

杯B蓋(433~436) 杯B I・B II・B III・B IV蓋がある。B形態のものが3例あり、II群土器とI~IV群にぞくしないもの(434)とがともに存在している。内面に漆の付着するものが2例ある。

第IV章 陶 物

- 皿C(430) 口径20.0~17.4cmで、焼成が悪く、灰白色を呈する。
- 皿A(441) 口径18.2~15.6cmで底部外面はヘラ切りの上をかるくなれるものがある。
- 皿B(445) 法量のわかるものは1例のみである。皿B Iで、口縁部外面下半から底部外面にかけてロクロ削りする。底部内面は平滑で墨が付着する。I~IV群土器にぞくさず、灰色で磁器質に近く焼きくまっている。
- 皿B蓋(443・444) 皿B II蓋で443は頂部外面をロクロ削りする。皿B (445)と同じくI~IV群にぞくさない一群である。
- 皿C(442) 皿C I (442)・C IIがある。底部外面をヘラ切りのLをかるくなれるものがある。
- 碗A(447) 底部外面はロクロ削りする。ほかに高台をもつ碗Bの小片もある。
- 高杯 いずれも脚部の小片であるが、三方透しをあけるものが1例ある。
- 鉢A(446) 口縁端部は外傾する面をもつ。外面は幅の細い横方向のロクロ削りを行なう。
- 口径23.2cm。このほかに口径31.0cmの大型のものがある。
- 鉢D(454) 体部外面はロクロ削りする。口径17.8cm。
- 鉢F(452) 口縁部下半から底部にかけての破片である。底部外面に焼成前の小さな刺突痕が、目立つていて。
- 壺蓋(431・432) 壺A蓋(432)には頂部ヘラ切りのままで縁部との境をロクロ削りするもの、ロクロ削りしてなでを加えるものがある。口径17.6~15.8cm、高さ3.7cm。壺N(双耳壺)蓋(431)は口径7.3cmで、縁部が約3.5cmと長い。縁端の部分は丸くおさめている。外面には自然釉がかかっている。
- 壺B(455) 体部は丸く、肩は張らない。外面には暗緑色の自然釉がかかる。口径12.0cm。
- 壺E(450) 底部はヘラ切りのままである。口径10.8cm、高さ6.1cm。
- 壺G(448) 体部下半はロクロ削り。底部外面は磨滅で不明。口径5.4cm、高さ18.0cm。
- 壺K(451) 体部外面はロクロ削りしたち、ロクロなです。肩部には自然釉がかかる。
- 壺N(456) 体部外面下半部と耳下方部分とはロクロ削りする。
- 平瓶(449) 口部と把手を火いている。肩の径7.7cm、復原高4.9cmの小型品である。水滴に用いたものか(PL. 137)。
- 横版 体部外面は平行叩き目、内面には当て板の同心円文がのこる。長径35.0cm。
- 甕A(453) 丸い体部外面は平行叩き目を施す。内面には当て板の同心円文をとどめる。口径21.0cm。甕B、甕Cは小片である。
- 黒色土器(PL. 135) 甕A(508)がある。508は黒色土器Bで短く外反する口縁部と丸い体部とからなる。体部外面は丁寧なヘラ磨きを施し、内面はヘラ削りする。外面のヘラ磨きが口縁部の一部におよんでいる。口径18.2cm。

O SK3784出土の土器 (fig. 87)

第II期の南面築地回廊の南に位置する東西に長い不整形な土塼SK3784は、築地回廊の築成土を採るために掘ったものようである。その埋土から出土した土器は第II期遺構の開始時期をあらわしているものとみられる。

土師器28個体以上、須恵器30個体以上で、量的には等量の傾向をしめす。土器の年代は平城宮土器IVにぞくし、平城宮土器IIIの特徴をもつ少量の土器をまじえている。

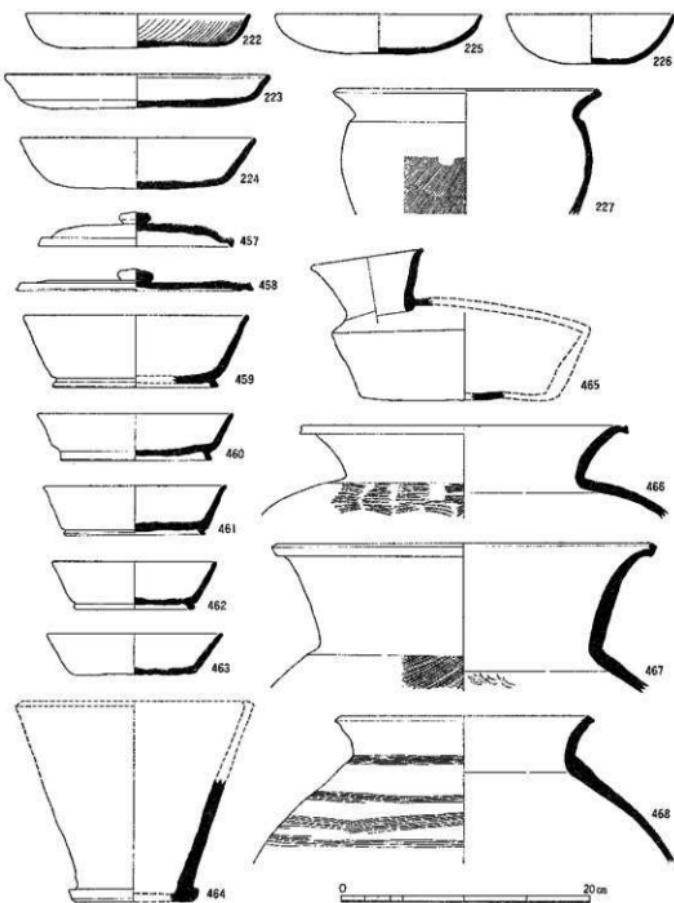


fig. 87 SK3784出土の土器

上部器には杯A I(224)・杯B蓋・皿A・椀A II(226)・椀C・高杯・盤・甕A(227)・取手付土器
大型蓋・甕がある。皿A(222・223・225)には皿A I(223)・A II(225)がある。222は平城宮土器
IIIにぞくし、a_o手法で斜放射暗文がのこる。灯火器として使用したもののが、皿A IIのうち2
例、椀A IIのうち2例ある。

須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・鉢A・鉢F(464)・盤・甕A蓋・壺L・平版・甕A・甕X・須惠器
がある。杯Aには杯A IIIで灯火器として使用したもの1例(463)がある。杯B(459~462)には、
杯B II(459)・B III(460~462)がある。B IIはやや口径にぼらつきがある。杯B IIの底部外面に

第IV章 遺 物

墨の付着するもの 1 例(460)がある。

杯 B 蓋 杯 B 蓋(457・458)には杯 B I ~ IV 蓋がある。B 形態は 1 例である。内面に墨の付着するものは 3 例である。

平瓶(465)は、高台をともなうものとともなわないものがある。465 は頸部から頂部にかけて自然釉がかかる。甕 A(466~468)には外方に開く長い頸部が口縁端部で強く外反し、端部が内側に折り返されたもの(466・467)と、短い頸部が外反気味に開き口縁部端面が外傾するもの(468)がある。466 は体部外面に横平行叩き目、内面は当て板痕跡を

土 器 器	個体数	比率	須 惠 器	個体数	比率
杯 A	3		杯 A	4	
(食) 杯 B 蓋	2		(食) 杯 B (身)	9	
皿 A	7		蓋	10	
椀 A	4 (21)	75.0	鉢 A	1	60.0
椀 C	2		鉢 F	1	
器 高杯	1		盤 A	2	
盤 A	2		甕 A 蓋	2	
(蓋) 瓢 A	5	6	甕 L	1	
甕	1	21.4	平瓶	2	40.0
その他 大型蓋	1	0.6	甕 A	6	
計	28	100%	甕 X	1	
			計	30	100%

Tab. 26 SK3784 出土土器の構成
なで消している。468 は外面に自然釉がかかり、頸部以下脇部にかけてロクロ回転を利用しない繰描き平行線が施されている。甕にはこのほか、平底になる形態の甕 X が 1 例ある。

P SK8316 • SK8317 • SK8233 出土の土器 (fig. 86)

東外郭の北部(6ABC区)には、第Ⅱ期建物SB8240・SH8320、第Ⅲ期建物SB8234・SB8315・SB8325などがあり、周辺にいくつかの土塗がある。出土した土器は少く、保存状態もよくない。ここでとりあげる土塗 SK8316・SK8317・SK8233 から出土した土器は、いずれも平城宮土器Vにぞくしており、第Ⅱ期の遺構であることが推測される。これらの土塗からは、土器286個体、須恵器 211 個体が出土している。食器類では土器皿 A と須恵器杯 B のしめる割合が大きい。土器皿には I 群土器と II 群土器があり、前者が多い。

SK8317 土器器187個体以上、須恵器119個体以上が出土した。

土器皿には杯 A・杯 B・杯 B 蓋・皿 A・椀 A(180)・高杯・盤・甕 A・甕 B・甕 C(184)がある。杯 A(178)は杯 A I で I 群土器は b₀ 手法、II 群土器(179)は c₀ 手法である。皿 A(181~183)は皿 A I(182・183)・A III・A III(181)がある。I 群土器には a₀・b₀ 手法がある。181は灯火器に用いたものである。椀 A にも灯火器が 1 例ある。

須恵器には杯 A・杯 B・杯 B 蓋・杯 C・皿 A・皿 B・皿 B 蓋・皿 C・盤・甕 E・淨瓶・甕 A・甕 B・甕 C がある。杯 A(410・411)には杯 A III(410)・A IV(411)がある。底部外面をロクロ削りするものは 1 例である。杯 B 蓋(414・415・417)には杯 B I・B II・B III・B IV 蓋がある。頂部外面をロクロ削りするものは 3 例である。甕 C(426)は体部外面に平行叩き目を施し、内面には当て板同心円文がある。体部外面下半はロクロ削りを施す。

SK8316 土器器70個体以上、須恵器73個体以上が出土した。

土器皿には、杯 A・杯 B・皿 A・椀 A I(179)・高杯・盤・甕 A がある。

須恵器には、杯 A・杯 B・杯 B 蓋・皿 B・皿 C・盤・甕 E・甕 L・甕 M・甕 A・甕 C がある。杯 B(419~423)には杯 B I(422・423)・B III(421)・B IV(419・420)がある。419・

4 土 器

土器器	(個体数)	(比率)	須恵器	(個体数)	(比率)
杯 A	5		杯 A	6	8.2
食杯 B	5		食杯 B	24	67.1
杯 C	1		食杯 B蓋	49	37.6
皿 A	34	53	皿 B	3	4.1
碗 A	4		皿 C	2	2.8
器高杯	3		盤	4	5.4
盤	1				
煮炊具	17	24.3			
計	70	100%			
	土器器 須恵器 計				
(食器)	53 (45.3) (37.1%)	64 (54.7) (44.8%)	117 (81.9%)		
(貯蔵器)	0	9 (6.3)	9 (6.3)		
(煮炊具)	17 (11.9)	0	17 (11.9)		
計	70 (49.0)	73 (51.0)	143 (100%)		

Tab. 28 SK8316出土土器の構成

土器器	(個体数)	(比率)	須恵器	(個体数)	(比率)
杯 A	18		杯 A	23	
食杯 B	3		食杯 B	22	
食杯 B蓋	3		食杯 B蓋	71	
杯 C	16		杯 C	7	
皿 A	66	159	皿 A	113	95.0
碗 A	49		皿 B	1	
器盤	3		皿 B蓋	1	
高杯	4		皿 C	6	
盤	1		盤	3	
煮炊具	28	15.0			
計	187	100%			
	土器器 須恵器 計				
食器	159 (58.5) (52.1%)	113 (41.5) (36.9%)	272 (89.0%)		
貯蔵器	0	6 (1.9)	6 (1.9)		
煮炊具	28 (9.1)	0	28 (9.1)		
計	187 (612)	119 (38.8)	306 (100%)		

Tab. 28 SK8317出土土器の構成

第IV章 遺物

422は底部外面にロクロなでを施す。杯B蓋(416・418)には杯BⅢ・BⅣ蓋がある。416は頂部外面にロクロなでを施す。

SK8233 土師器29個体・須恵器19個体以上が出土した。土師器には杯A・皿A・碗A・高杯・甕があり、須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿B蓋(424)・壺蓋・甕A(425)がある。

Q SK3730出土の土器 (fig. 88)

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯 A	5	杯 A	2
食杯 C	1	食 皿杯 B	13
皿 A	14	身 蓋	13
器碗 A	4	皿B蓋	1
高杯	1	甕蓋	1
蓋	4	壺蓋 A	2
甕	計	計	19
	29		

Tab. 29 SK8233出土土器の構成

東外郭の6ABE-K 地区にある方形土塼 SK3730 から、土師器39個体以上、須恵器34個体以上が出土した。平城宮土器Vにぞくするが、一部に平城宮土器IVをふくむ。

土師器には杯A・杯B蓋・皿A・碗A・碗C・高杯・甕A・甕B・釣釜がある。杯A(228)は杯A Iで b_5 手法、皿A (230・231) は皿A Iで a_6 ・ b_5 ・ c_6 がある。碗Aには平城宮土器IVの碗A I(229)・A II、平城宮土器Vの碗A II(232)がある。いずれも I 群土器で c_3 手法である。碗C (233) は II 群土器である。甕A(234)は体部外面に縱方向、口縁部内面には横位のハケメを施す。口径28.6cm。甕B(235)の小さい三角形の把手上端は体部に接している。体部外面に鉛方向のハケメ・口縁部内面に横方向のハケメを施す。釣釜は柄部片がのこる。釣の幅6.2cmで、上面にはハケメを施し、下面はなでる。粘土縫の接合痕跡がのこる。煤の付着はない。

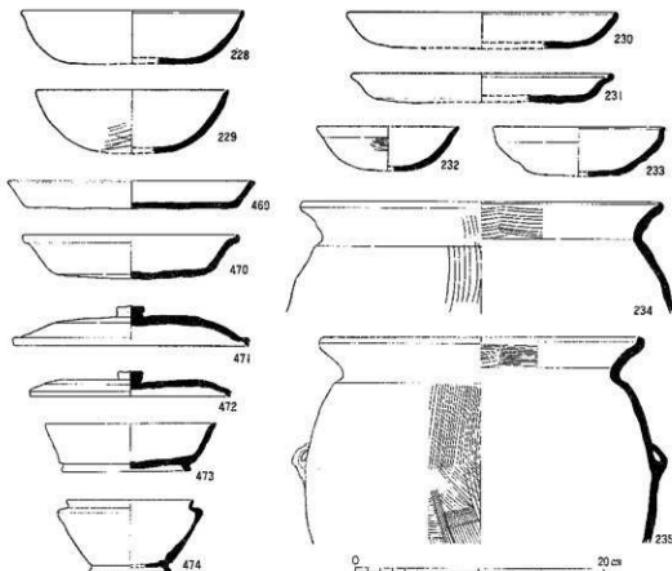


fig. 88 SK3730出土土器

4 土器

須恵器には杯A・杯B(473)・杯B蓋・杯C・皿C・壺E・壺がある。杯Bは、杯BⅢ・BⅤがある。杯B蓋(471・472)には杯BⅡ・BⅢ・BⅣ蓋がある。内面に墨の付着するもの(472)が3例ある。B形態で、I～IV群土器にぞくさないものもある。杯C(470)は焼成が悪いものが多い。底部外面はヘラ切りあと、ナダをくわえている。皿C(469)は皿C Iで焼成が悪い。壺E(474)は口径10.2cm、高さ5.9cm。

土師器	個体数	須恵器	個体数
杯 A	4	杯 A	2
(食) 杯B蓋	1	(食) 杯B (身 6) 蓋 17	
皿 A	7	皿 C	2
碗 A	14	碗 C	9
碗 C	2	高杯	-
高杯	3	(食) 皿 E	2
(食) 壺 A	7	高杯	2
高蓋	1		
		計	34
	計		
	39		

R 特殊土器類

Tab. 20 SK3730出土土器の構成

i 施釉陶器 (PL. 137, fig. 89)

三彩陶器・二彩陶器・綠釉陶器・灰釉陶器・褐釉陶器が少量ながら出土した。これらの出土地点をみると、三彩・二彩陶器は7点のうち5点が回廊内で発見され、そのほかはSD3715とその周辺の包含層からの出土である。前者のうち3点は最寄地区から出土した。綠釉陶器はSA109周辺の回廊地区で10点、回廊内で4点・回廊外で5点出土した (Tab. 31)。

三彩陶器 鉢Aが4点ある。遺構とともにうものはSK3787・SB8245各1点である。いずれも三彩鉢胎上は軟質で黄灰色を呈する。外面・口縁部内面には緑・褐・白釉、体部内面には白色釉を施す。6ABP-B地区出土例(PL. 137)は、比較的保存状況が良い。口縁端部の内傾する面は緑釉である。褐釉は線状にかかり、下方にたれてわずかにありあがる。体部内面は白釉だが、緑色と褐色がまざっている。全面に細かい貫入がある。体部下半にはロクロ削りがみとめられる。正倉院にこれと類似した彩色構成のものがある。口径27.4cm。

二彩陶器 3点あるがいずれも小片で器種は不明である。1点はSD3715から出土、外面に緑・白釉を施している。

綠釉陶器 19点あるが小片が多い。碗・耳皿・蓋がある。遺構とともにうものとしてはSA 緑釉碗109から5点、SK8079から3点、SB8224・SK3756・SD5530・SK8084から各1点出土した。焼成が軟質で黄褐色を呈するものの(軟陶)と、硬質で灰色のもの(硬陶)とがあり、後者がほとんどで前者は4例である。碗・皿には高台を削り出したものと、付高台のものとがある。28は輪花がつく皿で、口縁端部は強く外反し、断面台形の付高台をもつ。口縁部内面下半には5個所に隆起する輪粒形の輪花をつけ、その延長上の口縁端部にも小さい輪花をきざみこむ。口縁部外面には、内面の輪花の位置にヘラで縱方向の刻み目をついている。底部内面には釉の下に重ね焼の痕跡があり、二度焼きをしたことがわかる。口径17cm、高さ2.1cm。11は口縁部外面上部に稜があり、底部が厚い皿である。口径14.3cm、高さ1.9cm。耳皿13は胎土軟質で赤味がかった褐色である。

灰釉陶器 遺物包含層から出土した碗(29)と淨瓶の小片がある。

褐釉陶器 22は口縁部はやや内輪気味に垂直に近く立ち、底部は高台がつくとおもわれる碗である。内面及び口縁部外面下半まで暗褐色の釉がかかる。胎土は褐灰色で硬質である。中国製陶器の可能性がある。時期は奈良時代よりも下る。口径10.8cm。SB7802付近出土。

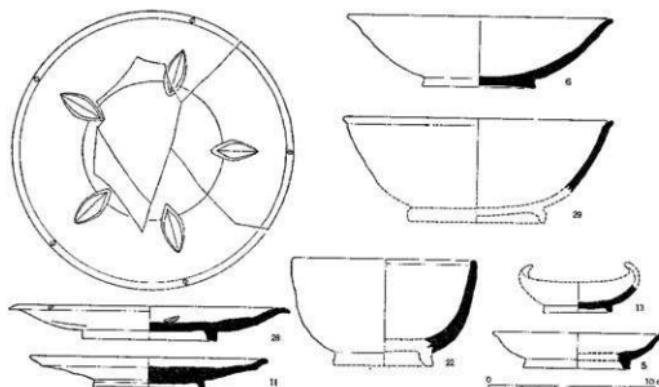


fig. 89 施釉陶器尖測図

番号	(出土遺構)	(種類)	(期)	(器種)	番号	(出土地点)	(種類)	(期)	(器種)
1	SB8224	綠釉	(BE)	皿	16	6ABR-K	二 彩	不明	
2	SB8245	三 彩	鉢 A		17	"	綠釉 (軟)	"	
3	SA109	綠釉	(硬)	椀	18	6ABE-M	灰 級	淨瓶	
4	"	"	"		19	6ABD-D	綠釉 (硬)	椀	
5	"	"		杯 B	20	6ABO-P	"		皿
6	"	"		椀	21	6ABR-G	三 彩	鉢 A	
7	"	"		椀	22	6ABR-H	褐 級	椀	
8	SK3756	綠釉 (軟)		蓋	23	6ABP-A	二 彩	不明	
9	SK3787	三 彩	鉢 A		24	"	綠釉 (硬)	椀	
10	SK8084	綠釉 (硬)		椀	25	"	綠釉 (軟)	"	
11	SK8079	"		皿	26	6ABP-B	三 彩	鉢 A	
12	"	"		椀	27	6ABC-U	綠釉 (硬)	椀	
13	"	綠釉 (軟)		耳 皿	28	"	"		輪花皿
14	SD3715	二 彩	不明		29	"	灰 級	椀	
15	SD5530	綠釉 (硬)		皿					

Tab. 31 施釉陶器の出土地点 地区名で出土地点を表すものは遺物包含層からの出土である

ii 墨青土器・墨画土器 (PL. 138・Tab. 32)

墨青土器 50点あるが、そのうち遺構にともなうものはSD3715から35点・SB7802から5点、SD5505、SD5564、SD6667、SK8317、SK3730から各1点がある。これらのうち判読できるものは24点である。

墨画土器 22は土師器皿A Iの底部外面に、細い線で鳥を描く。首の長い水鳥で水面にうか水鳥ふ柄図である。この上方に空を飛ぶ一羽の尾部がのこる。

4 土器

(番号)	(遺構出土地点)	(記 事)	(書 法)	(器種と部位)		(時 期)
1	SB7802	口市 易カ	墨 書	須恵器	杯I蓋	頂外 平城宮土器 IV
2	"	主	"	"	甕B	体外
3	"	口城口	"	"	甕	底外
4	"	口東口口	"	"	甕B I	"
5	"	内	刻 印	"	甕C I	口外
6	SK8317	大膳	墨 書	"	甕A III	底外 V
7	SK3730	口月 切	"	土師器	甕か皿	"
8	SD8715	山	"	須恵器	甕B II	"
9	"	考	"	"	甕A III	" V
10	"	少持	"	"	甕B II蓋	頂内
11	"	二	"	"	甕A	底外
12	"	範子	"	"	甕B III	"
13	"	大口	"	"	甕B III蓋	頂内
14	"	出 口 墨カ	"	"	甕B蓋	頂外
15	"	署 カ	"	"	甕B III蓋	"
16	"	山 カ	"	"	甕A	底外
17	"	口	"	"	甕B IV蓋	頂外
18	"	五月	"	土師器	甕か皿	底外
19	"	國	"	"	"	"
20	"	気口白 カカ	"	"	碗A	口外 V
21	"	口 桑カ	"	"	甕A II	底外
22	"	鳥の鉢	墨 書	"	甕A I	" IV
23	"	×	刻線文	"	碗A II	" V
24	SD5505	三月十日	墨 書	"	甕	体外
25	SD6667	記号カ	"	須恵器	甕A III	口内外
26	SD5564	雨	"	土師器	甕B 盖	頂内
27	6ABE-K区	口一合	"	須恵器	甕B IV蓋	頂外
28	6ABP-A区	キ	梵描き	"	甕B II蓋	頂内
29	6ABE-K区	#	刻線文	"	甕B I	底外
30	SK8118	菜	墨 書	土師器	甕か皿	底外

Tab. 32 墨書・墨画・梵書・刻線文・刻印土器一覧

iii. 簄書・刻線文土器・刻印土器 (PL. 138・Tab. 32)

梵描きの28「キ」は土器焼成前に刻んだもので、刻線文29「#」・23「×」は焼成後に針のようなもので刻む。

5の刻印「内」は縦1.2cm, 1.8cmの印面に、約3mm幅で内を書く。類例は6ALR区SD 印9620(第128次調査)にある。その場合は土師器盤の口縁部に押捺され、5の書体ときわめてよく似ている。他の例は「内」印の焼印であり、6ALG区 SD5788(第44次調査)から出土した曲物底板におされている。

平城宮出土の刻印土器としては、上記の例をのぞくほかはすべて須恵器で、3種11例が判明

している。「内」のほかには「宮」「美濃」があり、それらはともに生乾き段階で押捺したものである。「美濃」は岐阜市芥見老削1号窯から出土した土器に印されており¹⁾、窓元を示すことが判明している。それに対し、「内」「宮」は使用場所をしめすらしい。というのは、刻印のほかに一字の墨書きも存在するからである。それらの分布状況をみると、SB7802の「内」と6ADC-L区(第52次調査、馬鹿推定地)から出土した墨書き「宮」をのぞくほかは、すべて東院地区に集中している。つまり「内」を仮りに官司名とすれば、東院にあった可能性が高いのである。

内のつく官司はいろいろあるが、食器の官とすれば「内膳司」に比定するのが無難であろう。官については莫然としているため、特定官司名をきめがたい。刻印が窓元で押捺されている点については、一種の注文生産品として生産したことをしめしている。

6の「大膳」は大膳職の意味であろう。第II期に北面築地回廊外に成立する大膳職から運ばれてきたものとかんがえたい。

iv. 人面土器 (PL. 138)

土師器壺A (口径27.2cm) の体部外間に大きく顔面を描く。目、鼻、口の部分が欠けているが、目の一部、眉、頬のしわ、耳、口ひげ、もみあげがのがびと描かれている。SD3715出土。

一般的にみて、人面土器の器形は、奈良時代には壺Bの形態をとる。壺Bは人面を描くため人面専用土器^器につくられた土師器である。すなわち、楕形ないしは皿形の型に内側から粘土をつめて底部をつくり、型をつけたままそのうえに粘土紐を巻上げて体部をつくる。調整は口縁部内外だけをヨコナデ^トとし、胴部には粗雑なナデを行なうにとどまる例が多い。このような人面土器用土器の出現は平城宮土器Ⅲの段階に想定されている。人面土器祭祀の定形化と普遍化に対応しているのであろう。

SD3715出土の本例は、日常用の壺と器形・調整手法とも変わらない。また、平城宮土器Ⅱに遡るところがあるので、人面土器祭祀の定式化する以前のものであろう。

v 底部穿孔土器 (PL. 137)

土師器壺A (Co手法) の底部に直徑5mmの円孔を多数、焼成前に外面からあけたものである。穿孔は11列で、約1.5~2cmの間隔である。1列の数は直徑部分10個、側端で6個で、總数85前後で、概に數くすのこの可能性がある。口径19.4cm、高さ2.3cm。SD7177出土。

vi 陶 瓦 (PL. 137, fig. 90)

円面瓦 67から各1点が出土した。合付円面瓦には圓足瓦と蹲形瓦とがある。圓足瓦には窓部の径が7.6cmのものから18.6cmのものまで各種ある。陸と海との区別が明確で、高い外縁をめぐらし、脚部に長方形の透しを多数もつものが多い。外縁外面下端には一条の突帯がある。陸の周囲に内縁をもつものもある。また外縁外面に波状文をめぐらせるものもある (Tab. 33)。

1) 岐阜市教育委員会『老洞古窯群発掘調査報告書』1981

2) 平城京左京八条三坊 SD1155、九条大路北側
溝 SD01で確認されている。前者については、

奈良国立文化財研究所編『平城京左京八条三坊発掘調査報告』1976 p.36。後者については同研究所編『平城京九路一界道城廻り線予定地発掘調査報告』1981 p.24。

(番号)(種類)(口径)(高さ)(出土地点)

1	蹄脚硯	28.8cm	8.1cm	SB7802
2	圓足硯	—	—	SD3715
3	"	16.8	—	"
4	"	—	—	"
5	"	(29.6)	11cm 以上	"
6	"	—	—	"
7	"	—	—	"
8	蹄脚硯 (30.0)	—	—	"
9	圓足硯	—	—	SD5607
10	蹄脚硯	—	—	SD6667
11	圓足硯	14.8cm	—	6ABE-K
12	"	18.6cm	8.2cm	"
13	"	17.0cm	—	"
14	蹄脚硯	—	—	"
15	"	—	—	"
16	圓足硯	13.0	—	6ABE-M
17	"	14.4	—	6ABO-E
18	"	7.6	—	6ABO-P
19	風字硯	—	—	6ABO-E
20	圓足硯	—	—	6ABC-U

Tab. 33 磨硯の出土地点 ()は底径

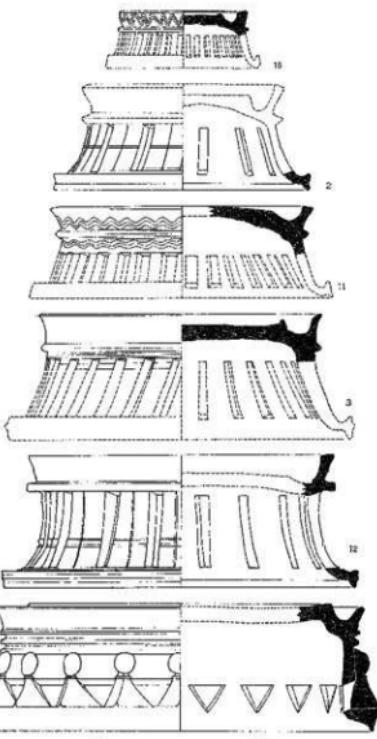


fig. 33 磨硯実測図

蹄脚硯は、硯部と脚部、台部基底を別個につくって接合するもの(蹄脚硯A)と、硯部と脚部とを連続してつくるもの(蹄脚硯B)の2種がある。うち、1は口径が30cmに近い大型に復原でき、内裏北方官衙出土のものと類似している。¹⁾

風字硯は小片であるが、中央に縦方向の堤をつくり、二面硯に分かっている。

vii 土馬 (PL. 137)

6ABP区から5点出土したが、いずれも小片である。G区の土塹から出土した土馬は、頭部と頸部に竹管文を施す珍らしい例(1)。SK8212からは大量の土器に混って脚部の破片が2点出土した。他の2点はA区の包含層から出土したもので、頭部片(2)と脚部片である。頭部と足部の状況からすれば、いずれも奈良時代後半の形式にぞくしている。²⁾

1) 『平城宮報告Ⅵ』p. 101

2) 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』25

viii 土 錘 (PL. 137)

SX7802 から 14 点の土錘が出土した。いずれも鉈頭形であるが、断面は正円でなく、やや平らな一面をもつ。長さ 5.1~6.6cm、最大径 1.8~2.3cm で、中心に 5mm 前後の円孔が通る。胎土は軟質で赤褐色を呈する。外面は磨滅が著しい。この他、SD5530、6ABO-P 地区、6ABP-B 地区、6ABE-K 地区から各 1 点が出土している。

S SX7800 出土の埴輪ほか (PL. 139)

SX7800 から 形象埴輪・円筒埴輪が出土した。本来の位置で検出したものではなく、周溝上層の整地および古墳周辺の整地土から出土したものである。周溝内から出土した埴輪の大半は胎土・焼成・調整手法のうえで共通性をもち、同一時期に当該古墳に使用されたものとみられる。しかし、円筒埴輪のなかには法量・胎土・焼成・調整のうえで明らかに異質の小片が小量ふくまれており、造営時の整地土とともに他地域から混入したものとおもわれる。それらについては、小片であることから説明をばく。

蓋形埴輪 (4・5・6) 3 個体出土。笠部、四方飾板の破片である。6 は笠部の縁辺部の破片で
きぬがさ 側縁をヘラ描きによって縁取りし、3 条 1 組の継線で区画する。4 は同一個体と想定される破片から復原したもの。受皿の中心に小粘塊を団子状に積み重ねて芯にし、そこに圓状の飾板を十字形に貼りつけている。四方飾板の上下には小粘土帶を貼りつけ、飾状の飾りをつくる。板の各面をヘラ削りで調整したのち、ヘラ描き文様をいれる。すなわち、弧線で縁取りし、中央部に曲長方形を描き、2 条 1 組の継線で 3 分割し、外側の 2 区画に長方形の透孔をあける。胎土は黄白色で砂をほとんどふくまず、黒斑をとどめるものはない。全面に赤色顔料をぬっている。5 も同様の四方飾板だが、飾板の両面と受皿の口縁部外面をハケで調整したのちに、ヘラ描き文様をいれる点が異なる。全面に赤色顔料をぬったあとがある。

盾形埴輪 (7) 同一個体とおもわれる破片から合成した。円筒部の前面に板状の盾の形をたてあらわす。円筒部と左右側板の間隙に粘土をつめ、さらに側縁を補強するために横位の粘土紐を貼りたしている。円筒部はほとんど欠損して全容をうかがえないが、この粘土紐が円筒部の突帯につらなるとおもわれることから、盾部の背後の円筒部には 2 条の突帯がめぐっていたらしい。盾部前面および側端面はヘラ削りで調整し、背面は指でナデている。前面にヘラ描き文様をいれる。周縁部上面・側面を 2 条 1 組のヘラ描き継線で、下面は 3 本線で縁取りし、横位の線で上・中・下に区画し中央画はさらに継線で 3 区画にわける。上・下の区画にはそれぞれ 5 個の複合筆曲文をいれ、中央区画の左右脇区に 3 個の綾杉文を配する。明黄灰色で砂の少ない胎土であり、黒斑はない、外面に赤色顔料をぬっている。

円筒埴輪 (1) 全体を復原しうるものはない。胎土には明黄灰色で砂の少ない粘土を用い、黒斑はない。口縁部と最上段の突帯近くの破片で、突帯直下に円形の透孔をあけている。口縁端部はわずかに外反する。突帯の断面は矩形を呈する。口縁部付近はヨコナデ調整。外面は綾

1) 円筒埴輪・朝鮮形埴輪の部分名稱は「平城宮」
 報告書 VI p. 114注にしたがう。

2) 平城宮東礎集廻下層出土の盾形埴輪を参考に
 して復原した。

方向のハケ目のうち、B種のヨコハケをほどこす。内面はヨコハケ目である。¹⁾

朝顔形埴輪(2・3) 2は口縁部を欠損するが基底部から頸部まで残存する。3段からなる円筒部と狭く曲率の強い肩部とそこから立上る頸部とからなる。肩部と頸部との境には突帯がめぐる。円筒部第3段目には、斜め方向のヘラ搔き沈線文が施され、第3突帯直下に2個の不整形の円形透孔をあけている。巻上げ成形で、第2段・第3段・肩部と円筒部の境、肩部と頸部との境に巻上げの単位がみとめられる。円筒部および肩部の外表面はタテハケ目のうち、B種ヨコハケで調整している。このヨコハケの工具は突帯間隔よりもせまいものである。頸部外表面はタテハケ目である。内面は頸部近辺までハケ目であるが、それ以下は指でナデの調整を行っている。外表面の調整後に突帯を貼りつけ、ヨコナデで調整する。第1突帯は断面を矩形にするが、他は端面がわずかにくぼんでいる。

3は2と同様の胎土だが、頸部の径が大きく大型品である口縁部および頸部内面はヨコナデし、それ以下は指でナデる。口縁部外表面は斜め方向のハケ目で調整。

SX8700出土の埴輪は、B種ヨコハケで調整し、黒斑がみられないことから、窯窓で焼成したものとみられる。近辺で類似の埴輪を樹立した古墳を求めるとき、平塚2号墳がある。²⁾

須恵器 6ABR-H区の古墳時代の小ピットから光形の須恵器の杯身2点が出土している須恵器(fig. 91)。1は、口径10.0cm、器高4.8cm、2は、口径10.1cm、器高4.9cmを測る。いずれも底部をロクロヘラ削りで調整する。2の底部から体部には、焼成後に施された数条の細い沈線が認められる。

このほかに古墳時代の遺物として、6ABC-V区から、馬形の顔面とおもわれる形象埴輪の破片が1点出土している。

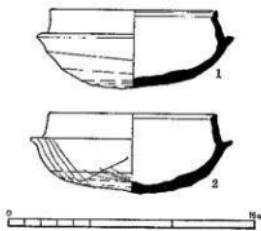


fig. 91 古墳時代須恵器

1) 川西宏幸のヨコハケ手法の分類によつてい
る。川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』

64-2 p. 77-88
2) 「平城宮報告VI」 p. 123-125, PL. 109

5 木製品

木製品は溝SD3715(6ABS, 6ABD区), SD3765(6ABS-P地区), SD3784(6ABR-P地区), SD5505(6ABE-M地区), SD5564(6ABE-M地区), 上業SK3730(6ABE-K地区), SK5535(6ABE-P地区), 墓SA3777の柱彫頭(6ABE-K地区), 建物SB7802の柱抜取痕跡(6ABR-H地区). 井戸SE9210(6ABQ-A地区)から出土した。そのうちSB7802とSD3715からは多数の木製品を検出したが、他の遺構では数点の出土にとどまる。以下遺構ごとに木製品をのべよう。

A SB7802出土の木製品 (PL. 140~143)

東棲SB7802の柱抜取痕跡の埋土から92点あまりの木製品が発見された。それらには祭祀具, 服飾具, 食器具, 工具などに分類できるものほか, 各々の加工をほどこした木製品をふくむ。ほかに建築部材があるが, それについては部材の項で述べた。木製品は16個の柱抜取痕跡のうち, 11個から出土したものだが, 柱穴によって出土量の多寡がある。

i 祭祀具 (PL. 140)

a 人形(1・2) 1は切り込みをいれて頭・胴・腕・脚をあらわすが, 表裏に墨書きした痕跡はない。両面に削りの調整を行ない, 頭部を主頭にかたどり, 腕を削り込み股のえぐりをいれる。ただし, いまは胴以下の半身と刀身状の脚部の先端を欠いている。ヒノキ板日材。長さ17.5cm, 幅2.2cm, 厚さ0.3cm。2も同じような形をとるほぼ完形品である。頭部に被り物と両耳を切りぬく点が1とことなる。頭部に横頭・耳・肩・眼・鼻・頸尾を墨で描き, 胴と腕との間に左右とも3~4本の墨線をひき, その下部に脇と陰毛を描く。両脚にまたがる部分に文字の痕跡がある。これは設を切りぬくまえに書いたもので, 欠失部があるが, 「複」の異体字である「複」に読みなくもない。反対の面には横頭の後姿を墨書きするにとどまる。ヒノキ板日材。長さ15.7cm, 幅2.7cm, 頭部の厚さ0.5~0.4cm, 脚部の厚さ0.3cm。2の頭部が写実的であるのに対して, 脚以下の描写が簡略なことからすれば裸形をあらわすものとみられる。使用時には紙や布の衣服をさせたのであろうか。

b 鳥形(3~4) 3は小さな薄板で鳥の頭をかたどったもの。両面に嘴・目・頭部の羽毛を墨書きする。猛禽の類であろう。長方形の頭以下に墨度を欠くので, この部分を, 別材でつくる胴体に差込むであろう。ヒノキ斜柆材。長さ5.8cm, 幅1.4cm, 厚さ0.2~0.1cm。4は鳥の側面形をかたどる。尾部は欠損している。小片で必ずしも鳥とはいえないかもしれないが, 一応この項にいれておく。ヒノキ板日材。長さ4.8cm, 幅1.1cm, 厚さ0.2~0.1cm。

c 刀形(5~8) 5は細板の一端を刀形につくる。柄と刀身の区別は不明瞭で, 刀先は両面から削り込んで鋭利である。ヒノキ柆材。長さ13.1cm, 幅0.9cm, 厚さ0.3~0.2cm。6は柄と刀身を区別する。刀身部は柄よりも薄く, 切先に向って先細りとなり鉄刀子の形を忠実に

1) 木製品の寸法はとくに説明しない限り, () は被損状態での残存値, [] は推定復原値をあらわす。材種の同定は光谷哲実の鑑定によった。

5 木製品

横している。ヒノキ板目材。長さ12.8cm, 幅1.0cm, 柄の厚さ0.2cm。7は割り裂き面をとどめる粗製品で、柄と刀身の区別もなく刃の削りかたも粗い。スギ板目材。長さ13.1cm, 幅1.2cm, 厚さ0.3cm。8も粗製品で、片面から削って刃をつけたもの。柄と刀身の区別がなく、両端を欠損している。ヒノキ板目材。長さ(12.8cm), 幅1.4cm, 厚さ0.5cm。

d 鐵形(9) 9は断面が凸レンズ状の先細りの身部に断面半円形の細長い茎を削りだしたやじりがたもので、両端を欠いている。鐵をかたどったものかとおもわれる。ヒノキ板目材。長さ(10.1cm), 幅1.1cm。

ii 服飾具(PL. 140)

a 桧扇(10, 11) 10は薄割り板で仕上げた白木の桧扇。4枚分の骨がある。先端を斜めにひおうぎ裁ちおとし、4枚をならべると先端はほぼ弧形に連続する。下半部は握柄に幅を狭め、下端を直線に裁ち両角をおとし、その上方に要孔をあける。4枚とも下端から同じ長さの上半部に1対の小円孔をあけ綴目とする。ヒノキ糸柾材。長さ30.4cm~24.8cm, 上部幅30cm, 下部幅1.8cm, 厚さ0.16~0.11cm。さきに出土したSK820の完形品によると、桧扇は中央の一枚をはさんで左右に長さを減じる5枚の骨をおくが、綴目からすると最短の一枚は端骨にあたり、SK820の例のように11枚の骨を想定することが可能である。11は要孔をとどめる桧扇下半部の残欠。10よりも厚手である。長さ11.6cm, 幅2.1cm, 厚さ0.18cm。

b 横櫛 小片で腐蝕が著しく、歯を欠落している。背は直線を呈し、断面はわずかに丸味をおびた平面に近い形態をとる。カナメモチ板目材。長さ(6.5cm), 幅(1.7cm), 厚さ0.7cm。

iii 食膳具(PL. 141)

a 匙(12) 細い丸棒状の柄と中央の広んだ梢円形の身からなり、スプーン形にに入る。身のさじ先端部を欠損するが、全形をうかがうことは可能である。ヒノキ板目材。長さ(12.3cm), 柄の長さ6.0cm, 同径0.5cm, 身の幅3.5cm。

b 匙形木製品(13~17) 身の先端を直線にするA型式が2点(13, 14)ある。13は身の先端付近を薄く削り、一面がわずかに弧面をなす。柄を厚くし、先端を不整円形にかたどる。ヒノキ板目材。長さ12.0cm、身の長さ26.0cm, 身幅2.5cm, 同厚さ0.2~0.1cm, 柄幅0.7cm, 同厚0.4cm。14は身が長く柄幅が広い。身の先端は片側からそぎおとす。ヒノキ板目材。長さ11.6cm, 身の長さ3.4cm, 同幅1.9cm, 同厚さ0.2cm, 柄の幅0.7cm, 同厚さ0.2cm。身の先端を半円にするB型式は1点(15)あり、柄の大半を折断している。ヒノキ板目材。長さ(8.1cm), 身の長さ3.9cm, 同幅3.0cm, 同厚さ0.3~0.2cm。身の先端が剣先状に尖るC型式が2点(16, 17)ある。16は粗雑なつくりで、柄が短く端を斜めに裁ちおとす。スギ板目材。長さ10.8cm, 身幅3.2cm, 同厚さ0.2cm, 柄幅1.4cm, 同厚さ0.6cm。17は全体を厚手につくるが身の先端をうすくし、柄端を欠く。ヒノキ板目材。長さ12.0cm, 身幅2.6cm, 同厚さ0.5~0.2cm, 柄幅1.2cm, 同厚さ0.6cm。

c 拘子形木製品(18~25) 扁平な板材から拘子の形をかたどったもので、8点出土している。

1) 『半城宮報告Ⅶ』p. 112, PL. 63

しやもじ 身部の形状によって3型式に区分する。A型式は身の幅と身の長さ(柄から身に移行する折曲点から先端までの長さ)が1:2~1:1.5前後のもの。18~21がこの型式にぞくする。18は完形品で幅広の柄と長方形にちかい身を削りだす。身の木表面を平滑にととのえ、木裏面では両側縁をうすくし、表裏を区別している。先縁は直線を呈し刃のように鋭くする。ヒノキ板目材。19は柄の下部から身部の部分を欠くがこの型式とみられる。ヒノキ板目材。20は身の先縁の角に丸味をもたせたもの。柄と身の一部が損傷しているが、この型式とみられる。スギ板目材。21は身と柄の折曲点が左右でことなり、柄を欠くが、この型式にぞくする。厚手で、直線の先縁を鋭くする。スギ板目材。B型式は身の幅が広いもので、長さとの割合が1:1前後のものである。22・23がこの型式にぞくする。22は完形品で、方形にちかい身部に短い柄をつくりだす。先縁は直線を呈し刃のように鋭くする。ヒノキ板目材。23は先縁を弧形につくったもの。身の一面が焦げており、柄端を欠いている。ヒノキ板目材。C型式は身の幅の狭いもので、長さとの割合が1:3前後のものである。24・25がこの型式にぞくする。24は先縁を半円形にかたどり、左右の縁とともに刃状に薄くする。柄は欠損している。スギ板目材。25は身の一辺を欠くが、削りなおして再利用したもの。先縁は本来直線であったのが、使用によって角がとれている。ヒノキ板目材。

d 箸(26) 断面が4角形あるいは円形にちかい細棒が10数点出土した。從来から箸とかんしがえているものである。完形品が7点あるが、径0.6~0.8cm、長さ22.2~13.7cmと不ぞろいである。ヒノキ材(PL. 142)。

型式番号	(全長)	(身長)	(身幅)	(身厚)	(柄幅)		(柄厚)
					cm	cm	
A	18	31.6	11.2	5.8	0.5	2.6	0.5
	19 (24.1)	—	[6.2]	0.4	2.4	0.6	
	20 (58.5)	21.3	[14.5]	0.6	5.0	0.5	
B	21 (18.3)	11.2	7.5	0.8	3.7	(0.7)	
	22	51.0	29.1	25.2	1.0	4.2	0.6
	23	(32.5)	16.1	[17.4]	0.5	3.3	0.5
C	24	(17.8)	12.2	3.6~ 2.8	0.8~ 0.3	1.3	0.8
	25 (23.1)	14.8	(2.6)	1.3	1.4	0.5	

Tab. 34 SB7802出土杓子形木製品の寸法

iv 容器(PL. 142, fig. 92)

- a 蓋形木板(27) 不整円形の板状品で、一面の周縁に面取りをはどころ。現状では約半分を失うが、土器などの蓋に用いたものであろう。ヒノキ板目材。径[10.2cm]、厚さ0.7cm。
- b 山物容器(28~34) 完形品ではなく、蓋板1点、底板6点とともに側板の破片があった。
- まげもの 底板(28~33)はヒノキの板目材を円形にかたどったもので、周側面に側板を接合した木釘あるいは木釘孔をとどめる。完形品2点と破片が4点だが、さきに分類した型式にしたがうと、直徑18.0~19.0cmのA型式2点(28・29)、直徑16.6cm~17.3cmのB型式2点(30・31)、直徑12.0~14.2cmのC型式1点(32)となる。直徑8.1cmに復原できる33はC型式になる可能性もあるが、ここでは型式分類を保留しておく。
- 蓋板(34)は一部を欠き腐蝕がすむが、企形をうかがうことは可能である。上面を木表とする木取りで、側板をとめる一対の綫孔を4個所にとどめるが、本来は5個所であろう。綫孔位置に円形の刻線が引かれている。C型式にぞくする。ヒノキ板目材。外径21.9cm、内径(側板位置の直徑)19.0cm、厚さ0.7cm。

1) 『平城宮報告Ⅷ』 p. 121

5 木製品

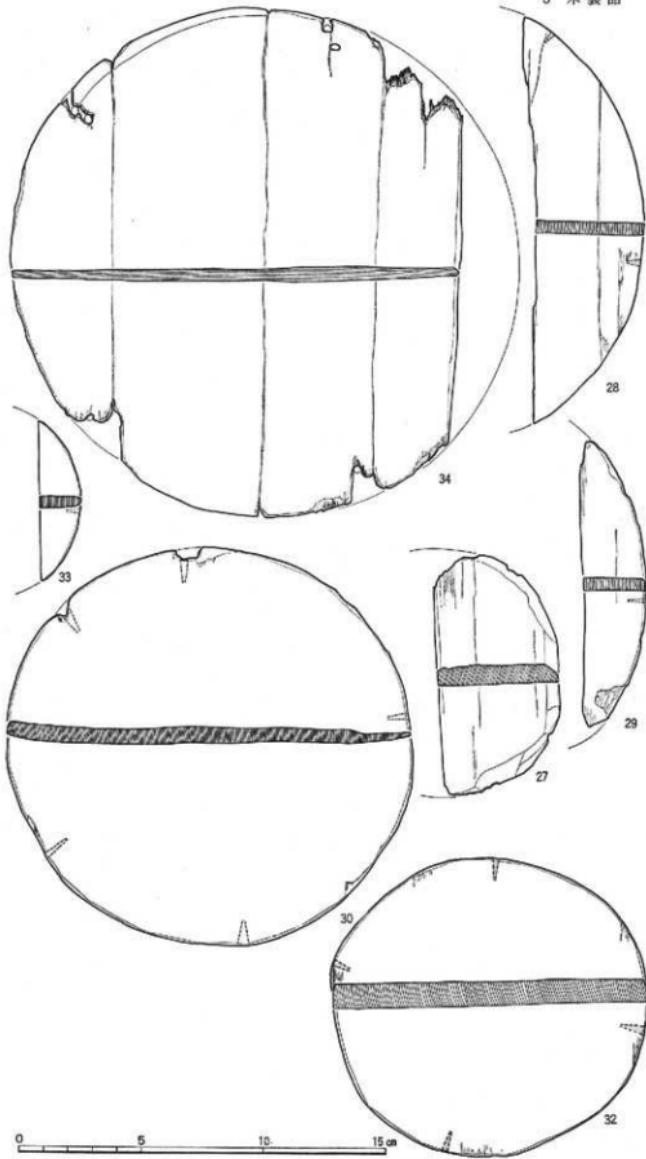


fig. 92 SB7802出土の山物底板

第IV章 遺 墓 物

型式	(番号)	(直径)	(厚さ)	(釘穴数)	(材質)	(木取)
A	28	cm	cm	(2)	ヒノキ	柾目
	29	[19.6]	0.5	(2)	ヒノキ	柾目
B	30	16.7	0.6	4	ヒノキ	柾目
	31	16.5	0.7	(2)	ヒノキ	柾目
C	32	12.6	1.0	4	ヒノキ	柾目
	33	[8.1]	0.5	(1)	ヒノキ	柾目

Tab. 35 SB7802付山物底板の寸法

側板は多数の小片であり、もとの高さがわかる破片はない。厚さ0.5~0.3cmのヒノキ板(柾目ともに存在)で、内面に縦方向や斜方向の刻線(シラビキ)をきざんでいる。また、曲物をとじた棒皮紐の断片も少量あった。

C 折 敷 (35・36) 方形、長方形、楕円形などの底板に火の低い側板を縫じつけたもの。しかし、側板が高ければ折畳になるので、底板だ

おしきでは折敷に限定できない。ここではそれを承知のうえ一応折敷に分類する。35は底板の残片である。木口部分を弧形に削り、1対の縫孔と棒皮紐をとどめる。紐の残存状況から木表を上面に使ったことがわかる。ヒノキ板目材。長さ(22.0cm)、幅(3.3cm)、厚さ0.8cm。36は側板の破片である。底板に固定した縫孔が下辺寄りにのこる。1個には棒皮紐がのこり、もう1個にはV字形のくぼみを彫りこんだのち穿孔した痕跡がある。2孔の間隔は24cmで、そのほぼ中央で側板を縫合せる。縫合せには円孔を縦列にいくつかうがち、棒皮をくぐらせて縫いつけるが、いまは棒皮の残片をとどめるのみである。ヒノキ板目材。長さ(31.9cm)、高さ(3.0~2.5cm)、厚さ0.4~0.3cm。

d 蓋(37) 刃物盤の破片である。底部にくらべて口縁部が厚く、その端面が幅広の平坦面を呈する。腐蝕が著しく加工痕跡をとどめないが、口縁端の幅が不均一なのでロクロ挽きでないことがわかる。残存の円弧からすると、直徑30cm程度の盤が想定できる。スギ柾目材。長さ(20.7cm)、幅(5.6cm)、器高1.7cm。

e 角鉢(38) 刃物鉢の破片である。断面が梯形を呈する方形の浅鉢で、木裏を上面にする角鉢 横木取りでつくる。外面の口縁部はやや垂直に立上ったのち、斜めに底部に移行する。内面は器壁を斜めに削り込み、底は平坦である。全体に粗い加工で、内面には繊の刃痕をとどめる。木口方向の一角に突起をのこし、その上面から孔をあけ、なかに棒皮の残片がのこる。棒皮を巻いた把手をつけたものとおもわれる。一般的に長方形の器を割りぬく場合、長辺を木理方向にあてるところからすれば、この器の尖られた木口の辺は木理方向の長さを超えることはない。そして、うしなわれたもう一方の木口角に突起を想定するならば、対角線の位置に把手がついていたことになる。ヒノキ材。全長19.0cm、幅(8.0cm)、高さ4.4cm、把手突起の長さ2.9cm、同幅3.2cm、同厚さ1.3cm。

v 工 具 (PL. 142, 143)

39は工具箱の断片とおもわれるものである。断面が弧形を呈する板状品で、外面の一端を削って丸味をもたす。内面には断面弧形の抉りがみとめられる。こうしたことから、刀子などの合箱に推測するのであるが、二次的な押圧のためかなり変形しており、断言はできない。スギくさび 板目材。長さ(10.8cm)、幅1.8cm、厚さ0.3cm。40は楔である。樹皮のついた丸木の一端を直裁し、他端は両側から斜めに削って斧頭形につくる。先端は欠損し、基端の周縁には小刻みの面取りがあり平面には磨滅痕跡がある。アカガシ亞属材。長さ15.8cm、径4.0cm。41は小札形で一方を薄くする。小型の楔か。ヒノキ柾目板。長さ5.1cm、幅3.3cm、厚さ0.9cm。

vi その他の木製品 (PL. 143, fig. 93)

- a 有孔小円板(45) 板を円形にかたどり、刀物によって中心に孔をあける。本裏面には削り調整があるが、木表面は割り面のままである。筋錐車として使用することは可能であろう。ヒノキ板目材。径4.1cm, 厚さ0.5cm。
- b 刻みのある木製品(46・47) 46・47は細板の両面中央を縦状に厚くし、両側縁に連続する鋸歯状の刻みをいたものの断片である。46はヒノキ材。長さ(14.2cm), 幅1.8cm, 厚さ0.6cm。細板の一辺もしくは両側邊に鋸歯状の連続刻みをいたものは、古墳時代以降の遺跡からしばしば発見される。いまのところ用途不明。
- c フォーク形木製品(48) 48は断面不整円形の丸棒の先端を太くし、先端をU字状に抉って2本の歯をつくる。この部分は下面を先端に向けて斜めに削り、歯先を細く鋭くしあげる。ヒノキ材。長さ13.2cm, 径1.3~0.9cm, 歯の長さ1.5cm, 同間隔0.9cm。
- d 柄状木製品(49・50) 49は棒材の両端を断面長方形に、中央部分の幅を狭くして断面円形にしたもの。一端から1.9cmに径0.5cmの円孔をあけ、他端は欠失するが、折損面の中央とやや片寄った位置に径0.2cm前後の貫通孔の痕跡をとどめる。柄の断片であろうか。スギ材。長さ(12.2cm), 径2.3cm。50は板目材を加工した太い丸材で、木口の両端は鋸で截ちおとし、木口面の周縁に粗い面取りがある。木口面に茎孔がないが、鑿などの工具の柄の未製品かもしれない。ヒノキ材。長さ8.8cm, 直径3.8cm。
- e 板状木製品(43・51~57) 51は薄い細板の両端を針状に削ったもの。單なる削り屑かもしれない。スギ板目材。長さ6.9cm, 幅0.8cm, 厚さ0.3cm。52・53は細板に梯形の切り欠きをいたるものである。52はヒノキ板目材。長さ(15.6cm), 幅3.9cm, 厚さ0.9cm。53はスギ板目材。長さ(28.4cm), 幅(3.8cm), 厚さ0.8cm。54・55は孔をあけた板。54は一端を円弧状に削り、他端に弧形の抉りをいた板片である。この円弧線の内側に小孔を雖であけている。ヒノキ板目材。長さ(15.2cm), 幅(2.4cm), 厚さ0.8cm, 孔径0.3cm。55は凸レンズ状にちかい断面をもつ板材に大きい孔をあけている。全体に腐蝕が進んでいるが、孔は刀物で抉ったようである。スギ板目材。長さ(17.9cm), 幅6.3cm, 厚さ0.8cm, 孔径(2.3cm)。
- f 柄状木製品(58~81) ヒノキ、スギの割材を細い棒状に加工したものが24点ある。58~68 柄状木製品はいずれも断面が方形あるいはそれに近い角棒の先端を串状に尖らせたものである。大小さまざまな大きさで、先端も釣形、菱形を呈するもののが锐利にしないものもふくむ。69は面取りのある角棒の半分を扁平にしたものである。70~74は棒の一端に切欠きなどの加工をとどめるものである。70は一端を楕円形、他端を円形断面とする丸棒で、楕円形の方の一端に両側から切込をいたもの。71は丸棒を四ツ割りにした棒の一端にV字形の抉りをいたもの。他端は刀物で切込みをいれて折取っているので、本来は丸棒にいた抉りとおもわれる。72は丸棒

鋸歯状の刻み

板状木製品

棒状木製品

第IV章 遺 物

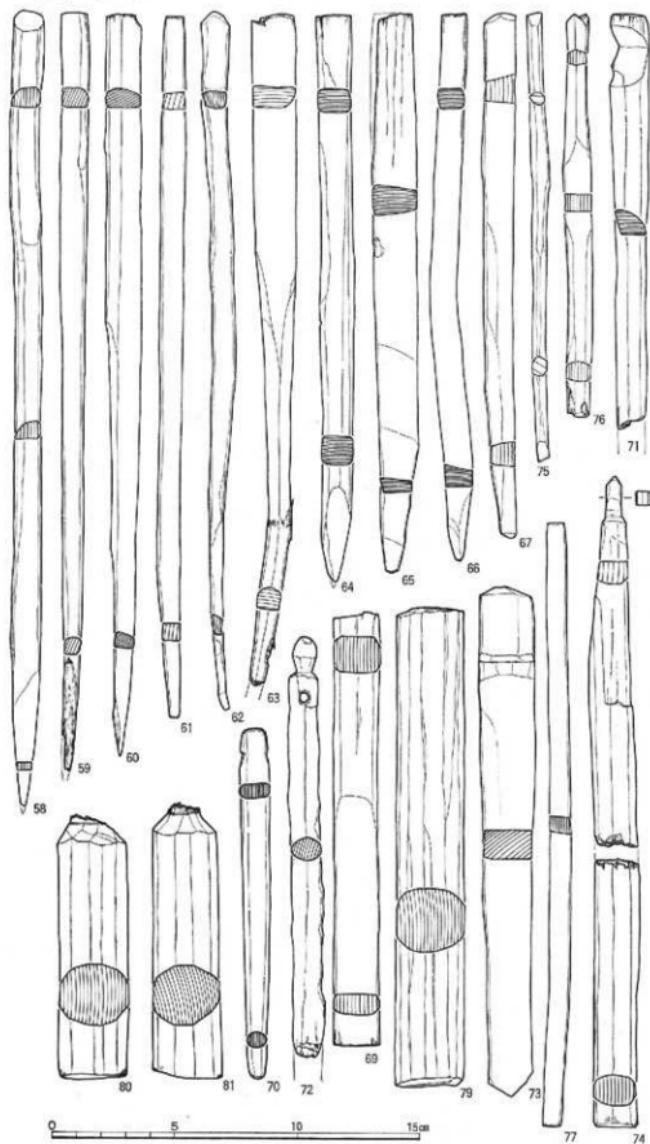


fig. 93 SB7802出土の棒状木製品

5 木製品

の先端を乳頭状に削りだし、その下部に孔をあけている。73は角棒の一端にV字形の抉りをいれる。74は不整形の角棒の一方を次第に細くし、先端に小さな角柱を削りだしたもの。なぶ角柱の頭は三角形を呈する。

75~78は顕著な加工をほどこさない棒。75は周囲を粗く削って丸棒風にしあげ、両端は斜めに削りおとす。76は中央部を断面四角に残し、その両端に向けて削り込んで細くしている。一方の先端にはV字状の抉り込みがある。77はただの角棒。78は俊密のように中央部を太く、両端に向けて次第に細くする大型の丸棒。79~81は削材の表面をていねいに削ってつくる棒状品の切屑。79には縦で切断した木口面が一端にのこる。80~81は木口いずれもの一端を直截し、他端にはV字状溝をいれて折取った痕跡がある。

g 木製ヒゴ (82) 削材を削って断面方形のヒゴ状にとのえたもの。20数点出土しているが、大半は折損した小片で完形品は4点にすぎない。ヒノキ材。長さ18.6~18.1cm、径0.25~0.15cm。

番号	(長さ)(最大幅)(材質)		
	cm	cm	
58	33.3	1.2	スギ
59	(30.1)	1.1	スギ
60	30.2	1.9	スギ
61	28.0	1.0	ヒノキ
62	28.4	1.0	ヒノキ
63	(27.3)	1.7	スギ
64	23.1	1.4	スギ
65	22.6	1.8	ヒノキ
66	22.2	0.8	ヒノキ
67	21.3	1.3	ヒノキ
68	(19.2)	1.5	スギ
69	17.6	1.9	スギ
70	14.2	1.2	ヒノキ
71	(16.9)	(1.6)	ヒノキ
72	(17.0)	1.3	ヒノキ
73	20.7	2.2	スギ
74	(25.9)	1.8	スギ
75	18.2	0.8	ヒノキ
76	16.3	1.1	ヒノキ
77	21.5	1.3	ヒノキ
78	(51.2)	1.9	ヒノキ
79	19.5	2.7	ヒノキ
80	11.1	2.7~2.4	スギ
81	10.7	2.8~2.5	ヒノキ

木のヒゴ

Tab. 36
SB7802出土棒状木製品の寸法

B SD3715出土の木製品 (PL. 144~146)

南北溝SD3715からは祭祀具、彷彿具、食膳具、工具などのほか、種々の加工をほどこした木製品が56点出土した。

i 祭祀具 (PL. 145)

a 人形 (1・2) 1は非常にうすい板でつくった人形。頭頂部は直線状で山角をおとす。頭部ひとがたは上方から大きく削りこみ、両肩は水平に近くつくる、いわゆる怒り肩を呈す。半身を久くため全容をしりえないが、眉・目・鼻・口器・口をそれぞれ短い墨線で表現している。ヒノキ板目材。長さ16.8cm、幅(1.4cm)、厚さ0.13cm。2は横向の人形。片面にはていねいな削り調整を施すが、一方の面は削り面をとどめる。頭部は後頭部側辺を2段に削って尖らせている。この部分には墨痕が表裏両面にうすくのこっており、被り物を表わしていたことがわかる。頭面の前面にあたる側辺は鼻から口にかけての部分が梯形に突出する。背部側辺をゆるやかなV字形に抉り、下端は両側から斜めに削りおとして尖らせる。ヒノキ板目材。長さ14.9cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm。

b 刀形 (3・4) 3は刀子をかたどったもので、木理に影響されて中央で屈曲している。刀かたながた身と柄はほぼ同長で、刀身の先端寄り2分の1の両側縁を削って刀をつくる。ヒノキ板目材。長さ15.1cm、幅1.2cm、柄の厚さ0.5cm、刀身の厚さ0.4cm。4は刀身の先端を剣先状につ

第IV章 遺 物

くり、両側縁とも鋭利にする。柄は全長の約3分の1で、柄端は片面から斜めにそぎおとす。ヒノキ柾目材。長さ15.6cm、幅1.1cm、柄の厚さ0.5cm、刀身の厚さ0.3~0.1cm。

ii 服 飾 具 (PL. 144)

a 翳櫛 (5) 細長の板材の木口の両端に鋸で歯を挽きだし、中央の両側辺を弧状に抉ってたてぐし 捩り部分とした両齒の櫛である。両歯のうち一方を太く長く、他方をうすく短くつくる。歯の切通し線は両方とも直径9.4cmの正円弧を刻んでおり、歯の先端は両端とも剣先状に尖る。短い歯の方は先端を一直線にそろえており、一部欠失するが幅6.8cmに復原でき、3cm幅につき18本の歯を挽きだしている。歯の長さは中央で2.2cm、両端で1.4cmである。長い方の歯は左右とも両端を尖り、現状では10本の歯がのこるが、本来は13本あったと推測される。中央7本は先端をそろえ、両端各3本は順次長さを減じていたとかんがえられる。歯の長さは中央のもので7.7cmある。歯の密度は3cmにつき6本で、鋸で挽きだしたのち削りをくわえて後をおとしている。細い歯の切通し線から1.8cm握りよりの中央に直徑0.5cmの円孔をあけている。モコク斜柾目材。長さ20.4cm、握り部分中央の幅3.8cm、厚さ1.1cm。このような竖櫛の出土例はほかになく、きわめて珍しいものである。

b 横櫛 (6) ツゲの板目材に鋸で細い歯を挽きだした横櫛の小片。背はなだらかな凸弧をえがき、断面は半円形を呈する。歯の切通し線は背にそろえた曲線をえがく。歯の密度は3cmにつき17本(推定)である。長さ(3.2cm)、幅(3.3cm)、厚さ0.7cm。

iii 紡 織 具 (PL. 145)

新織具には糸棒(糸巻)の部品がある。横木は2点で、棒木は1点である。7・8は4本の棒木
いとわく で構成するA型式の糸棒の横木であるが、一個体の製品ではない。中央に幅1.9cmの十字合欠きの仕口をつくり、合欠き部分の中心に糸棒の軸棒を通す径0.6cmの円孔をあける。両端に向けて楔状に削り、先端付近を丸棒状に削りだして棒木と接合する枘とする。7・8とともにヒノキ柾目材。7は長さ9.3cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、8は長さ8.1cm幅2.1cm、厚さ0.8cm。9は糸棒の棒木。腐蝕が著しく、中央で折れて2分している。断面は半截槽円形で、片側2個所を梯形に広げ、横木を受ける納穴をあける。納穴は13.3cmの間隔をおき直徑0.7cm、深さ1.1cm。ヒノキ材。現存長24.8cmなので、長さ24cm前後の糸棒A₂型式にあたる。納穴部分の幅1.4cm、厚さ1.1cm。

iv 食 膳 具 (PL. 146)

食膳具には杓子形木製品(10)がある。身の長さと身の幅の比がおよそ2:1であり、さきにしゃくし のべた分類のA型式にあたる。身はやや先細りで、先端を半円形にかたどる。柄元から身の先端に向けて片面を削りこんで次第にうすくしており、身はわずかに内反する。柄の断面は長方形で稜角を丸くおとしている。ヒノキ柾目材。長さ31.0cm、身の長さ9.7cm、同最大幅4.3cm、同厚さ0.8~0.2cm、柄の幅2.1cm、同幅0.8cm。

1) さきに、棒木を文える横木が十字形に組合せ るものをA型式、一枚板の横木のものをB型式 分類とした。『平城宮報告VII』p. 116

v 容器 (PL. 145, fig. 94)

- a 蓋形木板 (11) 円形の板状品で、一面の周縁を斜めに削りおとして縁端を鋸くする。容器の蓋に用いたものであろう。スギ板目材。直径 [17.8cm], 厚さ0.6cm。
- b 曲物容器 (12~16) 身の完形品1点と底板4点がある。12は直径16.4cmの円形の底板にまげものの高さ5.9cmの側板をつける。側板をつけた容器の外径は17.5cmである。底板の周側面の5ヶ所に木釘を打ち込んで側板を固定する。側板の棒皮縫いは、側板の上端を小さく切り欠いて、3段くぐり1列で縫いつけ、さらに横へ一段引きだして縫いおわる。棒皮の幅は0.3cm。側板は両端の厚さ・幅を次第に減じ、端部であるマチの幅は5.0cmである。底板は

柾目材で厚さ0.7cm。側板は厚さ0.4cmの板目薄板で、内面に斜格子状の刻線 (シラビキ) をほどこす。ヒノキ材。

13は直徑25.6cmの底板の一部で、垂直に截った周側面の2ヶ所に木釘痕をとどめている。14~16は円形板の断片で、周側面は垂直に削りおとしている。小片のため木釘痕をとどめないが、曲物の底板であろう。

c 折敷 (17) 長円形の折敷床板の残欠。表面は削って平滑にしあげており、側板を固定するための縫い孔が2個所にのこる。その間隔は28cmあり、うち1個所は2孔を1対としたもので、他の1個所は折損しているため1孔のみをとどめる。ヒノキ板目材。長さ(31.9cm), 同幅(3.0cm), 厚さ0.8cm。

d 盤 (18) スギ柾目材を加工した制物の盤。表面の保存状態はきわめて良く、およそ半分を失するが、直徑26cm前後の円形に復原できる。しかし正円でなく多少不整形である。全面を鉛錠の刃物で削りあるいは削って成形している。削りの幅は最大3cmをはかり、底部外面では半輪方向に一気に削っている。底部に比べて口縁部は厚く、口縁端部は幅広の水平面にくる。この平坦面の幅は一様でなく、2.0~0.9cmの変化がある。底部内面は使用のために成形痕が磨滅しており、表面には鋭利な刃先による直線状の使用痕が無数に残る。底部外面には全面に墨書きがみられる。口径25.2~25.5cm, 器高1.5cm, 底部外径約23.3cm。墨書きについては木簡の項でのべた (p. 104)。

vi 工具 (PL. 146)

- a 錐柄 (19) 柄元の一部を欠くのみでほぼ完存しているが、錐先はのこっていない。¹⁾ 割きりのえ材を丸棒状につくり、木口の両端は鋸で直裁している。柄元の木口面に茎の孔があり、一辺0.3cmの不整形形を呈し、深さは2.7cmである。

茎孔の内面は炭化しており、鉄錐の茎を焼き込んで挿入したことがわかる。ヒノキ材。長さ29.6cm, 直径は柄元で1.2cm, 柄尻で1.0cm。

1) 錐柄などの工具柄については『平城宮報告書IV』p.72~73を参照。

番号	(直徑)	(厚さ)	(孔穴数)	(材質)	(木取)
12	16.4cm	0.7cm	5	ヒノキ	柾目
13	[25.6]	0.8	(2)	ヒノキ	柾目
14	[9.9]	0.5	(0)	ヒノキ	柾目
15	[15.2]	0.6	(0)	ヒノキ	柾目
16	[23.8]	0.6	(0)	ヒノキ	柾目

Tab. 37 SD3715出土曲物底板の寸法

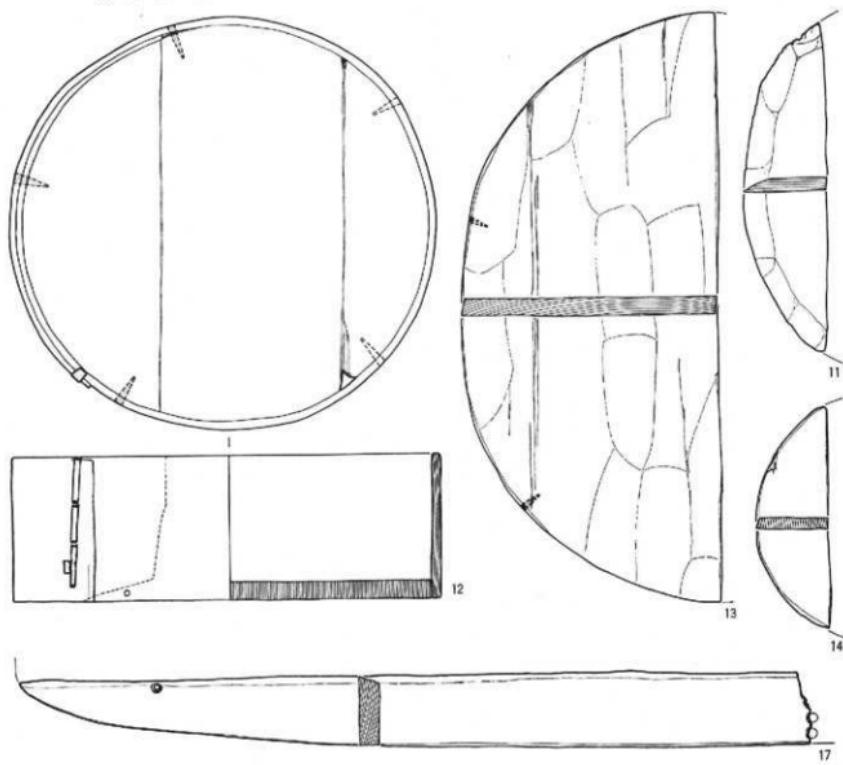


fig. 94 SD3715出土の曲物・折敷

b 模 (20・21) 20は心持の細い丸材を加工したもので一部に樹皮をとどめている。一部のくさび木口の周縁は斜めに削っており、木口面は磨滅して丸味をおびる。他端は斜めに削りこみうすくつくる。先端は折損し、損傷面は磨滅している。材を大割りにするときの割模に使用したものであろう。ミズキ科材?。長さ22.4cm、径3.1×2.4cm、先端の幅2.5cm、同厚さ0.8cm。21は小札状の模で、一端をうすく狭くつくったものである。スギ板目材。長さ8.8cm、幅3.1cm、厚さ0.8cm。

vii その他の木製品 (PL. 146, fig. 95)

a 横 構 (22) 直径7cm程の心持丸太材を加工したもの。材の半分を削り残して頭部とよこづちし、以下の部分を削って柄にする。頭部の先端は周縁を粗く削りおとして円頭ぎみにつくる。

5 木製品

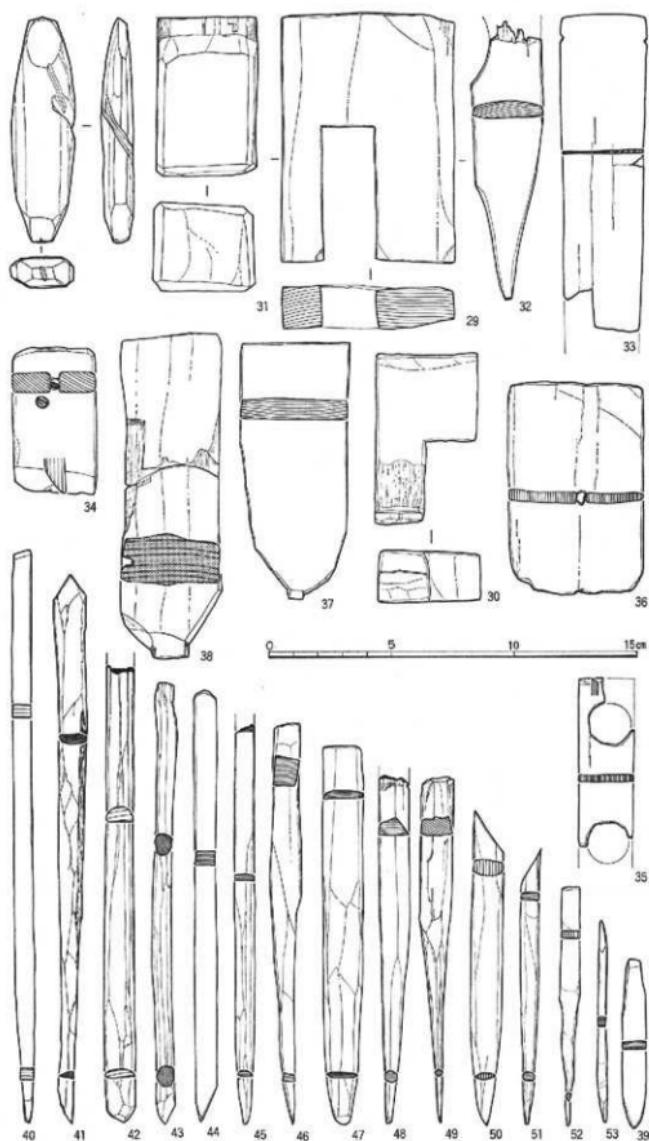


fig. 85 SD3715出土の木製品

第IV章 遺物

表面が著しく腐蝕しているため使用痕跡は明瞭でないが、頭部側面が若干くぼんでいることから横柵として使用したことがわかる。柄は柄元をのこす。モミ材。長さ(17.5cm)、頭部の長さ14.5cm、同径7.0~6.0cm、柄の径2.4cm。

b 有孔小円板(23・24) 板材を円形にかたどり中央に円孔をあけたもの。表面は平滑に削るが、周側面の削りは粗い。ヒノキ板目材。23・24ともに半割の材からつくり、円板の直径6.2cm、円孔の直径1.3cmに復原できる。厚さは23が0.6cm、24が0.7cm。

c 桧形木製品(25・26) やや下すほまりの短い円柱形の材で、一端の木口面にロクロ加工の栓痕をとどめる。木心を避けた広葉樹材を用い、側面を縱方向に細く削る。狭い方の木口は鋸で切断している。他方の木口はロクロ回転により切断しており、凸面状の旋削面にはピッチ約1mmの縞状刃痕がみられ、中央に筋状突起がのこる。25はサクランボ属材。高さ4.2cm、上端径4.0cm、下端3.6cm、突起の高さ0.5cm、同径0.7cm。26はサカキ材。高さ4.2cm、上端4.0cm、下端3.4cm、突起は基部をのこすのみで径0.8cm。これらはロクロ旋削工芸で生じた残材とするよりも、須恵器の蓋の栓として使用したものとおもわれる。¹⁾

d 納のある部材(27・28) 27は断面が6角形を呈する、先細りに加工した角材で、両端に筋状突起がつく。板目材を用いており、木表側を断面梯形に、木裏側を凹面につくる。一端の納は根元の3方に平面をつくる三方脚付納で、他端は木表側を半欠きにする片納であるが、柄ではなく、合ひ欠き仕口の可能性もある。両端とも先端を欠く。アカガシ亜属材。長さ(23.5cm)、幅と厚さは最大部分で5.0×4.4cm、最小部分で3.3×2.7cm、納の出を除いた部分の長さ19.2cm。28は板材を鉤鐘形にかたどったもので、狭い方の木口面に納を削りだす。納は根元の2方に平面をつくる二方脚付納。他方の木口端は欠失しているが、材の中程から先端にかけて、材の厚さの半分を欠き取り、合ひ欠きの仕口をつくる。仕口の中央には直径2.7cmの円孔があく。長さ(17.2cm)、幅6.3~4.1cm、厚さ1.9cm、納の出2.8cm、同幅1.4cm。

e 切り欠きのある部材(29・30) 29は長方形の板材の木口の一端を切り欠いて凹形にかたどる。表面は施で削っている。ヒノキ板目材。長さ10.1cm、幅7.1cm、厚さ1.7~1.0cm。30は直方体の材の一端を切り欠いてL字形につくったもの。ヒノキ板目材。長さ6.9cm、幅4.1cm、厚さ2.0cm。

f その他の部材(31) 直方体の角材で表面は平滑に削り、後に面取を施す。一方の木口面の一辺に小さな段がある。ヒノキ材。長さ6.4cm、幅4.0cm、厚さ3.4cm。

g 板状木製品(32~39) 32は断面が凸レンズ形の薄板材の一端を尖らせたもの。側辺の板状木製品 一方に孤状の削り形をいれるが、折損しているため全形は不明である。ヒノキ板目材。長さ11.2cm、最大幅2.9cm、厚さ0.7cm。33は薄い短冊状のへぎ板の一端から0.9cmの両側邊にV字形の小さな切込みをいれたもの。先端はゆるやかな孤をえがく。下半部は欠失。長さ13.0cm、幅3.5~3.1cm、厚さ0.2~0.1cm。34は小札状の板材の木口の一端を斜めに削りおとしたもので、他端は刀物で切り込みをいれて折り取る。一対の円孔があり、中に棒皮が残存している。曲物等の底板を再利用して模に転用したものか。ヒノキ板目材。長さ5.1cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm。35は短冊状の薄板に3.2cmの間隔をおいて2つの円孔をあける。一端を

1) 類似品は平城宮土腰SK820(『平城宮報告書VI』p.131)や長岡京の満SD1301(向日市教委『向

日市埋蔵文化財調査報告書第4集』1978, p.17)にみられる。

欠失し、他の木口端は斜めにそいでいる。ヒノキ柾目材。長さ6.9cm、幅1.3cm、厚さ0.3cm、円孔の直徑1.7cm。36は長方形の薄板材で中央に小孔をあける。両端は鋸で切断している。ヒノキ柾目材。長さ8.5cm、幅5.5cm、厚さ0.6cm。37・38は継長の板材の一部を周囲にV字状の切り込みをいれて折り取ったもの。37はスギ板目材。長さ10.3cm、幅4.3cm、厚さ0.8cm。38はアカガシ柾目材。長さ13.2cm、幅4.1cm、厚さ2.0cm。39は薄い細板の一端を剣先状に尖らせ、他端を捻形につくったもの。巻形を呈するが刃はあらわされていない。ヒノキ板目材。長さ6.8cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm。

i 柄状木製品(40~53) ヒノキあるいはスギ材でつくる細長い棒状製品が14点ある。用途は不明。いずれも断面が方形ないし不整円形の柄材の先端を尖らせたもの。大きさはさまざま、先端の形状にも一端 棒状木製品を尖らせるものほか、一端を箋状につくるもの(42・47・50)や両端を尖らせるもの(35)がある(Tab. 39)。

j その他の木製品(54~56) 54は板材を舟形にかたどったものだが、全体に厚さが一樣で、先端を大きくU字形に削り込み二股につくる。柄元付近には片面に浅い溝状の押圧痕がのこっている。身の一側辺と先端を欠失する。スギ板目材。長さ(3.14cm)、身の幅(8.3cm)、柄の幅2.8cm、厚さ0.9~0.8cm。55は板材を加工して長楕円形の両端を截ちおとした形につくる。両側辺をうすく削り、一方の側辺に斜め方向の溝を鋸でひきこむ。木口の一端は両面から削りおとして先端を鋭くし、他端の木口面は直裁し、周縁を曲取る。この直裁面には断面V字形の浅い溝を刻む。長さ9.1cm、ヒノキ柾目材。最大幅2.6cm、厚さ1.3cm。56は心持丸太材を加工したもので、一端の1分の1を削りこして、先端を円錐状につくる。他の部分は細い柄状に削る。加工は粗略で、現状は約4分の1に分割しており、柄状部の先端は分割のうちに焼けている。ヒノキ材。長さ(31.7cm)、柄状部の長さ22.7cm、材の直徑(約8.5cm)。

C その他の木製品

i SD3765出土:木製品 (PL. 147~148)

a 人形(1) うすい細板の側辺に削りを加えて人形につくったもの。表裏両面とも削り ひとがた 製き面をとどめ、墨痕はみとめられない。頭頂部は尖りぎみの半円形にかたどり、頸部の切りこみは小さい。全体に粗雑なつくりである。ヒノキ柾目材。長さ14.6cm、幅2.5cm、厚さ0.3~0.2cm。平城宮出土人形のなかで古い時期にぞくするものである。

b 曲物底板(2) 板材を円形にかたどったもの。両面とも平滑に削り、縁辺は垂直に截ちおとす。断片であるため、側板を固定する木釘痕はないが、曲物容器の底板とみられる。ヒノキ板目材。直徑(19.0cm)、厚さ0.5cm。

番号	(長さ)(最大幅)(材質)	
	cm	cm
40	23.4	0.7 スギ
41	22.4	1.3 ヒノキ
42	(18.5)	1.1 ヒノキ
43	17.8	1.0 ヒノキ
44	17.4	0.9 スギ
45	(16.2)	0.7 スギ
46	16.2	1.1 ヒノキ
47	15.2	1.6 ヒノキ
48	(14.1)	1.2 スギ
49	14.1	1.3 ヒノキ
50	12.8	1.2 ヒノキ
51	11.2	0.7 ヒノキ
52	9.8	0.8 ヒノキ
53	8.2	0.4 ヒノキ

Tab. 38
SD3765出土棒状木製品の寸法

第IV章 遺物

- c 錐柄(3) 錐の柄の断片で、先端を幅広くする頭部の破片¹²。心持板材を入念に加工したもので、先端は半円形を呈し、縁辺の稜角を面取る。両側辺とも縁辺の稜角を削って丸味をもたせ、一方の側辺は内済する。先端から約3cmの位置に錐身を装着するための縦長の茎孔がある。これは両側辺から切り込むようにしてあけたもので、幅は0.25cmである。先端近くには茎孔をさけた位置に2本の木釘が打込んでおり、下端の折損面にも2本の木釘痕がのこる。これらの木釘は柄頭の割裂を防ぐためのものだろう。コナラ亞属材。長さ(8.3cm)、幅4.7~2.6cm、厚さ1.9cm。破片ではあるが、平城宮出土錐柄のうち、SD1900出土の錐柄につぐ古い時期のものである。
- d 鑷(4) 全長90.4cmの兜形品で、柄と身を1本でつくる。身部は両側辺の上端の一部分をのこしてそれ以下を一段削りおとし、U字形に成形する。U字形部分の縁辺は、両面から斜めに刃先状に削って、鉄製鍛先の着装部とする。鍛身部の木表側は平坦面であるが、木裏側は先端に向けてやや削り込み、身部にわずかな反りをもたせる。この身部の両面は削り痕跡が消えるほどに磨耗している。柄は断面が隅丸方形に近い丸棒状に削りこみとし、直線につくる。柄頭にはU字形の環状把手がつく。把手の握り部分および柄の周側面は磨耗している。アカガシ亞属材。身部の長さ27.7cm、同幅18.2cm、同厚さ3.1~1.2cm、鍛先着装部の長さ20.7cm、同最大幅18.5cm、柄の長さ(把手部を含まない)46.5cm、同径3.3×3.0cm、把手部の長さ16.2cm、同幅13.5cm、同径3.6×3.0cm。
- e 用途不明木製品(5) 小さな方形の身に太くて長い柄のつくもの。方形の身は木裏側を先端に向けて削り込み反りぎみにつくる。この面はとくに磨耗が著しい。柄は断面が角を丸くとった扁平な方形を呈する。スギ板目材。長さ37.6cm、身の長さ9.1cm、同幅8.8cm、同厚さ2.5~1.4cm、柄の幅4.6cm、同厚さ2.6cm

ii SK3730出土の木製品(PL. 148)

- a 縱形木製品(6) 細長い身に、側辺の一方を削りこんで茎をつくりだし片開式の鉄鎌をやじりがたかたどる。身の縁辺をうすく削って刃をつけ、茎は先細りの丸棒状にくる。木理は緻密で、表面をよく研磨している。祭祀具として使われた木製模造品であろう。ヒノキ板目材。長さ15.1cm、身の長さ9.3cm、同幅0.8cm、同厚さ0.2cm、茎の長さ5.8cm、同径0.7~0.4cm。
- b 方柱形鍤状木製品(7~9) 断面が方形を呈し、先細りの細長い棒材の上端近くの周囲に切りこみをいたしたもの。3点とも上端から約2cmの位置の側面ないし稜角にV字形の切り欠きをいれる。この切り欠き部位には横方向の押圧痕跡があり、縦状のものを縛っていたことがわかる。いずれもスギ材である。7は長さ28.3cm、太さ2.4cm~1.4cm。8は長さ26.7cm、太さ1.8~1.3cm。9は長さ25.2cm、太さ2.9~1.5cm。
- c 横(10) 断面方形の粗い削板材の一端を斜めに削りおとしたもの。先端は厚くのこす。材を大割りする際の割模として使われたものか。ヒノキ材。長さ14.0cm。幅3.5×2.8cm。

1) これはかって「錐柄」として紹介したことがあるが(西谷正「平城宮出土の土工具」『大和文化研究』第13巻4号、1968、p. 32)、ここで訂正しておく。

2) SD1900の例では頭部が円形にならず(『平城宮報告IX』p. 69)、形態としては奈良時代後半のSE272B出土の例に通じる(『平城宮報告IV』p. 37)。

iii SK3784出土の木製品 (PL. 148)

a 悪形木製品(11) 細長い身と柄からなる粗製の匙とみられる。身の上面に浅い溝を抉つさっている。先端は裏面から斜めに削り、端部を鋸くする。柄の断面形は柄元では隅丸方形を呈し、先端につくった柄尻近くでは梢円形とする。スギ材。長さ24.0cm、身の長さ7.8cm、同幅2.7cm、同厚さ1.4cm、柄の径1.6×1.2～0.8×0.5cm。

iv SA5535出土の木製品 (PL. 148)

a 棒状木製品(12) 板材を削って丸棒につくったもので、側面には縦方向の細い削りをほどこす。木口の一端は鋸で切断し、他端は四方からV字状の切り込みをいれて折りとる。加工屑である。ヒノキ材。長さ10.3cm、直径2.5cm。

v SA3777出土の木製品 (PL. 148)

a 合子蓋(13) 柱痕跡から検出した小断片。直立する側面とゆるやかな曲面につくられた合子蓋甲面との境は稜をなす。器表面の腐蝕が著しいため、成形がロクロ削りによるのか削りによるのか不明。全形の復原は難しいが、口径13cm前後、高さ3cm前後の寸法と推測される。頂部の厚さ0.4～0.2cm。ヒノキ材。板目材を横木取したもの。木理は緻密であるが波状で、器表に小さい節目がいくつかみられる。

vi SD5505出土の木製品 (PL. 148)

a 桁崩(14) 白木の桧扁の断片。2枚分の骨がのこる。上端は主頭形で、下端に向けて幅ひょうきを狭くし、下端から0.2cmには要孔があく。側辺の一方に弧状の削り形をいれ、さらに弧形の頂部をV字形に切り欠く。ヒノキ板目材。2枚を同大として復原すると長さ17.1cm、上端幅3.4～3.0cm、下端幅1.8cm、厚さ0.13cmとなる。要孔が下端に接することになり、また継目を欠くことから二次的に上下が切断された可能性がある。

b 小円板(15) 薄い板材を正円形に切り取ったもので半分がのこる。両面とも平滑に削り、周側面は垂直に截つ。小型収物容器の底板か。ヒノキ板目材。直径5.4cm、厚さ0.3cm。

vii SD5564出土の木製品 (PL. 148)

a 鳥形(14) うすい板材の側辺を削って頭部と頸部をつくったもので、頸部の一端を欠とりがた失する。頭部前側辺は丸味をもたせて斜めに削り、頸部上側辺は頭部より一段おとして直線につくる。下辺はゆるやかなV字状に切り欠き、頸部下側辺のほぼ中央に木質の細棒が残存している。頸部の端部は直線状に截ちおとしているが、切断はやや粗雑である。ヒノキ板目材。長さ8.6cm、幅3.2～1.8cm、厚さ0.5cm。これは鳥の上半身を表現した鳥形とみられるが、形代の一つである馬形の形態に通じる面もあり、いずれとも判断しがたい。

b 収物容器(17・18) 底板が2点がある。17は完形で、表面の腐蝕が著しい。周側面の4箇所に、ほぼ等間隔に木釘孔と木釘をとどめる。C型式にぞくする。ヒノキ板目材。直径13.3cm、厚さ0.5cm。18は約1/4の破片で、2箇所に木釘孔がのこる。ヒノキ板目材。直径17.3cm、厚さ0.5cm。

viii SE9210出土の木製品(PL. 148)

a 横歯(19) 歯の大部分を欠く。イスノキの板目材に細い縦で歯を挽きだし、表面を平滑に研磨する。脊はゆるやかな円弧をえがき、肩は角ぼっている。横歯の切り通し線は刻線を引いて脊にそろえる。歯の密度は3cmにつき17本。長さ11.4cm、同幅1.5cm、脊の厚さ0.7cm。井戸埋土から出土した。

b 曲物容器(20~22、25~27) 曲物容器には身の穴まげもの 形品1点(20)と、底板5点がある。20は直径14.8cmの底板に高さ10.6cmの側板をつける。側板をつけた状態での外径は15.3cm、側板の下端外面には幅2.5cmの瘤をまわした痕跡がのこり、側板と瘤を底板に固定する木釘を5箇所に打つ。側板の桟皮の縫合せは上部を欠いているが、5段潜り1列で縫いつけたものとみられる。桟皮の幅は0.7cm。底板には木理のきわめて緻密なヒノキ板目材を用い、側面の上方がにわざかに内傾する。側板は厚さ0.4cmのヒノキ板日材で、内面には縦方向の刻線(シラビキ)が部分的にほどこされる。なお、木釘もヒノキ材である。21・22はほぼ完形の底板で、ヒノキ板目材を用いている。25~27は底板の小片で、側面に木釘孔をのこす。26・27がA型式の大型品であるに対し、他はC型式の小型品である。小型品は飯盒のようなものだろうか。いずれも井戸埋土から出土した。

c 独楽形木製品(23) アカガシ属の心材を加工したもの。現在身の一部と下端が欠損しているが、全形をうかがうことは可能である。側面を縦方向に細かく削って円柱状にし、一端を粗く削り円錐状につくる。上端はやや凸面をなす。砲弾形を呈する本例は、軸につけた紐をまいて回転させるいわゆる「バイゴマ」の類である。長さ6.5cm、直径4.1cm。この種の木製品は各地でいくつかの出土例をしているが、円錐状の下端に軸部を削りだすものや、軸を打ちこんだ孔がのこるものなど各種の形態をとっているが、遊戯用の独楽とかんがえている。井戸埋土から出土した。

d 用途不明木製品(24) 細長い板材を加工したもので、両端の幅を狭くし、端部に方形の突出部をつくる。木表面は削り調整をほどこして平滑にしあげ、わずかな凸面をなすが、木裏面には割り裂き面をとどめる。両端に何物かを垂下する把手の可能性もある。スギ板目材。長さ52.0cm、幅8.0cm、両端のくびれ部分の幅4.0cm・3.4cm、方形突出部の幅5.9cm・5.4cm。厚さ1.3cm~1.10m。井戸棒抜取り痕跡埋土から出土したもので、伴出の土器から11世紀のものであることがわかる。

1) 独楽の出土例は各地で報告されている。奈良県内では5例の出土品があり、いづれも7世紀末から8世紀全般にわたる時期にぞくする。1. 平城宮南SD2700(『年報1965』p. 35) 2. 平城京左京三条西坊七坪井FSE1810(『京文研『平城京左京三条西坊七坪井調査報告』p. 22) 3. 平

番号	(直径)(厚さ)			(釘穴数)	(材質)	(木段)
	cm	cm				
20	14.8	0.9	5	ヒノキ	板目	
21	14.2	0.5	(3)	ヒノキ	板目	
22	15.1	0.5	5	ヒノキ	板目	
25	(14.4)	0.6	(1)	ヒノキ	板目	
26	(24.3)	1.1	(2)	ヒノキ	板目	
27	(21.7)	0.6	(1)	ヒノキ	板目	

Tab. 39 SE9210出土 曲物底板の寸法

城京左京五条二坊十四坪井戸SE03(奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書一昭和54年度』1980, p. 32) 4. 藤原宮井戸SE1205(『飛鳥藤原宮報告II』1978, p. 73) 5. 藤原宮外濠SD145(『年報1976』p. 42~44)。

D 木製品の樹種 (PL. 149~152)

第1次大槻殿地城から出土した木製品については、個々の説明のなかで述べてきた。ここではそれらを樹種ごとに再編成して Tab. 40 にまとめた。なお、柱・井戸枠・木縄などについては、それぞれの項でのべているので表にはいれていない。しかし、顕微鏡写真は一括して PL. 149~PL. 152におさめている。

判明した木製品の樹種は、針葉樹3種類、広葉樹10種類である。木製品と利用樹種との関係¹⁾を見るために樹材を例にとり上げてみると先に35点の木橋について樹種名が調べられている。

前回と今回の調査で39点の木橋につき行なったことになる。樹種別にはイスノキ材が最も多く35点、ツゲ材2点、カナメモチ材1点、モッコク材1点という結果を得た。

これら4樹種につき共通している材質上の特徴は、いずれも散孔材で道管の配列はほぼ均等に分布し、その径はきわめて小さく、緻密で割れにくく、硬くつよい。例えば、イスノキの気乾比重は0.75~1.02で日本産の有用樹種の中で最も重く硬いものであり、ツゲも0.75~0.95とイスノキと同様な数値をしめす。これらの材は切削その他の加工は困難で割れにくく、耐久に富む性質をもっており、樹材に最も適している。モッコク材・カナメモチ材とも櫛材に使われていた出土例は少なく、イスノキに樹脂、材質等がにいているところから、イスノキ材の代用として使われたものとかんがえられる。このように奈良時代ではすでに木材利用に対してきわめて適確な樹種選択が行なわれ、用途に応じて樹種を使いわけていたことがこの例からわかる。

さらに今回の調査結果を見ると、ヒノキ材が圧倒的に多くあらわれ、多種類の木製品に使われていたことがわかった。ヒノキ材は構造材としての優秀さを備えているばかりでなく、切削その他の加工や乾燥も容易で、耐久性が大きい。心材部の保存性はきわめて高く、狂いが少ないといった性質をもっている。当時の人々はすでにこのようなヒノキの材質を熟知しており、建築材、祭祀具、服飾具、食器具、容器、工具、効用具、木簡、その他広く用いたのである。

樹種鑑別用試料のサンプリングは、木製品の原形をそこなわないことを意図し、ブロック状に採取することをさけた。遺物の目立たない部分で必要最少限の大きさをえらび、両刃の安全カミソリで木口・征目・板目の切片をとり、生物顕微鏡で各断面の組織を観察し同定した。

樹種鑑別にあたって、針葉樹ではつぎの諸点にポイントをおいた。1.木口面の観察では、垂直螺旋法²⁾樹脂道の有無、樹脂細胞の有無、早・晩材部の移行の仕方。2.征目面では、分野膜孔の形状、螺旋肥厚の有無、放射仮道管の有無、放射仮道管内壁の螺旋肥厚の有無、膜壁にあらわれる鋸歯状突起の有無、樹脂細胞の有無。3.板目面では、水平樹脂道の有無、螺旋肥厚の有無、放射組織の細胞高および細胞幅。つぎに、広葉樹ではつぎの諸点を調べた。1.木口面では道管・小道管の配列形式、チロースの有無、柔細胞の分布状態、放射組織の幅。2.征目面では、1.道管・小道管の穿孔形状、螺旋肥厚の有無、放射組織の構成細胞の判定。3.板目面では、放射組織の細胞高と細胞幅。そして最終的には現生木の対照標本と照合し樹種を決定した。だが、組織の変質が著しくて、組織上の特徴が確認できず、かつ同定しえないものについては、最も可能性の高い樹種名を肯定的に与え、?を付した。さらに、まったく同定のしようのないものについては不明とした。

1)『平城宮報告IV』p. 34

2)島地謙・伊藤隆夫氏の指導をうけた。

第IV章 造 物

(地区)	(遺構)	(樹種名)	(木 製 品)
6ABR-H	SB7802	ヒノキ	人形(1, 2) 烏形(3, 4) 刀形(5, 6, 8) 錫形 (9) 桧扇(10, 11) 鞍(12) 鮎形木製品(13, 14, 15, 17) 粕子形木製品(18, 19, 22, 23, 25) 筆(26) 鶴形木板(27) 曲物容器底板(28, 29, 30, 31, 32, 33) 曲物容器蓋板(33) 折敷(35, 36) 方形鉢(38) 工 具(櫛?) (41) 有孔小円板(45) 刻みのある木製品(46) フォーク形木製品(48) 柄状木製品(50) 板状木製品 (52, 54, 56, 57) 柄状木製品(61, 62, 65, 66, 67, 70, 71, 72, 75, 76, 77, 78, 79, 81) 木製ヒゴ(82)
スギ			刀形(7) 鮎形木製品(16) 粕子形木製品(20, 21, 24) 盤 (37) 工具(刀子などの合糸?) (39) 板状木製品(51, 53, 55) 柄状木製品(58, 59, 60, 63, 64, 68, 69, 73, 74, 80)
カナメモチ			横櫛
アカガシ亜属			櫛(40)
カエデ属			刻みのある木製品(47)
6ABS・6ABD	SD3715	ヒノキ	人形(1, 2) 刀形(3, 4) 糸持の横木(7, 8) 糸持 の棒木(9) 粕子形木製品(10) 曲物容器(12, 13, 14, 15, 16) 折敷(17) 糸網(19) 有孔小円板(23, 24) 柄の ある部材(28) 切り欠きのある部材(29, 30) その他の部 材(31) 柄状木製品(32, 33, 34, 35, 36, 39) 柄状木製 品(41, 42, 43, 46, 47, 49, 50, 51, 52, 53)
ヒノキ			その他の木製品(55, 56)
スギ			鶴形木板(11) 盤(18) 櫛(21) 板状木製品(37) 柄状木製 品(40, 44, 45, 46) その他の木製品(54)
モミ			横櫛(22)
モッコク			堅櫛(5)
ツゲ			横櫛(6)
ミズキ科?			櫛(20)
サクラ属			栓形木製品(25)
サカキ			栓形木製品(26)
アカガシ亜属			柄のある部材(27) 板状木製品(38)
6ABS-E	SD3765	ヒノキ	人形(1) 曲物底板(2)
		スギ	用途不明木製品(5)
		コナラ亜属	鎌柄(3)
		アカガシ亜属	鍔(4)
6ABE-P	SK3730	ヒノキ	鶴形木製品(6) 櫛(10)
		スギ	方柱形錐状木製品(7, 8, 9)
6ABR-P	SK3784	ヒノキ	匙(11)
6ABE-K	SK5535	ヒノキ	柄状木製品(12)
	SA3777	ヒノキ	合子匙(13)
	SD5505	ヒノキ	桧扇(14) 小円板(15)
6ABE-M	SD5564	ヒノキ	鳥形(16) 曲物容器(17, 18)
6ABE-K	SE9210	ヒノキ	曲物容器(20, 21, 22)
		スギ	用途不明木製品(24)
		イヌノキ	横櫛(19)
		アカガシ亜属	獨楽形木製品(23)

Tab. 40 第1次大極殿地城出土木製品の樹種

6 金属製品・石製品 (PL. 153)

今回報告する地域から出土した金属製品・石製品は少量である。金属製品には帶金具・銅製飾器、刀子、鉄釘、鉄製鎌先などがあり、石製品には石鉤がある。以下、種類ごとに述べることにする。

1 銅帶金具(1) 宮人の朝服などにともなう約帯に装着する帶金具。本例はそのうちの丸帯金具柄の表金具にあたる。梢円形の下辺を直截した形をとり、下寄りの位置に 2.2×0.3 cmの長方形の垂孔をあけている鉄造品で、断面は扁平な台形状を呈する甲高につくり、高さは0.48cmをはかる。裏面には頂部と下辺の両端との3箇所に鋸足を鋸出している。表面は蝕食しており漆塗りなどの痕跡はない。透孔の上辺の一部を失している。縦幅2.06cm、横幅3.23cm、厚さは1.3mmで、鉄鉤帯AⅢに相当する。¹⁾ SD3715から出土した。

2 鉄刀子(2・3) 2は鉄製刀子で、柄尻を折損しているものの、本質の柄がのこっており、保存状態は良好である。刀身は平造りで、表面に鏽が付着しているが、刃部は銳利にとがれ、かつよく使いこんでいる。茎は身とはほぼ同じ長さで、上辺は身の縁と直線に統一され、刃先の側を一段おとして刃闊(はまち)とする。柄はヒノキ板材を加工したもので、断面は梢円形を呈する。柄元の木口周囲には幅0.2cmの銅製資金具がのこり、周縁を一段削って着脱している。長さ(13.3cm)、刀身の長さ6.5cm、同最大幅0.8cm、同株の厚さ0.25cm、茎の長さ6.2cm、同幅および厚さは柄元で 0.7×0.3 cm、末茎で 0.2×0.2 cm、柄の径は柄元で 1.4×0.9 cm折損部分で 1.8×1.2 cm。SD3765出土。

3 はほぼ完形の鉄製刀子の刀身。平造りで、わずかに刃こぼれしているが銳利な刃先をとどめる。茎は身と刀部の双方を一段おとし、末端を欠くが、身と長さがほぼ等しくなる。長さ(13.2cm)、身の長さ6.9cm、同最大幅1.2cm、身の厚さ0.3cm、茎の縁・厚さは基部で 0.7×0.3 cm、末端で 0.2×0.3 cm。SE7145出土。

3 鉄鑿状工具(4) 棒状の身部(袖)に短い茎(コミ)のつくもので、袖は先端を折損しており、残存部分も説明が著しく表而が剥落しているため全形は知りがたい。袖はコミに接する副付部分では断面が径1.1cmの円形を呈しており、やや先細りの形につくり、折損箇所で断面は長方形に移行している。コミは断面長方形で、先端は尖る。おそらく茎の刃物部分の断片ではないかとおもわれる。長さ(11.1cm)、コミの長さ3.3cm、同幅・厚さは胴付で 0.8×0.6 cm。SK8212出土。

4 鉄鉤頭(5・6) 5は鉄造品で鉤足は根元で折損している。鉤頭は二重花弁頭につくり、上段飾に8花弁、下段に12花弁を鋸出し、鉄造後に鍛で整形している。鉤頭の直径1.62cm、同高さ0.54cm。SD3715出土。6は円頭鉤の一種で、鉤頭は縦に細長く、下面はやや斜めになる。鉤足は鉤頭下面の、中心より片寄った位置につき、断面は円形を呈する。いま下端を欠いている。長さ(4.1cm)、鉤頭の径0.9cm、同高さ1.2cm。SD6237出土。

1) 帶金具については、さきに銅飾帯A・B・Cの3種にわけ、それぞれを大小によって1~VI

に細分した『平城宮報告VI』p. 157。

5 銅筒状金具(7) 銅製の薄板を円筒形に曲げてつくったもの。小型品で、一端の周縁を外側に折り曲げて外反させる。板金の厚さ0.09cm、上端径1.0cm、下端径1.4cm、高さ0.9cm。SD8715出土。

6 鉄 剣(8~16) 調査区内のいくつかの遺構から合計32点の鉄釘が出土した。その大半は
タ キ 斷片である。第Ⅰ期東棟SB7802の柱抜取痕跡からは19点出土している(9~13)。いずれも最
近の角釘で、方形の釘頭がつく。9は完形品で、長さ21.1cmをはかる。断面は釘頭の直下で
1辺1.2cmの方形を呈し、やや先細りにつくる。側面に横走する木質の痕跡がみられる。11の
釘頭部分にも斜め方向の木質痕跡が鋳化してのこる。

第Ⅱ期後殿SB7150の柱抜取痕跡からは7点出土しているが、うち6点は建物のハバ抜取
痕跡からまとまって検出した(14~16)。いずれも角釘で、完形品(16)では長さ22.1cmをはか
り、断面は1辺0.9cmの方形を呈する。SB7802、SB7150の鉄釘はそれぞれの建物にともなう
もので、ほぼ同類の釘である。法隆寺五重塔の釘は最大2尺5分(61.5cm)から最小1寸1分6
厘(3.5cm)までの27種、3類に分類されている。本例は法隆寺五重塔で1~11に分類されている
角釘のうち7、8(7寸9分~7寸5分)に相当している。一般に釘は取付材の厚みの2.5倍程度の
長さであり、本例は厚さ9cm内外の材を取付けたことになり、軒まわりの取付材を打ちつけ
たものとおもわれる。

SD5564から出土した角釘(8)は、先端を欠くが現存長26.7cmの細長いもの。その他、SB
6662、SB6663、SB7175の柱抜取痕跡から各1点、SD8715、SK8093からも大型の角釘が各1
点出土している。

7 鉄製鎧(17) 材と材を繋ぎとめる際に用いるコ字型のカスガイで、SD7189から2点出土。
カスガイ 17は断面方形の鉄製角棒の両端を折り曲げたもので、端部はうすくつくられている。鋳化が著
しく、一端を欠する。横幅(19.2cm)、縱幅7.3cm、断面の一辺は1.5cm。

8 鉄製鎧兜(18) 井戸SE9210の井戸枠抜取り痕跡から出土したもので、共伴した土器から
すれば11世紀代のものになる。刃部の先端を欠くが、保存状態は良好である。芯は真直ぐで、
刃部は内側に彎曲する。最大幅は刃部中央にあり、芯はやや先細りにつくる。茎の末端を折り
曲げており、その状態から、当初は柄に対して150度の角度で装着していたと推定される。長
さ(19.3cm)、最大幅3.1cm、厚さ0.3cm。

9 石 箭(19) 腰帯に装着する帶飾具の遙方である。やや横長の方形の石板で、各面とも
平滑に研磨する。側面はわずかに上方に内傾し、断面は台形を呈する。裏面の凹面に2孔を1
対とする小孔をあける。これは雄で斜めに穿つて連絡させており、帯に縫い付けるための潜り
孔である。石質は緑色岩類で石持帯分類のb IVに相当する。縱幅2.24cm、横幅1.90cm、厚さ
0.55cm。6ABOKSA109の北側溝出土。

1) 法隆寺国宝保存委員会『国宝法隆寺保存工事
報告書 第13巻 五重塔』1955 p.249

2) 基本端部分の折返しの角度と装着の方向は必
ずしも対応しないが(浜松市教育委員会『伊場
遺跡遺物編 1』別冊岡版 1978 図版第3-1)

4~5), とりえず折返し角で装着を想定して
おく。

3) 石箭帯については、さきにa, b 2種にわけ
それぞれに大小の別があつたろうことを指唱し
た(『平城宮報告VI』p.160)

7 錢 貨 (PL. 154・155)

今回報告する地域から合わせて19種63点の銅錢が出土した。そのうち遺構から出土したもの 和同開珎 は和同開珎、萬年通寶の2種27点である。それ以外は遺構面上の遺物包含層で検出したものであり、埋没年代を決めがたいものである。1点の隆平永寶はかは唐・宋・明代の中國錢15種¹⁾点と寛永通寶8点がある。個々の計測値については Tab. 41・42 にまとめた。

1 和同開珎(1~23・28) 和同開珎は24点ある。うち23点は昭和SD5558にまとまりになって埋没していた(1~23)。保存状態は良く、銹化していないものも少なくない。23点のうち22点は字彫が比較的細く、簡明で、錢の跡上りもよい。和同開珎Aで「普通和同」とよばれるものである。23は鏡文、跡上りとも和同開珎Aにによるが、「年」字の末画を眺ねており、「跡和同」とよばれるものである。28はSB7802の柱抜取底跡から出土したもので、「年」字部分の小片である。

2 萬年通寶(24~26) 24は表面の銹化が著しく、錢文もきわめて不明瞭である。25は外縁が 萬年通寶 幅広く、外周仕上げは粗雑であり不整円形を呈する。内部の孔の仕上げも粗略で、表面は銹化している。萬年通寶Bで「闇縁萬年」と呼ばれるもの。26は「年」字の第4画が第5画に接しないで横から上にはね上げる書体を示す。萬年通寶Fで「横点萬年」にぞくする。24はSD5530、25・26はSD3715から出土した。

3 隆平永寶(27) 外縁が厚く、内郭が大きい。錢文は「平」字の第1画と第4画の間隔がせ 習平永寶 まく、末画が長い。また「永」・「寶」字が比較的小さいなど、「中様長年小字」の特徴をよくしめます。6ABE-K地区の遺構面上の堆積土から出土。

なお、中國錢および寛永通寶は計測値・出土地区等を表示するにとどめる。

1) 皇朝十二錢の分類および材質質についての参考文献は、『平城宮報告IV』p. 97~103参照

第IV章 遺物

番号	銭貨名	(W)	(G)	(N)	(g)	(n)	(T)	(t)	(出土地点)	備考
1	和同開珎	2.186	24.12	20.88	7.85	6.43	1.07	0.47	SD5558	和同開珎A
2	"	2.632	24.52	20.95	7.88	6.10	1.36	0.44	"	"
3	"	2.064	24.05	21.00	7.80	6.25	1.10	0.39	"	"
4	"	2.488	24.83	20.80	7.83	6.20	1.12	0.46	"	"
5	"	2.563	24.48	20.50	7.75	6.13	1.24	0.41	"	"
6	"	2.600	24.70	21.00	7.88	6.48	1.39	0.52	"	"
7	"	2.009	24.38	20.95	7.65	6.53	1.37	0.43	"	"
8	"	2.871	24.78	21.10	7.80	6.25	1.20	0.50	"	"
9	"	2.499	24.83	20.98	7.63	6.20	1.17	0.31	"	"
10	"	3.171	24.18	20.28	7.78	6.48	1.32	0.67	"	"
11	"	2.562	24.55	21.10	7.78	6.28	1.33	0.45	"	"
12	"	3.495	24.68	20.83	7.90	6.63	1.52	0.60	"	"
13	"	2.517	24.73	21.33	7.83	6.28	1.11	0.48	"	"
14	"	2.825	24.68	21.03	7.85	6.20	1.36	0.40	"	"
15	"	2.857	24.90	21.23	7.98	6.18	1.31	0.40	"	"
16	"	2.337	24.28	20.93	7.78	6.15	1.39	0.49	"	"
17	"	2.326	24.35	20.88	7.80	6.18	1.49	0.70	"	"
18	"	2.931	24.48	20.68	7.88	6.18	1.26	0.64	"	"
19	"	2.945	24.48	20.98	8.08	6.23	1.18	0.62	"	"
20	"	2.281	24.13	20.93	7.78	6.28	1.22	0.36	"	"
21	"	2.689	24.25	20.25	7.73	6.53	1.18	0.72	"	"
22	"	2.342	24.25	20.75	7.78	6.23	1.43	0.37	"	"
23	"	2.356	24.23	20.58	7.65	6.40	1.24	0.53	"	一跳和同
24	萬年通寶	2.443	25.80	22.55	8.85	7.63	1.40	0.90	SD5530	
25	"	3.870	26.30	21.75	8.45	6.53	1.70	0.59	SD3715	萬年通寶B
26	"	2.825	25.53	21.10	7.73	6.33	1.52	0.50	SD3715	" F
27	隆平永寶	3.588	25.53	21.53	8.97	6.63	2.15	0.85	6ABE-K	中様長年小字
28	和同開珎	—	—	—	—	—	—	—	SB7802	小片

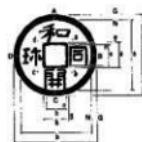
※銭貨の各部測定について下のとおりである。

$$\text{外縁外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}, \text{ 外縁内径 } N = \frac{Na + Nb}{2}, \text{ 内郭外径 } g = \frac{ga + gb}{2},$$

$$\text{内郭内径 } n = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外縁厚 } T = \frac{A+B+C+D}{5}, \text{ 文字面厚 } t = \frac{a+b+c+d}{4}$$

重量は電子天秤 (SHIMADZU, DIGIBALANCE D-1003 H 0.1mg) を使用し、下二桁を四捨五入した数値を表記した。厚味はマイクロメーター (N・S・K : 0.01mm) を使用し、下二桁を四捨五入した。



Tab. 41 銭貨の計測値 (1)

第IV章 遺 物

番号	銭貨名	W	G	N	g	n	T	t	出土地	初譜年	備 考
29	開元通寶	3.357	24.45	20.65	7.90	6.38	0.98	0.55	6ABE-K	AD 621	背面内郭 の上に月 文
30	"	2.327	25.00	20.38	7.85	6.63	1.22	0.75	6ABE-M	"	背面無文
31	太平通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	976	
32	至道元寶	—	24.78	17.35	7.20	5.55	1.45	0.82	6ABQ-B	995	行書体
33	景德元寶	—	24.18	20.15	7.10	5.85	1.15	0.72	6ABE-M	1004	真書体
34	祥符元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABP-G	1008	
35	天聖元寶	3.123	24.88	20.38	8.13	6.70	1.20	0.69	6ABE-K	1023	真書体
36	"	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	1023	"
37	皇宋通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-P	1037	"
38	"	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	"	"
39	嘉祐通寶	2.604	24.18	19.30	7.95	7.90	1.08	0.71	6ABE-M	1056	篆書体
40	熙寧元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	1068	真書体
41	"	2.530	24.43	19.98	8.30	5.85	1.38	0.81	6ABQ-B	"	"
42	"	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	"	"
43	"	—	24.03	18.75	7.90	6.00	1.56	0.12	6ABE-Z	"	篆書体
44	元祐通寶	—	24.23	19.98	8.40	6.85	1.51	0.84	6ABR-Z	1086	"
45	"	—	24.45	19.15	7.90	6.25	1.23	0.71	6ABE-M	"	真書体
46	元符通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-Z	1098	"
47	"	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-H	"	"
48	聖宋元寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABQ-C	1101	篆書体
49	大觀通寶	3.372	24.43	21.43	7.28	6.03	1.68	0.86	6ABE-K	1107	
50	政和通寶	—	—	—	—	—	—	—	6ABR-Q	1111	真書体
51	"	—	25.08	21.15	8.40	6.68	1.44	0.90	6ABE-M	"	"
52	永樂通寶	3.303	25.55	20.93	7.33	5.65	1.60	0.58	6ABC-U	1408	
53	"	3.451	25.05	20.73	6.88	5.68	1.41	0.73	6ABQ-B	"	
54	"	—	24.90	20.90	6.90	5.04	1.62	0.67	6ABQ-B	"	
55	"	—	25.40	20.63	6.63	5.13	1.53	0.45	6ABQ-B	"	
56	寛永通寶	3.337	25.03	19.65	7.18	5.03	1.52	0.75	6ABE-M	1626	
57	"	2.638	25.18	20.50	7.35	5.83	1.20	0.66	6ABR-A	"	
58	"	2.445	24.53	19.43	7.03	5.68	1.00	0.47	6ABR-H	"	
59	"	2.032	23.78	19.98	7.60	6.15	1.28	0.64	6ABR-H	"	
60	"	3.310	23.43	19.40	7.20	5.60	1.34	0.91	6ABS-E	"	
61	"	1.988	21.95	17.43	7.33	5.93	0.82	0.59	6ABR-P	"	
62	"	—	24.65	19.45	7.05	5.85	1.37	0.52	6ABQ-C	"	
63	"	—	23.95	18.60	7.70	5.60	1.20	0.79	6ABR-L	"	

Tab. 42 銭 貨 の 計 測 値 (2)

第V章 考察

1 第1次大極殿地域の変遷

平城宮の中軸部に位置する第1次大極殿地域の遺構が、第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期に大別できることは、すでに述べたところである。ここでは各時期がさらに小期に細分しうること、および各時期の遺構にみられる配置計画などについて考察する。

A 平城宮造営以前および造営時の遺構

広場地区で検出した古墳SX7800は5世紀後半にぞくする。宮内にかつて存在した古墳が平城宮造営時に破壊されたことは、市庭古墳や神明野古墳の大型前方後円墳の痕跡をすでに発見していることによって、歴然としている。SX7800は大型前方後円墳とはことなる小方墳であるが、類似の古墳は6ALR区(第43次調査)においても検出されている。こうした小古墳の発見と宮内の各所で発見される埴輪や土器の存在によって、いまではみられない多くの古墳が存在したことことがうかがわれる(fig. 96)。

広場地区の溝SD3772は浅い溝であり、東北方から西南方に流れる。地形的には丘陵縁端の低地にあたり、付近から古墳時代の遺物が発見されていることなどから、古墳時代にぞくする可能性がつよい。この溝に接する2棟の建物SB3773, SB3774も時期を決める手掛りを欠くが、西南に向いあってるので溝と同時存在の遺構とした。宮内の佐紀池や第2次東朝東側下層に古墳時代の大溝があり、木製農具や土器などが発見されている。この地域は位置的に両者の中間点にあり、これらの遺構も古墳時代にぞくするものとおもわれる。

広場地区を南北に貫通するSD7787は下ツ道東側溝にあたる。平城宮内では朱雀門、第1次朝堂院南門で検出しており、幅約20m内外の道路敷が、奈良盆地の北辺におよんでいることがわかる。今回検出した東側溝の遺存状況は必ずしも良好でないが、東側溝の北端は広場地区の北辺でとどまり、との丘陵上では検出していない。さきに大膳殿地域第1期の建物として報告したSB167, SB176は、北面築地回廊の建設以前にぞくすることになった。ともに平城宮の方位にくらべて北で西にふれている。また、比較的規模の大きい建物であり、SB167には建替えもみとめられるので、平

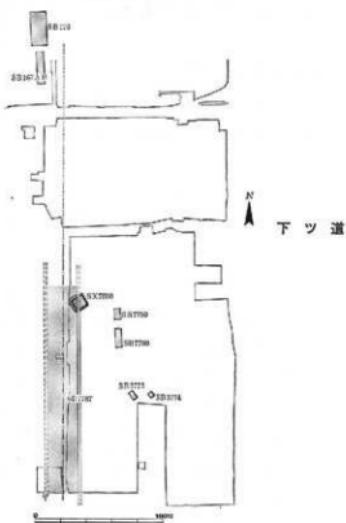


fig. 96 造営前の遺構

城宮造営にともなう仮設建物とはしがたい。だとすれば、下ツ道が存在した頃の建物であろうか。広場地区で検出した2棟の建物SB7780, SB7790も同様の造構である。ただし、一般の住宅ともかんがえられず、それら建物の性格についてはいまのところ不明である。しかし、想像をたくましくすれば、さきに朱雀門付近6ABY区の西側溝(SD1900)から出土した木簡に「過奈 開 所」ふくまれていたことからすると、SB176・SB167あるいはSB7780・SB7790などは奈羅開に関係する官衙の建物であった可能性もある。

広場地区のSB7816, SB7817, SB7824はいずれも地山面で検出した小規模建物であり、時期を決める手掛りを欠く。ここでは平城宮造営当初における仮設小屋にあてておく。広場地区的建物SB7765, 岐倉地区と大膳職地区的建物SB7164, SB8117などは、第I期の造構として説明してきた。それらは層位的に第I期の造構と同じ状況で検出されたが、柱掘形が小さく柱間が不揃いであることなどから、造営時の仮設小屋にあてた。

B 第I期の造構

第I期は4小間に細分することができる。それは創建、増築、解体、再建という第1次大極殿の創建から機能停止にいたる変遷である。

第I-1期(fig. 97) 南門SB7801から四周をめぐって築地回廊SC5600, SC7820, SC5500, 築地回廊 SC8098が続き、回廊内の北側に一段高い壇をもうけ、その前面に埠塲擁壁SX6600を築く。SX6600の左右には斜道SF9232Aがつき、中央に木造の階段SX6601がある。擁壁の南は広々とした陳敷の広場で、中軸線上に南北溝SD7142を東西溝とする約40m幅の南北通路が存在したことになる。広場における施設としては井戸SE7145が唯一である。回廊内からの排水は南面築地回廊SC5600に付設された各種の盲管渠や玉石敷の雨落溝によっている。

壇上(廄舎地区)では正殿SB7200と後殿SB8120が確認されているにすぎない。左右にも建物正殿と後殿が存在しうる余地をのこしているが、造構として残存しない。正殿SB7200の前には仮設的な小規模建物が3回にわたって建設されており、そのうちもっと古いSB6680をこの時期にあてた。この建物はSB7200の北面階段と同位置に想定しうる南面階段位置をさけており、本来は南面にも3個の階段が存在したことをしめしている。

東外郭には南北溝SD3765を掘り、それに築地回廊内からの排水をうけている。SD3765の北端は不明瞭だが、北部では後の南北溝SD3715と同位置にあり、それが西に直角に折れてSD3765に連つたのであるまいか。東外郭の北部に3棟の小規模建物SB8330, SB8315, SB8234がある。建設時の総合にも比定しえようが、その位置が築地回廊の東面北門位置に接していることから、警固の衛士などの詰所とかんがえられよう。なお、後の調査によって、第1次朝堂地域ではSD3765の約18m東で古い南北溝SA8410が確認されているが、この南北溝が東外郭でどのように展開するかあきらかでない。

北外郭の状況は以前に報告した考察とはかなりことなるところとなった。すなわち、第I期北外郭の官衙建物から2棟の建物がへり、西方に想定した園池SG149は凹地形を造営時に埋立てたものであり、また後にも若干の擾乱をうけているものと理解せざるをえなくなった。したがってこの時期の建物は宮の中軸線をはさんで、東にSB317、西にSB170を配し、後方に東西溝SD

1) 『平城宮報告II』 p. 34

1 第1次大極殿地域の変遷

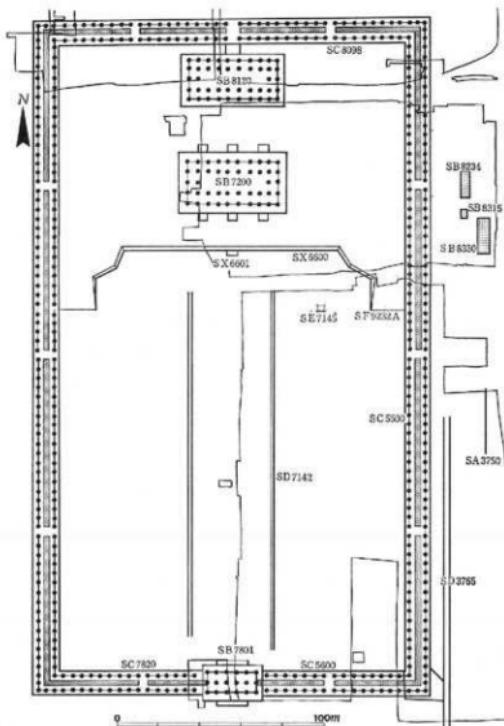


fig. 97

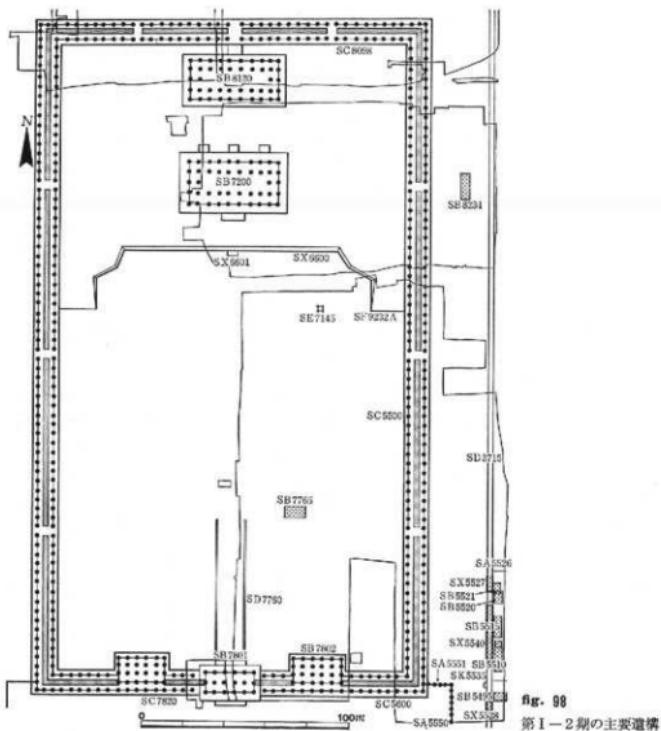
第1—1期の主要遺構

0 100m

141が流れるという簡単な建物配置をとる (fig. 50)。

第1—2期 (fig. 98) 南面築地回廊SC5600に東棟SB7802を増築した時期である。広場の際 東棟の増築は敷きなおし、南北通路の幅が約14mに狭くなったことが東側溝SD7760によってわかる。同時に雨落溝などが部分的に改修されるが、回廊内は基本的に変化しない。

殿舎地区では正殿SB7200の前面左右にたつ方形の小建物SB6636、SB6643をこの時期にあてたが、それはさきのSB6680よりも新しいというほどの意味である。また建物SB6605も方形建物のうち仮設的にたてられたものとかんがえる。ともかく、2棟の小建物はさきに想定した左右の階段位置にあたっており、この時期の南面階段は中央のみの1個に減少したことがわかる。東外郭では南北溝SD3765が埋立てられ、築地回廊の東南隅に朝堂院の櫻SA5551A、SA5550A 朝堂院がとりつけられた。つまり、この時期を特徴づける点は朝堂院がとりつけられたことであり、SB7802の建設も朝堂院からの傍観を配慮したものようである。しかし、SB7802とSA5551A・SA5550Aを同時につくった証拠はなく、朝堂院のほうがさきに成立している可能性もある。後述するように『続日本紀』によれば延喜元年には朝堂院が確実に存在している。SD3765の廃止とともに、内裏・第2次大極殿地域との境界に新しい南北溝SD3715がつくられた。

fig. 98
第I-2期の主要遺構

このSD3715と第2次大極殿西外郭とにはさまれる幅のせまい地帯にSB5495をはじめとする小規模建物が南北につらなり、溝上には横状の施設SX5527, SX5540, SX5528がつくられる。こうした小建物がさらに南にのびていることが、後の調査で判明しているので、朝堂院の建設とともになう仮設小屋に比定しておく。

東外郭については、第I-1期と大きな変化がないものとかんがえる。

第I-3期(fig. 99) 東面築地回廊SC5500が撤去され、南北溝SA3777に変えられる時期で

撤去ある。殿舎地区の正殿SB7200もこの時期に撤去されたものとする。これは後述のように恭仁京遷都に際して大極殿と歩廊を移建したことにあるからである。この地域の第I-4期の使用状況をしめすSB7802出土木簡によれば、殿舎地区の建物がすべて消失したとはかんがえられないで、後殿SB8120については残存したものと推定する。東外郭、北外郭については大きな変化がなかったようである。広場の井戸SB7145については一応この時期まで存続するものとしたが、SB7200などとともに撤去されて存在していないかもしれない。

東面築地回廊の再建 第I-4期(fig. 100) 第1次大極殿地域が復興する時期である。正殿SB7200は再建されなかつたが、東面築地回廊SC5500が再建された。同時に、回廊内からの排水を南北溝SD3715に導

1 第1次大極殿地域の変遷

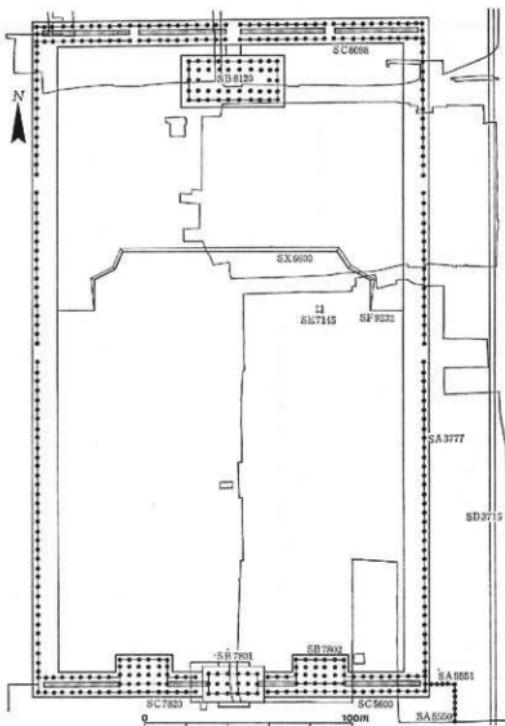


fig. 99
第I—3期の主要構造

く数条の木檻暗渠や開渠がつけられた。南面築地回廊SC5600の北側に東西溝SD5590を掘り、北方からの雨水などをここに集め、南東隅の木檻暗渠で回廊外に排水するように改めた。第I—1・2期の広場南部には大量の砂質土が堆積しており、この地区的滞水状況を物語っている。そこで、郭内の排水に留意した結果、排水施設がSC5500の南部に集中することになったものとおもわれる。また、第I—1期に設置した回廊基壇縁の盲窓渠が、このころには目詰りして機能が失われたことによるのであろう。回廊の雨落溝も改修されている。

東外郭では、南寄りのところで東西溝SA3780と東西溝SD3775とで遮蔽し、門SB3746を通って往来するようにした。北外郭には中軸線をはさんで東西にわかれれる建物群が存在するが、北辺に東西溝SD126をめぐらす程度で、とくに建物を囲繞する施設をつくっていない。

第I期の地割り(fig. 101)はじめに第1期の第1次大極殿地域が平城宮全体のなかで、どの宮内地割りのように設定されているかという点についてのべよう。大極殿南門(SB7801)と朱雀門心々距離は533.04m+0.296=1800尺(大宝大尺1500尺、以下大宝大尺は大と略する)。この長さは平城京地割り

1) さきに述べたように平城遷都初期に想定される道幅の基準尺は0.294~0.296と短い。ここで

はその大きいほうの数値をとった(『平城宮報告』IX, p. 86)。

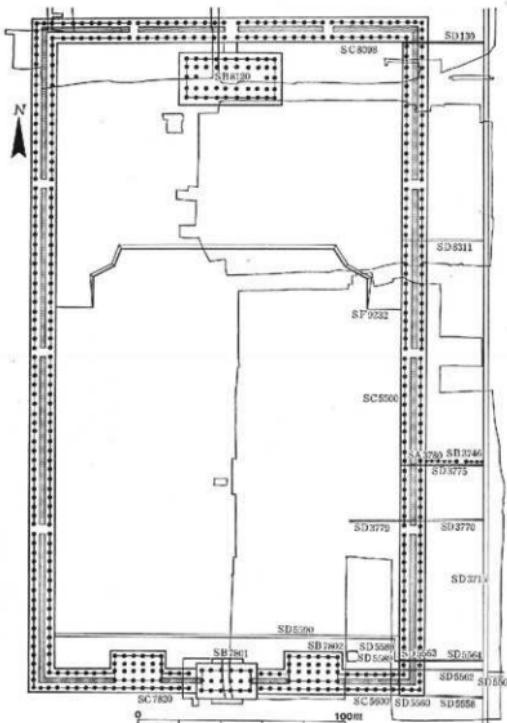


Fig. 100
第I-4期の主要造構

計画の1坊分の長さと一致し、平城宮の南北長さが2条分の長さを基準にしていることからすれば、朱雀門から1条分の長さをへだてた平城宮の北半に第1次大極殿を割りつけたことを意味する。平城宮の宮城諸門は条坊地割り計画にもとづくものであるから、西面の佐伯門からの南北方向 びる道路よりも大極殿南門が若干北によっていることになる。ちなみに、南に位置する第1次 朝堂院南門と朱雀門中心々距離は $248.84m \div 0.296 = 840.4\text{尺}$ ($\div 840\text{尺}$ 、大700尺)となり、第1次朝堂院の南北長は $284.2m \div 0.296 = 959.8\text{尺}$ ($\div 960\text{尺}$ 、大800尺)である。

第1次大極殿北面築地回廊と南門との心々距離は $317.7m \div 0.296 = 1072.9\text{尺}$ ($\div 1080\text{尺}$ 、大800尺)である。それに対して北面築地回廊と北面大垣との心々距離は $170.1m \div 0.296 = 575\text{尺}$ ($\div 580\text{尺}$ 、大483尺)と端数を生じることになる。こうしたことから、南北方向の地割りは朱雀門を起点とし、大宝大尺100尺単位のラウンドナンバーで朝堂院と大極殿の位置を決め、端数が後方にあつめられたことを意味する。

東西方向 第1次大極殿地域の中軸線と東面築地回廊との心々距離は $88.3m \div 0.296 = 297.3\text{尺}$ ($\div 300\text{尺}$ 、大250尺)であり、全体の東西幅を $176.6m$ (600尺、大500尺)に復原しうる。一方、内裏地域の北面屏SA486は長總 $177m$ (600尺、大500尺)であり、第1次大極殿回廊との間に300尺(大250尺)

1 第1次大極殿地域の変遷

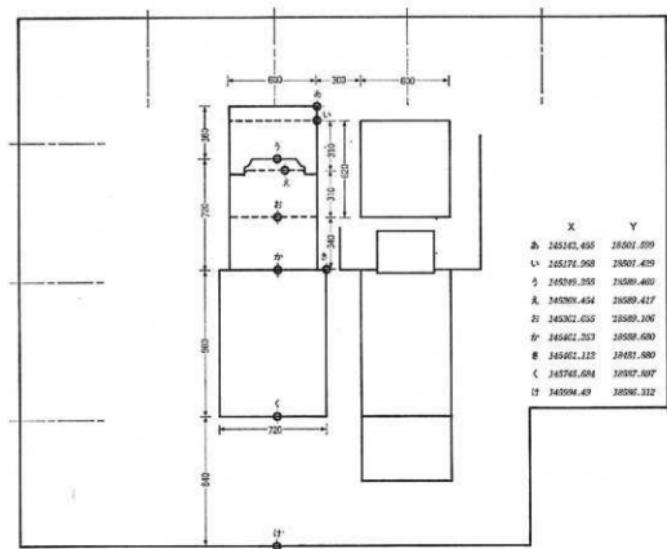


Fig. 101 平城宮内における第1次大極殿地域の地割り
数字は天平尺、X,Y の値は平面直角座標系
第6系、単位m、値は負数である。

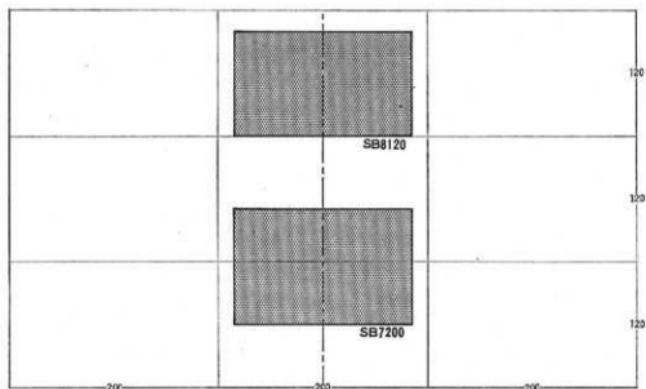


Fig. 102 第1期建物の配置計画

の間隔をおくことが判明している。すなわち、南面宮城門である西の若犬養門と東に位置する壬生門との心々距離1800尺を3分し、その中央部分を第1次大極殿地域にあてたのである。なお、内裏地域と第1次大極殿地域との中间点はほぼ南北溝 SD3715 にあたり、若犬養門中軸延長線と第1次大極殿地域との中间点は佐紀池からの水を導く南北溝 SD3825 とほぼ等しい。

このようなことから、第1次大極殿地域と外周の火垣および宮城諸門とが密接な位置関係にあることが判明した。しかしながら、それは計画上のことであり、実際の施工では大垣などとは別個に建設されたであろう。このことを裏付ける資料が、中軸線の振れである。朱雀門心と朝堂院南門心とを結ぶ中軸線は平城官方位に対して西へ $0^{\circ}32'5''$ 振れており、朝堂院南門の中心は朱雀門の中心にくらべて $1.06m$ 西に偏していることになる。つぎに朝堂院南門心と大極殿南門心とを結ぶ中軸線は平城官方位に対して $0^{\circ}01'13''$ 西へ振れ、大極殿南門の心が $0.1m$ 西に寄っていることになる。大極殿南門心と大極殿北面築地回廊心とを結ぶ中軸線は $0^{\circ}04'33''$ 西へ振れ、北面築地回廊心が $0.3m$ 西によっていることになる。つまり、朝堂院、大極殿地域における中軸線の振れは小さく、施工誤差として看過できる数値であるのに対し、朱雀門と朝堂院南門に存する中軸線の振れは大きく、両者の間に測定基準に違いがあることをしめしている。

この時期の地割りを特徴づけるもう一つのことは、()内で示したように大宝大尺によれば、
大宝大尺 ラウンドナンバーをえられる点である。このことについては、藤原宮、難波宮などとの比較が必要であろうが、第1次大極殿地域が藤原宮からの遷都当初から存在したことを見付ける有力な手掛りとなる。

第I期の建物配置 (fig. 102) 建物地区における復原した2棟の建物はともに中軸線上にある。正殿 SB7200 の心(N196)は、埠積擁壁 SX6600(N163)から北面築地回廊心までの距離 $106.5m$ (380尺、大300尺) の南 $1/3$ 地点とほぼひとしく、後殿 SB8120 の推定基壇前縁(N232.2)が北 $1/3$ 地点とほぼ一致する。一方 SX6600 と SB7200 基壇前縁との距離は $18.22m$ (± 60 尺) であり、SB7200 と SB8120 との基壇間隔は $21.4m$ (約70尺) になる。2棟の建物はともに東西の築地回廊心々距離を3分した中央におさまっている。以上のようなことから殿舎地区の地割りは、殿舎地区を9等分したのち、中心部の南2画を正殿、北1画を後殿にあてたものと推測される。

第I—2期に増築した SB7802 の東西心 (W225.15) は築地回廊基壇の東入隅部 (W184.5) から南門の中軸線までの距離を2等分した地点とほぼ等しいところにあり、南面築地回廊の内法を4等分した地点に東西建物の心をおいたことが想定できる。

C 第II期の造構

第II期の造構では、殿舎地区東第1群建物のSB6660とSB6655に、或いはSB7151増改築が認められる程度であり、建物の重複関係によって小期にわけることはできない。しかし、中央建物群のSB7150の柱抜取痕跡からは、他の建物の場合よりも若干古い平城宮土器Vが出土している。後述するように SB7150 を西宮複殿にあてると、宝龟元年 (770) に称徳天皇はここで崩御したことになる。平安時代の例では天皇の没後その寝殿をとりこわした慣例があるので、SB7150 は称徳天皇崩御後にとり壇した可能性が強い。第1次朝堂院を画するSB5551A、SB5550Aはこの時期に築地に改められた。ただし、今回の調査地ではそれを裏付ける資料を発見しておらず、後の朝堂院地域の調査成果にもとづいている。

1 第1次大桶職地域の変遷

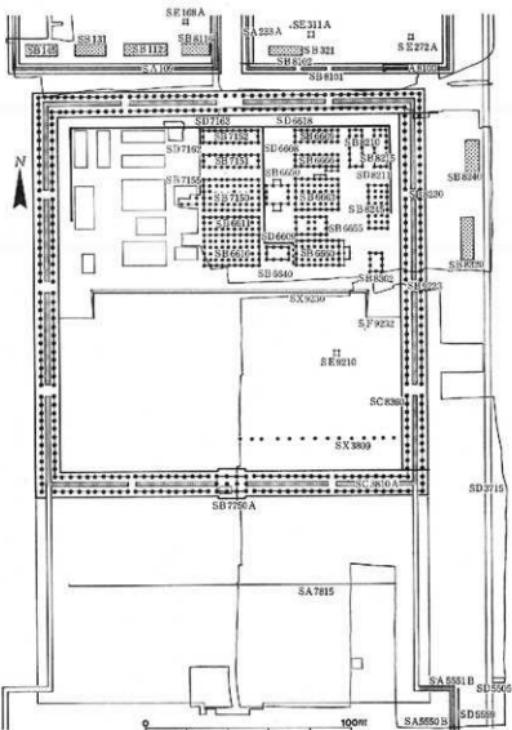


fig. 103
第Ⅱ期の主要遺構

この時期に南面と北面の築地回廊を内側によせるのであるが、その際、6 ABE-K・M地区における第Ⅰ期東面築地回廊南部の状態が問題となる。この場合つぎのような状況が想定できるであろう。1 SC5500がなお築地回廊として存続する。2 SC5500の築地のみ存続して朝貢院の築地と連結する。3 SC5500を完全に撤去して、どのような遺構物も設けなかった。

造構としてはなにも存在しないのであるが、ここでは第1次大極殿地城と第1次朝堂院地城との連続性と、第1次朝堂院の北面築地が北面の全域を遮蔽した痕跡がないことから、^b 2の立場をとり、この時期の東面築地回廊 SC3810A と朝堂院築地 SA5551B を結ぶ築地が存在したとのとかんがえる。傍証ではあるが、この時期の南面築地回廊外の東西源 SA7815 の東端が、かつての回廊基壇付近で停止しており、基壇とともに築地が存在したことが想定できる。ただし、第1次朝堂院の詳細な時期区分や終末年代については、現在進行している同地域の発掘調査成果にもとづいて後考したい。広場地区の礎敷も整備されるのであるが、井戸 SE9210 を新設するほかは建物などを建てた痕跡はない。

1) もし築地を設けていたらSB7802南側柱掘形の埠土に土層変化が生じているはずである。

東外部では依然として南北溝SB3715が中央幹線水路としての機能を維持する。回廊の東面北門外に2棟の建物がたつ。第I期の場合のように衛士などの詰所にあてておく。北外部の大廳職としての官衙はこの時期に成立する。この地域は3小期にわかれれるが、すでにふれたのでここでは再論しないことにする(p. 94参照)。

第II期の地割り すでに述べたように、この時期の築地回廊は第I期のそれを縮小した敷地の縮小 ものである。東西幅は第I期の規模を踏襲し、南北の長さが縮まるのである。すなわち、南面築地回廊SC3810Aは第I期の南面築地回廊位置から北へ99.85m(333尺)移動し、北面築地回廊SC6670は第I期の北面築地回廊位置から南へ31.52m(105尺)移しているのである。したがって、南北の長さは186.08m(620尺)となり、東方の内裏地域とはほぼ等しい方形に近い平面形をとっている。第I期から第II期の間には基準尺の変化がある。この時期の殿舎地区における建物の基準尺が29.9に復原できることからすると、東西幅は590尺、南北長620尺となる。また、この時期に改修された石積擁壁SX9230は南北2分の1地点で東西にのび、この地域を南北にわけている。そして、南半分は依然として広場である。

第II期の建物配置 (fig. 104) 殿舎地区の中央と東半分とで15棟の建物を検出したのだが、建物配置を左右対称にかんがえると全体で27棟の建物が林立することになり、回廊をくわえると敷地面積に対する柱心での建築面積の比は約37%となり、内裏地域の盛時における建物の棟数に比肩している。しばしばのべてきたように建物配置はすこぶる計画的であり、殿舎地区全10尺方 墓域を10尺(2.99m)方眼に割り、個々の建物を配している。建物群は石積擁壁と北面回廊からそれぞれ内側に45尺へだたり、東西回廊心からそれぞれ40尺内側に位置し、東西510尺、南北220尺の長方形区画内におさまる。その内部に原則として柱間寸法を10尺とする建物を中心部と外縁部とに大別して配置したようである。すなわち、中心部は南北140尺、東西350尺の長方形区画であり、中心に間口9間の3棟を南北に並列する正殿(SB6610, SB6611, SB7150)をおき、廐のある脇殿を四隅におき、その間に主殿と脇殿、脇殿と脇殿とを結ぶやや小さい建物を介在させる。外縁部は、中心部である長方形区画の外側をめぐる幅80尺のコ字形の部分であり、中

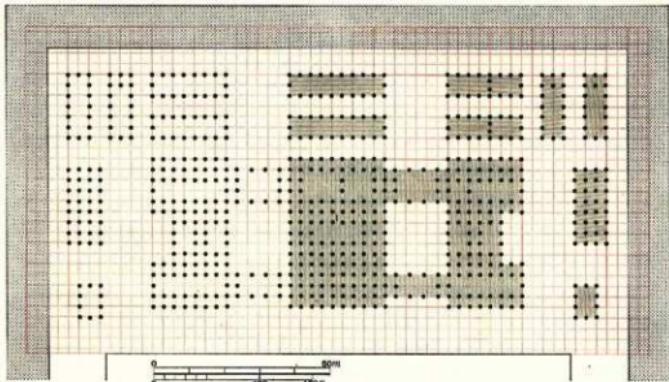


Fig. 104 第II期建物の配置計画

心部の後方には東西棟、側面には南北棟の建物を配している。復原的にいうならば、この正殿と脇殿の後方に計6棟を配し、脇殿の左右にそれぞれ4棟、合計14棟の付属建物を配置することになる。

D 第Ⅲ期の遺構

第Ⅲ期の遺構については、2小期に区分した。たとえば東北隅のSB8219・SB8218に替えがみられるものの、全体として建物配置に大きな変更がない。一方、正殿SB6620の後身建物とみられるものがあるが^a 規模が格段に小さく、他の建物群と併存したとはかんがえられない。こうしたことから、後述のように第Ⅲ-1期を平城上皇の内裏にあて、第Ⅲ-2期をそれ以後のものとみなしている(fig. 105)。

第Ⅲ期の建物配置(fig. 106) ここでは第Ⅲ期当初の建物配置について検討しよう。この時期の建物は第Ⅱ期とことなり、廊を広くとることを特色とし、すべての建物が10尺の柱間寸法でないため、第Ⅱ期のように単純な方法では解決しない。殿舎地区は第Ⅱ期と同様に南北は北面築地心から石積擁壁まで310尺、東西は築地心々距離590尺の長方形区画をもつ。この区画内を東西・南北に画する堀は、中軸線および北面築地・石積擁壁を基準とした10尺方眼で計画的に10尺方眼配置されているようである。

中軸線上にある正殿SB6620の棟通りは石積擁壁SX9230の北110尺、北面築地の南200尺のところにあり、殿舎地区南北長さをほぼ3分した南3分の1線上に位置する。同じく中軸線上にある後殿SB7170の棟通りは北面築地の南80尺にあり、SB6620との心々距離は200尺である。脇殿の位置は、正殿と後殿によって規制されているようである。南に位置するSB6622の棟通りは中軸線の東110尺にあり、それは正殿と石積擁壁との距離にひしひし。また、北妻柱列は正殿の南廊にそろえている。SB6622の東にあるSB8300の棟通りは中軸線の東190尺に位置し、南妻柱列をSB6622にそろえているようである。北に位置するSB6621は棟通りを後殿のそれにそろえ、桁行の心は中軸線の東100尺にあたる。もう1つの脇殿SB7173は、周囲の正殿、後殿、脇殿SB6621との関係で位置が決められたようである。すなわち、東側柱筋をSB6621の西妻柱筋に、西側柱筋を後殿の東妻柱筋にそろえており、結果的には棟通りが中軸線の東55尺となる。また桁行の心は正殿の北廊と後殿の南廊の中間にあたる。このようにして主要建物の配置がきまり、それを堀でかこんでいる。

北面築地心から160尺、殿舎地区南北長310尺のほぼ中にあたる地点に東西堀SA6621をもうけ、また北面築地心から40尺南に後殿を西するSA6626を、80尺南に北東隅の附属屋区域を堀の区画2分するSA8217がもうけられている。東西を画する堀としては、中軸線から150尺東にSA6625をもうけ後殿SB7170、脇殿SB7173、SB6621、SB7172、SB7209をかこむ区画をつくり、さらにその東に30尺の通路をおいて付属屋区域をかこむSA6629を設けている。また中軸線の東110尺のところにSA6623をつくり、正殿の東面を画している。以上の堀はすべて整然として10尺方眼にのる。そして、堀でかこんだ東北隅の区画のなかにはそれぞれの中心に1棟ずつ建物を配置している。なお、広場地区のSB7141、SB92220については第Ⅲ期におく絶対的な根拠がなく、第Ⅱ期に遡る可能性もあることはすでに述べた。

第V章 考 察

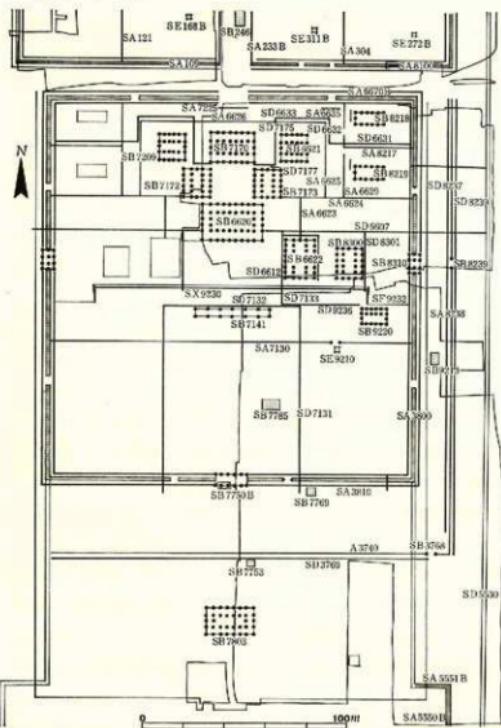


fig. 105
第三-1期の主要遺構

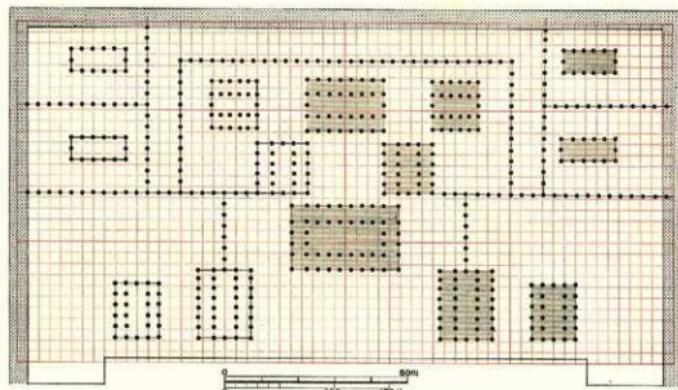


fig. 106 第III-1期建物の配置計画

2 第1次大極殿地域の性格

四隅に長方形の築地回廊をめぐらす第1次大極殿の区画は、平城宮でもっとも重要な区画の一つである。ところでこの区画には、すでに述べてきたように第Ⅰ期から第Ⅲ期に至る変遷がみとめられる。この3時期にわかれ各時期の造構がどのような性格のものであり、「続日本紀」をはじめとする文献史料にみられる宮殿名称にどのように対応するのであろうか。この点について、從来から蓄積してきた先行学説に対する検討をふまえながら、若干の考察をこころみてみよう。

A 諸説の検討

この区画についての最初のまとまった見解は、閑野貞の『平城京及大内裏考』である。閑野はこの区画を内裏とかんがえ、その南につづく朝堂院風の南北に長い地域を南苑に比定し、さ 閑野説 らに東方で大極殿や十二堂などの土壇の一部が残存するところを朝堂院にあてた。また、後に問題にする西宮の所在地を平城宮西邊に位置する「大りの宮」という小字名のあるところとし、東宮は朝堂院の北、内裏の東に推定した。一方、「続日本紀」にしばしばあらわれる中宮については、その機能が内裏とほぼ同じであることから、内裏の別称とかんがえたのである。

閑野貞のつぎに提起された説は、『平城宮報告Ⅰ¹⁾』で提起し、『平城宮報告Ⅱ』で補足した説である。そこでは、平城宮造営当初には宮の中央に第1次内裏、第1次朝堂院がつくられ、天平12年(740)の恭仁京遷都ののち、天平17年(745)の平城遷都を上臈とし、宝字年間の平城宮改作を下限とするいずれかの時期に東方に第2次内裏、第2次朝堂院を新設したとかんがえた。閑野が地図にのせる土壇や畦畔あるいは字名によって宮殿名を比定せざるをえなかつたのに対して、この新しい見解は第2次の大極殿と内裏の1郭を発掘調査した成果を加味しているところに基盤的な相違がある。すなわち閑野が比定した内裏の東部、つまり東宮比定地の発掘調査によって、大規模な区画をもち、平安宮内裏にきわめて類似する造構の存在があきらかになったことによる。以後、この仮説は当研究所の発掘調査を進める過程のなかで継承されることになる。しかしながら、発掘調査が本格的に進むと子期せぬ事実が次第に浮び上ってきた。すなわち、その後第1次内裏と第2次内裏とを平行して調査する過程において、すくなくとも、両地域の創建時期には、30年におよぶ時間的なへだたりはないことがあきらかになった。つまり、第2次内裏の造構もおそらくとも神龟年間頃に造営されていることがあきらかになったのである。さらに、閑野貞説以来、方八町と想定されてきた平城宮が、1964~1967年にかけての調査によって、東方に約250mほど拡大していることが判明し、この地域を東宮ないしは東院に比定するのが望ましいとかんがえるにいたった。このようにして、発掘初期に確立した第1次内裏・第1次朝堂院、第2次内裏・第2次朝堂院という仮説に対して、修正をくわえざるを得ない事態が生じてきたのである。

第1次、第2次の内裏の発掘がともに進行し、両地域の造構に対する比較検討が容易になっ

1) 『平城宮報告Ⅰ』 p. 16

2) 『平城宮報告Ⅱ』 p. 111~112

た時期に、新しい見解を示したのが阿部義平の「平城宮の内裏・中宮・西宮考」である。阿部
阿 部 説 は文献史料にみえる中宮・西宮・東宮の三宮をそれぞれ時代によりことなる宮殿の固有名称と
んかがえ、一つ一つの名称について、対応する遺構を探しだすという手順をふんだ。¹⁾ その結果、奈良時代当初には第1次内裏を中宮、第2次内裏を西宮、東拡張地域を東宮とし、それぞれの宮殿が時代とともに変化する過程を想定した。このことから、西宮と内裏とは同じ性格であり、西宮を内裏の別称とみた。阿部説のなかで、もっとも根柢が明白な部分は、天平18・19年(746・747)頃には第2次内裏が西宮とよばれたこと、および平城上皇期の西宮が第1次内裏にあたるとするところである。前者の根柢は内裏北外郭にある土壙SK820から出土した天平18・19年頃の西宮兵衛についての木簡であって、この付近に兵衛の警護する西宮があったことを推定させるものである。後者の根柢は『類聚符宣抄』にみえる天長2年(825)の平城宮西宮に関する官符であり、平城上皇の宮が西宮とよばれたことをしめしている。また、発掘調査で検出した遺構によると、第1次大極殿地域ではあきらかに平城上皇時代の宮殿が存在しているが、内裏地域ではその時期の遺構がない。このようなことから、第1次大極殿地域の平安時代遺構を平城上皇の西宮にあてたのである。

阿部の説は、第1次大極殿地域の発掘調査がなお進行中に提起されたものであり、その後の
その他の説 発掘経過からみると、なお検討の余地をのこした。その後、狩野久²⁾、鬼頭清明³⁾は、第1次大極殿地域の創建遺構が、和銅遷都時における大極殿であり、そこには前期難波宮、藤原宮、平城宮第2次大極殿などとはことなる殿舎配置がみられることから、唐長安大明宮の含元殿を模倣した當時としては斬新な立案計画のもとに建設されたものであるとした。今泉隆雄⁴⁾は第1次大極殿地域のほぼととのった発掘成果と内裏地域、第2次大極殿地域の発掘成果を斟酌して、平城宮の主要宮殿の比定を行なった。今泉は和銅創建の大極殿と朝堂を第1次大極殿地域とその南に展開する第1次朝堂院地域にあてた。養老5年以降、大極殿と朝堂院は東の第2次大極殿、第2次朝堂院地域にうつされ、旧地には中宮・朝堂の呼称があたえられたとする。内裏地域については阿部の説を支持して西宮にあて、東院についても同様に東張出し部をあてるのである。その後、恭仁宮大極殿および平城宮第2次大極殿の発掘調査が行なわれるに至って、これも再考をよぎなくされた。以上のような諸説を尊重しながら、いま一度第1次大極殿地域の変遷をふりかえってみよう。

B 第Ⅰ期遺構の年代

この時期の遺構が和銅創建時にさかのばることは、短期間のうちに消滅する東外郭の南北開始と終末 満SD3765から和銅の年紀をもつ木簡が出土していることや、全体のプランが大室大尺に準拠していることによってあきらかである。南面築地回廊に付設された東棊SB7802の柱抜取痕跡から天平勝宝5年の年紀がある木簡が出土しており、伴出の土器が平城宮土器IVにぞくし、それと同型式の土器が、埴輪壁壁SX6600を埋立てた埋土下部などから発見されていることはす

1) 阿部義平「平城宮の内裏・中宮・西宮考」『研究論集Ⅱ』奈文研学報第23号 1973, p. 71~91

2) 狩野久「律令国家と都市」『人系日本国家史 I 古代』東京大学出版会 1975, p. 219~254

3) 鬼頭清明「日本における大極殿の成立」『古代史論叢』中 吉川弘文館 1978, p. 47~74

4) 今泉隆雄「平城宮大極殿朝堂考」『開闢先生還歸記念日本古代史研究』吉川弘文館 1980

でにのべたところである。このようなことから、終末については天平勝宝5年(753)が一応の目安となることについては問題ない(Fig. 97~100参照)。

第I期は4小期に細分されるが、第I-1期を和銅創建時にあてることはいうまでもない。第I-2期の年代については資料を欠くが、南北溝SD3765を東方に移動したものと想定される南北溝SD3715が、靈亀元年(715)の年記をもつ木簡をふくむ土塚SK5535を破壊していることから、靈亀年間を通過することはない。一方、SD3715の下流に位置する堰SX8411から、神亀~天平初年の造作を物語る木簡が出土しており¹⁾、なかに「西高殿」・「東高殿」・「高殿料」など高殿の建物名称を記すものがあり、『続日本紀』にも南接・南高殿として出現している²⁾。この高殿をSB7802に比定するならば、第I-2期を神亀~天平初年の時期にあてることができる。朝堂院の出現については、和銅6年のこととして、『三代実録』元慶8年5月29日条に朝堂への出入りをのべた部分がある。しかし、これは第1次大極殿地域内でも想定しうる。ところが、靈亀元年正月の新羅使接待の記事では、中門(朝堂院南門)で諸方の樂を奏し、南闕(大極殿南門)で大射しており、大極殿と朝堂院が別々の区画であったことをしめしている。このことから和銅末年頃に朝堂院が形成されたものとがんがえる。

後述するようにこの地域の正殿を創建時の大極殿に比定するのだが、『続日本紀』天平15年11月条に「初て平城の大極殿并に歩廊を壊して、恭仁宮に遷し造ることここに四年、その功徳かに奉りぬ」とのべられている大極殿をそれにあてるならば、第I-2期の終末は天平12年(740)頃になる。第I-3期、第I-4期の年代を探る直接の手掛りはないが、第I-3期を恭仁宮時代にあて、第I-4期の始まりを天平17年(745)の平城還都後にあてておく。その終末についてはすでにのべた。

『続日本紀』にのべる恭仁宮へ移築した平城宮大極殿が、今回報告する第1次大極殿なのか東方の第2次大極殿のかを検討する必要がある。幸いここ数年の間に恭仁宮大極殿、平城宮第2次大極殿の発掘調査が完了しており³⁾、さらにかつて調査された藤原宮大極殿も比較対象にならう。結論的にいえば山背国分寺金堂を旧恭仁宮大極殿とすれば、SB7200をその前身跡物にあてるのがもっともふさわしい。SB7200はわずかにこった基礎の地覆石抜取痕跡から、53.1m(180尺)×29.5m(100尺)の基礎に、桁行9間(45.1m)、梁間4間(20.7m)、柱間寸法は桁行17尺(5.0m)等間、身合梁間18尺(5.3m)に廊17尺(5.0m)を想定した。恭仁宮大極殿では53.1m×28.2mの基礎に礎石および根固め石が残存しており、桁行9間(44.7m)、基準尺30cm、以下同じ)、梁間4間(19.8m)の四面廊建物が復原されている。その柱間寸法は桁行の両端間15尺(4.5m)、中の7間を17尺(5.1m)等間とする。梁間では身合を18尺(5.4m)とし、廊を15尺(4.5m)とする。平城宮第2次大極殿は、46.0m(155尺)×23.8m(80尺)の基礎をもち、桁行9間(129尺)、梁間4間(54尺)の四面廊建物である。柱間寸法は身合の桁行・梁間とも15尺(4.46m)等間とし、廊の出12尺(3.57m)、基礎の出13尺(3.87m)となる。これによって、同じ9間4面建物であって

1) 加藤優「1976年発見の平城宮木簡」『年報1977』p. 38

2) 国史大系『続日本紀』天平8年正月の条の南殿は金沢文庫本では南接となっており、天平20年正月にあらわれる南殿について記載では「南高殿」としている。遺構に即してかんがえるとSB7802が当時南接・南高殿とよばれたことになる。

3) 中谷雅治ほか「恭仁宮跡と52年度発掘調査概要」「東京文化財発掘調査報告」京都府教育委員会1978, p. 24

4) 井上和人「平城宮大極殿の調査」『年報1979』p. 1

5) 足立康・岸庸吉「藤原宮伝説地高殿の調査二」『日本古文化研究所』1936, p. 48

も、平城宮第2次大極殿は一通り小さく、恭仁宮大極殿になりえないことはあきらかである。なお、平城宮第2次大極殿の下層に7間×4間の掘立柱建物が存在したが、基壇上の建物に建

藤原大極殿 替えを行なった痕跡はない。つぎに藤原宮大極殿についてのべると、かつての発掘調査では基壇は約40m×30mで、7間(114尺、34.2m)×4間(60尺、18m)の四面廊建物とされた。この場合の柱間寸法は桁行の両端間を15尺(4.5m)とし、内の5間を18尺(5.4m)とし、梁間は15尺(4.5m)等間である。しかしながら、近年に行なわれた藤原宮大極殿周辺の発掘によれば、桁行を9間に想定しうる可能性が生じている。この場合の柱間寸法は、身舎桁行・梁間とも17尺等間、幅を15尺にかんがえている。¹⁾

以上のようなことから、恭仁宮大極殿の前身建物としてSB7200をあてることは妥当であり、平面プランは恭仁宮大極殿と類似していることになる。最寄地区から発見される平城宮瓦Iが恭仁宮大極殿からも出土していることも有力な根拠になろう。藤原宮大極殿もSB7200と似た規模であり、藤原宮から移建した可能性がなくはない。しかし、身捨梁間の寸法が短いことは移建の可能性を少くしている。また、和銅3年正月に藤原宮で行なわれた儀式に大極殿と重闇門が使用された可能性があり、同年3月の遷都時には平城宮大極殿が存在したとすればSB7200は藤原宮から移建したものではなく、平城宮で新築した大極殿とみなしうる。

SB7200を和銅創建の大極殿にあてるならば、7～9世紀の他宮にくらべて大極殿と朝堂院
平城大極殿との関係、あるいは内裏と大極殿の位置関係において、かなりことなった様相を呈することになる。しかし、大極殿が内裏の南に位置していない宮城プランは長岡宮、平安宮など平城宮以降の諸宮にみられる。大極殿の前面を閑門と回廊で囲わず前面を広場とする点は竈尾塙を設け、平安宮の場合と共通するのである。したがって、内裏とSB7200の位置関係からSB7200を大極殿でないとする意見は成立しない。

一見変則的にみえる第1次大極殿の形態が、なぜ平城宮創建時に採用されたのであろうか。大極殿の前面を一段低い広場にする宮殿配置という類似性からすれば、唐長安大明宮の含元殿に近い形態といえよう。それは壇の中央に含元殿をおき、左に羽翼閣、右に棲鳳閣を配し、閣下の広場と竈尾道でむすぶ。一方、本来の長安太極宮では、大極殿前面に限門をおいて廊で囲む形態が想定されている。しいていえば藤原宮、後期難波宮、平城宮第2次大極殿は、太極宮のパターンにぞくするのである。そして、第1次大極殿は長安城大明宮の新しい宮殿プランにもとづいているようである。しかし、太極宮では大極殿の後に両儀殿を、大明宮では含元殿の後に宣政殿・紫宸殿を配し、日本の内裏的な機能をもつ宮殿をともなっているので、第1次大極殿のプランがまったくの模倣ともいえない。

四周を築地回廊でとりかこみ、前の2/3を石敷広場とし、後の1/3に殿舎をたてる第1次大極殿と朝堂院は、計画段階において朝堂院を南につくることを予定しなかった形跡がある。すなわち、早くに埋立てられる南北溝SD3765が朝堂院内の東辺部を貫通しているからである。この溝については、宮造當時の排水溝であり宮殿の完成後には埋立てられるべき一時的な溝とする見方もある。だが、回廊内の暗渠排水がこの溝に注いでいるので、少くとも開墾当初においては、永続的な施設として掘削したとみるべきである。しばしばのべてきたように、大極殿の前面に展開する広大な広場をもつ配置が、第1次大極殿のもっとも大きな特色になっているのである。

1) 山崎信二・松本修自「飛鳥・藤原宮跡の発掘調査」『年報1978』p. 44

が、朝堂院の設置が考慮されなかったとすれば、回廊域には大極殿と朝堂の機能がかねそなえられていたのではないかと思いたるのである。中宮では漢から唐にいたるまで、朝堂は東西二つもうけられるだけで、日本のような十二堂をもうけないといわれる。朝堂は長安太極宮で
堂
は承天門前の東西にあり、大明宮では左右間のそれぞれ東西ないしは東南・西南に想定されている。このようにかんがえてみると、いまはまったく痕跡をとどめないが、SB7200の東西にそ
れぞれ1棟の朝堂があり、既下の朝堂とともに各種の朝儀に対応したとする見方も、無稽のことではあるまい。広場地区における第I期の朝堂相当建物遺構の有無については、この地域では礎敷を除去し、地山面まで掘下げているので、もし存在すれば、基壇の掘込地業や地盤石抜取痕跡などの片鱗でも検出できるはずである。遺構が存在しないことから、広場地区に朝堂相当の建物がなかったとかんがえるをえない。この場合、やや時期が遅れて建設される南接する朝堂院との関係が問題になる。すなわち、本来は第1次大極殿地域のみで完結すべきのになぜ朝堂院が設けられたのであろうかという疑問である。いまのところ確固たる解答はもちえないが、一つの見透しを提示しておこう。岸俊男の見解によれば、日本の朝堂院には朝儀・朝参・朝政の三機能をそなえているといふ。²⁾ 遷都の当初、藤原宮のように朝堂のような施設が計画されていないことは朝堂院の機能のうち朝儀のみをとりあげ、大極殿の機能と併合したため、大極殿の前に広大な礎敷広場を確保することになったのであろう。この場合、さきに述べたように殷丘地区の東西にそれぞれ1棟の朝堂があったものとかんがえる。前期難波宮の大極殿相当建物の斜前方に位置する左右の南北建物がその存在を示唆する。つまり、唐制にならって儀式を主とする朝堂と大極殿を合体させたのである。さらにいえば、本来は大極殿南門と朱雀門の間に長安城皇城のような宮門の配賦を計画したのではあるまいか。第1次朝堂院地域の創設を和銅末年ごろおくことについてはすでに述べた。しかし、計画に反して旧来通りの朝堂院がつけ加えられたことは、再び朝儀・朝参・朝政の機能がこの地域に課せられたことを意味している。つまり、再度藤原宮のような大極殿と朝堂院の関係が復興されたのである。

第1次大極殿地域の正殿を大極殿にあてるならば、阿部らがこの地域を中宮に比定する見方は困難になる。中宮は『平城宮報告Ⅱ』での検討によれば、宮子皇太夫人の御所とする説もあるが、内裏と同一機能を有する殿舎であり、藤原遷都以前にこの呼称が多く用いられ、授位・賜宴・蕃客獻物・訖經などの行事が行なわれている。一方、中宮の供養院(天平9年10月20日条)があつたり、中宮宮子が崩じてたりする(天平勝宝6年7月19日条)、そこが公的儀式や宴会に使用されたとしても、一方には起居の便をもつ居住空間をそなえ、院といわれる小区画に分割されていたことを意味している。第I期の第1次大極殿にはそうした居住空間を想定しないのであるから、中宮とするわけにはいかない。消去法のない方であるが、この点からするならば、中宮は内裏地域の別称とかんがえるのが無難である。

この地域が大極殿としての機能をそなえていたのは第I-1、I-2期であり、藤原遷都以降の使用法については判然としない。大極殿は藤原宮へ移築されたとはいえ、その後殿は残存したとおもわれる。SB7802出土木簡によるかぎり、天平勝宝5年段階においては南門が衛門府

中宮の居住性

1) 佐藤武敏「唐の朝堂について」『難波宮と日本古代国家』堀喜房 1977, p. 183~212
2) 岸俊男「朝堂の初步的考察」『藤原考古学研

究所論集 创立三十五周年記念』吉川弘文館
1975, p. 509~541

大殿 に警護され、内に「大殿」とよばれる建物が存在しているからである。義老令によれば衛門府の管掌するのは閑門ではなく、宮門である。閑門は大極殿ないしは内裏の諸門にあてられており、したがって大極殿が恭仁宮に移築された後は、大極殿のあつかいをうけていないのである。

C 第Ⅱ期造構の宮殿比定

第Ⅱ期は小間に細分されることなく、多少の変更はあるにせよ天平勝宝5年以降に建設がはじまり、長岡遷都まで30年余り存続したとかんがえる。終末の年代は、この時期の建物の柱痕跡ないしは柱抜取痕跡から平城宮土器Vが出土していることから決定した(Fig. 103参照)。

この時期、築地回廊は方形に近い平面形に縮少し、後方の殷合地区に多数の獨立建物が林立する。中軸線上に位置するSB6610、SB6611、SB7150は棟をすることにするが、連続する建物であり、その平面積1,134m²に比肩する建物は、他に例をみない。正殿を中心にして左右に計4棟の脇殿をおき、それぞれ廊状建物でむすんで床をひとつながらにしている。このような状況からすれば、その利用形態として大極殿は考慮外であり、居住空間が要請される宮殿をかんがえなければならない。とはいえ、殷合地区の前は一面の広場であり、公的儀場としての使用も可能である。居住性のある生活空間を具備する宮殿としては、この時期の中宮・中宮院ないしは内裏であり、西宮もそれにつくめてよからう。

平安宮古図によれば、内裏南北の中心は南殿(紫宸殿)であり、その東に南から春興・宜陽の2殿をおき、西に南から安福・桜告の2殿おき、建物がコ字形にめぐる内側は公的な空間となる。北半は天皇の私的生活の場である常寧殿を中心とした区画である。平安宮内裏に類似する建物配置をとるのは、奈良時代の平城宮では内裏地域であり、それが奈良時代の全期間にわたって存続したこと、発掘調査によってあきらかになっている。だから、内裏の位置についての異論は存在しない。内裏北方の官衙地区にある土壙SK820から出土した木簡によれば、天平西宮 18・19年段階では内裏地域を「西宮」とよんだことがわかる。つまり、その時点では西宮は内裏の別称であった。

中宮の呼称は天平勝宝6年以後にあらわれることはない。中宮院は天平17年にあらわれるが、これは居住空間をもつ内裏地域にあてはまる。つぎに中宮院があらわれるのは淳仁朝である。中宮院の位置をしめす史料はのこっていない。ただ、『続日本紀』天平宝字8年10月9日条にあらわれるつぎの記述は、ある程度、中宮・中宮院の位置決定に役立つであろう。

高野天皇遣兵部卿和氣王、左兵衛督山村王、外衛大將百濟王敬福等、率兵數百圍中宮院、時

帝遼而未及衣履、使者促之、數輩侍衛奔散無人可從、僅與母家三兩人、歩到圓吉寮西北之地、立地山村王宣詔曰、(中略) 席畢、將公及其母、到小子門、虜道路鞍馬騎之、(下略)

この記事は仲麻呂の乱に際して、高野天皇が淳仁天皇を淡路國へ配流する部分であるが、注目すべきは淳仁天皇が辿った宮内から宮外へ出る道筋である。中宮院・圓吉寮・小子門があらわれているが、そのうち小子門の位置がほぼ推定される。小子門を記す木簡が、平城宮東拡張部で南に開く宮城門SB5000付近の溝から発見されているからである。このことから一応SB5000を小子門に比定しているのであるが、たとえそれに当否があるにせよ、小子門が平城宮

の東方に位置する門であることは否定しえないのである。したがって、淳仁天皇は中宮院から出て東南の方向へ裸足で歩いたことになり、図書寮の西北の地で詔をうけたのである。図書寮の所在地はまだ明らかでないが、中宮院からさほど遠方にあるとはおもえない。和氣王らは中宮院をかこんで近くに待機していたはずであるから、当然、図書寮の西北の地は中宮院の東南のあたりに接していたとおもわれる。このようにかんがえるならば、中宮院の位置は第1次大極殿地域よりは、内裏地域にかんがえるほうが妥当である。これより先、天平宝字6年5月に保良宮から帰ったのちは、淳仁帝が中宮院におり、高野天皇が法華寺に住む状況がつづいていた。それでは第Ⅱ期の広大な造構に対して、どのような宮殿名をあてたらよいのであろうか。それについては第Ⅲ期の造構をのべたあとでふれることにしたい。

D 平城上皇の宮殿

第Ⅲ期の年代は造構とともに平城宮土器VIが発見されていることから、平城上皇がこの地に再興した平城宮の造構にあてることが、大同4年(809)からおよそ15年間存続したことになる。²⁾第Ⅲ期は第Ⅲ—1期と第Ⅲ—2期に細分でき、第Ⅲ—1期は平城上皇の時代に比定できる。第Ⅲ—2期は1期の造構をとどめているとはい、建物配置のバランスが崩れており、平城西宮が平城上皇の親王に贈与された天長2年(825)以降の造構とおもわれる。『文德実録』天安元年(857)3月乙卯条にある「遷六衛府舍人等於平城」という記事は当時なお平城京が都市機能を維持したことをしめし、第Ⅲ—2期が存在した間接的な証左となる。

第Ⅲ—1期の建物配置は前殿と後殿を中軸線上におき、それぞれの左右に脇殿を配する。³⁾のような建物配置からすれば、内裏的であり、さきに述べたように平城西宮というのは第Ⅲ—1期の造構のことであることはほぼ間違いのないところである。つまり、築地にかこまれる方格の区域が内裏であり、その南に少しく離れて位置する建物SB7803を大極殿相当の建物に比定しようのである。第Ⅲ期の建物配置が内裏的である点についてはすでにふれたところであるが、それは概観的な印象であって、平城宮内裏地区あるいは平安宮古図と比較するならば、細部においてかなりの相違点を見出すことができる。ここでは他の内裏との比較を試みながら、平城上皇の内裏の検討を進めてみよう(fig. 105参照)。

第Ⅲ期における築地でかこむ方形区画は第Ⅱ期の築地回廊を踏襲し、石積擁壁SX9230以北の大極殿地域と以南の広場地域をそのまま残存させたため、特異な宮殿配置となつた。ほぼ同一敷地面積をもつ平城宮内裏ではこの広場地域の中央に回廊ないしは塀をコ形にめぐらして内裏正殿を閑門中心線上におき、左右にそれぞれ1棟ないしは2棟の建物を配し、それは平安宮の紫宸殿と宣室・春興殿、校書・安福殿に相当するものとされている。しかし上皇内裏における

1) 「平城宮木簡Ⅲ」解説p.48。なお、1981年の第133次調査では若犬美門(南面西門)付近の二条大路北側溝から内膳司から小字部門へあてた文書木簡が出土している「平城宮木簡概報16」。この結果、小字門は正確には「小字部門」といい、他の宮城十二門とともに氏の名をもち、十二門相当の門であることが確認され、解説Ⅲの説を補強した。位置についても出土地が二条大

路側溝であることからみて解説Ⅲと矛盾していない。

2) 平安時代になって平城上皇が再興した平城宮が正式にどのようによばれたかについてはあきらかでない。実際は御在所などとよぶべきであろうが、ここでは便宜的に上皇の居住空間をかりに上皇内裏とよぶことにする。

第V章 考 察

るこの部分は原則的には広場であり、小規模な3棟の建物SB7141, SB9220, SB7785と井戸SE9210が1基あるにすぎない。広場の北寄りに東西軸SA7130を設けるのは、もとのままの広場は不用となり、改めて適致したのであろうか。SB7141は建物ではなく、機械のようなもの、というよりほかなく、SB9220は床がもうけられない土間、平安宮古図での朱器殿の位置に相当するかのように見受けられるが、平安宮朱器殿の柱間数は不明である。一方、この建物が井戸と接していることは注目すべきである。

殿舎地区の建物は広廟で平安時代の特色をよくそなえている。正殿がSB6620であることは
広廟建物 中央南寄りに位置するもっとも大きな建物であることから了解されるであろう。これを平安宮の紫宸殿にあてはめると、東臨殿ともいべきSB6622は宣闈殿の位置にあり、この点では平安宮内裏とも共通している。上皇内裏のSB8300は平安宮の春興殿に相当する。これがSB6622と東西に平行しているのは、南北にせまいこの地域の特殊現象であろう。平安宮古図では紫宸殿の後方に仁寿殿と常寧殿があり、それぞれ左右と後方に脇殿をおいて院を形成している。

平城宮内裏の正殿後方の建物配置は、時期によってことなるが、奈良時代を過じて據でかこむ1院であった。¹⁾しかし、奈良時代後期のある時期になって、SB452を中心とする南域とSB4705を中心とする北域にわかれた。しかし、両区域の間には屏などはない。つまり、SB452を仁寿殿、SB4705を常寧殿に比定することができ、これを平安宮内裏の前駆形態とみなすことができる。それは平安宮仁寿殿後方の承香殿が弘仁年間以後に建てられたと記録されていることからもうらづけられるであろう。平城宮内裏ではSB482, SB4705の左右に脇殿を配するが、それは身舎のみの建物で、平安宮の清涼・綾綺殿、弘徽・麗景殿などのように廊をもつ造物ではない。平城宮内裏正殿以北をかりに後宮域といふならば、SB4705の建物は一貫して後宮域の中心であった。すなわち、奈良時代当初ではSB4700が内裏の中心殿舎となり、その後内裏正殿が建設されたのちはSB4703A・B、SB4704と建てかえられるが、どの時期にも後宮域の正殿をなし、左右と後方に脇殿をともなっている。SB4705が後宮域の中心をなし、正殿域を縮少しで建設しているSB452は奈良時代後期になってつけくわえられたものとみなされよう。

平城宮と平安宮の内裏 上皇内裏のSB7170は平城宮内裏のSB4705、平安宮の常寧殿に相当する造構とみなしてさしつかえなかろう。つまり、これが天皇が日常的に起居する後宮の殿舎にあたるのである。平安宮内裏では常寧殿をコ字形にめぐるように、常寧殿の東側に麗景・宣闈殿をおき、西側に弘徽・登華殿をおき、北側に貞觀殿をおく。建物の規模がことなるが平城宮内裏においても同様の建物配置がみられる。上皇内裏における左右各2棟の脇殿SB7173, SB6621, SB7172, SB7209は平安宮の麗景、宣闈、弘徽、登華の4殿に相当するものとみられよう。

平安宮内裏との共通点 上皇内裏の東北隅に位置するSB8219, SB8224, SB8218A・B, SB8222は屏でかこまれ、2区の独立した区画を形成している。類似の区画は平城宮内裏東北区や平安宮古図東北隅にともに存在している。平城宮内裏では1区画であるが、平安宮古図では上皇内裏と同じく南北2区画にわかれ、南を昭陽舎、北を淑景舎とよび、それぞれに付属屋をともない2棟で1組をなしている。昭陽舎、淑景舎は平安宮では梨庭、桐庭ともよばれ、西方の対象位置にある飛香舎(應光舎)、凝華舎(梅廬)、製芳舎(笛鳴殿)とともに火内の五舎とよばれる殿舎である。使用法は必ずしもあきらかでないが、平安時代では東宮や親王たちの居所として用いられているようであ

1)『年報1974』p. 22~26

2 第1次大極殿地域の性格

る。上皇内裏のSB8219などが機能上平安宮内裏のそれと同一とはいがたいが、平城上皇の親王たちが居住した可能性がある。この2区画内の建物に2~3回の建替がみとめられることは、上皇内裏の諸殿のなかでもっとも使用頻度の高かったことをしめしている(Fig. 107)。

以上の検討を通じて、上皇内裏が平安宮古図とくわめて類似していることがわかるであろう。しかし、両者の間には決定的な差異がある。それは平安宮内裏における仁寿殿およびそれに付属する殿舎の区画が、上皇内裏では欠落している点である。すでに述べたように仁寿殿相当の建物は平城宮内裏にも存在しており、上皇内裏の建物配置から平安時代初頭には仁寿殿が存在しなかったというわけにはいかない。むしろ、平安宮内裏の省略形態とみなしたほうがよい。上皇内裏の殿舎地区の南北長が短いことが大きな理由であろうが、それよりも、平安宮内裏の機能の大きさにくらべて上皇内裏の機能が格段に小さかったことを表明しているにはかならない。このことはこの場所が天皇の内裏でなく、上皇の御在所にすぎないことをしめしているのだろう。

平城上皇の大極殿として、東方の第2次大極殿と位置をそろえて建つSB7803を想定してき 大 極 殿 た。それは上皇内裏の南方に展開する広場中央に孤立し、周辺に開門や回廊を欠いている。また桁行7間で規模がはるかに小さい。他方では、内裏外郭ともいべき新SA3740と満SD3769とが内裏と大極殿との間に介在し、一応別区を形成している。しかしだけ殿院としての体裁をととのえているといいがたい。このようなことから、平城上皇の平城西宮の再建は内裏においては完成するが、大極殿院は建設半ばにして終ったことが想定できる。

E 西宮の再検討

以上、第Iから第III期に至る宮殿の比定を行ない、それとともに西宮・中宮・内裏の位置を時期別検討してきたが、これまでのところ確認できるのは以下の通りである。1 第I期造構は和銅3年から天平12年までの大極殿であり、中宮ではない。2 中宮は内裏の別称であり、内裏地域の造構がもっともふさわしい。3 平城遷都から天平勝宝5年まで、第I~4期造構は衛門府が警護する宮殿であり、兵衛が警護すべき内裏・大極殿に相当する宮殿ではない。4 第I~4期のころ、内裏を西宮とよんだことがある。5 第III期造構は平城上皇の離宮である平城西宮にあたり、検出した造構は大極殿と内裏相当建物に比定することができる。

ところで、西宮の呼称は平城宮の東宮・東院に対していい方である。平城上皇の時代には 西 宮 東院地域に存したであろう東宮はなくなっているにもかかわらず、平城上皇時代の内裏を西宮とよぶのは、すでに奈良時代からこの地が西宮とよばれてきたとかんえるのが自然である。

『続日本紀』での西宮は承徳朝にかぎってあらわれる宮殿名であるが、さかのぼって第II期の第1次大極殿地域が整備される天平勝宝5年以降、この地域を西宮とよび、内裏=中宮と東院=東宮などと区別した可能性がある。西宮後殿、西宮前殿と記録されている殿舎をSB6610、SB6611、SB7150にあてることは妥当なところであり、神護景雲元年8月8日に「僧六百口を

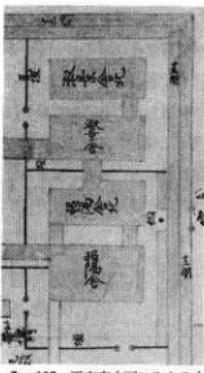


Fig. 107 平安宮古図にみえる内
裏東北隅

届して西宮寝殿に於て斎を設く、慶雲の見われたるをもってなり」と記録されているように、これらは多数の人員を容易に収容する空間をもっている。また、西宮前殿では受朝、新嘗の宴など儀式が行なわれ、法王道鏡がここで大臣以下の拜賀をうけた。一方、西宮寝殿では設営がなされ、称德帝はここで崩した。

F 唐長安大明宮 の含元殿と麟 徳殿

発掘調査の過程で第Ⅱ期の正殿が大明宮の麟徳殿ときわめて類似していることが指摘されており、ここで若干の比較を行なうとともに、大明宮の正殿である含元殿についても比較することにする。

含元殿は大明宮の中心宮殿で

含元殿あり、太極宮の太極殿に相当する。高宗が竝期2年(662)に大明宮に遷った頃には完成していたのであろう。1959~1960年に発掘調査がなされ、その調査概要と1973年に発表された傅煥年の復原案によって概略をのべる。

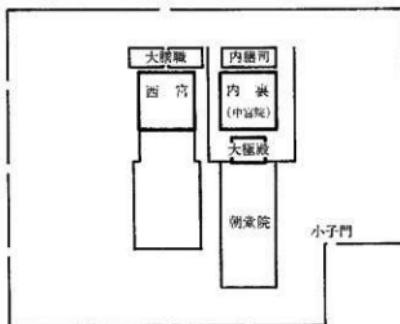
1) 宝亀7・8年には單に「前殿」と称する官殿が出現する。これについては『平城宮堂報』p.48では、平安宮内裏正殿との関係で内裏正殿に比定している。ここではそれらが西宮前殿であった可能性があることを指摘しておく。

2) 馬得志「1959~1960年唐大明宮発掘調査」『考古』1961-7, p.341 ~344

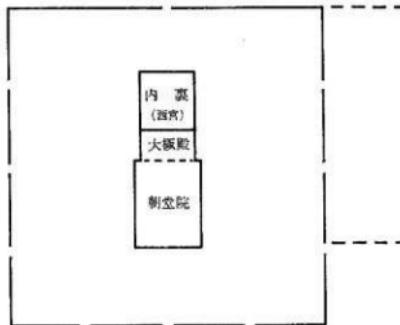
3) 傅煥年「唐長安大明宮含元殿原状の探討」『文物』1973-7, p.30 ~48



1 和銅～天平勝宝5年(710～753)



2 天平勝宝5年以降～天応1年(754～781)



3 大同4年～天長1年(809～824)

Fig. 108 第1次大極殿地域の変遷

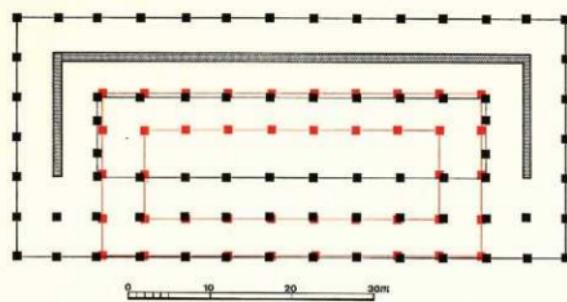


fig. 108 大明宮含元殿とSB7200の比較

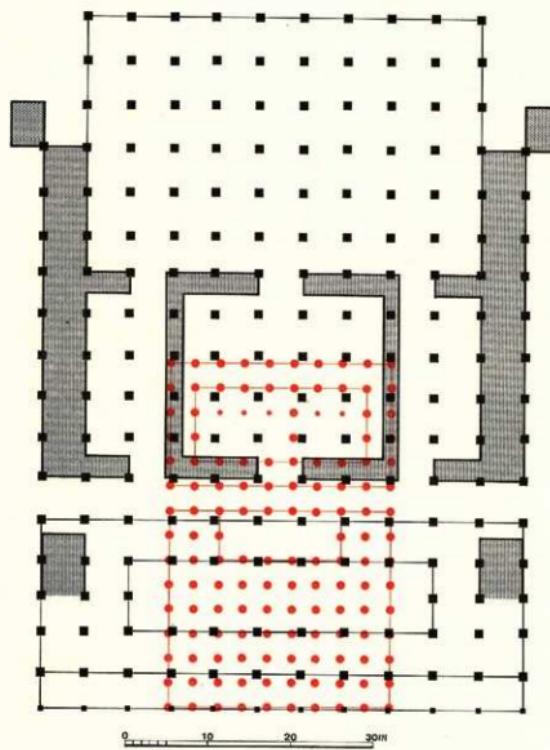


fig. 110 大明宮含元殿と第II壇中央建物の比較

2 第1次大極殿地域の性格

基壇は75.9m×42.3mの2重基壇で、礎石および抜取痕跡によって礎石建物であることがわかる。身合桁行11間(内の9間は18尺等間、端間は16.5尺)、梁間2間(9.8m)の4面に廊(4.85m)がつく。ただし、東西と北の3面には柱がなく、版築壁がコ字形にかこむ。廊の外側に裳階(4.85m)がめぐり、結局桁行13間(228尺、67.33m)、梁間6間(100尺、29.2m)の平面プランとなる。両脇から廊がてて、左右前面の翔鸞閣、棲鳳閣になつがる。また、殿の基壇前面には3条の竜尾道が長くのびている。

含元殿と平城宮SB7200の平面積をくらべると、前者の平面積1,966m²に対して後者のそれは934m²、約1/2の大きさであることがわかる。殿閣下の広場と壇で隔離する点は共通するが、平城宮では左右の間にかえて朝堂が想定され、後殿とともになっていることなど、必ずしも同じでない(fig. 109)。

麟徳殿は初唐から晚唐まで、唐代を通じて使用された宮殿。宴会や蕃臣の謁見などの典礼に麟徳殿用いられたことが記録されている。大明宮西辺の台地に位置しており、1957~1959年に発掘調査された¹⁾。南北約213m、東西約125mの範囲に回廊が想定され、そのなかに主殿をかこんで懸儀棧・結鄰棧、東亭・西亭などの廄舎がある。主殿の基壇は130.41m×77.55m、高さ1.4mの下成基壇と約95m×65.15m、高さ1.1mの上成基壇からなる。礎石および据付痕跡によって平面プランがわかる。間口11間(58.3m)、奥行16間(79.4m)にわたって柱がならび、その建坪は4,629.02m²である。報告では3殿にわけてのべている。

中殿は11間×5間(25.5m)の純柱建物で、柱間寸法は桁行5.3m等間(以下桁行寸法はみな同じ)、中梁間5.0m等間。両端間にには後殿につながる柱間の幅の版築壁をつくり、南北の側柱1間に半間分の幅で版築壁をつなぐ。内の5間部分にも南北の入口をのこして左右からコ字形に囲う版築壁をつくる。

前殿は11間×4間(18.5m)、身合の梁間は4.25mとし、廊(5m)をつける。東西の端間にには前殿へのびる版築壁をつける。中殿との間隔は5mである。

後殿は9間×5間(26.6m)の純柱建物で梁間は5.3mの等間である。中殿の版築壁が南から後2間までのびている。中殿との間隔は4.4mである。

復原案では4殿を連続させた構造を想定する。その場合には前殿の前に1間の裳階をつけ中殿を2層とし、後殿を2棟にわけその南側の棟を中殿にあわせて2層にしている。つまり中心を高くし、前後の建物が低いプロポーションをかんがえている。

SB6610、SB6611、SB7150をあわすと間口9間(27m)×奥行14間(41.5m)で、建坪は1,120.5m²となり、麟徳殿(3,834m²)の約1/3の広さとなる。純柱建物をふくむ3棟の建物を連続する状況が、麟徳殿とともに類似するところである。だが、獨立柱の床張り、中心部分が前面に出ること、横開を設けず左右に廊を配し、その脇に後闇を設けること、殿の前面に広場を設けることなど相違するところのほうが多い。これは使用上にかかわる問題であり、文献でいう西宮に比定する現状では、純柱建物のSB6610を西宮前殿にあて、後のSB7150を西宮寝殿に想定することができよう(fig. 110)。

1) 中国科学院考古研究所『唐長安大明宮』1959,

p. 33~40

2) 鈴木平・傅博年『麟徳殿復原の初步研究』

『考古』1963~7, p. 385~402の図10平面によ

る。

3) 注2に同じ。

3 建築遺構の復原

第1次大極殿地域における遺構の時期別、遺構の性格、出土遺物などの検討を基礎にし、現存する古代遺物およびその前身遺物の調査研究成果などによって、主要な建物の構造形式を推定し、復原図を作成した。なお検討を要する事項も多いが、復原の考察の要点を述べる。

A 第Ⅰ期建物の復原 (PLAN 36~40)

- 大極殿 (SB7200)** 基壇の地覆石抜取痕跡によって、基壇の規模（奥行）と正面に石階がそれぞれ3個所取付いていることが判明した。石階の幅によって、桁行中央5間の柱間寸法が推定でき、桁行9間、梁間4間となり、大官大寺金堂と同規模に想定できる。¹⁾
- 基壇は高い壇正積にかんがえられるが、細部の形式は不明。平城東御寺金堂・同西塔では東石を用いないが、SB7200の基壇はとくに高く復原され、羽目石だけでは不安定におもえるので東をたてた。平城宮第2次大極殿では、正面3個所、背面両脇2個所、側面各1個所に石階がつき、背面中央に軒廊がつく。SB7200には軒廊がなく、正背面各3個所、側面各1個所に石階を配した。基壇上面は、『年中行事絵巻』の大極殿では四半敷に描き、基壇端に高欄をおく。SB7200では切石布數とし、石階以外の基壇端に高欄をめぐらしてみた。
- 一重と二重のいずれに想定するかは、もっとも重大な問題である。『年中行事絵巻』に描かれた平安時代後期の大極殿は一重とみられる。しかし、奈良時代の大寺の金堂では二重のものが多いことや、この地域では大極殿が引立つように計画されているから、二重に想定した。周囲の廊を雲隠風にあつかう場合もあるが、SB7200では基壇の出が大きいので、初重の組物を三手先とし、初重の隅木・垂木尻に柱盤をおいて二重の柱をたて、身合柱通り1尺外を二重の柱通りにした。SB7200のような巨大な建物では、側・入側通の中間あたりに柱盤をおくと、初重垂木に大きな荷重がかかり構造上に無理を生じよう。
- 古代の建築では寄棟造が多い。したがって、寄棟造の復原図も作成してみた(fig. 111)。わが屋根横形式 国では真屋（切妻造）が東屋（寄棟造）よりも導かれたらしい、平城京でも元興寺の金堂は入母屋造であった。また『年中行事絵巻』の大極殿も入母屋造である。中国でも北魏や隋代の壁画・陶屋・石碑などには入母屋造が多く、このようなことから、第1次大極殿には入母屋造の復原を採用した。
- 大棟には当然鶴尾がのっていたんだろうが、平城宮内から瓦製鶴尾は発見されていない。平安宮の大極殿鶴尾はしばしば文献にあらわれる。法華寺阿弥陀院の脊形（鶴尾）は銅鍍金であり、平城宮でも鶴尾は金銅製ではなかったかとかんがえている。大棟中央には棟飾を想定した。西大寺薬師金堂の華麗な棟飾は『資財帳』にみえ、中國の建築図にもしばしばあらわれるからである。降棟に宝珠などをおいたかもしれないが、棟飾のはかは図示しなかった。

1) 『年報1975』

2) 長元8年(1035)の『常含損付換算帳』

3) 貞觀18年(876)火災後、元慶3年(879)復興した第2期大極殿の鶴尾は、『三代実錄』元慶7年(883)、『日本紀略』承平7年(937)、『扶

桑略記』、『百鍊抄』天喜5年(1057)などに見えてる。福山敏男編『大極殿の研究』平安神宮1955

4) 福山敏男『奈良時代に於ける法華寺の造営』『日本建築史の研究』1943

初重の柱間は正面を吹放しとし、そのほかは石階位置を扉口、他を土壁にした。「貞觀儀式」¹⁾柱間装置にあらわれる平安宮大極殿では東西の壁や戸がみえ、側面に扉口と壁がある。「午中行事絵巻」の大極殿は、正面の各間を吹放し、側面第3の間を扉口にしている。二重の柱間は各間とも通子窓にし、高欄の架木上に宝珠飾をなべた。これは伊勢神宮の居玉や新羅感恩寺舍利容器の例にならったのである、組物は当然三手先で、薬師寺東塔の形式にならい、軒支輪のない古い形式にし、中備えは間斗京にした。軒は二軒、地垂木は丸垂木とした。

後殿 (SB8120) 大極殿の後方にSB8120がある。遺構としては、北面築地回廊につづく大型の後殿基壇中央入洞部の矩折りの雨落溝を検出したにすぎない。大極殿が慈仁宮へ移転したのちもSB8120が残存したものと想定している。SB8120は桁行9間、梁間4間、大極殿と同規模に想定したが、梁間は発掘調査では直接確認していない。一重、入母屋造とし、構架は二重虹梁棟、組物は平三斗にし、棟は法隆寺東大門にならった。SB8120と北面築地回廊の間は基壇でつなぐが、幅が狭い。ここに軒廊を復原すれば梁間が狭くて低いものになるので、軒廊の建物は想定していない。

南門 (SB7801) と築地回廊 (SC5600・SC8098) 築地回廊の正門に開くSB7801の上層の基壇規模は28m(94尺)×15.6m(52尺)で、石階の痕跡から5間×2間にかんがえた。背面石階の幅約15mを桁行中央3間にあてると、両脇間を狭くしても両脇の基壇の出が小さくなる。したがって、切妻造にして一重門か楼門を想定せざるをえないが、ここでは5間3戸の一重門を想定した。切妻造ならば、東大寺軒唐門でも当初は平三斗であり、平三斗ならば軒の出もそれほど大きくとれないで、梁間を桁行よりも広くかんがえた。南面のSC5500に梁間24尺の礎石据付痕跡があり、棟通りに柱位置の痕跡がないので、中央に築地を築く築地回廊に想定した。

東樓 (SB7802) SB7802は築地回廊の築地を撤去し、棟通りから内庭側に建設している。高い樓造側柱は1本をのぞいて掘立柱である。その巨大で深い柱根からみて、高い樓造で前面に回廊南半部が扇状に取付いていたことが推測できる。

柱底の溝や足元の貫穴などは柱立に当つての工作があり、地中に深く掘立てるばかりでなく、長大な柱であったはずで、柱は上までのばし、中間に床・縁を取り付けたものとかんがえている。梁間は3間であり、桁行と梁間の隅の間の寸法が違うが、掘立柱抜取痕跡から大型の隅木蓋瓦が発見されて、入母屋造であった。初重正面中央3間を扉口に想定した。

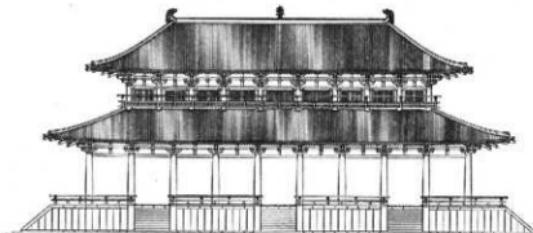


fig. 111 SBT7800寄棟造復原案

1) 慈仁遷都後も大殿と呼ぶ建物が残り、大官大寺講堂が金堂と同じ柱間寸法であり、後殿を同様に想定した(『年報1980』)。

B 第II期建物の復原 (PLAN 36・41~43)

南面と北面の縁地回廊を第I期よりも内方によせてほぼ正方形に縁地回廊をめぐらし、第I期の塙積擁壁を南へ拡張して野面積の石積擁壁を築く。回廊内をほぼ2分して南を広場にし、北方を建物敷とし、建物敷には10尺(3m)方間にあわせて多数の建物を規則的に配置している。とくに中央のSB6610・SB6611・SB7150は軒を接して3棟連続するならび堂となり、きわめて特色のある建物に想定されるばかりでなく、東脇にならぶ東南脇殿SB6660、東北脇殿SB6663、正殿と脇殿の中間にあって渡廊をも兼ねたとかんがえられるSB6640、SB6655、SB6650もゆかや木階で接続し、中庭をかこんで一体となって機能し、大小の屋根が変化のある外観をつくっていたとかんがえられる。その他、SB8245は総社で櫻か高床造、北側にならぶ建物群は付属的な殿舎で、うちSB7151は後殿的な役割りをもっていたと思われる。

正殿(SB6610, 6611, 7150) 正殿のうち前殿SB6610は梁間4間の後方に孫廟がつく総柱連物
柱柱の前殿 で、接造ととかんがえられる。柱径は約40cmととくに太いものないので、第I期の東脇SB7802のように太い柱が1本まで延のではなく、法隆寺經藏のように下階の柱上に三斗をくみ、上階の柱を別にたて、全体の連物のなかでとくに床を高く想定した。北面の孫廟に中殿へおりる木階3個所を設け、上部構造は内部二重虹梁垂殿、入母屋造、妻飾は板首組とし、螢虹架上にも蓋板をおいて中桁をまわし、もっともにぎやかに扱った。中殿SB6611は梁間2間で両脇内部にも柱がたつが、間仕切柱ととかんがえて桁行9間の切妻造とし、前殿孫廟と柱天端をそろえ、取合わせの間に蟻貫を渡し橋をおいて、雨水をうけるようにした。このためにも、中殿は両脇を妻廟葺き降しとみるよりも切妻造とするほうが有利である。後殿(寝殿)SB7150
切妻造の中殿 は桁行7間、梁間3間の身舎の4方に廟をめぐらし、ここでも前柱と中殿の柱天をそろえて前面の中殿との取合わせの間を前と同様にあつかって樋をかけた。後殿は身舎内部に間仕切の柱が2本たって東方4間と西方5間にわかれ、居住空間的な性格をもっていたとかんがえられる。北側には木階のささら軒受木とかんがえられる小掘立柱があつて3個所に木階がつくものとかんがえた。前殿よりはやや簡素な構造をかんがえ、この建物と同様に身舎梁間を10尺3間とする新薬師寺本堂の構架にならひ、柱上に大斗附木、中備え間斗束とし、大虹梁上は合掌をくみ中桁をとおし、入母屋造、妻飾は板首組とした。身舎梁間が3間であるために棟の高さは前殿とほそろい、中殿の棟が一段低くなり、中殿は前殿と後殿をつなぐとともに、後殿の細殿的な役割りをはたす。掘立柱であるが、この時期の瓦が発見されているので瓦葺と認められ、前殿と後殿に鶴尾をおいてみた。

脇殿(SB6660, 6655, 6663) 東南の脇殿SB6660は身舎桁行7間、2面廻、切妻造、東端に広縁と木階とみられる小掘立柱穴があり、高床を張って東妻から昇殿したことがわかる。東北の脇殿SB6663は身舎7間、2面廻で、背面にさらに孫廟と本階が取付け、身舎を4間と3間に仕切る。南北脇殿の中間に桁行5間、梁間3間、廻なしの脇中殿SB6655が西妻を南北の脇殿とそろえてたつ。この中殿は中央1間通り両脇に間仕切柱があり、中央間を馬道として南北の脇殿との連絡通路とし、左右各2間ずつを部屋とする。屋根は前殿・中殿・後殿と同様に、前後

1) 新薬師寺本堂は奈良末ないしは平安初とかんがえられる桁行7間、梁間5間の仏堂で、身舎

梁間はこの後殿同様10尺3間とする。桁行は中央間のみ14尺、脇の間と廻は各10尺。

とも脇殿と軒が向いあって谷となり、樋をいれてならび堂風に扱ったとかんがえられる。脇殿の構造は正面にたつSB6660を後のSB6663より一段にぎやかなものとかんがえて三斗組、二重虹梁互殺とし、繁虹梁上にも互殺をおいて中桁をとおした。SB6663は大斗肘木、合掌組、妻飾は权首組として中桁はいれていないが、同一構造形式の2棟を前後に置いたこともかんがえられる。中殿は大斗肘木、合掌組、中桁入り、妻飾と馬道脇を权首組とし、軒先を脇殿とあわせ、馬道と插下の床高は長押せだけ低くした。

渡廊(SB6640, 6650) 前殿と東脇殿の間には渡廊様の桁行3間、梁間2間のSB6640が棟通りを合わせてたつ。東脇殿と前殿をつなぐ役割りをかんがえ、脇殿よりは一段床を上げて木階で上り、さらに前殿側面へ木階で登るものとし、前殿には直接地上から昇降する木階を想定していない。前殿が入母屋造で側面へも軒がまわるので、渡廊の屋根は低いものでなければならず、組物をもうける余裕はなく、柱上に直接大梁をのせて、簡単な合掌・权首組とした。後殿と北脇殿の中間に桁行3間、梁間3間のSB6650がある。この建物も渡廊の役をもつものようで、前後の中央間に木階があって、中庭へはここから降りたらしい。梁間3間であるので棟は高くなり、後殿の屋根とつながって谷を作ったと考えられる。

この一部の建物はそれぞれ渡廊風の建物が間に越してられて、正殿と脇殿とが有機的なつながりをもつ。この時期の軒瓦に朱塗の痕がのこっているので、塗装していたことがわかる。柱足元に根巻石をまいていた可能性もあるが、この地区で根巻石は発見されていない。とくに華麗な変化のある宮殿群が想定される。すでに述べてきたように、3段が前後に軒を接してならぶ点は、唐長安の大明宮麟德殿に類似する。ただ、これは掘立柱であり、柱径も太くないので、組物も三斗か大斗肘木程度とかんがえられ、高い床を張った手法などに和風的な色彩がつよい。麟德殿では中央部が高く復原されているが、第Ⅱ期の正殿は中殿の棟が逆に低く想定され麟德殿に範をとりながらも、独自の構成を案出したものとおもわれる。

東棟(SB8245) 東面中央にたつSB8245は桁行7間、梁間3間の総柱建物である。高床造の二層棟蔵とみるよりも二階棟とするほうがよさそうである。組物は上下階とも三斗程度とかんがえ、切妻造として三重虹梁互殺の構架に復原したが、入母屋造、妻飾は权首組、内部は合掌組に想定することも出来よう。下階は法隆寺經藏のように側柱筋に柱間装置を取付けたが、袴腰風に扱うことも可能であろう。

その他の建物 東面にたつSB8302は桁行3間、梁間2間の南北棟で、平安宮内裏の朱器殿付属屋とはほぼ同じ位置にあたるが、吹放し土間の建物にかんがえた。北方の付属屋6棟はいずれも身合梁間が2間、扇ではなく、いずれも簡単な構造で、組物は大斗肘木程度か、柱上に直接大梁を置いたのである。

寝殿の北にたつSB7151は後殿にあたる建物であり、その北にあるSB7152とともに土間に想定した。脇殿の北に並ぶSB6666とSB6667は東3間と西4間を仕切り、東北隅のSB8210とSB8215は北1間に間仕切がある。この4棟は床張りとかんがえられる。築地回廊に開く南門SB7750Aは正背面石踏幅を柱間寸法と合わせると3間3戸の八脚門に想定され、基壇開口か八脚門ら見て桁行5間にとる余地はない。

正殿と脇殿の連廊

有機的つながりの設合

1) 桁行柱間が梁間よりもかなり広くなり、二重とすれば後門になるが、平安宮内裏の築地回廊

に開く承明門も一重であり、八脚門に想定した。

C 第III期建物の復原 (PLAN 36・44~46)

平城上皇が大同四年（809）に造営を始められた平城宮の宮殿がこの期に当る。翌弘仁元年九月上皇は東園に走ろうとして敗れて出家し、天長元年（824）崩御までの間ここを御在所とした。周囲を築地で囲み、四方（西側は本調査）中央に門を開き、南門の東には脇門があった。この時期の石積據壁 SX 9230 以北には多数の建物が配列されるので、復原図作成に際しては次のような基本方針によった。即ち建物群を(1)、中心的建物 (SB6620)、(2)、(3) の前後の広場をとり囲む副次的建物 (SB6622, SB8300, SB7170, SB7173)、(4) 周囲に配される建物 (SB6621, SB8218, SB8219, SB8220) の三群に分類した。さらに各々の性格に対応して、構造・意匠を、(1) は組物を大斗肘木、梁は虹梁、棟は瓦棟、(2) は組物を用いず桁天乗り、梁は虹梁、棟は瓦棟（ただし質斗瓦のみ）、(3) は組物を用いず桁天乗り、陸梁、棟は箱棟の三種に変化させることとした。

正殿 (SB6620) 術行7間、梁間3間の身合の四面に庇が付く。廊の隅柱の柱穴は小さく浅いので、当初は四隅の間を欠いた平面で、後に隅にも庇屋根をかけたらしい。平安宮紫宸殿においても四隅は四面の廊とは別の階廊（階隠）で、木階が設けられていたと考定され、現在の京都御所紫宸殿も、隅の間を木階とし、正面葺き降しの屋根と側面の屋根の面に段を設けている。身合の10尺等間に對し、廊の出は四面とも14尺あり、廊を広くとる。この期の他の建物も同様に廊を特に広く取るのが特色である。内裏正殿に當るので床を高く張り、身合は東から二列目に内部の間仕切柱があって、東端一間通りを別室とし塗籠を考えた。四方の廊のうち、正面と側面は吹放しとして床高を縦長押一段分下げたが、蔀戸のような道具を入れていたかもしれない。背面は身合と床を同高にして一室に取り込んだ。四隅に質の子敷の布縁を廻し、側面と背面には宝珠柱とかんがえられる小掘立柱穴があるので木階を想定した。

組物は大斗肘木、身合の架構は新薬師寺本堂にならひ、大虹梁上に合掌を組み、妻飾は桙首組とし中桁を通した。廊は出が大きいので、裳虹梁上に蓋板を置いて中桁を通した。蓋板は唐招提寺金堂にならひ、桁はいづれも丸桁とした。軒は二軒、化粧屋根裏とした。屋根は廊の四隅を欠くので特異な形となる。身合と正背面廊の屋根は葺き降して切妻造とし、破風を全体に通し、側面廊の屋根は、身合の妻から葺き降し、両端の破風は大屋根の切妻破風に詰破風状に取り付けた。この手法は、正規の春日造の向拝、日吉造の背面等と共通するものである。

平城宮ではこの平城上皇の時期に当る瓦は発見されていない。古い瓦を再用する場合もかんがえられるが、この正殿を中心とする一部は桧皮葺とかんがえ、瓦棟として図示した。奈良時代の桧皮葺の技法は、現在の杉皮葺のように松皮の上に押え木を並べ黒葛を用いる手法であるが、復原図では一重軒付を付けて一般的な桧皮葺に図示してある。

1) 『大内裏圖考証』

2) 線の構造は、法隆寺東院伝法堂では前身建物の質の子敷の枝数が復原されており（浅野清『奈良時代建築の研究』など）、奈良時代の伊勢神宮本殿では、主として銘金物に依って復原されているが（福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』）、ここでは簡略な線を想定して図示した。

3) 法隆寺型堂院広廊、宇治上神社押殿側面廊、は詰破風で納める。絵巻物に描かれる庭殿造や、中世の住宅などにおいても廊を詰破風とする例がしばしばみられる。

4) 永井規男『古代の桧皮葺技法に関する考察』
『日本古文化論叢』櫻原考古学研究所編 1970

後殿 (SB7170) 後殿に当る建物 SB7170 は桁行七間、梁間二間、10尺等間の身舎の前後に14尺の廊のつく切妻造の掘立柱建物であるが、内部は特徴的な構成となる。身舎は両側面から3列目に間仕切柱と考えられる小掘立柱穴があつて、中央三間と両脇二間が仕切られる。またこの建物の西脇室に丁度納まるように細長い土壙 SK7193 があり、北から素掘りの南北溝 SD7188 がこの土壙につながり、さらに西へ石組の溝 SD7189 が流出する。土壙は給水施設とかんがえられ、溝は導水溝と排水溝に当る。特徴的な施設であるが、この建物に丁度うまく納まり、この一部は土間であったとかんがえられる。

軸部の構造は柱の上に直接軒を置いて組物を用いず、身舎内部の梁は虹梁、両側面は陸梁、身舎は内部は合掌、妻飾は桟首組、軒は一軒、桧皮葺とした。当麻寺前身曼茶羅堂に転用された古材により復原される建物の構造と大差ない簡素な建物に想定した。

正殿東南建物 (SB6622) 正殿東南の南北棟 SB6622 は桁行五間以上(7間に復原)、二面庇で庇の間が広い。後殿と同様の構造、全体を床張り、正面の廊を吹放しと想定した。

正殿東北建物 (SB7173) 正殿・後殿中間の南北棟 SB7173 は、廊は掘立柱、身舎は礎石立の礎石・掘立柱の混用であるが、これも後殿と同じ構造を想定している。¹⁾

広場の建物 (SB9220) 斜道の登り口に建つ桁行5間、梁間2間の北面に廊がつき、流造風の屋根となる。土間で、組物がなく、陸梁、合掌、妻は桟首組の簡単な構造にした。

後殿東脇建物 (SB6621) これも身舎は礎石立、廊は掘立柱であるが、SB7173とともに、柱長さの取合せの都合で長尺の柱を必要とする身舎の柱を礎石立としたのであろう。

棟敷風施設 (SB7141) 石積擁壁の前に立つ細長い梁間1門の掘立柱施設 SB7141 の性格は不明であるが、柱は太く、桁行柱間が特に広いので、棟敷風のものを想定し、柱上に合輪をおいて、厚板葺の子放き、高欄付きに想定した。

南門 (SB7750B) 五間門で、棟通りに掘立柱穴あるいは礎石掘付痕跡がなく、柱がたたないので、前面に扉を設けた。二重虹梁蓋板の構造を想定したが、棟通りに柱がないので三棟造ではなかった。この南門東方には一間の掘立柱の棟門が開く。

東門 (SB8310) 八脚門であるが、南門が三棟造ではないので、これも三棟造とはせずに、簡素な合掌構造を想定した。

築地は第II期のSC3810Aを踏襲したものであるが、この時期の瓦がまったく発見されなかつたから、古瓦の再用の可能性もかんがえられるが、復原図では、築土の上に板を重ねて土を置く上土形式に想定した。

大極殿相当建物 (SB7803) 南門の南に立つ SB7803 は廊12尺、その他は10尺等間、桁行7間の礎石建物で、その位置からみても大極殿に当る建物であるが、基壇はそれ程高くなかったろう。第一次・第二次大極殿よりはかなり小さいので、組物は半三斗程度、合掌組、妻飾は桟首組と想定し、この一棟は瓦葺に復原した。

1) 法隆寺東院中門の構造は、掘立柱、7間2間で棟通り内部に柱がない。(国立博物館「法隆寺東院に於ける発掘調査報告書」)。唐招提寺講堂

地下の前身遺構も5間2間の門で棟通り内部に柱がないが(修理工事報告書),この門のよう

4 屋 瓦

A 軒瓦編年の改訂

平城宮出土の軒瓦にたいする全般的な時期区分については、さき『基準資料瓦編II』の解説で提示した。そこでは奈良時代から平安時代までをI～Vにわけ、つぎのような時期区分を行なったのである。

平城宮瓦I：和銅元年～養老5年

平城宮瓦II：養老5年～天平17年

平城宮瓦III：天平17年～天平勝宝年間

平城宮瓦IV：天平宝字元年～神護景雲年間

平城宮瓦V：宝龟元年～延暦3年

今回の報告も原則的にこの編年に準拠するのだが、若干の改訂を加えざるをえなくなった。以下、改訂を要する軒瓦をとりあげ、その理由を述べる。

6225A-6663C ともに平城宮瓦IIに位置づけた軒瓦である。それらは、第2次大極殿・朝堂院の主な軒瓦であり、第1次大極殿・朝堂院の年代が確定するにしたがって、変更せざるをえなくなった。第2次大極殿・朝堂院の造営年代については、『平城宮報告IV』を出版した1966年段階まで、聖武天皇が恭仁宮から遷都した天平17年(745)以降に比定してきた。一方、内裏地域の年代についても、第1次大極殿地域に第1次内裏を想定し、第2次内裏の年代を天平17年以降にあてたのである。

1964年に行なった内裏北方官衙地域(第20次調査)の土壟SK2102から検出した軒瓦は、年代決定の有力な拠り所となった。すなわち、神亀5年(728)と天平元年(729)の紀年木簡とともに、軒丸瓦6311A・6313C、軒平瓦6664F・6666A・6685Bが出土したからである。これらの軒瓦がいずれも内裏地域で使われていることから、内裏が神亀年間にすでに存在したことがあきらかになった。^D この成果を発展させ、内裏地域の前面に展開する第2次大極殿地域・朝堂院地域

も一連の造営とし、第2次大極殿・朝堂院を代表する軒丸瓦6225A-軒平瓦6663Cの年代を神亀年間に繰上げる機運が生じた。その後、他地域の調査結果をも勘案して、第2次大極殿・朝堂院は聖武天皇即位の神亀元年(724)を目標にして造営したとする仮説が一般化し、『基準資料瓦編II』の解説にいたったのである。

すでに述べてきたように、第1次大極殿SB7200が天平12年(740)に恭



fig. 112 第2次大極殿・朝堂院の軒瓦

仁宮へ移建した大極殿に相当することはほぼ確かなこととなった。そして、天平12年段階に平城宮に2棟の大極殿が存在しないかぎり、第2次大極殿SB9150は遷都後に新造したものとかんがえざるをえない。のことから、第2次火振殿・朝堂院の軒丸瓦6225一軒平瓦6663の年代 平城宮瓦Ⅲも平城宮瓦Ⅲに下げるをえなくなつたのである。いまのところ、紀年木簡など絶対年代をうかがいいう遺物との併出例がなく、状況証拠からの帰納であることは否めない。しかし、この観点からすると、軒平瓦6663の大半が山線型であること、同じ組合せ関係の軒瓦が美作國分寺、上総國分寺など諸國の國分寺に分布していることなどと矛盾しない。¹⁾

6668A この軒瓦はさきに平城宮瓦Ⅱとしたが、第I期の南門で軒丸瓦6282Aに、第1次朝堂院南門地区では6284Cに組合わざる状況からして、平城宮瓦Ⅰに位置づける。

6691A さきに平城宮瓦Ⅲとした軒瓦である。しかし、甚仁宮・法華寺東院では天平17年以前に使われており、平城宮瓦Ⅱに繰上げる。ただし、平城宮での使用は、遷都後の時期からである。この点については後述する。

また、從来空白であった平城宮瓦Vの瓦として、長渕京創建時の軒瓦文様につながる軒平瓦6725・6726をくわえた。

B 軒瓦の組合せ関係

平城宮における軒丸瓦と軒平瓦との組合せ関係は、現在までに16組があきらかになっている。組合せを決定する方法としては、原則的に一定地域内における出土頻度の高いものをえらんで判断している。それと同時に、文様構成の共通性(たとえば6225-6663はともに圓線縁をめぐらす)、造瓦技法の共通性(たとえば6135-6688は丸瓦部と平瓦部に同一の格子叩き目がある)などを抽出して組合せ関係の復原をすすめている。しかしながら、その組合せ関係は絶対的でなく、新しい遺構の検出によって変更したりパラエティをかんがえねばならぬ事態も生じてくる。遺構ごとの軒瓦型式の特色については、すでに述べた。ここでは、同一型式の軒瓦が第1次大極殿地域でどのように分布し、どのような組合せ関係を呈しているかという観点にたって再度の分析をこころみてみよう。

すでに述べたように、第I期南門地区、東面築地回廊Ⅰ～Ⅲ区、殿舎地区、第II期南面回廊地区の間に特色のある軒瓦の分布がみられる。ここでは、それらの地区に大膳東区・大膳西区をくわえてこの地域をのべることにする。それぞれの地区内で全体の10%以上出土した軒瓦を表示したのがTab. 43である。以下、この表からよみとれる傾向をみてみよう。

6284-6664 第1次大極殿地域を代表する軒瓦であることはいうまでもない。第I期南門地区では、6284E-6664Cが6282A-6668Aとともに全体の70%をしめている。東樓地区では、6284Eの占有率が下がつてはいるが、6284Cは、第I期南門地区とさして変化がない。6664はCとKとが折半する形をとり、Kは6304Cと組合うことになる。占有率は格段に下るが、この傾向は東面築地回廊地区・殿舎地区にみられ、第I期遺構の名残りとみることができる。東面築地回廊地区で軒丸瓦と軒平瓦のバランスが崩れているのは、この地区で幾度もの改修がなさ

1) 森鶴夫「平城宮系軒瓦と國分寺遺宮」『古代研究3』1974、p. 8~19

式のものをぞいているため、型式全体の%とはかならずしも一致しない。

2) Tab. 43にしめした細分型式の%は、不明型

第V章 考 索

軒瓦瓦	(第I期南門地区)	(東接地区)	(東西築地 回路I区)	(東西築地 回路II区)	(東西築地 回路III区)
6284A	5.9	11.0	4.1	2.3	4.9
" B	1.9	2.1	1.9	2.3	13.3%
" C	25.9	21.0	13.0	28.6	8.4
" E	44.6	3.7	0.3	1.3	
6282A		11.1%			
6282B		3.7%			
" D				4.8	
" E				3.9	
" F				2.4	
" G				4.8	18.3%
" H				1.6	
" I				1.2	
6304C	18.2	22.6%			
" L	4.5				
6225A		13.1			
" B		3.1	17.8%		
" C		1.0			
" L					
6133A			17.2		
" B			6.8		
" C			6.8	34.4%	
" D			3.4		
" HM					
6134A					
6308A					
" B					
6311A					
" B					
" C					
6313A	1.3	10.6%	4.0	9.3	15.0%
" B	9.3		0.7	25.4	
" C					
" D					
" G					
" M					
軒平瓦	(第I期南門地区)	(東接地区)	(東西築地 回路I区)	(東西築地 回路II区)	(東西築地 回路III区)
6664B	2.0	7.5	0.6	5.6	6.9
" C	61.9	28.1	31.3	2.8	10.4
" K	4.0	24.4	1.9		
" G					
" H		3.7	38.9%		
" I			0.3		
" D			1.9		
" F		2.6	2.8		
6668A		24.5%			
6663A	4.3	2.0	13.8		
" B	2.1	3.5	6.9		
" C	6.5	4.5	23.1%		
" F		0.5	1.2		
" G			1.2		
6721A			1.7		
" B					
" C			6.4	19.0%	
" E			12.6		
" F					
" G					
" H			4.8		
6732A			2.8	7.8	
" B			30.1%		
" C		27.3	2.1	10.1%	
6691A					
6685A	3.7	3.7			
" B	22.6	26.7%			
" C					
" D					
" G	0.4	1.8			

Tab. 43 第1次大柄築地域の軒瓦組合せ

4 星 瓦

(第Ⅱ期南面繁 地回廊地区)	(聚落地区)	(大膳聯西区)	(大膳聯東区)	(内裏地区)	(内裏北方 官衙地区)
	2.5 1.7 7.7	3.4 3.5 6.9	8.5 2.4 3.6	14.5%	
	6.7 2.2 4.5 4.5	27.8 1.5 0.8	21.1% 6.5 34.4%	0.2%	
	4.9 4.9 4.9 2.9	2.9 1.4 8.8 2.9	10.7 3.0 9.9	13.3% 12.1%	10.6 0.3 0.2 0.1
	2.1 8.5	10.8% 16.1%	6.9 1.2 2.0 1.2 0.8	20.1%	
	7.4 7.4	14.8% 14.8%	14.2 9.9	24.1% 28.6%	11.0 13.0 0.1
	4.7 6.0 2.0 2.6 2.0	21.0 0.3 0.3 1.3 1.6 2.0 他 1.6	0.8 1.2 0.8 1.4 4.7 他 2.1	3.0 0.2 26.7% 8.2 15.3	1.3 1.0 0.2 0.4 9.5 15.0 他 0.8
	14.9 2.5 12.4	3.3 6.9 1.3 H0.3	3.3 6.3 2.4 H0.6	2.2 0.6 16.2% 13.4	3.2 2.3 8.2 8.2
	4.4 4.4 13.1	1.3 21.1 1.3 22.7 5.4	3.6 1.9 7.9 3.4 1.5 1.9 1.3 14.4 1.3 1.2	2.4 10.5 2.4 3.9 3.0 0.6 D0.6 6.6 1.2 1.2	7.4 12.4% 4.9 0.1
	14.6%	12.9%			
	4.7 16.3	21.0%		6.1 18.0 4.8 0.1	4.1 8.2 0.1 2.8

れた間に、当初の瓦組合せの関係が乱れてしまったのだろう。

6282A—6668A 構成比に多少の違いがあるが、第Ⅰ期南門地区で6284—6664を補完する形で存在する。6282AはSD3765から出土した和銅創建瓦の一つ。なお、第1次朝堂院南門SB9205では、6284C—6668Aの組合せがみとめられており、この組合せが絶対的ではない。

6304C—6664K 東棲地区だけに集中し、6284について多い。SB7802を増築した第Ⅰ—2期東棲の軒瓦に想定できる。構成比からすれば6664Kと組合うことになり、6664Kが6664Cよりも時期的に遅れる可能性をふくんでいる。

6225—6663 上述したように第2次大極殿・朝堂院を代表する瓦の組合せだが、第1次大極殿地域にもある。この軒瓦は東棲・東面築地回廊区、第Ⅱ期南面築地回廊地区にみられるが、多くない。概していえば6663のはうが多くのとり、6225のはうが少ない。この場合、たとえば第Ⅱ期南面築地回廊地区では6225(8.5%)—6663(29.8%)、東面築地回廊第Ⅲ区では6225(4%)—6663(23.1%)というように、バランスが崩れている。このような点からすると、第Ⅱ期のSC3810AやSC8360の主要瓦にはなりえない。一方、東棲地区では6225(8.0%)—6663(13.1%)とはほぼ等率でのこっており、第Ⅰ—4期に修理用瓦として用いたことが想定できる。

6313—6685 小型の瓦で築地回廊地区に限って集中している。さきにこの種の軒瓦が築地の棟瓦に用いられたであろうことを想定したが、第1次大極殿地域でも同様のことかといいう。

6282 (A以外のもの)—6721 第Ⅱ期南面築地回廊以北にはっきりとまとまり、それが第Ⅱ期造構の主要瓦であったことが麗然としている。殿舎地区では6282B—6721Cとの組合せが成立し、同様な傾向を大膳殿西区にもみとめられる。

6134A—6732A さきの6282—6721とともに殿舎地区の軒瓦の主要瓦である。少数ではあるが6732Aが東西築地回廊第Ⅱ・Ⅲ区にみられるのに対し、6134Aは殿舎地区に限定されている。6133A—6732Cは東面築地回廊での組合せである。一方、大膳殿西区では6133A・G—6732Aの組合せを生じている。軒平瓦の文様が同じ系統であるのに対して、軒丸瓦の文様がまったくことなっているのである。もしかすると、殿舎地区的建設と築地回廊の建設の時間的なズレによって生じた現象かもしれない。

6691A 第Ⅱ期南面築地回廊地区と殿舎地区に主としてのこる。後述するように6691Aは恭仁宮大極殿のためにつくられた軒瓦で、延都後に平城宮で用いられるようになった。

以上、第1次大極殿地域の軒瓦についてみてきたが、つぎに講接地境との比較を若干こころ大膳殿 みると。大膳殿地域については、瓦構成でみるとかぎり東区と西区とはことなった様相を呈する。たとえば、6664Bが西区で顕著にみられるのに対し、西区ではほとんどない状況。西区に多い6133が東区で少ない状況などがそれである。一方、両区をあわせると、殿舎地区とほぼ同じ傾向をとり、この地域の建設が第Ⅱ期にあることを軒瓦の面からも裏づけている。

内裏地域については未整理の段階で正確な比較はなしえず、大雑把な傾向をたどるしかない 内裏地域 が、出土量の多い順に第1次大極殿地域と比較してみよう。

6313—6685 小型軒瓦は両地域とも共通して存在している。それは山地城とともに築地回廊でかこまれていたからである。

6311A・B—6664D・F 6311A・Bは第1次大極殿地域には出土しない軒丸瓦である。それに組合う6664D・Fもきわめて少ない。また、第1次大極殿地域で6664に組合う6284は内裏地

域にあらわれていない。6664D・Fが6664C・Kにくらべて新しいタイプの軒瓦であることからすれば、6664C・K→6664D・Fと変化する間に、6284→6311A・Bへと変化したのであろうとおもわれる。

6282—6721 この組合せの占有率は殿舎地区と類似している。つまり、内裏地域の軒瓦の多數をしめる小型瓦の6313—6685を除くと、構成比が浮上するからである。殿舎地区では6282B—6721Cとの組合せがはっきりと成立しており、同様の傾向が内裏地区にもみられそうだが、それはほど顕著でない。

6225—6663 内裏での占有率は低くない。殿舎地区であらわれてこないのと対照的である。これは内裏地域が第2次大極殿地域に接しているためであり、同時の改修工事を行なったことを暗示している。

これらの組合せから判断すると、内裏地域の造営は第1次大極殿地域に後続するかたちで、内裏の造営着手されたとかんがえられる。その時期は平城宮瓦II期である。また、平城宮瓦III期の存在は、第2次大極殿地域の造営にともなって改築されたことを意味するであろう。

C 軒瓦の同范関係

同一の范型でつくられた軒瓦を同范瓦といい、同范瓦が地域をへだてて発見される場合を、同范関係という。この同范関係が起る可能性を想定すると、つぎのような場合がある。

同范の認定

- 1 A地点の瓦工房で製作した瓦が、B地点に運ばれて使った場合。
- 2 同一瓦工房(窯)の瓦を、A地点とB地点に運んで使われた場合。
- 3 同じ瓦の范型を、A地点とB地点の瓦工房でともに使った場合。
- 4 A地点の建物が廃され、B地点の建物に再利用した場合。

このように、同范関係は瓦工房を軸にして発生するのが原則的であり、消費地間で起るのは周次のものである。1・2・4の場合は瓦自体が移動しておらず、胎土や製作技法が共通する可能性が高い。3の場合には范型の移動のみならず、胎土や製作技法に違いができる可能性がある。瓦が移動する場合、たとえば東大寺造営に際して抵津国醍醐寺¹⁾に瓦を発注している例からみられるように、比較的近距離間における現象である。それに対して范型が移動するときには、遠隔地間に同范関係を生ずることになる。たとえば、播磨国溝口廃寺と下野国薬師寺との間に存在する6682、今回報告した平城宮と豊前国福島市廃寺との間に存在する6284Fのような例である。

- 4の場合は都城の遷都によって生じる同范関係が好例
- 1)「天平勝宝九歳三月十六抵津駿解」「大日本古文書」第4巻 p. 224～225
 - 2)岡本東二「同范軒瓦について」「考古学雑誌」60-1, 1974
 - 3)行徳市教育委員会「福島市廃寺」1980

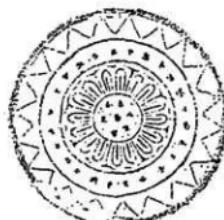


Fig. 113 6284Fの同范
上・福島市廃寺 下・平城宮跡

である。蘇原宮と平城宮、平城宮と長岡宮、長岡宮と平安宮、さらには右の諸宮と難波宮などの間には同範関係があり、從来からもしばしば指摘されている。ここでは第1次大極殿地域と恭仁宮との間に存在する同範関係について検討してみよう。

すでに述べたように、「続日本紀」天平15年11月条に「初墳平坂大極殿并歩廊、遷造於恭仁宮四年於茲」という大極殿と歩廊は、SH7200とSC5500である蓋然性がきわめて強い。だとすれば、当然瓦も恭仁宮へ移動していることになる。恭仁宮の発掘調査では、現在までに軒丸瓦22種427点、軒平瓦22種355点が報告されている³⁾。うち、8世紀代の軒丸瓦の内訳は、平城宮と同範例13種、うち第1次大極殿地城出土瓦と同範のもの12種(Tab.44)、同範ではないが同型式のもの1種(6133(KM14))、信香楽宮と同範のもの1種(KM05)、山背國分寺独白のもの1種(KM06)となる。軒平瓦では、平城宮と同範例12種のうち第1次大極殿地城出土瓦と同範のもの10種(Tab.44)、同範ではないが同型式のもの2種(6663(KH06B)・6721(KH04C))、信香楽宮と同範のもの2種(KH08・KH05)、恭仁宮独自のもの2種(KH03・KH02)、東大寺式と同系のもの1種(KM15)となる。こうした8世紀の軒瓦は、恭仁宮造営時およびそれ以前の瓦(和制3年～天平17年)と山背國分寺への施入(天平17年)以降に大別できる。前者が平城宮瓦I・II、後者が平城宮瓦III以降に相当していることはいうまでもない(Tab. 114)。

	平城宮 編年	軒 丸 瓦	軒 平 瓦
恭仁宮期	I	6284A・6284C・6284E	6684C・6664K
	II	6285A・6285B・6308・6311A・6301B ・6291A・6320A・6282Ha・6130A・ 6321A	6685B・6691A・6682A・6664F・6671B 6663(KH06B)・6721A・6721C・6721(KH 04C)・6663B
国分寺期	III	KM05・KM06	KH05・KH03・KH02・KH03・6732

Tab. 44 恭仁宮軒瓦の分類

恭仁宮と平城宮との間に存在する同範関係軒瓦の大半は、恭仁宮遷都とともに平城宮から運んだものとみてさしきつかえなかろう。そして、軒瓦からも、「続日本紀」の記事が傍証されることになる。ただし、恭仁宮大極殿に基いたものと想定されている6320Aaについては問題がある。つまり、同範であっても、平城宮では外縁の凸線鉛歯文を凸面鉛歯文に彫りなおしたAbが多く存在しているからである。このことは、同範であっても、恭仁宮の6320Aaが古く、平城宮の6320Abが新しいものであることを物語っている。一方、恭仁宮で6320Aaと組合される6691Aは、南面築地回廊地区と最奥地区に集中するが、6320Aとは組合わず対応する軒丸瓦も見出しがたい。平城宮後の大極殿地城出土瓦と同範のものとして用いられているらしいのである。

法隆寺東院では、天平10年代の創建瓦として6691Aが6285Bと組合って用いられている。ともに恭仁宮に存在するが、組合せ関係はことなっており、法隆寺東院の6691Aには正面に格子目叩きの調整を施すなどの、他にみられない独白の技法がある。一方、平城宮のものは6285A・Bであり、少しく形がことなり、それも主要な瓦にはなっていない。このことからすると、

法隆寺東院 法隆寺東院と恭仁宮・平城宮のあいだに存在する同範関係は、窓型の移動による可能性があ

1) 京都府教育委員会「恭仁宮跡昭和53年発掘調査
金摘要」1979, p. 1~63

2) 平城宮と同範の瓦には、6282Ha・6721A・C

のように平城宮瓦Ⅲ期に位置づけるものもふくまれるが、今回は、恭仁宮造営期のものとして取り扱った。

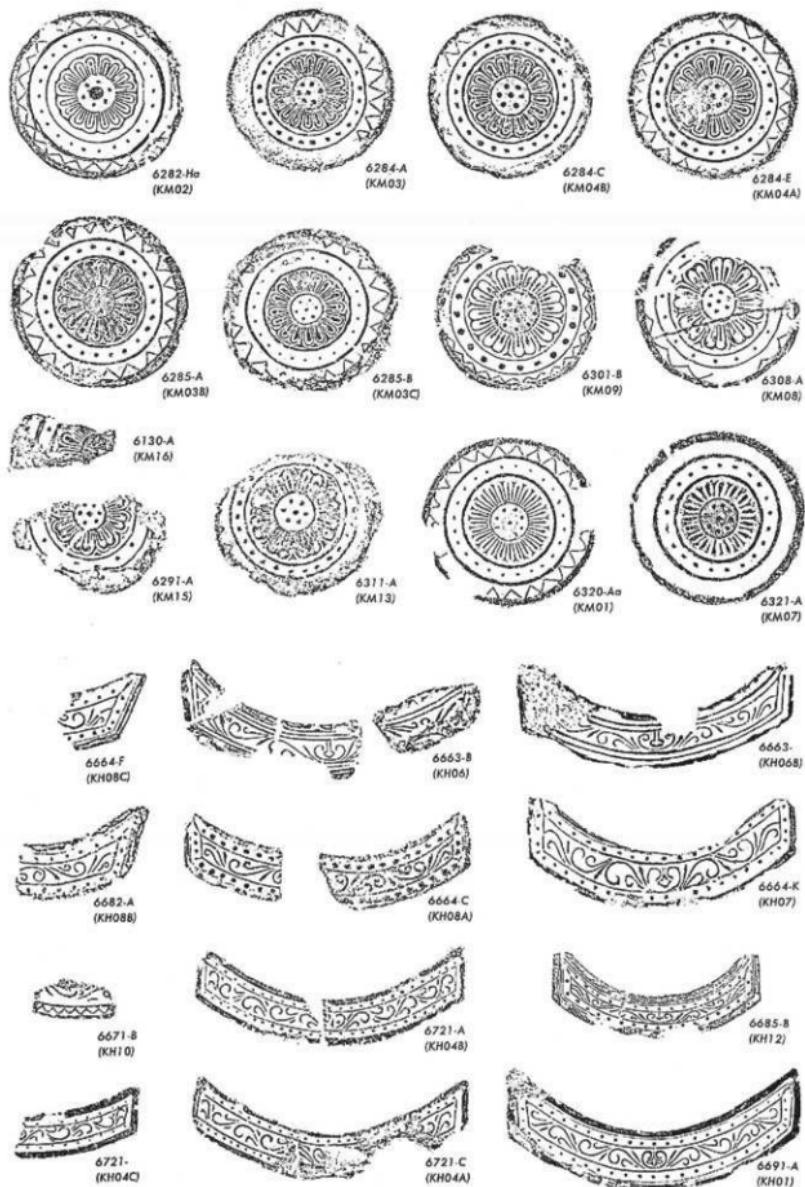


fig. 114 平城宮と恭仁宮の同范軒瓦

るとみなければならない。

しかし、恭仁宮と平城宮の同窓関係は、瓦工房内の問題である可能性がつよい。その手掛りとして第1次大極殿地域から出土した人名刻印瓦がある。人名刻印は丸・平瓦にみられ、恭仁宮で多量に用いられているとともに、東大寺の前身である金鐘寺の金堂とされる法華堂の所用瓦である。それらは人名が共通するばかりではなく、瓦の製作技法も共通しており、同一工房の製品であることについては衆目の一致するところである。さらに、印形の磨耗状況からすれば、恭仁宮・法華堂よりも平城宮のものほうが後につくられたものと推測されている。また、法華堂付近から6691A-6285A¹⁾が出土しており、それらが人名刻印瓦と一連のものであることがうかがわれる。このようなことから、恭仁宮・法華堂の瓦がほぼ時期を同じくして造られ、その範型が法隆寺東院の創建時にも用いられたことが想定できる。一方、平城宮では、平城遷都後の修理に際して用いられたであろうことが類推できることになる。つまり、天平10年代前半の主要な軒瓦文様であった6691A、6285A・B、6320Aおよび人名刻印瓦は、天平17年以降の平城宮では残影として存在し、第1次大極殿地域の6134A-6732A・6282B-6271C、第2次大極殿地域の6225-6663の軒瓦文様が主流になって変化していくという見透しがたつのである。

瓦工房と宮城や寺院の造営長官とを直結させるのは危険であろうが、うえのような瓦製作が造宮の長官 共通する事情を裏付けるような人事に注目したい。巨勢朝臣奈氏麻呂と智努王が、天平13年(741)に恭仁宮の造宮卿に任命されている。『法隆寺東院縁起』によれば、天平19年駿階の造院司長官は巨勢朝臣奈氏麻呂であり、智努王は神亀5年(728)に東大寺の前身である金鐘寺の造営にかかわる造山房司長官に任命されたことが記録されている。

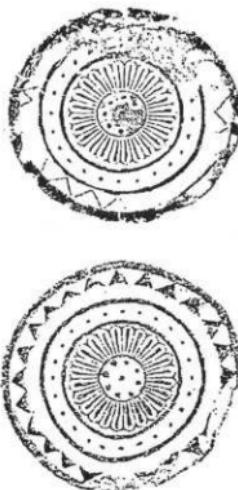


Fig. 115 6320Aの二種
上 a(恭仁宮) 下 b(平城宮)

1) 人名刻印瓦については、その人名が、造東大寺司の瓦工名と一致するという藤沢一夫の見解がある。藤沢一夫「造瓦技術の進展」「日本の考古学VI」1967, p. 293

2) 奈良県教育委員会「国宝東大寺開山堂修理工事報告書」1971, 第113図

3) 巨勢朝臣奈氏麻呂は、天平勝宝5年(753)3

月、造宮卿のまま薨じてことから、遷都後の平城宮の造営にも係っていたと推定される。

4) 恭仁宮と法華堂の人名刻印瓦については、智努王が介在したとする森郁夫の見解がある。森郁夫「東大寺法華堂の瓦」「南部佛教」第43・44号 1980, p. 140~p. 148

5 土 器

A 平城宮土器IV・VIIの再検討

今回報告した土器のなかで、編年上問題となる東棲 SB7802 出土土器および第Ⅲ期造構から出土した土器について、主として土師器食器類製作の調整手法を中心にして検討をこころみてみよう。

i 東棲 SB7802 出土の土器

SB7802 の柱抜取痕跡から出土した土器は短期間のうちに投棄されたもので、平城宮土器IVにぞくする。しかしながら、これまで平城宮土器IVの代表例としてきたSK219の土師器調整手法とは様相がいささか異なる。

SK219出土土師器の調整手法の割合をみると、杯Aでは a 手法 5.3%, b 手法 92.1%, c 手法 2.6%, 皿A では a 手法 7.5%, b 手法 65.3%, c 手法 27.2% であり、b 手法が圧倒的多数をしめている。また、暗文をもつものはまれであった。これにたいし、平城宮土器IIIの代表例になっているSK820では a 手法が圧倒的多数をしめ、杯A では 66.3%, 皿A では 78% にたっている。c 手法がこの時期に出現するが、ごく少量にすぎない。また、暗文をもつものが多数をしめているのである。

平城宮土器 I の SD1900³⁾, 平城宮土器 II の SD485, 平城宮土器 V の SK2113⁴⁾の様相をくわえ、平城宮出土土師器の調整手法の流れをたどってつきのような結果がでている。つまり、平城宮土器 I・II では a, b 両手法、III では a 手法、IV では b 手法、IV 以降 c 手法が主体となるという変化で理解されてきたのである。

ところでSB7802出土土器をみると、杯Aのうち a 手法 60.5%, b 手法 7.9%, c 手法 31.6% であり、皿A では a 手法 85.9%, b 手法 5.1%, c 手法 9.0% となる。一方、暗文をほどこすものはまれである。こうしたSB7802の状況をSK820, SK219と比較するとどうだろうか。SB7802 土器の 3 手法の比率は、SK820 土器とくらべると、a 手法が主体にならることは共通するが、c 手法の割合がSK820 土器よりもかなり大きい。また、SK219 土器と比較すれば a 手法と b 手法との割合が逆転していることになる。c 手法は SK219 では皿A に顯著にあらわれており、SB7802 では杯A に多いというちがいがある。また、暗文が SB7802 にまれであることは SK219 と共通する特徴といえよう。このように調整手法からみると SB7802 土器は、平城宮土器 III の SK820 よりも新しく、これまで平城宮土器 IV としてきた SK219 よりも古い様相をもつことになる。

SB7802 土器はしばしばのべてきたように、天平勝宝 5 年の紀半木簡と併出したもので年代

SK219・
SK820 の
土 器

平城宮土器
IV の古いタ
イプ

1) 『平城宮報告 I』 p. 63~68

4) 『平城宮報告 VII』 p. 90~94, PL. 51~52

2) 『平城宮報告 IX』 p. 54~60

5) 『平城宮報告 VI』 p. 143~144

3) 『平城宮報告 VI』 p. 38~50, PL. 55~64

の1点がきまっている。平城宮土器ⅢのなかでSK820土器よりも若干新しい段階のものとして、SK2101¹⁾土器がある。この土壌から出土した木簡の年紀でもっとも新しいのは天平勝宝2年であり、SB7802出土木簡よりもわずか3年早い。しかしながら、調整手法はSK820と同様の傾向をしめし、暗文をもつものも多数をしめる。

以上のような検討をつうじてSB7802土器は、SK820・SK2101土器とSK219土器との間に位置する土器群ということになる。手法的には平城宮土器Ⅲにはぞくさず、今回の報告では平城宮土器Ⅳのなかにふくめた。その実年代は平城宮土器ⅢのSK2101に連続するものであり、平城宮土器Ⅳの前半期におくことができる。SB7802土器によって、平城宮土器Ⅳの上限の1点が天平勝宝5年(753)に定ったことになる。したがって、其伴の紀年木簡から天平宝字6年(762)を中心とする年代を与えてきたSK219土器は、平城宮土器Ⅳの後半を代表することになった。

ii 第Ⅲ期造構出土の土器

第Ⅲ期の殿舎地区の建物SB8224、溝SD6631、SD6633、SD7175から出土した土器は、平城宮土器Ⅶにぞくするものとかがえている。しかし、さきに平城宮土器Ⅶの代表例として報告したSE311B土器とは若干様相をすることにしているので、以下において平安時代初期の土師器食器類についての調整手法を比較検討してみよう。

長岡京の土器 平城宮土器VI、すなわち長岡京時代の土器は、平城宮跡からは好資料が発見されていない³⁾ので、長岡京SD51⁴⁾・SD1301出土の土師器を資料にして、8世紀末葉の土師器をのべる。SD51⁵⁾は、長岡京廃都時(延暦13年、793)に埋められた溝であり、SD1301からは延暦6・8・9年(786~790)の紀年木簡が出土している。この2条の溝の土師器食器類の調整手法には、杯・皿にb手法・c手法・f手法がみられる。e手法は皿の法量の小さい一群(内径11.6cm・高さ2.8cm)と椀cにみられるにすぎない。食器類のc手法には、後述のSE311Bでみられるようにe手法で調整したのち全面へラ削りするc手法はみられない。こうした調整手法すると、長岡京SD51・SD1301土器は平城宮土器Vに連続する様相をしめしていることになる。

SE311Bの土器 平城宮土器Vの代表例としてきたSE311Bについてはどうであろう。杯Aではc手法83.7%、e手法2.3%，f手法14.0%，皿Aではc手法94.6%，e手法5.4%，椀Aではc手法73.9%，e手法19.5%，f手法6.6%となっている。c手法が盛行しているが、とくに杯、椀にはe手法のち全面をへラ削りしたc手法が多い傾向が顕著にみられる。SE311B土器に後続するも

1) 『平城宮報告Ⅷ』 p. 87~90, PL. 60

次発掘調査概要『丹波文化財発掘調査』(1975)』

2) 『平城宮報告Ⅳ』 p. 24~28

1978, p. 34~39

3) 『平城宮報告Ⅺ』で6ABO区の建物SB116の雨落溝出土の土器群(『平城宮報告Ⅱ』 p. 70・71参照)を長岡京併行とかがえっていたが、その後の長岡京の調査の進展とともに、長岡京時代の土器の様相があきらかになり、SB116の土器群は、長岡京の土器群より後出的な型式で平城宮土器Vにぞくすることがあきらかになつたので、修正する。

5) 向日市教育委員会「長岡京左京13次(TANE SHI地区)発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財報告第4集』1977, p. 1~39

4) 京都府教育委員会「長岡京左京三条一坊第2

百瀬ちどり「長岡京の供膳形態の土師器について」『長岡京ニュース』第11号, 1979

この論文では、長岡京の土師器と平城宮土器V・VIの土師器が対比され、長岡京時代の土師器の様相がくわしくのべられている。

のとして、かつて報告したSD650A・B土器¹⁾があり、そこではe手法が増加する傾向がみられる。全体としてはc手法が依然としてe手法をうわまわっているが、c手法の多くはe手法のうち全面へラ削りしたものである。10世紀後半にぞくする栗原寺西僧房跡出土土器は、そのほとんどがc手法であり、e手法のうちへラ削りするc手法はすでに消失しているとみてよい。

以上のように、平安時代初期の土師器食器類の調整手法の変化をたどっていくと、c手法からc手法へという調整手法の時代的な変化が濃厚に浮びあがってくる。かさねていうが、この時期のc手法のうち、e手法のうち全面へラ削りするものが主体をしめていることに注目しなければならない。したがって、奈良時代初頭からの調整手法の流れとして概略的にみれば、a手法のうちへラ削りするものから、e手法のうちへラ削りするものに変化し、さらにへラ削りを省略するという状況がうかがわれるのである。e手法はすでに奈良時代前半から概Cにみられるがそれ以外の器種になく、食器類の全般にわたってこの手法がとり入れられるのは平城宮土器VIIからのことである。

つぎに、平城宮土器VIIに比定した第III期の遺構から発見された土器を再度検討してみよう。

SB8224土器にはb手法が姿を消し、c手法とf手法で、前者が多数をしめる。くわえて、SB8224の土器では口縁端部の巻込みが小さく、口縁部の外輪度が大きいこと、碗Aの形態が杯Aの小型の形に変化することなどは新しい要素といえよう。他方、c手法のなかにe手法のうち全面へラ削りするc手法を欠いていることは、長岡京SD51、SD1301土器の延長線上にあることをしめす。

SD6631、SD6633、SD7175土器のうち、皿では皿A IIにf手法がわずか1個体のみと認められるほかはc手法である。杯Aではe手法のうち全面へラ削りするc手法が大多数をしめている。このようにc手法が盛行するのはSE311Bと共に通しておらず、両者の時期にあまりへだたりのないことをしめしている。一方、SE311Bにくらべてe手法の割合が少ないのは古い要素をなおとどめていることになる。

うえのことから平城宮土器VIIはSB8224→SB6631等→SE311Bの順にならぶ。しかしながら、SB8224土器は平城上皇時代(809~824年)当初のものではない。すなわち、SB8224は前身建物SB8219を建替えたのちの建物であり、土器はその建築時の柱掘形から検出したものである。いま、建替えの時期をきめる手立てはないが、平城上皇時代の半ばとすれば、SB8224土器の年代は815年前後となり、これから推測すればSD6631等土器は平城上皇時代後半、SE311B土器は824年以後余り時へのへだらない頃ということになる。

	b手法	c手法	e-c	e手法	f手法
長岡京 SD1301	1.0%	9.5%	×	3.6%	
平城宮 SB8224	70.8	×		29.2	
SD6631等	99.0	○	0.5%	0.5	
SE311B	89.9	○	4.0	6.1	
平城宮 SD650A	77.0	○	23.0		
SD650B	55.0	○	45.0		

Tab. 45 土師器杯A・皿Aの調整手法

1) 「平城宮報告VI」p. 54~74, PL. 66~79

寺出土の施釉陶器」「日本美術工芸」1975年11

2) 「平城宮跡発掘調査概報」1975, p. 37~43

月, p. 15~23

『奈文研年報1975』p. 28~32, 吉田恵二「栗原

iii 土師器の胎土分析

目的 第1次大極殿地域から出土した土器の大部分は、奈良時代後半から平安時代前半のうちでも初期までに位置付けられる。奈良時代後半の併膳形態の土師器は、形態・調整手法・胎土から、大きく二つのグループ (N_1 群・ N_2 群) にわけることができる。このほか、両群のいずれにもぞくさないものもみとめられるが、少量であり、今回の分析対象からはずした。 N_1 群土師器は灰白色を呈し、砂分をほとんど含まない緻密な胎土で、その多くはa・b手法で調整され、c手法で調整されているものは少ない。それに対し N_2 群土師器は、赤褐色から暗褐色に発色し、蒙母・長石粒を多量に含む砂分の多い胎土で、多くはc手法で調整されている。

平安時代土師器の群別 平安時代の土師器は、奈良時代後半の N_1 群と共通性をもつものと、 N_2 群とよく似た発色で、砂分を多量に含むものがある。仮に前者を H_1 群・後者を H_2 群とする。 H_2 群はc手法で調整されるものが大半であるが、e手法による土師器も少数例ある。平安時代初期（9世紀初頭）では、 H_1 群が少量ながら存在するが、9世紀中頃には姿を消し、 H_2 群のみとなる。

理化学的な分析を導入した主な理由は、第1に、考古学的操作で分類した奈良時代後半の土師器（平城宮土器IV・V）の N_1 群と N_2 群との間における微量元素や鉱物組成上の差異を検討することであり、第2には、奈良時代後半の土師器と平城上皇時代の土師器を比較検討することである。すなわち、 N_1 、 N_2 群と H_1 、 H_2 群との差異を確認することである。第2点については、奈良時代の宮廷土師器（貴達土師器）と平安京遷都後の旧平城京地域で使用された在地消費用土師器の産地は、おそらくことなるであろうとの見通しに立脚している。ただ第1次大極殿地域から出土する平安時代の土師器は、平城上皇の平城宮にともなう遺構から出土しており、多分に貢進土器的な可能性があるため、平安遷都後、旧平城京で生活していた人々が使用したともわれる土師器をも試料に供した。東三坊大路東側溝出土の土師器（SD650A・B）と蓬御寺西僧房出土の土師器である。今回の分析した資料とその年代はTab.46・47のとおりである。

方法 分析試料となる土師器の大半は光沢品、もしくはそれに近いものが多く、本報告では原則として非破壊的手法によることにした。同手法として最もよく使われている蛍光X線分析をおこなった。蛍光X線分析法では、土師器に含まれる組成元素を定量的に測定することができる。分析の対象となる元素は、土師器を相互に比較するために最も有効なものでなければならず、本報告ではストロンチウム(Sr)、ルビジウム(Rb)、そしてジルコニウム(Zr)を定量的に測定することにした。また、胎土に含まれる鉱物片や岩石礫種の判定とその集合状態については、薄片を作成し偏光顕微鏡下で観察を行なった。さらに、一部の試料については鉱物同定のためにX線回折分析を並行した。

蛍光X線分析に際しては、土師器表面を十分に洗浄し（一部の試料は表面を研磨して平滑にした）、X線照射面積を直径30mmの円形範囲に定めて測定を行なった。SrK α (2 θ ° 25.16), RbK α (2 θ ° 26.64), およびZrK α (2 θ ° 22.58) 線のピーク強度から RbK α /SrK α , ZrK α /SrK α の相対強度比を求め、fig.118のように図示した。

結果 蛍光X線分析の結果、奈良時代後半の平城宮土器IV・Vの土師器は、二つのグループに分かれ、考古学的な観察結果と一致する。fig.118は平城宮土器Vの試料をRbK α /SrK α , ZrK α /SrK α の測定値をもとにプロットした分布図である。 N_1 群土師器は、X値(ZrK α /SrK α)

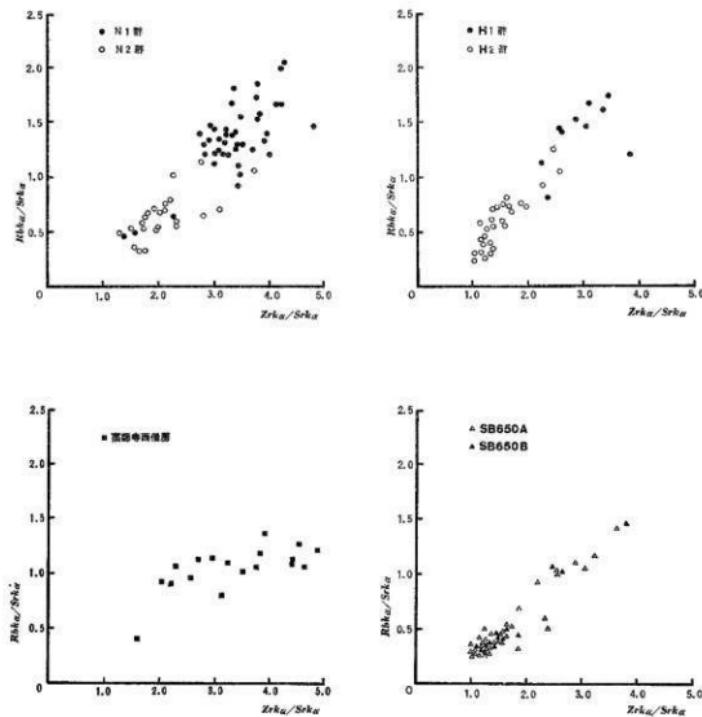
5. 土器

(器種)	(時期区分)	(器種) (形式)	(出土遺構)	(内面) (観察)	(試料数)	(器種)	(時期区分)	(器種) (形式)	(出土遺構)	(内面) (観察)	(試料数)
	IV	A C	SB7802 SB7802	N ₁ N ₂	14 13		IV	A	SB7802 SB7150	N ₁ N ₂	17 9
	V	A	SA 109 SK8316+17	N ₁ N ₁ N ₂	10 4 3		V	A	SA109 SK8316+17 Si8224	N ₁ N ₂ H ₂	10 5 3 10
杯			SB8224 SD7175 SR311B	H ₁ H ₂ H ₂ H ₂ 不明	6 4 12 6 3	皿	IV	A	SD7175 SE311B	H ₁ H ₂	4 9 6
	VI	A	SE311B	H ₂	2		VII	A I	SE311B	H ₂	4
東二坊大路 東側溝		A	SD650A	--	8		VII	A II	SE311B	H ₂ 不明	6 2
		A(c)	SD650B	--	4			(A I)		--	6
		B(e)	SD650B	--	2			(A II)	SD650A	--	7
薬師寺西面均床面				--	9			(A e)		--	9
	IV	A C	SB7802 SB7802	N ₂ N ₁ N ₂	3 8 12			薬師寺西面 僧房	A	--	5
	V	A	SB7150 SA 109	N ₁ N ₂	2 3			B	--	--	4
鏡	VI	A	SE311B	H ₂	5					(計) 322	
東三坊大路 東側溝		A(c)	SD650A	--	6					() : 調整手法	
		A(e)	SD650A	--	6					A I, A II は便宜上分類	
		A(c)	SD650B	--	6						
		A(c)	SD650B	--	5						

Tab. 46 分析試料一覧

(形 式)	(遺 構)	(時 期)
平坡宮土器IV	SB7802	8世紀中頃
" V	SA109 + SK8316	8世紀後半
平坡宮土器VII	SB8224 + SD7175 SE311B + SB116	9世紀初頃
東三坊大路東 側溝	SD650A	9世紀前半
"	SD650B	9世紀後半～10世紀初
薬師寺	西面	10世紀後半

Tab. 47 脂肪分析試料の時期・薬師寺



測定条件

X線管球: Cr(クロム)

電圧電流: 40kV-20mA

分光結晶: LiF(フッ化リチウム)

検出器: シンチレーションカウンター

走査速度: 1/1 (^/min)

Fig. 118 土器の螢光X線分析

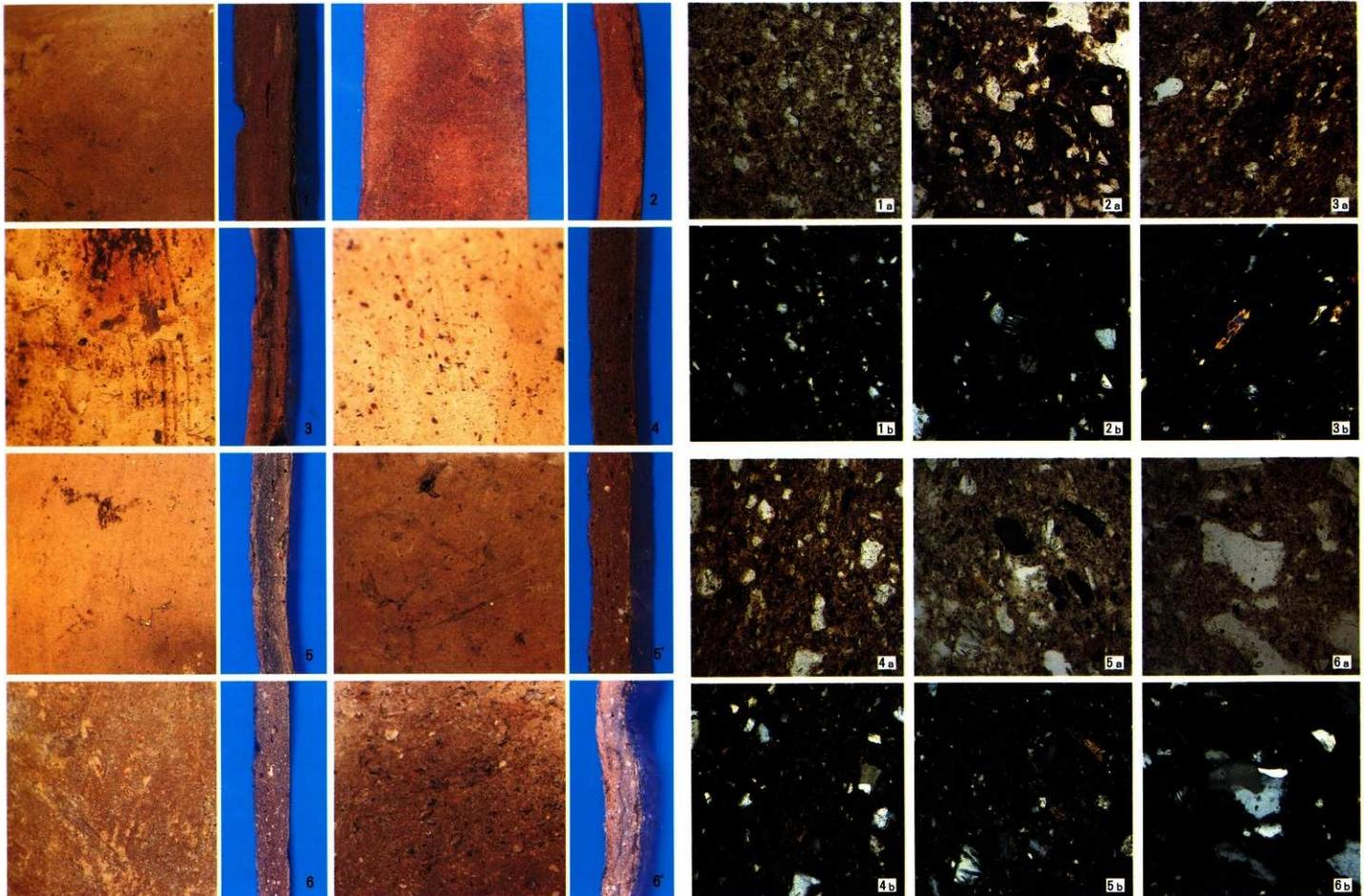


fig. 116 平城宮土器表面・断面拡大写真

1 : 平城宮土器 IV 2 : 平城宮土器 V 3 : 平城宮土器 VII
 4 : 平城宮土器 VII2 番 5・6 : 東三坊大路測量 SD650 A
 6' : 東三坊大路測量 SD650 B (倍率 3)

fig. 117 平城宮土器の偏光顕微鏡写真

1 : 平城宮土器 IV, 2 : 平城宮土器 V, 3・4 : 平城宮土器 VI～VII
 5・6 : 東三坊大路東夷港 SD650 A・B 上段 : -ニコル 下段 : +ニコル (倍率60)

2.0~4.9, Y値(RbK α /SrK α)0.7~2.1の範囲に分布するのに対し, N₂群土器は, N₁群に比較して座標位置がやや低く, X値1.4~4.7, Y値0.3~2.1に分布する。平城宮土器Ⅶの資料も, 大きく二つにわかれ, H₁群は平城宮土器IV・VのN₂群分布範囲に, H₂群も平城宮土器IV・VのN₂群の分布範囲に対応している。蛍光X線分析の結果からすれば, 平城上皇時代の土器も奈良時代後半のそれと同じく二個所の産地からもたらされた可能性が指摘されよう。

SD650A・B地区出土の資料は互いによくに傾向をしめし, かつ平城宮土器ⅦのH₂群の分布に近い座標位置にプロットされる。業師寺西僧房の資料は, 肉眼的観察ではH₂群系統の土器とよくにているが, H₂群とはまったく違った分布傾向をしめす。ともに, 前述のN₁・N₂, H₁・H₂群とは異なる可能性が高い(Fig. 118)。

偏光顕微鏡観察では, できるかぎり蛍光X線分析を使った資料を対象にしたが, 完成品及びそれに近いものについては薄片をつくることはさけ, 同一遺構出土の別個の土器器片を試料にした。平城宮土器IVのN₁群は, 胎土が粘土鉱物と粒径10~100μの鉱物片の細粒の集合からなる。鉱物片の粒径から判断すれば, 最も粘土に近い材料を送んで採集したか, もしくは人工的に精選した可能性がある。含有する鉱物は, 石英が最も多く, アルカリ長石, 斜長石は少ない。黒雲母・角閃石等の有色鉱物は極めて少ない。平城宮土器IVのN₂群の胎土は, N₁群に比べ粗く, 粘土鉱物の他は粒径20~300μの鉱物片の集合であり, 含有する鉱物は石英が最も多く, アルカリ長石, 黒雲母はN₁群より多い。斜長石・角閃石はN₁群同様少ないが, 鉄鉱物はN₁群に比べ多く含まれている。平城宮土器VのN₁・N₂群については, 平城宮土器IVとはほぼ同じ組成が認められる(Fig. 116・117)。

平城宮土器ⅣのH₁群は, 平城宮土器IV・VのN₁群に比べやや粗粒(20~200μ)の集合からなっており, 黒雲母が多くなる点以外は共通した特徴をもつ。H₂群も平城宮土器IV・VのN₂群の胎土と相似した組成をしめた。

SD650Aの資料は, 鉱物片等の粒度からみれば, 平城宮土器ⅦのH₂群と似た鉱物片の集合状態を示すが, 2mm大のチャート礫・花崗岩礫を少量含み, 鉱物種では斜長石・アルカリ長石・角閃石・黒雲母が多く含有する。

SD650Bの資料は, もっとも粗雑で, 鉱物片は粒径20~400μ大の集合状態を示す。しかし, 含有する岩石礫種・鉱物種の種類や量は, SD650Aのグループに最も近いものである。

蛍光X線分析, 顕微鏡観察を総合すれば, 平城宮土器IV・V・Ⅶの資料は大きく二つに分れ, この群は考古学的な複数結果とよく一致し, しかも二つのN₁・H₁, N₂・H₂グループは, 二つの産地時期をとわずそれぞれ同じような傾向をしめす。奈良時代後半から平城上皇の時代は, 胎土原料の採取地や生産地が二つのこととなる地域から搬入された蓋然性が高いといえよう。

SD650A・Bの両試料は, 含有する鉱物種にN₂群とは若干の差異が認められる。かつ岩石礫もかなり混入がしているなど全体に粗粒になっている点で, あきらかに平城宮土器IV・VのN₂群とはことなる。また, 平城宮土器ⅦのH₂群とはその原料採取地, あるいは生産地がことなる可能性がある。しかし, 蛍光X線分析値が, 平城宮土器IV・V・Ⅶの土器とさほどことならない点を加味すれば, SD650A・Bの産地は, 前述のものとはあまり遠く離れた地域とはかんがえられず, 粘土の精製の差, ひいては貢進土器と在地消費用の土器の製作技法の差が成分のうえにあらわれている可能性も否定できない。

B 食膳形態土器の構成

第1次大極殿地域における土器などの遺物出土状況によって、遺構の性格を一層具体的にたどりうる場合がある。すでに述べてきたように、遺物と遺構とがもっとも密着し、遺物の出土量が比較的多く、量的な処理が可能なのは、東棧 SB7802 の柱抜取痕跡から出土した遺物である。というのは、これからのおもてなしは長期間にわたって逐年的にすてられたものでなく、建物の解体時における短時間に廻棄されたものであり、南門を守備した衛門府の門部・衛士らの遺物とみなすことができるからである。

SB7802の土器にくらべると、必ずしも好条件をそなえているとはいえないが、第Ⅰ期の東面築地回廊上に建設された南北扉 SA3777 の柱抜取痕跡から出土した土器は、この地域の建設にたずさわった工人達の食事にかかわる土器に比定することができる。一方、殿舎地区の柱抜取痕跡や構造などから出土した土器類は、この地域で宴会などを行なった時の遺物であろう。このようなことから、ここではそれらの遺構から出土した土器を中心にしてそれぞれの食膳形態を推測し、その差異を検討してみよう。

i SB7802の場合

SB7802から出土した土器の87.1%が食器である。その大多数は食膳にのる鉢々器で、鉢・盤など共用器は少なく、尚杯をかいている。残りの7.6%が水・食物などを貯える貯蔵器であり、5.3%が煮炊具である。土師器と須恵器の割合は、土師器48.1%、須恵器51.1%で、両者はほぼ折半している。

さきに西弘海が、正倉院文書に散見する椀・片椀・片杯・塗杯・片盤などの食器と平城宮出土土器とを対比して、考察した。¹⁾ かれの成果にもとづいて、SB7802出土食器の構成をみてみよう。食器名比定の根拠についてはここで改めてのべることはせず、西論文にしたがう。

大 術 曲物の底板が6点あるが、そのうち飯を盛る大器に比定できるものに、側板の高さが底径をこえないと仮定してA・B型式(径19~16.6cm)のもの4点をあてる。

西は椀として須恵器杯Bのうち、B I・B IIをあてた。それよりも法量の小さいB III・B IVが塗杯どの器種に入るか確証はない。しかし、塗杯あるいは碗杯が法量的に近いことから、ここでは塗杯に入れておく。

杯Bは身と蓋と一緒にして製作され、また消費されるものである。ところがSB7802では杯 B 蓋 身に対して蓋の数が2.5倍である。この傾向はSA3777・SA109南溝、またSK219にもあらわれている。一方、SK820、SK2113、SD1900、宮外のSD485などでは逆に身のほうが多い。この場合は実際には蓋がなくても身だけで使用できるから問題はない。それでは蓋の多い状況はどういうに理解すべきであろうか。SB7802 土器の杯B蓋のなかで、内面が平滑になっていたり、墨が付着したりするものが30例あり、覗として用いたことがうかがえる。多数の木簡が出土しているのに対して、脚脚覗が1点しか発見されていないことからも、杯蓋覗が多く使用されたとみてよい。この杯蓋覗を蓋から除いてもなお蓋の量が多いが、これは身をうわまわる蓋の破

1) 西弘海「奈良時代の食器類の器名とその用途」『研究論集V』奈文研学報第35冊、1979、p. 59~88

(文献上の 器種名)	(整理上の 器種名)	(個体数)	(純を1とした ときの比率)
椀	土師器杯B I	1	1
	須恵器杯B I + B II	13+(15)	
片椀	土師器杯A I	27+(30)	2.6
	須恵器杯C	13	
片杯	土師器皿A II	31+(17)-灯5	2.6
	" 怀A III	11+(10)	
塙杯	須恵器 杯A II	5+(1)	2.3
	土師器 椥A	2	
	" 椥C	23-灯5	
	" 杯B III	2	
	須恵器 杯A III " 杯A V	10+(4)	
片盤 (佐良)	杯B III + B IV	14+(14)-灯3	2.8
	土師器 皿A I	28+(17)	
	須恵器 皿A	9	
	" 皿B	6	
	" 皿C	15	

Tab. 48 SB7802の食器構成

損率をしめすのかもしれない。また、SA109南溝では完形品が数多くあり、これは組合身が欠損した場合、蓋を同時に廃棄したこともかんがえられる。これに蓋の破損数がくわるから、身より多量の蓋数となる。このような状況から、杯Bの食器数としては身の数をとるほうが妥当である。杯Bでは法量不明のものが、47%をしめているが、杯B I + II と B III + B IVとの数量比によって法量不明のものを配分した。土師器皿A・皿C、須恵器皿Bなどで、灯火器として用いられたものがあり、これは食器から除外した。また西が片杯に比定している杯Cは、ここで皿A II としているものはとんどしめている。

このようにして数値をととのえたのが、Tab. 48である。各器種の割合は椀が最も少なく、これを1とすると、塙杯が若干少ないが、他はほぼ3倍の数値に近い。東大寺の写經事業に要する資材・食料の見積書である「奉写二部般若経用度解説」や「造東寺司解案奉写大般若経一部用度」などの分析により、職掌の身分によって使用できた食器の種類の数がことなっていたことが指摘されている。また、支給される食料品にも差があり、食品の種類とその量がことなる。例えば「造東寺司解案」では主食である米の支給量をみると、経師・題師・斐衡が1升2升、校生が1升6合、講師・雜使が1升2合、駕使が黒米2升である。SB7802出土木簡56によれば、嚴守には2升支給されており、写経所の経師・題



Fig. 119 SB7802の食器組合せ

第V章 考 察

師・裴濱と同じ待遇であったことがわかる。このような写経所例からSB7802の食器類をみると、椀・片椀・片杯・塙杯・佐良ないしは片盤の5点の組合せと椀を欠いた4点の組合せが想定できる。すなわち、出土食器のすべて5点を用いるグループと1点を欠く4点を用いたグループが、1:2の関係で存在しているのである。上述した木簡の記事からするとSB7802を守る守衛の數は4~5人を1単位としており、かれらを5点組合せの食器を用いるグループに想定しうる。大筋に比定できる曲物4点もかれらが用いたものとするなれば、6点組合せの食器をもつ嚴守4~5人に対して、8~10人の下属がつくことになる。いま積極的な論拠を欠くが、それが衛門府の門部と衛士との関係をしそうである。つぎに、嚴守の1班が12~15人によって構成されているとすれば、出土の食器類はそれを上回る数量である。何班の構成であったかを想定するのは危険だが、少くとも数度が交代で、警固につき、班ごとの食器がSB7802に保管されていたことは確かであろう。木簡にある人名の付札にはこうした食器類の所有をあらわすものもあったんだろう。

土器に対応する量の木製食膳具は出土していない。匙1、匙形木製品5、箸10、折敷2、杓子8、および簡勺(曲物底の径8cm以下のもの)1、壺の蓋、曲物盤1がそのすべてである。木製品は土器にくらべて耐久性があり、また破損しても他の器物に転用する場合があるため、多くのこらなかつたとかんがえるほかない。そのうち8点の杓子は、身と幅の比率にまとまった傾向のあることから、A・B・Cの3型式にわけたが、その他の身の大小、先端の形状も変化し、A・B・Cの3型式に対応している。うちA型式が半数以上をしめ、B型式は少ない。それぞれに大型品と小型品があり、大型品のほとんどが先端は直線状で、小型品の大半が弧状を呈している。細身のC型式は食物をすくいとるには不適当であり、攪拌などに用いられたのであろう。大型の杓子はいまのところ宮内の遺構からしか発見されておらず、大量の炊事前提とする。またもっとも多いA型式の小型杓子は飯を鉢々の器につぎわける用具であろう。

次に食器以外の貯蔵器、煮炊具をみてみよう。須恵器の壺は18点ある。これらは主に常備用の水壺などとして用いられたものであろう。ほぼ完形に近い高台付の形態の壺Cの存在もこれをしめしている。煮炊具の壺は、土師器のなかでしめる割合が10.7%と大きい。しかし、SK219、SDI1900などでは壺類とともにカマドが存在するのに対して、SB7802では出土していない。このことからすれば、本格的な調理がSB7802周辺でおこなわれたことはかんがえにくい。厨で煮炊きしたものをそのまま運搬してきたものであろうか。

以上、SB7802付近に駐在した門部、衛士らの食生活およびその構成の一班をたどったが、彼らのこした土器類には、貯蔵の宴会では必ず用いられたとおもわれる高杯(菓子、果物などを盛ったもの)が存在せず、また酒をいれる壺類が少ないとことなどから、かなり厳格な警備体制が組まれていたことがうかがえる。

ii SA3777 出土の場合

SA3777の土器は、主として南半部・第II期の南辺築地回廊より南側の柱穴の柱痕跡から出土したものである。第I期の東面築地回廊を解体し、築地に変更した際にまぎれ込んだ遺物とみられる。SB7802出土土器と同じく、平城宮土器IVにぞくする。これらの土器を再分類すると

(文献上の) 器種名	(整理上の) 器種名	(個体数)	(文献上の) 器種名	(整理上の) 器種名	(個体数)	
椀	須恵器杯B I	1+(1)	2	椀	土師器杯B	17
片椀	土師器杯A I	1	1	片杯	土師器杯A	22
片杯	{ 土師器皿A II " 皿A III }	15+(10)	25	塙杯	{ 土師器皿A 黑色土器杯B }	23 2 25
	土師器 椭A	9		片盤(佐良)	土師器皿A	48
	" 椭C	2		高杯	{ 土師器高杯 黑色土器 "	7 1 8
塙杯	{ 須恵器 皿A III " 皿A IV }	5+(4)	35			
	" 皿B III					
	杯B IV	9+(6)				
片盤(佐良)	{ 土師器 皿A I 須恵器 皿B }	6+(4) 3	13			
高杯	土師器高杯	1	1			

Tab. 49 SA3777の食器構成

Tab. 50 SD6631などの食器構成

Tab. 49のようになる。杯B蓋は43点と身の2倍以上ある。内面に墨が付着したり、磨滅したものは3点にとどまる。一方、完形品が5点あり、SA109と同様、身と合わなくなったり墨を施用したことかんがえられる。ここでも杯Bの食器としての数は身の数をとるのが妥当であろう。

SA3777では片杯・塙杯・片盤の3種が主な構成器種となり、きわめて単純な様相を呈する。出土地点がかぎられていることなども含めて、この土器の様相は、築地回廊を解体する作業にあたった工人達の使用した遺物として理解できる。

iii 殿舎地区の場合

第Ⅲ期の殿舎地区の溝SD6631・SD6633・SD7175出土した土器をみてみよう(Tab. 50)。土師器皿Aは、口径の17.5~16cmのものほとんどが片杯にあてられる。椀・片杯・塙杯がほぼ同数となり、それらにたいして片盤が約2倍の量である。片盤にあてた皿Aには大小2種があり、副食の品目がことなるのであろう。高杯は椀・片椀・塙杯などの約1/3である。こうしたことから、一膳あたり5点の食器がならば、2~3人に1脚の高杯が配られたことになる。一方、土師器を基本にして若干の黒色土器を混えるのが、この地区的特色である。それらは饗宴用の食器であり、一回限りの使用のうちに廃棄される種類のものであったろう。さきに報告したSK820、SK219、SK2113など、平城宮の大膳殿あるいは内膳司に比定される地区的遺構で、土師器のしめる割合が7~8割であったことと呼応している。つまり、饗宴用の土器では時期が下るにしたがって須恵器が減少する傾向にあり、ここでとりあげた第Ⅲ期の平城上皇の内裏では土師器が主体になり、黒色土器が次第に増加する状況がうかがえるのである。

1) これは必ずしも須恵器生産の限界をしめさない。土器全般からすれば、奈良時代と平安時代前半における土師器と須恵器の割合は、ほとんど変化しない。平安時代では、須恵器と土師器

の間で器種別の分業が大きく進行し、食器類として土師器・黒色土器が大量生産される一方、須恵器は貯蔵器を量産するようになる。

6 結 語

平城宮の中心部分に位置する第1次大極殿地域に対して、発掘調査の所見およびそれから導かれる各種の問題について報告した。ここで、その主な点を要約しておく。

遺構 第1次大極殿地域の遺構は、奈良時代初期から平安時代初期までを3期に区分でき、時期ごとに特色のある宮殿の建物配置や構造をとっている。

第Ⅰ期では東西600尺、南北1,080尺の区域を築地回廊でかこみ、南面中央に正門を開く。北方の約1/3を一段高くし、ここに大極殿とその後殿をおく。南の約2/3区域は一面の礎敷広場となり、建物はまったくない。これが和銅3年に藤原宮から遷都したときの状況である（第I-1期）。その後、南方に朝堂院が建設され、神龟・天平初年ごろには南門の両側に棲闇がつけくわえられた（第I-2期）。棲闇の付設は朝堂院とともに、この地域の壯麗な景観を一層高めたはずである。恭仁遷都に際して、大極殿と東面築地回廊が恭仁宮へ移築された。天平12年から天平17年の間には、東面築地回廊の跡地は木垣によって遮蔽されることになる（I-3期）。木垣の西面築地回廊についても同様の措置がとられたであろう。天平17年の平城遷都後、東面築地回廊は復興するが大極殿を再建した痕跡はない。ただし、第Ⅰ期の遺構が完全に廃絶する大平勝宝5年ころ、木簡によれば、大殿とよばれる建物がこの地域に存在しており、後殿がこの時期まで存続するものとかんがえた（第I-4期）。また、木簡によれば、この時期の南門は衛門府の守衛下にあり、大極殿や内裏などの閑門よりも一段格の低い宮門のみの扱いをうけていることになる。第I-1・2期の遺構を奈良時代初期の大極殿にあてるわけであるが、第1次大極殿地域の平面形は、藤原宮・平城宮第2次・後期鍾波宮の大極殿とは若しく様相をことにしており、從来の見解では理解できないところがある。とりあえずは、唐長安大明宮含元殿の影響下で成立したものとかんがえておく。

第Ⅱ期の遺構は、天平勝宝5年以降もなく付設がはじまり、奈良時代の後半を通じて存続する。この時期、築地回廊を東西600尺、南北620尺の範囲に縮小するのであるが、東方の内裏地域に南限と北限をそろえ、意識的に内裏に対置させていることが注目される。北方の高台を少し南によせて建物敷を拡張する。そこに主殿・脇殿・付属屋からなる27棟の建物を配置したことになる。主殿を中心におきその両側に脇殿をおき、それらを付属屋がかこむ建物配置は他に類例がない、とくに主殿は3棟の建物を南北に並立させるという特異な構造をとる。このような遺構に対して、奈良時代後半の「四宮」をあてた。その建設時期は藤原仲麻呂の治頭期にあたる。これまでの内裏・大極殿とはまったく異なる機能が課せられた宮殿であろう。

第Ⅲ期は、第Ⅱ期の地割りを踏襲して、平城上皇が建設した平城宮である。尚舎には14棟の建物がたつが、建物配置は平城宮内裏・平安宮内裏と共に通するところが多い。開欠きの建物あるいは広庭など平安初期の建物構造をそなえている。しかし、平城宮内裏・平安宮内裏となるところも少くない。それは敷地の限界にもよううが、平城上皇時代の平城宮はもはや正都の宮室ではなく離宮にすぎなかつたことによるのだろう。内裏は完成しているが、大極殿は未完成であった。というのは、大極殿自体は完成していても、それをとりかこむ回廊や門の痕跡を欠いているからである。

第1次大極殿地域があきらかになるにしたがって、さきに報告した北方の大勝殿地域の再検討がよぎなくされた。その決定的な理由は、第I期北面築地回廊の存在をさきには想定しえなかつたからである。一応、改訂の試案を示した。

第1次大極殿地域の造構から推定される建物の上部構造を復原した。時期によってかなりの相違があることがわかるであろう。しかし、それらはあくまでも一応の試案であり、大方の吹正をあおぎたい。

遺 物 出土遺物のうち、東棟の柱抜取痕跡から出土した一括遺物は、この地域を復原する出土品うえで重要な役割りをはたした。木簡によれば天平勝宝5年段階にこの地域を守備した衛門府の門部・衛士の詰所であり、かれらの勤務状況がうかがわれる。一方、土器や木製品の分析を通してかれらの日常的な食事形態をたどる手掛りをえた。また、建築雛形部品の出土は、棟上に1/10の建築雛型が安置されていたことをしめしている。土器については、とくに胎土の分析を行ない、産地のちがいのあることを立証した。

屋瓦は全城から多数発見されており、遺構の前後関係と瓦編年とを操作し、部分的に編年を改めるとともに、建物ごとの軒瓦の組合せ状況を推定した。今回の報告では建物関係の遺物が比較的多い。木棟に転用した柱材の検討を通じて、これまで櫛とか木壠とかよんできた獨立柱壠の実態を把握できた。井戸枠に転用した校倉の旧仕口から校倉の復原も行なっている。同時に、石材や柱材の種別を鑑定し、石材の産地や柱材の樹齢を推定してみた。

平城宮の朱雀門内に展開する第1次大極殿地域に関する理解は、今回の報告でしめすように、一段と豊かになってきた。しかし、解決しえない問題も少なくなく、推測によって補完した部分も多い。将来の発掘成果に期待するとともに、諸賢の吹正をこうむりながら、さらに密度の高いものに仕上げるべきであろうとかんがえる。一方、宮内の他地域との比較検討については、必要以外には論及しない方針をとった。たとえば、南方の第1次朝堂院や東方の内裏・第2次朝堂院・大極殿との比較がそれである。その重要性はいうまでもないが、それらの地域に対する定見をえていない現状ではいたずらに混乱をまねくおそれがあるからである。

別 表

- 1 主要建物一覧表 266
- 2 軒丸瓦分類表 268
- 3 軒平瓦分類表 272
- 4 平城宮土師器器種表 276
- 5 平城宮須恵器器種表 278

別表1 主要建物一覧表

(時期)	(地区)	(建物)	(規 模)	(棟方向)	(幅)	(幅 行)	(梁 間)	(間)	(柱 穴)	(備 考)
I期	回廊	S B 7801	標準 5×2間	WE		標準 23.8m(81尺)	標準 11.8m(40尺)			
		S B 7802	標準 5×3	WE		22.9 (77.5)	11.52 (39)		3.5×2.5m	総柱・側柱据立
殿舎		S B 7200	標準 9×4	WE	N・S W・E	標準 45.1 (153)	標準 20.7 (70)	標準 5 (17)		
		S B 8120	標準 9×4	WE	N・S W・E	標準 45.1 (153)	標準 20.7 (70)	標準 5 (17)		
東外郭		S B 5595	3×2	WE		5.85 (9.5)	3.9 (13)		方 0.6	
		S B 5510	6×2	NS		11.4 (39)	4.2 (14)		方 0.6	北側に小室が つく
		S B 5515	5×2	NS		10.7 (13)	3.9 (13)			
		S B 5520	3×2	NS		6.24 (21)	4.16 (14)		方 0.5	
		S B 5521	2×2	NS		5.1 (17)	3.6 (12)			
		S B 8330	6×2	NS		17.54 (60)	5.26 (18)		方 0.6~1	
		S B 8315	3×2	NS		4.6 (15)	3.1 (10)		方 0.4~0.8	
		S B 8234	6×2	NS		12.5 (42)	4.16 (14)		0.5×0.8	
II期	回廊	S B 7750	標準 3×2	WE		標準 13.44 (45)	標準 7.2 (24)			
		S B 6610	9×4	WE		26.85 (90)	11.95 (40)	行行 2.99(10) 梁間 2.98(10)	方 1.5	総柱 足場あり
		S B 6611	9×3	WE	W・E S	26.85 (90)	8.95 (30)	行行 2.96(10) 梁間 3.0 (10)	方 1.5	共通の 足場あり
		S B 7150	9×5	WE	W・E N・S	26.8 (90)	15 (50)	行行 2.96(10) 梁間 3.0 (10)	方 1.5	足場あり
		S B 7151 A	9×2	WE		26.9 (90)	5.9 (20)		方 1.5	〃
		S B 7151 B	9×2	WE		26.9 (90)	5.9 (20)		方 1.5	〃
		S B 7152	9×2	WE		26.7 (90)	5.94 (20)		方 1.4	〃
		S B 6640	3×2	WE		10.8 (36)	6 (20)		方 1.2	
		S B 6650	3×3	WE		10.8 (36)	9 (30)		方 1.4	
		S B 6660 A	7×4	WE	N・S	21 (70)	12 (40)	3.0 (10)	方 1.5~1.7	足場あり
		S B 6660 B	7×5	WE	N・S	21 (70)	15 (50)	3.0 (10)	〃	〃
		S B 6655	5×3	WE		15 (50)	9 (30)		方 1.3	
		S B 6663	7×5	WE	N・S	20.9 (70)	15.3 (50)	3.06 (10)	方 1.6	足場あり
		S B 6666	7×2	WE		20.8 (70)	5.9 (20)		方 1.4	
		S B 6668	7×2	WE		20.8 (70)	6 (20)		方 1.4	
		S B 8302	2以上×2	NS		5.8 (20)	6 (20)		方 1	
		S B 8245	7×3	NS		20.86 (70)	9 (30)		方 1.2	足場あり、総柱

(時期)	(地区)	(建物)	(規 模)	(棟方向)	(幅)	(桁 行)	(渠 間)	(幅)	(柱 穴)	(備 考)
Ⅱ期 東外郭		S B 8210	6 × 2	NS		17.9 m (60尺)	5.9 m (20尺)		方 1.2 m	
		S B 8215	6 × 2	NS		17.9 (60)	5.9 (20)		方 1.2	
	大膳殿	S B 8320	7 × 2	NS		20.85 (70)	5.95 (20)		方 1~1.2	
		S B 8240	5 × 2	NS		15 (50)	6 (20)		方 1.5	
	回廊	S B 116	5 × 3	WE	S	13.37 (45)	8.61 (29) 2.7 m (9尺)	方 0.8		
		S B 8116	5 × 2	WE		13.5 (45)	6.0 (20)		方 1	
	回廊	S B 7750 B	5 × 1	WE		14.7 (49)	5.4 (18)		方 1	
		S B 8310	3 × 2	NS		8.7 (29)	5.4 (18)		方 1	
殿舎		S B 6620	9 × 5	WE	W・E N・S	29.2 (98)	17.4 (58)	4.2 (14)	方 1.6	足場あり
		S B 7170	7 × 4	WE	N・S	20.98 (70)	14.4 (48)	4.2 (14)	方 1.3	"
	**	S B 7173	5 × 4	NS	W・E	13.5 (45)	13.2 (34)	3.9 (13)		身合礎石
		S B 6622	5以上 × 4	NS	W・E	13.3 (45)	14.4 (48)	4.2 (14)	方 1.3	足場あり
		S B 8300	3以上 × 4	NS	W・E	9 (30)	12 (40)	3 (10)	方 1.5	"
		S B 8305	7 × 2	WE		18.94 (63)	4.8 (16)		方 0.5	
	広場	S B 6621	5 × 4	WE	N・S	12.6 (42)	12.45 (40)	3.42 (11)		足場あり、 身合礎石
		S B 8219	5 × 2	WE		15 (50)	6 (20)		方 0.8~1.5	
東外郭		S B 8224	7 × 4	WE	N・S W・E	22.2 (74)	13.2 (44)	3.6 (12)	方 1	足場あり、 隅火さ
		S B 8218 A	5 × 2	WE		14.1 (47)	6 (20)		方 1.2	
		S B 8218 B	5 × 2	WE		14.1 (47)	6 (20)		方 1.2	
		S B 8222	5 × 4	WE	N・S	14.1 (47)	12.98 (42)	3.32 (11) 3.62 (12)	方 1	
	奈良以前	S B 7803	7 × 4	WE	N・S W・E	22.5 (74)	13.2 (44)	3.6 (12)		足場あり
		S B 9220	5 × 3	WE	N	12 (40)	7.2 (24)	2.1 (?)		
	広場	S B 7141	6 × 1	WE		36 (120)	3.6 (12)		3 × 1	
		S B 8325	5 × 2	NS	N・S	12.64 ((43))	4.12 (14)	3.23 (11)	方 0.4~0.6	
奈良以前	広場	S B 3773	4 × 3	NS		8.3	5.2		方 0.5	
		S B 3774	2 × 2	NS		4.2	3.2		方 0.5	
		S B 7780	5 × 2	NS		14.6 (50)	4.8 (16)		方 1	
		S B 7790	3 × 2	NS		8.7 (30)	4.6 (14)		方 1	
※印は礎石建物										

別表2 軒丸瓦分類表

型 式 径	直 径	内 区			外 区			全 長	玉 緑	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%				
		中房 径	蓮子 数	介区 径	介 幅	介 数	広 幅	外 区															
								内 緑	外 緑	文 様	幅	高 度	文 様										
6012 B	157							11	4										1	1	2	0.08	
6018 C	150										15	12								2	3	0.1	
6030 B	135	30	1+8	79	15	T16	28	16	S24	12	10	LV		3					4		7	0.3	
6131 A	166	35	1+8	124	21	T16	21	8	S22	13	11	RV23				8	3	3	14	0.5	0.7		
B	152	35	1+8	104	12	T16	24	10	S24	14	11	RV24					1	1	2	2	0.08		
6133 A	168	36	1+5	95	17	T12	35	19	S13	17	9	/	400	50	0	10	6	4	1	1	26	1.1	
B	160	38	1+6	90	17	T12	35	17	S15	16	9	/	400	58	3	3	3	3	2	1	12	0.5	
C	159	42	1+6	101	17	T13	29	16	S18	13	8	/		1	3	2	3	7	1	1	19	0.8	
D	157	42	1+6	111	17	T16	23	14	S24	9	8	/		6	17	13	6	3	15	2	1	63	0.08
K	161	35	1+5	106	18	T16	275	14.5	S27	13	6	/									1	0.04	
L								23	27	14	S	13	12	/								1	0.04
M	168	37	1+6	112	16	T	28	16	S16	12		/				1						1	0.04
O	176	38	1+7	116	21	T	33	18	S	15	9	/				1						1	0.04
6134 A	161	36	1+6	96	11	T12	32	19	S16	13	13	LV16	400	59	0	2	8	6	31		53	2.2	
6135 A	168	28	1+6	112	21	T12	28	14	S25	14	4	LV46	369	37		1	3				4	5	0.2
E	155	27	1+5	83	11	T13	36	16	S23	22	9	LV				1					1	1	0.2
6138 B	157	38	1+5	97	32	T12	30	18	S24	12	10	LV	402	60				2			2	0.08	
6225 A	166	98	1+8	116	39	F8	25	12	K	13	8	RV24	373	48	0	5	93	1	2	14	122	5.1	
B	174	68	1+8	128	32	F8	23	8	K	17	7	RV				4	1	8	139	1	1	1	0.04
C	165	92	1+8	111	29	F8	22	7	K	15	7	RV32				4	1	5	132	1	3	17	40
L	254	98	1+8	234	51	F8	25	8	K	17	6	RV40	422	52	J	2	5	J	J	J	J	7	0.3

型式	直 径 径	内 区		外 区		全 長	玉 綵 長	6	6	6	6	6	6	6	6	計	%	
		中 周 徑	連 子 數	弁 區 徑	弁 數			内 綵 幅	外 綵 幅	高 度	外 綵 高 度							
		幅	度	幅	度			幅	度	幅	度	幅	度	幅	度			
6227 A	157	61	1+8	119	28	F 8	19	6	K	10	7	/					1	0.04
6231 B	210	61	1+6	140	34	F 8	35	20	S34	16	12	/					1	0.04
6235 B	168	56	1+5	112	29	F 8	28	17	S17	9	/						1	0.04
6241 A	149	39	1+5	88	24	F 8	30	16	S20	15	8	/			1	5	1	0.3
6273 A	197	71	1+5+9	143	32	F 8	27	13	S40	14	16	RV64	447	62				0.04
B	180	64	1+5+9	128	32	F 8	26	13	S40	13	12	RV64			1	{(8)}	{(3)}	{(0.5)}
6274 A	177	61	1+4+9	127	34	F 8	25	12	S40	13	15	LV42	464	68	1		1	0.08
6275 A	182	57	1+4+12	116	29	F 8	33	12	S43	21	11	LV32			1	1	3	0.1
D	186	54	1+4+8	108	28	F 8	44	13	S30	31	14	LV21	464	44		{(1)}	{(4)}	{(0.4)}
E	177	55	1+6+10	112	29	F 8	34	12	S43	20	11	LV				{(1)}	{(1)}	0.04
6279 A	176	47	1+8	104	26	F 8	36	12	S31	24	13	LV27	481	59	1		1	0.04
B	176	45	1+6	107	27	F 8	34	17	S26	17	6	LV				1	1	0.04
6281 A	164	57	1+4+8	102	26	F 8	31	14	S32	17	10	LV46	490	66	1	{(2)}	{(4)}	{(0.5)}
B	184	62	1+8+8	120	29	F 8	32	13	S32	19	11	LV37			1	{(1)}	{(1)}	{(0.7)}
6282 A	157	53	1+8	87	31	F 8	35	20	S24	15	9	LV24			2	1	4	0.3
B	162	45	1+6	86	31	F 8	38	20	S24	15	9	LV24	361	53	1	15	21	0.8
D	132	27	1+6	64	24	F 8	34	20	S24	14	9	LV24	341	26	2	6	4	0.7
E	160	34	1+6	76	26	F 8	42	24	S24	18	13	LV24	367	37	1	6	1	0.6
F	168	40	1+6	92	32	F 8	33	20	S24	13	14	LV24	369	42	4	12	4	1.0
G	160	46	1+6	90	26	F 8	35	17	S24	18	11	LV			2	1	4	0.5
H	174	40	1+6	96	23	F 8	39	23	S24	16	16	LV22			1		1	0.04
I	160	41	1+8	90	20	F 8	35	16	S20	19	14	LV			3		1	0.04

型 式	直 径	内 区				外 区				全 長	玉 綫 長	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B F	6 A B G	6 A B H	6 A B I	6 A B J	6 A B K	6 A B L	6 A B M	6 A B N	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%
		中 房 徑	透 子 數	并 区 徑	并 区 數	外 区 徑	外 区 數																							
		房 徑	透 子 數	并 区 徑	并 区 數	外 区 徑	外 区 數																							
6284	A	156	35	1+6	83	39	F 8	36	18	S24	18	13	LV23															98	2.6	
	B	164	36	1+6	82	21	F 8	35	19	S20	17	13	LV20															15	0.6	
	C	156	40	1+6	80	23	F 8	33	20	S24	13	11	LV16	375	48	5	8	35	32	32	21	2	50	1	180	251	7.5			
	E	88	1+6	88	24	F 8	31	15	S	16	10	LV															13	0.7		
	F	165	39	1+6	90	39	F 8	37	17	S24	20	11	LV23															1	0.08	
	G	161	33	1+6	87	24	F 8	37	21	S23	16	16	LV22	870	66													3	4	0.2
6285	A	161	33	1+6	87	24	F 8	37	23	S23	14	17	LV															6	0.3	
	B	154	28	1+6	81	27	F 8	37	23	S23	14	17	LV															2	0.08	
6291	A	161	35	1+6	87	24	F 8	37	18	S16	19	8	LV16	370	41	1	4						1	1	7	6.3				
6296	A	166	26	1+8	90	25	F 8	33	16	S16	17	12	LV17		1	28	6										43	1.8	1.8	
	B	155	36	1+8	109	14	F 8	23	11	S16	12	7	LV														1	1	0.04	
6301	C	160	46	1+8+10	162	28	F 8	29	16	S26	13	8	LV33	383	35													1	0.04	
6303	B	167	34	1+6	91	24	F 8	33	15	S	18	10	LV														4	5	0.2	
6304	A	162	35	1+6	90	37	F 8	31	16	S17	16	10	LV16			2	1	20								1	29	1.2		
	B	172	37	1+6	132	27	F 8	36	15	S20	20	11	LV16				2									1	3	0.3		
	C	168	35	1+6	84	21	F 8	37	20	S19	17	14	LV16	406	53	8	10	5	6	19	48	3	2	1	16	19	51	2.1	3.6	
	N	265	64	1+6	150	43	F 8	46	23	S27	25	14	LV17				1									1	1	0.04		
6307	L	162	42	1+6	90	23	F 8	33	16	S20	17	11	LV16				2	2							2	4	0.2			
	A	158	35	1+6	62	25	F 8	38	20	S16	18	10	LV16		3	7	20	42	42	42	1	1	42	42	1.7	2.4				
6308	B	153	35	1+6	65	25	F 8	34	17	S17	17	12	LV21				12	12	12	12	4	4	4	16	16	0.7	2.2			
	A	162	36	1+6	94	27	F 8	34	11	S15	23	8	LV16	371	52	2	13	9	9	9	9	4	4	4	29	29	1.2			
	B	162	36	1+6	93	25	F 8	37	12	S16	24	7	LV16	377	56	2	16	4	1	3	1	25	25	1.0						

型式	直 径	内区			外区			全 長	玉 緑	6	6	6	6	6	6	6	6	計	%				
		中 房 径	蓮 子 数	弁 区 徑	弁 区 幅	内 緑	外 緑			A	B	C	D	E	O	P	Q	R	S				
		房 徑	数	区 徑	幅	幅	高 度			文 様	文 様	文 様	文 様	文 様	文 様	文 様	文 様	文 様	文 様				
6308 C	174	40	1+6	100	24	F 8	37	16	S16	21	4	LV16			4 (4)	2 (3)	27 (3)	8 (3)	9 (3)	7 (2)	2 (3)	3 (3)	2.5 (3.9)
D	169	36	1+6	92	25	F 8	32	15	S22	19	5	LV16	406	55	J	J	J	J	J	J	J	2	0.08
6311 A	161	40	1+6	96	26	F 8	32	15	S26	17	11	LV23	365	56	3	3	30	3	3	8	47	2.6	
B	162	43	1+6	92	27	F 8	33	13	S26	20	13	LV23	376	58	3	3	27	1 (5)	5 (3)	8 (2)	15 (2)	54 (3)	2.2
D	38	1+6	96	21	F 8		15	S26			LV			J	J	J	J	J	J	J	2	0.08	
6311 E			1+6				27	12	S	15	6	LV									1	0.04	
6313 A	123	24	1	71	32	F 4	25	16	S16	10	8	LV16	312	42	2	1	31	1	1	38	1.8		
B	116	17	1	70	32	F 4	23	10	S16	13	8	LV16	257	43		6		157 (3)	1 (1)	1	6 (2)	189 (2)	7.8 (8.7)
C	95	15	1	57	29	F 4	18	8	S16	9	6	LV16	333	38	4	1	120	1	3	2	15	146 (1)	6.1 (6.04)
D	124	26	1	74	44	F 4	25	13	S16	12	6	LV	296	46		9						1	
6314 A	140	30	1+6	82	36	F 4	30	15	S16	15	6	LV16	364	52		3	1	4	1	6	0.2		
B	121	25	1+5	67	22	F 4	27	16	S16	12	10	LV			3	1		2	6	0.2			
C	118	26	1+5	78	30	F 4	20	11	S16	9	13	LV			7 (2)	4 (1)		1	14 (3)	0.64 (0.7)			
D	115	24	1+5	64	29	F 4	26	12	S14	14	12	LV			3				3	0.1			
6316 A	160	36	1+7	98	31	F 8	26	13	S16	13	6	LV20				2			2	0.08			
B	142	31	1+8	88	21	F 8	27	14	S26	16	10	LV27	360	33		2		2	5	0.08			
H	178	36	1+6	116	31	F 8	31	15	S16	16	7	/						1	1	0.04			
6320 A	168	35	1+8	88	9	T 24	29	23	S24	16	14	RV24				7		1	8	0.3			
6321 A	43	1+8	95	27			33	15	S	1.6	13	/					2		2	0.08			
9111-35							13	8	S	6	3	/				1		1	0.04				
9111-37			1+6				29	14	S	15	10	RV				1		1	0.04				

不明型式 62 26 267 34 83 6 105 11 574 23.0

総計 171 161 1173 159 304 27 360 26 2463 81.4 (100)

別表3 軒平瓦分類表

型 式	瓦 当 面										全 面の形態 直曲設 長	6 A B C	6 A B D	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計 合	%							
	上 弦 巾	弧 弦 山	下 弦 深 さ	厚 さ	内 区 内 区 文 様	上 外 区 厚 さ	下 外 区 文 様	協 山	脇 山	文 様 の 深 さ																		
6540 A				62	36	HK	10	S	12	LV	65	LV3	2	○	1			1			2	0.09						
6541 A				46	21	HK	12	S29	12	LV		LV4	3	○		2				2	0.09							
C				284	56	325	62	24	HK	13	S29	15	LV19	59	LV4	2	397	○	1	8	12	14	0.6					
E				314	63	306	56	34	HK	15	S29	12	LV28	72	LV5	2		○	(1)	1	1	2	0.1					
F				324	77	354	59	26	HK	16	S28	14	LV28	70	LV5	2.5	373	○	1			1	0.05					
6542 A				46	21	HK	12	S29	13	S19		S5	2	○		1				1	1	0.05						
B				305	46	22	HK	13	S22	11	S	58	S4	3	306	○		1	(4)		2	0.05						
6543 A				299	78	294	45	25	HK	11	S22	11	S23	65	S4	2	343	○	1			2	0.09					
C				306	78	320	51	26	HK	19	S22	13	S23	68	S4	5	383	○	5	8	(3)	1	0.35					
D				69	46	46	19	IHK	14	S	13	S	61	S4	2		○	2		(1)	2	0.05						
6546 A				311	63	317	65	27	HN	14	S30	15	LV24	69	/	2	473	○			1	1	0.05					
B				327	64	325	53	24	HN	15	S16	13	LV24	63	/	2	431	○	1	1	(1)	3	0.2					
E				318		55	27	HN	17	S27	11	LV		/	4		○	1			1	0.05						
6547 A				336	832	64	35	HN	15	S	14	LV	64	/	3		○	1			1	0.05						
6552 A				284	77	286	57	27	KK	15	K	15	K	62	K	2	○	○	10	15	3	9	6	40	2.1			
B				301	66	306	59	23	KK	18	K	18	K	64	K	2	353	○	○	8	4	6	5	2	20	0.9		
C				270	72	282	53	26	KK	15	K	13	K	73	K	3	376	○	○	1	15	7	93	2	27	11		
E				262	69	297	67	28	KK	21	K	18	K	81	K	3		○		1	16	55	74	35	11	21	117	
F						55	30	KK	13	K	12	K	K	3			○	○	1	1			2	0.09				
6554 B				246	61	269	54	24	KK	15	S21	15	S21	71	S3	4		○		3			6	9	0.4			
C				246	62	282	51	24	KK	14	S21	13	S21	62	S3	4	376	○	6	32	153	26	12	5	76	2	312	14.5
D				246	60	269	60	22	KK	20	S17	18	S19	74	S3	5	368	○	3	1	28	4	6	6	42	1.9		
F				245	61	276	55	27	KK	14	S21	17	S21	78	S3	5	375	○	2		28	2	1		32	1.6		

型式	瓦当面										全長	瓦の形態	6						6						6						計		%			
	上弦巾	弧深さ	下弦巾	厚さ	内区文様	上外区文様	下外区文様	厚さ	脇区文様	文様の深さ			直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	直	曲	計		%			
6664 G		249	66	60	23	KK	20	S 17	17	S 17	69	S 3	6	○	1				1	B			1	B			12		0.5							
H		272	68	261	57	24	KK	17	S 21	16	S 21	76	S 3	6	378	○	2	2	6	2	2	2	2	2	1	15	502	(10)	22.9	(29.3)						
I		236	61	278	32	24	KK	16	S 21	12	S 21	60	S 3	4	383	○	2	1	1	6	1	6	38	38	8(2)	5(1)	10		0.5							
J		265	76	280	65	28	KK	19	S 17	18	S 19	82	S 3	5	67	400	○	13	8	15	1	1	24	1	68		2		0.06							
K		266	63	284	62	28	KK	16	S 17	18	S 10	78	S 4	5.7	400	○	13	8	15	1	1	24	1	68		2.7										
L																67	28	KK	23	S 15	16	S 15	S 3	6	○	1				1		0.05				
M																62	27	KK	16	S 23	17	S 23	S 3	5	○	1				3		4	0.2			
P																24	KK	S	15	S					○	J	J	J	J	J	J	1	0.05			
6665 A		237	68	297	56	27	KK	18	S 23	13	S 25	75	S 3	3	○		1	2	2	2	1	6			6	0.3										
6666 A		222	57	232	51	22	KK	16	S 19	14	S 18	67	S 3	5	321	○	5	2	9			2	18			18	0.3									
6668 A		244	52	262	47	22	KK	14	S 22	11	S 23	56	S 3		○		1	1	1	1	1	25	29	1.3												
6669 A																5.6	29	KK	11	S	11	S		○							1	0.05				
6671 A		285	66	294	58	18	KK	19	GS 10.21	LV 22	66	GS 2	5	296	○		1	1							1	0.05										
6681 A		274	80	273	55	22	KK	15	K	28	K	16	K	3	355	○	○		1	4						5	0.2									
B																50	18	KK	15	K	17	K	K	3	○			1	2		(1)	3	0.1	0.4		
C		253	73	269	47	17	KK	16	K	14	K	58	K	3	○		1								1	0.05										
6682 A		245	78	273	52	24	KK	15	S 17	12	S 17	78	S 3	5	350	○	○	1	1	4	8	2	16	20	0.7											
6685 A		222	62	230	47	16	KK	14	S 15	17	S 15	56	S 2	4	339	○	1	4	133	154	154	16	17	182	6.7									11.3		
B		200	51	204	38	13	KK	12	S 15	13	S 18	47	S 1	4	327	○	1	1	133	154	154	16	17	182	6.7									6.3		
C																52	23	KK	21	S 17	11	S 17	60	S 2	5	○			1	2		(1)	2	0.1	0.09	
D		193	65	199	36	15	KK	11	S 13	10	S 15	45	S 2	3	226	○	○	1	1	4	4	4	6	12	17	0.3										
6688 A		279	71	286	44	19	KK	12	S 17	13	S 19	69	S 1.5 K	3	359	○	○	5	9	9	9	9	5	17	273	0.2										
6689 A		288	77	286	62	28	KK	17	S 17	17	S 17	86	S 3	8	404	○																		0.8		

型式	瓦当面										全長	頭の形態	直曲	曲役	6 A B C	6 A B E	6 A B O	6 A B P	6 A B Q	6 A B R	6 A B S	計	%					
	上弦	弧厚	下厚	内区	内区文様	上外区	上外区文様	下外区	下外区文様	脇																		
	巾	深	巾	厚	さ	内区	内区文様	上外区	上外区文様	厚																		
6001 A	270	55	233	55	25	KK	14	S21	16	S21	55	S3	4	345	○	6	5	30	6	24	2	13	1	107	4.9			
6004 A	235	57	225	69	32	KK	17	S15	11	S14	70	S3	4	295	○	1	34	91	2	1	1	8	2	140	5.4			
6104 A				66	28	KK	20	S13	18	S13	S	3			○		1							1	0.05			
6710 A	264	59	270	56	22	KK	15	S13	19	S11	57	S3	4	347	○			2	2						4	0.2		
C				56	25	KK	14	S12	16	S13	S3	6	356	○			1							3	0.1			
6718 A				56	24	KK	16	S20	16	S	S	5	5		○				7					7	0.3			
6719 A	287	49	283	32	22	KK	0.5	/	6.5	/	33	/	2	379	○		1							1	0.5			
6721 A	260	54	268	65	21	KK	12	S29	12	S27	53	/	3	366	○			4		2				6	0.3			
C				266	49	260	53	25	KK	15	S29	13	S32	60	/	3	359	○		7				20	43	2.0		
D				272	54	277	53	22	KK	14	S26	17	S32	66	/	3		○		2	1			3	0.1			
E					42	22	KK	10	S	10	S	5	/	2	○		(11) (11)	2 2	4 (29)	31 (27)	28 (27)	7 (27)	24 (25)	1 (11)	6 (68)	2 (III)	85 0.09 (3.4)	
F				269	55	297	52	26	KK	13	S33	13	S34	65	/	3	○	1		1				3	0.1			
G				260	60	280	47	24	KK	11	S34	12	S35	52	/	3	368	○	6	2	10		1	8	24	1.1		
H				265	69	293	51	21	KK	14	S33	16	S34	57	S3	3	○		4					4	0.2			
6725 B				278	41	263	57	31	KK	14	S14	12	S14	58	S3	2	○		1					1	0.05			
6725 E				242	69	269	59	31	KK	14	S17	14	S17	68	S2	3	○		1					1	0.05			
6727 A				271	54	25	KK	15	S14	16	S17	74	S3	4		○							1	0.05				
6722 A				285	47	305	69	36	KK	15	S9	18	S9	75	S3	4	382	○	9 (10) (10)	2 (14) (14)	4 (30) (30)	2 (33) (33)	2 (3) (9)	17 (23) (23)	23 (22) (22)	17 (17) (17)	{(7)}	34 (55) (45)
C				305	44	307	60	30	KK	14	S9	16	S9	65	S3	3	397	○	9 (10) (10)	2 (14) (14)	4 (30) (30)	2 (33) (33)	2 (3) (9)	17 (23) (23)	23 (22) (22)	17 (17) (17)	{(7)}	34 (55) (45)
6730 A					284	62	27	KK	16	S15	21	S13	65	S3	3	○							1	0.05				
6001 A				209	69	282	92	35	U	14	/	13	/	68	/	4	○		1				1	0.05				

別表 4・5 土師器・須恵器器種表

別表4 土師器器種表

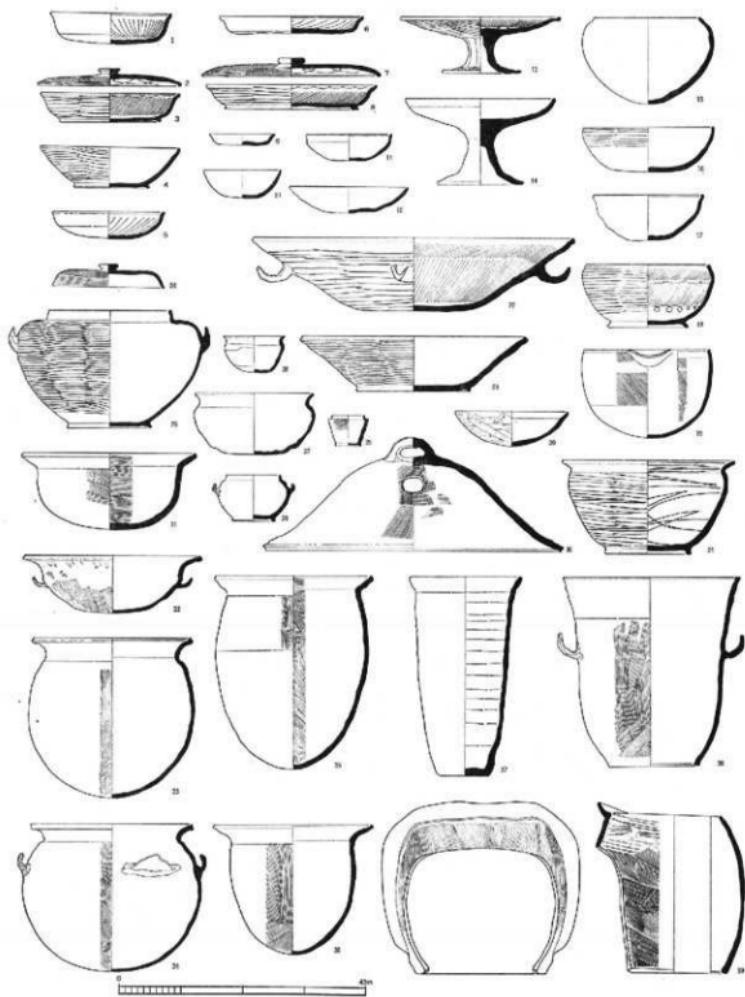
器種名	番号	器種 説明	備考
杯 A	1	広く平らな底部と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁部の形態は、A・B形態に区別できる。A形態は、口縁部下平手の内側、上平がわざに外傾する弧をえがき、口縁部が内側による肥厚。B形態は、全体が内側する弧をえがき、口縁部の肥厚が小さい。B形態は上として奈良時代後半以降のC手法の様に見られる。	
杯 同 蓋	2	外傾する口縁部をもつ平底の器で、低矮な高台がつく。口縁部と底部の接は、丸みを帯びるのが普通で、蓋はボタン状のつまみ押ぐ平坦な頂部となるからに弯曲する脚部からなる。	II・Ⅳ・Ⅴ一蓋A
杯 梗 A	3	小さな平底のいし丸足と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁部端面が内傾するのが特徴である。	II・Ⅳ一梗A
杯 C	4	丸底に近い小さな平底と内側する弧をえがいて、斜め上に大きく聞く口縁部からなり、底部から口縁部への移行は漸進的である。	
梗 C	10	丸底に近い平底から弧曲しながら外反し、口縁部の上部が前面に立ち上り、端部近くで小さく外反する。口縁部の内側には以下には成る程の凸凹をとどめ、外面に粘土瘤の痕跡を残すものが多い。	
梗 D	11	脱Aをやや改めた形態で、口縁端部がまるくおわるもののと、内側するものがある。梗Cと同様に手手法を特徴とし、他のさまざまな下の手を不調整のまま残すもの、ヘラ削りをするもの、ヘラ削りの後へウ磨きをするものがある。	III・Ⅳ-C
皿 A	6	広く平らな底部と斜め上にひらく矧い口縁部からなる。口縁部には杯Aと同様にA・B両形態がある。手法とB形態部は開口度もまた違ふ。	III・Ⅳ・Ⅵ一蓋A
皿 同 蓋	7	皿Aに高さを付ける脚部で底面に対するA・B両形態があるが、B形態のものは少數である。口縁部の形態と手法とは関連性ない。蓋は、平らな頂部とだらかに弯曲する脚部からなり、既食時代中期を通じて外面にはヘラ磨きが見られる。	II一蓋B, IV一蓋A,
皿 C	8	皿Aに似るが、一般に小型（口径10cm満・高さ2cm未満）で手づくねで手につくられている。手手法で調整され、口縁部上部が外反するものとしないものがある。	Ⅳ一蓋C
鉢 鉢 A	9	丸底ないし、底面に近い丸底から外洋気味に開く口部が端部近くで内傾するいわゆる鉢形である。	VI一鉢A
鉢 鉢 B	15	平底に近い底部と、外傾しない直立する口縁部からなる。口縁部が内側にかかるときをもとのと内傾するものがある。	VI一鉢B
鉢 鉢 C	16	底部は平行に近い丸底で、口縁部との接は不明瞭で外縁気味に外傾し、口縁部上端がやや外傾する。粗製で厚手のものが多い。	VI一鉢B
鉢 E	17	高台のつく平底の器で、わずかに肩の張る体部にやや外反する矧い口縁部がつく。須恵器・埴色土器に同形態のものもある。	VI一鉢A
高 杯 A	13	ラップ狀に聞く脚部と、ヘラで多面体に面取りした脚部に大きく外方に聞く浅い杯部を付す脚部と杯部の接合部には、杯部外面に直角、粘土瘤を上にしないし縁様により脚部を作らる方法（泥輪接合法）がある。	
高 杯 B	14	11脚部が内側する脚部と面取るのない脚部からなる。	
盤 盤 A	22	矧い底部と斜め上にひらく口縁部からなる。口縁部には把手がつく例もある。	II・Ⅵ一蓋B
盤 盤 B	24	皿Aに直角につけたものと、Aと同じく口縁部に把手がつく例もある。	VI一鉢C
盤 盤 C	21	高台を付した平底と肩の張ったイチジク形の脚部と直立する矧い口縁部からなる。肩部に上方に狭く折り曲げた舟形把手を付す。蓮は、がた筋のつまみ付をした平底な頭部と内側に折れ込む脚部からなる。	VI一鉢C (SD480)
盤 盤 D	25	平底に近い丸底と稜形に近い脚部と外反する矧い口縁部からなる広口の器である。肩部附近に上向きの把手ないしボタン状をした筋を脇りに持つ例もある。側面には、ハケ・調整を行わぬ、粘土瘤の痕跡を残す例が多い。	VI一鉢C (SD650)
盤 盤 E	28	矧受けのよき短く内側に折り曲げる口縁部からなる広口の型。	II・Ⅵ一蓋B
盤 盤 F	26	平底は圓筒形で、相対する二方の肩に把手を付したもの。	
盤 盤 G	27	頭部でやすやすまる長脚の器の体部に斜め上にひらく口縁部をつける。	
盤 盤 H	29	わざかに上にひろがる器体に、斜め上にひらく口縁部をつけるもの。	
盤 盤 I	30	深い笠形大肚土器で、組部に半環状の把手をつけ、把手の本輪に敵文する二方向の柄部中央からやや下ったところに円孔をあける。用途については定かでないが火舟の蓋とするのも一案である。	
盤 盤 J	31	半球形に近い体部に外傾する口縁部のつくもの。	
盤 盤 K	32	鍋Aの底面の両側に把手を付するもの。	
盤 盤 L	33	底部のほぼまつた円筒形の体部の両側に把手のつくもので底を大きくあけている。	
盤 盤 M	35	載原放摩原の一面面を大きく切りとり、その切離部の周辺に底をつけるもの。	

1. 本報告書における土器の器種の呼称は、基本的には「平城宮報告書」で用いたものをうけついでいる。

2. 本表は、主として奈良時代の代表的な器種をとり上げ、從来刊行した報告書で用いた名称と対称すること目的としたものである。新呼称と旧呼称の対称は、何齊類にかかげた。備考欄のローマ数字は、「平城宮発掘調査報告書」の分類を示す。從来から一直して同一の呼称で呼んでいるもの、および今初めてとり上げる器種は、備考欄を空白のままとした。

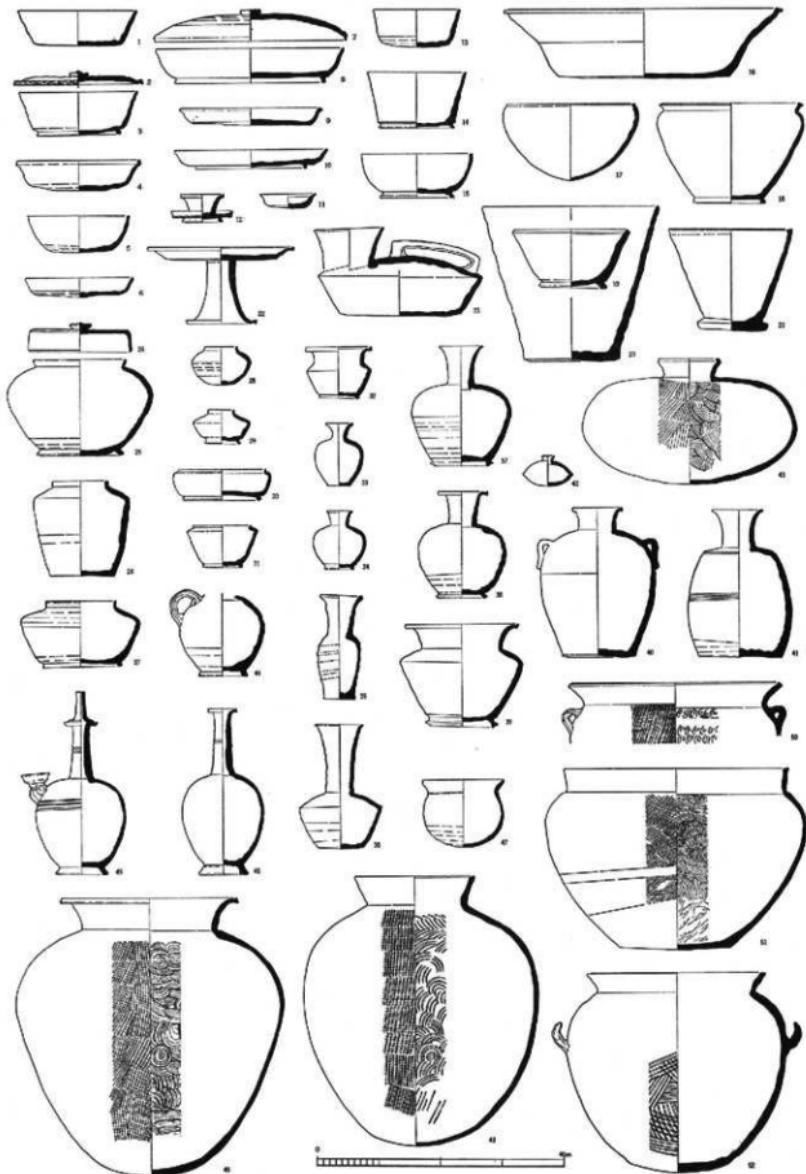
3. 家財類（第1回）は、平城宮および平城宮内の遺跡から出したものである。ただし、破片は復原して示した。

4. 表に示した以外にも、奈良時代の器種はあるが、現況では出土例が少なく、相別名を決定していない。今回Xとしたものは、類例の少ないもので、出土例の增加を待って細目を決定する予定である。



別表5 須恵器器種表

器種名	番号	器種説明	備考
杯	A	平底な底部と斜め上にまっすぐのびる口縁部からなり、口縁端部は丸くおさまる。	II一蓋A・B・C
杯	B	杯Aに高台をついた形態をそなえ、蓋と一緒になる。高台端面には、内傾・水平・外傾の三種がある。	IV・VI一蓋A
同 蓋	3	杯Bの蓋には、平らな頂部と圓曲する縁部から成るA形態のものと、頂部が丸く笠形を呈し、縁部が圓曲せず輪島気味に端部にいたるB形態のものがある。	
杯	C	平底と斜め上に聞く口縁部からなる。口縁端部は内側に巻き込む。土師器杯A形態の口縁部をそなえる杯である。	
杯	E	平底と内側する口縁部からなる鋼錫形の形態である。口縁端部は内側する。	V一鈎A
皿	A	扁平な底部と高い口縁部をそなえた形態で、他の皿類にくらべて高さは、比較的高い。口縁端部がまるくおさまるのが特徴である。	II一蓋A・B, VI一蓋B(S D485)
皿	B	皿Aに高台をついた形態で蓋と組み合う。高台端部は、杯Bと同様、三形態がみられる。蓋も杯Bと同じ様A・B・両形態がある。	
皿	C	広く平底な底部と斜め上に聞く低い口縁部からなる。口縁端部は、内側に巻き込み肥厚するものと、平底で外傾するものがある。	
皿	D	皿Cに高台を付した形態。皿底が低いのが特徴。	
皿	E	平底と斜め上に聞く低い口縁部からなる小型の皿で、口縁端部が外方に薄く引き出されるのが特徴である。灯明器として使用。	
椀	A	杯Aをさらに深い形態にしたもので、杯Aに比べ口縁部の外傾度は低く、ほぼ直ぐに立ち上がる。	V一鈎A
椀	B	碗Aに高台を付した形態。	V一鈎B
椀	C	碗Eの形態に高台を付したもの。	II一蓋A, VI一鉢A
鉢	A	内側に並びて二種類と尖鋸ないし、丸味を帯びた尖底からなる。いわゆる鉢形である。口縁端部が丸くおさまるものと、へだで平底に面取りするものがある。全体外面をくづき出す箇所が比例的に多い。	
鉢	D	外反する低い口縁部と上位で強張る張部からなる。高台を付すものと付さないものの二種がある。	II一鉢C
鉢	E	平底で、長い口縁部が高さで外方に聞くバケツ状の底。	II一鉢A, II一鉢B
鉢	F	円錐状を呈し底部と斜め上に聞く口縁部からなる。口縁部の一部を外方にひねり出し片口とした例もある。底部外面には、焼成前に先の尖ったもので、突き刺した多数の孔が見られるものもある。	
鉢	X	高台を付ける鉢と外方に大きく聞く口縁部からなる。	
高	19	輪状の受部と高台の付する頭部からなる。	
高	22	須恵器の高台の出土例は稀で、奈良時代後半代に少しがれられているにすぎない。ラッパ状に聞く脚柱部と、外反する口縁部をもつ平坦な杯形からなる。	
盤	A	平底に強く外側する長い口縁部をもつ洗面器状の形態。口縁部中程に一対の三角形凸折把手や半圓状把手を付するものもある。底部内面には、円心円の當て鉛錆跡をとどめるものもある。	V一盤A
壺	A	肩の張ったオイシジク形の器體に底面に収する長い口縁部と高台を付す。肩部下面に角状の把手を付ける例や肩に耳状の把手を付す例がある。蓋は平底な頂部と直角に折れ曲る縁部からなる。頂部には、宝床あるいは扁平ボタン状の突起がつく。	II一蓋D, VI一蓋C (S D485) , 蓋B (S D630)
壺	B	平底で斜面上に立ち上る体部と、比較的平坦な底面を有する例である。肩と体部の境は、にじむ接となり、底部に高台を付す例がある。肩に耳状の突起をもつ扁平な底部に高台を付す例もある。	VI一蓋D・F
壺	C	肩部が接角をもつ肩張の体部に、直立する短い口縁部をもつ平底の器。高台を付す例もある。	VI一蓋A
壺	D	内側に耳状の突起をもつ扁平な底部に高台を付す例もある。	VI一蓋G
壺	E	内側氣味に斜め上に聞く脚部と、長い肩部に外傾する長い口縁部を付した広口の壺。高台を付すものと付さないものがある。	
壺	G	縦長い脚部に廣く長い口縁部をもつせた形態で、ロクロ水焼成形で作られている。	
壺	H	肩の長い肩に後頭部もつ扁平な体部に、直立する長い口縁部をもつ扁平な底部に高台を付す例。	
壺	K	縦長い脚部と肩が張り腰角を呈する体部からなる長頸壺である。平底で高台をつけるものとつけないものがある。	
壺	L	卵形の体部に口縁部が外反する口縁部をつける。口縁部をまるくおさまるものと、彎曲してやや頗広の図形をなすもの、高台を付するものと付さないなどの差がある。	II一瓶, VI一蓋E・F,
壺	M	平底のオイシジク形の体部に、外反す口縁部をつける小型の器である。口縁端部は丸くおさまる。高台を付するものもある。ロクロ投成形。	VI一蓋H
壺	N	平底で卵形の体部に直立する口縁部を付す。肩部の相対する位置に耳状の把手を付す。さらに肩部下半部の相対する位置に同じ耳状の把手を付したものもある。	
壺	P	底部の大きい筒形の体部に外反する口縁部のつくり、いわゆる便利形態であり、肩に腰をもつものと、もないものがある。	
壺	O	肩部が腰角をなす肩張の体部に、大きく外反する広口の口縁部と外傾する高台を付す。	VI一蓋D, VI一蓋C
壺	X	口縁部の形態は不明であるが、肩部の片側に半環状の把手を付したもの。	
平	23	平底で扁平な体部の竹筋に広口の口縁部と逆U字形の把手を付す。把手を持たないもの、高台を付すものと付さないもの、体部が腰角をなすもの、丸味を持つものがある。	
水	46	削製品を模したもので、卵形の器體に細長い口縁部をもつたもの。頭部、脚部には弦線を施す。	
淨	45	卵形品を模したもの。	
横	42	横に長い形態の体部上面中央に外反する口縁部をついたもの。側面が尖る体部を持つ小型製品もある。	
甕	A	水滴として使用されたもの。	II一蓋A-C, VI一蓋A (S D485), 蓋B (S D630)
甕	B	卵形の体部に内側氣味の口縁部をついたもので、口縁部は把手なし外傾する面をなすものと云う。	II一蓋B,
甕	C	卵形の体部に内側氣味の口縁部をついたもので、口縁端部はまるくおさまるもの、内傾するものがある。肩部に耳状を付した例もある。	VI一蓋B-C (S D485)
甕	E	蓋A形態で肩部に耳状を付したもの。	II一蓋B, VI一蓋D・E
甕	X	土師器の蓋Aの形態をもつ小型の器。類例は少ない。	



PUBLICATIONS OF NARA NATIONAL CULTURAL
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, NO. 40
Thirtieth year memorial volume

NARA PALACE SITE EXCAVATION REPORT

XI

Investigation of the location of the
First Imperial Audience Hall (Daigokuden)
carried out between 1965 and 1979

ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE
1981

NARA PALACE SITE EXCAVATION REPORT XI

Investigation of the location of the
First Imperial Audience Hall (Daigokuden)
carried out between 1965 and 1976

CONTENTS

CHAPTER I	Introduction	1
1.	Progress of recent excavations	1
2.	Preservation and maintenance	3
3.	Publication of the report	4
CHAPTER II	Outline of excavation	5
1.	Excavation areas	5
2.	Order of excavations	7
A.	Excavation No. 27	7
B.	Excavation No. 41	8
C.	Excavation No. 69	8
D.	Excavation No. 72	9
E.	Excavation No. 75	10
F.	Excavation No. 77	11
G.	Excavation No. 81	12
H.	Excavation No. 87	12
I.	Excavation No. 117	13
J.	Imperial Residence Compound (Dairi) Investigatory Committee Meeting	14
3.	Excavation diary	15
A.	Excavation No. 27	15
B.	Excavation No. 41	17
C.	Excavation No. 69	18
D.	Excavation No. 72, north	20
E.	Excavation No. 72, south	21
F.	Excavation No. 75	21
G.	Excavation No. 77	22
H.	Excavation No. 81, east	24
I.	Excavation No. 81, west	24
J.	Excavation No. 81, central	25
K.	Excavation No. 87, north	25
L.	Excavation No. 87, south	26
M.	Excavation No. 117	27

CHAPTER III	The site	29
1.	Constitution of the site	29
A.	Topography prior to excavation	30
B.	Ancient topography	31
2.	Features	33
A.	Gate and corridor location	34
B.	Palace buildings location	56
C.	Plaza location	76
D.	Eastern palace precincts location	84
E.	Imperial Food Servery location	92
CHAPTER IV	Artifacts	97
1.	Wooden tablets	98
A.	from ditch SD3715	98
B.	from ditch SD5564	105
C.	from pit SK5535	105
D.	from ditch SD5490	106
E.	from ditch SD3765	106
F.	from pit SK3730	107
G.	from building SB7802	107
H.	summary	112
2.	Roof tiles	115
A.	from ditch SD3765	117
B.	from buildings SB7801 and SB7802	117
C.	from corridor SC5500	120
D.	from corridor SC3810 and building SB7750 ..	123
E.	from the palace buildings location	124
F.	from ditch SD3715	125
G.	from other features	126
3.	Building material	130
A.	Pillar bases and foundation board	130
B.	Framework of well SE9210	140
C.	Materials of a scale-model building	144
D.	Stone, etc	149
4.	Pottery	153
A.	from building SB7802	156
B.	from compound wall SA3777	160
C.	from compound wall SA109	162
D.	from feature SX6600	165
E.	from building SB7150	166
F.	from Phase II buildings such as SB6633 ..	166
G.	from Phase II ditches such as SD8211 ..	167
H.	from pit SK8212	168
I.	from well SE9210	169

J. from building SB8224	170
K. from ditches SD6631, SD6633, SD7175	171
L. from ditch SD3765	172
M. from ditch SD5505	172
N. from ditch SD3715	172
O. from pit SK3784	176
P. from pits SK8316, SK8317, SK8233	178
Q. from pit SK3730	180
R. unusual kinds of pottery	181
S. <i>haniwa</i> from square mounded tomb SX7800, etc	186
5. Wooden objects	188
A. from building SB7802	188
B. from ditch SD3715	195
C. other wooden objects	201
D. identification of tree species	205
6. Metal and stone objects	207
7. Coins	209
CHAPTER V	
Articles	213
1. Changing configurations at the location of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden) ..	213
A. Features dating to the periods prior to and period of palace construction	213
B. Phase I features	214
C. Phase II features	220
D. Phase III features	223
2. The nature of the location of the First Imperial Audience Hall	225
A. Examination of various hypotheses	225
B. The dating of phase I features	226
C. Palace buildings discerned from Phase II features	230
D. The residence of Retired Emperor Heizei ..	231
E. Reexamination of the Saigū ('western palace')	233
F. The Hanyuan-tien and Linte-tien of the Daming Palace	234
3. Reconstruction of the architectural composition by phase	236
A. Phase I buildings	236
B. Phase II buildings	238
C. Phase III buildings	240
4. Roof tiles	242

A.	Revision of the eaves-tile chronology	242
B.	The relationships between eaves-tile combinations	243
C.	Relationships between same-mold eaves-tiles	247
5.	Pottery	251
A.	Reconsideration of Nara palace IV and VII pottery types	251
B.	The construction of dining-tray shaped pottery	258
6.	Conclusions	262
	Supplementary Tables	265
	English summary	281

FRONTISPICE

The location of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden)
from the east

SUPPLEMENTARY TABLES

1 Tabulation of the important buildings	266
2 Classification of rounded eaves-tiles	268
3 Classification of flat eaves-tiles	272
4 <i>Haji</i> ware shape-types at the Nara palace	276
5 <i>Sue</i> ware shape-types at the Nara palace	278

ILLUSTRATIONS

1. Areal divisions of the excavated area	6
2. Major features of excavation no. 27	15
3. Major features of excavation no. 41	17
4. Major features of excavation nos. 69 and 72	19
5. Major features of excavation no. 75	22
6. Major features of excavation no. 77	23
7. Major features of excavation no. 81, east	24
8. Major features of excavation no. 81, central and west	24
9. Major features of excavation no. 87	25
10. Major features of excavation no. 117	27
11. Present topography and boring investigation	29
12. Topographical changes at the location of the First Imperial Audience Hall (1)	30
13. Topographical changes at the location of the First Imperial Audience Hall (2)	31
14. Stratigraphic profile of the earthen foundation platform for building SB7801	35
15. Gravel pavement around the northern stairs of building SB7801	37
16. Foundation stone installation for corridor SC5600 and blind ditch	38
17. Stratigraphic profile of the earthen platform foundation for corridor SC5600	39
18. Stratigraphic imposition of building SB7802 and corridor SC5600	42

19. Posthole shapes for building SB7802	43
20. Remains of foundation stone setting for corridors SC5500 and SC5600	44
21. Stratigraphic profile of earthen foundation platform for corridor SC5500	45
22. Pillar bases for compound wall SA3777	46
23. The consolidation of SD5560 and SD5561 ditches	46
24. Ditches SD5562 and SD5563 connecting to SD5588	48
25. Ditches SD3790 and SD3770	49
26. Ditch SD3775 and building SB3746	49
27. Stratigraphic profile of earthen foundation for building SB7750A and corridors SC3810A, SC3810B	51
28. Remains of foundation stone settings for corridor SC8360; posthole shapes for building SB8230	52
29. Remains of foundation stone settings for corridor SC6670	53
30. Scale drawing of ditch SD3815	54
31. Covering stone for compound wall SA3800	55
32. Scale drawing of ditch SD8227	55
33. Scale drawing of feature SX8332	55
34. Stratigraphic imposition of features SX6600 and SX9230	57
35. The conditions of the filling in of features SX6600 and SX6601	59
36. Stratigraphic profile of ditch SD7165	60
37. Superimposition of posthole shapes of building SB6630, SB6611 and SB6620	62
38. Posthole superimposition of buildings SB7151A · B	63
39. Superimposition of postholes of building SB6655	66
40. Posthole superimposition of buildings SB6622 and SB6660	71
41. Superimposition of postholes of buildings SB8218A · B	74
42. Stratigraphic profile in the vicinity of ditch SD5590	77
43. Stratigraphic profile of well SE7145	78
44. Scale drawing of well SE9210	80
45. Stratigraphic profile of moat SX7800	83
46. Stratigraphic profile of deposits east so west in the eastern palace precincts	86
47. Posthole plans of small-scale buildings	88
48. Scale drawing of feature SX3720	89
49. Small bridge SX5543 over ditch SD5530	91
50. Revision in the succession of features at the Imperial Food Servery location	93
51. Revision of feature map in <i>Nara Palace Site Report IV</i>	93
52. Stratigraphic profile of compound wall SA109	95
53. Scale drawing of ditch SD8077	96

54. Wooden tabs excavated from ditch SD3715	104
55. Wooden tabs excavated from building SB7802	112
56. Percentages of eaves-tiles excavated from the location of the First Imperial Audience Hall	115
57. Distribution of eaves-tiles at the location of the First Imperial Audience Hall	116
58. Percentages of eaves-tiles excavated in the South Gate area ...	118
59. Percentages of eaves-tiles excavated in the Eastern Tower location	119
60. Percentages of eaves-tiles excavated in the area of the compound wall facing east	122
61. Percentages of eaves-tiles excavated from the area of the Phase II compound wall facing east	123
62. Percentages of eaves-tiles excavated from the Palace buildings location	124
63. Percentages of eaves-tiles excavated from ditch SD3715	125
64. Demon-faced roof tiles excavated from the First Imperial Audience Hall location	126
65. Roof tile with written character impression	128
66. Cover tile of hip rafter excavated from the Yakushiji temple ...	128
67. Plaque-shaped decorative board	129
68. Section through wood of pillar base from compound wall SA3777	132
69. Pillared fence postulated from wooden conduit facilities	137
70. Diameters of pillar bases excavated at Nara palace	139
71. Scale drawing of frame of well SE9210	140
72. Construction method of frame of well SE9210	141
73. Reconstruction of <i>azekii</i>	142
74. Scale drawing of foundation boards	143
75. Sutra store of Hokkedō, Tōdaiji temple	143
76. Illustrative reconstruction of model building <i>mitesaki</i>	147
77. Foundation stones excavated at the southern ditch SD109	150
78. Composition of stone materials (microscopic photo)	150, 151
79. Rim types of <i>Haji</i> ware bowls and plates	154
80. Rim types of <i>Sue</i> ware	154
81. Pottery from compound wall SA3777	160
82. Pottery excavated from the southern side of ditch SD109	163
83. Pottery from the northern side of ditch SD109	164
84. Pottery excavated from feature SX6600	165
85. Pottery excavated from well SE9210	165
86. Pottery excavated from ditches SD5505 and SD3765; and from pits SK8316, SK8317, and SK8233	173
87. Pottery from pit SK3784	177

88. Pottery from pit SK3730	180
89. Scale drawing of green-glazed vessels	182
90. Scale drawing of an inkstone	185
91. Kofun period <i>Sue</i> ware	187
92. Bottom board of wooden tub excavated from building SB7802	191
93. Pole-shaped wooden objects excavated from building SB7802 ..	194
94. Wooden trays and tubs from ditch SD3715	198
95. Wooden objects excavated from SD3715	198
96. Features pre-dating palace construction	213
97. Major features of Phase I-1	214
98. Major features of Phase I-2	215
99. Major features of Phase I-3	216
100. Major features of Phase I-4	217
101. Divisioning of space in the First Imperial Audience Hall within the Nara palace	218
102. Plan of building placement in Phase I	219
103. Major features of Phase II	221
104. Plan of building placement in Phase II	222
105. Major features of Phase III	223
106. Plan of building placement in Phase III	223
107. The northwestern corner of the Imperial Residence Compound seen in an old map of the Heian Palace	232
108. Transformation of the locus of the First Imperial Audience Hall	232
109. Comparison of building SB7200 with the Hanyuan-tien at the Daming palace	235
110. Comparison of the central building of Phase II with the Linte-tien at the Daming palace	235
111. Reconstruction of the hip roof construction on building SB7200	237
112. Eaves-tiles from the Second Imperial Audience Hall and the Halls of States (Chōdojin)	243
113. A tile of the same mold as 6284F	248
114. Same-mold eaves-tiles from Nara palace and Kuni palace	250
115. Two varieties of 6320A tiles	251
116. Body paste of different groups of pottery (enlarged photo)	254-255
117. Ceramic body taken by polarized light	254-255
118. Fluorescent X-ray analysis of pottery	257
119. Sets of dishes from building SB7802	260

TABLES

1. Duration of excavations and excavated area quantifications	5
2. Amount of Construction postulated for the eastern half of the First Imperial Audience Hall location	33
3. Measurements of the wooden tabs excavated from ditch SD3715	104
4. Measurements of wooden tabs excavated from ditch SD7802	112
5. List of wooden tablets with inscribed dates	113
6. Measurements and tree species identification of pillar bases and foundation boards	131
7. Measurements of wooden conduits	134
8. Measurements of the covered drain lid	136
9. Line of pillars demarcating a large area	138
10. Calculation of the tree age of pillar bases	140
11. Comparison of profile measurements of <i>azeki</i>	143
12. Types of stone among the foundation stones of temples in Nara Prefecture	151
13. Phase divisions of pottery from Nara palace	153
14. Quantities of pottery IV and V from Nara palace	155
15. Composition of pottery excavated from building SB7802	157
16. Composition of pottery excavated from compound wall SA3777	161
17. Composition of pottery from the ditch on the south side of SA109	162
18. Composition of pottery from the ditch on the north side of SA109	165
19. Composition of pottery from building SB7150	166
20. Composition of pottery from buildings SB6666, SB7151, and SB7152	167
21. Composition of pottery from ditches SD8211, SD8216 and SD8246	167
22. Composition of pottery from pit SK8212	168
23. Composition of pottery from building SB8224	170
24. Composition of pottery from ditches SD6631, SD6633, SD7175	171
25. Composition of pottery from ditch SD3715	174
26. Composition of pottery from pit SK3784	178
27. Composition of pottery from pit SK8316	179
28. Composition of pottery from pit SK8317	179
29. Composition of pottery from pit SK8233	180
30. Composition of pottery from pit SK3730	181

31. Provenience of green-glazed ceramics	182
32. List of pottery with brush writing, brush pictures, stiletto writing, incised designs and stamped characters	183
33. Provenience of ceramic inkstone	185
34. Measurements of ladle-shaped wooden implement from building SB7802	190
35. Measurements of bottom board of tub from building SB7802 ..	192
36. Measurements of pole-shaped wooden object from building SB7802	195
37. Measurements of bottom board of tub from ditch SD3715	197
38. Measurements of pole-shaped wooden object from ditch SD3715	201
39. Measurements of bottom board of tub from ditch SD9210	204
40. Tree species of wooden objects excavated from the location of the First Imperial Audience Hall	206
41. Measurements of coin (1)	210
42. Measurements of coin (2)	210
43. Sets of eaves-tiles from the location of the First Imperial Audience Hall	245
44. Classification of eaves-tiles at the Kuni palace	249
45. Methods of manufacture of <i>Haji</i> ware bowl A and plate A	254
46. List of analytical materials	256
47. Phases of materials to be analysed for body paste composition	256
48. Composition of serving dishes from building SB7902	260
49. Composition of serving dishes from compound wall SA3777 ..	262

ENGLISH SUMMARY

1. The investigation area dealt with in this report is the locus of the First Imperial Audience Hall (Daigokuden), located 500 meters north of the main entrance to the Nara palace at the Suzaku gate. The existence of the palace compound, measuring 180 meters east to west and 300 meters north to south, was previously known from the paddy field and path layouts in that area. Ōmiya ('great palace') and Higashi Ōmiya ('eastern great palace') occurred also as paddy placenames. According to these place names and land divisions, Sekino Tadashi determined that that area was the Imperial Residence Compound (Dairi), and he speculated that south of there was the Southern Garden (Nan'en). Based on Sekino's treatise, the area designated in the Taisho era (1912-26) as a historical site included the region of the eastern gate on the southern side of the Government Office Compound (Chōdōin), the Imperial Audience Hall and the Imperial Residence Compound.

After this Institute began serious excavation of this site in 1955, the ground plans of the architectural structures were gradually clarified. By 1962, a palace compound equivalent to that in size behind the Mibu gate was postulated to have existed also behind the Suzaku gate. Based on these expectations, the structures behind the Suzaku gate were thought to be the first manifestations of the Imperial Audience Hall, the Imperial Residence Compound and the Government Office Compound —dating to the Nara palace of 710 —while the structures beyond the Mibu gate were the second constructions of those building complexes; the latter constructions represented the shifting of the palace during Emperor Shōmu's reign in 745.

However, as the excavation of the area of the First Imperial Audience Hall progressed, it became apparent that there was something strange about the positioning of the buildings in the Second Imperial Audience Hall and Imperial Residence Compound to the east. The opinion was formed that in the period of the construction of the initial Nara palace, the Imperial Residence Compound was not located in this area. In this report, the Imperial Audience Hall of the period of palace construction is postulated to have been in this area and therefore the name 'First Imperial Audience Hall' is employed.

Topographically, the northern one-third of this area lies on the tip of a terrace (73 m. msl) extending from the Nara-yama Hills; and the remaining two-thirds lie on the alluvial apron of the Nara Basin lowlands (68.5 m. msl at the southern edge of the First Imperial Audience Hall location). Excavations of this location were carried out in 1958 at two places on the south side of First Street (Ichijō dōri) in the Nara capital grid plan of streets. Nothing more was done than these small excavations until 1965 when serious excavation was undertaken. From then until 1979, twelve separate investigations were carried out, earth being removed over 383.3 ares and almost all of the features in the eastern half of the area were exposed. Places yet uninvestigated are the northernmost part of the First Street thoroughfare and one portion of the southern extremity. The former is a very important locus, but there are no immediate plans for its excavation. For the 1,600 square meters area of the latter, its situation can be analogized from

the features nearby.

2. The features in the area of the First Imperial Audience Hall can be assigned to three phases between 710 and 835, that is from the beginning of the Nara period to the early Heian period. They represent the construction and layout of palace compounds with special characteristics for each phase. Phase I, an area 600 *shaku* (176.6 meters) east to west and 1,080 *shaku* (317.7 meters) north to south was enclosed by a corridor opening in the center of the southern side for the main gate. The northern third of the compound was raised about two meters to form a platform which supported the Imperial Audience Hall and the rear palace (*kōden*). The southern two thirds formed a gravel-paved courtyard with no architectural structures whatsoever. This was the situation when the capital was removed from the Fujiwara palace in the southern part of the Nara Basin (Phase I-1) to the Nara palace in the northern basin. Subsequently, the Government Office Compound was built in the southern portion of the palace, and in the 720's, towers were added on both sides of the southern gate (Phase I-2). The construction of the towers, together with the Government Office Compound, was designed to enhance the grandeur of the vista in this area. At the time of moving the capital to Kuni, the Imperial Audience Hall and the corridor along the eastern side of the compound were moved to the Kuni palace, which was within present-day Kyoto Prefecture. Between the years 739 and 745, the site of the corridor on the eastern side came to be sheltered by a wooden fence (Phase I-3). The same kind of activity was probably carried out in the as-yet unexcavated western portion as well. After the capital was moved back to Nara in 745, the eastern corridor was rebuilt, but there is no trace that the Imperial Audience Hall was reconstructed. Nevertheless, according to a wooden tablet inscribed in 753 when all Phase I structures were supposed to have been completely extinct, a building called the Great Hall (*Ōdono*) existed there, and the rear palace (*kōden*) is thought to have lasted into this latter phase (Phase I-4). Again, according to wooden tablets, the South gate at this time was below the garrison of the Headquarters of the Palace Gate Guards (Emonfu), and it was treated as one of a lesser line of gates than the gates leading into the Imperial Audience Hall and Imperial Residence Compound.

Features of Phases I-1 and 2 encompassed the Imperial Audience Hall of the early Nara period, and the compound layout of this First Hall area was drastically different from that of the preceding Fujiwara palace, from the Second Hall construction at Nara palace and to the later Naniwa palace. This is something that cannot be comprehended from previous conceptualizations of the palace grounds but is known only through excavation. It is now thought that the First Imperial Audience Hall was built on the model of the Hanyuan-tien at the Chang-an capital of the T'ang Dynasty in China.

Features of Phase II began to be constructed just after 753 and continued through the latter half of the Nara period. During this time, the corridor was reduced to a size of 600 *shaku* (176.6 m.) east to west and 620 *shaku* (186.08 m.) north to south. Lining up the northern boundary and the southern boundary with the Imperial Residence Compound on the east, it is obvious that the Imperial Audience Hall was consciously established in contrast to the Residence Compound. The

earthen platform was leveled in the north and earth mounded in the south to form a base for constructing the buildings. In all, 27 structures were regularly laid out on a grid of 3 meter basic units; these buildings included the main audience hall placed in the center, auxiliary halls on either side, and various associated outbuildings surrounding these main structures in a manner not seen elsewhere. A special characteristic of the main audience hall was that it consisted of three separate buildings on north to south axes lined up in a row. These features can be equated with the Saigū ('western palace') where important ceremonies were conducted in the latter half of the Nara period; its function can be envisioned to have been similar to that of the Imperial Residence Compound. The phase which these buildings belong to was also the period in which one famous political figure of the Nara period, Fujiwara Nakamaro, was influential. The palace appears to have been assigned a very different function (under his direction) than the Imperial Audience Hall and Residence Compound had up until then it was in the Western Palace that Dōkyō, a priest who had reached the highest rank, received the greetings of officials of lesser rank than Ôomi. It was also here that the Empress Shōtoku died.

Features of Phase III followed the same layout as those of Phase II; they comprised the Heizei palace built by the Retired Emperor Heizei as separate from the main palace at the Heian capital in Kyoto. 14 buildings stood on the foundation platform, and their placement had many things in common with the Imperial Residence Compounds of both the previous Nara palace and the Heian palace in Kyoto. The ground plans of these buildings indicate they were built with some early 9th century architectural characteristics such as broad eaves and modified corners. However, there are not a few aspects in which this palace differed from the Nara and Heian Imperial Residence Compounds. It probably employed the same spatial boundaries as those, but this Heizei palace built by the Retired Emperor Heizei was not a central palace of the capital but merely a detached palace. Although the Imperial Residence Compound was constructed *en toto*, the Imperial Audience Hall remained unfinished; that is, the main audience hall was completed, but no traces exist of any corridors or gates built to surround it.

In consequence of clarifying the nature of the First Imperial Audience Hall, it was necessary to re-analyze the Imperial Food Servery location in the north which has been previously published. The immediate reason for the review was that previously, the corridor of the First Imperial Audience Hall was not recognized to have extended into the northern area. At this point, a revised draft is tentatively presented.

Based on the features in the area of the First Imperial Audience Hall, the superstructures of some of the buildings have been reconstructed. It is understood that there were probably many differences in architectural features between the various phases. These are tentative drafts, however, and general corrections will be sought.

3. Among the artifacts, the group of materials excavated from the foundation board remains of building SB7802 plays a very important role in reconstituting the use of this area. According to the wooden tablets, the building was station for the Imperial Gate Guards (Kadobe) and Imperial Palace Guards (Eji) under the Emonfu which protected

this area, and their working conditions can be inferred from the material remains. On one hand, clues to the form of their daily meals can be had through analysis of the ceramic and wooden objects. On the other hand, the excavation of parts of a model building indicates that this model 1/10th lifesize was installed at the site. As for the pottery, analysis of the body past was carried out, demonstrating differences in location of manufacture.

Roof tiles were discovered throughout the area in great numbers; from these, the relations between features and the roof tiles' chronology was managed; and while in part modifying this chronology, the combinations of eaves-tiles could be postulated for each building. In this site report, artifacts associated with architectural features are relatively numerous. Furthermore, through the analysis of the raw materials used to construct the wooden conduits, the nature of pillared fences—what heretofore had been called palisades or wood fences—was grasped. From a servants entryway in a log storehouse, reused as a well lining, the original shape of the storehouse was also reconstructed. At the same time, the varieties of stone and wood materials were determined, and the source of the stone as well as the age of the wood could be postulated.

4. As indicated in this site report, there has been a dramatic increase in our understanding of the area of the First Imperial Audience Hall which unfolded behind the main Suzaku gate entryway to the Nara palace. However, there are not a few unsolved problems, and parts of the interpretation rest on supposition. With the results of future excavations, we should be able to produce an even more detailed picture while having essential facts corrected. Here we have adopted the policy of not making comparisons between the First Imperial Audience Hall and other areas of the palace—such as the First Government Office Compound in the south or the Imperial Residence Compound, the Second Government Office Compound and Second Imperial Audience Hall in the east—any more than necessary. Nevertheless, it hardly needs saying that these areas are important, and the present situation where definitive comparisons with these areas have not been made merely invites misunderstanding.

PLANS

1. Topographic map of entire Nara palace site
2. Distribution of features in the First Imperial Audience Hall location

Location

3. 6ABP ; 6ABQ ; 6ABC ; 6ABD
Distribution of features in palace buildings area
4. 6ABE-M·P
Plan of Eastern palace precincts
5. 6ABR-Q ; 6ABS-E
Corridor and Eastern palace precincts
6. 6ABR-Q ; 6ABE-M
Corridor and Eastern palace precincts
7. 6ABR-P ; 6ABE-K
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
8. 6ABQ-B ; 6ABD-D
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
9. ABD-C ; 6ABQ-A
Plaza, corridor and Eastern palace precincts
10. 6ABP-B ; 6ABQ-A
Corridor location
11. 6ABR-H
Corridor location
12. 6ABR-J·H
Corridor
13. 6ABR-G·H
Plaza location
14. 6ABR-G
Phase II corridor and plaza location
15. 6ABQ-D
Plaza location
16. 6ABQ-A·C
Plaza location
17. 6ABP-B ; 6ABQ-A
Palace buildings and plaza location
18. 6ABC-U·V
Eastern palace precincts
19. 6ABC-U
Eastern palace precincts
20. 6ABP-B
Palace buildings location

21. 6ABP-A·B
Palace buildings location
22. 6ABP-A
Palace buildings location
23. 6ABP-A
Palace buildings location
24. 6ABO-P ; 6ABP-A
Location of palace buildings, Phase II corridor and
Imperial Food Servery
25. 6ABP-B·D
Palace buildings location
26. 6ABP-A·F
Palace buildings location
27. 6ABP-A
Location of palace buildings and Phase II corridor
28. 6ABP-A·F
Palace buildings location
29. 6ABP-D
Palace buildings location
30. 6ABP-D·F
Palace buildings location
31. 6ABP-F·G
Palace buildings location
32. 6ABP-G
Palace buildings location
33. 6ABO-D·E·F
Imperial Food Servery
34. 6ABO-E·H·G·J·L
Imperial Food Servery
35. 6ABO-L·N·O·P
Imperial Food Servery
36. Reconstruction of the buildings
 1. Front elevation of Phase I building
 2. Front elevation of Phase II building
 3. Front elevation of Phase III building
37. Reconstruction of Phase I building SB7200
38. Reconstruction of Phase I buildings SB7200
 1. SB7200
 2. SB8120·SC8098
39. Reconstruction of Phase I buildings
 1. SB7200·SB8120·SC5500 from east
 2. SB7801·SC5600·SC7820
40. Reconstruction of Phase I buildings SB7802·SC5500
41. Reconstruction of Phase II buildings SB7802·SC5500

1. SB6610·SB6611·SB7150·SB7152·SB6640·SB6650
2. SB6610·SB6640·SB6660
42. Reconstruction of Phase II buildings
 1. SB6660·SB6655·SB6663·SB6666·SB6669
 2. SB8210·SB8215
 3. SB6640·SB6650
 4. SB6650
43. Reconstruction of Phase I buildings
 1. SB8245 2. SB8302
 3. SB7750A·SC3810A
44. Reconstruction of Phase III buildings
 1. SB6620 2. SB7170 3. SB7173
45. Reconstruction of Phase III buildings
 1. SB6622 2. SB9300 3. SB8218·SB8219
 4. SB7141 5. SB9220 6. SB7803
46. Reconstruction of Phase III buildings
 1. SB7750B 2. SB8310 3. SB7770

PLATES

1. Nara Palace site
2. First Imperial Audience Hall location

Location

3. 6ABR-G·H·J (Corridor)
 1. overview from west
 2. overview from east
4. 6ABR-H·J (Corridor)
 1. South gate SB7801 from west
 2. South gate SB7801, ditch SD7805, SD7760 from south
 3. South gate SB7801 stairs, middle stratum
gravel pavement from south
5. 6ABR-H·J (Corridor)
 1. South gate SB7801 edge of earthen foundation
platform from west
 2. same from east
 3. South gate SB7801 and corridor SC5600 roof tile
accumulations from east
 4. same after removing tiles
6. 6ABR-H·J (Corridor)
 1. South gate SB7801 pounded earth platform
 2. blind ditch SD7807 and ditch SD5565 from south

3. blind ditch SD7810 from north
4. South gate SB7801 stones piled in eastern section
of subterranean substructure
7. 6ABR-H (Corridor)
 1. Corridor SC5600 and Eastern Tower SB7802 from east
 2. same
 3. same after discovery of blind ditch SD5557 and rain
gutter SD7813A
8. 6ABR-H (Corridor)
 1. Eastern tower SB7802 row of pillars on south side
from south
 2. Eastern tower SB7802 and corridor SC5600
from east
9. 6ABR-H (Corridor)

Posthole shapes and the remains of foundation stone settings

 1. building SB7802(ni)4
 2. building SB7802(i)3
 3. building SB7802(ni)3
 4. building SB7802(i)5
 5. building SB7802(ro)3
 6. corridor SC5600(i)12
10. 6ABR-H (Corridor)
 1. blind ditch SD5557 and rain gutter SD7813A
from east
 2. blind ditch SD5557 from north
11. 6ABR-H (Corridor)
 1. Eastern Tower SB7802 and middle stratum gravel
pavement from north
 2. same, the northwestern corner
 3. ditch SD5590 from west
12. 6ABR-H (Plaza)
 1. building SB7803 from east
 2. building SB7803 and ditch SD7760 from north
 3. Shimotsu-michi road SD7787 and ditch SD7760
from north
13. 6ABE-M-P ; 6ABS-E ; 6ABR-Q
 1. overview from west
 2. overview from south
 3. overview from northeast
14. 6ABE-M ; 6ABR-Q ; 6ABS-E (Corridor)
 1. corridor SC5500 and fence SA3777 from north
 2. corridor southeastern corner, from south
15. 6ABE-M ; 6ABR-Q (Corridor)

- Remains of foundation stone settings and posthole shapes
1. corridor SC5500(ha)4
 2. corridor SC5600(ha)4
 3. fence SA3777 pillar #12
 4. fence SA3777 pillar #6
 5. fence SA3777 pillar #3
 6. fence SA3777 pillar #5
 16. 6ABE-M ; 6ABR-Q ; 6ABS-E (Corridor)
 1. blind ditch SD5555 and wooden conduit SD5560 from west
 2. wooden conduit SD5561, SD5560, SD5526, Halls of State fence SA5550, SA5551 from west
 3. ditch SD3715, wooden conduit SD5562, SD5564 from east
 17. 6ABS-E (Corridor)
 1. wooden conduit SD5561, SD5560 juncture from south
 2. same after removal of lid
 18. 6ABE-M (Eastern precincts)
 1. wooden conduit SD5562 from east
 2. same after removal of cover
 3. same, junctre
 4. wooden conduit SD5563 aperture closure from west
 19. 6ABE-M·P ; 6ABS-E(Eastern precincts)
 1. ditch SD3765 from north
 2. ditch SD3765 ; Halls of State fence SA5550 from south
 20. 6ABE-M·P (Eastern precincts)
 1. ditch SD3715, SD5530 from south
 2. building SB5510 from south
 3. ditch SD3715, building SB5521, SB5520 from north
 21. 6ABD-D ; 6ABE-K ; 6ABQ-B ; 6ABR-P
 1. overview from east
 2. same from west
 22. 6ABR-P (Corridor)
 1. corridor SC5500 from south
 2. fence SA3777, corridor SC5500, compound wall SA3800 from northeast
 3. compound wall SA3800, corridor SC5500 from north
 23. 6ABQ-B ; 6ABR-P (Corridor)
 1. fence SA3777, scaffold SS3795 from north
 2. same
 24. 6ABQ-B ; 6ABR-P (Corridor)
 1. rain gutter SD3790, III compound wall SA3810A

- from north
 - 2. rain gutter SD3790, wooden conduit SD3770
 - from south
 - 3. same, detail
25. 6ABR-P (Corridor)
- 1. wooden conduit SD3770 from west
 - 2. same, juncture
26. 6ABG-B ; 6ABR-P (Phase II corridor)
- 1. corridor SC3810A from east
 - 2. same from west
 - 3. pit SK3784, scaffold SS3818 from west
27. 6ABQ-B (Phase II corridor)
- 1. corridor SC3810A overlapping rain gutter SD3790
from north
 - 2. stone-lined conduit SD3815 from south
 - 3. same
28. 6ABD-D (Eastern precincts)
- 1. ditch SD3775, fence SA3780 from east
 - 2. gate SB3746 from north
 - 3. ditch SD3775 (stone-lined setion) from west
29. 6ABD-D ; 6ABE-K (Eastern precincts)
- 1. ditch SD3715, fence SA3750 from north
 - 2. ditch SD3775 emptying into ditch SD3715
from east
 - 3. bridge SX3720 from south
30. 6ABD-D ; 6ABE-K ; 6ABR-P (Eastern precincts, plaza)
- 1. ditch SD8237, SD8239 from east
 - 2. ditch SD3765 from soth
 - 3. fence SA3740 from west
31. 6ABR-P (Plaza)
- 1. wheel rut SX3773 from southwest
 - 2. building SB3773 from southwest
 - 3. building SB3774 from southwest
32. 6ABQ-C-D ; 6ABR-G
- 1. overview from south
 - 2. same from north
 - 3. sane from west
33. 6ABR-G (Phase II corridor)
- 1. gate SB7750 from east
 - 2. same from south
 - 3. same from west
34. 6ABQ-D ; 6ABR-G (Phase II corridor)
- 1. corridor SC8310A-B from west

2. rain gutter SD7779, building SB7769, pit SK3784
from east
 3. rain gutter SD7796, SD3778 from east
35. 6ABR-G (Phase II corridor)
1. gate SB7770 from south
 2. stone-lined conduit SD7799 from south
 3. compound wall SA3810B, cross-section, from east
36. 6ABR-G (Plaza)
1. plaza south of corridor, from northeast
 2. building SB7765 from east
 3. fence SA3740 from west
37. 6ABQ-C-D (Plaza)
1. building SB7780 from south
 2. building SB7790 from north
 3. square mounded tomb SX7800, Shimotsu-michi road gutter SD7787 from north
38. 6ABQ-C (Plaza)
1. overview from south
 2. same from north
39. 6ABQ-C (Plaza)
1. ditch SD7132, building SB7141 from north
 2. building SB7141, SB7140, SB7134 from east
 3. building SB7141 from east
40. 6ABQ-C (Plaza)
1. ditch SD7142 from east
 2. ditch SD7133 from south
 3. pile of volcanic tuff SX7138 from south
 4. fence SA7130 from west
41. 6ABD-C ; 6ABQ-A
overview from west
42. 6ABQ-A (Corridor, plaza)
1. plaza, corridor from south
 2. same from southeast
 3. sloping path SF9232, building SB9220 from north
43. 6ABQ-A (Plaza)
1. sloping path SF9232, gravel pavement from west
 2. sloping path SF9232, its protecting wall of piled bricks
 3. protecting wall of piled stone SX9230 from west
44. 6ABQ-A (Plaza)
1. upper stratum gravel pavement, near sloping path, from south
 2. lower stratum gravel pavement, near sloping path,

- from south
3. piled brick protecting wall SX6600, piled stone protecting wall SX9230 from west
45. 6ABQ-A (Plaza)
1. building SB9220 from south
 2. same from east
 3. ditch SD9236 from west
46. 6ABQ-A (Plaza)
1. well SE9210 from southeast
 2. same from east
 3. same, the well frame
47. 6ABD-C ; 6ABQ-A (Corridor)
1. fence SA3777, compound wall SA3800 from north
 2. corridor SC5500, SC8360, fence SA3777, compound wall SA3800 from south
48. 6ABD-C ; 6ABQ-A (Corridor)
1. rain gutter SD5575, scaffold SS3795 from south
 2. rain gutter SD3790, scaffold SS3795 from north
 3. building SB9213 from north
 4. rain gutter SD8226 from south
49. 6ABQ-A (Corridor)
1. remains of pounded earth platform SS9218, SD9219 from south
 2. gate SB9217 from south
 3. compound wall SA3800 cross-section from south
50. 6ABP-A·B·D (Palace buildings) overview from south
51. 6ABP-A·B·D (Palace buildings)
1. overview from northeast
 2. same
52. 6ABP-D (Palace buildings)
1. building SB6610, SB6611, SB6620 from south
 2. same from west
 3. same, part, from south
53. 6ABP-D (Palace buildings)
1. building SB6611, SB6620 where they overlap, from east
 2. posthole ro-7 of building SB6620, from south
 3. posthole ro-5 of same, from south
54. 6ABP-D (Palace buildings)
1. building SB6640, SB6610 from east
 2. ditch SD6612 from north
 3. ditch SD6609, SD6608 from south
55. 6ABP-D (Palace buildings)

- buildings SB6660A·B, SB6655, SB6622 from east
56. 6ABP-B (Palace buildings)
1. building SB6622, SB6660A·B ditch SD6612
from west
 2. building SB6655, fence SA6623 from north
 3. same from west
57. 6ABP-A (Palace buildings)
1. building SB6663, fence SA6624 from east
 2. same from north
 3. building SB6650 from east
58. 6ABP-A (Palace buidings)
1. building SB6666, fence SA6625 from east
 2. building SB6669, fence SA6625, ditch SD6618, SD6632,
SD6631 from east
59. 6ABP-A (Palace buildings)
1. posthole ni-5 of building SB6660
 2. " i-3 " SB6666
 3. " ho-8 " SB6660
 4. " he-4 " SB6663
 5. " i-3 " SB6640
 6. " ha-3 " SB6640
60. 6ABP-A (Corridor)
1. building SB6669 and Phase II corridor SC6670
from south
 2. Phase II corridor SC6670 and fence SA6635
from west
 3. remains of foundation stone setting i-12
 4. same, i-14
 5. same, i-15
 6. same, i-16
61. 6ABP-B·D(Palace buildings)
piled brick protecting wall SX6600 and gravel pavement
62. 6ABP-D (Palace buildings)
1. piled brick protecting wall SX6600
 2. same, detail
63. 6ABP-D (Palace buildings)
1. stairway SX6601 from southwest
 2. same from east
64. 6ABP-D (Palace buildings)
1. stairway SX6601 from south
 2. same from north
 3. row of pillars SX6604 from north
65. 6ABP-F·G (Palace buildings)

1. overview from south
 2. same from east
 3. same from northeast
66. 6ABP-F·G (Palace buildings)
1. building SB7151A·B, SB7150 from north
 2. building SB7150, SB6650 from east
67. 6ABP-G (Palace buildings)
1. building SB7170, SB7151A·B, SB7152, SB6621, ditch SD7175 from east
 2. building SB7170, SB7151A·B from south
 3. building SB7170 from west
68. 6ABP-G (Palace buildings)
1. remains of end foundation stone hole SD7165 from east
 2. same, central stairway from south
 3. remains of end foundation stone hole SD7167
69. 6ABP-G (Palace buildings)
1. building SB7151A·B, SB7152, SB7170 from east
 2. building SB7170 from west
 3. building SB7152, ditch SD7163, fence SA6626 from west
70. 6ABP-F (Palace buildings)
1. building SB6650, SB7173, ditch SD6608, SD7177, SD7175 from south
 2. building SB6621, ditch SD7175 from west
71. 6ABC-U·V ; 6ABP-A·B
overview from west
72. 6ABP-B (Palace buildings)
1. building SB8300, SB6660 from south
 2. building SB8300 from west
 3. building SB8302 from south
73. 6ABP-B (Palace buildings)
1. building SB8245, SB8305 from northeast
 2. same from north
 3. ditch SD6607, corridor SC8360 from east
74. 6ABP-B (Palace buildings)
1. posthole ho-2 of building SB8300
 2. posthole ni-1 of SB8200 (right) and posthole ha-1 of SB6660 (left)
 3. posthole ha-1 of SB8300
 4. posthole ro-1 of SB8300
75. 6ABP-B (Palace buildings)
1. piled brick protecting wall SX6600 and building SB8300

- from south
 - 2. piled brick protecting wall SX6600 from southeast
 - 3. same, corner from south
 - 4. same, restored
76. 6ABP-B ; 6ABC-V (Corridor)
- 1. corridor SC5500, SC8360, fence SA3777 from south
 - 2. same from north
77. 6ABP-B ; 6ABC V (Corridor)
- 1. gate SB8310 from east
 - 2. same from north
 - 3. overlapping postholes ; from left: SA3777, SC8360, SB8310
78. 6ABP-B (Corridor)
- 1. tile conduit SD8332, rain gutter SD8246 from north
 - 2. conduit SD8311, corridor SC8360 overlapping, from west
 - 3. ditch SD6607 from west
79. 6ABC-V (Easern precincts)
- 1. building SB8320, SB8325 from south
 - 2. fence SA8238, gate SB8335, ditch SD8237, SB8339 from south
 - 3. ditch SD3715 from south
80. 6ABP-A ; 6ABC-U
- 1. overview from east
 - 2. same from west
81. 6ABP-A (Palace buildings)
- 1. building SB8219, SB8224 from north
 - 2. building SB8224, SB8219, SB8245 from north
 - 3. building SB8245, fence SA6624 from west
82. 6ABP-A (Palace buildings)
- 1. building SB8219, SB8224, fence SB6629 from west
 - 2. same from east
83. 6ABP-A (Palace buildings)
- 1. building SB8210, fence SA6629, SA8217 from west
 - 2. building SB8215, fence SA8217, ditch SD6631 from east
 - 3. fence SA6629, SA6629, SA8223, building SB8218A+B, SB8222 from west
84. 6ABC-U ; 6ABP-A (Corridor)
- 1. corridor SC5500, SC8360, gate SB8230, fence SA3777 from south
 - 2. fence SA3777, corridor SC8360 from north

85. 6ABP-A (Corridor)
 1. end foundation-stone of compound wall, hitching post remains from south
 2. stone-lined conduit SD8227 from north
 3. remains ha-40 of foundation-stone setting for corridor SC8360
 4. he-43 of same
 5. remains i-10 of same for SC6670
 6. foundation stone ha-2 of building SB8224
86. 6ABC-V (Eastern precincts)
 1. building SB8234, ditch SD8240, fence SA8237, SD8239 from south
 2. ditch SD3715 from south
 3. fence SA8238, ditch SD8237, SD8239 from south
87. 6ABC-U (Eastern precincts)
 1. building SB8240 from north
 2. building SB8240, ditch SD8227 from south
 3. building SB8234 from north
88. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
 1. overview from west
 2. same from east
89. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
 1. compound wall SA8100, scaffold SS8096 from west
 2. pit SK8080, building SB321 from east
 3. gate SB8101A-B from south
90. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
 1. rain grtter SD130, building SB321 from west
 2. pit SK8079, stone-lined conduit SD8077 from west
91. 6ABO-E (Imperial Food Servery)
 1. stone-lined conduit SD8077 from south
 2. rain gutter SD8103 from north
 3. rain gutter SD244 from north
92. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
 1. overview from west
 2. same from east
 3. same
93. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
 1. building SB167, SB166, SB166, SB8116, rain gutter SD130 from north
 2. part of same, from south
 3. same after removal of gravel paving, from south
94. 6ABO-L (Imperial Food Servery)
 1. rain gutter SD130 from east

2. corridor SA109 from east
 3. fill from ditch on northern side, seen from east
95. 6ABO-P (Imperial Food Servery)
1. overview from east
 2. same from west
 3. compound wall SA109 from east
96. Wooden tablets from ditch SD3715
97. Wooden tablets from ditch SD3715 and pit SK5535
98. Wooden tablets from ditches SD3715, SD5564 and SD3765
99. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5564
100. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5490
101. Wooden tablets from ditches SD3715 and SD5490
102. Wooden tablets from building SB7802
103. Wooden tablets from building SB7802
104. Wooden tablets from building SB7802
105. Wooden tablets from building SB7802
106. Rounded eaves-tiles and flat eaves-tiles
107. Rounded eaves-tiles
108. Rounded eaves-tiles
109. Rounded eaves-tiles
110. Rounded eaves-tiles
111. Rounded eaves-tiles
112. Flat eaves-tiles
113. Flat eaves-tiles
114. Flat eaves-tiles
115. Demon-faced roof tiles
116. Other misceramanous kinds of rooftiles
117. Pillar base
118. Pillar base
119. Pillar base and foundation board
120. Section through pillar base
121. Section through pillar base
122. Wooden water pipe of SD5563
123. Wooden water pipe of SD5563
124. Detail of wooden water pipe
125. Rid of wooden water pipe
126. Wooden frame of well SE9210
127. Wooden frame of well SE9210
128. Detail of wooden frame
129. Scale-model building
130. Foundation stones
131. *Haji* ware from building SB7802
132. *Sue* ware from building SB7802

133. Pottery from buildings SB6663, SB6666, SB7150, SB7152 and SB8224
134. Pottery from ditches SD6631, SD7175, SD8214, SD8216 and pit SK8212
135. *Haji* ware from ditch SD3715
136. *Sue* ware from ditch SD3715
137. Glazed pottery
138. Pottery with written character
139. *Haniwa* from tumulus mound SX7800
140. Wooden objects from building SB7802
141. Wooden objects from building SB7802
142. Wooden objects from building SB7802
143. Wooden objects from building SB7802
144. Wooden objects from ditch SD3715
145. Wooden objects from ditch SD3715
146. Wooden objects from ditch SD3715
147. Wooden objects from ditch SD3715
148. Wooden objects from ditch SD3765, pits SK3730, SK3784 and well SE9210
149. Cellular tissue of wood
150. Cellular tissue of wood
151. Cellular tissue of wood
152. Cellular tissue of wood
153. Metal and stone objects
154. Coins
155. Coins

昭和57年1月20日 印刷

昭和57年1月30日 発行

奈良国立文化財研究所 30周年記念学報（学報第40巻）

平城宮発掘調査報告 XI

第1次大極殿地域の調査

著作権 奈良国立文化財研究所

発行者 奈良国立文化財研究所

印刷者 奈良明新社

